

真・恋姫†無双 一 糜芳伝 一

蛍石

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後漢末期。政治は乱れ、賊は横行し、それを正す力を漢王朝が失ってしまった時代。そして、国を憂い、民を慈しみ、義を貫かんとする英雄達が綺羅星のように現れた時代。

これはそんな時代を駆け抜け、漢王朝を立て直すために尽力した者の英雄譚・・・ではなく。徐州と周りの人間を守るために生きた、一人の凡人の物語。

※初投稿のため色々と至らぬ部分があるかと思いますが、どうぞ宜しくお願いいたします。

※本作品は、所長氏の「資料 恋姫時代の後漢」を参考にさせて頂いております。

目次

登場人物紹介

- 登場人物（オリキャラ）紹介① 〓七話まで 〓 1
登場人物（オリキャラ）紹介② 〓八話から十五話まで 〓 6
登場人物（オリキャラ）紹介③ 〓十六話から幕間八まで 〓

9

少年期

- 第一話 Harvest Times 〓黄金の秋 〓 22
第二話 It's In The Rain 〓雨宿り 〓 29
第三話 In My Dream 〓時には昔の話を① 〓 37
第四話 I have a dream 〓時には昔の話を② 〓 46
第五話 Modern girl 〓あなたにそばにいてほしい 〓 56
第六話 Walking On Sunshine 〓おひさま 〓 63
第七話 When You're Smiling 〓いつも心に太陽を 〓 73
第八話 Take Me Home, Country Road 〓 82
第九話 Money Money Money 〓牛歩戦術 〓 89
第十話 I've Never Been To Me 〓捨てる神あれば・・・ 〓 98
第十一話 Say my Name 〓なまえをよんで 〓 113

	第十二話	Faithfully	—	彼女の決意	—	129
	第十三話	Anyway You Want It	—	正しい	—	138
	資質	—	—	—	—	138
	第十四話	Captain Jack	—	訓練風景	—	151
	第十五話	BEHIND THE MASK	—	初陣	—	161
	幕間一	Dear Friends	—	空の色海の色	—	178
	幕間二	Cooking? Cooking!	—	行軍食	—	192
	幕間三	In your letter	—	近況報告	—	207
	青年期①	—	—	原作開始前	—	—
	第十六話	Waiting For Friend	—	開戦前夜	—	214
	①	—	—	—	—	214
	第十七話	Go West	—	開戦の予兆	—	221
	第十八話	Drunk	—	開戦前夜②	—	236
	第十九話	Intuition	—	開戦前夜③	—	243
	第二十話	Cut My Hair	—	開戦前夜④	—	249
	第二十一話	The Beginning	—	西涼会戦①	—	259
	第二十二話	Poison Girl	—	西涼会戦②	—	271
	第二十三話	Bridge Over Troubled Water	—	西涼会戦③	—	276
	第二十四話	Cassandra	—	戦後処理	—	290
	第二十五話	Life in a Northern Town	—	—	—	304
	隴西郡①	—	—	—	—	315
	第二十六話	History Book	—	隴西郡②	—	315

第二十七話	Hello Goodbye & Hello	326
出会いと別れ		
幕間四	My Home Town	334
幕間五	Grass Hopper	341
幕間六	Honey Honey	354
幕間七	Kindness	367
幕間八	Brothers and Sisters	377
姉		
青年期②	原作序盤	
第二十八話	Tie A Yellow Ribbon……	389
会議は踊る		
第二十九話	There Must Be An Angel	406
てきたモノ		
第三十話	Ceramic Heart	416
第三十一話	North Winds	422
第三十二話	Don't You Worry, Bout Thing	431
第三十三話	Breaking Through	438
①		
第三十四話	Sirius	445
第三十五話	Blue	456
第三十六話	Going Back West	468
第三十七話	Intermission	480

③ 北海籠城戦

①

登場人物紹介

登場人物（オリキャラ）紹介① 七話まで

麿芳

主人公。字は子方、真名は麟

色素の薄い茶色の髪。短髪。ギャルゲー主人公のように目線が前髪で隠れていたりはしない。

二十一世紀の日本で育った記憶を持っている転生者。

ただし特殊な能力は何も無く、知識のみを継承して生まれ変わっている。

鹿児島県内の某公立大学の工学部四年生だったが、何の因果か恋姫世界へ。

前世では歴史が好きで、趣味は読書だった。特に地中海文明辺りが大好物。

色々な物の作り方を知っているのもそれのおかげ。特に道具系は大学の設備を使って再現していたりするので、設計からできたりする。設計が難しい、唐箕なんかの大型機械を平気で作っていたりするのもそれのおかげ。

武術は前世で父より示現流を習っていた。「才能無いな、お前。」とは前世の父の談。

弓も扱えるが、こちらはまあまあ。さりとして三国の弓使い三人と比べると足元にも及ばない。

具体的な武力としては、一般兵とやると勝率九割を超える。

沙和、真桜とは勝率四〜五割くらい。

凧とは勝率二割を切るくらい。

他の猛将の面々とは勝率一割を大きく割り込む。というか、下手すれば一分を割り込む勢い。

恋と戦うと言葉通り瞬殺される。

今は同年代の徐盛、臧覇を相手にしても勝ち越せているが、そのうち歯が立たなくなる。

ギャルゲー主人公のように、自分への恋愛感情に関しては非常に無頓着。

好意や親愛の情を向けられた場合には、それに全力で報いようとする。

逆に、悪意や理不尽な目に合わされると、絶対にそれ以上にしてやり返す。

地味に家事無双であり、麿家の家事を一手に引き受けている。☒にある麿家のお屋敷には使用人が居るために大人しくしているが。

あんまり隠れていないが、猫好き。前世では仙巖園内の猫神社に月に一度は行っていたくらいの猫好き。天明も猫が好きなようなので、仲間ができたようで嬉しく思っている。

麿家について簡単に補足しておく、何代も前から豪農として多くの小作人を抱える富豪だった。

今代の当主に代わり、商売にも手を出すようになったために商家を☒に構えたが、元々ノウハウがなく、取り扱う商品も目新しい物が無かった為、赤字部門に転落していた。まあ、正直土地があるからそこまで問題はなかったし、行商人を州内で活動させて物流を促進する目的しか持っていなかったのだからそれでもよしとしていた。

しかし、麟が未来知識から作った生産品を売り始め、経営に口出しするようになってからは業績が右肩上がりになっている。リソースマネジメントとコストマネジメント、超大事。

いつか、彼の前世についても書くかもしれません。全3話くらいでしようが。

麿竺 十1

字は子仲、真名は海

麟の姉。本当は従妹であるため、義姉なのだが執拗な抗議活動の結果、義を外して貰う事に成功した。それ以降、麟は心の中で思い浮かべる際にも義の文字を入れなくなっている。

色素の薄い茶色の髪を背中の中ほどまで伸ばし、ポニーテールに結わえている。

活発な性格で、分かりやすいくらいに弟大好きな駄々甘姉ちゃん。

昔は恋愛感情というよりも、お気に入りのおもちゃへの執着心に近かったのだが、ある時を境に恋愛感情へと昇華した。

儒教が広まり、同姓婚ができなくなるかもしれないと噂を聞いた時も、「事実婚っていうのも趣深くて良いと思わない？」と言い切った猛者。まあ、結婚じゃなくてもずっと一緒に居られればそれで良いのだろう。

少し嫉妬深く、麟が他の女の子と仲良くしていると不機嫌になる。弓馬の腕はそれなりにあるのだが、人を扱うのがまったく駄目なため、戦場に立って兵を率いる事は無いだろう。

空とは親友の間柄ではあるが、最大のライバルであると互いに認め合っている。

糜家の商家の手伝いをしている事から、財務系の知識を中心に育成されている。将来的には徐州の財務責任者になるかもしれない。

キャラクターの容姿イメージは「同級生」シリーズの「田中美沙」
性格のイメージは「秋桜の空に」の「桜橋涼香」

孫乾 +1

字は公祐、真名は空

麟と海の幼馴染。

背中の中ほど位まで届く焦げ茶の髪を三つ編みにしている。

穏やかな性格で、麟と海の二人のストッパー役を務める事が多い。本人もその立ち位置に特に意識せずとも収まっている。

少し悪戯好きな部分も有り、よく麟や海の事をからかっている。しかし、反撃されて自分がからかわれると弱い。

好奇心旺盛であり、多くの知識を吸収する事に喜びを見出せる学者肌の性格。

麟の事は、昔は素直で可愛らしい弟のように思っていたのだが、ある時を境に恋愛感情へと昇華した。

アプローチはかけているのだが、麟の鉄壁の鈍感により最近挫け気味。もういつそ海と同盟組んで二人がかりで押した方が良いんじゃないかと思いは始めている。

美人揃いの恋姫の中でも、相当上位の容姿を持っている。

これはお使い孫乾補正。外交成功の要因は、魅力なので。（光栄三
国志的に）

将来は外交を主に担当し、政略には欠かす事のできない人物へと
育っていく。

キャラクターの容姿イメージは「ぱすてるチャイムContinu
e」の「齋香・S・ファルネーゼ」髪型は冒険服バージョン。

性格のイメージは「SHUFFLE!」シリーズの「八重桜」

羊祐 — 6

字は叔子、真名は天明

ある日突然できた麟と海の妹。

背中まで届く髪をサイドポニーで結わえている。髪の毛の色はオ
レンジ色にも見えるような茶色。

作者のお気に入り・・・と言うしか無いじゃないか！

性格は大人しく、用が無ければ口を開く事の無い子供。

人見知りするため、初めて会った人の前では静かにしている。仲良
くなった人の前では、年相応に明るい表情を見せる。

年齢に対して、非常に賢い。難しい言い回しをされても、前後の文
脈から言葉の意味を推測して答えを返してくる。それでも分からない
事が有った場合は分からないと素直に聞いてくる。

猫が好き。糜家の飼い猫、王虎と仲が良くて最近はずっと一緒に行
動している。

麟が満遍なく知識を授けているため、多方面において活躍できる人
材へと育とうとしている。

将来的には史実の羊祐同様、智勇兼備の名将に育つ予定。

宝物は母親の形見である橙色のリボン。

最大のライバルと言える、陸抗は現時点で出すかどうかは未定で
す。

キャラクターの容姿イメージは「With You」見つめていた
いゝ」の「伊藤乃絵美」

性格のイメージは、現在は「サモンナイト」シリーズの「ハサハ」
将来的には、容姿と同様「With You」見つめていたいゝ」の

「伊藤乃絵美」になる予定。

「猫じゃなくて、狐じゃねーか！」とか、「おま、乃絵美って実妹……」とか、そういうツツコミ禁止。

麿晃　＋？

字は子伯、真名は陸

麿家の当主。

麟達の父親。

陶謙配下の重臣であり、財務に関しては絶大な信頼を得ている。遊びを知らない無骨な朴念仁。

文官としては恐ろしく有能だが、軍事面に関してはそれなりの指揮しかできない。

それぞれ個性的だが、将来性豊かな子供達の成長が最近の何よりの喜び。

案外女にもてる？

登場人物（オリキャラ）紹介② 八話から十五話まで

諸葛瑾 — 1

字は子瑜、真名は藍里らんり

諸葛家の長子であり、原作キャラクターである朱里の二歳年上の姉。

メーカー公認の某スピンオフ小説では、事件の黒幕になっていたりするが、この小説ではそんな事は無い。

一見冷静そうに見えるが、表面上だけであり内面ではよく焦ったり動揺したりしている。そういう所は良くも悪くもはわわの姉。

この作品での諸葛家は、青州近辺で既に賊の被害が増え始めていたため徐州北部から淮陰に疎開してきている。

麻疹はしかを患った際に、歩家との交渉のため淮陰を訪れていた麟に助けられた。麟には歩家と確執があったはずなのに、それにこだわらず錬師も救う努力を惜しまなかった事から深い尊敬の念を抱く。

実際には恋愛感情に近い物を感じているのだが、本人はまだ無自覚。

余談だが朱里の麟に対する物も同様で、憧れのような尊敬のような微妙な感情を抱いている。

史実においては、正史、演義、どちらにおいても呉の重臣として登場している。

文官として描かれる事が多いが、歴とした武官だったりする。

この作品では文官よりの武官として扱う予定。

キャラクターの容姿イメージは「恋姫無双」シリーズの「朱里」帽子が無くて、髪の毛が背中まで届くロングなのが違い。

性格のイメージは「変態王子と笑わない猫」の「筒隠月子」

諸葛均 — 5

字は叙起 真名は黄里こうり

史実においては字が伝わっていない可哀想な人。

本作品では、朱里の暴走ストッパーとして動いてもらう予定。
朱里の部屋で八百一とか、性技指南書を見つける度に火にくべる様な性格。

容姿イメージはやはり「朱里」

髪型は朱里と藍里の間。

性格イメージは未定。

歩鷺 — 1

字は子山 真名は悠ゆう

歩家の長子であり、麟の従弟。

歩家当主が色々とあれだったにも関わらず、非常に穏やかでまともな性格をしている。

藍里と妹である錬師が麻疹に倒れた際に、麟が看病を申し出た事により知己を得る。

病に倒れた妹を貧民窟へと捨てて来るように命じた父に失望し、そのまま妹を連れて家出して糜家の支援の下、？県へ移住する。

現在は麟達が育った村に住んでいて、妹と二人仲睦まじく暮らしている。

将来的には、麟の副官を経て☒に仕官する予定。

容姿は麟に似ている。

性格イメージは、「To Heart」の「佐藤雅史」

歩錬師 — 6

字は子麗 真名は遥よう

歩家の子供で、悠の妹。当然麟の従妹に当たる。

麻疹で倒れ、貧民窟に捨てられそうなところを悠と麟に救われた。現在は兄と二人で麟達が育った村で仲睦まじく暮らしている。

性格は活発だが、年齢を重ねていくにつれて段々と落ち着いた性格となる。

容姿のイメージは「きまぐれオレンジロード」の「檜山ひかる」

性格のイメージは「月と貴女に花束を」の「柚本深雪」

臧覇 + 1

字は宣高 真名は真しん

武器は斬馬刀。

麟達の幼馴染で、気を使う素質に恵まれている。

茶色の癖っ毛で三白眼。見た目はチンピラ。

麟に誘われて、麟の副官として仕官した。

将来性は豊かで、一流の武将になれるだけの素質を持っている。

本能型の猛将で、騎兵指揮に適正を持つ。

容姿のイメージは特に無い。

性格のイメージは「リトルバスターズ！」の「井ノ原真人」

徐盛 +1

字は文嚮 真名は謙けん

武器は双剣。二刀流ではなく、パンプキンシザーズのある。

麟達の幼馴染で、気を使う素質に恵まれている。

黒の短髪で意思の強そうな太い眉をしている。

麟に誘われて、麟の副官として仕官した。

将来性は豊かで、一流の武将になれるだけの素質を持っている。

本能型でありながら、策を弄して有利な局面を作ろうとする一面もある。

爆発力では臧覇には敵わないが、持久力では上回る。

騎兵、弓兵指揮に適正を持つ。

水戦指揮も鍛えればできる。

容姿のイメージは特に無い。

性格のイメージは「リトルバスターズ！」の「宮沢謙吾」

登場人物（オリキャラ）紹介③ 十六話から幕間八まで

孫堅 そんけん 十？

字は文台、ぶんだい 真名は誠蓮 せいれん

武勇名高き孫家の当主。そして原作キャラである孫家の三姉妹の母親。官位は呉郡太守。

あの三姉妹の母親だけあって女傑。まあ、史実でも戦上手として扱われているので、そこまで不自然では無い……と思う。

長女である雪蓮には大きな期待をかけるとともに、奔放すぎる性格を矯正しようとしている。いまいち効果を上げていないのはきつと雪蓮のせい。

とはいっても、昔の自分に良く似ているので長じれば落ち着くだろうと楽観的に考えている。

祭とは昔からの親友同士。性格が近く武勇もあるため、公私に渡り全幅の信頼を寄せている。

趣味（鍛錬と飲酒）も合うので、一緒の時間を過ごす事が非常に多い。正反对だからこそ仲が良い娘と親友の関係とは少し異なる関係を築いている。

史実においては賊討伐を中心に行つて、江東の虎と渾名された名将。残念ながら三国志前半で死亡してしまっているが、その短い期間の活躍で読者に大きな印象を植え付けた。

もし早逝していなかったら、そう妄想せずにはいられない。

原作では開始時に既に死亡していたが、本作では最低でも史実どおりに反董卓連合時までは生存する。その後史実どおりに荊州攻めで死亡するかは不明。

史実では長沙太守なのだが、本作では作者のミスで呉郡太守になっている。すまん、孫堅。

また、原作で孫家は孫堅存命時に軍閥化されており、死亡後に散り散りとなっているようだったので、本作でも既に転戦を繰り返して歴

戦の軍となつてゐる設定としてゐる（史実で軍閥化が完成するのは黄巾の乱後の長沙太守就任後）。

キャラクターの容姿イメージは原作キャラの「雪蓮」

性格のイメージは「トトリのアトリエ」の「ギゼラ・ヘルモルト」

まあ、性格はあれより大分マイルドですが。

陶謙とうけん 十？

字は恭祖きょうそ、真名は凱がい

官位は徐州牧であり、主人公達徐州勢にとっては所属組織のトップに当たる。

今はすっかり落ち着いてしまつてゐる好々爺だが、元々は武断派の名将としてならした人物なので果敢な決断を下す事ができる人物。

最近では主人公をはじめ徐州の有能な若手の成長が何よりな楽しみになつてゐる。しかし同時に、自分達の時代の終わりが近づいてきている事も感じ、少し寂しく思つてゐる。

昔、陶商と陶応という子供が居たのだが、流行り病で亡くしてゐる。史実は魏の史書によると悪辣極まりない非道な人物。呉によると器量に不足なく、徐州を治めていた名君として描かれてゐる。

これは曹操の徐州侵攻の正当性を主張したかつた魏と、非道で不義の行いであると喧伝したかつた呉の違いだろうと考えられる。

本作では演義ベースの温和な人格者として描く。良かった、仕官を断つたから投獄された可哀想な張昭なんていなかったんや！

これは完全に余談ですが、陶謙については2013/10/11に本作の感想に書いて頂いた所長氏のまとめが実に見事です。ちよつと文字数が多くて文字数稼ぎと指摘されるかもしれないのでこの記事への転載はしませんが、陶謙という人物に興味がありましたら是非ご一読される事をお勧め致します。

キャラクターの容姿イメージはキングダムキングダムの「蒙？」

性格のイメージも同様に「蒙？」。それから吉川（横山）三国志の「陶謙」も合わさつてゐる。

陳珪ちんけい 十？

字は漢瑜かんゆ、真名は未設定

徐州牧陶謙の右腕であり、優秀な執政官。官位は東海郡太守。

主に弁舌を武器に外交を請け負っている。時々諜報活動と謀略を行う。

作者の中では呂布の天敵のイメージ。こいつと息子がいなければ、もうちよつと呂布勢力持ったんじゃね?と常々思っています。

軍事指揮は無難の一言。息子の陳登の方が軍才がある事は自身も認めているため、大きな期待をかけている。

主人公達の父である糜晃と酒を飲んでいると、互いの子供を自慢し合う親馬鹿に変わる。

最近の悩みの種は不出来な次男坊。「きつさと放逐しないと家の人間に迷惑をかける事になるぞ」と主人公の父（糜晃）より実感の伴ったアドバイスを貰っているが、決断する事ができずにいる。

史実においても徐州の高官として登場しており、呂布を嵌めた。

息子はその後も孫家キラーにクラスチェンジして徐州防衛に一役買ったのだが、陳珪はそれ以降は目立った活躍は記されていない。

キャラクターの容姿イメージは「キングダム」の「蔡沢」

性格のイメージもほぼ同様。

陳登 ちんとう — 3

字は元龍、げんりゆう 真名は仁 じん

陳珪の息子。官位は東海郡太守の主簿。

徐州から?陽への留学経験者。少し驕慢な性格をしているが、それに見合うだけの能力を持っている大器。同年代でありながら自分よりも功績を挙げている主人公と海（糜竺）をライバル視している。

地味に空（孫乾）に懸想しているのだが、空本人からは思いに気付かれている上、友達以上の関係にならないようにやんわりと壁を作られてしまっている。まあ彼女には思い人がいるわけだししようがない。

史実では父同様、呂布キラー。また、孫策・孫権の徐州侵攻を防ぎ続けた名将でもある。

劉備、曹操にその功績を認められている上、孫家の兄弟の敵手として互角以上に戦い抜いている事から、相当高い指揮能力を持っていた

事が想像できる。

統治者としても民に非常に慕われる徳治を行っており、まさに文武両道だったのだらうと思われる。

キャラクターの容姿イメージは「キングダム」の「王賁」
性格のイメージもほぼ同様。

王朗 おうろう 十3

字は景興、真名は蜚 けいこう

徐州の官吏であり、州府付きの治中従事史。

誠実で温厚、清廉潔白を旨とする人柄で、賄賂を用いる事を嫌う。そのため、常に賄賂の誘惑が行われる人事を司るのに丁度良いと主人公に評される。

主人公に恋愛感情は抱いておらず、頼りになる弟の様に思っている。

海（糜竺）空（孫乾）と仲が良く、休日と一緒に買い物に出かけた
りしている。

仕事が忙しいため、恋人ができてでも長続きしないのが目下の悩み。
仕事する事に理解してくれる恋人を現在絶賛募集中。

料理が趣味で、主人公とはよくレシピの交換をしている。

史実においては、魏に仕えた非常に優秀な文官。法の運用に適正があり、大理を勤めていた際に寛容を旨とし、鍾繇と並び賞されるほどの功績があった。

会稽太守時代には、孫策に敗北しており一時捕虜となっている。相手が悪かったと思うべきだろうか。ただし、その後に軍事に携わっている描写はほとんどなく、助言程度しかしていない。

陳寿も王郎の事を俊傑と高く評価している。陳琳には張昭と並べて評価されている。

容姿、性格のイメージは「うたわれるもの」の「ウルトリイ」

羽は無い。

姜維 きやうい | 1

字は伯約、真名は碧 へき

主人公達が西涼の乱の時に出会った少女。華雄率いる別動隊に「埋伏の毒」として入り込んでいた。

偵察に乗じて討伐軍に接触し、韓遂軍別動隊の情報をもたらした事で主人公達が別動隊を大破する勝因となった。

西涼の乱の後母と共に隴西郡に移住して董卓（董卓擢ではない）に仕官する事になる。

基本的に男装が多く、女性らしい格好をする事が無かったが、藍里（諸葛瑾）の服を借りて着飾った姿を母に感激された。その事から、自信の行いが母親を心配させていたと反省して、平時には女性らしい格好をする事が多くなった。

冀城の名族、姜家の生まれ。父は異民族との戦いで戦死したため、一緒に暮らす母親を守らんと槍の修練に励む孝子。

質実剛健を好み、鍛練の時間が一番落ち着くというストイックな性格をしている。

その反面、自分を鍛える事以外に興味が薄く、他人から自身がどう映るかについては非常に無頓着。さらに性知識はあるが、自分が他人にそういう対象として見られるとは思いつかないなど、うっかり癖が多々見受けられる。

史実においては結構評価が難しい人物。

元々魏に仕えていたが、北伐で諸葛亮に降伏し、以後蜀に仕える事になる。

蜀では諸葛亮の信任を得て順調に出世していき、その没後も蜀の中樞に留まり続ける事になる。最終的には大將軍まで位を上げて、蜀滅亡の時まで魏と戦い続ける。

上記が良い部分だけを抽出した経歴。演義では概ね諸葛亮の後継者として配置されており、こういう部分だけが描かれている。

史実では上記に加えて北伐の失敗、蜀国内での厭戦空気の蔓延、宮廷内での孤立、無謀な北伐による国力の衰退などのマイナス面が追加される。

陳寿も武勇に一定の評価を下しながら、無謀な北伐を行った事を非難している。元蜀臣である陳寿の評価であるため、信頼を置く事がで

きるのではないだろうか。

他の誰であっても蜀の斜陽を止める事はできなかつただろう。まして、内政を整えようにも豊富な人材を背景にそれ以上のペースで魏の国内が整備されていくのだから。

生え抜きではなく、西涼からの投降者でありながら重臣とならなくてはいけなかった蜀の人材の少なさ。根本的な原因はそこに尽きるのだろう。

容姿のイメージは「うたわれるもの」の「トウカ」

ただし、西涼の乱参加のために一時的に短髪になっている。

性格のイメージも同様。作者の中でうっかり侍といえはこのキャラが一番に思い付く。

董卓とうてき
+12

おそらく再登場しないであろうキャラ。そのため、字、真名共に設定なし。

董卓の前の董家当主で隴西郡の太守。史実にほぼ記載がなく、作者が適当な官位を思い付けなかつたので、董卓の出生地の太守となつた。涼州、幽州など異民族に接する地域では、出生地で官位に就く事を禁止するルールは適用されなかつた場合もあるのでこれも特例措置と思つていただけると助かります。特例措置の代表は、涼州牧馬騰、幽州牧公孫贊など。

穏和で内政を好む人物。反面争いは苦手で、武断派からは侮られてしまつている。

年の離れた妹の月ゆえ（董卓）を大層可愛がっている。できれば、そのまま好きな男と結婚して穏やかに暮らして欲しいと思つている。それが叶う事は無いのだが……。

キャラクターの容姿、性格のイメージは「メルルのアトリエ」の「デジエ・ホルストナ・アールズ」

穏和だけど過保護な君子。

杜幾ととき
—1

字は伯侯はくこう、真名は恵けい

農業に興味がある、カントリーガール○。徐州で行われている変

わった農法に興味を持ち、その主導者であると思っていた主人公の父、麿晃へ手紙を送った事から、本当の主導者である主人公、麿芳と書簡のやり取りを行うようになる。

自分を虐めていた継母へ実母のように尽くしてきた孝子。しかし、その継母が亡くなった事で自分の生活の中心を失って惰性で生きていた。

継母の喪に服している時に訪れた主人公と話している内に自分の知らない農法をもっと知りたいという欲求が生まれて、主人公について徐州に移住する事を決意する。また、主人公の知っている農法を近くで学ぶために師事する事を（一方的に）決めて主人公を「師父」と呼ぶ。

農政と補給戦に才能を持ち、それを重要視する主人公に多くの事を学ぶ。その結果将来的には、主人公が領地を留守にする時には内政を全面的に任されるようになっていく。

キャラクターの容姿のイメージは「この青空に約束を」の「沢城凜奈」

性格のイメージは「この青空に約束を」の「六条宮穂」

無条件に年長者を慕う子犬のような性格が当てはまるかな、と。

あそこまでどんくさくは無いです。呪いの鎌ではつちやける事も無いですw

司馬徽十？

字は徳操、真名は月花

荊州に存在する私塾「水鏡学院」の学長である教育者。「好し好し」が口癖で、特技は人物評価。

朱里（諸葛亮）と雛里（鳳統）の師に当たる。

あえて権力者達とは距離を取る事で特定の勢力に与する事なく私塾を運営している。その結果、生徒の卒業後の進路への影響を廃する事に成功している。

史実においてもほぼ同様に私塾を開いており、卒業生達から多くの優秀な文官達を輩出した。

これは余談ですが「水鏡」は号に当たり、通り名、ペンネームの様

な意味合いとなる。

この号と対となるように真名を設定しました。まあ、言葉遊びですね。

「知恵は手に取れずとも相手に感じさせる事ができる。すなわち水月鏡花の如く也」が学院のモットーであるという捏造設定もあつたりします。

さらに余談を続けますが、この時代の私塾は、まず私塾内にいる先輩の授業を受けて、先生の授業を受ける事ができると認められる必要があります。

そんな中、入学直後にいきなり先生の授業を受ける許可を朱里と雛里は得ました。本人達の内向的な性格も相まって、盛大に周りから浮きました。

先輩に当たる里福（徐庶）が持ち前の面倒見の良さで色々とフォローに回って事なきを得ていましたが、本人達はそんな事に気がつかず。周りからのヘイトを高めながらやりたい放題にやっていました。

諸葛家一同が行方不明になったタイミングで、謹慎処分を下したのも、他の生徒達と顔を合わせ、後ろ楯を失った朱里を周りが苛めないようにするためという背景もありました。

糜家が代わりに後ろ楯を務める気があると分かってからは、見える範囲で害を加えられないだろうと判断し、謹慎処分を解いています。

あの謹慎は朱里が無茶をしないように、というのと同時に朱里を守るための措置でもあつたわけです。

本人の気がつかない所で人の善意に助けられているのは、多分朱里の性根が良い子だからでしょう。

あ、黄里（諸葛均）さんは先輩達を立てて、しっかりと頭を下げて教えを乞える、空気の読める良い子です。まだ幼いというのもあり、先輩達に可愛がられています。

キャラクターの容姿、性格共にアニメ版「恋姫無双」に登場した「水鏡先生」を元にしています。

性格にからかい癖が混ざっているのは、作者が乗り移っていると思ってください。

徐庶^{じょしよ}

字は元直^{げんちよく}、真名は里福^{りふく}

水鏡学院の生徒であり、朱里達が出奔する一年前までは私塾の総代も勤めていた。

文官を育てる水鏡学院の中にあつては異色とも言える撃剣の使い手。少数の賊相手なら無双できるくらいの腕前。身を守る術を欲した黄里にも手解きをしている。

軍師としての能力は、政戦両略に優れた朱里、戦術に才を持つ雛里に比べて一枚落ちる。

しかし、情報分析や内政能力に関してはなんら変わる事はない。それどころか冷静な性格であり、慌てずに物事に当たれる分朱里達よりも効率よく物事を処理する事ができる。

過去に使われた事がある策や陣形を効果的に用いる事を得意とする。そのため、まったく知らない陣形などを相手が用いてきた場合、対応策が無難な指揮に落ち着いてしまう場合が多い。もともと、相手に自分を上回る策士がいない場合には圧倒する事ができるのだが。

ちなみに、主人公の立てる作戦もほぼ同じような性質を持つ。都度変化していく戦場で判断を下す思考速度は主人公を大きく上回る。ただし、主人公の知る戦術は中華に限らず古今東西に渡るので、引き出しの数は主人公の方が多い。

趣味、特技はお菓子作り。お金が貯まったら喫茶店を出しても良いかもなあ、とぼんやりと考えている。

現在は学院を卒業しているが、少しいざこぎに巻き込まれてしまったため偽名を名乗りながら放浪中。仲の良かった朱里達はやきもきしている。

史実においては知謀の士を欲した劉備に仕えた軍師。演義には少数の兵で数に勝る曹操軍を破る活躍している描写がある。

その後は曹操軍に母が捕らわれた事から曹操に仕える事になる。荊州にいる時に劉備に仕え始め、赤壁前には曹操に降つたために、劉備に仕官した期間は短い。

彼の経歴の中で最も注目されるのは、劉備へ諸葛亮を推薦した事だ

ろう。結果、水魚の交わりに例えられる主従関係が誕生する事になる。

キャラクターの容姿、性格のイメージは「この世の果てで恋を唄う少女YUUNO」の「波多野神奈」

あらゆる意味で生きる努力を決して怠らない子です（意味深）



以下は既に紹介済みの登場人物の更新情報です。

麟

第二章開始時点で州府の主簿に就任。

西涼の乱においては献策を行い、別働隊撃破を達成した。

順調に人脈を増やしており、優秀な文官を配下に持ち始めた。

一章終了時から二章開始前にかけて、軍制の改革やら、保存食の開発やら、色々と動き回っているのだが、おそらくそれは原作開始後の話で語る事になるだろう。

海

二章でまさかの登場なし。

二章終了時点で蚩（王朗）のライン直下の官吏になっており、毎日を忙しく過ごしている。主な業務は人件費の算出。算盤というアナログ計算機を用いて、脅威のコストカッター振りを見せている。後日麟に恨みを買わないようにほどほどにね、と言われて甘く算定するようになった。お姉ちゃんチョロい。

西涼の乱から帰ってきた麟を思い切り構おうとする物の、麟がすぐに故郷の村へ出かけてしまったので空振り。さらに、自分もついて行こうと上司の蚩に休暇願いを出すもあえなく却下。枕を涙で濡らす事になる。

幕間で一つ話を作っても良かったかも。

空

海同様二章での登場なし。

二章開始時点で両親を☒に呼んで一緒に暮らし始めている。

成長期を経て、告白される事が多くなったり、男達の視線を煩わしく思うようになってきている。

現在は糜晃のライン直下についており、毎日を忙しく過ごしている。主な業務は各関係部署、県や郡との間の調整役。人と会う機会が多いため、弁舌や外交の経験を少しずつ蓄えている。

何かしら理由をつけては、小まめに主人公二人で町に出かけたりと、アプローチを繰り返している。主人公はデートに誘われているとは微塵も考えていないわけですが。頑張れ、空。

天明

二章の頭で少し顔を出し、幕間でも少し登場。

本作品のマスコットの存在として作者に優遇されているキャラクター。

相変わらず猫が好きで、王虎も最近麟よりも天明に懐いている。猫をNTRとか、誰得だよ。

現在は正規の官吏ではないが主人公のアシスタントとして、州府内を出入りしている。その愛くるしさから、女性官吏の皆様にも愛でられたり、お菓子をもらったりしている。

相変わらず主人公が色々と知識を詰め込んでいるおかげで、有能な人物への育成が進んでいる。経験が足りないが、それを積みれば既に独り立ちができるくらいになっている。

糜晃

二章開始時点で別駕従事史に就任している。盟友の陳珪が東海太守となってしまうので、陶謙の補佐を一手に引き受けている。

相変わらずやりたい放題に動く麟に頭を抱える毎日。麟が陶謙の許可を直接得るようになって事後報告も多くなってきたため、ますます心労が大きくなっている。

藍里

主人公の副官に就き、主人公と共に行動した事から二章で一番登場した女性キャラ。

諸葛家に苦難が降りかかった時に、再び麟が手を差し伸べてくれた事から自身の恋心を自覚する。が、思っていた以上に麟の周りに女の影が多い事から、何か行動しなくては、と決意し始める。

西涼の乱において、麟の架橋、ラテン語の読解能力などを聞き、麟

の知識の異質さに気付く。とは言っても忌避するわけではなく、単に麟の事で知らない事があるのが嫌なだけだったりする。

西涼の乱中に雪蓮と冥琳のまぐわいを見てしまった事から、同性愛に嫌悪感を持つようになる。男同士でも女同士でも駄目。仮に朱里がそういう本を持っているのを見つけた時には烈火の如く怒り狂う事になるだろう。

黄里

朱里と一緒に水鏡女学院に通っており、勉強して過ごす毎日。最近
は自分の身や朱里を守れるようにと里福に撃剣を習い始めるようにな
った。

朱里ほどの才能は無いが、ゆつくりと成長をしている。

悠

麟達が幼少期に過ごしてきた村の長に就任していた。現在は妹の
遥と二人で暮らしている。

幕間にて東海郡の功曹書佐に抜擢されており、官吏になる事が決定
している。これでようやく父のやってきた事を清算できる、と安堵し
ている。

妹の遥が麟に惹かれている事には気付いており、できれば娶ってあ
げてもらえるとありがたいのになあ、と考えている。

遥

兄の悠と共に、麟達が幼少期に過ごしてきた村で暮らしている。活
発な性格なため村の子供達ともすぐに馴染んで、毎日泥だらけになり
ながら帰って来ている。まあ、洗濯も自分でしているわけですが。

麻疹の騒動の時に麟に助けられた事から、淡く恋心を抱くようにな
る。麟の周りにいる人が軒並み髪の毛が長いいため、麟が好きなのは長
い髪の毛の人じゃないかと考え、自分も髪の毛を伸ばし始めた。

また、兄に麟はおしとやかな女の子が好きらしい、と嘘をつかれた
ため、活発な性格からおしとやかなになろうと日々邁進中。

真

現在県尉に就任しており、最近の武功著しきから謙と並んで二枚看
板と称されるようになっていいる。

西涼の乱の際には、別働隊隊長として華雄隊撃破に一役買う事になる。

余談ではあるが、空に懸想していたが県尉出世と同時に告白して振られた。

謙

現在県尉に就任している。

真が西涼の乱で大功を立てたので、自分も続かなくてはと鍛錬により一層の力を入れる事になる。

海に懸想していたが県尉出世と同時に告白して振られている。

少年期

第一話 Harvest Times — 黄金の秋

「あれ？麟君？」

ぼつかり今日の予定が空いてしまったから、農繁期を迎えて忙しい村のみんなを手伝おう。そう考えて金色に輝く麦畑を眺めながら作業している場所へと向かい歩いていたところ、慣れ親しんだ声で真名を呼ばれた。

辺りをキョロキョロと見渡したが、鮮やかな黄金色に染まった麦畑しかなく、声の主であろう彼女の姿は見えなかった。

「麟くん、こつちこつちー！」

再び名前を呼ばれた。

目を凝らしながらも一度麦畑へ目を向けてみると、先月十三歳の誕生日を迎えたばかりの従姉が、幼馴染をはじめとした数人の村人達と一緒に麦穂の海の中にいた。彼女達が作業のためにしゃがんでいたから見落としてしまったようだ。

彼女は心底嬉しそうな笑顔を浮かべながら私に向けて手を振っている。

「海姉さん」

従姉の真名を返事代わりに口にしながら麦畑に分け入り、手を振り続けている彼女のもとへ向かった。

背中に届く位に伸ばした色素の薄い茶色の髪を、未来の世界でポニーテールと呼ばれる髪型にしていた。活発な性格をしている彼女によく似合っている。

彼女の近くまで辿り着いたらすぐに、先ほどまで懸命に振っていた腕を背中に回され抱き締められた。

「麟君も来たんだ。今日もお父様のお手伝いをするんじゃないの？」

頬同士がくっついていてそのため顔は見えないが、聞くだけで満面の笑

顔を浮かべていると分かるような弾んだ声でそう聞かれた。

「その予定だったんだけどね」

特に抵抗もせず抱きつかれたまま、顔だけをずらし姉さんの方へ向けて、その整った顔を見ながら私は答えた。

「賊がこの近くで出たみたい。義父さんも討伐に行く事になったから、手伝いがなくなったんだよ」

「ふーん」

彼女は殊更なんでもない事のようにそう言ったが、抱き締める手の力が強くなった。それは父の出陣に不安を感じた彼女の心情を示している気がした。

「大丈夫、義父さんはいつものように無事に帰ってくるよ」

彼女の背中に手を回し、安心させるように軽く背中を叩きながらそう伝えた。

「うん……」

少しは安心できたのか、込められた力が緩んだ。

「ところでそろそろ離してくれない？ 動けないし、作業の邪魔になってるよ」

少し離れた場所にいる大人達の生暖かい視線を感じながら、私の事を抱き締め続けている海姉さんにそう伝えた。

正直恥ずかしい。溜め息混じりの声にならなかつた事を誉めてもらいたい。

「大丈夫。麟君の抱き心地を十分に堪能できたら、お姉ちゃんは百人力で働けるから！ むしろ、作業効率が上がって仕事が早く終わるようになるよ！ ……って、何で溜め息つくの!?!」

今度こそ漏れ出てしまった溜め息は、従姉殿のお気に召さなかったらしい。さつきまでの笑顔とはうって変わり、軽く頬を膨らませながら私を睨んでいる。その視線に怯んで何も答えられないで困っていると、横から笑みを含んだ声が響いた。

「海、麟君困ってるよ？ 貴女も麟君を困らせたい訳じゃないんでしょ？」

海姉さんにそう言ったのは、背中の中程まで届くくらいに長い焦げ

茶色の髪を三つ編みにした、姉さんや私と同一年くらいの女の子だった。

「むー」

彼女の口にしたように私を困らせるのは本意ではなかったためか、そんな風に軽く不満そうな声を出しながらも姉さんは離れてくれた。

「ごめんね、と軽く姉さんに謝罪をしてから、先程声をかけてきた女の子に向き直り彼女の名前と共に挨拶を口にした。

「空さん、こんにちは」

目の前にいる彼女はいつもどおり理知的な光を瞳に宿し、穏やかな笑みを浮かべていた。

「はい、こんにちは麟君」

彼女はそう挨拶を返してくれた。

「空さんも収穫の手伝い？」

「うん。今年は豊作で忙しいみたいだからお手伝いに来たんだよ。

この豊作、麟君のおかげなんだよね？」

海姉さんの親友である彼女はそう答えながら、悪戯っぽい笑顔を作り、わざわざその身をかがめた上目遣いで私の顔を下から覗き込んできた。

二ヶ月前に十三歳になったばかりの女の子とはいえ、非常に整った顔でそういう魅力的な表情を至近距離で向けられると正直照れる。自分の顔が上気していくのが分かった。

私の顔が赤くなったのを見てか、彼女は口元に右手を当ててくすくすと笑い始めた。

……十三歳の女の子にからかわれるのか。

また胸中でため息を吐く。

赤くなった頬を隠すように空さんから顔を逸らすと、先程より大きく頬を膨らませた姉さんの顔が視界に入った。

そんな顔をしていても愛らしいと感じてしまうのは、彼女の顔立ちも非常に可愛らしいからだろう。身内の鼻眞目を抜きにしても、空さんと同じくらい器量が良いと思う。

「むー！　むー！！　むー!!!」

そんな感想を抱きながら黙って姉さんの顔を見てみると、ますます頬を膨らませてしまった。……向日葵の種を頬張っているハムスターみたいだな。非常に愛らしい。

そんな事を頭の片隅で考えながら、どうやって海姉さんを宥めようかと考え始めた時に、空さんのいる方から「ぷっ」と吹き出す声が聞こえてきた。

そちらへ視線を戻すと、口元を両手で押さえながら必死に笑いを堪えている空さんの姿があった。

「空、なに笑ってるのよー!!」

「ご、ごめんなさい。だ、だって海の顔がおかしくって……。

ぷっ、くっくっ……あはは、あはははははははは!!」

そこまで言って我慢の限界を越えてしまったのか？空さんは大笑いし始めた。口許を手で隠し、目尻に涙を浮かべながら笑っている。

姉さんはそんな空さんに対して、失礼だよー!!なんて怒って見せているが、まったくの逆効果になっているようだ。ますます空さんの笑い声は大きくなっていく。

そんな二人を見ると、私も笑いが込み上げてきて空さんと一緒に笑い始めた。

姉さんはそんな私たち二人の顔を交互に見ながら膨れ続けていたが、私たちの笑い声が伝染したのか、一緒になって笑い始めた。三人の子供たちの朗らかな笑い声が麦畑に響き、最後にはその様子を見ていた大人たちも一緒に笑っていた。

少し時間が経つとみんなの笑いも収まり、作業が再開された。私も二人と一緒に刈り取った麦穂をまとめる作業にとりかかる。

しかしやっぱり女の子なんだよな。

手を止めないまま、隣で一緒に作業をしている彼女たちの事を考える。知り合ってから年単位の時間は経過しているが、いつまで経っても不思議なものだと思う。

糜竺と孫乾。どちらも三国志に登場する人物の名前だ。

海姉さんは姓が糜、名が竺、字が子仲。

空さんは姓が孫、名が乾、字が公祐。

どちらも徐洲の出身で、劉備に仕えた能吏として名前が伝えられている。

ただし、歴史上は男性と伝えられているんだが、何故かここにいる二人は女性だ。

やっぱりこの世界は少しおかしい。

二人の性別以外にも、服飾がやたらと近代的であったり、眼鏡等のこの時代にとってのオーパーツも存在している。どうやってレンズを視力矯正用に加工してるんだろう？きつと気にしたら負けなんだろう。

その他の大きな違いとして、真名の存在がある。真名は人物の本質を包み込んだ言葉で、自分の許した相手にしか呼ぶ事を許されない。許されていないのに不用意にその名で呼びかけると、最悪殺されてしまう事もあるらしい。なにそれ怖い。

それ以外にも、もともと居た世界の歴史との相違点は多々ある。

……そう、比較対象は『もともと居た世界の歴史』である。

私には前世の記憶が有る。

いやネタではなく、前世である二十世紀末の日本で一世を風靡した、戦士症候群に罹患しているわけでもない。今いる時代から一八〇〇年以上先の未来の記憶が本当にあるのだ。

前世の私は二十一世紀日本の鹿児島県で生活していた。

当然その記憶の中には、この時代にそぐわない知識もある。

そして私は、うっかりとそういう知識を使ってしまう事が多々ある。この二人のようなすでに深い信頼関係を構築できている間柄なら良いが、今後異端者として見なされないためには、より一層注意をする必要があるだろう。

「どうしたの、麟君？」

そんな事をとりとめもなく考えていると、いつの間にか手が止まってしまうっていたようだ。

海姉さんに声をかけられて顔を上げると不思議そうにこちらを見ている二人の顔があった。慌てて止まっていた手を動かす。

「ちよつと考え事をしていたんだ」

「考え事？」

私の答えに、二人は声を揃えたように同じことを聞いてきた。仲良いなあ。

ちよつと和んでしまった。

「僕は一体なんなんだろうって」

そうはぐらかすように答えた僕に、姉さんたちは戸惑ったような顔になり、こう言った。

「何って……麟君は麟君でしょ？ 私の家族」

「それから氏名は麿芳、字は子方。私の幼馴染」

姉さんと空さんが、それぞれ私の名前と自分との関係を口にする。

そう、『麿芳』である。

二人が能吏として名前を残しているように、私の名前も歴史書に刻まれている。しかしそれは裏切りを行った卑劣な人物として。その汚名は、元の世界で一八〇〇年以上経っても払拭されていない。

すなわち軍神関羽を裏切り、呉に討たせる要因を作った人物と同じ『麿芳』。それが私の名前だ。

同じように何度も裏切りを行ったが、その武において一定の評価が得られている呂布に対して、麿芳はずっと裏切り者としての評価しか与えられていない。もつとも、一番の見せ場が関羽への裏切りなのだ。その評価もやむをえないだろう。

そんな事をぼんやりと考えていると、二人の様子が少し変わった事に気づいた。

笑顔でお互いの顔を見ながらも、なんとなく二人の間の雰囲気は硬くなった気がする。

二人のそんな様子を見てみると段々と背筋が寒くなってきた。

どこことなく威圧感が二人から放たれている気がするのは気のせいかな？

って、何でさっきまで私たちと同じように作業していた大人があるなに遠くに居るんだ!?

逃げるな!!私だって怖いんだぞ!!

この場をどう切り抜けようか、必死に考えながらゆつくりと後ずさ

りを始めたが、二人ともすでに私を挟む形で隣に移動しており、腕を片方ずつ組まれていた。

捕まった事に焦りながらも、なんとか逃げる事ができないかと必死に思考を巡らせる。

そして、まるでどちらが私の事を深く知っているのかを競うかのように、交互に私の個人情報や矢継ぎ早に話し始めた。

「真名は麟だね！」

「先週誕生日迎えて十二歳になったんだよね」

「好物は鶏肉と卵なんだよ！」

「他の男の子とは違って、意地悪な事しないしとっても優しいよね」

「頭がとっても良いんだよ！ 計算がとても早いから、お父さんのお仕事のお手伝いができるの！」

「運動も上手だよ。足も早いし、年上の子にも剣で勝っちゃうしね」

「髪の毛を櫛で梳くのがとっても上手なんだよ！ 寝癖とかを直すときにやってももううんだけれど、凄く気持ち良いの!!」

「櫛を使わないでも髪の毛優しく撫でてくれるだけで気持ち良いよね。それだけで嬉しくなっちゃう」

等々、両手が使えれば頭を抱えながらうずくまりたくなるような事をしばらく言い合っていた。

きっと私の事を羞恥で悶死させるつもりに違いない。

必死に遠くへと逃げた大人たちに助けを求めるように視線を投げかけたが、全員目を逸らした。ちくせう！

その後もしばらく言い合っていたが、最後に私の顔をしっかりと見ながら一言ずつ放った。

「私の最愛の義弟だよ！」 満面の笑顔で姉さんがそう口にして。

「私の大好きな男の子だね」 顔を赤らめた空さんがはにかみながらその言葉を作る。

ウボアー。

私は羞恥心で死にそうになりながらも、真っ赤に染まった顔のまま空さんの最後の発言に食って掛かり始めた姉さんの事をなだめにかかるのだった。

第二話 I t' s I n T h e R a i n — 雨宿り—

海姉さんと空さんをなだめ終え、作業を再開できたのはあれから三十分後だった。

遅れを取り戻すように、話もせず黙々と手を動かす。さつきから二人が、話をしたそうにしているが、先に作業を終わらせようとたしなめる。

理由はきちんとはある。さつき気づいたのだが、風に湿気が混ざっているし、風上に入道雲が見える。おそらくもうすぐ通り雨が来るのだろう。それまでにできるだけ終わらせておきたい。

そう口にする、二人とも不思議そうな顔をしながらも作業に集中してくれた。

作業は約一時間後に終わり、まとめ終えた麦穂を納屋へ入れた。その後すぐに、予測通り桶をひっくり返したような大雨が降り始めた。

丁度納屋へ麦穂を収め終えた時に降り始めたため、そのまま納屋の中で雨宿りをする。

「すごい、本当に降り始めた」

「隣君が嘘を吐くとは思っていなかったけれど……」

二人とも目を丸くして驚いて、私の顔を見た。

「雨を降らせる大きい雲が、風上方向の空に見えたからね」

こんな何でも無い事なのだが、自然科学が発達していないこの時代では、天候の予測はやはり凄い事なのだろう。諸葛亮も東南の風を予測した時には、やはりこんな風に驚かれるのだろうか。

二人は私の方へ顔を向け、尊敬の眼差しを向けてきた。

少しばつが悪い。自然科学を学び、雨が降るメカニズムを多少なりとも理解していれば大多数の人間に出来る事なわけだし。

「ねえ、ところで隣君」

「ん、何？」

そんな事を考えていると、空さんから声をかけられた。

「さつきも聞いたけど今年の豊作、麟君が何かしたんでしょ？何をしたのか、教えてくれないかな？」

……そういえば、そういう話してましたね。海姉さんが暴走したから普通に忘れてましたよ。

「そうだよ。最初は家の土地だけでやっていたんだけど、何年も続けて豊作になったの。それで、こんなに続くのであれば凄い事だ！つて父様が主導して村のみんなに教えたんだよ」

「へえ」

海姉さんが誇らしそうに胸を張りながら、空さんへそう言った。空さんは期待に満ちた視線を私に向けてくる。

……そんな風に見られても、たいした事話せませんよ？また溜め息を吐きたくなるのをこらえながら、平静を装って説明を始める。

「堆肥を使つて地力を強くして、農薬を使つて害虫を殺したんだよ」
「堆肥？・農薬？」

空さんが首を傾げながら、分からなかった単語を聞き返してくる。

「簡単に言うと、野菜くずとか、馬や牛の寝糞や糞、落ち葉なんかを土に埋めて掻き混ぜて、限界まで腐らせた物」

「それって、ばっちい物なんじゃ……」

「限界まで腐らせると、逆に臭いも汚さも無くなっていくんだよ。

家畜の排泄物を直接撒くよりはずっとマシだね」

人間の体に害となる寄生虫の卵や病原菌も、堆肥を作成する段階で発生する熱で軒並み殺せる。

これに関しては、目に見えない寄生虫の卵の事を話してもおそらく理解されないだろうから、言葉にはせず胸中にとどめる。

「話を戻すけどそうやって、そうやって作られた堆肥は地力を安定して回復、増強させることができるんだ。だから、こうやって麦穂や野菜がたくさんできたんだよ」

あとは、貝殻を乾燥させて砕いて少量混ぜていたりもする。

「けど、それって牛糞とかを直接撒くのは違うの？ 材料に使われているのなら、あんまり違いが無いと思うんだけど」

姉さんから来た質問に同調するように、空さんもうんうんと頷く。

二人ともここまで話について来れる上、疑問も持てるのか。頭も良いし、好奇心も強い。こういう部分が能吏になれる素養なのかなあ。

まあ、さっさと質問に答えてしまおう。

「糞を直接撒くのは作物には強すぎる事があるんだ」

「強すぎる？強ければ強いほど効果がありそうな気がするんだけど？」

「いや、そうじゃないんだよ。それだと作物にとって毒になってしまふ事があるんだ。人間だって、漢方薬を飲む時に、薬師や医者さんに適切な物を調合してもらおうでしょ。それと似たような感じかな」

「あ、なるほど」

自分たちも医者にかかり、調合してもらった薬を使った事があるためか、すんなりと理解ができたようだ。

「そうやって糞を直接撒いてると、根が腐ったりする事があるでしょ。ああいう状態になってしまう原因の一つが、糞を直接撒く事なんだよ。まあ堆肥でも使いすぎると同じ状態になり得るから、気をつけないといけないけどね」

正確には糞を分解する際に発生する熱やメタンガスで痛むんだっけかな。あとは、窒素や有機酸が過剰に土中にあっても駄目だったはず。

「まあ、堆肥についての説明はこんな物で良い？ 良いなら農薬について話すけど」

「あ、お願いします」

了解。とはいっても、こっちはあまり長々と話せる事はないんだよな。

農薬といっても、何も化学合成された薬品だけがそう呼ばれるわけではない。前世では、自然に存在している物を農薬として利用する事も多々あった。

「農薬っていうのは、アブラムシとか、作物を食べる虫を殺すのに使う物。ほら、春から夏にかけて竹で作ったおもちやで色々な液体をかけるようにお願いしたでしょ」

「あー、あの白く濁った液体とかかー。あれ、服とかについてそのまま乾いちやうと嫌な臭いがするんだよねえ」

その時の臭いを思い出したのか、海姉さんが顔をしかめ、空さんが苦笑いを浮かべる。

誤解が無い様に説明しておく、竹のおもちやは水鉄砲。白く濁った液体は牛乳だ。牛乳を拭いた後の雑巾の臭いは人を殺せるに違いないと、前世の記憶から確信できる。

「まあ、臭いで殺すわけじゃないけど。かけると簡単にアブラムシをまとめて駆除できたでしょ」

「うん、あの光景はちよつと凄かったね……」

「ちよつと夢に見そうな光景だったよね……」

二人ともちよつと顔を引きつらせている

まあ、大量虐殺に近いしなあ。まして虫が苦手な女の子の場合にはきつい光景だろう。

中国において、牛乳は一部の地域を除いて常飲されるほど普及していない。そのため、農薬として使わせてくれないかと義父さんに打診し、数年の試用期間を経てようやく村全体で使用して良いと許可が出たのだ。

「あとにはんにくとか、トウガラシを水に溶いた物だね。人に絶対かけないようにやってほしいってお願いした物がそれ。これは臭いで虫が来づらくなる」

「あれかー。目に入ってポロポロ泣いてた子がいたね」

「うん、目が真っ赤になってたね」

「……後でその子の家教えて。お詫びに行くから」

刺激物を目に入れたわけだから、視力とかに影響がある可能性も捨てきれない。んー、やっぱりこの辺は使い方をしっかり指導しないと危ないな。

「……まあ、お詫びは雨が止んだ後すぐに行くとして。後は畑を囲うように植えた木。あれも農薬に近い。植えておくと、臭いで外から虫が来づらくなるんだ」

「あの背の低い木？^{マンネンロウ}迷迭香だっけ？」

「うん。あれは虫避けだけではなく、お茶にもできる。それ以外にも、少量だけど油を取る事ができるし、料理の香辛料にも、薬にもなる。凄く便利な木なんだよ」

「ふえー。あの木、そんなに色々効果があるんだー」

迷迭香。これは西洋名でローズマリーと呼ばれる木だ。地中海沿岸が原産のはずなのだが、既に中国にも伝わっていたらしい。野生化していた木から挿し木を取って、畑の周りに植えた。多少世話が適当でも、どんどん大きくなっていくのも手間がかからなくて良い。

しかし、今植えている量では、村内で消費するだけで無くなってしまふだろう。もっと増やして、売り物にできるくらい作った方が良いかな。義父さんが帰ってきたら相談してみよう。

「今年やったのはそれくらいかな。来年以降の話をするならば、休耕地を作らなくて済むように植える物と場所を計画し直す事と、ちよつと手間がかかるけど水路を引く事くらいかな」

ノーフォーク農業。休耕地を作らずに農業を続ける事ができるよくなる画期的な農法だ。四輪作ができれば全体的な生産量が増えるし家畜を増やす余力ができる。

また、水場が近くなればそれだけ水を汲みに行く手間が省けるようになるから、地味ながら効率上がる。ただし村の男手を借りなくちや絶対無理だから、この辺の領主である義父さんにやって良いか許可を取る必要があるだろう。

「駆け足で説明したけど、大体今回やった事は全部説明できたと思うよ」

「え？ 麟君、色々作った道具は説明しないで良いの？」

海姉さんから、そんな質問の声が上がった。んー、1つ作るのに結構手間暇かかるから、村全体に普及させるの難しいんだけどなあ。

まあ、空さんも期待の眼差しをこちらに向けてるし、説明するか。

……本当に知的好奇心旺盛だな。私も見習った方が良いんだろうか？

「土地を耕す時に使った三本刃の鍬（備中鍬）とかは省略するよ？ あれは形を変えて、より深く掘れるようにしただけだし」

「うん、大丈夫」

「他にあるのは、収穫した後を使う千歯扱きと唐箕だね。千歯扱きは、まとめて麦を脱穀できる道具。扱箸よりもずっと効率的に脱穀する事ができるんだよ」

ただあれはなあ。

「けど、それって周姉さん達が困るんじゃない？」

「そうなんだよなあ……」

海姉さんの言葉に、頭を抱える。周姉さんってというのは、数年前旦那さんを賊の手により亡くした20代半ばの未亡人だ。子供たちに優しく、村の子供達にとって姉のような立場のため、みんな姉さんと呼んで慕っている。

この村には他にも、病気などで旦那さんを亡くしている女性が数人居る。基本的に脱穀は力仕事ではないため、未亡人の仕事とされている。そのため、脱穀を楽にできるようにしてしまうと彼女たちの仕事を無くし、自活能力を奪ってしまう事になる。

現在は、我が家に試作品が一台あるだけだから問題無いが、普及させてしまうと彼女達を間接的に殺してしまう事になりかねない。実際に、千歯扱きの別名を後家倒しって言ったりするからなあ。

普及させるのは、周姉さんたちに他の仕事を提供できるようになってからの方が無難だろう。

「とりあえず、千歯扱きに関しては普及を保留しよう。空さんも、そういう道具が有るって言いふらさないで欲しいんだけど……」

「うん、分かった。内緒にしておくね」

「うん、ありがとう」

笑顔を作って感謝する。空さんはこういう時に絶対に嘘を吐かないから信用できる。

ん？何で、顔赤くなってるの？

海姉さんはまた機嫌が下降気味みたいだし。

「な、なんでもないよ。それよりも、えーつと……唐箕だっけ？その説明もお願いして良いかな？」

「うん。唐箕っていうのは、脱穀し終えた麦からもみ殻やわら屑を取

り除く道具。 風を起こして、軽いゴミを吹き飛ばすんだよ。ちよつと大型の道具になるから、どこかへ設置して村で共同で使えるようにした方が良くもしいね」

「……ちよつと想像するのが難しいかも」

空さん苦笑い。

まあそうだよなあ、と私も苦笑いを返した。

「今度うちに遊びに来た時に見れば良いよ。 多分見たほうがずっと分かる」

「え……。 あ、うん！ じゃあ今度遊びに行くね！」

空さんが凄く嬉しそうに返事をした。 そんなに喜んでくれるなら、誘った甲斐があるって物だ。

私としても、海姉さんや空さんと一日中遊べるのは久しぶりだ。 義父さんにその日は休むと伝えておかないと。

まあ、それは義父さんが帰ってきてから言えばいいとして。

「むー！」

「何で海姉さんは、突然そんなに不機嫌になってるのさー！」

さつきまで嬉しそうに空さんと一緒に説明聞いていたじゃないか。

なんで数分の中に機嫌が急降下してるの!?

空さんも頬に両手を当てて嬉しそうにしてないで、一緒に宥めて！

「空を遊びに来るように誘った！」

「は？ そりゃ幼馴染だし、遊びに来るように誘うくらいするでしょ」

もう少しすれば思春期が訪れるから、その頃に疎遠になる可能性は捨てきれないが。 現段階で距離を置く理由はまったく無いよ？

「海姉さんだって、空さんと遊ぶの好きでしょ？ だったら家に誘っても良いじゃない」

「……え？ 私も居て良いの？」

「……え？ 居ないつもりなの？」

あえて海姉さんを仲間はずれにする理由が見当たらないんだけど。 そう伝えたら、途端に海姉さんの機嫌が上向いた。 何だったんだろう。

しかし、今度は空さんがさつきまで凄く嬉しそうだった顔を、拗ね

たように唇を尖らせてそっぽを向いていた。

え？何で？

海姉さん、なんでそんなにニヤニヤしながら自分も一緒に遊ぶ事を空さんに念押ししてるの？

ちよ、空さんそんなに涙ぐむほど悔しそうにプルプルしないでも！ほら、そんなに手を強く握り込んでたら血が出ちゃうから！

結局雨が止むまでの間ずっと空さんが落ち着くようになだめ、テンション高く空さんにちよっかきを出す海姉さんを止めるために全力を尽くす事になった。

なんで休みの日なのに、こんなに疲れてるんだろう……。

私はそう嘆息せずにはいられない、忙しくも疲れる一日を過ごすのであった。

第三話 In My Dream — 時には昔の話 を①—

(ああ、これは夢だ。)

すぐに分かった。なぜなら今夢の中で見ている光景は数年前、私が四歳の時に実際に目の前で行われた物だ。まだ幼く、話を理解できていないと思ったのか、私の父だった男は私を売りつける商談を目の前でしている。

特別驚く事はないだろう。今までずっと愛玩動物よりもひどい扱いを目の前の男にはされてきたのだ。虐待やネグレクトと呼ばれる行為が有る事は前世の記憶で知ってはいた。しかし自分がそういう扱いを受ける立場になると、やはり心が荒む。

それでもどんな目に遭わされようと、反抗する事は決してやめなかった。もつとも子供の力では精々噛みつく事でくらいしか痛みを与えることができなかったが。

抗う事をやめなかったのは、前世の父から受けた薫陶のおかげだろう。「何があろうと、自分自身である事を諦めるな」剣術を教える傍らそういう哲学的な事を幾つか、まだ小さい時から兄や私に言葉で伝え続けてくれた人だった。

そのまま男との生活が続いていたなら、確実に私は死んでいただろう。転機が訪れたのは、実に屑らしい生活を送っていた男の路銀が遂になくなり、売る物もなくなってしまった時だ。仕方が無いので、私を売ることにしたのだろう。この乱れた世の中においては珍しくも無い事だろう。私の中には、とうとうこの時が来たか、というある種の感慨しか無かった。

少し予想と違ったのは、人買いの元に直接連れて行くのではなく、自分の縁のある人物の元へ向かった事だろう。

ここで少しこの世界での私の生まれについて、問わず語りをさせてもらいたいと思う。とはいっても、私が生まれる前の話も含むため、当然ながら自分で見たわけではなく、義父に引き取られた後に聞いた

話だ。

私は今見ている夢の中で見えている男と、没落名家生まれの母の間に生まれた。

母は生まれは良かったし、教養も持っていた。しかし、致命的なまでに男運が無かったのだろう。そうしみじみと思う。

母はこの徐洲において名士と呼ばれるような家に生まれた。ただその家は何代か前の当主が無能だったため、借金を背負うことになった。それが原因で、今では家を維持するのが精一杯となっていたらしい。

そこで徐洲の富豪である、糜家の次男坊であった男を婿に取る事で後ろ盾を得ようとした。典型的な政略結婚だが、それでも母は夫となる男を愛そうと努力をしたらしい。

ただ、この男がどうしようもない屑だった。酒を飲んで暴れる。外に愛人を何人も作る。金を使いこむ。気が小さい癖に、自分を大きく見せようと暴力を振るう。そんな人間を夫に持ち、ずっと愛し続けるのはどんなに強い人でも難しかっただろう。

母は男との間に子供を一人産んだ。(言うまでもないだろうが、この子供が私だ。)

話が逸れてしまう上に完全に余談ではあるのだが、母が私を出産する直前に見た不思議な夢についても話をさせて欲しい。

私を身籠っていた母の夢の中に麒麟が出てきて、こう聞いてきたらしい。

「娘よ。今の世の中は乱れきってしまったている。これでは、私は下界に降りる事はできぬ。如何様にすれば、これを正す事ができようか?」

母は麒麟の威圧感に恐れおののき、平伏しながらも懸命に答えたらしい。

「確かに今の世は乱れており、貴方様がいらつしやる事はできないでしょう。上は官匪が横行闊歩し、賄賂が無くては正しき政治が行えず、民達へ重税を課す事で私腹を肥やしていると聞きます。下は匪賊が跳梁跋扈し、民達から日々の蓄えを奪い去り、我が物顔で罪無き

者たちの達の平安を乱しております。これを正す、尊き天子様も官
匪達を押さえ込まれ、忠臣達からの聴政もままならなくなってしまう
ていると人は噂しております」

話しているうちに気が昂ってきたのか、更に母はこう続けたらし
い。

「これも天の与えたもうた試練とするならば、余りにも意地が悪い事
をなさります。我々、下々の民草を救って欲しいとは申しません。

しかし、貴方様達よりこの地を統べるように権能を与えられた天子
様が、同じ方々より与えられた試練によりその力を振るう事ができず
にいる。与えられた力を十分に振るう事ができなくされたにも関
わらず、高みから見下ろし『何故できていないのだ』と他人事のように
冷たく言い放たれる！これでは余りにも天子様が哀れにござい
ます!!」

途中から気持ちが高ぶりすぎたのか、最後には涙を流しながら食っ
て掛かるように言葉を言い放ったらしい。あんな男と夫婦にならね
ばならなかつた自分の鬱積した暗い感情に加えて、世が乱れている事
に対する麒麟の他人事のような物言いをする理不尽が上に加えられた
事で堪忍袋の緒が切れてしまい、つい言葉が厳しくなってしまったの
だろう。

これ、穏やかと言われている麒麟じゃなかつたら殺されてたんじや
ね？そう思うくらいに結構無礼な物言いをしている。

「……確かに汝の言う事に、一理あるかも知れぬ」

麒麟はしばらく考えた後、力なく項垂れながら母の言葉に同意した
らしい。流石は仁獣麒麟。人間の言う事をわざわざ吟味し、自らの行
いを反省するとは器が途方も無くでかい。

「されば、快刀にて乱麻を断ち切るが如く官匪匪賊を打ち払い、天子を
柱石の如く支え、天子の行う仁政の礎となる者をこの世へ遣わそう。
幸い汝は子を身籠っている。その子へ我が力の一端を与え、遣わせ
る者としようぞ」

「は、ははっ」

「しかし一端とはいえ、人でありながら天に近い力を持つ子を身に

宿すのだ。如何に汝の魂魄が強かろうと、その子に魂魄の大半を奪われ、汝は死を得る事になろうぞ。その覚悟は有るか？」

流石にお前死ぬよ？と言われた事に対しては、即答できなかったよ。うだ。しばらく考えた後、母は肯いた。

「自分が死ぬ事となろうとも、世に仁政をもたらせるならばその生には意味が有ったのだ」と。

「……良かろう」

そう言つて麒麟は母の腹へその角を向けて光を放ち、母の体内へその光を納めたらしい。その後すぐに母は目を覚まし、数時間後に陣痛が始まり私が生まれたらしい。

この話を母の家族達に話しても誰も信じなかったようだ。それはそうだろう。仁獣と言われる麒麟が、なんでわざわざ一般人の母の夢に来る必要があるんだよとか、あんな徳がまったく無い男の子供に力を与える訳が無いとか、そう考えるのは当然だ。

しかし、私は義父さんからその話を聞いても笑う事はできなかった。なぜなら、私は異能バトルができるような特殊能力（手からビームを出したり、瞬間移動をしたり）は持ち合わせていないが、前世の記憶というとんでもない物を持ち合わせているからだ。

実際に、それを信じていなかった現実主義者の義父さんが、数年後には疑い半分とはいえこの話を信じるようになった。私が言う自然科学などに裏打ちされた知識を披露され、実践するたびにその通りの結果を得られたのだ。十分神懸かっているだろう。これが広まってしまった場合、かなり私の身に危険が迫る事になりかねないので、知識をあまり外でひけらかす事が無いように注意されている。

余談はここまでにしておき、話を戻す事にしよう。

麒麟の予言のとおり、私を産んで数カ月後に母は亡くなってしまった。

そして、母が死んだ後も好き放題にやっていたため、遂に母の家族達も堪忍袋の緒が切れてしまった。

糜家からの支援を打ち切られる事を覚悟した上で、母の遺児と一緒に男を家から追い出したのだ。流石に糜家の人間を無一文のまま放

り出す事ができなかつたのか、立ち退き料として多少のお金を持たせた上で。

遺児も一緒に追い出したのは成長して男の様に育った場合、手を持って余す事になるからだろう。未来において、性格は後天的な生活環境により形成されると言われているが、この時代においては性格も先天的に受け継ぐ物と信じられていたため、しようがないのだろう。

徳無き男の子供にも徳は宿らない。それはこの時代の思想から言えば、ぐうの音も出ないほどに正しい。

かくして、男は子供を抱えたまま宿無しとなった。

男はまず、実家である麿家に帰ろうとした。自分の事を甘やかしてくれた両親ならば、自分の味方として麿家で生活できるように取り計らってくれるに違いないと。

しかし、男の目論見は脆くも崩れさる。いや、両親は味方をしようとしてくれたのだ。だが男が婿入りしていた家から、激怒している事を伝える手紙と絶縁状が既に早馬で麿家に届いていた。

どんなに困窮していたとしても名士である嫁ぎ先から、絶縁状を叩きつけられる原因となった男を引き取る訳にはいかない。当然だ。そんな事をすれば麿家も徳を失い、他の付き合いのある家からも距離を取られかねない。如何に徐洲有数の富豪である麿家といっても、洲内の上流層と関係を結ばなければたちまち困窮してしまふ。

その結果、麿家は既に男の父親（私達の祖父）から兄（海姉さんの父、私の義父）に代替わりをしていた事もあり、男を引き取る事はなかった。

祖父母夫妻は懸命に義父さんを説得しようとしたのだが、義父さんが受け入れる事はなかった。当時赤ん坊だった私ですら受け入れようとしなかつた事から、義父さんの怒りの深さが伺える。

ちなみに最近、この時の話を義父さんから直接聞いて私を引き取ろうとしなかつた事を謝られた。しかし、どう考えても義父さんも被害者である事から、気にする必要は無いと伝えている。

その際に「お前は、弟の血を引いているとは思えんな」と言われた。「まあ、母方の血が濃いのだろう。何せ夢の中とはいえ麒麟に説教し

た女性だ。私が変わっているのも母の性格を受け継いでいるのだろう」そう伝えたところ、腹を抱えて笑い出した。解せぬ。

話を戻すが、こうして男は子供を抱えたまま流浪の旅をする事となる。その旅の中で私を捨てなかつたのは、現在麿家当主である兄が死んだ時に備えていたかららしい。その内容が以下の通り。

兄が死ぬ↓弔問に向かう↓その時赤ん坊の頃より成長した孫（私）にメロメロとなる↓父である自分が麿家の次期当主に！

実に脳味噌が膿んでいるとしか思えないような思考回路である。今日日三歳児でももう少しましな論理で物を語れる。

そもそも、既に孫として海姉さんが生まれているんだから、私一人に愛情が集中する事は無いだろう。仮に義父さんが突然死したとしても、海姉さんを当主として祭り、祖父が補佐を務めれば良いだけである。

……もつとも義父さんに上の様に伝えたところ、当時そのような事が本当に起きた場合、次男可愛さに目が眩んだ祖父母夫妻が男を当主へと擁立する可能性があったとの事だ。愛情ゆえの盲目が如何に恐ろしいのか、戦慄した瞬間である。

何それ怖い、と前世含めての人生で初めて口に出したよ。

この数年の流浪の後、冒頭の商談の夢へと繋がるのだ。

その商談の相手は、麿家当主。つまり自分の兄であり、私の義父さんになる人だった。

その際に、余談で語った母の見た夢の話をして、いずれ世の役に立つと言いながら金をせびろうとした。

問わず語りの内容から、冒頭の部分までの内容は今のでほとんど語りつくした。こうやって問わず語りをしているうちに、夢も進んでいったらしい。交渉も終わろうとしている。

義父さんも最初は拒んでいたが、最終的に手切れ金も含めた金を与え、男を追い払った。

「まったく、相変わらずとんでもない厄介者だ。もつとも、次に訪ねて来た時には問答無用で殺せる事を考えれば悪い事ではないか。奴婢を買ったと思えば良いだろう」

義父さんは、私がまだいる前でそうぼやいていた。

その後、まだ私が居ることを思い出したように話しかけてきた。「今日からお前はここで暮らす事になる。確かに私とお前は親族となるが、私はそのように扱わない」

あの男に酷い目に遭わされていた以上、当時の義父さんを責める事はできない。

しかし、私もいい加減腹が立っていた。何せ私は、見た目は子供、頭脳は大人を地で行く存在なのだ。自分の人生なのに意思を反映できず、ただ流され続ける。それは私にとってたまらなく不快な事だった。

さらに、あの男は暴力により私を屈させようとしていた。自分で認めた人間であるならばともかく、明らかに屑と分かる者に力で押さえつけられようとした事も私にとっては嘔飯物だ。

つまり、何が言いたいのかというところ。

私はこの時、怒りにより自制心が焼失していた。でなければ、この後こんなにも迂闊に色々話したりはしなかった。怒りに我を失い、麒麟に説教してみせた母親の気質はここにも受け継がれていたようだ。

後年、この時の事を思い出して度に頭を抱える事になる。私は平穩な人生を送れる可能性をこの時に完全に手放してしまったのだと。

「まあ、お前が如何に小さかろうとも、家にいるうちは働いてもらう。

文句は言わせんぞ。役に立たぬようなら――」

「死んだ馬の替わりくらいなら務められるでしょう」

「―すぐに追い出す……。今なんと言った？」

「死んだ馬の替わりくらいは務められるでしょう、と申したのですよ」
義父さんの言葉に被せて、私は言葉を放った。今まで喋らなかつた私が突然発言した事に驚いたのか、義父さんは私の発言を聞き返してきたので、もう一度同じ言葉を作った。

義父さんはしばらく考えた後、答えに至ったのか、目を見開き問いを投げ掛けてきた。

「郭隗か」

私は無言で頷いた。それを見て、父さんはますます驚いたようだった。

た。

「どこで、史記を読んだのだ？」

当然の疑問だろう。あの男は文字を読むことができない。そのうえ、書を読める可能性の有る母の実家からは、私が赤ん坊の頃に男と一緒に追い出されている。

「私は書を読んではいりません」

これは半分嘘だ。今生ではともかく、前世では私は歴史に関する本を大量に読んでいる。

「それに、わざわざあの男が私のために書を買って与えることはありえぬでしょう」

これは真実だ。あの男は、本を読む金があるならば酒を飲むか、女を買う。

「……うむ。道理だ。ならば、どこかで耳にした話をひけらかしただけか？」

それもあり得ぬと理解しているのだろう。

少なくとも、死んだ馬を買う事で得られた物が何かを理解していなければ、例えに出すのは不適切だ。

いつの間にか義父さんの表情から驚愕が抜け落ち、目が私を見定める物に変わっている。

私は無言で首を振る。

その後首を傾げながら、先程から気になっている事を逆に問いかけた。

「史記ではなく、戦国策ではありませんでしたか？」

私は義父さんの出典元をに疑問を投げ掛ける。大分記憶が曖昧になっている。どっちに載っていたのか忘れてしまっていた。だからどっちだったのかを思い出したい、そんな軽い気持ちで質問したのだ。

しかし、その質問を聞いた時、いよいよ義父さんの顔がひきつり始めた。史記と戦国策、どちらにも郭隗の記述が有ることを理解していなければ出典元など気にしない。

書を読んでいなければ出てこないはずの知識を持つ。しかし、当人

は書を読める環境は持っていなかった。それを異様と取ったゆえの表情だろう。

その顔を見て、私はようやくこの時の自分が冷静ではなく、かなり多くの失言をしている事を悟ったのだった。そして遅まきながら我に返り、凄いい勢いで血の気が引いていくのを感じた。

……あれ？これ完全に異端者扱いされるんじゃない？

私は勢いに任せて行動した事を全力で後悔しながら、義父さんに負けないくらい顔をひきつらせるのだった。

第四話 I have a dream — 時には 昔の話を② —

夢はまだ続いていて、私が海姉さんと空さんを相手に古典の講義を始めようとしている。

確かこの講義をしたのは、海姉さんと空さんが警戒を解いてくれたが、真名で呼ぶ事ができなかった頃だ。義父さんと初めて会ってから、だいたい1年くらい時間が過ぎていく。

幸いにして、あの時の会話で義父さんは私の有用性がある程度認められて、奴婢という扱いは無くなった。それどころか廢家の養子として引き取ってくれたので、結果的には良い方向に事態が進んだと言える。

もつとも廢家の麒麟児として噂を流される事となったため、やけに他人に注目されるようになってしまったが。この二つ名を得た事で常に人目に晒されている事を意識するようになり、迂闊な行動を取る事ができなくなった。それも義父さんの狙いの内だったのだろう。人前では余計な事はせずに大人しいふりをしておけと。

まあそんな事よりも、だ。些細な事かもしれないが、この体に入っている中身としては二つ名とかかなり痛い。具体的にはその呼び方を耳にする度に頭を抱えてうずくまりたくなくなるくらい恥ずかしい。

やめて！二十歳を超えていた人間にそういう遊びを許されるメンタルはもう無いの!!

……まあ、話を戻そう。確かに今後の事を考えると、異端者として扱われるような振る舞いは絶対に避ける必要がある。

下手をすれば、黄巾党のような怪しい集団に首魁として祭り上げられて、旗印にされる可能性だってあるのだ。知識は小出しに、気づかれないようにこっそりとするべきだろう。

え、自重しろ？前世で知識を得ようとした自分の努力、それを蔑ろにするつもりはまったくありませんよ？

さて取り留めの無い思考はこの辺りにしておいて、目の前にいる長

い茶色の髪の毛の女の子と、長い焦げ茶色の髪の毛の女の子を生徒にした青空教室に目を向けましょうか。

……客観的に見て、子供が教師として年上の子に故事を教えるってありえないよな。

いきなり先の決定を台無しにするような、普通の子供達がまずしないような光景を思い出させられて、夢の中だというのに全力で頭を抱えてしまった。

そんな私の様子が気にされるはずもなく、授業は始まった。

「先ず隗より始めよ」

「この言葉の意味は、燕の王である昭王が郭隗に人材を集めるにはどうすれば良いのか、と尋ねた際の答えです」

「そう聞かれた時に、郭隗は昭王に対して次のような逸話を述べています」

「昔、一日に千里走る名馬を求めた王様がおりました。家臣に金を渡し、名馬を見つけて来るようにと命じました」

「しかし、名馬を見つけないことは叶いませんでした。しかし、死んでしまった名馬を見つけない事はできませんでした」

「そこで家臣は、金五百で死んだ名馬を買いました」

「当然ながら無駄な金を使ったと、王は怒り家臣を責めました」

「しかし家臣は慌てずにこう言ったのです」

『「死んだ名馬にもお金を払う、そのような評判が立ち名聲が広まれば必ずや生きている名馬を人は競って連れてくるでしょう」』

「しばらくすると、実際に名馬を連れた者が何人か王様の元へ訪れ、実に三頭も名馬を手に入れる事ができました」

「これが郭隗がした話です。死んだ名馬を自分に、それよりも才能が有る人たちを生きている名馬に例えて『私の様な小才子でも丁重に厚遇すれば、それよりも優れた賢人達が我先にと貴方の元に集うでしょう』という事を伝えたたんですね」

「郭隗の考えは当たり、昭王は優秀な人材を多く招く事に成功しました。そうやって集めた人材の中には、中華の歴史において最も優秀な将軍と言っても良いかもしれない、楽毅もいました」

夢の中の私は、郭隗について話し終える。

「郭隗って凄く頭が良かったんだねー」

「その意見を受け入れた昭王も凄いよねー」

二人がそれぞれ今の話に対する感想を言う。確かに穿った見方をすると、自分に対する厚遇を要求しているようにしか聞こえないしな。堂々とそれを主張した郭隗も、気にせず受け入れた昭王も度量がありすぎる。

「ちなみに、私が義父さんに引き取られる際に挙げた、『死んだ馬の替わりくらいは務められる』というのもこの逸話が出展元です」

夢の中の私は、続いてあの時の私の意図の説明を始めた。

（あの時はもつと上手い立ち回りもできたんだよなあ。怒りに我を忘れて、調子に乗った結果とはいえ、自分の失敗を省みるのはきつい）

……夢の中の私も隠そうとしているが、口許が引きつっている。

ここに鏡があれば、恐らく私も同じ顔をしているのが見られるだろう。

（……はあ）

ため息を吐くが、夢は勝手に進んでいく。

「つまり、ここで私を助けておけば、『暴力を振るっていた弟から、財を使って甥を助け出した人』っていう名声を得る事ができますよね、と伝えたいんです」

「名声ってそんなに大事なの?」

「物凄く大事です」

小首を傾げながら質問してきた空さんに対して、夢の中の私は、間髪入れずに答えを返す。

「例えば、公祐さんがお菓子を誰かにあげるとします。相手は二人居て、一人はあげたお菓子のお返しをくれて、時々あげる分より多くお返ししてくれる人。もう一人は今まで一度だってお返しを貰ったことの無い人。どっちにあげたいと思いますか?」

「それはもちろん返してくれる人だよー!」

「何で子仲姉さんが答えるのさ……」

あ、空さんが苦笑いしている。昔からこの関係って変わっていない

んだなあ。

「まあ、良いか。公祐さんも同じでしょう？」

「うん、それはもちろん」

空さんは、先ほどの質問に対する回答を自分で得る事ができたようだ。顔に理解の色が浮かび、ゆっくりと何度も頷いている。

「うん、それが名声なんだよ」

「え？」

そんな空さんに対して、海姉さんはまだ理解できていないようだ。本当に理解できているかを確認する意味も含めて、代わりに説明してもらおうと空さんへ目配せをする。

あ、笑って頷いてくれた。

「海。返してくれる人にお菓子をあげるのはなんで？」

「必ず返してくれるから。お菓子を損しないもん」

「うん、その人は『あげたお菓子に対して必ずお返ししてくれる』っていう名声を持っているんだよ」

「……あ！ そうか、そういう事か！」

海姉さんが両手を打って、理解できた事を表現する。

こうやって子供染みた表現を見ると、この頃から空さんの方が海姉さんよりもずっと大人びていたんだな。

「そう、それが名声。子仲姉さんや公祐さんは、お菓子をあげる相手を選ぶ基準にしたでしょ？これが大人の世界になると、戦争の時に味方をしてくれる人ができるかもしれないし、食べる物が足りない時に、この人には食べ物に分けてあげようって優しくしてもらえるかもしれない。そういう風に繋がるんだよ。これは言い換えれば、

『徳』があるとも言うんだ」

『徳』……」

「逆にお菓子を返してくれないって知れ渡っている人は、悪い名前が広まっちゃってる。言ってしまうえば『悪い名声』や『悪評』が広まっ
ていて、『徳』が無い人だと言い換える事ができる」

『徳』が無いと、友達になってくれる人が居なくなるかもしれないし、ご飯を分けてくれる人も居なくなるかもしれないんだね……」

「うん、そうだね。だから名声は重要なんだよ。これが無いと、仲良くしたい人が居ても仲良くできないかもしれないからね」

この後、悪評についても、簡単な例を挙げるんだよな。

「悪評について1つ例を挙げておこうか。例えば、二人が苦手な虫をわざわざ近づけて来る子が、大人に怒られている時に味方をするかっていうと……」

「死んでもやだ!」

「絶対に嫌」

「まあ、そうなるよね。そうやって、『徳』を失うような行動をしていると、いざ困った時に助けてもらえなくなるんだ」

(……すまん文嚮、宣高。これ、フォロワー無理だ)

当時の私は、たしかそんな事を考えていた気がする。

今では自重するようになったが、この頃はいつも海姉さんと空さんの気を引こうとちよっかいを出していた、悪友達に詫げる。

当時の私は、「二人の気を引きたいんだけど、協力してくれ。まずは自分の事をどう思っているかを知りたい」と相談に来た悪友二人へと了解を返したし、評価が低いようなら持ち上げておこうと考えていた。

だが、これは予想以上に好感度が低そうだと悟ってしまった。下手にあいつらのフォロワーを入れようとすると、二人にへそを曲げられかねなかった。

(まあ、人生は長いんだ。巻き返せるように自力で頑張ってもらおう)

たしか、そう考えて思考を打ち切ったんだよな。

だが、過去の私よ。……数年経っても巻き返せていない可能性については、予想していなかっただろう。

毎度毎度、二人の気を引こうと巻き起こす騒動に関わり続けるはめになる事を考えると、ここでフォロワーしておいた方が未来は楽になったと思うぞ。

ちなみに、簡単に悪友達を紹介しておく。

悪友その一、姓が徐、名が盛、字が文嚮。

悪友その二、姓が臧、名が霸、字が宣高。

どちらも三国志において超有名とは言えないが、名将と呼ぶにふさわしい実績を持っている。

二人ともここ、東海郡出身ではないのだが、住んでいたところで賊が多くなりすぎたために家族と一緒に逃げてきたのをこの村で受け入れたのだ。

正直、武官において目立った者がいないこの徐州において、将来が名将になる可能性が高い人材を抱える事ができるのは、非常にありがたい。

余談だが、空さんの家族も同じように青州北海郡より逃げてきたらしい。きつと徐州北部、青州、州は修羅の国の様になっているに違いない。

実際に三国志においては、青州で黄巾党が大量に蜂起している。この青州近辺の治安悪化は青州黄巾党発生の前触れなのだろうか？

「とりあえず、この言葉に関しては説明を終えようか。次はせっかく名前が出てきたから、楽毅の話をしようか」

「はい」

私の考えを他所に授業は順調に消化されている。

元気な返事をする二人の声を聞いて、夢の中の私は次の逸話の話を始める。

こうやって、故事を覚えておくのは人と議論をする時に必要となる。過去にやって成功した事を引き合いに出せば相手の理解を得やすくなるし、失敗した事を引き合いに出せば相手を翻意させやすくなる。

そうやって故事を説得力を持たせる材料とするのは、中華において身を立てるには必須とも言える。

(この頃は、義父さんの手伝いはほとんど無く、農作物の生産量を上げる方法を糜家の土地の片隅で試しつつ、海姉さん達に勉強を教えたんだよな)

最初は海姉さんだけに教えていたのだが、「親友である空さんも一緒に学んだ方が、互いに切磋琢磨できて学業が捗るだろう」と義父さ

んに進言して、空さんにも授業に参加してもらおうようになった。

古典以外にも、四則演算を教えている。税や軍需品の量を計算する時に必須だし。

先日空さんに説明した豊作の原因となった仕掛けは、義父さんの許可の元この頃から試し始めていた。人目につかないように気を付けながら、義父さんに紹介してもらった信用できる人たちに頼んで廢家の土地を開墾していくのは、秘密基地を作っているようでテンションが非常に上がった。

すまん、昔からミニスケープ系のゲームは好きなんだ。

そんな事を考えているうちに、「報遺燕恵王書」の内容まで説明を終えたようだ。

この手紙は、昭王の後を継いだ恵王に疎まれ、謀殺されることを恐れて趙に亡命した楽毅が、恵王に宛てて書いた。矛を逆しみにして、燕に攻め込む気が無い事を示しつつ、抜擢してもらった昭王への変わらぬ忠義心を示した事で有名だ。

海姉さん達もいたく感心しているようだった。

「さて、頭も使って疲れてるだろうし、おやつにしようか」

夢の中の私がそういうと、二人は両手でバンザイしながら歓声をあげた。

やはり、子供は甘い物が大好きなのだろう。

あと数年すれば、海姉さんが自室で脇腹の肉を指でつまみながら、深い溜め息を吐く姿を多々見かけるようになるのだが、今は何も気にしていないのだろう。

ちなみに私はいつもそういう光景を目にする度に、八つ当たりされる危険を感じて気配を殺して離れるようにしている。

(……少しくらい肉付きが良くなっても、作ったお菓子を美味しく食べてくれる方が嬉しいんだけどなあ)

この間、自作のお菓子を出した時に溜め息を吐きながら無言でお皿を遠ざけられたときには、本気で心が折れそうになった。海姉さんは、落ち込んでいる私にすぐに気づいて慰めてくれたけど、やっぱりそういう態度を取られると非常にへこむ。

それに比べて、空さんは太らない体質らしい。(本人談)

確かに私が作ったお菓子を、いつも気にせずにはくつついている。

海姉さんは空さんのそんな様子を悔しそうに見ている。……：だけなら良いのだが、最近服の上からも自己主張を始めた空さんの一部分を凝視した後、自分の体の同じ部位を見て殺意を漲らせるのは勘弁してほしい。

まだ十三歳なんだから、気にする事は無いと思うんだけどなあ。

軽くそんな事を思い出して冷や汗をかいていると、夢の中の私はお菓子を籠から取り出して皿に盛り付けた後、お茶の用意を始めた。とはいっても、家で淹れたお茶を竹筒に入れて持ってきているので、それぞれの茶碗に注ぐだけだ。

当然温くなっているが、二人とも猫舌のため熱いままだと飲む事ができない。そういった意味では、温くなっている方が都合が良い。

「きょうのおかしはなんだろう♪」

「……♪」

海姉さんは適当な節回しで歌って、お菓子が並べられるのを待ち、空さんも歌いはしないが期待に顔を輝かせてこちらを見ている。

夢の中の私は苦笑いをしながら、持ってきたお菓子を2つ載せたお皿とお茶を入れた茶碗を二人の前に置いてあげる。

「今日のおやつは、この間掘った芋で作った『甘芋』です」

俗に言う、スイートポテトだ。

この村では、農業用ではあるが牝牛を飼っているため、牛乳を取る事ができる。それを放置しておき、生クリームを調達した。

中国では牛乳を飲む習慣が無かったため、牛乳を飲むと牛になるなどの迷信を言われてきた。だが、散々私が料理に使用したため、家族と親しい友人はすっかり平気になっていた。

(この時にはまだ遠心分離機は作成できていなかったんだよなあ)

そのため、生クリームの調達に少し時間がかかっていた。

別件で遠心分離機を作成してからは、簡単に生クリームを調達できるようになったため、お菓子作りが非常に捗るようになる。

そして、海姉さんの溜め息の回数も増えていく事になるのだが、そ

れはまた別のお話。

サツマイモはジャガイモと同じく原産地がアメリカ大陸であるため、まだこの時代には中国には伝わっていない。なので、サトイモで代用した。

甘味料はハチミツを使っている。

「美味しい〜！」

二人がお菓子を口にすると、はもりながら喜びの声をあげる。そうやって嬉しそうに食べているのを見ると、やはり作り手としては凄く嬉しい。

夢の中の私もそんな二人の様子を見て、嬉しそうにニコニコと笑っている。

そろそろ夢から醒めるのか、目の前の光景が白み始めた。

義父さんに引き取られてからの数年間は、こうやって穏やかに過ぎていた。あの男と放浪している時には、こんなにも騒がしくも楽しい毎日をもう一度送る事ができるようになるとはまったく予想していなかった。

しかし、私は前世で読んだ『三国志』の内容を覚えている。数年後に漢帝国の終わりの始まりを告げる大乱が起こる事も、決して忘れてはいない。

この徐洲もきつと戦乱の渦に巻き込まれていく事になり、私たちもそれに翻弄される事になるのだろう。

そのための備えは始めている。しかしどこまで備えれば良いのか、過去の私はもちろん今の私にも見当がつかなかった。まだ足りないかもしれない、そういう考えは年をどれだけ重ねても拭い去る事はできていない。

その結果、焦るなど自分に言い聞かせながらも、体の成長で年月が過ぎていく事を実感するたびに焦燥感は増していく。

(もつと力を蓄えた方が良いのではないか?)

(もつと色々な技術をが導入した方良いのではないか?)

(できる事は?もつとできる事はないか!?)

しかし、そういう焦燥感海姉さんと空さんと一緒に過ごしている

間はゆっくりと溶けていく。やはりこの二人と一緒に過ごす時間が私は好きなのだろう。縁側で飼い猫と一緒に日向ぼっこをしている時のように、非常に心地良いのだ。

(私を家族として、友人として受け入れてくれた人たちを不幸にはしたくないな)

そうやって焦燥感の代わりにのように、ゆっくりとその決意を心に固めていく。

天下も、至尊の座も私は欲さない。それどころか、母の夢の中で麒麟が話した天子の柱石となる事すら望まない。

(例え動乱の時代を迎えたとしても、こうやって近い人間が欠ける事無く集まり、楽しそうに笑いながら過ごす事ができる未来が訪れて欲しいな)

私が望むのは、精々これくらいだ。しかし、例え他人に小さな事だと笑われたとしても、何よりも大事にしたいと心から望む物だ。

私は夢から覚醒していくのを感じながら、心の底からそう願わずにはいられなかった。

第五話 Modern girl —あなたにそば
にいてほしい—

麦の収穫から十日ほど経ったある日、姉さんが州牧様に呼ばれた。何でも大事な話があるから徐州の本拠である×まで来て欲しいとの事だった。

私はというと、姉さんが出かけている間は空さんの家で飼っている猫ともどもお世話になっていた。空さんからは、「もう家の子になっちゃおう？」なんてからかい混じりに聞かれていたが、謹んで辞退させていただいた。勝手にそんな話を受けたら、姉さんに泣きじやくられる上に義父さんに怒られる。がっかりされてしまったが、やむを得ないだろう。家族にはなれなくてもずっと友達では居続けるから、とフォローしたが、凄く微妙な表情をされてしまった。解せぬ。

ちなみに義父さんはまだ戻ってきていない。先の賊討伐は大成功に終わったらしいのだが、今度は×州との州境で賊が出たらしく、その足でそのまま次の討伐へ向かったと手紙が来た。修羅の国半端ねえ。

しかし、そんなに軍事を担える人材が州にいないのか？義父さんも適正は文官だから、無難な指揮しかできないだろうに。そんなに続けて遠出を続けて、体を壊さなければ良いんだけど。

まあ今日帰ってくるらしいから、ゆっくりと休んでもらおう。

さて、本日姉さんが×から帰ってきたので、久しぶりに家で一緒に夕食を食べた。猫にも食事を用意していたが、既に食べ終えて隅で丸くなっている。

「へえ、雒陽に新しい学校を作るんだ」

食後のお茶を飲みながら今回州牧様に呼ばれた理由を聞いたところ、上記の様な答えが返ってきた。

「うん。とりあえず、数年間勉強して来いって。費用も州で出してくれるみたい」

「へえ。かなり良い話じゃない」

国費留学みたいなイメージなのだろう。確かに有為な人材に英才教育を施すのは重要だ。まして、海姉さんは重臣の子弟となるため、そのまま他領に引き抜かれる可能性が低い。

家族が次代を担う人材として期待されているのは、非常に嬉しい事だ。

「しかし、任官を命じられるかと思ってたんだけど、予想が外れたな」
義父さんとは、すでに姉さんなら十分に文官として州政に関わる事ができるだろうと話していた。そのため、今回の呼び出しは正式な任官の要請だと思っていたのだが。

もつとも、その時には空さんも一緒に呼ばれるはずか。義父さんがすでに空さんの両親に官吏として預かりたいと話をしていて、了承を得ていたはずだ。

「あ、断ったから」

「断ったの!?!」

重臣の娘が、親の主君からの要請を蹴つ飛ばすってなんだよ!?!ありえないだろ!?!

「あ、違う違う。あと数年は任官はできませんってお伝えしたんだよ。ちゃんと時機が来たら仕官するつもりだよ」

「ああ、そういう事ね」

姉さんの言葉に少し安心する。陶州牧様は今でこそ年齢を重ねられて落ち着かれているが、元々は武官として功績を得て出世をしている。

そのためか、仕官要請を蹴った人物に対して、苛烈な処置を行った逸話が三国志（正史）では残っている。そのため、任官を断った姉さんに対しても投獄を命じられるのではないかと少し焦ってしまった。

……まあ、あの穏やかさを見るに呉書の記述にある、仁を持って政を行った人物という評の方が正しいのではないだろうか。陳寿乙。

「ていうか、時機って何さ? もう姉さんは文官として十分にやっていけると思うんだけど」

「もう、やだなあ。隣君と離ればなれになるのが嫌だからに決まっ

ているじゃない」

……いやいやいや。

「弟と離れたくないから仕官断るって何さ!？」

「だって、命に関わる事だよ。そういう所はきちんとしておかないと」

「いや!?絶対にそんなにおおげさな話じゃないよね!？」

「なんだよ、弟が近くにいないと死ぬって。何かの呪いでも受けてるの?」

「まあまあ、落ち着こうよ隣君。隣君も知っているでしょ?」

「とりあえず落ち着くために深呼吸を繰り返す。おっけー。K o o ー ー になれ、私。」

「あー、うん。とりあえず落ち着いた。で、何を知っているのさ?」

「私が任官すると、□に住む事になるのは分かってるよね」

「まあ、そうなるだろうね」

「義父さんが□に勤める重臣であるため、姉さんも徐州内の地方勤務ではなく、□で働くことになるだろう。そのため、政務を行うには□の城の近くにいなくては駄目だろう。実際に義父さんも□に屋敷を構えていて、この村と往復して生活している。」

「だから、姉さんも仕官すれば□の屋敷で生活する事になる。」

「当然私はその認識でいた。」

それに対して私は、廢家の持っている商家の経理で州内を行脚するだろうし、少なくとも成人するまではこの村の管理を行うために拠点はここに置く事になるだろう。ただ、私が任官すればこの家は引き払い、完全に□に拠点を移す事になる。

「なのでまあ、しばらくの間は離れ離れといえはそうなのだが。」

「けど、なんだかんだで年に何回かは帰ってくるんでしょ?」

「けど、今は会いたい時にはいつでも会えるのに、その環境を手放す事になるんだよ?そんなの耐えられるわけじゃないじゃない」

「いや、そこは耐えようよ」

「隣君だって、大好きな人と離れ離れになっちゃうと死んじゃうで

「しよ？」

「いや、死ぬ事は確定しないでしよ」

「え？だって、父様は母様が死んでいなくなってしまった後、何度も死にそうになったって言ってたよ？」

だから、大好きな人と離れ離れになると死んじゃうんだよね？

そう小首を傾げながら聞いてくる姉さんに対して、返す言葉を咄嗟には思い付けなかった。

脳裏には、前世で知っていた人々の顔。

死んでしまうほどの寂しさ。確かにそれは有り得るのかもしれない。そう思ってしまった。

「……まあ、そういう事もあるかもね。けど、それは死んでしまうと二度と会えないからであって、生きているうちはそこまでいかないんじゃない？」

「え？ 今回まで行く時、隣君が隣にいないと思うと胸が張り裂けそうだったよ。だから、やっぱりあの時の判断は正しかったと思っているんだけど」

「あー……」

義父さん、ごめん。この私への依存はちょっと治せそうにない。さっさと信用できる男に嫁がせるとかした方が、良いんじゃないかな。

「……それよりも隣君」

そう一段低くなった声で私に話しかけてきた。

「当然隣君も私が居なくて、寂しくて死にそうだったんだよね？」

……笑顔って本来人を威嚇するための表情っていう説がある。

それが真実だと、わたしは心の底から実感した。目が笑っていないよ、姉さん……。

それから盛大にむくれた姉さんをなだめるのに一時間くらいかかったが、再び話を聞ける状態に戻った。とりあえず、精神安定のために膝の上に猫を乗せて軽く撫でる。うむ、良い毛並みだ。

「けど、その学校って太学とは違うの？ 同じような設備がある以上、まとめた方が良いと思うんだけど」

これは純粋な疑問だ。州牧様も太學で学んで来られている以上、こちらへの推薦の方が自然な気がするんだが。

「なんかね、複雑な事情がありそうだよ」

姉さんの説明をまとめると、今回新しくできる学校は、現在大將軍の地位にある何進將軍により建てられるらしい。

太學が官吏を育成する学校の側面が強いため、武官を育成する学校を作るとというのが理由だそうだ。……表向きは。

おそらくこれは將軍の手駒とできる人材を集めるためだろうと、州牧様は判断したらしい。

私と姉さんも同意見であり、ほぼ間違いないだろう。

何が複雑かという点、これが將軍の妹である何皇后を通して陛下に上奏されているという事だ。

皇后は今まで十常侍達の後ろ楯も行ってきた。それが、今回は將軍の意見を十常侍達に諮る事無くそのまま陛下へ上奏されたのだ。

それはつまり皇后が將軍側に付いたかもしれない事を示す。

そうならば將軍へのパイプを作る意味でも、今回作られる学校に子弟を入れておいた方が都合が良いという事なのだろう。

しかし、皇后が十常侍を通さず政治的動きをするってというのは何か引つかかるな。

「とりあえず理解はしたよ。それで実際に入学するのは姉さんと元龍？」

「え？ あれ？ 今言わなかった？ 断ったよって」

「……」

大きく深呼吸。良いか、落ち着け私。決して声を荒らげるな。猫が逃げかねない。

「え、えーつと。仕官を断ったとは聞いたけど、学校の方も断ったの？」

「うん！ 両方！」

私は満面の笑顔で頷いてくる姉さんを見て、頭を抱えて突っ伏した。

あ、ありえん。扱い辛い人間と思われるかもしれないんだから、そ

ういうのやめようよ！今後任官する可能性あるんでしょ!?

その私の様子を見て焦ったのか、姉さんが釈明を始めた。

「だ、大丈夫だよ。州牧様だってそれを聞いて大笑いしていたんだから。悪い印象は持たれていないと思うよ！」

「……とりあえず、帰ってきたら義父さんを労ってあげてね。多分全力で州牧様に頭を下げているはずだから」

「うん。遠征で疲れているはずだから、一杯くつろいでもらうつもりだよ」

多分出征の疲れよりも娘のやらかした事のフォローで精神的に疲れのるだろうなあ。

「ご愁傷さまです。」

胸中で軽く嘆息し、義父さんに同情する。

私も膝の上の猫を撫でて精神安定に努めよう。

そのまま、離れている間に有った事を姉さんが話し、私が聞き役に回る。

私が話せるのは空さんの家で過ごした事だけだしね。けど、それを話したときに姉さんが良い笑顔になったのは何故だろうか？

そんな風に雑談に興じていると、扉が開く音が聞こえた。

「お父様が帰ってきたみたい！」

姉さんは立ち上がり、入り口まで出迎えに行った。

私も膝の上にいる猫を腕で抱え、入り口へ向かう。

入り口には、予想のとおり義父さんが立っていた。

……ただし眠っている五、六歳くらいの幼女を抱えて。

眠っている幼女を抱えて。

姉さんもその光景を目にして、その場で固まっている。

え、いや、何？誘拐？いや、義父さんだしそれは無いか。隠し子？

男やもめが続いていたわけだしその可能性はあるか。……有るか？娘に駄々甘な部分を除けば基本朴念仁の義父さんだぞ？ばれないように女を囲っているくらいなら後妻として娶るだろう。

そんな事を瞬間的に考えて、少し冷静になった。

「お父様の不潔！」

……姉さんは私ほど、冷静になれていなかったようだ。
泣きじやくり自室へ向けて走り出す姉さん。
それを止めようと大声で呼び止める義父さん。
その声に驚き飛び起き、ぐずり始める幼女。
それを呆然と見ている私。

久しぶりに家族が揃った夜は、そんな風に非常に混沌としながら始まったのだ。

第六話 Walking On Sunshine
—おひさま—

とりあえず義父さんと幼女に席についてもらう。

姉さんは部屋に引きこもってしまったためこの場にはいない。仕方ないので、私だけでも先に義父さんの話を聞いてしまおう。話を聞いて問題ないようだったら、姉さんの説得に行けば良いし。

簡単に方針を頭の中で決め、腕に抱えている猫をまだぐすぐす言っている幼女の膝に乗せ、二人の分のお茶を入れるために台所へ向かう。

お茶の用意ができて茶器を持って戻ると幼女は泣き止んでいて、膝の上で丸くなっている飼猫をおっかなびつくり撫でていた。

「この子と仲良くなれた？」

茶器を食卓に置いてから幼女の隣にしゃがんで、彼女の膝の上に乗っている猫を軽く撫でながら話しかける。

「……はい。この子、名前はなんて言うんですか？」

私がしゃがんだ時に一瞬身構えたようだったが、受け答えはしっかりとしている。礼儀もきちんとしているし、良家の子なのかな？頭に留めているオレンジ色のリボンが可愛らしい。

「王虎（わんふう）って言うんだ。虎縞だし、ここに来たばかりの時は王様みたいに偉そうだったからね」

まあ、十日もすると餌をあげていた私に懐いてくれるようになりましたが。ふつ、ちよろい。

この子は元々、いつの間にか□の屋敷に居着いてしまったのを義父さんから聞き、私が連れて帰ってきてもらったのだ。

当然、ネズミを捕える事を期待してだ。

ネズミは穀物を食い荒らす上に、疫病を蔓延させる害獣だ。見つけ次第駆除する必要がある。しかし、人間がネズミを捕らえるのは非常に難しい。まず速度では追いつけないし、弓で射るにしてもあの小ささではよほどの腕前が無いと当てるのは難しい。

そこで、猫や狐などのネズミを餌とする動物を家畜化して、ネズミ対策とするのが一般的だ。犬は狩猟のお供、不審者に対する番などに役立つが、猫は害獣駆除に役立つのだ。単なる愛玩動物ではない、十分役に立つ存在なのだ、と声を大にして主張しておく。

それにしてもかわいい奴め。うりうり。

「わんふー。 わんふー」

名前を呼びながら、耳の後ろを掻き始める少女。猫も気持ちいいだろう。耳をピクピクさせながらも、気持ちよさそうに目を閉じて大人しく丸くなっている。

私は立ち上がり、少女の頭を一撫でした。

その時、私は彼女の髪留めに刺繍が入っているのを見つけた。残念ながらどんな物が入っているかは分からなかったが、字のように見えた。

ちよつと気にはなったが、気にせず二人の分のお茶の用意を始めた。

お茶も用意できて、義父さんに話を聞く姿勢が整った。

「それじゃ、義父さん。 この子の事を聞かせてくれる?」

「ああ、分かった。 この子は、今回の討伐の最中に保護したんだ」

保護、か。となると、もう両親は他界してしまっているのだろう。

「そっか。 けど珍しいね。 義父さんがわざわざ子供を引き取るなんて」

「うむ……。 まあ少し事情が有ってだな」

そして、少女の方へ目を向ける義父さん。釣られて目を向けると、うとうとし始めている。子供って突然電池が切れたように眠り始めるよねえ。

とりあえずこのままでは可愛そうなので、私の部屋の寝台に寝かせておく事にしよう。王虎には私の頭の上に乗ってバランスを取ってもらって、少女を抱き上げて私の部屋に連れて行く。

「……いかがわしい事はしないよな?」

「……後で話し合おうか?」

声を低くして義父さんに答える。推定五歳児にいたずらするとか、

どんな鬼畜だ！

私の寝台へ彼女を寝かし、掛け布団をお腹にかけてあげて、枕もとの籠に王虎を入れる。

髪の毛飾り布も外して、枕元に置いてあげた。王虎が悪戯しないように、本の下敷きにしておく。その際に、先ほど気になった文字が見えた。何となく、その文字を記憶に留める努力をする。

そして食卓に戻り、義父さんにマジ説教を入れる。私の性癖は至つてノーマルです。幼女に欲情したりはしません。

その後、話に戻った。

「あの子は、泰山に居た儂の知り合いの娘だ」

「ふーん。 どういう知り合いかっていうのも聞いてもいい？」

「……」

何故口ごもる。

何故顔を逸らす。

「いや、な。 ほら、あれだ」

「えーっと、☒で関係を持っていたけど突然姿を消した女性の子供とか？」

場を和ませようと、恋愛小説などでありがちなロマンチック○な話を例えに出してみる。

「何故知っている!?!」

「本当にそうなの!?!」

適当にドラマチック○に感じるような話をでっち上げただけなのに！ 実際は小説より奇なりとはこの事か!?!

「う、む。 まあ、そんな感じでだな……」

義父さんが語る話をまとめるとこんな感じだ。

なんでも、あの幼女の母親は泰山郡のとある名族の娘だったらしい。☒に出向いたところ、素行の悪いごろつきに囲まれているところを義父さんが助けたらしい。 なんとというテンプレな。 少女マンガか！

元々箱入りに育てられていたらしく、危機を救ってくれた父にほれ込んでしまったらしい。 そしてそのまま☒にある屋敷に居ついてし

まっただらしい。いかに朴念仁と言えど長く男やもめだった義父さんが、若く魅力のある女性に迫られていつまでも草食でいられるはずもなく、関係を持ってしまったらしい。

その時には姉さんも大きくなっていただろうし、私を引き取ってもいただろう。

とりあえずそこまで聞いて一言言っておく。

「というか、その時点で紹介しようよ」

「お前はともかく、海の反応が読めなかった。もし仲がこじれたらと思うと、なかなか言い出せなくてな」

まあ、女の子は継母と仲がこじれる事って多々あるらしいな。

話は続く。

その後も仲睦まじく暮らしていたのだが、初めて関係を持つてからしばらくすると突然姿を消してしまったとの事だ。華燭の儀を正式に挙げていた訳でもないため、内縁の夫婦であったのも良くない方向へ働いた。彼女の実家が兗州泰山にあるのかも知っていて訪ねてもみたのだが、何しろ正式に夫婦となっていなかったため、門前払いを受けていたらしい。

まあ客観的に見て、可愛い娘を手籠めにした中年男だ。その家にとっては招かれざる客だったろう。そしてその人は、妻を亡くし再婚相手を探していた男性と結婚し、子供もできて幸せに暮らしていると、彼女の父親から聞かされたそうだ。

そして義父さんは、今まで娘さんを拘束していた事を頭を下げ謝罪したらしい。それからは少しでも彼女のためになればと、金銭や絹布などの援助はしていたようだ。

それから数年後、空さん達の家族だけではなく文嚮や宣高などの家族も続々と青州周辺から逃げ出してくる現状を憂慮し、義父さんはその人の家族たちに徐州に引っ越して来ないかと打診を繰り返していたらしい。結果から言うと、それは不首尾に終わってしまったらしいが。

そして、今回討伐した賊達はその人の暮らしていた領地で略奪した後、徐州へ南下してきたらしい。討伐に成功した後、捕虜とした者達

にその領地の人たちをどうしたのか聞いたところ、下卑た笑い口調でこう言われたらしい。

「ガキは売るために捕まえて牢に放り込んでいる。それ以外は全部殺した。女は犯した後にな。最後に良い思いをさせてやったんだ。俺たち良い奴だろ?」

気づいたら義父さんは十数名の捕虜の首を切り落とし、体中が返り血に染まっていたそうさ。

当然の結末だと思う。本当ならば法に従い裁くべきかもしれないが、法の運用をする人間のモラルが非常に低くなっている現状、正しく裁かれるかどうかは分からない。それならば、誰がなんと言おうと、私は義父さんの行動を絶対に支持する。

「……今の中華を見渡せばよくある話なのかもしれないけど、胸糞悪くなる話だね。で、その子供の中の一人があの子で、その人の娘さんって事?」

「ああ、あの子が着けている布の髪留めが、昔私が彼女へ贈った物だったからすぐに分かった」

「本人には母親の名前を確かめたんだよね?」

「ああ。母親の知り合いと分かると、素直についてきてくれたよ」

その領地の領主には事実関係を伝え、被害者を手厚く葬って欲しいと要請したそうさ。

当然だろう。

(しかし、なんか状況を鑑みるに……。)

少し、今聞いた情報から推論を組み立ててみる。

ちよつとお茶で口を湿らせてから、ちよつと質問してみる。

「あのさ、義父さん」

「ん?」

「あの娘さんって、その人の子供って事で間違いないんだよね? 母親の名前はあの子が口にしたの?」

「ああ。こちらから彼女の名前を出さずに、母親の名前を聞いたなら答えてくれたよ」

「そっか……」

その人の子供である事が確定であるならば。

「あの子ってさ、義父さんとの間にできた子供なんじゃない？」

あ、義父さん固まった。

「ば、馬鹿な事を言うな！ 彼女には旦那もいたんだぞ！ 私の子供のわけが無いだろう！」

「んー。これから話す事はあくまで状況から考えた推論だから間違えている可能性は十分に有り得るし、見当外れなのかもしれないけど、ちよつと話しても良い？」

「……まあ、聞くくらいなら」

それじゃ、推論を話しましょうかね。

「まずさ、その人が居なくなつた時って家が荒らされたりはせず、誘拐されたようには見えなかつたんだよね？」

「……ああ、何も盗られていなかったし、怪しい物音も近所で聞いた人はいなかったよ」

「それじゃあ、その人は自発的に出て行った。そう考えて間違い無いよね？」

「ああ、私もそう思う。その前日も特に喧嘩もしなかつたし一緒に笑っていたんだ」

「多分出て行った理由はさ、義父さんの子供を身ごもつたからだと思う」

「……いや、待て」

「とりあえず最後まで聞いて。質問は後で受け付けるからさ」

「……」

とりあえず、大人しく聞いてくれるようだ。

「既に義父さんに跡継ぎとして姉さんが居る事はその人も知っていた」

「ならば、もし子供ができた際に自分とその子はどうなるのか、そこが分かってしまったんだと思う」

「どうなるって……愛情を持って接していたに決まっていただろう」

「うん。多分その人も、義父さんが子供にそう接してくれることは分かっていたんだと思う。けど、その子供が原因で義父さんとの関係

にひびが入るのが嫌だったんじゃないかな」

「何？」

「その子供は義父さんの子供として認知されて、麿家の庇護を受ける事ができるようになる。きちんと麿家の継承権を持った上でね」

「自分に子供ができてしまったら、御家騒動の元となり義父さんに迷惑となってしまうのではないだろうか？ そう考えてしまったんだと思う」

「迷惑だなんて、そんな事思っわけ……！」

「まあ、そうなんだけどさ。義父さんだって、名家と言われる家がたびたび乗っ取りを受ける事があるのを知っているでしょう？」

「む……」

私を麿家で引き取った理由の一つがそれだ。私の実家の人間が全員死んでしまった場合、私を後継者として立てて、あの家の当主として私に相続させる。その後、私を傀儡として実権を握る。

そうする事は十分に可能なのだ。没落しているとはいえ、名家と謳われたあの家を分家格とする事ができるのは十分すぎるメリットとなる。

まあ、仮にそういう立場となったとしても、私は大人しく傀儡にされているつもりは無いのだが。

「自分の実家が愛する人の娘を殺すかもしれない。ましてその娘は、自分の愛する人が将来を囑望^{しよくぼう}してやまず、深い愛情を注いでいる事を知っていたんだ」

『私に子供ができてしまったら、あの人の娘は殺されてしまうかもしれない』それはとてつもない恐怖だったんじゃないかな。子供ができてしまった時に、逃げ出したくなってしまうくらいに」

「……」

「そして実家に戻ったら、すぐに婚姻をまとめたんだ。お腹にいる子供が義父さんとの子供では無い事にするために」

ここまで話終えて、自分の茶碗からお茶を飲み干す。

そして、義父さんは絞り出すように声を出した。

「それは全部お前の推論に過ぎないだろう？」

「まあ、そうなんだけどね。ただ、『あの子が義父さんの子供であり、その人の旦那さんも自分の子供では無いと知っていたんじゃない？』って証拠ならさつき見たよ」

「は？」

まあ、あれは間近で見ないと気づけないよな。

「あの子が着けていた、義父さんが贈った飾り布なんだけど。その人の真名を刺繍に入れて贈ったんじゃない？多分こういう字だと思うんだけど」

私は『橙日』の文字を、茶碗の底に残っていたお茶で指を湿らせ、机の上にその字を書く。

橙

日

真名である以上、死んだ後でもそれを呼ぶ事は許されないので文字として記述する。

「……ああ、その通りだ。あの子の飾り布を見たのか？」

「うん、さつき寝かしつけに行っただでしょ？その時に目に入ったんだ」

本当に偶然としか良いようがなかった。

「あの飾り布の裏にも文字があるのって、義父さん知ってた？」

「……待て、そんなのは知らんぞ。儂はそんな注文は職人にしていない」

「ああ、多分義父さんに貰った後に自分で刺繍したんだと思う。表の字に比べて、あんまり上手くなかったし」

書かれていた文字を、先ほど机に書いた場所の隣に記す。

橙 陸

日

陸は義父さんの真名だ。

義父さんはそれを見て絶句している。

「それも裏地とはいえ、わざわざ自分の真名の隣に来るように、義父さんの真名を刺繍していたんだ。何か特別な意味があると思って当然でしょ？」

まるで自分の居場所はそこだ、そう主張するかのよう。

旦那さんもその飾り布を目にする機会があっただろうし、すべて知った上で受け入れたんじゃないかと思う。

自分が同じ立場になった場合を考えると、非常に複雑な感情を覚えるのだが。その人はどうだったんだろうか？

「……その刺繍だって、儂の傍から居なくなる前に入れたのかもしれないではないか」

「その可能性は低いと思うよ」

「何故そう言える？」

んー。これは本当は言って良いのかどうか分からないんだけど。

まだ本人から真名を聞いていない以上、これは著しくグレイゾーンな行為だろう。しかも限りなく黒い。

「あの飾り布にはさ、もう一つ別の刺繍が有ったんだよ。合計三つだね」

「……」

義父さんは答えを渴望するかのよう、私に視線を向けている。

「もう一つの書いてある字はこれだったよ」

私は、その字を二つ並べて書いた机の文字の、一段下の二文字の間に記載した。

義父さんはしばらくその字を眺めていたが、意味を理解したのか静かに涙を流し始めた。

あの子が自分の子供である事と、その母親が自分の事を愛し続けていてくれた事を理解できたからだろう。

私は下を向き、机に先ほど私が書いた文字もう一度見た。

橙 陸

日

天

明

橙日は日光の事を指すのだろう。夜が明けて日光が大地に注ぎ始める事、それを何というだろうか？それは『曙』もしくは『暁』と呼ばれる。

それと同じ意味を持つ単語として『天明』という物があるのだ。
まず間違いないだろうがあの子の真名がこれだとしたら、その由来
がどこから来たのかは明白だろう。

太陽が昇り、大地を照らし出す。そんな名前を持つ子なんだ、あの
娘さんは。義父さんと関係が無いはずがない。

私は席を立ち、お茶のお代わりを入れてくる事にした。義父さんが
泣き止むまでの間、できるだけ時間をかけてゆっくりと。

「すまん、取り乱した」

「いや、気にしないでいいよ」

お茶を入れて戻ってくると、義父さんは泣き止んでいた。表情にも
翳りは無く、どこか晴れ晴れとしていた。痕跡として残るのは、真っ
赤に充血した目くらの物だ。

ところで、聞きそびれていたが。

「あの娘さんの名前って何て言うの？ さっきの話の中にも母親の姓
は出てこなかったし」

「あ、すまん。既に知っているつもりで話していたな」

お茶を吹いて冷ましてから、ゆっくりと口に含み義父さんの言葉を
聞く。

「あの子は、姓は羊、名は祐、字は叔子という」

その言葉を聞いた瞬間、お茶が気管に入り激しくむせた。

（ちよつ、井戸ダイバーかと思いきや羊公かよ！ 三国時代末期の名
将がなんでこの時代に既に生まれてるんだよ！）

私は咳き込みながらも、あまりにもありえなさ過ぎる現実に胸中で
激しくツツコミを入れ続けていた。

第七話 When You're Smiling

—いつも心に太陽を—

翌朝起きると、まだ叔子は寝台で眠っていた。

叔子に寝台を譲っていたので、私は床に敷き布を敷いて眠った。間違っても同じ寝台で寝てはいない。

(しかし、この娘が羊祜とはなあ)

寝ている姿を見ていると、とてもそうは見えん。

前世で読んだ三国志の羊祜についてを思い出す。

姓は羊、名は祜、字は叔子。

三国時代の末期に魏と、その後を継いだ晋に仕えた名将だ。

対呉の前線司令官として活躍している。

何よりも特筆すべきは、内政手腕に優れて民を慰撫し、田畑の開拓を進めて大きく兵糧の蓄えを作る等の内政にも力を発揮したことだろう。対呉の最前線にも関わらず、十年の蓄えを作るってなんだよ。

また軍略にも優れていたらしい。具体的に敗北として残っているのは、歩闡の反乱に伴う西陵攻防戦くらいではないだろうか？それだって呉の領地内における戦いであったため、晋領内には一歩も足を踏み入れさせていない。

また、戦略としては専ら防戦に努め、むやみに呉と紛争を起こす事を避けている。法規を遵守した徳治政治を行った事で、呉からの民の流入が多く起こったらしい。

某ストラテジーゲームでいうところの文化侵略だよなあ、これ。

さらに呉の将兵の扱いにも気を遣い、投降して来やすくなるようにしている。呉将を斬った際にも丁重に遺骸を送り返す等しているため、呉将にも慕われていた。

あとは、呉将陸抗との「陸羊之交」も有名だろう。互いに薬と酒を送りあったが、どちらも配下に毒味をさせずにそのまま飲んでいる。相手が毒などという手段を取らない、そう固く信じるからこそできる事なのだろう。

腐った嗜好を持つ女性達が実に好みそうな逸話だ。

さりとて、戦争ではガチでやりあっていたりもするわけだし、互いに公私の分別の有る人間だったのだろう。

羊祜が没した時には、配下や領民だけではなく呉の将兵も揃って涙したという。それだけ慕われていたという事なのだろう。

敵に疎まれる、恐れられる武将は数多くいる。しかし敵に死んだ後に惜しまれる将はどれだけの数がいるのだろうか。三国志だと曹操に惜しまれた関羽くらいか？

そういう逸話を持っていた人物なのである。羊祜と言う武将は。

さて、そんな人物と同じ名前を持つ娘さんの様子だが、夢見が悪いのか眉を寄せている。起こしてあげた方が良いだろうか？

そう悩んでいると、私と同じように目を覚ましたらしい王虎が、寝ていた籠から叔子の上へと移動した。

そしてそのまま、叔子の顔に前足でストンピングを始める。マツサージというか、麵を打つ際の動作と言うか、そんな感じで踏みつけられている。

叔子も寝返りする事で王虎を自分の体から落とすが、王虎は落とされる度に乗り直す。

うん。なかなか粘着質なようで何よりだ。

そうこうしているうちに、遂に叔子が目を覚ました。が、目を開けると目の前に猫の顔があり、自分の顔が両前足で踏まれている現状に戸惑っているのか体が固まっている。

いつまでもそうしていてもしょうがないので、私は手を伸ばして王虎を抱き抱えた。

王虎がどいた後、自分が何処にいるか分からなかったのか、少しキョロキョロとしていたが私と目が合うと、昨日自分が義父さんに連れてこられた家だと分かったようだ。

「おはよう」

機先を制して挨拶を試してみる。

「お、おはようございます」

お、きちんと返事を返してくるのか。混乱していても挨拶を返して

これるのは、きちんとそういう教育を受けてきたからだろう。

「昨日の事は覚えている？」

「はい。けど、わんふーをおひぎにのせてなでていたのはおぼえてるんですけど……。あの、何で私ここでねてるんですか？」

「昨日義父さんと話をし始めるとすぐに寝ちやったから、僕の寝台に運んで寝かしたんだよ」

流石に小さい子を床に寝かせるのはだめだろう。

「ご、ごめんなさい。寝台使っちゃって。えっと、あの……」

「ん？ ……ああ、そういえば自己紹介してなかったね。僕は麿芳、字は子方。それから寝台に運んだのは僕なんだから謝る必要は無いよ」

「あ、羊祐、字は叔子と言います。えっと、子方さん。ありがとうございます
ございます」

ふむ、口調が固いな。もうちょっと軽い感じが良い。

「敬語は使わないで良いよ。これからしばらく一緒に暮らす事になるし、肩肘張つてると疲れちゃうでしょ」

「け、けど年上の人にはけーごをつかいなさいって教わりましたから」
「ふむ」

かなりきちんと躰がされているんだな。

とはいえ、そんな対応が続くと私もこの娘も気がやすまらないだろう。なら少し強引でも距離を縮めに行くべきだろう。

「ふむ。それじゃあ私に慣れるためにも、呼び方から変えてみようか」

「よびかたですか？」

「うん。じゃあ、呼び捨て……は難しいか」

こくこくと頷く叔子。それじゃあ、ハードルを下げて。

「お兄ちゃん、お兄さん、兄貴、辺りで行ってみようか。さあ、好きなのを選んで呼んでみよう」

「え、えーっと。……子方お兄ちゃん？」

「そうそう。それじゃそれに続けて私へ質問とか、して欲しい事を続けて言ってみよう」

「えっと、じゃあ。 お兄ちゃん。 私のかみに有ったかざり布は知りませんか？」

「知りませんか、 じゃなくて知らない？の方が良いかな」

「え、 えっとかざり布知らない？」

「それなら、 王虎がいたずらしないように、 本の下にしておいたよ」
手を伸ばし、 本を持ち上げる。 シワにならないようにまっすぐにしてから下敷きにしておいたから問題ないだろう。

渡してあげると、 明らかにほっとした表情を浮かべた。

「結んであげ……るのは、 身を清めてからの方が良いかな。 布も汚れちゃうし」

「えっと、 うん。 体ふきたいで……ふきたいよ？」

わざわざ敬語を使おうとして言い直すとは、 律儀な子だ。 別に叱つたりするつもりは無いのだが。

「それじゃ、 起きて居間に行こうか。 君の着替えは姉さんがお古を用意してくれてると思うから」

「ねえさん？」

「あー、 僕の姉さん。 これからは君のお姉ちゃんにもなるのかな」
ハテナマークを頭にいっぱい出してそうな顔をしている。

まあ、 会わせた方が早かろう。

叔子を待たせてさっさと着替えてしまう。 どうせ相手は子供なのだから、 見られても気にしないし、 気にされないだろう。

着替え終えて、 居間へ向かう。 王虎は私たちの後ろをトコトコ着いてくる。

居間に入ると、 義父さんと姉さんはもう起きていて向かい合って話をしていた。

というか、 説教されていた。

私たちが部屋に入ってきた事に気づいたのか、 涙目で俯いていた姉さんがこちらを向いた。

「あ、 おはよう隣君。 そして、 お願い助けて!!」

「まだ話は終わっていないぞ、 海。 さあ、 なんで父を困らせるのか言ってみなさい」

「こ、困らせるつもりはないよ！　ただ麟君と離ればなれになりたく
なかっただけだよ！」

ああ、そういうえばその事について、昨日はまったく話していなかつ
たな。

それを今日姉さんから聞いて、義父さんが呆れると同時にお説教を
始めたのだろう。

それを見て叔子はおろおろしている。頭を撫でれば落ち着くかな
？

ちなみに義父さんの説教は、暴力どころか厳しい口調での叱責も飛
んでこない。

しかし、とにかく理詰めで納得できない部分があるなら何度も説明
を求め、おかしい部分を徹底的に修正する。

つまりは長くて、しつこい。時間かかるだろうし、天明を洗い場ま
で連れて行っちゃおうかな。

「二人ともおはよう。　義父さん、まだかかりそう？　そうなら先に
叔子の体を綺麗にしてあげたいんだけど」

「ああ、そうしてあげてくれ。お前が朝食を作り終えるまでには終わ
るだろう。　そこに海の昔の服があるから、それに着替えさせてあげ
てくれ」

「了解」

「り、麟君!!　助けてくれないの!?!」

少しは反省してください。無事を祈っています。

そういう思いを込めて、姉さんへ頭下げて、叔子を連れて洗い場へ
向かう。

「麟君のバカーツ!!」

酷い言われようだ。

その言葉に、軽く一回肩をすくめてから叔子を伴い居間を出た。

叔子と会話しながら中庭の井戸まで歩く。

「えっと……大丈夫なの?」

「まあ、今回は姉さんも悪いし怒られてもらおう」

「あのお姉ちゃんの名前はなんて言うんで……言うの?」

「糜竺、字は子仲だね。昨日話した時には、張り切って叔子の面倒を見るって言ってたよ。できれば仲良くね」

「うん。頑張って仲良くするね」

昨日叔子の名前を聞いて吃驚した後、部屋に閉じ籠っていた姉さんを説得して居間に来てもらい、先ほど義父さんに聞いた話を姉さんにした。

姉さんは元々情の篤い人である。話を聞き終えた後、叔子が親を亡くした事に涙を流し、賊の行動に激しく憤った。義父さんの子供かもしれないという点には、複雑な表情を見せていたが、それでも自分の妹として扱おうと義父さんと私の前で宣言してみせた。猫可愛がりする気満々ですね。分かります。

井戸に着いたので、木枠に仕切りの布をかけて、四方から見えないようにする。最近姉さんが体を清めるときに、わざわざ覗きに来るようになった幼馴染みという名の馬鹿二人への対策として、私が作った即席のシャワーカーテンだ。

幼いとはいえ女の子。こういうところはしっかりと扱う事にする。余談だが、空さんにも頼まれたため同じ物を孫家にも設置している。

あー、それにしても湯船が欲しい。今の季節ならまだ湯に浸かる必要はないが、冬になる前に作りたい。薪代が難点だけど、衛生を保つためにも重要な点になる。なんとか薪代融通できんもんなあ。

「あっー！」

「どうかした?」

よそ事を考えながら準備をしていたら、叔子が声を上げたのでそちらを見る。

王虎がカーテンをくぐって逃げていくのが見えた。

「にげちゃった……」

「あの子、水が嫌いなんだよ。水浴び終えたらすぐに戻ってくると思うよ」

そう言うと、こくこく頷いて納得してくれた。

仕切りの準備ができたため、服を脱いでもらう。私も脱ぐのを手

伝ってあげる。私は洗ってあげるだけなので服を脱がない。この季節なので、多少濡れてもすぐ乾くだろう。

全部脱ぎ終えた叔子を井戸の隣にある椅子に座らせる。井戸の横にかけてあるヘチマを取り、石鹼を泡立てる。

そう、石鹼である。石鹼は義父さんに引き取られてからすぐに作った。極端な話、材料として油と灰があれば作ることができるのだ。潰した豚の油を使用したために、最初に作った時には凄まじい臭いだった。そりやもう、苦情が殺到した。

しかも、材料や製法は私も知っていたが作った事が無かったために、完全に手探りで製法を自分で煮詰めていく必要があった。苦労の甲斐があり、今はレシピを確立する事ができている。

今では、石鹼を使った時の汚れの落ちに有効性が見出だされたために、村内で当番制で順番に作るようになっていた。立派に村の特産品として、お金を稼げている。

まあ、取り扱っているのは糜家配下の商家なわけですが。おかげで我が家の財政状況も右肩上がりだ。

ローズマリーの増産が叶ったあかつきには、ローズマリーオイルで作ってみようと考えている。

さて、ヘチマで叔子を洗い始める。ヘチマたわしは力を入れすぎると皮が剥けたのか、と思うくらい痛いので力加減に気を付ける。

腕を洗って、首を洗って、背中を洗う。叔子は初めて見る石鹼の泡に興味深々のようだ。

体の後ろ半分は洗い終えたので、前面は自分で洗ってもらおう。「ぶくぶくー。あわあわー」と言いながら楽しそうに自分の体を磨いている。

体を洗い終えたので、いったん水で洗い流す。冷たいだろうから、少しずつ流していく。それでも冷たそうに身を竦めている。さつさと終わらせてあげよう。

体を流し終えたので、今度は植物油で作った石鹼で髪の毛を洗い始める。叔子には目に泡が入らないように閉じてもらっている。

洗い終えて髪の毛から泡を流してあげる。

仕上げに椿から作った油で頭皮マッサージしてやる。

椿は元々隣の村で作っていたので、石鹼とトレードで椿油を手に入っていた。

髪の毛を洗ったのも椿油の石鹼だ。製法は教えずに、椿油を使った石鹼として隣村には買い取って貰っている。そして、それをさらに行商人へ売る、と。どちらも損をしないWin-Winな関係を築いている。

椿油は昔から整髪料として使用されていた。前世でも、洗った後の最後の仕上げに使用する人もいたくらいには普及していた。私は前世でも男だったために使ったことがない。なので本当に効果が有るのかは知らないが、三歳年下だった従妹は愛用していた。あの娘は綺麗な髪の毛をしていたので、一定の効果はあったのだろうと思っている。

さて、頭皮マッサージも終わったので水で流す。大きい布で体と髪を拭いてあげて、服を着る手伝いをしてあげる。

姉さんの好む服装は、活発な性格とあいまって動きやすいミニスカートが多い。この服も姉さんが好きな色である、水色を基調とした動きやすそうな服だ。

この娘は大人しいから、空さんみたいに落ち着いた格好の方が似合うかもしれないな。

本人も裾が短いのが気になるのか、裾を手で弄ったり、引っ張ったりしている。

「裾が短いと落ち着かない？」

「え、と。 少しだけ」

空さんに頼んで昔の服をもらえないか頼んでみようかな。彼女はロングスカートをいっぱい持っていたはずだ。この子の気に入るものもあるかもしれない。

「ごめんね。 別の服が用意できるまで我慢して」

「え、えと。 このふくでも十分ですよ。 とってもかわいいですし」

「まあ、確かに似合っていて可愛いと思うけど、裾の長い服が好きな友達がいるから、その人に昔の服見せてもらおう。 気に入るのがあるか

もしれないし」

しばらく考えた後、おずおずと頷いた。うん。子供は素直なのが一番だね。

それから、仕上げとして例の橙色のリボンで髪の毛を結ってあげる。

うん。綺麗になった。

叔子はリボンが自分の頭に戻ったのに安心したのか、嬉しそうに結った髪の毛の先を弄っている。

「それじゃ、居間に戻ろうか。 お腹空いたでしょ」

「うん。 お腹ぺこぺこ」

手を差し伸べると嬉しそうに握り返してきた。すっかり懐いてくれたようだ。

叔子の歩幅に合わせてゆっくりと歩く。いつの間にか王虎も戻ってきて、私たちの後を着いてきている。

新しい家族が増えるのは嬉しい事だし、その家族と仲良くできるならそれは幸せな事だよな。

義父さんと姉さんから受けた恩への恩送りには丁度いいだろう。

叔子の方をじっと見てそう考えていると、叔子も見られている事に気づいたのか、不思議そうに小首を傾げてこちらへ視線を向けてきた。

「これからよろしくね、叔子」

「……はい、こちらこそよろしくおねがいします。 お兄ちゃん」

私の言葉に少し驚いた表情を見せた後、この家に来て、初めて満面の笑顔を浮かべてくれた。真名が指し示すような太陽のような朗らかな笑顔を。

その笑顔を見て、叔子とは仲良くやっていけるだろうと確信する事ができた。

こんなにも私を信頼してくれるのであれば、全力でその信頼に報いようと思う。

そうやってまた一つ、私を守りたいと思える物が増えたのだった。

第八話 Take Me Home, Country Road — 帰郷 —

叔子の身だしなみを整えてあげた後居間に戻ると、お説教は既に終わっているようだった。予定より早くお説教は終わったが、精魂尽き果てたように食卓に突つ伏している姉さんへ叔子を紹介する。

疲れきつていてもきちんと背筋を伸ばして姿勢を正し、凛とした口調で自己紹介する姉さんマジ男前。怒られるから決して口には出せんが。

二人にはおしゃべりをしてもらい、私は厨房へ入り朝食を作り始める。とは言っても、昨日の夕食に食べた餅ヒンと具が残っているから、それを食べてもらおう。

鍋に火をかけて具材を軽く炒めて温め直す。あと、簡単ではあるがにんにくのスープも作るか。油代わりに豚バラを少々刻んで炒めて、みじん切りにしたにんにくを後から入れる。それに水を入れて煮立てて刻みネギを散らせれば完成だ。仕上げに塩で味を整えてあげれば良い。

後は卵があるので、中華鍋でだし巻き卵を作る。流石に卵焼き用フライパンを使った時ほどきれいに形は整わないが、それでも味は十分美味しい、はずだ。周りの人間達曰く、私の作るおかずで一番美味しいらしい。前世から受け継いだ自慢の逸品だしな！

さて、出来上がった料理を食卓に並べていく。一般家庭よりは豪華だが、きちんと栄養素取ろうと思うならこれくらいは必要なんだよね……。厨房を預かる身としては食事はバランスよくしなくては。

それじゃ、揃いましたし頂きましょうか。
手を合わせ、いただきます、と礼をする。まあ、するのは私だけなんだが。

向かいの席に座る叔子は、自己申告していたようにお腹が空いていたようだ。おかずを色々試しては表情を目まぐるしく変えている。辛い物を食べた時以外は、辛そうな表情は浮かべていないので、あま

り好き嫌いは無いのだろう。だけど、落ち着いて食べないと喉に詰まるよ？

そんなおかずの中でも、やはりというべきかだし巻き卵が気に入ったようだ。凄く美味しそうに食べている。私自慢の一品を美味しそうに食べてくれているだけであるが、そういう光景は作り手としては嬉しい限りだ。

そして姉さんかというと叔子に食事をよそってあげたり、届かない場所にある皿を目の前に持ってきてあげたりと、駄々甘お姉ちゃんっぷりを発揮している。

叔子も最初は戸惑っていたが、姉さんが好意でやってくれている事に気づいたのか、途中からは笑顔を姉さんに向けて、お礼を口にしていった。

非常に微笑ましい光景ではある。しかし、この子が将来的に「私は覚醒をあと二回残しています。その意味が分かりますか？」とか言い出すのか……。

だし巻き卵を食べ終えてしまい、切なそうに何も乗っていない皿へと目を落としている姿を見ると、とてもそうは見えん。

とりあえず、私の皿に残っているだし巻き卵をまとめて彼女の皿に移してやる。

あ、こつちを見て目を輝かせながらお礼を言ってもらえた。うむ、癒される。

姉さんは羨ましそうに叔子のお皿を見ないの。意地汚い。

まあ、そんな風に新しい家族と交流したり、和みつつ朝食は終わった。

「さて、腹も膨れて落ち着いたところで、今後の事について話そうと思う」

朝食を食べ終えて、食後のお茶を入れたところで義父さんがそう切り出してきた。

キョロキョロして、何が始まるのか分かっていない叔子の膝の上に王虎を乗せてあげる。そうすると、嬉しそうに「わんぷー。 わんぷー」と呼びながら猫の喉をくすぐり始めた。

それを見て和んだ後、私はやりたい事を口にした。

「とりあえず、はちみつ生産したい」

「……待て、いきなり何の話だ？」

「今後の事についてでしょ？」

義父さんと顔を見合わせて互いに不思議そうな顔をする。

「あれ？今後の村の発展についてだよね？」

「いや、そうではなくてだな。お前と海の仕官についてだ」

「……ん？それはもうしばらく後になるって話じゃなかったっけ？」

確か、私はもうしばらくやりたい放題（超意識）にやらせてくれるって話だった気が。

「少し状況が変わってな。お前が仕官するのがまずかった理由は分かるな？」

「僕の生家でしょ？ 変に刺激して暴発されても困るから、大人しくしておくようになって」

ここで、私の生家と糜家の関係について軽く補足しておこう。

私の生家が徐州の没落名家というのは、以前問わず語りで話した通りだ。

そして、二年前に家督を継承した現在の当主殿（私の母の兄）は名家にふさわしいほどの気位を持ってしていると聞いている。

……そう気位だけなのだ。正直有能ではなく、無役生活を続けているらしい。

そんな状況であっても、働かずとも糜家からの援助金が出ているため余裕ある生活はできているらしい。私の実父であるあの男がやらかした事に対する慰謝料という名目だ。

そんな状況で私が仕官したりしたら、「私は仕官の誘いが無いのに甥が仕官するとは！ 私の心が傷ついた、誠意を見せろ！」などと嘯きながら金をさらにせびり出すだろう。

そんな状況でもあの家と繋がりを断てないのは、ひとえに実父であるあの屑がやらかしたせいだ。

屑の話は、少なからず徐州の上流層に広がっている。正確に言うとな、生家が率先として広めた。援助をしなくては誠意を見せていな

い、そういう空気を作るために。

そんな状況であったために、麿家は何かしら援助を続けなくては上流階級内でそっぽを向かれるはずなのだが。

正直これに関して、すぐに世論形成した前当主殿の手腕は大した物だと感心こそすれど、恨む気持ちはまったく無い。あの屑がやらかしたのは事実だからだ。

「その状況が変わったと?」

「ああ、現当主が変わってからな」

それじゃ、仕官しても問題無くなつたのか。

そういう意味では、姉さんが雒陽行きを断つたのは妙手が変わるな。まあ義父さんの上司（子会社社長クラス）の誘いを断っているのだから、説教されるのは妥当なのだが。

「ただ、今度は仕官する前に完全に縁切りをする必要が出てきた。

というか、絶対に必要な条件になっているな。だからこの後、絶縁の話をつけに行くぞ」

「はい?」

どういう事さ、それ?

姉さんと一緒に不思議そうな顔を義父さんに向ける。

それを受けて、義父さんはその変化の内容について話し出す。

そして私と姉さんはそのあんまりな内容に頭を抱える事になる。

叔子はよく分からないようで首をかしげていた。

「それって麿家にも影響あるんじゃないの? 私たちまでそんな事で巻き込まれるのは嫌だよ?」

「ああ、それに関しては州牧様に我が家は関係ない事を説明済みだ。

ご理解頂けているから、いきなり問題になるような事はない。このまま関係が続いているとどうなるかは分からんがな」

「そりゃ縁切りも必須になるわ。なんでそんな事を……」

「なんか、敬われたかつたらしいぞ」

「ばっ……ばっかじゃねーの!」

思わず素で感想が出てしまった。

姉さんも声こそ出さないが呆れきった表情をしている。

ま、まあ状況の変化は理解した。

あの家への援助が糜家の負担になつていいる現状、関係を清算できるのは悪い話ではない。無いのだが……。

「やっぱり複雑だね」

過ごしていた時期の記憶が無い。とはいえ、それでもやはり生家と繋がりが無くなるというのは複雑な気持ちだ。

ああ、大丈夫だから姉さん。そんなに心配そうな顔をしなくても私は大丈夫だよ。

「すまん、隣には負担をかける。さらに負担をかけるよう申し訳ないが、実際の交渉には隣も来てくれ」

「あれ？ 僕も行くの？」

そもそも、私が行つて良いのか？ 門前払いされそうな気がするんだけど。

「ああ、構わない。むしろお前が必要だと思つている」

ふむ、それなら良いんだけどさ。それじゃあ私も行く事にしますかね。ちなみにどういう部分が必要とされてるんだ？

「性格の悪さと悪知恵が働く部分、それから図太く自分の意見を主張し続けられる点だな」

清々しいくらい誉める気がまったく無いな!!

「まあそれは……あんまり良くないけど黙殺するとして、いつ出発するの？ それに合わせて準備するけど」

「今すぐ準備を始めて、出来次第すぐだ」

四十秒で支度しな！ そんな幻聴が聞こえた。

「また、急だね。 急ぐ理由はわかるけどさ。 先触れ出して日程調整とかしないで良いの？」

「どうせ出しても、あの当主殿は返事を書き出すまでに十日はかかる。 だったら移動した後に宿で待機している方が日程の短縮に繋がる」

「十日って……」

そんなんだから仕官要請来ないんじゃないか？

そんなに仕事にルーズで大役は任せられんדר。

「義父さんはその間仕事は？」

「……休むしかあるまい。このところの遠征で仕事が溜まっているのだがなあ」

「ご愁傷さまです。戻る時に□に寄るだろうから、その時書類仕事は手伝う事にするよ。まあ、最初から義父さんの中では頭数に入っているのだろうが。」

「さて、では隣は遠出するための準備を。徐州内とはいえ、数日かかるから着替えは多目に用意しておくように。あとはこの季節だから大丈夫だろうが、念のため防寒具も準備を。道中の食料の準備もしておいてくれ。海と叔子は朝食の片付けを頼む」

「御意」

椅子に座りながらも、姉さんと一緒に義父さんへ向けて拝礼をする。

一応家長だからこういう決定には礼を尽くさないよと。

私たちが顔を上げると不思議そうに小首をかしげながら、淑子も見よう見まねで手だけ拝礼の形を作っている。

なんだ、この可愛い生き物。

と、そんな会話を家でしてから早数日。私と義父さんは文嚮（徐盛の字）と宣高（臧覇の字）の父親を護衛に付けて、私の生家がある淮陰の町に到着した。

二人とも、結構な強面で見た感じはその筋の人に見える。まあ、話してみると結構気さくで、信義に厚い人たちなのだが。侠とはこういう人たちの事を言うのだろう。

あの二人の父親だけあって結構武の腕が立つので、遠出する際には報酬を支払い護衛をお願いしている。しかし、姉さん達への息子の行動に冷や汗しきりになりながら、義父さんと接しているのは非常に心苦しい。

文嚮、宣高。あまり親御さんに迷惑かけてやるなよ……。

それから義父さんと私は、東海郡から移動する間にどのように交渉を進めていくかを話し合い、交渉の方針と戦術を決めている。

上手くいくと良いんだけど。

それから数日間を宿で待機して、ようやく生家の当主殿と会う約束をする事ができた。援助者に対する態度じゃねーぞ、これ。

そしてやつと今日は約束の日だ。宿から歩く事十数分、私たちは目的地である私の生まれた家へとたどり着いた。屋敷はそれほど大きくは無いがよく手入れがされているようで、壁のひびや瓦の欠損等を見つける事はできなかった。記憶が無いから仕方が無いのだが、やはり感慨は少しも浮かんで来なかった。私を産んで死んでしまった母親の事を考えると、少しそんな自分が嫌になる。

そんな気持ちを切り替えるように、首を軽く振ってから正面へと向き直る。

その屋敷の前に門番が立っているの、義父さんと彼の元へ向かった。

ちなみに私はわざと粗末な服装をしている。義父さんの連れてくる下働きの者に見えるようにだ。土産物として持ってきた酒壺を抱えているため、このまま屋敷の中まで上がるつもりだ。途中で止められても、その壺に触る事まかりならんと義父さんが無理やり押し通す予定だ。

さて、門番をしている男性は私たちの姿を認め、誰何の声を放った。「ここは『歩家』の屋敷だ。一体如何なる用向きか」

後年、私はこの時の事を何度も思い出す事になる。

この時に起きた一連の出来事、さらに出会った人々の存在は、間違いなく私にとって大きな分岐点だったのだと。

しかし当然の事ながら当時の私は、そんな出来事がこの後起こるなど知っているはずも無かったのである。

第九話 Money Money Money |
牛歩戦術 |

「私は徐州糜家の当主、糜子伯と申す。歩家の当主殿に話が有つて伺つた。取次ぎを願いたい」

歩家を守っている門番に誰何の声をかけられたため、義父さんがそれに答える。その間私は地面に跪き、頭を下げている。

「しばし待たれよ。今お伺いを立ててくる」

そう言つて門番は慌てて駆けていった。

陶州牧様の股肱の臣として知られているのか、歩家の金づるとして知られているのか、微妙に気になるところではあるな。

果てさて、どれくらい待たされる事やら。

護衛をしてもらっている二人には、申し訳ないが不測の事態に備えて玄関口で待機してもらおう事になる。この空いた時間で頭を下げてくださいしておく。二人は微妙な表情を浮かべて顔を見合わせていた。何だろうか？

果たして、家の中に通されたのは優に一時間は経ってからだった。いつもの事だと来る途中に聞かされていたが、本気で呆れる。

どうやら、賓客を平気で待たせるほど余裕を持つてる俺凄めというアピールらしい。しかも我々に対してだけではなく、他の賓客に対してもやっているらしい。

馬鹿なの？死ぬの？

どう考えても、客を待たせている事で自分の器の小ささを露呈しているだけだろ、それ。

持つてきた手土産を抱えて、義父さんと共に先導する家人に付いて歩く。そして、この家人が明らかにこちらを見下している雰囲気を出している。上^{かみ}を学^{しも}ぶ下とは良く言った物だ。

そりや家も没落するだろうな。仮に数代前に借金を作った当主が居なかつたとしても、現在の当主で同じ状態になっていただろう。

胸中でそう考えて嘆息しながら歩いていると、当主の待っている部

屋へたどり着いたらしい。

私は部屋に入ると、土産を机の上に置いた。その後は部屋の後ろの方で静かに跪き、顔を伏せておく。

……っーか、自分の命綱握っている相手が来ているの分かっているのに、何で両隣に女を侍らせているんだよ。手の位置が女の尻にあるのは、見せ付けているつもりなのか？そんなド派手な色の際どい服を着ている女どもを侍らせてもなあ。あんたに魅力があるのではなく、あんたが払う金に魅力があると思っているのが有り有りとは分かるし、羨ましくもなんとも無いぞ。

あー、あれだ。こいつ、誰かに似てると思ったたら某ロボットアニメの敵役のキャラに似てるのか。これからはブッチャーと呼ぶ事しよう。

この時点で、ブッチャー……もとい歩家当主の評価はストップ安となった。

「ようこそ参られた、晃殿」

……阿呆か、こいつは。

その言葉にさらに呆れてしまう。

客として来た人間に対して、名前で呼びかけるなんて正気の人間にする事ではない。

下を向いたままちらつと相手の顔を上目遣いに確認すると、この距離からでも分かるくらいに顔が赤かった。相手の真名を知っていたら相手の許可無く呼びだしそんな雰囲気だ。

(あー、うん。酔っ払ってるのか。)

既にストップ安でこれ以上下がる事が無いかと思つてた評価が更に下がった。話には聞いていたが、これはとんでもない愚物だ。

あの屑から暴力性を抜いたらこんな感じになるのではないだろうか。

まあ、実父に当たるあのクズを追い出したのは数年前に没した先代当主であり、今は代替わりしてこいつが当主をやっているらしい。ちなみにこいつは実父であるあの男と気が合い、義兄弟の間柄になっていたらしい。

……ああ、うん。あれと気が合うって時点でもうこいつもクズ確定だったね。変な希望を持って悪かったよ。

「ご無沙汰しておりました、歩淑徳殿」

「本日は如何なる用向きで参られたのか？」

「今年作った酒の出来が良かったので届けに参った。しばらく訪れる事ができなかったなので、顔を見たいというのもあったのでな」

「おお、晁殿の持つてくる酒は非常に質が良いからう。ほら、お前達飲め飲め」

ブツチャーはだらしく笑い、土産として持つてきた酒を女たちに勧める。

いかん、もう帰りたくなってきたんだが。

自分から来ると言い出したとはいえ、これは辛い。

よく義父さんもこんなのと十年以上付き合いを維持できたな。

「うむ、では酒も受け取ったしもう帰っていいぞ」

しっしつと、犬を追い払うように手を動かして私たちへ退室するよ
うに告げるブツチャー。

……仮にあの男と一緒に追い出されずにこの家に残れたとしても、
これが居る以上酷い目に遭っていたのに変わりは無かったんじやな
いかと思えてきた。

「お待ちください。今日はそれ以外にもお話があるので」

「儂には無い。さっさと出て行くが良い」

そう言って、再度退室を促すブツチャー。

それにくすくすと笑う女達。

物凄く不快だ。

「では、提案に対してご了承承頂けたと判断致します。本日はお時間を
割いて頂きありがとうございました」

「……待て。もしかして金がかかる話なのか？」

まず気にするのはそこなのか。まあ、話を聞く気になったみたいだ
から良いんだけどさ。いや、良くないのか。そのまま黙って援助を切
る事ができなくなった。

「いえ、今年をもつて当家より歩家に行っている援助を終了するという

提案です」

義父さんが話している内容をすぐには理解できなかったのか、一拍置いてから叫んだ。

「ふ、ふ、ふざけるな！ そんな事が認められるわけなからう!!」

女達は不安そうに豚に寄り添う。あなた達にとつても死活問題ですしね。

「いえ、認めて頂きます。既に当家からの援助の半分以上を他家に渡しているのは調べがついております。で、ある以上すでに歩家は危機敵状況からは脱していると判断しております」

「いやいや、糜家からの援助が無くてはまだまだ立ち行かん！ それもこれも、貴様の弟が我が家の資産を食いつぶしたからであろう!」

いや、それ嘘だろう。つーか、他家の援助のために金を横流ししている理由になつてないんだが。

「それはこれまでの援助で既に完済し終えていると思いませんか?」

「いや、かかった金銭の問題ではない! これまで我が家の受け続けた苦痛の代価を受け取っているに過ぎぬ!」

いや、あの男が使ったからその分の金を返せつてきつき言つてなかつたか?

だんだんと支離滅裂になってきたぞ。

というか、お前はあの男と一緒に遊び歩いていた側だろうが。何も苦勞していないだろ。

「ならば、受けた苦痛は金銭により購う事ができると、そうお考えですか?」

「ああ、その通りだ! 貴様の弟に味合わされた苦痛の分を払い終えるまでは、変わらず援助してもらおうぞ!!」

「ふむ」

義父さんはいったん言葉を止めて、顎に手をやり軽く考える素振りを見せる。

それに気を良くしたのか、ブッチャーは勝ち誇ったように高笑いを始めた。正直うるさい。

「では、歩家にも金銭の援助をして頂きましょうか」

「はーっはっはっはは……はっ!?!」

義父さんの言葉に、ブツチャーは息を詰まらせた。

「な、何を言っている！ 我が家は被害者なのだ！ 貴様らに払う金などない!!」

「いえ、糜家に対してではございません」

「私に対してですよ」

私はそこで口を挟んだ。

あー、長かった。完全に義父さんについてきた下働きに扮して、椅子に座らずに跪いていたから足が痛い。

よっこらっせ、と口にしながら立ち上がり、彼をまっすぐに睨みつける。

「なな、何だお前は!?!」

「歩家にあの男と共に追い出された、貴方の妹の息子ですよ」

「なっ!?! あの時のガキだと!?!」

「ええ、お久しぶりにお目にかかります、叔父上」

精一杯皮肉げな笑みを作って、慇懃無礼に答えてやる。

「な、何故貴様がここにいる!?!」

「そんな事はどうでも良いでしょう。貴方の大好きなお金の話でもしませんか?」

質問すれば必ず答えがもらえらるでも思ってるのか? 少しはその足りない頭で考えてみる。

「さて、先ほど貴方は受けた苦痛は金銭で購入すると、そう肯定致しましたね。ならば、歩家より追い出された我が身の苦痛。如何ほどのお値段をおつけになるのでしょうか?」

「ふ、ふぎけるな!?! なぜ私が貴様に金を払わなくてはならんのだ!?!」

お前が払うわけじゃなくて歩家が払うわけなんだが。それとも、家の資産は全部自分が思い通りに使えると思っ込んでいるのか?」

「先程も申しましたように、私の受けた苦痛に対する代価でございませぬ。あなた方は私の実父を追い出す際に、私も一緒に投げ出しました。その後、あの男が私に対してどのような扱いをするか、想像できなかつたとは言わせませぬ」

お前ら自身があの男から受けていたんだろ。分からないはず無いよな？

「あなた方が私を歩家から追い出さなければ、受ける必要の無かった苦痛です。それに対しての補償を求めさせていただきます」

嫌と言うなら、麿家からの援助も打ち切るよ？

そういう意図を言下に匂わせながら、私は口を動かすのを止めた。ぶつちやけ詭弁にすぎないのだが、こういう手合いには有効に働く。

淮陰へ移動する際に義父さんと話し合ったのは、歩家との付き合いを切って本当に大丈夫なのか。その一点に尽きる。

以前から麿家は、歩家との付き合いがなくなった場合に他の有力者、豪族との関係が悪化する事を恐れていた。

歩家は没落したとはいえ名家である。徐州内の繋がり是非常に広い。そのため援助を始めた当時は、歩家との関係が本格的に悪化してしまうのは、今後の立身出世に致命的な影響を及ぼす可能性が高かったのだ。

しかし、歩家の当主がこのブツチャーに変わった頃から、その状況に二回ほど変化があった。それが義父さんが言っていた「状況の変化」だ。

一つは歩家に対して距離を取ろうとする家が増えたのである。理由は言わずともわかるだろうが、このブツチャーのせいである。そりや、客に対してあんな態度取ってたら付き合いあって家も無くなるわ。

この変化により、麿家としては歩家と断絶しても問題無くなったのだが、義父さんは弟のしでかした事への罪悪感もあり、援助を打ち切ることをしなかったそうだ。

二つ目の変化は、その後歩家が付き合いを持つようになった人物の質の変化だ。無論悪くなっている。

先代当主まで付き合いの有った者達は、憂国の官吏であったり、義心溢れる侠客であったりと、優れた人柄を持つ者が多かったのだ。

しかし、現当主に代替わりして彼らは歩家と距離を取るようになって

た。

その間隙に入ってきたのは、賊吏やごろつきなどの、歩家の名ではなく金に群がる者達だった。まあ、その金も元は麿家からなんだが。

さらに悪い事に、その賊吏の一人が州の高官となるために賄賂を使つた疑惑があり、その出所が歩家からではないか、と州牧様の近くに侍る重臣達は噂しているらしい。彼らとしても麿家にまで追求をするつもりは無いらしいが、歩家とはどこかで手を切らないと要らん事に巻き込まれる可能性がある。

義父さんがこの間私と姉さんに話して聞かせたのはこの事である。即座に切らないと、麿家が賄賂を使う事を容認していると誤つた噂が流れ出しかねない。

以上の「状況の変化」から、歩家と手を切る方がメリットが大きくなつたのだ。少なくとも、当主がこのブツチャーから代替わりしない限りは歩家と協調する事はできない。

それが道中義父さんと話し合つた結論だ。

上記の歩家の状況は、この間義父さんに聞くまで知らなかつた。

流石に違う郡に住んでいる以上噂は届きづらい。だが、知ろうと思えばいくらでも方法は有つたのだ。この家に対しては色々と思うところがあるゆえ、知ろうとする努力をしなかつた事を猛省するべきだろう。

ちなみに、こんな余所事考えている間にも、私は詭弁を大絶賛展開中である。

「え、歩家から追い出されても補償はないんですか？　じゃあ、今すぐあなたを追い出すように働きかけを始めますね。　麿家にとつても歩家にとつても損が出ないようにすぐ代替わりさせる事ができますよね！」

とか

「じゃあ、あくまで酷い目に遭つたから金を得る権利がある、そう主張するんですね。　それでは私からあなたへ金を渡すんで、酷い目に遭わせて良いですか？　具体的には腕一本切り落とすくらいの」

など、色々言いたい放題である。

あわよくば、向こうから絶縁を言い出してくれれば最高である。段々と楽しくなつて参りました。

このまま追い出したら、自分の責任で援助が打ち切られるのが分かっているのか、向こうも必死である。対してこちらは義父さんが仕事で☒に戻る必要があるため、いつでもそれを理由に交渉を打ち切れる。

交渉を再開して、援助の延長が確定するまでの間は援助を渡す必要はなくなる。そのためこちらとしては、歩家が立ち行かなくなるまで放置しておけば手を下す必要すら無いのだ。

また、仮に私達を殺害したり、監禁をしたとしても姉さんが糜家を相続するから問題無い。州牧様には、最悪の事態が起きた場合には姉さんを次期当主とする旨をすでに義父さんから伝えており、州牧様も承知して内意を得ている。

側近である義父さんが不当な災禍に巻き込まれるのだ。姉さんが敵討ちを願い出るにしろ、監禁からの救助を願うにしろ、州牧様が州の軍を動かす理由に十分なりうる。

ところで、ブツチャーはまったく気が付いていないが、資金援助の交渉相手は義父さんであつて私ではない。私は詭弁により補償しろと口になっているに過ぎない。はつきり言つてしまえば、これは時間を無駄に使わせる戦略に過ぎない。先ほども言ったように、時間切れになれば私たちは目的を達するのだ。

なので、仮に本当に私に金を払つたとしても糜家が援助を継続するかは別問題だ。

いったいいつ頃気付くのやら。

そうやって、私が時間切れ狙いの戦術を取り、ブツチャーも叫び疲れ始めた頃、屋敷内で誰かがバタバタと走る音が聞こえ始めた。

なにか危急な事態が発生したのだろうか？

私は喋るのを止めて、視線をブツチャーから外す。そのまま義父さんの手を引き、部屋左横の壁に背をつけて後方から奇襲を受けないようにする。そしてその姿勢のまま、出入り口の方へ目を向ける。

だんだんと足音が近づいてくる。

ブツチャーもようやく気づいたようで不安そうに目を左右に動かしている。

そして、足音の主が部屋に入ってきた。ここまで私達を案内してきた家人だ。

「失礼いたします！」

「何事だ、騒々しい！」

足音の主が彼と分かり、途端に強気になる豚。まあ、刺客だったら逃げようが無いしね。主に重荷となるその体重のせいだ。

「申し訳ございません！　しかし、緊急でお伝えしなければならぬ事が起きました！」

その後彼が口にした言葉に、私は仰天した。

「お嬢様と諸葛家のご息女が、町中で倒れました！　大変高い熱で、意識がございません！」

悲鳴を上げて、恐らく娘の物と思われる名前を叫びながら、部屋から転がるように出ていった歩家当主殿を尻目に私は、歴史に名を残すであろう人物を指す言葉と、その人物が倒れたという事実には驚愕を隠す事ができずしばらく呆然とするのだった。

第十話 I, ve Never Been To
Me —捨てる神あれば・・・—

諸葛家。この家は三国志において大きな意味を持つ。

諸葛家の人間は魏呉蜀、三国すべてに対して親族の誰かが仕官し、栄達を遂げているのだ。

「はわ、はわ、はわわ、はわわわわ！ 大変でしゅ。 藍里お姉ちゃんが大変なんでしゅ！」

蜀には龍、呉には虎、魏には狗。

三国に仕えた諸葛家の人間を評した言葉だ。

狗だけ格下だと思われがちだが、これは功績のある人であると言っているのだ。決して蔑称ではない。龍と虎は言うまでもなくその人物の偉大さを表した言葉だ。

つまり、三国に仕えた諸葛家の人間は、すべて有能な人間であったと言っているのだ。

「はわわ、はわわ、はわわわわわ!! 倒れちゃいました、お姉ちゃんが倒れちゃいましたー!!」

龍は諸葛亮、字は孔明。

虎は諸葛瑾、字は子瑜。

狗は諸葛誕、字は公休。

諸葛瑾と諸葛亮が実の兄弟で、諸葛誕だけは遠戚であり活躍した時代が後ろへと少しずれる。諸葛兄弟の方が私と年代は近いのだが、叔子の例もあるから、油断はできない。

「はわわわ、はわ、はわわー！」

諸葛瑾は呉の重臣であり、呉の皇帝孫権の側近として仕えた。蜀に弟がいるためか、主に對蜀の外交を行っている。後を継いだ息子、諸葛恪も大將軍まで登り詰めている。実に呉の柱石と言うにふさわしい人材であろう。

諸葛亮は蜀に仕えた知謀の士で、三国志演義後半の主人公と言って良いだろう。『謀を帷幄の中に運らし勝つことを千里の外に決す』を

平気でやってのけていた、並々ならぬ才能を持った軍師。

劉備無き後の蜀に忠義を貫いた義の人。

そんな風にあまりに有名すぎるため、創作作品だと色々おかしな脚色がされる事も多い。

ビーム撃つたり、変態だったり。幼女だったり。

倒れたのが二人の内のどちらかだった場合、歴史への影響力は決して軽視できない。

三国鼎立が無くなる可能性だって有るのだ。

「はわ、はわわ、はわわわわ！ 誰か助けてくたしやいー!!」

……そろそろツツコんだ方が方が良いかな？

先ほどからはわはわ言って、部屋の中を右往左往しているのは、色素が薄く金色に見える髪をした髪の短い女の子だ。年齢は私と同じくらいか、少し下くらい。とりあえず、落ち着けと言いたい。

先ほどの自失から立ち直り、義父さんと共に部屋を出て人の声が聞こえる方へ向かった。そこには、敷物が広げられている床の上に一人の子供が寝かされていた。はわ子さん（仮名）と顔立ちと髪の色が似ている、私と同じ年頃の髪の長い女の子だ。熱があるのか、顔が紅潮しており呼吸が荒い。

先ほどまではもう一人寝かされていたのだが、ブツチャーが抱えて家の奥へと連れていった。

おそらくあの子が歩家のご息女なのだろう。というか、こんなところで寝かされているこの子も連れて行ってやれよ。

歩家のご息女を連れていった際に、倒れたという子供たちを取り巻いていた人々もついていったために、今ここに残っている人物は四名となっていた。

内訳は私、はわ子さん、寝かされている少女に加えてもう一人、沈痛な表情をしている少年がいる。

義父さんもさつきまではここに居たのだが、今は護衛の二人の元に行ってもらい、事情を伝えてもらっている。長丁場になる予感がするから、宿も延長して取って欲しいとお願いした。最悪私だけでも残って状況を見極めておいた方が良い。

それほど今回の一件はインパクトが大きい。

私は少年に視線を向ける。私と同年くらいの子の黒髪の少年だ。はわ子さんや、寝かされている少女にはあまり似ていないように見える。しかし、この場に残っている以上は諸葛家の縁者なのだろう。

はわ子さんよりも比較的落ち着いて見えるので、話しかけて事情を聞いてみた方が良さだろう。

「ごめん、ちよつと良いかな」

「……あ、はい。何でしょうか？」

同年くらいなのでため口で話しかけたのだが、丁寧語で返事が返ってきた。非常に丁寧であり、理知的な態度だ。ここに住むブツチャーとは似ても似つかない態度は、やはり歩家の人間ではなく、諸葛家の者だと思える。

(この少年が諸葛瑾、寝ているのが諸葛亮、はわさんが諸葛均かな) そう予想しながら、言葉を作る。

「僕は本日歩家にお邪魔させてもらっていた、糜家の芳、字を子方と言います。諸葛家の縁者の方と見えますが、何があつたか教えていただいていいですか」

今さら敬語に変えるのも恥ずかしいので、ため口のまま突き進む。ただある程度話し方は丁寧にする。

……それにしても、この子の顔なんとなく既視感があるんだけど気のせいかな。

「あ、これはご丁寧に。しかし、この二人は確かに諸葛家の方ですが、私は歩家の者です。名を隲、字を子山と申します」

「はわわ。わ、私も自己紹介さしえて頂きましょう。姓を諸葛、名を亮、字を孔明と申しませう。この臥せている者が姉で、名は瑾、字は子瑜と申しませう。よろしくお願いせませう！」

あう、囁んじやつた。

そんな言葉を呟いて落ち込み始めるはわ子さん。

噛みすぎじゃないか？

というか、お願いされてどうする。

そんなツツコミが脳裏から消えてしまうほど、聞き捨てならない名

前が聞こえた。

「え？ はわ子さんが孔明なの？」

「む、孔明の事をご存じでしたか」

私ははわ子じゃないでしゅー！とか聞こえてきてるけど、気にせず
に子山殿と会話を続ける。

「正確に言うと、名前は知っていましたがお会いするのは初めてです。

諸葛家の姉妹は優秀だと風の便りで姉妹の字と共に聞いておりま
した」

正しくは、前世の記憶で読んだ書物で、だが。

(それにしても、この子が歩騭か。普通に男なんだな。もう、この
世界の女体化させるルールが分かんないよ)

思わず世界のルールに対して嘆いてしまった。そして、先ほどから
の既視感も見当がついた。鏡で毎朝見ている自分の顔に似ているの
だ。顔の一つ一つのパーツこそ違えど、全体を組み合わせると兄弟に
間違えられるくらいには顔が似ていると思う。無論、従兄弟にあたる
ため似ていたとしてもおかしくはないのだが。

その後、私は前世の記憶にある歩騭の経歴を頭へ思い浮かべる。

姓は歩、名は騭、字は子山。

呉に仕えた官吏である。三国志演義においては、その名前はあまり
パツとする物ではない。

確か赤壁の時に諸葛亮に論破された文官の一人として登場してい
たはずだ。

あとは陸遜の抜擢に反対していたはず。名前出てきた場面って他
にあつたっけ？

演義では文官なのだが、実際の経歴は將軍を歴任している事から武
官よりの人物だったのだろうと推測できる。

正史においては、晩年に呉皇帝となった孫権の幕下において丞相に
まで登り詰めている。

名を馳せたのは交州刺史となった時だろう。交州にて独立を画策
していた呉巨を謀殺した事で、交州の統治を安定させる事に成功し
た。その事により交州の民に大いに慕われるようになる。

武功は異民族討伐が主な物であり、そこまで華々しい物ではない。しかし異民族が多い上に呉本拠地から離れていた、統治の難しい交州を安定させているのだ。やはり並の人材ではなかったのだろう。

その後は順調に昇進を重ねていき、最終的に丞相就任というキャリアになっていく。

しかし、位人臣を極めた人物としては非常にマイナーである。もつとも、呉の臣下という時点で一部の人物以外は不遇、というのが創作では三国志演義以来の不文律となってしまうのだが。酷すぎる。陳寿、それから羅貫中。もつと頑張れよ。

また、步騭と諸葛瑾は親友同士だったとも言われている。徐州を出てから知り合ったと推測していたのだが、この世界ではどうやら違ふようだ。

それにしても、彼が步騭だとすれば先ほど連れていかれたのは歩婦人か。そつちも居なくなると困るな。主に孫呉に対する時限爆弾として。徐州に居続ける以上、領地を接する可能性の高い孫呉への備えは一枚でも多い方がよい。

彼女本人はともかく、彼女が産む娘が問題児なのだ。具体的には、国をぼろぼろにした上で、結果的に洒落にならないレベルの暗君を爆誕させてしまうくらい。

「それで、何が起きたのかを説明致しますと」

ああ、こつちから聞いたのに余所事考えているのはまずいな。集中して聞こう。

はわ子さん改め孔明さんが膨れてそつぽを向いてしまっていたが、今は子山殿の話が重要だ。

「私たちが買い物しようとして町を歩いているときに、二人揃って体調不良を訴えてきたのです。そこで、買い物は終わっていませんでしたが打ち切って帰途に着いたのです。しかし、家まで後数分というところで二人とも動けなくなってしまっ……」

そして歩家の人間を呼びに行つて、ここまで運んでもらったらしい。それからすぐに二人とも気を失ってしまったらしい。

「そして今に至る、と」

「はい、そのとおりです」

私の言葉に子山殿は同意する。

腕を組んで、少し考える。とりあえず、現状できる事は倒れている子瑜殿の容態を見る事か。

「孔明さん」

「はわっ！ ……なんですか？ 私はあなたに用なんて無いですよ。だけど、はわ子さんと呼んだ事を謝るならば、話くらいは聞いてあげます」

「じゃあ別に良いや」

「はわっ！ 何ですかー！ 謝ってくださいー!!」

したり顔で謝罪を要求する姿にいらつとしたからです。他意はありません。

「まあそれは良いとして、お姉さんの様子を診させてもらっていい？

医師の先生が来るまで少し時間がかかるだろうし」

「良くないです！ って、病氣治すことできるんでしゅか!？」

「治す事はできなさそうかな。ただ、どういう病氣かを診断する事はできるかも」

「お願いしましゅ！ お姉ちゃんを診てあげてくださいやい！」

了解。それでは確認してみましようかね。

噛んでいる事はスルーする。

子瑜殿に近づいて、まずは額に手を当ててみる。って、熱っ！

これは高熱だな。

服の上から見える外観を観察し、出血や傷が無いかを確認する。

……どうやら毒や破傷風などではなさそうだ。骨折等もしていないようなので、シヨック症状による発熱も除外して良いだろう。

そんな風に数分診察もどきを続ける。ちよつとまぶたを指で上げて、目を確認する。

あれ、目が充血している。って、これ結膜炎か!？」

「孔明さん。ちよつと聞いて良い?」

姉を心配そうに見ていた孔明さんに、声をかける。

「はい。なんですか?」

どうやら興奮は落ち着いているようだ。噛んでいない。

「昨日の夜とか、子瑜殿の調子悪そうじゃなかった？」

「いえ、特には。だから今日出掛けることを決めました」

おそらく潜伏期間中だったのかな？

発疹も出ていないのは、カタル期なのだろうか。

「もう一つ質問。ここ十五日以内で、子瑜殿とさつき連れてかれた娘さんと一緒に遊んだりしていた？ 今日以外で」

「え？ ……はい。言われてみれば七日ほど前にも一緒に町を練り歩きました。けどそれって関係あるんですか？」

一緒に伝染した可能性があるなら、練師さん（仮）も同じ症状出るかもなあ。

「発熱と目の充血がある。これほぼ間違いなく麻疹だ。早めに治さないと取り返しのつかないことになるかも。それから、さつき運ばれた歩家のお嬢さんも多分同じ病気だと思う」

私は殊更冷静な顔を作り、二人の方を見ながら言った。

その言葉を聞き、二人は驚きに目を見開き私の方を見つめていた。

麻疹。二十一世紀においては、あまり怖い病気と認識されていないだろう。そもそも医学が発達していた前世では、治療薬も予防接種もあったのだ。それを使用できるくらいに発展している国であるならば、麻疹で死に至ることは非常に少ない。

しかし医学の発達していない時代では、猛威を振るい多くの人を死に至らしめた。

麻疹単体では問題にはなりづらい。もちろん、高熱に伴う発汗を起因とした脱水症状は危険だが。もつとも注意すべきなのは、高熱で体力が落ちている時に肺炎や脳炎が併発する事だろう。その時には非常に重い容態となる。

なにより恐ろしいのは、その感染力だろう。しゃべった際の飛沫などで感染し、保菌者となる。そして保菌者から周囲の人へも伝染してしまう。潜伏期感も十日ほどあり、症状が出る前に保菌者が動き回り、流行をさらに広げる事になるのだ。

前世で従妹が麻疹にかかった際に調べた、麻疹の特徴を思い出す。

そして不安そうな顔をしている子山殿と孔明さんに向き直った。

「少し確認させて。子山殿と孔明さんは麻疹にかかった事はある？」

私は数年前にかかったんだけど」

「はい。私は二年前にかかりました」

「私も小さい頃にかかった事があります」

意図が分からないためだろう、不思議そうな顔をしている。それでもこちらの質問にはしっかりと答えてくれた。

二人とも罹患済みか。なら看病を任せられるな。

麻疹は一度罹患してしまえば、免疫抗体ができて二度かかる事が無い。

一度かかった者が看病に当たる事で、大規模な集団罹患は防げる。

できれば、罹患者は隔離してしまいたいんだが……ブツチャーは練師殿を離しそうにないな、あの様子だと。

先に子瑜殿の処置を始めよう。

「諸葛家ではかかった人はどれくらい居る？ え、全員かかっている？」
「じゃあ諸葛家に子瑜殿を運ぼう。とりあえず、寝台に寝かせてあげないと」

孔明さんに素早く諸葛一家の麻疹経験を聞いて、家で世話しても問題無いと判断する。

「子山殿はさつき運ばれた歩家の娘さんにも、同じ症状が出ていないかを確認して。確認すべきは発熱と目の充血。あと、発疹も出ているかもしれない。もし全部出ているようなら麻疹の可能性が高いから、その部屋に入った人間全員に体をお湯で洗って、うがいをしっかりとするように言ってください。看病は麻疹にかかった事のある人にしてもらって。その人たちは伝染らないから。看病の仕方は孔明さんに教えておくから、後で聞いてください。あと、この診断の方法は私が言った事は伏せておいた方がよろしいかと思えます。先ほど当主殿に対して、かなり挑発的な態度を取ってしまったので態度が硬化してしまうかもしれません」

子山殿にはすぐに練師殿を確認してもらおう。集団感染されると手が回らなくなる。

「承知しました。子方殿はどうかさりますか？」

「子瑜殿を諸葛家まで運びます。孔明さん、案内をお願い致します」

「はい、わかりました！」

それを聞くと子山殿は、私へ立礼を返してから家の奥へと向かっていった。

私たちも動こう。

子瑜殿の膝裏と背中へと手を回し、抱き上げる。

いわゆるお姫様抱っこだ。一応鍛えてはいるので、同年代の女の子相手ならこの程度はできる。

孔明さんが顔を赤らめて、「はわわ、女の子の憧れでしゅ」とか言っていたが無視。さっさと家まで案内してもらおう。

孔明さんの案内の元、無事に子瑜殿を運び終えて寝台に寝かせた。それから、孔明殿にこの家の皆さんを集めてもらった。もちろん、看病の方法を説明するためだ。

「まず、皆さんが以前麻疹にかかった事がある前提でお話しします。その認識であっていますよね？」

私の問いかけに、諸葛家の皆さんが頷く。

「それじゃあ、看病方法を説明します。今、子瑜殿は高熱で大量に汗を掻いていますので、その分の水を補わなくてはいけません」

「水を飲ませれば良いんですか？」

「基本的にはそれで良いんですが、工夫を一つ。塩と砂糖を少量混ぜてください。目安としては、二升半強（540mlくらい）に対して塩を半つまみくらい、砂糖を一つまみくらいでお願いします。砂糖が無いようならば、私がお金を出しますので買ってきてください」
生理食塩水に近い濃度の方が、体への吸収には良いからな。正確に濃度を計って作る事まではできないが、ミネラルも含むしただの水よりは体に良いだろう。

「あとは、熱を下げる事ができるように額と脇の下に水を絞った手拭いを当てるようにしてください。額にはのせるだけで、脇の下には挟むように」

「温くなったら替えてあげるんですよね？」

「はい、そうしてあげてください。あと手拭いを浸す水も、この季節だとすぐ温くなっちゃいますから……」

「頻繁に取り替えた方が良いでしょうね」

「はい、その方が良いでしょう」

発熱は体力を落とすから、早めに下がるように工夫した方が良いでしょう。

「食事はどういった物が良いでしょうか？」

「水分の多い物が良いでしょう。お粥とか、桃などの果物も良いかもしれません。あとは滋養が付くように卵も毎食一つ使うようにしてあげてください。卵粥とかにすれば難しくないかと。食欲が無くて、一口二口で良いので食べさせてください。何も食べないままなのはまずいです」

この季節のお粥は暑くて食いつらいかもしれないが、しょうがない。汗を掻けば熱も下がるし。

「お薬はどうすれば良いでしょう？」

「ごめんなさい、熱を出した時の看病の方法は分かるんですけど、薬には詳しくないんです。それは本職の方に聞いて下さい」

流石に内服薬の調合は無理です。

一通り看病の方法を説明し終えて、昼夜ずっと張り付いて看病をするようにと伝えておく。夜起きていて、昼間寝る人が大変だろうがやむを得ない。病気の時に人は気弱になる事があるので、できるだけ誰かがいた方が病人は安心するのだ。

あと、周囲に麻疹を感染させてしまう可能性もあるので、衣服や体は頻繁に洗い、口を手拭いでマスクのように覆う事も指導する。

……しかし、みんな子供の言う事をよく信じるな。

実際にそう尋ねたところ、

「理に合わない明らかにおかしい説明は無かったし、知らない事はそうはつきりと言っていたから。大人であっても、知らない事を自信無さげに説明される方がよほど信用ならない」

との事だった。まあ道理だ。

ただし、一応本職のお医者様にも診てもらおうようにお願いしておく。素人診断で間違いがあったら困るし。

「そうやって説明を終えて、看病の準備に動き出した皆さんを手伝っている、私の真名を呼ぶ声が聞こえた。」

「……あ、義父さんの事忘れてた。」

慌ててすぐに外に出たら、義父さんと子山殿が立っていた。どうやら、子山殿が義父さんを案内してきてくれたようだ。子山殿に感謝し、義父さんに勝手に歩家から出た事を謝る。無言で拳骨を落とされたので、甘んじて受ける。今回は明らかに私が悪い。頭抱えるほど痛かったがな！

すでに何が悪かったのかを理解しているため、説教ではなく折檻なのだろう。久しぶりに義父さんに手をあげられた。

義父さんをここまで案内してきた子山殿は、諸葛家の中に入っていった。看病の方法を聴くのだろう。しかし、何故か顔が非常に険しかった。何かあったのだろうか？

頭の痛みが引いた後、義父さんに状況を説明する。

「そうか。麻疹に」

「うん。乗りかかった船だし、できれば子瑜殿が快癒するまでは看病の手伝いをしようと思うんだ」

実は諸葛家の方には是非お願いしたいと言われている。諸葛家とも顔を繋げるし悪い話ではないと思う。

「……うむ。人助けだし問題無かろう」

幸い問題なく許可が出た。

まあ、一応徐州の民のためになる事だし。淮陰で大流行されても困るし、可能であればここで流行は鎮めたい。

「滞在費は後で渡す。護衛は付けなくて大丈夫か？」

「ありがとう。助かるよ。護衛は不要かな。わざわざ私を殺したいと思う人間はそう何人もいないでしょ。歩家当主殿くらいだけど、それも手を下す度胸はなさそうだし」

感謝を口にし、頭を下げる。これでこの町に残っても問題は無くなった。

当主殿への酷評に義父さんは苦笑いを浮かべていた。

「子伯様。 子方殿」

そんな事を話していると、諸葛家から子山殿が出てきた。どうやら看病の方法を諸葛家の方から聞き終えたようだ。しかし、ここに来た時からずつと顔が険しい。何か有ったのだろうか？

「お願いがございます」

子山殿はそう言つて、私たちへと跪いて礼をしようとしてきた。義父さんと二人で全力で止めましたが。歩家の御曹司がこんな所で跪こうとするな！

「妹をお救い頂けないでしょうか。父の行つた無礼の数々に関しましては、伏してお詫び申し上げます。助けて頂けましたら、私が必ずやご恩に報いる事をお約束致します。ですので、何卒、何卒……」
(……一体何があつた?)

涙を流し、私達に縋りつく様にしながら言葉を紡ぐ子山殿。義父さんと私は顔を合わせて、子山殿を抱えるようにしながら、落ち着いて事情を聞こうと諸葛家の中に入った。

涙を流し、えづきながら事情を話す子山殿。その内容をまとめるとこうだ。

一・妹の診断を行うと、私の言つたとおりの症状が出ている。おそらく麻疹と思われる。

二・その部屋にいた人全員に麻疹だと思ふ事と、体を清めるように伝えた。

三・全員が妹から離れ、部屋から我先にと逃げ出した。麻疹が伝染る事が怖かつたのだと思われる。

四・ブツチャーへ先ほどの意図を怒りながら問い質しに行くと、妹を貧民窟に捨てて来るように命じられる。

五・理由を聞くと、ブツチャーが麻疹にかかると困るからこの家には置いておけないと返してきた。

六・怒りながら翻意を促すと、うるさい、もう決めた事だ、と喚かれる。

七・このままじゃ本当に妹が危ないと思つたので、諸葛家に一時預かってもらう事はできないかと打診しに来る。

八・諸葛家からは二つ返事で了解を得る。ひとまず妹の安全は確

保できた。

九、しかし、今後の事を考えると生活する事が困難。諸葛家にとつても負担となるだろうし、迷惑となってしまう。諸葛家を出て生活しようにも先立つ物がない。

とりあえずそこまで話を聞いて、私は妹殿を迎えに行くと言い捨て、諸葛家を飛び出し歩家に向かった。後ろからは子供特有の軽い足音。子山殿も付いてきているようだ。待ってなくても良いよ、と走りながら伝えたが、「あれは私の妹です、私が助けなくてはなりません」と返ってきた。何で、あのブツチャーからこんなに良い子が生まれたんだろう？

そうやって数分走っていると、女の子を抱えている門番をやっていた男の姿が見えた。

「待て、信！ 遥をどうするつもりだ!？」

すぐに追いつき、息が切れた様子の子山殿が歩家の衛兵、信へと娘を抱えている理由を問い質す。遥ってというのはこの娘さんの真名かな？

「申し訳ありません、子山様。ですが、旦那様の命令なのです」

まあ、予想通りだよ。間一髪といったところか。

「遥は諸葛家で療養できるようにした。貧民窟へ連れて行くことは許さん！」

「し、しかし旦那様からの命令です」

頭が固いのか、自分の判断よりも上司の命令を優先するタイプのようだ。そういう事ならば、ちよつと助け舟を出そうかな。当然詭弁で。

「まあまあ、よく考えてみましょうよ。貴方自身、その子が酷い目に遭う事を望んでいるわけではないのでしょうか？」

「むむむ……」

「何が、むむむだ！」

伝統芸能ですね。分かります。

そのまま考える事十数秒。

「……はっ、分かりました。お嬢様はお渡し致します」

「おお、分かってくれたか」

「ですが、旦那様へはどうか御内密にお願いいたします」

「ええ、分かっています。これは私達が勝手にやった事であり、あなたへ累が及ぶ事はございませんよ。ねえ？」

子山殿へ視線をやり、同意を求めると迷い無く頷いた。

明らかにほっとした顔をした信殿。まあ、気持ちは分かるけどさ。ただ、私が説得した事を話すとブツチャーは激怒するだろうなあ。子山殿と違い、歩家当主の決定に意見できる地位にいるわけでも無いしな。

「では、その娘さんをこちらへ」

そう言つて、信殿から娘さんを受け取る。息も絶え絶えな子山殿よりはまだ体力に余裕がある私が抱えた方が良かったら。帰り道で落としたら困る。

それに抱える相手が叔子と同一年くらいの女の子だから、問題なく抱きかかえる事ができる。そしてこの子も例に漏れず、将来が楽しい美人顔である。ショートカットにしている栗色の髪の毛が、活発な印象を与える。

「では、確かにお預かり致します」

そう言つて信殿へ頭を下げ、子山殿を促し来た道に戻る。

(とりあえず、この後どうするべきかなあ)

差し当たっては、麻疹の治療と流行の防止。歩家の子供達の処遇になるだろう。

今後の善後策を練りながら子山殿と歩いていると、諸葛家が見えてきた。玄関前には孔明さんがそわそわしながら何かを待っているようだった。

(いや、何かじゃないな)

間違いなく、この娘を待っているのだろう。私達が無事にこの娘を連れて来る事ができるか、心配をしていたようだ。

こちらに気づき、彼女を抱きかかえている私を見て嬉しそうに全力で駆け寄って来る。

そして、何も無いところで転んだ。

(まあ、どうにかなるかな。)

そんな風に楽観的に考えをまとめて、いったん思考を打ち切る。それから、転んで涙目になっている孔明さんの所へ、子山殿と一緒に急いで向かった。

第十一話 Say my Name —なまえをよんで—

「あの二人の処遇はお前に任せる」

「いや、何その無茶ぶり!?!」

上の台詞は、数日前に☒へ向かう前の義父さんに、歩家の二人の処遇を相談した際の返答である。

義父さん曰く、

「子山も子麗もお前を信頼しているようだし、お前も今さら二人を放り出すような事はすまい。ならば、お前が判断して下した決定の方が二人も受け入れやすかろう」

との事。

「……まあ、二人とはそれなりに仲良くできそうだけどさ」

子麗を諸葛家へ連れてきてから数日経った。私も看病を手伝っているため、病人の二人が目を覚ました際に、挨拶を交換して知遇を得る事ができた。看病を主導したのが私である事を知ると二人には感謝されたが、「僕が助けたいから助けたんだし、必要以上に畏まる必要は無いよ?」と伝えた。

なんと清廉な志、とか言っている子瑜殿。人の話聞いてました?

義父さんは交渉を一日で終えて、すぐにここを出立する予定だった。しかし今回の一件で、あの日は想像以上にバタバタしていたため、落ち着いた時にはもう夕暮れ時だった。流石に夜に出立するわけにも行かないため、もう一日この町に泊まってから出立する事になった。

賊討伐でしばらく留守にしていた事から、仕事が大量に溜まっているのはこの間言っていたとおりで、いい加減それを溜めるのも限界らしい。その決済のために早めに戻る必要がある。ワーカーホリックだなあ。

宿屋で朝食を取りながら簡単に方針を話し合った後、義父さんは文嚮と宣高の両親を伴って☒へ出立した。

義父さんが出立した日の会話を思い出しながら、諸葛家までの道歩く。手には宿の主人から買い取った桃を持っている。子供達への土産だ。

あとは、向かう途中で食料品店に立ち寄り糖蜜を買って行く。確かに生理食塩水もどきに使う分が切れていたはずだ。

義父さんには、ひとまず経過観察も含めた期間、この町に滞在する事を伝えて了解を得ている。麻疹の熱が下がるまで約五日、経過観察にさらに五日、合計十日間だ。宿代もすでにそれだけの金額を払っている。

諸葛家にいる時はマスクのように手拭いを口と鼻に当てて、宿に戻る前に体を水を絞った手拭いで拭いた後、清潔な服に着替えてから戻るようにしている。宿で麻疹を流行させたりしたら大迷惑だし。

本当は風呂に入る事ができれば一番良いのだが、流石にこの時代に湯殿は一般的ではない。今度公衆浴場の建設を計画しよう。温泉が一般的なのこの世界では既に石炭の利用が始まっている。石炭を産出できる場所を見つければ、燃料費の問題は解決するはずだ。温泉があれば良いのだが、一番近くて山東半島だったか？流石に中国の温泉事情には詳しくない。日本だったら何処の県でも一ヶ所は温泉街がある（偏見）から楽なんだが。

そんな事を考えながら、道を歩いていると、すぐに諸葛家へ辿り着いた。

ごめんください、と口にしなからマスク代わりの手拭いを着けて諸葛家の門をくぐる。

玄関へ入ると、はわわ、はわわ、と声が聞こえてきたのでそちらへ向かう。確かこっちは厨房だったか？

厨房へ入ると、はわわはわわいながら土鍋を火にかけている孔明さんがいた。姉の恩人なのだから呼び捨てで良いと言われているのだが、完治しているわけでは無いので保留させてもらっている。代わりに、はわわさんと呼ばせてもらおうとしたら、一瞬で却下された。残念。どうでも良いけど、火を扱いながら慌てるのやめようよ。危険だつて。

こちらに気づいていないようなので、扉が無いから代わりに壁をノックする。

一瞬ビクツとした後、おそるおそるこちらを振り向いてきて、私の姿を認めて安心したようだ。表情といい、動作といい、こんなに分かりやすくこの娘は軍師としてやっていけるのだろうか。

「子方さん、おはようございます」

「はい、おはようございます。孔明さん、二人の様子はいかがですか？」

自分は別に慌ててはいなかった、と何事もなかったように胸を張った孔明さん。しかし、一部始終を眺めていたし、今も顔を赤らめていては丸分かりだ。

苦笑を浮かべながら二人の様子を聞く。

「はい、先程二人とも起きました。熱は有るようでしたが、数日前に比べれば元気があるみたいです。お腹を空かせているようでしたから、お粥を作って持って行ってあげよう」と

「ふむ、それは先ほどから不穏なくらいにぐつぐつと煮えて、黒い煙が出始めている土鍋ですかね？」

「はわわわわわ！」

「相手は病人なんですから、あまり焦げ臭い物も体には良くないですよ？ また寝込むことになっても不味いですし」

「はわわ、これは失敗したんですー！」

ぐい愁傷様です。

寝台の二人も待っているだろうし、少しでも早く持つていくために私も手伝う。ネギを刻んで、卵を溶く。鍋の火加減は孔明さんに見てもらおう。

持つてきた桃も湯剥きして持つていく。

お粥が煮えたら、ネギを散らして溶き卵を満遍なく回しかけて蓋をする。後は余熱で仕上がる。念のため味見するが、問題ないだろう。

隣で孔明さんが「お、男の子に料理の手際で負けちゃいました」と、へこんでいたのでフォローしておいた。私の料理は経験が二十年ほど多いから慣れているだけであって、特別な才能は持つていない。毎

日料理していれば上手くなりますよ。

お粥は焦がさず塩加減を間違えなければそこそこ食べられる物になるし。

ちなみに、諸葛家の大人の方々は交代で夜の看病を続けてくれているため、今は床に入ったとの事だ。

お盆に土鍋と小皿二枚にレンゲを二つ載せて、二人が寝ている部屋へと持っていく。孔明さんには桃の入った器をお盆に載せて持ってきてもらう。万が一転んでも火傷しないし。

部屋の前で二人の朝食を持ってきた事を告げ、看病をしていた子山殿に扉を開けてもらう。看病を交代するので、食事を摂って来るようをお願いする。

ついでに、焦げているお粥は食べないように伝えると、後ろから「はわわ、違うんでしゅー!」とか聞こえてきたが、敢えて無視。料理を失敗したのは違わないだろう、孔明さん。

子山殿が苦笑を浮かべながら食卓へ向かうのを見送り、入れ替わりに部屋に入る。

「食事を持ってきました。あ、子瑜殿。そちらまで持って行きますので、立とうとしないで大丈夫ですよ」

起き上がってこちらへ来ようとしていた、布で顔を隠した人物を言葉で制し、寝台の隣にある机へお盆を置く。そして、二つ並んだ寝台にいる娘さんたちへ挨拶をした。

「おはようございます、子瑜殿、子麗さん。お加減はいかがですか？

あと、その顔の布外しませんか？ 顔色が見れないんですけど」

「おはようございます」

「おはようございます、子方さん。やはり熱が出ているのか悪寒がしますし、体が少しだるいです。あと……やはり殿方に今の顔を見られるのは」

声色から判断するに、倒れた時に比べれば大分ましなようだ。

子麗さんの顔色は……熱があるせいだろう。やはり良くない。しかし、声色はそこそこ元気だ。発疹ももう収まっている。

子瑜殿はまだ発疹が収まっていない。そのため布で顔を覆ってい

る。発疹だらけの顔を見られるのが恥ずかしいらしい。まあ、思春期直前の乙女予備軍としてはしょうがないか。

スケキヨとか、大谷吉継とか想像してもらおうと今の子瑜殿の姿が分かりやすいかもしれん。

……自分から言い出しておいてなんだが、スケキヨは違うだろ。

湖に頭から突き刺さる子瑜殿の姿を脳裏から追い出す。

「麻疹の発疹は疱瘡とは違い、痕が残りません。もうすぐ収まるかと思えますので、今しばらくご辛抱ください」

「はい。ご迷惑をお掛け致します」

「それは言わないお約束です。それよりも食欲が有るようなら、朝食を摂ってください。きちんと食べないと、治る病気も治らないので」

そんな約束してましたっけ、とか言っている孔明さん。さっさとお粥を器によそってあげてください。

あとこれは個人との約束ではなく、世界との約束です。主に時代劇。

子瑜殿の面倒は孔明さんに任せて、私は子麗さんの元へお粥の入った器をレンゲと一緒に持っていく。

そのまま寝台横にある椅子に座り、器からレンゲでお粥を掬って息で吹いて冷ましてあげる。

「はい、口開けて。 あーん」

「あーん」

大きく開いた子麗殿の口に、レンゲを入れてあげる。口を閉じたタイミングでレンゲを引いてあげる。

口を閉じて、味を確かめるようにもぐもぐしている。

飲み込んだ後すぐに口を開いてきたので、もう一度同じように食べさせる。

結局、器が空になるまでお粥を食べさせ続けた。雛鳥に餌をあげる親鳥の気分だった。雛鳥って可愛いよね。まあ、あれは口移しだが。口移しはありえない。幼女と咀嚼プレイとかどんな変態だ。

結局土鍋の中身は二人で食べきってもらえた。今二人は私が持つ

てきた桃を食べている。これは冷ます必要が無いので、子麗殿にも自分で食べてもらっている。

ほら子麗さん、焦らなくてもまだ桃はあるから落ち着いて食べましょう。果汁が垂れてます。

これだけ食欲あるようなら、完治も早いかもしれないな。

そうやって待っている間に、子山殿も部屋へ戻ってきた。ちなみに、子山殿は絶賛家出中で諸葛家に逗留中である。もう父に愛想が尽きたそうだ。妹捨てられそうになったのを許したら鬼畜の仲間入りだものなあ。

生活費は私が諸葛家へ納めているので、負担にはなっていないだろう。やたらと子山殿には恐縮されたが、あまり気にしないように伝えられている。半分はブッチャーへの嫌がらせだし。

さて空腹も落ち着いたし、気の進まない相談を始めたんだけど。軽く子山殿へ目配せして、扉を指差す。子麗殿のいる前で、家族に捨てられた等の話をするのは避けたい。

……おい、何故首を振る。

「遥にも聞かせる必要があると思います」

「いや小さい頃から重い経験を積みまけると、性根が歪むよ?」

ソースは私。

「いや、どちらにせよ家に戻る事はありませんので、何処かで話す必要があります。ならば、すぐ話しておいた方が良いかと」

そういう判断か。確かに一理ある。しかし、七歳の女の子にそういう話するのは非常に気が進まないのですが。

「あ、あのー」

そうやってどうしようかと考えていると、子麗殿が恐る恐る手を挙げた。

「私の事をし、心配してくださいさっているんですよね? だけど、大丈夫です。私が父様にひひんみんくつに捨てられそうになった事はし、知っていますから」

……いやいやいや。なんで!?

「わ、私、父様が信にひんみんくつへす、捨ててくるように言った時い

しきが有ったんです」

「……」

子麗さんが気丈に言葉を作っているけど、目尻に溜まった涙と時々詰まる言葉で、どれだけこの娘が傷ついているのかが分かる。

私は意識的に大きなため息を吐く。最初から有無を言わずに子山殿を部屋の外へ引っぱり出すべきだった。病気で寝込んでいる子供に余計な心労をかけてどうする、私

内心、自分自身の間抜けさとブツチャーに対して腸が煮えくり返っているが、表情に出さないように気を付けながら子麗さんに向き直る。

「本当に聞くの？ 君にとって辛い話になるよ？」

我慢できずにこぼれ出した涙を自分の手のひらで拭いながら、深々と何度も頷く。

えずき出してしまい、何も言う事ができなくなってしまったようだ。

ゆっくりと立ち上がり、腕の中に子麗殿を抱き締めて背中をさすつてあげる。

そうしていると、我慢出来なくなってしまうたようで声を上げて泣き始めた。

(兄の役割取っちゃったなあ)

本来は子山殿に任せるべきだったのだが、つい体が動いてしまった。子供の泣き顔は前世から苦手なんだ。泣き止むように、背中を軽く叩いてあげる。

諸葛家の姉妹と子山殿も一緒に泣き始めてしまった。どんなにしっかりしているように見えても、まだ子供なんだからそりや泣くよなあ。

子供相手にまともに気を遣う事のできない自分に、際限無くへこむ。

あー、死にたい。

自己嫌悪しか出てこない。

これが原因で二人の熱が上がっているようだったら首を括ろう。

そうしよう。

しばらくするとみんな泣き止み、話をできる状態となった。とりあえず、いつまでも子麗殿を抱き締めていても問題あるので離れる。

服の前面が子麗殿の涙や鼻水で濡れているが、帰る時に着替えるし別に気にしないで良いだろう。

「それじゃ、今後の話をしようか。あ、病人は動かしたくないから子瑜殿には聞かれちゃうけど、問題ない？」

「はい、構いません。子瑜と孔明は友人です」

信頼に値する、か。

まあ、二人とも三国志でも信義を大事にしていたみたいだし、悪い事は起こるまい。

話を始める前に、厨房へ行き人数分の白湯を入れてくる。

「それじゃ、順番に行こうか。一応、二人の今後に関して、糜家がどういう立場を取るかは私が決めて良い事になったから。忌憚なく意見を言つて」

置いてあつた文箱を使う許可を子瑜殿に取つて、竹簡として束ねていない木片に文字を書き出す。話し合いたい議題だ。

文字は文箱が部屋にあるので諸葛姉妹のどちらかは読めるだろう。

- 一．今後二人が何処に身を置くか。
- 二．仮に歩家から出たとして、当面の生活をどうするか。（衣食住）
- 三．現在の二人の技術（スキル）。どうやって金を稼ぐかの方針。こんな所だろう。

「まず、さつきも言つてたけど二人は家を出るで良いんだよね」

「はい、そのつもりです」

「ちや、嫡子が家を出て妹もそれに従うつて……。歩家に跡継ぎが

居なくなりますね」

孔明さんの口元が引きつっている。

まあ、しょうがないだろ。

もつとも、あのブツチャーの様子だと隠し子居ても驚かんが。

糜家にとつてもその話題はブルーメランだが、みんなして叔子を猫可

愛がりする気満々だし、糜家うちの人間は誰も気にしない。叔子可愛いよ、叔子。

「あ、一つ補足。歩家お取り潰しになるかも。だから子山殿たちが家を出るのは正しいと思うよ」

それだけ言つて、白湯を口に含む。

「……は？」

おう、見事にはもっているな。

子麗さん以外の三人が口をぽかーんと開く顔を見て、そんな場違いな感想を抱きながら、今後の話の持つて行き方を考える。まあ、子瑜殿の顔は見えないから何となくそんな顔をしてそうな声だったという推測なのだが。

「はわわわわ!? どういう事ですか!?!」

「ちよ、ちよつと待つてください!」

孔明さんと子山殿が声を上げる。子瑜殿は考え込み始め、子麗さんは「お取り潰しって何?」と呟いている。

「お取り潰しっていうのは、歩家が無くなるっていう事だね。そうされるかもしれないっていうのは、陶州牧様が今回の歩家当主の行動に愛想を尽かす可能性が高いから」

義父さんが今回の一件について、州牧様の耳に入れているだろう。

「疑うわけではありませんが、本当にそうなるのですか? 自分で言うのもなんですが、歩家は昔は名家と言つて良い家系でしたが、今は没落してしまっています。わざわざ州牧様が干渉してくる理由が思い付かないのですが」

困惑を隠せずに、子山殿がそう口にする。

「まあ、何もなければそうだったんだろうけど。いくつか理由があつてね」

「理由ですか?」

「うん。まず、糜家から援助したお金を他家へ渡していたというのは知ってる? あ、別にその事に対して糜家の人間として何か子山殿達に言うつもりは無いよ。僕から当主殿に散々言つたし」

「……はい、最近当家に来る方は金の無心が用件なのが大半でしたし。」

それから父のかけたご迷惑を深くお詫びいたします」

うん、ATMにされてたわけね。

父のやった事だからって、息子が必ず償う必要は無いと思う。なので気にしないで良い、と伝えておく。

「最近、その援助をしていた人間のうち数人が、賄賂を使って出世しようとしたんだって。で、金の出所が歩家じゃないかという噂が州政府上層部に囁かれている」

当然、州牧様の耳にも入っているだろう。

「なので歩家の資金源を断ちたいと考えて、義父さんと私が歩家当主殿に資金援助の終了を申し入れに来た。ちなみにそれが私と義父さんがここに来た当初の理由。この町全体で麻疹が流行した事で、大分目的が変わってしまったけど」

話が逸れるが、現在私がこの町に残っている理由は、麻疹の治療法の確立が主になっている。正確には高熱を出した際の看病法だが、名前が知られている麻疹の治療方法と言った方がインパクトは大きく、人の頭には残りやすいだろう。

この辺一帯の麻疹患者は一ヶ所に集められて、二人と同様の治療を施している。

町の有力者へ、他の町内へも方法を広めてもらえるように頼みはしたが、情報伝達が遅いこの世界ではあまり期待できない。できるだけ助かる人が増えれば良いとは思っているのだが。

流行が収まり次第☑から人を派遣してもらって、区画ごとに罹患者全体の数と死亡者数で死亡率の統計を作る予定だ。

この辺一帯の死亡率が明確に低ければ、効果有りと認めてくれるだろう。その後、治療法を徐州から中華すべてに広げてもらえれば言う事ない。

ついでに、州の役人達に統計の考え方を学んで欲しいという意図もあるが、そちらの説明は割愛する。

まあ、話を戻そう。

「さらに今回、子麗殿を治療する努力を放棄した事も問題になる」

子麗さんが体をびくつと震わせた。頭を撫でて落ち着かせよう。

おう、気持ち良さそうに目を細めている。撫でられているときの王虎の表情を思い出し、和みながら話を続ける。

「十年以上前には、陶州牧様にもご子息がいらつしやっただけど、幼い頃に流行り病で亡くられている。その後生まれたご息女も同じ病で亡くされたらしい」

それがこの世界の陶商と陶応らしい。既にこの世にいないとは。

「その病が麻疹である、と」

子瑜殿の言葉に頷きを返す。

「はい。症状を目で見えてはいいませんが、話に伝え聞くに麻疹の可能性が高そうです」

「遥と自分の子供とを重ねるのではないか、そうお考えですか？」

子山殿の言葉にも、肯定を返す。

「おそらくはそうなると思っっている。当時の州牧様は『もしも治せる医者があるならば、万金を払ってでも治療してもらおう』もし神仙が我が命と引き換えに息子の病気を治してくれるなら、喜んで差し出す』とまで言っていたそうで。その分、お亡くなりになった際の嘆き様も凄まじかったらしいよ」

「はわわ。家族の麻疹を治す努力をしなかったら怒り出しそうです」

「まさにそこだよね。治せる可能性を提示されていながら、自分が病気になるたくないから拒否したんだから」

どれだけ望んでも自分が手に入れられなかった手段を持ち合わせながら、こんな物要らないと捨て去った人間に対してどれだけ怒るんだろう？

「陶州牧様は元々軍閥上がりの武断派だからね。感情のままに行動する可能性は十分有るよ」

そう言つて、取り潰しの話を締め括る。

「じゃあ、議題に戻ろうか。歩家を出て、二人はどこで暮らすの？」

「できれば、このまま准陰で暮らしたいと考えていますが……」

「まあ、難しいよね」

子供二人だけで暮らすのは、色々な意味で人目につく。子供が相手

だと思つて、強盗する輩がいなくても限らない。諸葛家も、一度に子供二人が増えると財政的に厳しいだろう。

さらに、歩家が本当になくなってしまった場合、人々が噂を口にするだろう。勿論悪い意味で。そういった事を見聞きしながら生活するのは針のむしろとなるだろう。

仮にお取り潰しがなかったとしても、同じ町に住んでいるとブツチャーからの嫌がらせが来るだろうし。

三人で考え込み始めてしまった。子麗さんはそんな三人を眺めて不安になつてしまったのか、泣きそうな顔をしたり、一瞬顔を明るくした後落ち込んだ顔をしたりと百面相をしている。

ずつとこうしていても、答えを出すのは難しいだろう。妙案が出るようならそれに乗ろうと考えていたが、出ないようなので口を開く。

「ここで提案があるんだけど」

四人の目がこちらを向く。私に注目した事を確認し、私は言葉を続ける。

「私と従姉が☒で暮らす事になるから、今住んでいる家が空き家になるんだ。良かったらそこに住まない？」

これが、私がずつと考えていた解決方法だった。

議題の二、三に関して一度に片がつくのだ。二の住居の問題は解決する。衣食に関しては当面麿家が援助すれば良い。

三に関しては、農業と土地管理の書類仕事をしっかりやってくれれば良い。それから、時々義父さんの手伝いもしてくれると助かるな。

子山殿が識字能力を持つ事と、計算能力がある事は確認済みだ。衣食住を保証する対価としては十分だろう。

さらに、子山殿が今後文官としてキャリアを積む際にも大きなメリットとなる。仕事の仕方を覚えると同時に、現役の官吏、武将と顔を繋ぐ事ができる。人脈は個人の財産となり得る物だ。

あの村なら、親代わりをしてくれる人間も多いので大人が居なくても大きな問題にならない。

さらに、麿家としてもメリットがある。

子山殿が成人した際に家を復興させれば、纏れまくってた歩家との

関係が改善される。

さらに歩家の御曹司を保護する事で、ブツチャーに代替わりしてから歩家から離れていった人々の歓心を買うことができる。名家の御曹司を保護をしたという名声を得られるだろう。

あと、これは私以外には分からないが、将来一国の丞相となる優秀な人物と懇意になれる。このメリットは計り知れない。

上の事を噛み砕いて説明をすると、子山殿は内容を吟味し始めた。子瑜殿は静観の構え、子麗殿は自分の想像よりも良くなると考えたのだらう、ニコニコ笑顔を作っている。

孔明さんは……なぜこつちを訝しげに見る？

「孔明さん、どうかしましたか？」

「はわわ！え、えつと……」

声をかけると、驚き口ごもる。本当に何なんだ？

そして、意を決したようにこちらを見て、こう言った。

「歩家の乗っ取りとか考えていませんよね？」

「……」

その発想は無かった。

子山殿は真意を見定めようとするかのように、こちらへ視線を投げている。子麗さんは再びおろおろし始めた。

さて、どう答えようかと少し考えていると、子瑜殿が孔明さんの両頬を引っ張り始めた。恩人に対して失礼な事を、とか言っているからおそらく折檻なのだろう。痛い痛い孔明さんが言っているが、離す気は無いようだ。

……頬が餅みたいに伸びてるな。カメラがあれば写真に収めたいくらいだ。

「まあ、孔明さんにはそのまま聞いてもらうとして」

「はわわわわわ!?!」

やかましい。抗議は聞き流す。

「結論からいうと、そのつもりは全く無い。もし乗っ取りをするつもりなら、わざわざ子山殿達を保護する必要なんて無いわけだし」

「ふむ。……続けてください」

子山殿は一時警戒を解いて、こちらの話を聞くつもりになってくれたようだ。

「孔明さんが言ったのは、子山殿を事故に見せかけるなどで除いて、子麗さんを娶る事で歩家の相続を狙うって事だよな？」

「ふあい、そのとおりでふ」

喋りづらそうにしながらも、肯定を返してくれる。

「そんな事をせずとも、私は現当主の甥に当たるんだよ？　このまま子山殿達が野垂れ死ぬのを待って、成人してから歩家を再興した方が手取り早いじゃない」

もし孔明さんの懸念を実行に移した場合、リスクが非常に大きい。

子山殿を殺した嫌疑がかかる事。

子麗さんが復讐を企む可能性。

過去に歩家と繋がりある人間からの非難。

などなど、簡単に思い付くだけでもこれだけある。没落名家を継ぐためだけに、そのリスクを冒すことは損得が見合わないだろう。

「私にとって歩家は、そのまま待っていれば熟して落ちてくる事が分かっている果実なんだよ。わざわざ怪我するかもしれないのに木を登るつもりはないよ。それをせずに、果樹の持ち主を助けようとしている。それを果実を欲しがっていないという証にするのは駄目かい？」

流石に物的証拠は出せんぞ？

誓紙書いても良いが、日本と違うこの世界でどこまで効果あるんだ？

そう考えていると、ようやく折檻から解放された孔明さんが赤くなった頬を手のひらで押さえながらこう口にした。

「うう、ヒリヒリします。　け、けど遙ちゃん可愛いし、弱味につけてこいで無理矢理……とかするんじゃないですか？　『歩家を再興させたければ……』とか、『嫌、なんでこんな気持ちになるの!？この人は父の敵なの!』とか。　この間読んだ本だとお姫様がそんな目に遭ってました！」

……。

「はわわわわ、痛い、痛いです!!」

無言で孔明さんのこめかみに拳を作った両手を当ててうめぼしをする。

それを実行に移したとしたらどんな鬼畜だ、私は。

孔明さんは頬に当てていた手を、私の手首に伸ばしてなんとか止めようとする。

そこに両側から手が伸びて、がら空きになった頬を引っ張り出した。

「朱里、あなたは諸葛家の者としてもう少し慎みを覚えなさい。というより、その年で何て物を読んでいるのですか」

「幼い妹の前で何を言い出すのですか、君は。時と場合を考えなさい」

「いひゃい、いひゃいです!! やめてくりゃひゃいー!!」

そう説教を始めた二人に、何が起こったか分からず、わたわた慌てる子麗さん。うむ、カオスだ。

というか、二人も孔明さんの言った事分かるのか。耳年増ばかりだな、ここ。

一通りお説教が終わってから孔明さんを解放し、白湯を口に含み一息つく。

そうして、子山殿にどうするかを改めて問いを投げた。

「はい、できればお世話になりたいと思います。先ほど疑いの眼差しで見ってしまった不明は伏してお詫び申し上げます」

「了解しました。それじゃ、義父さんに決定を手紙で送っておくね。数日このまま看病して、子麗さんの麻疹が治って、体調が問題無いようだったら☒にいる義父さんと顔合わせをしに行こう」

私の言葉に頷く二人。

孔明さんは友達が遠くへ行くからだろうか、少し寂しそうだ。

子瑜殿は、じっと俯いて考え事をしているようだったが、意を決したように私の方へ向き直った。

姉妹だけあって、先ほど発言した際の孔明さんと雰囲気非常に似

ている。

……まさか問題発言しないよね？

そうこうしているうちに、寝台の上で体を起こし、拝礼の姿勢を取った。

「改めてご挨拶させて頂きます。徐州・琅邪、諸葛珪が長子、名を瑾

と申します。この度は我が友、歩子麗、並びに我が身を病魔よりお

救い頂くための尽力、深く感謝致します」

「さらに、先代当主より続く歩家との確執に囚われる事無く、困難に窮する我が友たちへ救いの手を差し伸べる仁愛と大度、誠に敬服致しました」

「願わくばどうかこの拝と我が真名『藍里』らんりを受けられ、義兄としていまだ若輩たる我が身をお導き頂きますよう」

「……」

激賞である。

それに加えて、「義兄妹になって頂けませんか？」という申し出を真名と共に差し出されている。

思わず固まってしまった私や、絶句している他の三人を余所に、子瑜殿はずっと私に向かって拝礼を取り続けるのであった。

「ふむ。 それでは子方殿も楽毅は名将だったと思うわけですか」

「うん。 楽毅は『残り二城まで追い込んでおきながら斉を滅ぼせなかつた将』ではなくて、『残り二城まで斉を追い込んだ名将』として見るべきかと。 実際に、田単に恵王との間に反間の計を仕掛けられるまでは止めようが無かつたわけですし」

そこまで話して、手元の茶碗の中身で口を湿らせる。

周りにいる面子の顔を見ると、子山殿は思案顔をしており、孔明さんは顔を輝かせてこちらを見ている。

さて、なぜ私たちが楽毅について論じているかというところ、孔明さんが膨れて拗ねていたからだ。 今日私が諸葛家に来る前に『将来どうなりたいか』という議題で話をしていたらいいのだが、その中で孔明さんが『楽毅や管仲のようになりたい』と言った事を端に発しているらしい。

そう言った孔明さんに対して、し、藍里と子山殿が異を唱えたのだ。 『楽毅は、斉を残り二城まで追い込んでおきながら、素直に解任命令を受け入れた愚将である』『管仲は単なる田舎者に過ぎない』と言われ、さらに自分達のように漢の三傑を目指すべきだと言われた。そして、孔明さんがむくれた。それはもう、物凄くむくれた。 まあ、尊敬していると挙げた人を否定されたらそりゃ怒るだろう。

余談だが、子山殿は韓信の名前を挙げており、藍里は蕭何の名前を口にしたそう。 韓信挙げているって事は、子山殿はやはり武官志望なのかな？

完全に忘れていたが、この頃まだ楽毅も管仲も評価が一時的に下がっていたんだよな。 漢建国時に活躍した名臣たちばかりに注目し、春秋戦国時代が忘れられつつあったのが原因だったかな。 だからこそ、子山殿達は孔明さんの言葉を否定したんだろうが。

私個人としても、楽毅も管仲も好きな偉人だ。 なので、孔明さんの

味方として楽毅と管仲について語る事にして今に至る。

藍里と互いの真名を交換してから、数日経っていた。麻疹を患っていた二人からはすでに発疹も消えており、熱も今朝下がった。順調に快復してきている事が分かる。しかし高熱を出していた事で体力が落ちているため、あと数日間は外出禁止を言い渡している。ここで風邪でもひかれたらまずいのだ。さらに、まだ二人から麻疹が感染する可能性もあるので、完全に快復しきるまでは人と接させるわけにはいかない。

まあ、その間藍里とは起きている時に会えていないから真名でまだ呼んだ事がないんだけどな！

……なんか間が悪いのか、いつも眠っている時にしかかち合わないのだ。そろそろ☒への出発も近づいているのだから、きちんと挨拶しておきたいのだが。おかげで未だに子瑜殿と心の中で呼びそうになる。多分真名で呼んであげないと落ち込むだろうし、気をつけないと。

そして、今日私が訪れた時も二人が眠ってしまったので、起きさないように居間に場所を移して子山殿と孔明さんの二人と話していたのだ。

いや、それからもう一人。私の膝の上に叔子よりもさらに幼い女の子が座って眠っている。諸葛均、字は叔起。藍里と孔明さんの妹だ。やっぱり居たんだね、諸葛均。

子瑜……じゃなくて藍里を治そうとしていると、孔明さん経由で伝えられているため、警戒する事なく懐いてくれた。

膝の上にいる叔起の頭を撫でながら、先程の言葉の続きを口にする。

「あくまで個人的な意見ですが、楽毅は臣の本分を全うしようとしたと思うんですよ。だから恵王より司令官解任の命令が届いたらそのまま抗う事無く受け入れた。野心があつたならば、田単の言った通りに斉を征服して斉王を名乗っていただろうね」

けどそれをしていた場合、やはり破滅していたろう。連合軍を自らの野心のために利用したと各国からそっぽを向かれ、今度は自分自身

が連合を相手に戦わなくてはならないのだから。それでも楽毅だったらなんとかしてしまえばそれで恐ろしいのだが。

「さらに『報遺燕恵王書』で燕に対しての忠義も示しているし、行動が一貫しているんです。あくまで、自分は將軍であり、国と王に従う存在である。斉の軍を打ち破った軍事能力、連合軍を纏め上げた統率力、占領地の民を手懐けてみせた民政能力、それから今話した主君への忠誠心。どれをとっても一級品です。どれか一つを持っていても名臣と呼ばれるでしょうに、すべてを持ち合わせているんです。名将である事は疑いようが無いでしょう」

そう言って楽毅に対する論評を止める。孔明さんは自分の味方が出来た事が嬉しいのか、しきりに嬉しそうに肯いている。

「なるほど。確かに、そう考えると楽毅は名将と呼ばれるにふさわしい人物だったわけですか」

「うん。特に忠義心に至っては、中華の歴史の中でも屈指だと思う。そう考えると、目標に挙げるにふさわしい人物と言って良いんじゃないかな？ 実際に高祖も高く評価していたみたいだし」

それにしても、姉さんたちを相手に青空教室をやっていた頃を思い出すな。久しぶりに偉人の功績について語ると物凄く楽しい。官吏として仕官するのではなく、どこかで私塾でも開く事を本気で検討しようかな。個人的には結構向いていると思うんだ。

「楽毅については納得できましたが、管仲についても同じなのですか？ 蕭何や張良に比べると一枚落ちそうなのですが」

子山殿から追加で質問が来た。
よし、それじゃ管仲についても語るとしようか。

「客観的事実から語ろうか。管仲が誰に仕えたのかは誰かは知っているよね？」

「斉の桓公ですよね？」

「うん、正解。じゃあ斉の桓公と晋の文公、この二人に共通する点は何か分かる？」

「え？ ……名君と称えられている、というのでは不正解ですよね？」
「いや、それでも正解なだけだね。より正確に言くと、どんな文献

でも必ず春秋五覇に数えられている、になるね。これが管仲が仕えてた桓公が評価されているという客観的な事実」

ここで言葉を切り、また白湯を口に含む。

史記、荀子、漢書辺りが有名どころで、白虎通、四子講徳論でも語られてたかな。

「さて、それじゃ桓公が五覇に飛躍するにあたって、管仲が果たした役割について話そうか。鮑叔の推薦があったとはいえ、桓公と面会し即日宰相に命じられている辺り、その時に語った政策がかなり優れていたと考えられる。実際にやった事に目を向けると、既に時代に合っていないかった公田制の廃止。物価の安定策。製塩・漁業の振興による民の生活基盤の安定。それに伴う商業の活性化。他国民の流入の発生とそこからの人材登用。さらに不正に対しては厳格に対処する事で高い規律を保っている。これだけを宰相在任時にやってのけているんだ。実際にその政策の結果、国力が大いに富んで強兵を行う事もできて、斉と桓公は戦国五覇にふさわしい力を得る事ができた」

「というか改めて挙げてみると、いちいち政策に無駄が無いな。どれだけ先を見通せているんだよ。」

「そんな中でも、一番の功績は桓公に対する諫言だろうね。たびたび傲慢さを発揮しようとする桓公に対して、必ず叱りとばして正道に立ち返らせている。さらに、その上で桓公には必ず他国と交わした条約は厳守させている。脅された上で書かされた条約に関しても履行させたんだ。本当に恐れ入るよ」

その結果、斉の桓公は約束を必ず守るといふ評判が立ち、他国から絶対の信頼を寄せられるようになってるんだよな。

「管仲没後の桓公は奸臣を近づけたり色々とやらかしている。これも実際に斉を動かしていたのは管仲であり、桓公はそれに追認を与えていただけと考えればしっくりとくる。だから、実質桓公を五覇に押し上げたのは管仲の手腕であって、桓公自身の才覚ではないんじゃないかな」

実際に司馬遷は史記の中で管仲に、晏嬰と並べて最高の評価を与え

ている。

「桓公が管仲を使いこなしたが故に五覇になったのではなく、管仲の政治手腕が桓公を五覇に押し上げた、ですか。確かに、そう考えると桓公の晩年から没後の斉の混乱も説明がつきますね」

独り言のようにそう言い、しきりに頷きを繰り返す子山殿。どうやら納得してもらった事があったかな。

「ふむ。孔明、失礼な事を申しました」

「はわわ、分かって頂けたら良いんです。頭を上げてください」

自らの非を認める事ができ、頭を下げる事も厭わないか。子山殿も何気に器が大きいよな。そして、孔明さん嬉しそうだな、おい。けど、これくらいは自分の言葉で説得する事ができるようにしないと将来苦労しそうだよなあ。どうもこの子は引つ込み思案な部分が表に出て、自分の言葉を飲み込んでしまう傾向にある気がする。

その後も雑談を続けていたが、少しすると子山殿は夕食の食材を買いに出かけていった。居候している間はできるだけ諸葛家の家事を手伝うようにしているらしい。律儀な事だ。ますますブッチャーの血を引いているのが信じられなくなる。

ちなみに、私の膝の上でうたた寝をしていた叔起さんも起きて一緒に出かけていった。

孔明さんと二人になってしまったが、雑談を続ける。そんな中、孔明さんから質問された。

「そういえば、子方さんは誰か目標にしている人物は居るんですか？」
「うん。僕は鮑叔を目指そうと考えているよ。自分が優秀な執政官となるよりも、それを遥かに上回る優秀な人材をたくさん集めたほうが勢力は安定するだろうしね」

その方が徐州に暮らす私の大切な人達は平和に暮らせる。私の目的と一番合致する方法だろう。

「あ、ちなみに僕は子山殿も、藍里と孔明さんの事も評価しているからね。その気があるなら、いつでも義父さんを通して推挙するから」

それを聞いて孔明さんが少し面映そうだ。まあ、本音ではあるが褒め殺しに近い台詞だったしな。

けど……。

「孔明さんが陶州牧様に仕えるのは難しいかもしれないね」

「え？　なんでですか？」

私の言葉に不思議そうな顔をする孔明さん。ふむ、自分で気づいていないのかな？

「僕の目的は、徐州と自分に近い人が平和に暮らせるようにする事なんだよ。　だけど、孔明さんはそれよりもっと遠くまで見ているんじゃない？」

陶州牧は徐州以外の領地を奪い、覇を唱えようとは考えていない。だからこそ私は陶州牧様に仕える事を決めている。理想や野心だけを追い求めて足元を疎かにするような主君に仕える事は、私の目的を果たす事ができなくなるからだ。

陶州牧様に万が一の事があれば、姉さんと空さんの二人と一緒に下野して私塾を構える事も視野に入れよう。正史だったらともかく、この世界の劉備が演義の性格だったら確実に仲違いする自信がある。徐州を雑に扱いきななんだよ。

子山殿は、将来は分からないが現在には自分と子麗殿の事だけでいっぱいっぽいだろう。だからその間は、徐州に自分の居場所を作る事が目的となる。それは、私の目的とも合致する事から共に道を歩く事ができる。

しかし、孔明さんは違う。その目で見据えているのは徐州の事だけではなく、中華全体だろう。そして、今は歪んでしまっているこの漢を正道に返そうと考えているのだろう。

楽毅や管仲を目指す物として挙げた事からもそれが伺える。どちらにも主君を覇者にまで押し上げる事のできる人物だ。それを目指すという事は、徐州だけでは狭すぎるだろう。

史実の諸葛亮を考えると、それこそ飛ぶ事を決めた龍の様にどこまでも勢力を飛躍させる事ができる。確実に陶州牧様では主君として物足りなく感じ、他に主君を求めようとするだろう。

徐州だけが平和であれば良いと考える私とは、必ず道を違えねばならない時がやってくる事が約束されているのだ。

「孔明さんがやろうとしている事を考えると、確実に徐州だけでは足りなくなる。　だったら」

「陶州牧様に仕えるよりも、最初から仕えるに足る主君に仕えておいた方が良い、という事ですか」

「うん。　僕はそう思う。　正直孔明さんの才覚を徐州のために使ってくれるのならば、僕の目的はぐつと近づくから本当は一緒に陶州牧様に仕えて欲しいんだけどね」

けど、それは無い物ねだりだ。無理に仕えさせてもこの子の才覚は決して生かされない。それこそ、才能をゴミのように捨て去るような物だ。ならば、その手腕を全力で振るえる者に使えた方が孔明さんはずっと幸せだろうし、この国のためにもなる。

「……はい、確かにそうかもしれませんが。　私は力無い者が泣かされるこの国を正したいと考えています。　徐州だけが幸福であれば良いと考える子方さんとは、相容れる事ができないかもしれません」
「だろっね」

「けど、私が考えている国を正すというのには、徐州も入っています。だから、私が将来仕える方には必ず漢を正道に返して頂き、徐州も平和にしてみせます」

そう孔明さんは口にした。

確かに、孔明さんには他勢力に仕えて中華統一を果たしてもらい、国全体を安定させて貰った方が私の目的も間接的に達成できる。

けど、それは。

「中華統一とは、随分と高い壁を設定したね」

からかい混じりにそう口にする。そう、それは途方も無く難しい事だ。自分が仕える主には、過去に中華統一を行った始皇帝や高祖の様になってもらう。そう口にしたのだ。間違いなく他人が聞けば夢物語として笑うだけだろう。

「ええ。高ければ高いほど、壁を乗り越えた先に見える景色は貴く、美しく見えるでしょうから。　だったら最初から高い壁にしておいた方が、それを乗り越える努力を続けられるじゃないですか」

しかし私は、その言葉を返してきたこの子の事を信じられる。私の

知っている、この子と同じ名前を持っていた人物の業績を既に知っているのだ。信じないという選択肢はありえない。

ならば私から最大の信頼を示し、この子の後押しをすべきだろう。龍が飛び立つ際の雲の代わりとまではなれないだろうが、無いよりはましだろう。

口元の笑みを消して姿勢を改める。椅子に座ったままではあるが、手を組んで拝礼の形を作り孔明さんへ頭を下げ、言葉を口にする。数日前、私へ向けて真名を捧げてくれた藍里へ、返事をした時の事を思い出しながら。

「改めてご挨拶致します。徐州・東海、糜晃が養子、名を芳と申します。鮑叔が管仲の事を理解し、信を置き全身全霊で支援したように、私も貴女の仁愛、義心、礼節、智恵、信義に全幅の信頼を置かせて頂きます。そしてこの信頼が、貴女が望みを叶える際の一助とならん事を心より願わせて頂きます」

「貴女への信頼の証として、私の真名『麟』を捧げます。どうか貴女の大望が叶い、夜明けの度に日輪が何度も昇るように、再び漢の威光が遍く中華を照らさん事を」

そこまで言い切り、頭を下げ続ける。正面からはわわ、はわわと慌てる声が聞こえてきているが、無視して頭を下げ続ける。数分後、ようやく私が本気だという事を察したのだろう。孔明さんから頭を上げるように声がかかった。

「えと、えと。過ぎたお言葉、感謝いたしましたしゅ。あの、その私の真名は『朱里』と申しましゅ。貴方の信頼に応える事がれきりゅように頑張らましゅ！」

あう、噛んじやった。そんな声を呟きながら顔を俯かせてしまう。神聖な真名の交換を汚してしまったと思っただのかな？けど、二十一世紀で生活してきた私には、正直そこまで名前を大事にする習慣は無いのでまったく気にしない。

なので、噛み噛みだったその言葉に対してすぐに返事を作る。

「これからよろしくね、『朱里』。さっさとこの国を平和にして、僕の目的も一緒に叶えてくれ」

「あ……。 はい、よろしくお願いします『麟』義兄さん！」

ああ、やっぱり義兄として扱われるのか。

そんな場違いな感想を浮かべながらも、私はこの時代最高の頭脳の持ち主と信頼を深める事に成功したのだった。

第十三話 Any Way You Want I
t —正しい資質—

「それじゃ、朱里。 元気でね。 藍里にもよろしく伝えておいて」
「はい、麟義兄さんもお元気で。 子山さんと遥（練師の真名）ちゃんも元気でね」

「ええ、孔明も体に気を付けて」
「朱里ちゃん、また遊ぼうね」

淮陰での滞在予定最終日だった十日目。 諸葛家で療養していた練師さんが麻疹から快復した。 なので、歩家の兄妹二人を連れだつて淮陰から？ 県へ戻る。 今日はその出立の日だ。

町から出る際に見送りに来てくれたのは朱里だけだった。

そう、朱里だけだ。

藍里がこの場にはいないのは、麻疹からは快復したのだが、体力が落ちているところで今度は風邪を引いてしまったらしい。 らしいというのは、遠出を控えている私たちに伝染してはいけないと、諸葛家の皆さんが会わせてくれなかったからだ。 なので、藍里とは対面した上で別れを告げる事ができていない。 というか、そもそも未だに真名を交換して以来顔を合わせていない。 なんだろう、この間の悪さは。 ☒ に到着したら手紙を書いて詫びるとしよう。 お菓子や装飾品を添えて贈れば無作法も許してくれるだろう。 たぶん、きつと。

叔起さんは単純に起きられなかったらしい。 まあ、早朝だし子供だからしょうがないよね。

他のご家族の方は藍里の看病のために見送りに来れないでいる。 まあ、別れ自体は既に済ませているから、そちらには無礼を働いているわけではない。

さて、冒頭のように朱里と別れをかわして、私たちは麩家の行商隊の馬車に乗せてもらう。 そして姿が見えなくなるまで見えなくなるまで、朱里へと手を振る。

途中☒へ立ち寄り、義父さんに歩家の兄妹を麩家で養う事にしたと

伝える予定だ。が、すでにそう行動することは義父さんには分かっていたようで、州牧様へ話を通っているそうだ。この商隊が到着した時に手渡された手紙に書いてあった。完全に行動を読まれている。敵わないなあ。

病み上がりの子麗さんを消耗させるわけにはいかないので、敷き布を何重にも重ねてそこに寝かせる。馬車の振動で投げ出されないように紐で体を結んでおく。

そうしていると子麗さんは寝てしまったので、子山殿と雑談をする。その中で、藍里から真名を告げられた日の話が出た。

「それにしてもやはり驚きですよ。子瑜とは長い付き合いですが、私も真名を許されていないんです」

「あれ？ そうなの？」

言われてみればずっと字で呼んでいた気がするな。

「はい、彼女は昔の真名の使い方に憧れを抱いていますからね。家族以外では将来の伴侶以外には許さないと思っていたんです」

伴侶で。また随分と重い扱いにこだわっているな。

「子方さんは、そういう子瑜に真名を捧げたいとまで認められたんです。相当凄い事なんですよ」

正直そこまで評価されると面映おもへはゆい。なので、わざと話題をずらすと試みる。

「昔の真名の使い方って言ったよね？ という事は、今の扱いとは違っていたの？ それから、私の事は呼び捨てで良いよ。あまり年も離れていないことだし」

「はい、ではこれからは子方と呼ばせていただきます。私も呼び捨てで構いません。えっと……ああ、そうそう。真名にまつわる昔の習慣についてでしたね。現在まで残っている習慣は、許されていないのなら呼んではならない事くらいですね。しかし、元帝の頃まで遡ると捧げる時の礼法、授ける時の礼法、受けとる時の作法等が厳密に決まっているそうです」

なるほどな。確かに誤って真名を呼んだ場合の対応に比べて、交換する時の扱いが軽いと思っていた。交換時の作法は失われているの

であつて、昔は存在していたのか。

「だから、子瑜は子方へ真名を捧げた時の事を痛恨の一事と思つてい
るんじゃないでしょうか。身を清める事はできず、発疹のために顔
を隠したままで真名を捧げてしまったのですから」

「そこまで気にしないでも良いんだけどなあ」

それを言うなら、噛み噛みで私の真名を受けた孔明さんの方が無礼
になつちやうんじゃないか。

そう口にする、子山は声を出して笑つた。実に彼女らしい、光景
が浮かぶようだ、と。

その後ひとしきり笑つた後、子山は笑顔を消して真剣な顔を作り、
姿勢を正した上でこう言つた。

「すでにお分かりかと思いますが、子瑜はあまり人付き合いが上手で
はありません。堅い性格ですので、どうしても町の子供達からは距
離を取られてしまつていました。だから彼女の交遊の輪が貴方を
通して広がれば嬉しく思います。どうか彼女の事をよろしくお願
いします」

そう言つて、子山に頭を下げた。

子山からは広げないのか？とは聞けない。ブッチャーのおかげで、
士大夫達と距離を取られている以上、難しいだろう。どんな嫌味だ。

藍里が他の子供達から距離を取られるのは、委員長気質な女子がク
ラスメートから煙たがられるのと同じだろうか。真面目な性格の子
は浮く事があるからなあ。

けど、あまり固い返事をして私には似合わないだろう。だから、
努めて軽く言葉を返す事にする。

「まあ、ぼちぼち頑張るよ。彼女に失望されないようにね」

「はい、お願い致します」

私の照れを察してくれたのか、私の言葉に子山は笑つて頷きを返し
てくれた。

その後も子山と子麗さんとは旅の間に色々雑談をした。

子麗さんは年齢の近い叔子の事を話すと興味を持ったようで、会え
る事を楽しみにしている。

子山にはこれからしてもらいたい役目について話した。主に村と近隣の意見取りまとめが役目だろうな。それを領主である義父さんに伝えるのが主な役目となるだろう。

それ以外にも色々話をして交遊を深めたのだが、ここでは割愛する。

そういえば第一印象とは異なり、子麗さんはおとなしい。子山にその事について聞くと、普段はもつと活発なのだが、借りてきた猫のようになっているとの事だ。これから会う機会も増えるから仲良くしておきたいんだけど。

そしてそれから数日後、ようやく□にたどり着いた。

商隊には門をくぐったところで降ろしてもらい、そこからは徒歩で麩家の屋敷に向かう。もちろん義父さんと合流するためだ。

さつきからきよろきよろしている子麗さんの手を子山と両側から握り、三人連れだつて歩き出す。

子麗さん、物珍しい物を見かける度に走り出そうとするのはやめよう。腕が疲れる。

露天で売られているお菓子などを、少し買ってみんなで一緒に食べる。買い食いは普段より美味しく感じるしね。

子山は行儀が悪いと渋っていたが、最終的には美味しそうに頬張っていた。

そんな風に寄り道をしながらも、何の事件も起きずに屋敷にたどり着いた。今日着く事を知らせていたため、屋敷で待っていた義父さんに改めて子山と子麗さんを紹介する。

つつが無く挨拶は終わり、州政府での歩家に対する対応方針がどうなっているのかを確認する。

「やっぱり歩家は無くなる方向なんだ」

「ああ。やはり治療法を提示されていながら、無視した事が決め手となったようだ」

州牧様は大変お怒りだった、と苦い表情をしながら言う義父さん。普段大人しい人が怒ると怖いよね。

「それでも再興はできるんでしょ？」 わざわざ子山殿達を引き取る事

に決めたんだから」

「流石に分かるか」

ニヤツと笑う義父さん。悪い顔してるな。

「歩家の取り潰しは、州牧様から洛陽へ奏上して認可を頂く予定だが、それと同時にその後の歩家の扱いについても、徐州でおこなえるように許可をもらう予定だ」

「子山殿が成人したら、当主に立てて歩家を再興させる、か」

二人ともほっとした表情を浮かべている。まあ、そこが一番の懸念だったろうからね。

子山殿が当主となれば、再興した上で難なく往年の歩家の栄華を取り戻す事ができるだろう。

「それで今後の事だけど、二人には私たちが過ごしていた村の家で生活してもらおうと思うんだけど」

「……ふむ、それが良いか。ずっと町暮らしをさせるよりも、農作業に関わる方が農政を覚えられるだろうしな」

「よろしくお願い致します」

二人揃って義父さんへと頭を下げる。

私としては何より、信頼できる人間にあの村での農法を管理してもらえるのがでかい。理屈を知らずに真似されると、逆に凶作を巻き起こしかねない。特に堆肥とか、四輪作とか。

「麟。お前はあの村で行っていた農法をすべて子山へ引き継げ。」

農政書にまとめるのは……そうだな、後二年は村だけで実施して、特に問題が出なければ始めてくれ」

「うん、了解。作った農具の使い方も含めてで良いよね？」

「ああ。あの道具を使いこなせば作業の効率は大きく上がる。教えてあげろ」

了解つと。

はて、農具について何か義父さんに相談したいと思った事があったような。

……あ！

「そうだ、千歯扱きだ！」

「ん？ あれがどうかしたのか？」

「あれをそのまま使おうと、州姉さん達の仕事が無くなるかもしれない」
義父さんに後家殺しの事を伝えるつもりだったんだ。叔子が家に
来たり、淮陰に行ったりしているうちにすっかり忘れてた。

急いであの道具が脱穀を担当している人たちの仕事を奪ってしま
う事を伝える。

「それはまずいな」

「うん。 少なくとも周姉さんたちに何か別に役割を振るまでは、あ
れは使わない方が良くと思う」

「で、お前はもう別の役割を思い付いているんだろう？」

「……分かる？」

「分からないでか」

本当に思考が読まれてるな。

ただ、思い付いている事を実行に移せるまで少し時間がかかるんだ
よな。

「やりたいのはやまやまなんだけど、道具がまだできていないんだ。
設計は終わってるんだけど」

「それじゃあ、それは今度聞こう。 今日のところは、村に戻るまで
ゆっくり休め。 あと、二人を村に送ったら、海と公祐、叔子の三人
を一緒に連れてきてくれ。 戻り次第お前も含めて任官する事にな
る」

「分かった」

いよいよ仕官か。 けど、二人は文官だから良いとして、私の扱いは
どうなるんだ？

「州牧様に相談した結果、儂の配下に武官として組み込む事になった。

というより、他の人間ではお前の奇人っぷりには耐えられないし、
お前自身も腐らせる事になりかねん」

義父さんに聞いてみたところ、上のように返事がきた。

し、失礼な！ 誰が奇人だ、誰が！

しかし義父さんの下というのは、素直にありがたい。 やりたい放題
にできるって事だしな！

「とりあえず、百人預ける。好きなように使え。それから、将来的には儂の代わりに軍事行動を全て任せる事になるから、そのつもりでいろ」

百人か。それなら……。

「義父さん。村から文嚮と宣高も連れてきて良い？ 気心知れた奴が隣に居てくれた方が、色々とありがたいんだけど」

「あの二人もか？ それは構わないが、お前の下に組み込むのか？」
「できればそうしたい。とはいっても、二人とも腕が立つようになつてきているから、私よりも先に功績上げて出世しちゃうかもね」
その言葉に苦笑いを浮かべながらも、義父さんは許可を出してくれた。

よし、将来の名将二人確保。

それで義父さんとの対面は終わり、義父さんは仕事に向かった。手伝おうか？と言ったのだが、さっさと休めと言われた。とりあえず、諸葛家への贈り物を買ってきて、姉妹達へ手紙を書く事にしよう。

それから三日間をゆつくりと休養にあてて、私たちは再び馬上の人になり、村のある？ 県へと向かった。今回も糜家の商隊と一緒に行動する。

商隊といっても、用心棒として退役した兵士達が乗っているし、少数の盗賊相手ならば十分に撃退できる。流石に数百人とかの集団になると厳しいが、徐州では定期的に兵の巡回を行っているため大人数の賊が群れる事は少ない。そのため、十数人の人数でも安全に州内を移動する事ができる。

もつとも、脱走兵や逃亡兵達が集まって野盗化した連中もいるため油断はできないのだが。そういう手合いは少人数でも十分強力な集団となる。

幸い□からの旅路でも野盗達と出会う事はなく、無事に村へ辿り着く事ができた。

村も特に変わりはなく、盗賊の襲撃なども無かったようだ。

そのまま商隊と一緒に村の中へ入る。商人達はこの間収穫した麦などの農産物と、特産品である石鱈を買い付けるのだろう。村長宅で

もある空さんの家へと足を進めている。私たちも途中までは一緒の道なので連れだつて歩き、に戻る際にも一緒に連れて行って欲しいと頼みこんでおく。快く了解を得る事ができた。これで帰り道も安全に旅する事ができる。

麿家は空さんの家より手前があるので、商人のみんなとはここで別れて麿家に入る。敷地に入るとすぐ、足元に王虎が擦り寄ってきたので両手で抱え込み家の中に足を進める。子麗さんは王虎を撫でたそうに、ちらちらとこちらを見てきているが、家でゆっくり休みながら撫でれば良いと思うよ。

「ただいまー」

家に入り、いつもの習慣でそう口にする。それに続いて、歩兄妹が「お邪魔します」と口にした。そのまま返事を待たずに奥へ進み、多分誰かいるだろうとあたりをつけて居間へと入る。案の定、叔子がそこにいた。左手で閉じないように押さえている本に目を落とし、右手で筆を持ち何かを書いているようだ。勉強に集中していたから、私が入り口で言った言葉は耳に入らなかったのだろう。

私の姿が目に入ったからか、叔子は一瞬驚いた表情を作ったがすぐに嬉しそうに顔が笑み崩れて、椅子から立ち上がり私に飛びついてきた。

「ただいま、叔子」

「おかえりなさい、お兄ちゃん」

王虎を抱いたままなので、されるがままに抱きつかれながら叔子にただいまと口にする。叔子もそれに返事を返しながら、顔を私に擦り付けてくる。うん、だんだん行動が猫に近くなってきた気がする。

まあ、そうやって嬉しそうにしてくれるのは良いんだが。

「叔子、お客さんがいるから」挨拶して」

その言葉で私の隣に子山達が居る事に気づき、慌てて私から離れて頭を下げた挨拶した。人前ではしたくない事をしたのが恥ずかしかつたのだろう。顔真っ赤になっている。

それに応えて、子山と子麗も挨拶を叔子に返す。

一息つけようと、抱いていた王虎を叔子に渡してから人数分のお茶を入れる。

姉さんは空さんの家へ行っているらしい。私から先触れの手紙を出していたので、商隊も一緒に来る事が分かっていたからだろう。価格交渉の手伝いをしにいったとの事だ。暗算速いし、割合計算もできるからね。会計係として手伝うにはうってつけの人材だしな。

姉さんはあがり症だから交渉その物はあまり得意ではないが、その辺りは空さんが笑顔で愛想をふりまきながら話をまとめるのだろう。元々の容姿が良いため、男相手の交渉では有利に展開できる。それに声が綺麗なためか、話している事を非常に聞き取りやすく、誠実に話をしていくように聞こえる。さらに聞いているうちにどんどん話しに引き込まれて、最終的には相手が空さんの提案に対して頷く事が多い。お使い孫乾半端ねえ。

お茶を入れて戻ると、叔子と子麗さんは猫を撫でながら話をしていった。子山はそれを微笑ましそうに眺めていた。子山殿、なんか年寄りくさいぞそのスタンスは。

私以外の三人で自己紹介をしてもらった後、叔子に☒へ引越す事を伝える。私や姉さんが一緒に行くとも伝えたので、コクコクと頷いてくれた。

「ところで叔子、その服」

「うん。空さんが昔着ていた服。空さんから貰ったの」

私が出かけた後に、空さんに昔の服を見せてもらったようだ。白いシャツに膝丈の長い黒いジャンパースカートを身に着けている。清楚な感じで可愛い。空さんは確かにこういう格好が好きだったよなあ。確かに空さんの雰囲気によく似合うんだけどね。

似合っていると誉めてあげながら頭を撫でる。嬉しそうに笑ってくれると、こつちまで嬉しくなってくるね。

逆に子麗さんは丈の短い活動的な格好が好きみたいなので、姉さんの昔の服を着せてあげると喜ぶんじゃないかな。キュロットスカートとか、ミニスカートとか。

姉さんが帰ってきたら相談してみよう。

その後も四人で雑談をしていたのだが、私は用事が有ったので一人で家を出た。義父さんに言った様に文嚮と宣高の二人を誘う必要がある。

あいつらはあいつらで破天荒な部分があるからなあ。上手く説得する事ができれば良いんだけど。

そんな風に考えながら、二人がよく遊んでいる場所まで私は歩みを進める。

いつもの遊び場に辿り着くと、そこには村の子供たちが大勢一緒に遊んでいた。叔子もここに混ざって遊べば良いんだろうけど。けど叔子は大人しすぎて、この子達に振り回されて終わっちゃうか。

思考を止めないまま彼らの方へと近づいていく。

やがて彼らのうちの何人かが私が居る事に気づいて声をかけてくる。

「おー、子方兄ちゃん！」

「帰ってきたんだ、一緒に遊ぼう！」

「お兄ちゃん、こつちこつち!!」

子供たちからいつせいに声をかけられる。子供は元気なのが一番とは思いますが、元気すぎるのも如何な物だろうか。少しうるさい。

ひとまず彼らの中に目的の二人が居ない事は確認したので、彼らに二人の所在を聞いてみる。

「文嚮兄ちゃんと宣高兄ちゃん？　なんか特訓するって言ってたよ」

「俺たちは子方を超えるために強くなる！」　ってかっこつけながら言ってたよ」

「北から村を出たところで何かしているみたいだよ」

特訓って。というか、私を倒すための特訓って。後数年すれば特訓無しでも勝つ事ができるようになるだろうに。なんという時間の無駄遣いを。

ひとまず、特訓（）中の二人に会いに行ってみよう。

「それじゃ、二人に用事が有るからそっちに行ってみるね」

子供達から不満の声が上がる。申し訳ないと思うが聞き分けてもらおう。

子供たちと別れて、その足で北へと向かい村の入り口へと向かう。そこには、大量に掘られた穴と、こちらには目もくれず懸命に土を掘り返している二人の少年が居た。

あー、うん。ツツコミどころが満載すぎるんだが。

とりあえず馬車が通る際の障害になるので、不意打ちで殴り倒して、穴を埋めさせて、説教しよう。

宣言どおりこちらに気づいていなかった二人を不意打ちで殴り倒し、掘っていた穴から出ようとする度に小突き回し続け、二人から戦意が無くなったところで説教をして穴を埋めさせた。

一時間後、穴が奇麗に埋められた土の上で、正座している二人の少年を相手に説教をかます。というか、そもそもこれは特訓じゃねーだろ。

茶色い癖っ毛で髪の毛が逆立っている三白眼気味の少年が臧覇。字は宣高。

黒い短髪で太い眉毛と意思の強そうな瞳が特徴の少年が徐盛。字は文嚮。

どちらも私の幼馴染であり、悪友である。

さて、何故わざわざこの二人が穴を掘ったかと言うと、私に対する落とし穴のつもりだったらしい。出来上がる前に来た私に文句を言った事から発覚した。手段を選ばずに頭を使って私に勝とうとしてきた努力は認めるが、他人に迷惑かけてまで私に対抗しようとするのはやめようよ……。

「で、だ。二人に用事、というか頼み事があるんだけど」

「断る！」

「喧嘩に負けたとはいえ、俺達の心はまだ折れてはいない！俺を負かした相手の頼みを聞くつもりなどない！」

端的に断る文嚮と、無駄に熱く強気に言い放つ宣高。

「無視して話を進めるよ？ お前ら☒で仕官するつもりはない？」

そう言った私の言葉に、二人は不思議そうに私の事を見つめてきた。

「仕官？ 州牧様にか？」

「マジか!? 仕送りができるようなら親父達が喜ぶぜ!」

言葉の意味を理解した後、口々に言葉を作った。

「正確に言うと、今度私が仕官するから部下として付いて欲しいんだ。お前ら、腕が立つし、僕としても信用できる奴が部下に居てもらえると助かる」

こいつら、無駄な行動力で時々突飛な事をしでかすが、人格面では割と信用できるのだ。嘘は吐かないし、約束事は全力で守ろうとする。

逆に約束した事を守らなかった相手に殴りかかったりする短気な所もあるが、許容範囲と言えらるだろう。

「つて、お前の部下かよ!?!」

叫ぶ宣高。嫌そうな顔をする文嚮。

「それはそうだが、雑兵として経験を積む必要が無く、いきなり伯長(百人将相当)の直下だぞ? 条件としては破格だろ」

その言葉に考え込み始める二人。

しかし、私には二人が提案を呑む事を確信していた。

二人が無事に私の下に付いてくれるようなら、二十五名ずつ率いてもらおうと思っている。通常であれば部下を率いる立場になるまでに恐ろしい苦労があるのだが、そこを飛ばして隊率から始められるのだ。雑兵として使い捨てされる可能性もあるため、同じ立場に至るまでの死亡率は決して馬鹿にはできないし、数年間かかる出世までの時間を無しにできるのだ。メリットは計りしれないだろう。

そして、この二人はこの条件を上回れるコネなど無く、これ以上の条件を提示する相手を知らないのだ。さらに、この二人はそのメリットを無視できてしまえるほど愚かではない。

果たして、最終的に二人は私の提案に頷きを返した。

こうして私は名将二人を配下に加える事に成功したのだ。

後年、この時の事を思い出すと私は過去の自分に対して喝采を送る。ここで二人を誘っておかないと彼らの出世が遅れてしまう事になり、後々大問題が発生するところだったのだ。もしあの時に彼らが居なかったらと思うと、背筋に冷たい物が走る。

しかしこの時の私はその事を知る事は無く、単純に将来性豊かな人を召抱える事が出来た事を喜ぶだけだったのだ。

私達が^{たん}に無事に到着し、徐州に仕官するようになってから三日経った。姉さんと空さんは文官として義父さんの補佐について、毎日忙しそうに過ごしている。

それに対して私達男衆は、防具の支給が遅れていたため今日初めて配下と顔を合わせた。……のだが。

「しかし、まあ、なんだ」

「どうかしたのか、文嚮？」

私は手に持った書類に目を向けたまま、何か言い淀んでいる文嚮に対して言葉を続けるように促す。

あ、兵糧の量がおかしい。計算し直して差し戻しておこう。

「いや、な。俺と宣高はお前に剣で勝てた事が無かったわけだ」

「まあ、そうだね。とはいっても、あと数年すれば私では歯がたたなくなるだろうけどね」

「それはどうか分からないが。それにしても、お前に勝てなかった俺たちが、兵士達に楽勝できているんだが、州の防衛は大丈夫なのか？」

その言葉に私は顔を上げて書類から目を離し、私が義父さんから預かった兵士達相手に無双をしている宣高へ視線を移す。

目の前には自分の背より大きい斬馬刀を使って、数人の兵士をまとめて吹き飛ばす十二歳。

うん。シユールな光景だ。

一応、刃の付いていない背を使うように指示はしているが、それでも怪我は免れないだろう。

実はさつさと懐に入って組伏せれば、勝つのは難しくない。武器が重量がある武器だけに動作は遅いし、まだ子供であるから体重も軽いのだから。

しかし、斬馬刀の威力を目の当たりにした事で、腰が引けてしまっ

ている。あれでは懐に潜り込むのは難しいだろう。

宣高が巨大な武器を使用できる理由は、気にある。

そう、『気』である。ドラゴンボールなどでお馴染みのあれである。

この世界には気功の使い手が存在しており、気を使って筋力を増強したり、病気や怪我を癒すのに使う事ができるらしい。女性武将が存在しているのも、気の使い方が上手く、男以上の力を発揮する事ができる人たちがいるためだ。

鍛えれば気を飛ばす事もできるらしい。波動拳とか、かめはめ波がリアルで見られるのかもしれないのか。胸が熱くなるな。

ちなみに私は気を使う事はできない。気は誰にでも備わっている物であるのだから、頭で感じようと考えなくても自然と体に巡っている事が分かる物なのだそう。それを感じられるかどうかというのが、素質の差となるらしい。

この気を扱える素質の持ち主で私が知っているのは、今日の前にいる二人とその父親達しか知らない。そう考えると結構希少性の高い技能になるのだろう。

「お前らは武に関しては十分すぎる能力持つてるからな。一般兵くらいなら圧倒できるよ。流石に一騎当千の猛将とか相手取ると厳しいだろうけど」

「村じゃお前に負けっぱなしだったからいまいち実感できていなかったんだが、お前が言っていた、『俺たちは強い』ってのは本当だったんだな」

嬉しそうにしきりに頷く文嚮。

その様子に思わず苦笑してしまう。今の私の言葉は半分本当で、半分は嘘だ。この兵達は正規兵にしては弱すぎる。おそらく日頃の練兵が上手くいっていないのだろう。

ちなみに村に居た時に私が二人に勝つ事ができていたのは、ひとえに前世で剣術を習っていたおかげだ。剣術に限らず武術全般は、効率良く相手を制する手段だ。それをかじった事があるのなら、いかに気で筋力を強化しようと、理屈も何もなく力任せに振るうだけの相手に対処する方法はいくらでもあるのだ。

さて、何故この場で宣高が無双乱舞を披露しているかということ、兵士達が言う事を聞かなかったからだ。

練兵初日の今日、兵達は自分達がやりたい放題できるよう、新任の伯長とその副官に自分達が一筋縄に扱う事ができない事を示そうと思っただけらしい。自分達より年下の私達が上官になるのが気に入らないというのもあるのだろう。

そしてあまりに言う事を聞かない兵達に宣高がキレたのだ。文嚮も口には出さないが怒っている。

私は役職上二人を止める立場にいるのだろうが、あえて煽って焚き付けた。軍隊などの規律が求められる組織では、上が舐められる訳にはいかないのだ。そうじゃないと多少の劣勢で指揮が崩壊しかねない。

具体的にはこう囁いた。

「宣高に勝ったら新しい伯長に推薦する。五人までだったら同時にかかってくれて構わない」

こう口にしたら兵達は喜び勇んで宣高に向かっていった。キレてた宣高も舌なめずりしながら迎え撃つ。そして臧覇無双が始まった。

最初は余裕そうにニヤニヤ笑っていた兵達だったが、一人が斬馬刀でホームランされてからは顔が引き攣り始め、二人目が飛ばされてからは必死の形相となり、三人、四人、五人目と飛ばされた後は、泣きそうな顔をしながら向かっていった。まあ、結果ホームランされるんだが。

あ、考えている間に最後の一人が吹っ飛ばされた。とりあえず宣高を止めて、兵達を労おう。飴と鞭って重要だね。

最後の一人が飛ばされた時にはもう夕暮れ前だったので、今日はそのまま解散とする。というか、死屍累々となっている兵達相手に練兵しても何も身につかない。明日から頑張ってもらおうとしよう。

宣高と文嚮は体を動かし足りないようで、二人で立ち会いを始めた。兵達は二人の次元が違う動きを見て、あんどりと口を開けて呆けていた。安心してくれ、私もあんな動きはできない。

そんな二人を視界の端に収めながら、私は兵達にはゆっくり休むよ

うに伝えて解散させる。比較的良く粘っていた十名には金を握らせて、気前の良い上司を演出する事も忘れない。頑張ればそれだけ稼ぎが多くなる事が分かれば、明日からの鍛練に身が入るようになるだろう。

人心掌握、人心掌握。金で兵の士気と信頼が買えるなら安い物だ。とりあえず今日の練兵での収穫としては、今のままでは兵達は実戦で使い物にならない事が分かった。

兵達は、上官の命令に服する規律が薄く、強敵を相手にしても諦めない強い意思が無く、難敵に打ち勝つための工夫もしなかった。

これは徐州の將軍達の用兵が、個人の武力が高い兵を中心に行われていたからだろう。賊討伐のように敵が弱く、攻勢を維持する事ができるならばその辺りは必要なく、前がかりに攻め立てるだけで事足りる。しかし、ひと度劣勢に立てば粘り強く守勢を行う事も、工夫により主導権を取り戻す事もできないだろうし、すぐに士気が崩壊して裏崩れを起こす事になるだろう。まして、私が理想としている組織戦を行うなど、夢のまた夢といったところか。

明日からの練兵で、ある程度ましにしていかなければならないだろう。

とりあえず、明日が有る事を忘れて白熱した鍛練をしている二人が終わるのを待って、明日からの鍛練の方針について話し合うとうとう。

結局日が落ちきるまで二人の鍛練は続き、私はかなりの時間待たされる事になった。

時間はあまり無いが、打ち合わせを始める。

「時間も無いし、さっさと終わらせるよ。二人は今日の鍛練をどう見た？」

「弱すぎる、とはさっき言ったな。少なくとも十合は俺らと打ち合えなくちゃ駄目だろ」

とは文嚮の言葉。そうはいうけど、宣高の斬馬刀とまともに打ち合うのは私でも無理だぞ？

「それより数人吹っ飛ばしただけで怯えて及び腰になった事の方が問

題じゃねーか？ あんなのじゃ強敵見たら一目散に逃げ出しかねねーぞ」

これは宣高の弁。先程私が持った感想とほぼ同じ意見だ。

二人とも、兵達の能力に不満が有るようだ。それならとりあえず、兵達の能力の底上げは二人に任せるとしよう。殺さないよう、大怪我させないように気を付けてくれれば良いや。

「それじゃ、明日からはその辺を中心に鍛えよう。予定どおり二十五名ずつ二人に預けるから、近接戦闘を中心に鍛えて。先に面子は選んで良い。私は残りの五十名を遠距離戦中心に鍛えるよ」

「ああ」

「分かった」

前世の子供の時に遊びでやっていたあれを集団戦で使えるようにできれば、相当有利に戦運びができるようになるのだが。ただ、コツを掴むまでが難しいんだよな。覚えてもらうにしても、初陣までに間に合うかな。しばらくの間やるだけやってみて、駄目だったら素直に別の方法を考えよう。

「初陣は、賊討伐の機会があれば立候補するつもりだからそのつもりで。とは言っても、私が納得できる練度になるまでは、理由をつけて先延ばしにするから、明日明後日で突然初陣になる可能性は無いと思ってくれて良い」

もっとも、黄巾党のように万単位で賊に集結されたら流石に州を挙げての総力戦になるだろうから、一概に練度が低い状態での出撃が無いとは言えないが、無視して良い確率だろう。

最低一ヶ月。可能であれば三ヶ月欲しい。そこまで時間があれば、最低限の組織戦はできるようになるだろう。

「とりあえず、一ヶ月である程度形になるように鍛えて。基本的な陣形も実践レベルで使えるくらいにはするつもりだからそのつもりで」というか、そもそも。

「兵達の前に、まずはお前らに陣形の勉強をしてもらうから、そのつもりでいろよっ！」

うわ、すげー嫌そうな顔してるな。そんなに勉強するのが嫌いか。

「頭使うの苦手なんだよ」

「細かい事考えずに、突撃すれば勝てるだろ！」

二人とも。胸張って言う事じゃないからな？

「そもそも軍で身を立てるなら陣形の知識必須だぞ？　というか、陣形知らずに突撃させるだけなら文官にだってできるだろうが」

例えば義父さんとか。武官である以上、ある程度はできるようになくちや出世に響くぞ。

結局その後も説得の言葉を重ねた結果、嫌そうな顔をしながらも不承不承陣形の勉強する事を領かせる事に成功した。

その後、簡単に明日からの訓練メニューを話し合い、解散した。二人は私に着いてきて、屋敷で姉さんと空さんに会いたかったようだが、姉さん達の機嫌が急降下しかねないので適当に言いくるめて下宿先に帰らせた。機嫌悪そうにしている人間が食卓に座っていたら、それだけで飯の美味しさが半減するから仕方がない。

宣高達は犠牲になったのだ。我が家の楽しい夕餉の犠牲にな……。

『名将となるあしたのためにその一。　陣形。』

攻撃の突破口を開くため、或いは敵の出足を止める為、相手の動きに合わせ流動的、かつ速やかに有利となるように兵を展開をする事。

この際、先頭の兵は敵の鋭峰を逸らす心づもりで、やや側面を狙い、敵の陣形を崩す様に討つべし。

側面の一撃から続く正面からの突撃は、その威力を三倍にするものなり』

思わずそんな戯言を考える。まあ、それだけ陣形、及びそれを運用できるだけの練度と知識は重要なのだ。

「だから、それができないとなると厳しいかな」

二人と打ち合わせを終えた後、屋敷に帰り食事を取った。その後、食後のお茶を飲んでいる時に、初日はどうだったかを義父さんに聞かれたのでそう答える。

食卓には義父さんの他に叔子が居て、いつもどおり王虎を抱えて大人しくお茶を飲んでる。

姉さんと空さんは、もう自室で休んでいる。まだ新しい環境に慣れていないため、疲れが抜けないのだろう。明日は疲れが取れるように、甘い物をお土産に買って帰って来ようかな。

とりあえず、明日の事はここまでにしておいて、義父さんとの会話に集中しよう。

「やはり兵の練度に問題があるか」

「兵の武力だけじゃなくて、規律や士気も含めて問題だらけ。練兵は武官の担当だろうから、義父さんは管轄外なんだっけ？」

「ああ、武官達の持ち回りで行っている。問題なくできていると報告されていたのだからなあ」

そう言っつて、義父さんは溜め息を吐く。私も溜め息を吐く癖があるので、麿家からは幸せが全力疾走で遠ざかっているかもしれない。

「じんけーつてできないとダメなの？」

「駄目だねー」

叔子の質問に答える。ただ、それだけ言っつても理解はできないだろうな。

「分からないようなら、ちよつと試してみようか。手のひらをこつちに向けて、手を重ねてみて」

「こつこつ？」

叔子は私の言っつたように、両手を重ねて私に向ける。義父さんも興味深そうに私達のやり取りを見ている。

「そうそう。そのままで居てね。それじゃあ、叔子が防御側で、私が攻撃側だからね。そうやって構えている相手に対して、こつ真つ直ぐに拳を突き出しても受け止められちゃうでしょ」

「うん。とめられるよ」

力加減をしている私の拳を叔子の手のひらが受け止める。

「じゃあ、その守りを抜くためにはどうすれば良いでしょうか。考えられる中で一番簡単なのは、もつと強い力で防御を突破しようとする方法が思い付くんじゃないかな」

そう言っつて、腕に力を込めて叔子の手のひらを押す。本当は叔子の手のひらにパンチでもすればより分かりやすいのだが、泣くだろうか

らやらない。

そうやって力を込めていると、叔子の腕がだんだん体の方に押し込まれ始めた。

そこで力を抜いてあげる。

頑張つて私の手を押し返そうとして、少し息が切れている叔子に説明を再開する。

「ただ、この方法だと私の腕も疲れるからもっと簡単な方法を考えてみよう。例えば、こんな風に」

叔子の手のひらではなく、手首に拳を当てて押す。さつきよりも力が込めづらいためか、簡単に後ろに下がっていく。

「それ以外にもこんなのか」

叔子の両手を右手で拘束して、左手で叔子の頭に手を載せる。

「今やったみたいに、正面から手を伸ばすよりも簡単に叔子を防御できなくする方法があるでしょ。戦争だと、これを陣形を使ってやろうとするんだ」

「じんけーって大事なんだね」

理解してくれたようなので、頭に載せたままだった左手で撫でてあげる。

「逆に防御側からも陣形で相手の攻撃を弱くする事もできるね。例えば、左手だけで手を受け止めて、右手で私の手首を押さえたりね」

実際の戦闘ではもっと複雑になるのだが、未就学児くらいの年齢である叔子に理解させるのにはこれくらいで問題ないだろう。

ひとまず叔子の相手はここまでにしておこう。

「話を戻すけど、徐州の武官達にとっては問題無いんじゃないかな。精々自分達に逆らわなくて、賊の討伐ができれば良いって考えているならば、確かにこの練度でも問題無いだろうし」

ただ、あの兵達の規律を考えると、隠れて村や町からも略奪とかしてそうなんだよな。

確証が無いため言わないけど。

「ひとまず、州牧様の耳には入れておいてもらえますか？州牧様も武官出身だから、一目でも兵達の様子を見れば分かるでしょ？」

「ああ、そうしておく」

州牧様も忙しくて、最近は賊討伐とかも臣下任せらしいからな。兵の状況が分かっている可能性はある。分かっている放置しているようなら、諫言をしてもらわなくては駄目だろう。

ひとまずは練兵に関しては、これで州兵全体にてこ入れが入ると期待しておこう。

「ところで、お前また妙な事をしようとしてないか？」

義父さんに半目で睨まれる。

心当たりは……まあ、いっぱいあるな。

「何の事、というかどれの事を言っている？」

「……とりあえず今日回ってきた領収書の事なんだが、そんなに色々やっているのかお前は」

藪蛇だったか。まあ、話を逸らそう。それはもう全力で。

「領収書って、革職人の工房からだよね？ あれはちよつと試したい事が有ったから、ここに来た初日に、五十人分用意してもらおうと発注したんだよ」

「鎧や盾なんかは支給されているだろ？他に革を何に使うんだ？」

「まあ、簡単に説明するとだね」

何を作って、どう使うのかを義父さんに簡単に説明する。説明を聞いているうちに有効性を理解できたのか、やってみるとお墨付きをもらった。

「それじゃ、明日も早いし私も寝るとするかな」

そう言って部屋に戻ろうとすると、義父さんから待ったがかかった。

「とりあえず、今色々やっている事について、洗いざらい吐き出していけ。親に隠れてこそこそするというのが気に食わん」

……ああ。話を逸らす事はできていなかったのね。長くなりそうなので、叔子は先に部屋に返して寝かせよう。

それから二時間ほど義父さんからお説教をもらい、ようやく解放された。

仕事よりも疲れるってどうなのさ。

それからの毎日は飛ぶように過ぎていった。最初のうちは私達に反抗ばかりしていた兵達も、一週間が過ぎる頃には表だって反抗する姿勢を見せなくなった。というより、宣高と文嚮の鍛練がきつすぎで、余計な事をする余裕が無くなったというのが事実なのだろうが。私は宣言通り、遠距離戦を中心に鍛練を重ねさせた。ある程度使う武器の扱いが上手くなった兵は、二人の組に合流させて近接戦闘もできるようにさせた。

それ以外にも月極で払っていた給料を日当に変えたりもした。一日の実績に対して色も付けていたので、自分達の一日の頑張りが目で見えるようになり、鍛練に身が入るようになった。

また、努力に正当な評価が与えられるようにしたため、士気が大いになるという嬉しい誤算もあった。

それから二ヶ月。晴れの日も雨の日も鍛練に励み続け、ようやく私の納得いく士気と練度となった頃。

私達の部隊の出撃が決まった。

いよいよ私達の初陣となる戦いが始まる……。

第十五話　BEHIND THE MASK　―初陣―

今回の作戦の計画書（持っていく物資の種類と量、行軍進路、兵数等）を提出して承認が下りたため、無事に私たちは初陣を迎える事になった。

作戦目標は東海郡で暴れている賊の討伐。約三十名ほどの小さな集団らしい。州牧様のお膝元で良くやるな。もつとも、だからこそ☒の常備兵に討伐するよう命令が下つたのだろうか。

討伐軍を率いるのは義父さん。率いる兵は、私達が鍛えた百名の兵となる。

しかし、作戦計画書を一から私が作っている事から分かるように、実際の戦闘指揮は私に任せて義父さんは完全にお目付役に徹するよ。うだ。

その方が私としてもやりやすくなるためにありがたい。

さて、無事に出撃が決まったからには、準備を始めなくてはならない。兵の部隊編成は、いつも訓練している人間がそのまま率いる事になるため必要無い。出撃する旨を兵に通達する必要があるが、それは文嚮達に任せてしまつて良いだろう。

義父さんが持参する物資の準備を始めているため、私はそれを手伝う事にする。文書の発行は、私が武官であるためできないが、物資量の計算や準備した物資に不足が無いかを確認する事はできる。

そう思つて義父さんの執務室を訪ねると、義父さんはいなかつた。が、姉さんがこの世の終わりを迎えた時のような暗い表情をしており、空さんが苦笑いしながらそれを慰めている。

部屋に入ってきた私に気づいたのか、姉さんが席を立ててこちらに駆け寄ってきた。そして一気に捲し立て始めた。

「麟君！初陣が決まつたつて本当?!　なんでお姉ちゃんに内緒で行こうとするの!?!　とりあえず、州牧様にお願ひして麟君は残るようにしてもらつて、あと麟君の武官からの配置替えもしてもらつて、あと、あ

と……」

「いや、内緒って……。とりあえず落ち着こうよ。武官として仕官してるんだから、そりゃ戦にも行くよ」

本人の希望じゃないのに配置替えを申し出ても受理されないんじゃないかな。というか、内緒って結構大つぴらに義父さんと出兵計画を相談していたつもりだったんだけど。おそらく伝えると煩くなる事が分かっていたため、黙っていたんだろうなあ。だったら、この場に義父さんが居ない理由は逃げたからか。……卑怯じゃね？

そんな私の台詞も何のその。姉さんは言葉を紡ぎ続ける。

「でも、戦場までお姉ちゃんはついて行けないんだよ!!お腹が空いてもすぐにおやつを持って行ってあげられないんだよ!!」

「隣君はお腹空いても困らないんじゃないかな。むしろ私たちの方が、作ってもらった料理やお菓子をごちそうになる立場だったよね」

叫ぶ姉さんに空さんが苦笑しながら冷静に指摘する。

「というか、戦場でおやつってなんだよ。砂漠でパスタ茹でてた某国民じゃないんだから、そこまでゆとりは持てないだろ。」

「でもでも、夜寂しく泣いても側に言ってお慰めてあげる事はできないんだよ!?!」

「慰めてもらうどころか、私は夜泣きもした事ないからね!?!」

武官が夜泣きして……。私にとつて不名誉極まりないだろ、それ!

空さんも面白そうな顔でこつちを見てないで、姉さんをなだめて!!それから十五分ほど、空さんと一緒に姉さんを粘り強く説得し、ようやく落ち着く事ができた。

姉さんは不機嫌そうにそっぽを向いているが、落ち着いてはいる。

空さんの方を見ても、苦笑して首を横に振られてしまった。今は放っておくしかないかなあ。

本当にどうにもならない?という意味を込めて空さんを見つめ続けていると、しょうがないなあ、という顔をして姉さんに近づいて何かを耳打ちし始めた。

そうやってしていると、姉さんがビクツと体を震わせて、私の方を泣きそうな顔をしながら見つめてきた。

え？空さん何を言ったのさ？

それを見て満足そうに頷いた後、また空さんは姉さんの耳に口を近づけて何かを言い始めた。

少しすると、姉さんはさっきの表情から一転して頬を染めて潤んだ目で私を見始めた。いや、本当に空さん何を言ったの!?

「麟君！ お姉ちゃん頑張るからね!!」

そう私に向けて言った後、慌ただしく部屋を出ていった。出ていく前に私が作った作戦計画書の写しを手にしていた事を見ると、おそらく蔵に行つて物資の引き出しを行うのだろう。

私が呆気にとられてそれを見送っていると、空さんが口元を手で隠しながらくすくすと笑い始めた。

「空さん、姉さんに何を囁いたの？ あの様子、尋常じゃないように見えるんだけど」

「そんなに大した事は言ってないよ。ただ、『海がそうやって仕事しようとしなくて、持っていく物資に不備があつて麟君に危機が訪れたらどうするの?』って言っただけ」

なるほど。そういう方向に説得すれば良かったのか。

「あと、『麟君にもしもの事があつた場合、最後に見せる顔がそんな顔で良いの?』って伝えただよ」

「さ、さらつと縁起でもない事を。私は無事に戻ってくる気満々ですよ?」

「けど、それは最初に言った事ですよ？ その内容じゃ顔を赤らめる理由にはならないし」

「うーん。 そつちは女の子同士の秘密かな。 そのうち麟君にも知ってもらいたいとは思っているけど、今はまだ内緒。ごめんね」

空さんは悪戯っぽい笑顔を浮かべながら、そう言った。

気にはなるけど、内緒と言われてしまえば追求する事はできないか。

それにしても、やっぱり空さんはこういう表情している時が一番生き生きとしている。思わずまじまじと顔を見つめてしまう。有り体にその表情を表現するならば。

「ど、どうしたの？ 私の顔をじつと見つめたりして」

おっと、無作法だったな。だけど視線を空さんの顔から外す事なく、さつき思った事をそのまま口にする。

「いや、やっぱり空さんは可愛いなと思って」

「ふえ」

そう私が口にした途端、先程の姉さんと勝るとも劣らぬくらいに空さんの頬が真っ赤になった。

「それじゃ、私も姉さんの手伝いに行ってくるね。多分義父さんも一緒にいるだろうし。空さんはここで申請書類の作成をお願いします」

そう言い置いて、私も姉さんの向かったであろう蔵へと足を進める。

空さんにはいつもからかわれ通しなのだ。たまには私も反撃して構わないだろう。

空さんとしては珍しい、動揺したために発したであろう「ひゃあー」という奇声を背中に受けながら、私は足は蔵へ向ける。足を止めないまま頭では必要となる物資の一覧を思い浮かべ、準備に必要な期間を計算し始めた。

それから数日後。私達は兵を率いて☒を出立した。私と義父さんは馬に騎乗しており、他の人員は徒歩だ。私たちが騎乗しているのは、後方から部隊全部を見渡せる様に視界を高く持ったためだ。騎馬戦を行うためではない。私も義父さんもそこまで馬の扱い上手く無いし。将来的には練習しなくてはならないのだろうか。

☒から出立するための準備は滞りなく終わり、予定よりも一日早く出発する事ができた。賊が行える略奪の回数を減らす事ができるかもしれないのだ。この一日は大きい。張り切って準備をしてくれた姉さんと空さんに感謝だ。姉さんの熱意は空さんの説得が要因であり、空さんのやる気は私が発した言葉が原因だろうか？

弟の様な存在からとはいえ、年頃の女の子なのだから容姿を褒められればやる気も出さだろう。あんまり口にしすぎても空さんが慣れてしまい、からかう事ができなくなるのが難点だが。

「とりあえず、途中で川原に立ち寄るんだったか？」

義父さんから私へ、行軍経路を確認する声が飛んだ。

まずい。指揮を行う者が行軍中によそ事を考えていてはダメだ。義父さんも私が考え事をしていている事を察したために、声をかけたのだろう。何しろ義父さんとは計画書を作成するにあたり、作戦について細大漏らさず議論しているのだ。進路がわからないはずがない。

これは、説教三時間コースかな。

頭の中で軽く溜め息を吐き、義父さんに答えを返す。

「そうだね。水の確保も容易だから、そこで夜営する予定。速度は今のままでも夕方前には着くし、夜営準備は問題なくできるんじゃないかな。物見を出すのも野営地に着いてからで良いと思う。もつとも視界を遮る物は何も無いし、見晴らしは良い場所だから不意打ちを受ける危険性は低いとは思うけど、念には念を入れた方が良いでしょうね」

そう言うと、義父さんは一つ頷き部隊全員に対して言葉を発した。

「各員に通達！ これより我らは進路を北に取り、本日の野営予定地を目指す！ 文嚮、宣高！ 二人で隊を先導しろ！」

全員から了解の声上がり、文嚮と宣高が先頭に立つ。そして部隊を縦隊に変えた上で進軍を始める。

うん。隊列の変更はかなり素早く行う事ができるようになったと思う。一人満足気に頷いていると、今の隊列変更に目を瞞った義父さんが私に声をかけてきた。

「随分変更にかかる時間が短いな。 錬度次第でここまで変わる物なのか」

「組織戦を行うための基本になるからね。 陣の変更は随分時間を割いて修練したよ」

おかげである程度の組織戦も行う事ができるようになった。乱戦に持ち込まれる前に敵兵を圧倒できる組織戦は、被害を最小限にする上で必須だからな。最優先事項の一つとして鍛錬した。

「州兵全体でこのくらいの錬度を持たせる事ができれば良いのだが」「私が偉くなって全兵の錬度に物申せる立場になったら鍛え直すよ」

「今すぐは難しいという事か」

そう言つて溜め息を吐く義父さん。私の発言の意図をお察し頂けて幸いです。

実際に、私達が練兵していると余計な事をするなど言つてきた武官が大勢いた。自分達も同じ程度にやれと言われたら困るから私達をやめさせようとしたんだらうなあ。笑顔で追い返したが。

その後も色々とちよつかいをかけてきたが、相手にせず修練に励み続けた。当然だ。今後漢帝国を襲う戦乱の渦を乗り切るためには富国と強兵は必須なのだから。

その後も特に何も起こらず、野営地に辿り着くことができた。物見を出しても、周辺に賊の影は見えなかつたため、最低限の見張りを残して私達はゆっくりと休む事ができた。ええ、義父さんからの説教を除いてですが。

翌日、私が指揮する五十名に石を拾わせる。これが今回の戦いの重要な要素となるのだ。形を十分に吟味させた上で、袋に詰めておくように命じる。

それが終わった後、部隊は賊がいると報告された場所へと足を進めた。

それから三日後。ついに物見が賊の姿を捉える事に成功した。

……までは良かったのだが。

「さて、この状況をどうしようか？」

「……撤退するしか無かろう。敵の数が倍近く多い以上、負ける事はないだろうが被害が多くなりすぎる」

そう。賊の集団を見つける事はできたのだが、その数ぎつと二百名弱。報告されていた数よりもずっと多いのだ。一応、物見は賊に見つからないように後をつけてもらっている。

夜になつたので、義父さん、私、宣高、文嚮の四人で陣幕に集まり意見を交し合う。明日の開戦までに善後策を練らない事には、本当に全滅の憂き目に遭う可能性もある。

しかし、この報告よりも多い賊の集団が非常に気にかかる。小規模な賊が糾合した可能性も有るが、それにしても短期間でここまで大き

くなる事は考えづらい。ならば、この状況はおそらく物見が見誤ったか、虚偽の報告がなされたのだろう。

最初に事実確認をする所から始めよう。

「今回の賊発見の報告をしたのって誰だったの？」

報告がなされた場に唯一居た義父さんに訪ねる。

「曹將軍だな」

「「うわぁ……」」

その答えを聞き、義父さん以外の私達三人は思わずげんりとした声をあげてしまう。

何を隠そう、私達に文句をつけてきた武官の大半がその曹將軍の配下なのである。

コアな三国志ファンならば、陶州牧配下の曹姓の將軍といえば誰の事かすぐに分かるだろう。

そう、低能力値の割にはやけに人気のある武将、曹豹である。三国志を題材とした某ゲームでは、最低能力値を誇る彼だ。

私は実際に顔を合わせた事は無いが、傲慢で狭量な人柄と噂に聞いた。実際に配下の柄が非常に悪かったため、噂どおりの人物なのだろうと予想している。

その曹豹が報告したって事は……。

「ハメラれたかなあ、これは」

「ん？ どういう事だ？」

義父さんに、私達が曹豹將軍配下の者との間にいざこざが有った事を伝える。

その上で義父さんへ私の推測を伝える。

「あくまで州政府に伝わっているのは三十名程度の賊だからね。ここで撤退したら、賊よりも倍以上多くの兵を率いながら退いたって言われるだろうね」

その後、曹豹自身で兵を率いて賊討伐をするのだろう。その際に率いる兵数はおそらく少なく見積もっても五百名以上。私達がする事になる、賊が二百名弱程度の集団となっていたという報告に基づいて出兵計画が練られるだろう。

しかし、賊の数が最初に報告したとおりの三十名ほどだったと言えば、私達が少数の兵に恐れをなして撤退したという風聞を作る事ができる。さらに、私達が撤退するために虚偽の報告をしたというおまけも付ける事ができる。

陰険だとは思うが、なかなか効果的だ。もつとも、それにより略奪の危機に晒されている民の心情を慮らなければだが。民の命と比べて、そんなに自分の面子の方が大事かね？私には理解できない。この辺りが少なからず自らの武に誇りを持つ者が多い武官に、私が向いていないと言われる所以なのだろうか。

それにしても、目の前にいる敵よりも背後にいる味方に注意する必要があるって、どう考えても死亡フラグなんだが。

「……あくまでお前の憶測であるなら、今後それを口外する事を禁じる」

「御意に」

当然だろう。味方を疑いながら戦争をしろと州全体に伝えるような推測だ、これは。そうやすやすと口にして良い事ではない。私とて、この場にいるのが信用する事ができる人間しかいないために口にしたのだ。

「とりあえず、その辺の事実関係は今が良いだろ。今は目の前に居る敵をどうすればぶっ飛ばす事ができるかを考えるべきだろ？」

宣高がそう言葉を作る。

乱暴な意見ではあるが、それは非常に正しい。撤退ができない状況である以上、寡兵を持って敵を打ち破る方法を話し合う方が建設的だ。

「だが、少兵において多数の敵を討つのはなかなか難しいだろう。

何か策を練らなくては」

それに応じて、文嚮がそう口にする。

それもまた正論だ。こちらが少数である以上、どうしても被害は大きくなってしまおうし、最悪の場合にはこの場にいる全員が露に消える可能性だってあるのだ。

「少し待って。何か方法が無いか、今考えてみるから」

私はそう言つて、物見達の報告を基に作った、この辺り一体の地図に目を落とす。高台、茂み、方角……、そういう必要となる周辺の地形で仕えそうな場所を確認し、頭の中で策を構築していく。

その上で、私が知っている歴史上の戦いで今回の状況に適用できそうな物をピックアップしていく。

十五分くらい考えた後、私が思いついた作戦を地図上を指差ししながら説明していく。三人から来る質問には回答をしつかりと返していく。人を率いる人間が迷いや曖昧な態度を表に出すわけにはいかない。それだけで味方の士気に影響していくのだから。

そうやって議論をしながら作戦をどんどん形としていき、遂には作戦が決定した。

私達の部隊がまだ賊に発見されていないのを良い事に、兵を引き連れて賊の陣から見て東に位置する高台に陣取る。緩く高所となつているに過ぎない場所ではあるが、この位置からならば賊の野営地を一望する事ができる。現に今も馬鹿騒ぎに興じている賊達の姿がここから見る事ができる。まあ、明日夜明けと共に攻撃をしかけるので、今は存分に楽しんでいてもらうとしよう。酔い潰れてくれている方が私達の方はやりやすいのだから。

私達は明日に備えてゆつくりと眠る事にしよう。

夜が明ける直前に私達は起き出し、開戦の準備を始める。文嚮と宣言高に配下を率いてもらい後方に二箇所ある茂みに身を隠してもらう。私と義父さんは残りの兵を兵を率いて、敵から私達の姿が見やすい位置に陣取る。投射を行いやすいように、ある程度間隔を取った上で陣形を整える。東の空を見ても雲は無く、おそらく今日も晴れるだろう。後は朝日が射し出すのを待つのみだ。

それから一時間後、朝日が差し出したので私達は行動に移る。賊が動き出す前に攻撃を開始しなくてはならない。

率いる兵全員に革と布で作られた長い手ぬぐいのような物を準備させ、間に石を挟みこみ両端を利き腕で持たせる。私も手に弓を持ち、静かに敵陣を見据える。

第一射は時間をかけても良いので確実に準備をさせる。全員が準

備できた事を確認し、兵達に命令を下してグルグルと手に持った物を回転させ始める。十分な回転を与えられた数秒後、私は鋭く言葉を作った。

「放てー」

その言葉と共に、兵達は持っていた両端から片側だけを手から外した。遠心力により、間に挟み込んでいた石が放物線を描いて飛んでいく。狙いに変わらず私達の放った石弾は賊の野営地に飛び込んだ。

投石紐。それが今回私達の使った道具の名前だ。中華の歴史においては使われていなかったようだが、地中海世界や小アジアにおいてはメジャーな武器として使用されている。ゴリアテを倒したダビデの武器として世界的には一番有名だろう。

弓に比べて速射性は劣るが、射程は勝るとも劣らない。むしろ、複合弓でなくては太刀打ちできないほどの射程距離を誇る。

欠点は狙いをすぐに変える事ができないため、騎兵などの機動力のある相手を狙うのが難しい点と速射性が弓に劣る点(弩よりは早い)、習得が弓以上に難しい点、騎乗しては仕えない点だろう。もつとも今回は投石による弾幕を張る事が目的のため、百発百中の命中率を誇る必要は無いのだが。

しかし、それを補って余りある利点も多くある。片手で放つ事ができるため盾を構えながら使用する事が出来る点。先ほど挙げた射程距離も十分な利点となるだろう。盾で防がれた際に、矢よりも大きい衝撃を盾を持つ手に伝わる事も挙げられるだろうか。

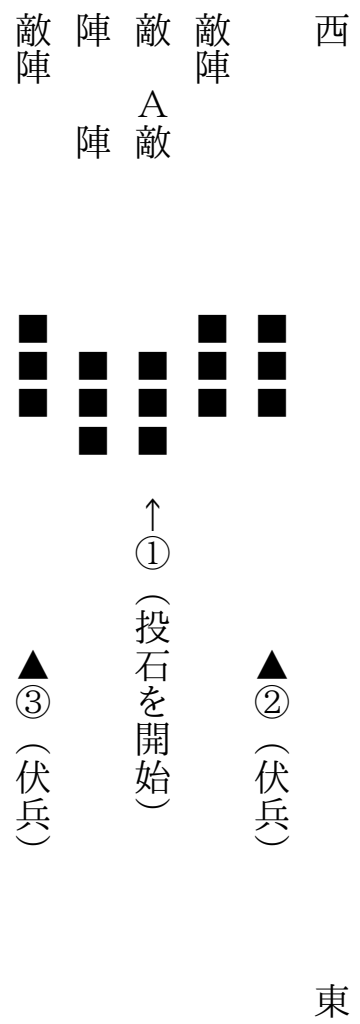
そして何より、一番の利点は弾丸が石で有る事で、調達の容易さにある。何せ石ころを拾えば、それだけで強力な武器にする事ができるのだ。職人の手による作らなくてはならない矢に比べて、どれだけ十分な数を準備するのが楽なのかは簡単に想像できるだろう。調達する際の金も必要無い。

複合弓や弩などで射撃した方が投石紐より強力であるのは事実だが、それは鎧を着ている相手を前提とした話だろう。着の身着のままの賊相手ならば、投石でも殺すのに十分すぎる威力を誇る。

以上の様な理由から、賊討伐をする際には弓より投石を使う方が適

していると判断したため、兵達の装備として使用する事を決めた。その決定が間違えていない事が、目の前の光景から読み取れる。

【戦闘開始時】



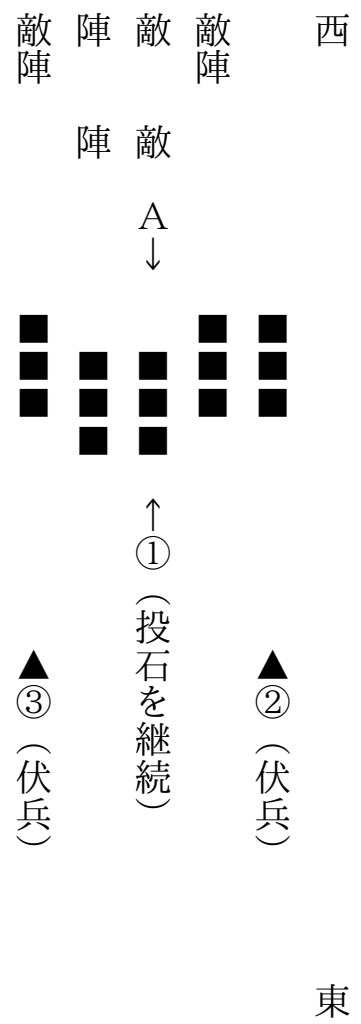
▲：茂み
 ■：坂（東側が高所）

- ①麟（投石部隊） 五十
- ②文嚮（歩兵部隊） 二十五
- ③宣高（歩兵部隊） 二十五
- A賊（歩兵部隊） 二百

賊達は突然空から降ってきた石に驚き混乱している。何人かには命中している事だろう。さりとて、五十名程度の弾幕では十分な密度は保てていないため、すぐに反撃に移ってくるはずだ。

そうやって石を投げ続けていると、ようやく賊達がこちらに向かってきた。私達の姿は朝日に照らされていて相手から良く見えるため、自分達よりも私達が少数だと気づいたのだろう。私達を蹴散らそうと声を上げながら近づいてくる。しかし、その数はざっと百二十名ほど。最初の混乱と投石で怪我をするか死ぬかしたのだろう。随分と数を減らしている。

【敵反撃開始時】



▲：茂み

■：坂（東側が高所）

①麟（投石部隊） 五十

②文嚮（歩兵部隊） 二十五

③宣高（歩兵部隊） 二十五

A賊（歩兵部隊） 百二十

私達は近づいてくる敵兵を見据えながらも投石を続けてさらに数を削っていく。私達の背後にある朝日が眩しくて、飛んでくる石をしつかりと見る事ができないのだろう。予想よりもずっと敵に命中心している。嬉しい誤算だ。

しかし石が頭部に当たる賊の姿を見て、死んだのかもしれないと思うと怖気が走る。喉に上がって来る吐き気を、奥歯を噛み締める事で懸命にこらえる。どんな理由があれば、指揮官が動揺を表に出している駄目だろう。指揮官の動揺は兵に伝染していくのだから、この場にいる全員を危険に晒してしまう。内心の動揺を懸命に押し殺し、平静な演技をしながら投石の命令を下し続ける。

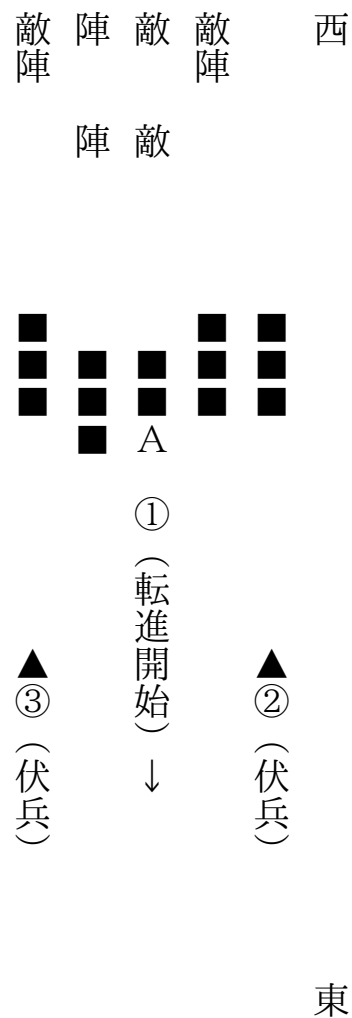
そして、向かってくる敵兵を百名弱にまで減らした所で、私は手に持っていた弓で天に向かって矢を放つ。それは甲高い音を上げながら上空目掛けて駆け上っていく。私自身が作成した鎗矢による合図だ。

鎗矢は銅鑼を準備するよりも、ずっと手軽に合図をする事ができる。もともと音を遠くまで伝えられるのは銅鑼の方なので、状況によって使い分ける必要はあるのだが。さりとて、すぐ側にいる味方、茂みに隠れている文嚮達に合図を届けるには鎗矢で十分だ。

一つ目の鎗矢は、投石を止めて後退する合図と全員に伝えている。その意図を汲み取り、投石を終えた人員が素早く陣形を変更しながら後退を始める。

追いつかれない、しかし離し過ぎない様な速度となるように注意しながら走り続ける。後ろを振り返ると、逃がしてはなるかと罵声を浴びせながら追いかけてくる賊達の姿が見える。予定通り、引き付ける事が出来ているようだ。

【麟転進時】



そのまま走っていると、予定の場所である、兵達が身を潜めている二箇所の茂みを少し過ぎた辺りまで辿り着く事ができた。私は二本目の鏑矢を放ち、兵達に後退を止めさせ、陣形を整えさせて盾を構えた状態で敵の接近に備えさせる。兵達には敵を打ち倒すよりも、防衛を優先するように伝えている。私達が率先して敵を倒す必要は無いのだ。

私と義父さんは陣の後ろに位置し、賊達を馬上から睥睨する。

そして、遂に賊達は私達に接敵し、上段に構えた武器を私達へと振り下ろす。そこまで見届けた瞬間、私は三本目の鏑矢を上空に放った。

その音を聞くや否や、茂みから兵達が飛び出してくる。もちろん、私達の友軍である文嚮と宣高配下の兵達だ。配下の兵を率いながら先頭を駆けて来るのは悪友二人。あの二人なら私とは違い雑兵に討ち取られる心配は無いだろう。

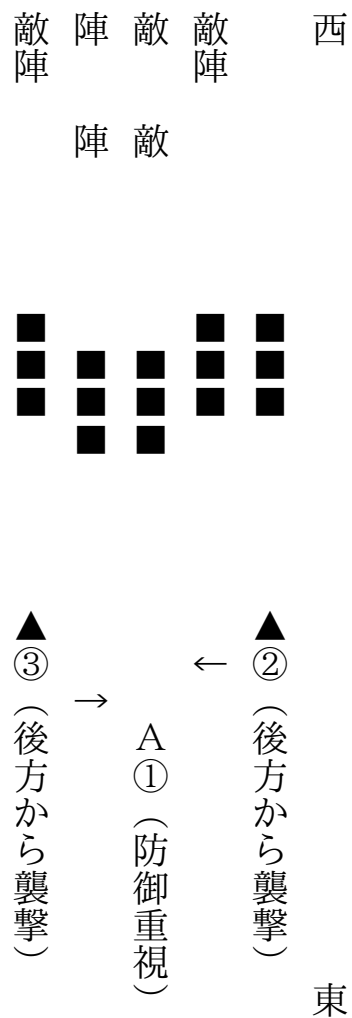
これにより、賊達は私達を相手にしながら後方から襲ってくる文嚮達も相手しなくてはならなくなった。小規模ではあるが、包圍殲滅の構えをがここに完成した。

釣り野伏。私の前世の故郷、鹿児島のお殿様だった島津家のお家芸

である。これは敵を目標地点まで誘引し、伏兵による三面包囲を試みる戦術だ。失敗する危険性が高い反面、成功したときに相手に与える被害は並大抵の物ではない。島津家はこの戦法を効果的に活用する事で、九州の覇者へと躍り出る事になったのだ。

ともあれ、ぶつつけ本番ではあるが成功して良かった。内心で安堵の溜め息を漏らす。

【戦闘終盤】



- ▲: 茂み
- : 坂 (東側が高所)
- ① 麟 (投石部隊) 五十
- ② 文嚮 (歩兵部隊) 二十五
- ③ 宣高 (歩兵部隊) 二十五
- A 賊 (歩兵部隊) 百名弱

何割かの敵は投石により怪我を負い、ただでさえ高くない士気がさらに低くなっている。さらに、敵はここに来るまでに野营地より走ってきていて、私達よりもずっと疲労しているのだ。錬度、士気、兵数、消耗度合い。すべてにおいて勝っているのならば負けるはずが無い。早くも敵の後方では離脱しようという動きを始めているが、散発的な行動であり上手くいっていないようだ。逃げ出されて体勢を整えられなくても困るので、このまま包囲を続ける。

ここまで大勢が決すれば問題無いだろう。

「義父さん。指揮を任せるね。このまま包囲を続けていけば、勝手に敵兵が崩れていくから」

「は!? 麟! おい、待てー!」

指揮は義父さんに任せて、私自身も馬から降りて賊へと切り込みに

向かう。義父さんから静止の声がかかるがあえて無視する。剣才が無いと自覚している私ではあるが、動揺しきった兵相手には流石に負ける事は無い。

前に出る目的は、ここで自らの手で人を殺す感触を刻みつけておく事だ。どうしても二十一世紀で生きていた時の倫理観が、人を傷つける時の罪悪感を刺激してやまない。本来であるなら慣れるべき事では無いのだろうが、武官として生きていく以上これからも戦場に出る機会は山ほどある。その度に具合を悪くしているようだと、思わぬ不覚を取る可能性も考えられる。今後の事を考えると、どうしてもこういう事に慣れていかななくてはいけないのだ。本当は嫌で嫌で堪らないのだが。吐き気を押し殺しながら剣を振るい、賊達を切り続ける。この時代の製鉄技術で作られた剣、しかも鑄造で大量生産された剣に過ぎないので、示現流の代名詞ともいえる蜻蛉からの打ち下ろしは封印している。受け止められたりしたら、それだけで剣が折れかねない。

それからどれくらい時間がたったのだろうか。生き残っていた賊達は手に持っていた武器を捨て、降伏を申し出てきた。

それを迷う事なく受け入れ、今回の討伐戦の山場は終わった。後は、投石により動けなくなっている残りの賊も捕らえれば任務が完了となる。これは比較的余力の残っている文嚮と宣高達に任せる事にした。投石を行い、敵兵を挑発して誘引し、正面から賊の突撃を受けていた私の配下に余力はないため仕方が無い。私達は目の前にいる降伏した賊達に縄をかけていく事にした。

無事に残りの賊達も捕らえる事に成功し、完全に賊討伐は終了した。捕らえた賊達は \square まで連れて行き、法の裁きを受ける事となる。賊になった経緯などの簡単な取調べ等までは私達で行っておき、円滑に法務処理が進むようにしておく。

それから、味方の死傷者の数も各隊で数えさせる。幸い今回は死亡者も重傷者もいなくて、軽傷の者が数名いるだけだった。私自身も怪我人の状態を確認したが、再起不能となる怪我ではないだろう。

二倍近い数の敵を相手にした事を考えると、完勝と言って良い出来

だろう。

この勝利のために頑張ってくれた兵達全員に、に戻った際に特別報奨を出す旨を告知した。それを聞くと、全兵が沸きに沸いた。そのまま解散命令を下すと、取調べを行っていた段階で既に野営の準備まで整っていた事もあり、その興奮の冷め遣らぬまま兵達は宴会へと突入する。今日ばかりは深酒をする事も黙認するべきだろう。生き残った喜びを仲間と分かち合うのは、部隊の連帯感を生む事に繋がるのだから。

しかし、私は宴の準備を始める兵達に気づかれぬ様に、静かにその場を離れて人目に付かないように自分の陣幕の中に入る。そしてそのまま蹲り、用足しのために掘っている穴に向けて、盛大に胃の中の物をぶちまけた。

戦場に出るにあたって覚悟は決めていたつもりではあったが、正直甘く見ていたと言わざるを得ない。生きている人間に剣を向けて肉に突き立てる感触も、それによって物言えぬ屍に変わっていく光景も、それに伴いこの身を焼きつくさんとばかりに湧き上がってくる罪悪感も、文字通り死に物狂いで私を殺そうと迫ってくる敵兵の狂気とその恐怖感も。すべてが書では知る事のできない圧倒的な臨場感と共に私に襲い掛かってきた。そういつた戦場での大きなストレスにより、精神がオーバーフローを起こしてしまつて体に変調が起こっているのだろう。

正直に言おう。あの場で敵が降伏してきた事に一番安堵したのは、間違いなく私だったであろう。あと数分もその状況が続いていたら、恐慌をきたして真つ先に逃亡を図っていた。

兵達の前で平気な顔をしていたのは、全力で演技していたからに他ならない。折角規律を高め士気を向上させる事ができたのに、再び侮られる要因を私から作る訳にはいかない。そのため全力で吐き気を押し殺しながら、解散命令を下すまで我慢を続けたのだ。

そのまま数分間蹲り続け胃の中の物をすべて吐きつくしたが、吐き気はまだ収まらずにえづき続ける。いつまでも姿を消したままでは兵達が不審に思うだろう。そろそろ顔を出さなくては。

震える体に鞭打ち、精神力を総動員して立ち上がる。そのままふらふらと瓶まで歩き、中の水をひしゃくで掬い口をゆすいで地面に水を吐き出す。そしてもう一度ひしゃくで水を掬って今度は飲み干す。冷たい水を飲むと少し吐き気が収まった気がした。それから顔を手ぬぐいで拭って、意図的に笑顔を作る。そして、足が震えないように力を込めて、入り口に向けて歩き出す。

いつかこの罪悪感や吐き気も感じなくなっていくのだろうか？

そうやって慣れていく事は果たして良い事なのだろうか？

慣れていく事が出来なかった時に私はどうなってしまうのだろうか？

そんな疑問や不安が心に渦巻いているが、今は出来る事やっつけていくしか無い。慣れるにしろ慣れないにしろ、その時が来たら改めて考えよう。

それはその問いかけから逃げているだけである事は自覚していたが、私はそう考えるより他に精神の均衡を保つ事ができない。

私は笑顔の仮面の裏側にそういう不安や怖れを隠しながら、戦勝に沸く兵達の方へ足を向けるのであった。

幕間一 Dear Friends —空の色海の色—

窓から差し込む朝日の眩しさに、私は目を覚ます。

私は朝に弱く、すつきりと目覚める事ができない。特に、昨日はなかなか寝付く事ができなかったため、今日はすごく辛い。

(これも全部麟君のせい！)

寝ぼけた頭でも理不尽と分かるような八つ当たりを自分の想い人へ向けながら、私は寝台から身を起こした。

今日はお休みをもらっているため、登城する必要が無い。それでもいつもどおり目を覚ましたのは、昨日賊討伐から帰ってきた麟君に早く会いたいからだ。自分でも呆れるくらいに恋する乙女をしている。

寝惚けた頭でそんな事を考えながら、私は普段着へ着替えるために立ち上がり、帯をほどき寝巻きを脱ぎ捨てて下着姿になる。

身に着けている、私の真名と同じような薄い青に染められたお気に入りの上下の下着を見て、思わず眉をひそめる。我ながら似合っていると自画自賛するが、昨日の自分の滑稽さも思い出して少し腹が立つ。

昨夜は麟君と一緒に寝ようと思って、この下着を着けて寝巻き姿で麟君の部屋を訪ねたのだ。久しぶりに麟君とゆつくりと時間を過ごせて、さらにそのまま一緒に眠れると思い、私の胸は高鳴っていた。抜け駆けとも言える私の行動を頭の中で海に詫びながら、早鐘を打ち始めた鼓動に自分でも持て余しつつ、麟君の部屋の戸を叩いた。しかし、いつもならすぐに麟君から誰何の声がかかるはずなのに、扉を何度叩いても麟君から声が聞こえてこなかった。

もう寝ているなら寝台に潜り込んでしまおうと、扉を静かに開けて部屋に入って寝台を確認しても、麟君はいなかった。寝台に手を当てても冷たく、少し起き出してどこかに行っているわけではなく、そもそも寝台がまだ使われていないようだった。

そのまま寝台に潜り込んで麟君が戻ってくるのを待っても良かった

たのだが、そのまま眠りこけてしまったら麟君は私に寝台を譲って床で眠ろうとするだろう。それでは麟君が風邪をひいてしまうかもしれないし、夜営続きだったのだから、帰ってきたら寝台で眠りたいだろう。そう考え、麟君の寝床に横になる誘惑を振り払い寝台から離れた。

どこに居るのだろうと麟君の部屋から出て、屋敷の中を歩き始めると、居間から明かりが漏れておりお父様と麟君の話し声が聞こえてきた。二人とも疲れているだろうに、まだ何かしているのか。

そう心配半分苛立ち半分の感情を得て、早く寝るように（麟君には一緒に寝ようと）声をかけようとしたのだが、聞こえてくる二人の声からはまるで出兵前の時と同じくらいに鋭さを含んでいるのを感じて、思わず言葉を飲み込んでしまった。

おそらく今回の出征で何か問題が生じて、その対策を立てていたのだろう。それも大至急対応しなくてはならないような火急の物が。そうでなくては二人が疲れきっている身体に鞭を打って、すぐに話し合う必要は無い。

そこまで考えて、感情のままに取っている自分の行動が急に恥ずかしくなった。『二人は州のために身を粉にして朝も夜も関係無く働いているのにそれに比べて自分は。』と、急に私の取った行動が不純な物のように思えてしまったのだ。

その時感じた羞恥心と自責の念を抱えたまま逃げるように自室に戻り、寝台に横になって布団を頭から被った。そのまま眠ってしまうと目も瞑ってしまう。しかし、麟君の部屋へ行った時に高鳴っていた鼓動と、居間の二人の声を聞いた時の後ろめたさのせいで頭が妙に冴えてしまい、結局寝付く事ができたのは夜が大分更けてしまっただけだった。おかげで寝不足となつて、今に至る。

しかしそのおかげなのか、昨夜は随分と懐かしい夢を見た。

まだ麟君と出会う前、海と出会った時の夢だ。

ふと気を抜けば訪れる睡魔に抗うために、昨夜見た夢を思いだそうとする。しかし、眠らないように必死に思考を続けていた間も体は勝手に動いていたようで、普段着へ着替え終えていた。一旦夢の反芻を

中断し、部屋を出て顔を洗うために水場へ向かう。途中すれ違ふこの屋敷の使用人さん達へ挨拶をしながら廊下を歩いていく。

(やっぱりお金持ちなんだよね)

この屋敷はかなり大きい。それこそ、この家の中でかくれんぼをする事ができてしまうくらい。

さらに大勢の使用人達も雇っているため、なおの事その財力を肌を感じる。

海や麟君と一緒にいる時は気になる事は無いが、こうやって一人でこのお屋敷を歩いているとそんな考えが沸き上がってくる。自分がここにいる事が場違いなような、そんな居たたまれない気持ちと共に。

私も北海に居た時には、お父さんが里正をしていたので、お嬢様としてちやほやされている時はあった。その人達は私を通してお父さんを見られているようで、どうにも馴染む事ができなかったが。

しかし、現在の糜家の規模と私の家を比べると雲泥の差がある。糜家とて先代様までは有秩だったのだが、今の家長である子伯様に代替わりしてからさらに栄えるようになったらしい。

そして私は寝惚けた頭のまま、もう一度昨夜見た夢を思い返す。

家柄の差、身分の差により酷い目に遭った時の事を。また、大事な親友となる女の子との間に縁ができた時の事を。

私があこの村に住んでいたのは、家族や同じ町の住人達と一緒に青州北海からこの村へ移住して来たからだ。北海から移住する事になったのは、当時の北海太守のかける重税が原因だ。食べていく事ができないくらいに重税をかけられ、食べていけない人達が賊となり村や町を襲い始め、安全に暮らしていく事が難しくなったらしい。

私達は北海から南下して徐州へと入ったが、移住してきた人達全員が食べる事ができるような仕事はそうやすやすとは見つからない。このまま死ぬか、いつそ自分達も賊として生きていくか、そんな相談をしている時その話が届いたのだ。

『東海で新しく村を作る事になったので、開拓民を募集する』

困窮していた私達にとって、その話は天からの恵みに思えた。正確にはその土地は与えられるのではなく十年間の貸与であり、借り賃も支払わなくてはならなかった。しかし、少なくともすぐに死ぬ事は無くなる。私達は一二もなく飛び付いた。

そうしてやってきた私達により作られたのがこの村だ。とはいっても、私達が着いた時には住む家は建てられており、既に村の形には整っていたのだから、苦勞して一から作り上げたわけではない。

お父さんは里正をやっていた経験から、みんなに推されてこの村の長をする事になった。

そして今回の移民受け入れの責任者というお役人様が、この辺り一帯の地主の麩家当主、子伯様だった。

後年知った事なのだが、子伯様は開拓の進んでいなかったこの辺りの土地の地主で、移民を受け入れて耕作させる事を州牧様へ進言し、その監督を任されたらしい。

余談だが、麟君がこの子伯様の進言の内容を知ると、驚くと共にすごく評価していた。ミントンって言ってたかな。制度を整備して積極的に推進すれば、税収は莫大な額に上がるって興奮した様子で口にしていた。

まあ、それは置いておくとしよう。

私が海と出会ったのは、村に着いて数日後。子伯様がこの村に最初に来た時だ。子伯様は部下を数人引き連れていた。そして、私達へこの土地を耕作するように伝え、戸籍の作成を行った。それから初年度は税の免除や道具の貸し出し、作物の種の譲渡、当朝食べていくための食料の配布等をしたらしい。

らしいというのは、それが伝えられた場に私は居らず、一人で村の土弄りをしていたからだ。他の村人達は子供達も含めて子伯様の話を聞きに言っていた。

私かというと、子供心にみんなの役に立とうと、先に畑に入って農作業の邪魔になる小石を拾っていた。もっとも、役に立ちたいというのだけが理由ではなく、どうしても馴染む事のできない村の子供達と顔を合わせたくなかったというのも有る。当時の私は、村の子供達の

間では少し浮いており、子供心にそれが辛かったのだ。今でも村の若い年くらいの子達と話していると浮いてしまう事が有ったのだが、あまり気にしなくなっただのは少しは大人になれたからなのだろうか？

話を戻そう。そうやって出来た、折角の一人きりの時間を遊び呆けるのではなく、農作業に使ったのは両親に失望されるのが怖かっただろう。自分でも驚くほど当時の自分は家族に失望される事を恐れていた。だから空いた時間であっても、両親に失望されないようにお手伝いばかりしていたような気がする。丁度この時に一人作業をしていたように。

その日は前日が雨だったために地面がぬかるんでいて、少し深く埋まっている石も簡単に地面を掘って取り出す事ができた。着ている服も農作業に合わせて、汚しても構わないような着古した物だ。何も気にせずぬかるんだ地面を歩き、次々に石を取っていった。そうしているとミミズが時々顔を出す、できるだけ見ないようにしていたと思う。今も昔も私は虫が苦手だ。それでも我慢しなくては農作業などできない。本当は悲鳴上げて逃げ出したいくらいなんだけど……。

そうやって作業をどれくらいしていたのだろうか。流石に疲れたので一休みしようと思えば、畑に入る前の畦道から、髪の毛の長い綺麗な格好をした顔を見つめない女の子がこちらをじつと見つめているのに気づいた。

それが海の姿を初めて見た時だった。綺麗な子だなとか、おそらく同じ年くらいだろう、とかそんな事をぼんやりと考えていたのを覚えている。

村で見た事がないという事は、今日来たお役人様達の関係者なのだろう。町から来たと考えれば、この子の格好の事も説明がつく。そういえば、この時の海はよそ行きの格好だったため、珍しく裾の長い服を着て、髪の毛も括つていなかった事を思い出す。現在の海ではする事の無い格好だろう。

そんな事を続けて考えながら、互いの事を数秒見つめ合い、我に返り私は自分の格好の事を思いだした。泥に汚れても良いように、着古

した服の裾と袖を捲り上げている。目の前にいる女の子の身綺麗な格好とのあまりの落差に恥ずかしくなった。

「何か用ですか？」

私は、恥ずかしさのせいで固くなった口調で、目の前にいる女の子に話しかけた。

「あ、ううん。用ではないの。ただ、何をしているんだろうって」

「土を耕す時に邪魔にならないように石を拾っているんです。ほら、こういうのを」

拾った石を入れたザルを持ち上げ、海の方へ近づいて中を見せる。それを見て彼女は感心したように頷き、こう言った。

「いっぱい拾ったんだねー。ねえ、私もお手伝いしていい？」

その言葉にギョツとして、私はおもわず目の前の顔を凝視してしまったのを覚えている。

海はニコニコと私の方へ邪気の無い笑顔を浮かべていた。

私をからかうつもりなどなく、本気で手伝おうとしてくれている事がその表情から窺えた。

「え、と。無理だと思えますよ」

「なんで!？」

思わず否定的な言葉を返した私へ、少し泣きそうな顔をしながら声を返してきた。

「土弄りするならその格好のままじゃ……。服を汚してしまうと怒

られませんか？」

そう私が言うと、彼女は私の格好と自分の格好を見比べて、不満を表すように唇を少し尖らせた。

「じゃ、じゃあ服を脱げば……」

「駄目だと思えます」

即座に否定の言葉を返した。仮に服を脱いだとしても、地面が湿っているので置く場所がなかった。さらに良家の娘であろうこの子に、裸で作業をしてもらうのが何かしらまずい結果を生む事は想像に難くない。

「じゃあ、どうしろって言うの!？」

「無理にお手伝いをして頂かなくても……」

そう口にした私に、彼女が頬を膨らませた。

確かに手伝ってくれるならありがたいが、それは他の人に迷惑をかける範囲でだ。

私の都合でこの娘が叱られるのは良くない、そんな風に考えていたと思う。

「私があなたと服を交換すれば……」

「それだと私が働けなく……」

彼女の再三の提案に、また否定の言葉を返そうとしたのだが、ここであふと思いついた。確かに服を交換するだけでは働ける人数が増えるわけではないからあまり手伝ってもらおう意味がない。

なら二人で働く事ができるようにするにはどうすれば良いのだろうか。

問題になっているのは彼女の格好だ。なら、家にある私の別の服に着替えてもらえば二人で働く事ができる！

そう考えた私は、彼女に私の服に着替えてもらって作業を手伝って欲しいとお願いした。

彼女はそれを聞くとすぐに嬉しそうに破顔した。

当時の私はこの考えを名案だと思っていた。しかし、彼女が服を汚す事が叱られる原因になる事は想像できたのだが、自分の家族よりも目上に当たる人物の家族を働かせる事が問題となるとは思っていなかった。このすぐ後、私はそれを思い知る事となった。

彼女を連れだつて家に戻る途中、彼女は自分の名前を名乗った。私も彼女に自己紹介をして、お互いを字で呼ぶようになった。

家に着き、私が簡単に井戸水で自分の体の泥を落とした後、海に私の着ているのは別のぼろの服に着替えてもらった。

それから彼女に椅子に座ってもらい、私は後ろに回って髪の毛を紐で一つにくくる。髪をくくった自分の姿を見たいと言うので、鏡を見せてあげるとすごく喜んでくれた。天真爛漫な海は、髪の毛をくくった方が動きやすくなって良いだろうと思ってそうしたのだが、予想以上に本人が喜んでくれたので私も嬉しくなった。まさか、現在に続く

までずっと同じ髪型にし続ける事になるとは予想もしていなかったが。

そのまま来た道を戻り、畑に再び入って石拾いを再開した。先ほどとは異なり、二人でお喋りをしながらだから石を拾う速度は遅くなつてしまったが、凄く楽しかったのを覚えている。

いつの間にかすつかりと打ち解けて、敬語を使わずに話しかけるようになる、彼女はすごく嬉しそうな表情をしてくれた。私が彼女を喜ばせる事ができたのだと思うと、私も嬉しくなった。

しかしそれからすぐ、突然後ろから押されて私は前のめりに地面に倒れた。目を白黒させながらも起き上がろうとすると、目の前には怖い顔をしたお父さんの姿があった。そしてそのまま胸ぐらを掴まれ無理矢理立たされて、何回も頬を張られた。

その後海の方を向かされ、上から押さえつけられて土下座の姿勢を強要される。下を向かされる前に見えたのだが、いつの間にか海の隣にはお父さんと同じ年頃の男性が立っており、こちらを見下ろしていた。海はその男性にすがり付き、何かを大声で言っているようだった。直感的にこの男性が海の家族なのか、と思ったのを覚えている。

不思議とその時はお父さんにされた事の痛みは感じなかったが、私何か大変な事をしでかしてしまったのは理解できた。自然と瞳が潤んできて、視界がぼやけた。

そのままお父さんと子伯様が何かを話していたが、よく覚えていない。

気がついたら私は立ち上がっていて、海が子伯様に手を引かれて離れていこうとしているのを見送っていた。それでもこちらを振り返り、私を気遣うように必死に見つめてくる海を安心させたくて、大丈夫だよ、という意味を込めて大きく一つ頷いた。それでも海が心配するような表情を変える事は無かったのだが。

家に帰った後、お父さんに物凄く叱られた。万が一子伯様の不興を買ってしまった場合、この村への移住の話自体が無くなりかねなかったので当然と言えば当然だろう。

そして、翌日廢家まで一人で謝りに行くように命じられた。

また、海が着替えに家に寄る事なくそのまま帰ってしまったために、置かれたままだった服も一緒に持つていく事になった。

自分のせいでみんながまた路頭に迷う事になってしまったらと怯えて、その日の夜はなかなか眠る事ができなかった事を覚えている。翌朝、足取り重く麿家に赴いた。睡眠不足の上、不安から朝食も喉を通らなかつたため、顔色はこれ以上無いくらい悪かつただろう。さらには昨日張られた頬は腫れており、何があつたか知らない村人達にじろじろと見られる事になった。

『永遠に麿家につかなければ良いのに。』

そんな戯言を本気で願つてしまふくらい、あの時の私は追い詰められていた。

どれだけゆつくりと歩いたとしても、広くない村の中だ。そんなに時間もかからずに麿家に辿りつく。

謝つたと嘘を吐いて逃げ出してしまうかと思つた五分。根本的な解決にならない事は分かつていたので、ようやく勇気を振り絞つて扉を叩く事ができた。

その時私は、おそらく使用人か部下の方が扉を開けると予想しており、海と子伯様に謝罪をしに来た旨を伝えて家の中に入れてもらおうと、告げる言葉を頭の中で反芻していた。しかし、その予想は見事に裏切られる事になる。

予想に反して、扉を開けたのは海だった。その顔を見た瞬間、頭からすべて吹き飛んでしまい、何を口にするべきなのか、咄嗟に判断する事ができなかつた。

海も扉の先に私が居る事が予想外だったのか、私の顔を見たまま固まっていた。

ようやく自失状態から立ち直り、そのまま礼儀に則り膝を地面についでから謝罪を口にしようとして体を動かそうとした時、私よりも数瞬早く立ち直つた海が私に飛びついてきた。膝をついた姿勢を取ろうとしていた事から、完全に予想外だった海の行動を私は避ける事ができずにそのまま尻餅をついてしまった。海はそんな私に構う事無く、首筋に抱きついて謝罪の言葉を繰り返していた。

私が謝りに来たのに、糜家のお嬢様に謝らせたとあつてはまたお父さんに怒られると思い、慌てて海を押し留めて彼女の字を呼んだ。

「子仲様。どうかお離れください」

その私の言葉を聞き、彼女は傷ついた表情を浮かべた。

「な、何でそんな他人行儀な話し方なの!?!」

「昨日は貴女のご身分を知らなかったとはいえ、大変ご無礼を致しました。平に――」

「だから！ そんな距離を感じる喋り方しないで！ 昨日みたいに普通に話してよ！」

お詫び申し上げます。そう続けようとした私の言葉を遮り、彼女は目尻に涙を溜めながら私にそう言ってきた。

困った。このままじゃ逆に失礼に当たりそうな気がする。

どうすれば良いのか分からずにそのまま固まっていると、家の奥から私達へ声がかかった。

「海。 とりあえず家に入ってもらえ。 長くなるようならそのまま玄関口で問答を繰り返すのは良くない」

その声が聞こえてきた方、家の奥へ視線を向けると、昨日海の隣に立っていた男性、子伯様が苦笑いをしながら私達を見ていた。

まだ私に抱きついたままだった海を促し、糜家にお邪魔する。

そして、手に持ったままだった海の服を頭を下げながら子伯様へお渡しして、謝罪を口にする。

「昨日はご息女へ大変な無礼を――」

「ああ。 謝罪は要らない。 昨日の事は娘から聞いたが、君は海に服を貸してくれたただけだろうか？ ならば、叱る道理は無いな」

「……え、でも」

私の言葉を遮り子伯様がそう伝えてくる。

困惑する私をよそに、子伯様は言葉を続けられた。

「そもそも、発端は娘の我侭なのだろうか？ 君は自分のできる範囲でそれを叶えようとしてくれた。 その上、娘が後で叱られないよう着ている服にまで思考を巡らせてくれている。 そこまで娘に尽くしてくれた者を叱るわけには行かない?。」

娘がよそ行きの服を泥だらけにして帰ってきたら、流石に叱りつけないわけには行かなかつただろうな、と海の方を半目で睨みながら子伯様はそう口にした。

その視線から逃れるように海は私の後ろに隠れる。あまり意味がある行動には思えないんだけど。

「まあそういうわけだから、君を叱りつけるつもりも、罰を与えるつもりも私には無い」

そう子伯様に言っただけで、私は膝から力が抜けてその場にへたり込んでしまった。詰めていた息を大きく吐き出し、安堵から瞳が潤む。

目上の方の前でするには無礼な態度ではあるが、体に力が入らないので許して欲しい。後ろに隠れていた海は慌てたようにしやがみ込み、私の首に後ろから抱き着いてきた。

「というより、他人から子供のした事にいちいち怒り出すような人物と思われている事に腹が立つのだが。君はどう思う？」

しやがみこんだ私に対しても特に叱責をせず、言葉が続けられた子伯様に私は曖昧な笑顔を返す事しかできなかった。

「まあ、それは良いだろう。ところで、君を見込んでお願いがあるのだが」

許す代わりに何か無理難題を言い渡すのか。

そう考えて身を硬くした私へ、子伯様は言葉を続けられた。

「今後、娘には農業がどういう物かを理解してもらおうために、この村で生活をしてもらう予定なのだが、どうにも我侭な気質でな」

我侭、というよりは何が何でも自分の意見を通そうとする……あ、それが我侭か。

すぐく納得して、思わず子伯様に大きく頷きを返してしまう。

海から「酷いー!」とか抗議の声が聞こえて来るけど無視。耳元で叫ばないで欲しい。

「それを叱り、正す事ができる人物を娘の側に置きたくてな」

「それを私に、ですか？」

「ああ。 というのも建前ではあるのだがな」

「？」

建前？それじゃあ本当の目的は何なんだろう？

そして、からかうような口調で子伯様はこう続けられた。

「まあ、ぶつちやけて言っていると、娘が君と友達になりたくてなりたくてしようがないようだな」

「はっ。」

予想外の言葉に面食らう。後ろから何やら慌てて今の子伯様の言葉を否定している声が聞こえてきているけど、今は無視して子伯様の言葉に集中するべきだろう。

「なので、君に海の側にいられるような立場を与えたという建前にすれば、身分の上下に関係無く一緒にいさせてあげる事ができるのではないかと考えてな」

海は恥ずかしそうに私の肩に額を当てて「お父様の馬鹿」と呟いている。子伯様の耳に入ったら怒られるだろうから、止めたほうが良いのだろうか？

それは置いておくが、おそらく子伯様には別の意図もあるのだろう。私が『お嬢様』と言われていた時と同じように、海に近づこうとする人間が居ないとも限らない。そういう人間が近づいて来る前に仲の良い友達を作らせて、近づかせないという意図なのだろう。

「と、いうわけなのでこの子の友達として側に居てあげてはくれないか？」

そう笑顔で言ってきた子伯様に、私は間髪居れずに言葉を返した。

「お断りいたします」

言った瞬間、場の空気が凍りついた。

子伯様は、まさか私が断るとは思っていなかったのだろう。笑顔のまま固まっている。

後ろの海も首に抱きついたまま言葉を発していない。

「ふむ。それは海の側にいるのが嫌だ、そういう事か？」

自分の娘を蔑ろにするような発言をしたからだろう。子伯様の言葉に先ほどもまでの穏やかさは無く、酷く平坦な調子でそう言った。

後ろの海がビクツと震える。その言葉に同意すれば、私が友達にな

りたくない」とその意思を表明する事になるからだろう。

「そうではございません」

そんな海を安心させてあげたくて、その言葉も即座に否定する。

「……すまん。 どういう事が説明してくれるか？」

「側にいるよう命じられたから友達になるってというのは、何か違うと思います」

この時、私は直感的にこの申し出を受けては駄目だと感じていたに過ぎなかった。 論理も何も無く、ただこの言葉に領いてしまったら海と仲良くする事ができない、そう感じたのだ。

おそらく子伯様は、海の側に私を置ければそれで良いと思っていたのだろう。 しかし、それでは駄目だ。

この言葉に領いてしまったら、海との間に明確な上下関係が作られるという事だ。 対等な友誼など築きようが無くなる。

しかし海が私に求めていたのは、正にその対等な関係だったのだろう。 私自身『お嬢様』として一歩引いた態度で接される事が嫌だったので、海も同じだろうと考えたのだ。 先ほど字を様付けで呼んだ時に傷ついた表情を作り、敬語を使わずに話すと凄く喜んでくれた事からもそれが伺える。

そのまま私の言葉を思案し始めた子伯様から視線を外し、後ろから私の首に回されている腕に視線を落とし、離す様に軽く手で叩いて合図する。

意図を察してくれたようで手が離れた。 そして私は座ったまま体を後ろへと向き直り、姿勢を正して座り直した。

これからする事に非常に緊張して、彼女の顔を見る事ができずに少し俯いていた。 しかし、動きだけは止めずに彼女の右手を取り、私の額へ押し載いて言葉を作った。

「身分の違いがある事は理解しております。 しかし、それでも私は貴女と友達になりたいのです。 どうか私と友達になつては頂けないでしょうか」

そこまで言って私は目を閉じて、目の前の女の子が何か言うのを待つ。

そして、すぐに左手を私の背中に回して抱きついてきた。

「私も……あなたと友達になりたい」

そう耳元で囁かれた。

昨日見た夢はそこまで見た時に目を覚ました。

今もまだ海と対等な友達を続けている事を考えると、あの時子伯様の申し出を断るのは正解だったのだろう。もっとも、仮に海よりも下の立場に置かれたとしても、海が勝手に自分の隣まで手を引いて持ち上げていただろうから、関係自体はあまり今と変わりが無かったのかもしれない。

井戸の設置してある中庭へと続く扉を開くと、そこには自分の髪の毛をまとめるのに四苦八苦している海が居た。

海におはようと声をかけて朝の挨拶を交し合い、後ろを向いてもらい髪の毛をまとめてあげながら、二人で他愛の無いお喋りをし始める。

お喋りの最中、海がふと言葉を止めたので、どうかしたの、と声をかけた。

「ううん。幸せだなんて。空と友達になれて良かったなって。

そう思っていたんだよ」

思わず赤面してしまいそうになるくらい真っ直ぐな親愛の言葉だった。だから、つい照れ隠しとしてこんな憎まれ口のような言葉を紡いでしまったのだろう。

「うん。私も海と仲良くなれて幸せだよー。だけど、だからといって麟君の事を譲るつもりも無いけどねー」

そう言った瞬間、即座に海は私を振り返って抗議の言葉を口にし始めた。その言葉を適当に聞き流しながら、井戸から組んだ水で顔を洗い始める。

折角これまで仲良く同じ時間を過ごしてきたのだ。十年後、二十年後も一緒に居られれば良い。

眩しさに目を細めながら太陽に目を向けて、今日一日の平穏と共にそんな事も一緒に祈るのだった。

幕間二 Cooking? Cooking! | 行軍食―

膨れっ面をしている海をなだめながら、一緒に居間へ向かう。

私はともかく、海は今日も仕事なのだから、すぐに朝食を取って登城しなくちゃいけない。

居間に入ると、叔子が王虎の餌の準備をしていた。

その叔子に海が小走りで近づき、抱きつきながらおはようとお挨拶をする。叔子もくすぐったそうな顔をしながら挨拶を返している。

出会ってからまだ一年も経っていないけど、すっかりと仲の良い姉妹ができている。

私も羨ましくなり、混ぜてもらおうと叔子の方へ近づく。そして、叔子の頭を撫でながら微笑みながら挨拶する。

「おはよう、叔子」

「おはようございます。公祐さん」

叔子は海に抱きつかれたまま、私に笑顔で挨拶を返してくれた。この娘は本当に素直で可愛い。こちらから笑顔を向けると、必ず笑いかけてくれる。子伯様や麟君も含めて、みんなで構ってしまうのはこういうところが原因だろう。

このまま叔子を相手に和み続けていきたいのだが、とりあえず食事にしようと思んなで食卓に座る。

そうして待っていると、使用人さんが私たちへ挨拶をしながら朝食を持ってきてくれる。子伯様と麟君はどうしたのかと聞くと、子伯様は既に登城なさって、麟君はまだ眠っているとの事だ。昨夜遅かったみたいだし、しようがないのかな。

三人でお喋りしながら朝食を食べた後、海は慌ただしく登城していった。

食後、叔子は王虎を膝に載せて、麟君お手製の計算帳を使って勉強を始めた。パチパチと、算盤を弾く音が耳に心地よい。

この算盤という道具は、麟君が作成した物だ。元々これは、麟君が

自分で使うために作った物で、最初は一台しか無かった。しかし、子伯様がその有用性を認め、私たちにも扱う事ができるようになれとお命じになったのだ。

そのため、麟君主催の青空教室で課題として扱う事になり、村の子供たちの多くは算盤を扱う事ができるようになつていった。

ちなみにこの算盤は、子伯様が広めた事もあつて？の商人や官吏達も持っている人が増え始めている。

叔子も同様に麟君から算盤を覚えるように言われたため、頑張つて勉強しているのだ。私はそうやって勉強している叔子の隣に座り、分からないところがあれば教えてあげつつ、麟君から借りた塩鉄論を読み進める。

これは麟君に薦められて最近読み始めた。経済書のため読みづらいかと思いきや、対話形式で編纂されているため読み易く、議論の内容が経済だけではなく多岐に渡るため、なかなか興味深い。

麟君はそれだけではなく、相手を説得する際の討論の仕方学ぶ事ができると言っていたが、確かに参考になる。対話形式のため、相手をどう言い負かして自分の意見を認めさせようか、それが読み取りやすくなっているのだ。紹介してくれた麟君に感謝しながら読み進める。分からない部分は後で麟君に質問しようと、忘れないように木片に記載をする。

そうやって時間を過ごし、叔子が課題を全部終わらせた頃、麟君が居間に入ってきた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう、麟君。お寝坊さんだね」

叔子がまず挨拶し、私はからかうように声をかける。決して昨夜の意趣返しではない。無いったら無い。

「おはよう。とは言つても、もうこんにちはの時間かな」

麟君はそう言つて、少し苦笑いをする。

そんな麟君に、私は言葉を返す。

「疲れているんだつたら、さっさと寝れば良いのに」

いけない、声に少し陰が混じつた。八つ当たり、駄目。絶対。

「まあそうなんだけど、ちよつと急いで報告書作る必要ができてね」

特に私の声の調子を気にした様子もなくそう言つて、麟君が私たちの向かいに腰を下ろす。私達と顔を見て話せるように、という意図なのだろう。それでも、あえて私の隣に座つて欲しかったと思うのはわがままだろうか？

「お兄ちゃん、課題終わったよ？」

「あ、本当？　じゃあ、採点するから少し待つてて」

そんな風に煩悶する私をよそに、叔子が計算帳と解答を書いた木板を麟君に渡す。

麟君はそれの答え合わせを始めるようだ。

私は、麟君の分のお茶を淹れに席を立った。

麟君の分、それから私と叔子の分のお茶まで淹れて居間に戻ると、麟君は叔子の計算帳を指差しながら、何か教えていた。さつき私が見た時には間違つた答えは無さそうだったんだけど。

「で、三つの固まりが三個あると九になる」

「むー」

ああ、なるほど。間違いへの解説ではなく、次の単元の説明をしているのか。

「お茶が入ったよ。　叔子は乗算の学習開始？」

「ありがとう、頂くね。　加算と減算はもう完璧みたいだからね。九九を教え込もうかと」

「……難しいよ、これ」

感謝と共にお茶を受け取る麟君と眉を寄せて考え込んでいる叔子。乗算はコツが分からないと難しいよね。海は私よりもずっと早く理解したんだよね。

「九九は音で覚えちゃうのが早いよ」

「音？」

席に座り直し、私はそう叔子に言った。私も乗算を覚えるのには非常に苦勞した。そこで麟君が教えてくれたのが、九九を丸暗記してしまふ方法だ。

「繰り返し、繰り返し九九を唱えてその自分の声で答えを丸暗記し

ちやうの。 九九はその表にあるとおりの答え以外は絶対に出ないから、そういう方法で覚えちやうんだよ」

「唱える……」

叔子は呟くようにそう言って、一の段から順に唱え始めた。

麟君はその様子に安心したようで、一つ大きく頷いて、ゆつくりとお茶を飲み始めた。

私もお茶を少し飲み、麟君へ向き直って話しかけた。

「ところで、少し気になってる事があるんだけど。いくら出兵したとはいえ、報告書つて翌朝すぐに出すような物じゃないでしょ？」
確か、通常は口頭で報告をした後、報告書を二週間以内に提出するような日程だったと記憶している。

「あー、さつきも言ったけど、報告書を急いで作る必要性ができちゃつてね」

そういつて、麟君は苦い表情を浮かべた。

「故意か不慮かは分からないけど、報告されていた賊の数よりもずっと多かつたんだ。 捕虜とした数だけで最初の報告の数よりも多いから、誤りが有った事を誤魔化す事はできないだろうね」

吐き捨てるようにそういつて、麟君は大きく溜め息を吐いた。

思っていた以上に大変な状況だったんだ。無事に戻ってきてくれて良かった、心中でそう安堵の溜め息を吐く。

「まあ、おかげで練兵にてこ入れできそうだし、災い転じて福と成すつてところかな」

麟君によると、今回の報告間違えは偵察の誤りとして落ち着く可能性が高いとの事だ。そこで、州兵の練度向上を目指すように上奏をしたとの事だ。どうやらそれが昨日作っていた報告書らしい。

「それ、すぐ作る必要有ったの？」

「時間が立つと、反対する方々に反論を考える時間を与えちやうからね。 まさか戻ってきたばかりですぐに報告書と上奏文が提出されるとは思わないでしょう。 だから今日提出だったら、何の反対も受けずにそのまま裁可が下る可能性が高いんだよ」

少し呆れてしまう。抜け目が無いというか、なんというか。

けど、危機も好機に変える意思を持ち続けるのは良い事だよね、うん。

そうやって前向きに麟君の行動を捉える事にする。恋する乙女ですし、好きな人の行動を全部肯定してもおかしくないと思うのだ。……あれ？私だけ？

少し会話が途切れてしまい、叔子の九九を唱える声だけが聞こえる。

別段会話がなくても、気まずさは感じない。今さらその程度で気まずさを感じるほど、短い付き合いではない。

その事を少し自慢気に思っていると、麟君がちよつと作業をするね、と前置きして席を立った。そして、いくつかの木札と筆記具を持って戻ってきた。

そして木札に色々と書き始める。

道路、駐屯地、工兵、土木、投石、弓兵、槍兵、騎兵、補給、記録、識字、福利、食事、宿舎、年金等々。

次々と手を休めず、木札一つに単語一つを書いていく。

何か新しい遊びでも作るのかな？

不思議に思いながらそれを見ていると、麟君は書き終えたようで筆を置いてその木札を色々と並べかえを始めた。

叔子もいつの間にか九九を唱えるのを止めて、麟君が始めた事を王虎と一緒に興味津々に見ている。

王虎がちよつかいを出して木札を弾き飛ばしたりしながらも（その度に麟君と叔子が折檻していた）、麟君が並べかえる手を止めて満足げに一つ頷いた。

終わったのかな？

「お兄ちゃん、それ何？」

叔子が目をキラキラさせて麟君に尋ねる。ああ、叔子も新しい遊びと思っただのか。

「ちよつとしたお仕事だねー」

木片から目を離さずに麟君が答える。

わ、みるみる内に叔子がいよいよ。麟君に遊んでもらえると

思ったんだね。

慰めるために頭を撫でてあげながら、私は麟君に質問をした。

「それで、これは一体なんなの？」

「ちけっ……。いや、なんでもない。これは今回の行軍で気づいた、今後州を挙げて推進していった方が良いついていう事柄。それに関係する事柄でまとめて置いていつてるんだよ。こんな風に」

そう言つて、麟君は土木、道路、工兵、駐屯地でまとまっている木札を指差した。

なるほど。ところどころ意味が分からない単語はあるけど、やろうとしている事は理解できた。

「たくさんあるね。これ全部を進めていくの？」

「流石に全部をすぐにつていうのは無理だけどね。ひとまず優先度の高い物から一つずつこなしていくしかないね」

麟君はそう口にしながら、どれから始めようかと木札を吟味し始めた。

私と叔子もそれを眺めていたが、叔子がそのうちの一枚に興味を持ったようで、それを手に取った。

『食事』

叔子が取った札にはそう書いてあった。

「ご飯？」

「うん。ご飯」

単語で問いかける叔子に対して、麟君も単語で答える。

「……ん？ご飯？」

「ご飯って、出兵に関係あるの？」

せいぜい持つていく量を考えるだけだと思っただけだ。

「私も知ってはいたけど、実感の無かった事なんだけどね。戦場の食事は美味しくない」

しみじみと麟君はそう言った。

さらにこう続けた。

「小麦と塩を水で溶いただけの汁を、私は料理と呼びたくはないよ。厭戦気分になつてもしょうがないと思う。あれを一ヶ月も食べ

れば、どんな兵士でも家に帰って美味しい食事を食べたくなるよ」

「そ、そこまでなんだ」

確かに例に出された物は美味しくなさそう……。

「美味しい食事を出すだけで士気を保つ事ができるなら、やってみる価値はあるんじゃないかなと思ってるね」

まあ、言わんとする事は私にも理解できた。けど問題も有りそうだよね。

「けど、単純に食べ物持っていつても腐ったりして駄目になっちゃうんじゃない？」

「うん。問題はまさにそこに有ってね。一応解決する事ができる方法は思い付いてはいるんだけど……」

そこまで言って麟君は言葉を切って考え始めた。それから、少し悪戯っぽい表情を浮かべてこう言った。

「それじゃあ、食べてみようか？」

「はい？」

麟君のその一言で、昼食は麟君お手製の行軍食となった。現在、麟君は厨房に入っている。

正直言っただけかなり不安だ。先ほど、麟君から今回の討伐で食べていたという行軍食の話聞いたからだろう。

いや、けど美味しい料理を食べたいって言うてるのだから、変な物は出てこないだろう。

しかし、今回食べた物よりましになる程度の食事が出てくるかもしれないし。

そうやって悶々としている私に対して、叔子はただひたすらに待ち遠しいようだ。麟君が作るご飯ってだけで喜ばしいのだろう。

まあ、麟君のご飯美味しいからね。こつち来てからは使用人さん達の顔を立てるように料理をしなくなってるし。

……卵焼き食べたい。

「麟君！ だし巻き卵も一緒に作って欲しい！」

「よろこんで！」

厨房にいる麟君へ向けて大声を張る。そうすると、了解の旨が帰ってきた。

あの返事は、料理を作ってほしいとお願いされた時にはそう答えなくてはいけない、と啓示のように頭に思い浮かんだそうだ。こういう時、麟君の頭は時々変だと思う。まあ、そんな所も好きなわけですので、文句をつけるつもりはさらさらないので。

卵焼きの注文が通ったからか、叔子が満面の笑みを浮かべている。きつと尻尾があるならぶんぶん千切れんばかりに振り続けている事だろう。

そんな事を考えているうちに、麟君は料理を作り終えたようで厨房から湯飲みを載せたお盆を持って出てきた。

……湯飲み？

「お待たせ。まずはこれをどうぞ」

そう澄ました顔で言いながら、私と叔子の前に湯飲みを置いていく。

中には白い水のような液体が湯気を立てている。

……えつと？

思わず固まってしまった私と叔子へ、麟君が満面の笑みを浮かべながらこう言った。

「私が戦場で食べた小麦汁。これから私が作った物と比較するためには、食べてみないと駄目だと思ってね」

嫌がらせ、絶対嫌がらせだよ、これ！

思わず恨めしそうに麟君の事を見ってしまう。叔子も切なそうな顔をしながら、湯飲みと麟君の顔を交互に見ている。おあずけをされている犬をみているようで、正直少し和んだ。ごめん、叔子。

「まあまあ。私はこれをなみなみとお椀一杯に注がれて食わされたんだから」

麟君が言ったその言葉にため息をついて、諦めて匙を手取る。叔子も嫌そうな顔をしながら匙を取った。

こんな物食べていたんじゃ士気は維持できない。

口直しとして出してくれただし巻き卵に舌鼓みを打ちつつ、そう確信すると共に結論付ける。

「想像以上に酷いね、あれ。　長期になると厭戦気分が蔓延するのも分かるよ」

「でしよう？　しかも、火が使えない状況だったらお湯じゃなくて水で溶くんだよ？　冬場は体が冷えきって体を動かせなくなるって」

そう言った後、麟君は厨房に次の料理を取りに行った。

叔子は先程から私たちの会話に加わらず、一心不乱に卵焼きを食べていた。今は食べ終えてほうつと小さく息を吐いている。好物を食べれてご満悦のようだ。

「卵焼きは満足できた？」

「こくこくと無言で頷かれた。」

「小麦汁はどうだった？」

無言で泣きそうな顔をされた。

なので私も無言で頭を撫でてあげる。

そうしていると、麟君が次の料理を運んできた。お椀に入っているようだ。

まさか小麦汁二杯目かと叔子と一緒に戦慄していると、麟君がお椀を私達の前に置いた。

中身は餃子のような物が数個入っている。

ひとまず小麦汁で無かった事に安堵し、箸を持って食べようとす。箸でつまむと、カチカチなのが分かる。バリバリと食べれば良いのだろうか。

食べ方が分からず箸を持ったまま固まっていると、麟君がお湯を持ってきて私達のお椀に注ぎ込んだ。

「そのまま少し待って。　数分で食べ頃だから」

麟君の言う事を不思議に思いつつ待っていると、お湯を吸って固かった物体がふやけ始めた。あ、これって。

「これ、ワンタンの皮なんだ」

「ご明察。　それじゃあそろそろ良さそうだし、皮を破って中身をお湯に溶きながら食べてみて」

麟君の言う通りにしてみると、破れた皮から中身が出てきてお湯に溶けていく。美味しそうな臭いがしてきた。中身に味が付いていたようで、お湯の色が濁っていき湯たんとなったのが分かる。

レンゲを使い、口にその湯たんを含む。驚くほど美味しい。

中身は豚の挽き肉と生姜とネギかな。後、鷹の爪も細かく刻んで入れてあるようだ。少し辛めだけど許容範囲だ。

叔子も美味しそうに食べている。辛いのが平気なんだ、と妙なところを感心してしまう。

「名付けるとするなら即席ワンタンかな。挽き肉を調味料と一緒にしっかりと炒めて水分飛ばした物を、厚目のワンタンの皮に包んで油で揚げたんだ。水分が少なくなっているし、鷹の爪も入っているから、腐りづらくなってるはず。随分と日持ちするんじゃないかな」

生姜と鷹の爪が入ってるから体を暖めるし、寒い時用の行軍食だね、と麟君が説明している。

これはすごいと思う。日持ちするように工夫がされていて、お湯を注ぐだけで簡単に美味しい湯たんとなる。戦場でも、小麦汁よりずっと喜ばれるのではないだろうか。

そう考えながらもレンゲは止まらず、叔子と二人でハフハフ言いながら食べる。

その間に、麟君は次の料理を準備しに厨房へ入っていった。

食べ終えたら、汗を掻くくらい体がぼかぼかしている。

叔子も暑いようで服の襟を掴んでパタパタと風を送っている。

ちよつとはしたくないから注意した方が良いかな？

そんな風に思っていると、麟君が次の料理と水を持ってきた。

麟君から水を受け取り、体を冷やすためにゆっくりと飲む。

「豚の腸詰めと乾燥肉の薫製。ちよつと匂いに癖があるから、苦手だったら残して」

「くんせー？」

「煙で食べ物を燻して長持ちするようにする事。匂いが着くから、

風味が変わって美味しいよ」

「ちよつづめって？」

「豚の腸に細かく叩いた肉と野菜、香辛料を混ぜた物を入れた料理。肉の旨味が凝縮されるから美味しいんだよ。あ、王虎に食べさせちゃダメね。ネギ入ってるから体調崩すかもしれないし」

麟君が丁寧な叔子の質問に答えてるけど、百聞は一見にしかずと言う。とりあえず食べてみる事にする。

小さく一口大に切られた腸詰めを口に入れる。

……美味しいっ、これ！

麟君の言っていたように風味が変わって、お肉特有の臭みが感じなくなってる。麟君が言った癖のある匂いはまったく気にならない。むしろ、私はこの匂い好きだな。

続いて乾燥肉も口にする。これも美味しい。何かに漬け込んで味が付いているんだろう。それを軒下に干す事で乾燥させたのかな。

「これも長期保存できるの？」

「腸詰めは湿気に当たらないように気を付ければ一ヶ月は保つかないけど、乾燥肉はもうちよつと長い。焼いた肉を考えると少し味気ないけど、持っていくと喜ばれると思うんだ」

十分過ぎると思う。塩漬け肉っていう手もあるんだけど、あれは漬かっている塩ごと瓶で運ぶ必要があるから、重量が増える。つまりは純粋に持っていくけるお肉の量は少なくなる。それに、瓶に入れなきゃいけないため、割らないように輸送する必要もあるのだ。

これらの燻製製品は、油紙にでも包んで湿気から守ってやれば良いので、輸送を少々手荒に扱っても問題ないのだろう。それだけでも、十分な利点となるだろう。輸送計画を作る文官側としては、多少の悪路でも経路に選ぶ事ができるようにするのは非常にありがたい。

「乾燥肉は味が付いているから、細かく刻んで煮出せばそれだけで湯にもなる。なかなか便利な物だよ」

麟くんの説明を聞きながら、叔子と一緒に夢中になってお肉を食べたら、すぐに無くなってしまった。少し残念。

次で最後らしいけど。はてさて、いったい何が出てくるんだろう。凄く楽しみだ。

さつきまでの不安がどこかに消えてしまっている事を我ながらお

かしく感じながら、麟くんが最後の料理を運んでくるのを待つ。

数分後に麟くんが運んできた最後の料理は、長方形に切られた柔らかそうな物だった。

説明を促すために麟くんへ視線を向ける。

意図を読み取ってくれたようで、麟くんはこれの説明を始めた。

「長生飴っていうんだ。これも二ヶ月くらいは味が変わらないで食べる事ができる。少し風味が落ちるかもしれないけど、三、四ヶ月までは食べても体を壊したりしないかな」

そんな麟君の説明を聞きながら、さっそく頬張る事にする。

食感がもちもちしていて面白い。噛んでみると素朴な甘味が口に広がる。

しばらく噛んだ後、飲み込んですぐに二切れ目に手を伸ばす。

「戦場で甘味を手に入れるのって凄く大変だね。はちみつや糖蜜を持っていくのも大変だし、現地調達も難しい」

その苦労はよく分かる。北海から東海に移動してくる時にどれだけ甘いお菓子が恋しかった事か。

「それで、今日の料理はどうだった？」

最後の長生飴も食べ尽くしたところで、麟君から今日の料理の感想を求められた。

「凄く美味しかったよ。行軍食としてだけではなくて、普通にお店で売り出しても完売御礼になりそう」

「うん。おいしかったよ」

「ありがとう。旅の準備をする人達向けにも商家で売ってみようかと思っではいるんだ。とりあえず、義父さんに食べてもらって許可をもらう事にするよ」

私たちの言葉にそう返して、麟くんは嬉しそうに笑ってくれた。

食事が終わり、私と叔子でお皿を洗って、三人でおしゃべりしながら時間を過ごす。そんな風に穏やかな時間と共に午後は過ぎ去っていくのだった。

ーおまけー

後年、この時の事を回想するといつも死にたくなる。主に羞恥心が

原因で。

叔子が眠たそうにしていたので、麟くんが抱えて部屋に連れていった後も二人でおしゃべりを続ける。そろそろ夕暮れが近づき始める、そんな時にそれは起きた。

「そういえばさ」

「ん？ なに？」

「空さんはなんで私と義父さんが遅くまで起きてた事知ってるの？先に部屋に戻って休んでいたみたいだったのに」

そう麟君から質問が飛んできたので、私は正直に答えた。過去に戻る事ができるならば、私はこの時の自分を張り倒して口を閉じさせるだろう。

「ああ、その事？ 麟君と一緒に寝ようと思って部屋に行っただけで、麟君がいなかったから。少し探したら居間で子伯様と話している声が聞こえたから、多分まだおきてるんだろうなって。おかげで、麟君を慰めてあげようという計画がご破算になっちゃったよ」
私は恨みがましい口調にならないように気を付けて、おどけるようにそう口にした。

いつもならこういう時麟君は、その事に苦笑いと謝罪の言葉で返してくる。

しかしこの時は違った。

目を白黒させて、口をぱくぱくと魚のように上下させたのだ。

その反応にこちらも驚いてしまう。

何か私変な事言った？

「え、えーつと、空さん？ どういう意図でそれを口にした？」

麟君が口元を引き攣らせながらそう言ってきた。

私はまたそれに馬鹿正直に返事した。

「まだ村に居た時に周姉さんから聞いた事があって。村の女の子達しかいない場所で『戦場から帰ってきた男は昂っているから、夜に女の肌で慰めてあげるんだよ。その時にはお気に入りの下着を着けていく事を忘れないようにね！』って」

そう言うと、麟君はみるみる顔を赤らめて、私を信じられない物を

見る時のような目で見てきた。

え、えつとそんなにおかしい事なのかな？

「えーつと、これって添い寝の事だよな？ 夜に女の人の肌を感じるって……。けど、なんでお気に入りの下着つけなくちゃいけないんだろ。 麟君分かる？」

それを勝負下着とも言ってたから、勇気が出るようなおまじないの類いなのかな？

そんなどうでも良い事を考えていると、麟君は机に突っ伏して頭を抱え始めた。

その行動に戸惑っていると、麟君は絞り出すように声を出した。

「空さん、それあまり口外しても、行動に移しても駄目だからね」

「えつと、添い寝してるのがばれると恥ずかしいから」

「そうじゃなくて！」

麟君が跳ね起き、私に向けて声をあげた。

ちよつとびっくりした。こんなに動揺している麟君を見るのは初めてかもしれない。

「……そもそも、空さん。 周姉さんの言った事、正確に理解できていないんですよ。 だったらそういう事はあまり言わない方が……」

「そう言うって事は、麟君は理解できているって事だよな」

「……まあ、一応は」

歯切れが悪いけど、麟君は一応肯定を返してきた。

だったら話が早いよね。

「じゃあ、麟君が私に詳細をー」

「断る！」

「教えて……って早いよー！」

食い気味に私の言葉に被せて拒否の答えを返した麟君に対して抗議の声を上げる。

「良いじゃない、教えてよ」

「無理です」

「無理って、知ってる事なんですよ」

「私の口からでは説明できないって」

どれだけ言い募つても口を割らない麟君に対して、私は段々と意地でも聞き出してやろうという心境になり始めていた。

しばらく教えろ、教えないの押し問答を繰り返していたが、いい加減疲れたのか麟君が折れた。

「本当に私の、というか男の口から聞くの？ 絶対後悔すると思うよ」

言い回しはよくわからないけど、麟君の言葉に深々と頷く。

麟君はそれを見て、小さくため息を吐いて説明を始めた。顔は赤いまま、決して私の方へ視線を向けようとしないまま淡々と。

その説明を聞き、自分の勘違いを理解できたところで、私も麟君に負けなくらいに顔が赤くなっているだろう。

あまりの恥ずかしさに椅子から立ち上がり、脱兎の如く自室に駆け戻る。麟君から制止の声がかかったみたいだけど、今は同じ部屋にいられない。

自室に飛び込み、寝台にうつ伏せに突っ伏して頭を抱える。

恥ずかしい！ 恥ずかしい！

恥ずかしい！

あまりの恥ずかしさに目尻に涙が溜まってきた。

私だって年頃の女の子なのだから、村に居た時に年上の女の子達から好きな人とそういう事をするというのは聞いた事はあったし、麟君には言えないがそういう事を麟君とするのを想像した事もある。

けど、それにしたってあまりにも恥ずかしい。

勘違いして昨夜麟君の部屋を訪れた事も、麟君にその事を馬鹿正直に話してしまった事も、思い人にその事に関する詳細を聞いてしまった事も。

全部が死にたくなるほど恥ずかしい。

先程までとは違って代わり、私の夕方から夜にかけての時間は、身悶えしながら呻き声を上げ続けるという、到底穏やかとは言えないように過ぎていくのであった。

幕間三 In your letter — 近況報告 —

『諸葛子瑜様へ』

その宛名が入った手紙が、数カ月前に義兄となつて頂いた麟義兄さんより届いた。

その事に例えようもないほどの安堵を感じて、胸を撫で下ろす。

その後にはじわじわと喜びが沸き上がり、胸を多幸福感が満たしている。義兄さんからの手紙を両手で胸に当てて、動悸を鎮めようと試みる。

この手紙が届くまでの間、義兄さんがこの家で看病してくれていた日々が、麻疹の熱でうなされて見た夢だったのではないだろうかと不安に思っていたのだ。流石に「私が義兄さんと真名の交換したのは現実だったのか」と妹に確認する度胸は無かった。勘違いだったら傷心でまた寝込みかねない。

そのため喜びもひとしおという物だ。これくらいの感情の揺れはしようがない物だろう。

どう考えても、義兄さんに真名を交換して頂いたあの日、私は熱で頭がどうかしていた。思い出すだけで奇声を上げながら寝台に潜り込んで頭を抱えて転がり続けたくなる。はしたないのでやらないが。

あの時、同じ部屋にいた皆は私の突然の申し出に、実際に私が真名を捧げた義兄さんはもちろん、朱里達でさえ一様に驚きに満ちた顔をしていた。私が家族と将来の伴侶以外の者へ真名を捧げるとは思っていないなかつたのだろう。

それを見て、一瞬で熱で湯立っていた頭が冷えた。

すぐに自分が何を口にしたのかに気づき、血の気が引いた。拝礼の姿を取り続け、顔を伏せていたから気づかれなかつただけだ。恐れから来る体の震えは全力で止めた。

誤解の無いよう明言するが、義兄さんに真名を捧げた事と義兄妹となつて欲しいと申し出た事に対しては、何一つとして偽り無い私の気

持ちだ。

しかし、なんの根回しも無くいきなり真名を打ち明け、義兄妹と
なつて欲しいなどと言ひ出したのは如何な物だろうか。

どう考えても私が理想としている真名の交換とはほど遠い、節操の
無い振るまいです。本当にありがとうございます。

簡単ではあるが、過去と現在の真名の扱いの違いについて補足して
おこう。

現代の真名の扱いは、過去に比べて非常に軽くなっている。残つて
いる風習としては、真名を捧げた相手以外が呼ぶ事は許されない事く
らいではないだろうか。

しかし高祖の時代まで遡らず、光武帝以後の時代であっても、真名
を捧げる事は今よりも非常に大きな意味を持った。それこそ、夫婦の
仲であつても真名を渡すに及ばぬと判断されれば互いの真名を知ら
ない事すら有つたと言う。

しかしここ数十年は、同じ志を持った者が結び付きを固めるため、
主従関係を結ぶ際の信用を表すため、もつと不埒な例を挙げれば異性
の気をひくためなど、比較的簡単に真名を捧げるようになってい

しかし諸葛家のように、元帝の頃まで家系を遡れるような古い家だ
と、昔のままの真名の扱い方が残っている。

その薫陶を受けている私が、真名を家族以外の者、それも出会つて
数日しか経っていない方へ捧げるというのは、非常に異質な行動に
映つただろう。

実際に、子山殿は無二の親友と言つても良いくらいの間柄ではある
が、真名を捧げていない。

本当は、義兄さんにもつと私の事を知つていただいた上で申し出る
つもりだった。

しかし、そんな事を忘れてしまうほど彼の行いに心を惹き付けられ
てしまったのだ。

自分を捨てた家に対して復讐を企てる者は、この町だけでも掃いて
捨てるほどいるだろう。しかしそれを許すどころか、その家の縁者へ
自ら支援を申し入れる者がどれほどいるだろうか？

それだけではなく、病気に倒れたその家の子供を忌避の態度を見せずに抱きかかえて、治療方法を惜しげもなく教え、治療のための物資がその家で足りないを見ると、私財から惜しみ無く提供してみせたのだ。その知、徳、果断さを備えている者はおそらく数えるほどしかないだろう。あの謙虚な人柄を持つ義兄さんはそんな事無いと否定するだろう。しかし私にとっては、彼が生まれた時に流れた仁獣の生まれ変わりという噂を信じるに足る行動、態度だった。それほどの人物は、中華全土を見渡しても一握りしかないだろう。

そんな事を熱に浮かされた頭で考えていたら、自然と体が動いてしまったのだ。それほど彼のあり方は、この乱れた世の中で輝いて見えたのだ。熱に湯立った頭で冷静な判断ができず、自制心が脆くなっていた状態では、私の心情が表に出てしまってもおかしくはない．．．と思う。

あの時の事を思いだし、再び羞恥で転げ回りたくなるのを意思の力を総動員して押さえ込む。

仮に、義兄さんが私の真名を受け取ってくれなかった可能性を思うと、恐怖に体が固まる。本当に受け取ってもらえて良かった。

真名を捧げるのは自らを捧げるに等しい行為であるが、それを受け入れるかどうかは相手側に選択肢がある。

もし受け入れて貰えなかった場合、捧げた者にとって物凄い恥辱となる。実際に新が滅んだ理由の一つとして、王奔が長年仕えた忠臣の真名を受け入れないという、不要な辱しめを与えて離反を招いた事などが挙げられる。その他に高祖が漢建国後の肅清劇も、肅清された人々と心が離れた原因が真名だったのではないかという説すらあるほどだ。

しかし今回の場合は、長く付き合いのある相手でも無いのに、私から突然申し出ている。私をよく知らない事を理由に断られても仕方がないのだ。

幸い義兄さんは驚きから立ち直ると快く私の真名を受け入れてくれた。その上、私に自らの真名を渡してくださり、義理の兄妹となる事を承知くださった。望外の喜びと言うべきだろう。

『丁寧なご挨拶痛み入ります。貴女からの拝と真名、慎んでお受け致します。』

しかし、義兄妹に関しては……。自分で言うのもなんですが、僕はあからさまに変わり者ですし、貴女も奇異の目で見られる可能性が高いのですが、それでもよろしいのです?』

そう聞いてきた義兄さんへ私は無言で何度も首を縦に振り、肯定の意を返す。

『それでは、私からも』

そう言つて義兄さんは口元に着けていた布を外し、私へ立礼を返してくれた。

『徐州・東海、糜晃が養子、芳、字を子方と申します。これより貴女の義兄として恥ずかしくないよう振る舞いを心がけさせて頂きます。どうぞ、末長きお付き合いをよろしくお願い致します』

『また、貴女より献じられた真名に対する返礼として、我が真名『麟』を貴女へ捧げます。どうかお受け取りください』

私の無作法にも快く応じて下さり、私が理想とするような非常に丁寧な返礼をして頂いた。天にも昇る気持ちというのは、あの事を言うのだろう。

その後の事は臆気にしか覚えていない。

正気に戻つた時には、既に義兄さんは歩家の兄妹を連れて☒へと旅立っていた。

妹の話によると、私は旅立つ三人へきちんと礼儀に則つた別れの挨拶を交わしていたらしい。まったく記憶に無いのですが。おかげであの場面が私の都合の良い夢だったのではないかと思つていたのだが、この手紙でそんな不安は過去の物となった。

そんな風に真名を大事にする私と比べて、妹の朱里は、比較的簡単に真名を捧げているが、本当は諸葛家の者としても少し慎重に行つて欲しい。そのうち顔は良いが節操無く他の女性と何股もかけるような男に入れ込んだ挙げ句、あっさりと真名を渡してしまいそうで怖い。

あの妹は私よりもずっと優秀で賢いにも関わらず、そそっかしく軽

率な部分がある。私が姉としてしっかり導かなくては。

・・・私が義兄さんと真名を交換した際の事を軽率等と揶揄するようであれば教育的指導も辞さない覚悟で接する必要があるだろう。

興奮を抑えるためにあえて関係無い事を考えながら、ふわふわと雲を歩いているような頼りない足取りで部屋まで向かう。

部屋に着くと、机の上に手紙を載せて椅子に座る。背筋を伸ばして目を閉じ、軽く深呼吸してから手紙を読み始めた。

『拝啓 藍里様。

長らく連絡を取らなかった事、申し訳ありませんでした。

私も一？<<>に到着し、身辺も落ち着きました。ようやくまとまった空いた時間が取れましたので、文をしたためさせて頂きます。

さて、まずお話ししなくてはならないのは歩家の兄妹の事についてでしょうか。もしかしたら子山から連絡を取っているかもしれません。私が、私からもご報告させて頂きます。

もう既にご存じかもしれませんが、歩家が廃される事が決定致しました。

もしかしたら、この事はその町に住んでいる貴女の方が詳しく事情を知っているかもしれませんね』

私は、義兄から届いた手紙をそこまで読んで、自分の口が自然と笑みの形を作ったのを感じた。

確かに、歩家の取り潰し決定が通達されたあの日、この町は蜂の巣をつついた様な騒ぎとなった。

諸葛家、そして私たち家族と仲の良い家は、そうなる可能性が高い事が分かっていったためあらかじめ混乱に対する備えができていたが、大半の人々は違った。

風の噂では、元歩家当主殿は遊興にふけるために、莫大な借金を町中からしていたらしい。

それでも糜家からの援助で返済能力があったため、人々は彼にお金を貸していた。

それが今回の取り潰しと、糜家からの援助打ち切りで歩家から返済能力が失われると皆一斉に返済を迫ったのだ。

その際の、彼の人の態度は顔をしかめたくなくなるような物だったと人伝に聞いた。

私や家族達も彼に何度か不快な態度を取られている。他人の不幸で喜ぶのが品が無い事は自覚しているが、少し胸がすつきりした。日頃から、朱里に慎みの無い行動などを叱っている立場としては口にする事はできないが。

『さて肝心の歩兄妹ですが、☒の街で義父に会い、今後麿家で二人を保護する事を伝えました。そう動く事が予想されていたのか、既に州牧に伝達済みだったのには驚きましたが。私の行動が簡単に読めてしまうほど単純なのか、義父の洞察力が優れているのか。おそらく両方なのでしょう。その後数日かけて村に戻り、私たちの家へ案内しました。書庫を案内した時、子山殿が目を輝かせていたのは、私たちの様に武で身を立てるのではなく、文で身を立てようとする者達の習性なのでしょう。私も立場が同じならば、そっくりな表情をするでしょうし。何はともあれ、無事に村に到着して村人達へ兄妹を任せる事ができて、肩の荷が降りた気分でした。あの村の人々ならば、何くれと二人へ世話を焼いてくれるでしょうから、そこに関しては心配要らないでしょう』

私としても、二人が無事に新しい住居へたどり着いた事に安心できました。新しい環境に馴染むまでもうしばらく時間があるでしょうが、あの礼儀正しい二人ならば大人たちが放っておかないでしょうし、おそらく大丈夫でしょう。

『また、私と姉、幼馴染みの三人は☒で仕官する事が決まりました。おそらくこの手紙が届く頃には既に武官として練兵に励んでいる事かと思えます。麿家の跡取りである姉が、兵を率いる適正を全く持ちあわせないため、代理として率いる事ができるようになれという事なのでしょう。正直私も適正は高くないと思うのですが・・・。そう任じられたからには職務に励むしかないのでしょうね。

それから広言はできませんが、州兵の練度はなかなか酷い物です。これから数カ月は預かった兵達の練兵に励む事になるでしょう。初陣はその後となる予定です』

驚いた。義兄さんは武官として仕官したのですか。ご自分で仰っているように、義兄さんは武官よりも文官として身を立てる方が合っている気がする。それでも視野が広く、細かい所まで気がつく人であるから、軍でも全く役に立たないという事はないのだろうか。長吏や司馬のように、作戦の策定を行う際には有為な人材となるだろう。

『さて、取り急ぎ伝えたい事は書き終えましたので、筆を置かせて頂きたいと思います。最後に、この手紙と一緒に届けた書や装飾品はご家族の皆様と分けてください。また、私へ手紙を送るつもりがあるようでしたら、貴女の町へ訪れる麿家の商人へ預けてください。そうすれば私の元へ届きますので。』

どうかお体に気を付けて健やかに日々を過ごしますように。朱里と叔起さんにもよろしくお伝え下さい。

またお会い出来る日を楽しみにしています。

敬具 麟』

何度か手紙を読み返して、ようやく動悸が収まった。

そして私はふと違和感を感じた。もう一度読み直すとその正体に気付いた。

朱里。

下の妹は字で呼んでいるが、上の妹の事は真名で呼んでいる。さて、これはどういう事だろうか？礼儀正しい義兄さんが間違えて真名を記載する事はないだろう。

とりあえず、事情を朱里に尋ねてみましょう。内容によっては…ふふふ。少し苦言を呈さなくてはならないかもしれないね。

私は口元に笑みを浮かべながら、朱里をどう問い詰めて行くのかと思いつき始めた。

青年期① — 原作開始前 —

第十六話 Waiting For Friend

— 開戦前夜① —

「ああもう、寒い寒い寒い！」

隣で私の親友が寒いと連呼しているが、退屈だから相手をして欲しいのだろう。相手をするのも疲れるので、できれば無視しておきたいところだ。

しかし、相手をしないで無視し続けているのも問題がある。

具体的には叫び続けている娘を見て、段々と視線が険しくなり始めている主君であったり。

あるいは『お前何とかしろ』と言いたげに、隣からこちらを見てくる直属の上官の存在であったり。

このまま無視し続けていると、直に主君から親友へ雷が落ちるのだろう。そして、十中八九私も巻き込まれて怒られる事になる。色々無理不尽ではあるが、今回兵を率いている中では私が最も立場が低いと理解しているため、表立って文句を言う事も許されない。

あんまりな状況に思わず溜め息が漏れそうになるが、なんとか堪えて親友へ話しかけた。

「雪蓮、五月蠅いぞ。 将がいちいち不平を口にするな。 兵の士気に関わる」

そう言った私の方を振り向き、やっと相手をしてもらえるとばかりに勢い込んで言葉を作ってきた。

「けど冥琳、私このままじゃ風邪を引いちやうわよ？ なんでこんなに寒いよ、ここは！」

「あのなあ……。 そもそも呉郡から出てくる時に私が散々言っただろう？ 『この時期の西涼はここよりずっと寒い』のだから、防寒具が必要になる』って。 それを荷物になるから要らないって言って結局持って行かない事にしたのは誰だ？」

しかも、雪蓮が持つて行かないと決めた事で、私も巻き添えで防寒

具を持って行く事ができなくなった。目の前の親友曰く、「一心同体とも言える親友である以上当然」との事だ。巻き込んだ張本人がどの口で言うのか、そんな気持ちも含んで軽く目の前の親友を睨む。私だって呉の氣候に適した普段着で寒いのを我慢しているのだ。

ちなみに、主君である誠蓮様と直属の上官である祭殿も同様に防寒具を使用していない。寒いからこそ、暖まるという名目で昼間から酒を飲む事ができるからだそうだ。正直それはどうかと思う。

雪蓮も誠蓮様に飲ませると迫ってはいるのだが、いざという時に兵を指揮する事ができる物がいないのは問題があるため、誠蓮様が許可をしない。私も目を光らせているため、隠れて飲んでもいけないはずだ。

こうやって騒いでいるのは、その事への不満もあるのだろう。

「けど、こんなに寒いとは思わないじゃない！ 私、西涼は初めてなんだから冥琳も教えてよ！」

「無茶を言うな」

私だって西涼に来るのは初めてなのだ。具体的にどれくらい寒いのかなんて知るわけがない。精々書物で、北に位置するために寒い、と記載されているのを読んだ事があるくらいだ。

「それじゃ、やっぱりあの時点じゃこの状況を想定する事なんて出来なかつたわけね。なら現地でなんとかして体を温める方法を考えるしか無いわよね。とりあえず、お酒飲も♪」

「雪蓮。いい加減にしろよ」

私達の会話が收拾がつかなくなってきたのを察したのだろう。誠蓮様が私達の会話に加わった。

正直な話、非常に助かる。誠蓮様は、雪蓮を鶴の一声で黙らせる事ができる唯一の人物なのだから。

「そもそも、私達がこうして陣幕を出て外で待っているのか、理解しているの？」

「当たり前でしょ。到着が私達より遅れている友軍を迎え入れるため」

「そう。だから私も祭も今日は一杯も飲んでいない。なのに娘の

あなたが飲めるはずが無いでしょう」

その言葉に雪蓮をそっぽを向いて舌を出す。その様子を見て誠蓮様は小さく溜め息をつく。

「いえ、あの誠蓮様？ 友軍の到着が遅れているのではなく、私達が早く到着しすぎただけなのでは」

「私達が待たされている時点で非は向こうにあるのよ」

私がおそろおそろ誠蓮様の言葉を訂正すると、誠蓮様はきっぱりとそう口にされた。

思わず頭を抱えてしまいそうになるのを理性を総動員して押さえ込む。

「わー！ 冥琳聞いた聞いた？ この鬼婆のあまりに理不尽な台詞。」

江東の虎とか呼ばれて最近調子に乗っていると思わない？」

その雪蓮の言葉を聞き、無言で構えを取る誠蓮様。それに応じるように雪蓮も即応できるように腰を低く落として構えを取る。互いに武器を用いていないのは、なけなしの理性が働いた賜物だろうか？

そんな二人の様子を見て、私は今度こそ頭を抱える。誠蓮様、頭痛の種を増やさないでください。いつもは冷静なのに、何故雪蓮の行動に対してはすぐに感情を動かされてしまうのか。

心中で嘆いていると、隣にいる祭殿はやれやれと言いたげに肩を竦めてみせている。別段止めるつもりは無いようだ。

「祭殿。 なんとかお二人を止める事はできませんか」

「無理じゃな。 誠蓮も寒くてイライラしているところに、策殿からの挑発じゃ。 止める事はできませんよ」

「では雪蓮の方を……」

「それこそお主の役目じゃろう」

あまりの正論に返す言葉も無いが、にべも無く断るのは酷くないか。思わず恨みがましい目で祭殿を見てしまう。

それに応えるように祭殿は一つ大きく溜め息を吐き、私に向けて言葉を作った。

「気にせず放っておけ。 策殿としてはああやって母親に遊んでもらいたいんじゃないか」

雪蓮の耳に入ったら斬りかかれそうな事を平気で言っている。雪蓮を子供扱いできるのは流石は年の功というべきなのだろうか。

そんな本人の耳に入ったら雷が落ちそうな事を想像しながら、私は祭殿の言うとおりに二人を放っておく事にした。

しかし、兵達にはこの二人の行動は寒さを紛らわせるために体を動かすためにしていると説明しておく。そうしないと、将が遊んでいると思われかねない。

そしてその後は祭殿と今回の出兵について確認をする事にした。

「祭殿は今回の出兵について、どうお考えですか？」

「それは今回相手にする連中が、主張どおりに漢王朝を憂いて行動をしているかどうか、という事か？」

私はその言葉に無言で頷く。

祭殿はそんな私に呆れたように言葉をかけてきた。

「頭が固いのう、お前は」

「は？」

「どちらであつてもやる事には変わりはあるまい。儂らに向けて刃を向け、矢を放つならば蹴散らすのみ。そうであろう？ 仮に奴等の

行動が漢への至誠から発したのだとしても、反旗を翻した時点で賊軍よ。それとも何か？ 冥琳、お前は奴等が正しければ素直に殺されてやるつもりか？」

「そういうわけではありませんが……」

「ならば、儂らは儂らの都合で剣を振るえば良いだろう。誠蓮が決

めた事なのだから、臣下はそれを全力で支えるだけよ」

その祭殿の言い分には呆れてしまう。が、一理あるのも事実だ。祭殿のその言葉を肯定するため一つ頷く。

「さりとてそれは將の在り方であつて、軍師の在り方ではない。軍師であるお前は別の在り方を見つけねばなるまい」

少し意地悪そうにそう言葉を続けられて、思わず眉根が寄る。そんな事は言われずとも分かっております。

「ただなあ。最近の雒陽が色々ときな臭いのは事実よ。宦官共はますます付け上がって権力を欲しいままにしておるし、それに対抗し

ようとしている大將軍からして帝も民も顧みておらん。ならば
いつそ、力でそれらを排除して自らが帝を支えようと考える者がおっ
てもおかしくはあるまいて」

今回の乱が義心より発した、と祭殿が考えているのが今の言葉で分
かった。

軽く溜め息を吐き、首だけで背後を振り返る。そこには私達孫家の
陣幕しか見えないが、更に奥に今回の総大將が起居している陣幕があ
る。

司空の地位にある以上、私達から文句を言う事はできないが、私達
が寒い中友軍を待っているのに陣幕で酒色にふけていていると思うと
腸が煮えくり返る思いだ。

「ま、あれが現在の雒陽の高官の姿よの。上を学ぶ下かみとしも言うじやろ
うが。三公に立つのがあれならば、雒陽に居る有象無象の官吏の大
半が似たような者と思っておけば間違いなからうて」

おそらく祭殿の言うとおり、雒陽の政治が乱れているため今回の反
乱が起きた可能性が高いのだろう。

だからといって、戦に手心を加える気が無い事も事実なのだが。

「で、今回反乱を起こした奴、韓遂と言ったか？ どの程度できる奴な
んじゃ？」

「少なからず、正規軍を叩いているとの事です。正規軍を率いて
いる將は……確か董擢とうてきと聞きました」

「そんな名前も聞いた事無い將が率いる兵を叩いたと言ってももう。
評価のしようがないわ」

ばつさりと下された評価に思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「反乱軍の将ですが、総大將は韓遂。羌族と手を結び反乱を起こし
たようですね。さらに韓遂は涼州牧である馬騰と義姉妹ですので、
事実上西涼の漢王朝への反乱とみなすべきでしょうか」

実際には馬騰は韓遂に付くとは宣言していないが、韓遂を討伐する
ための兵を出していない。雒陽からの命令は届いているのだが、理由
をつけて先延ばしにしているらしい。どう考えても既に両者の間に
は盟約が結ばれているとしか思えない。

そう推測を告げると、祭殿は嫌そうな顔をした。

「となると、この段階で叩いてしまわぬと長期化は必至か。嫌じゃぞ、この寒い土地に長々と縛られるのは」

「長期化すると補給の問題、さらに食料を買い集めるとなると物価が不安定となり民の心がますます漢王朝から離れていく事になるでしょう。それが嫌ならば―」

「それが嫌ならば、せめて影響を小さくするために近隣の村落から強制徴収を行う、であろう。できるか、胸糞悪い」

祭殿は私の言葉を途中で引き取り、吐き捨てるように言葉を作る。

とは言っても、あまり長引かせると総大将殿から強制徴収命令が出るし、我らにそれを拒否する事はできない。

「韓遂がどうであれ、厳しい戦いになる事は変わらぬか。……ええい、やめじゃ！ こんな話をしていると辛気くさくてかなわん！ ますます気が滅入ってくるわ！」

「その意見には賛同ですね。私の方でもなんとか短期決戦で終わらせる事ができないか、策を練ってみます」

「おう。それは任せただぞ、冥琳」

そう言つて祭殿は前方を見据えた。

「どうやら遅れていた友軍も到着したようじゃな」

「いえ、ですから遅れていた訳では……。それにしても、ここから見えるのですか？ 私には何も見えないのですが」

「なんじゃ、疑うのか？ 弓使いの目を舐めるでないわ。この程度は朝飯前よ。先頭をお前や策殿と同じ年頃の男女が務めているまでしつかり見えているわ」

「いえ、疑うわけではないのですが。では、友軍が到着した以上、そろそろ二人を止めなくてはなりませんね。祭殿、ご協力をお願い致します」

「面倒じゃのう……」

「祭殿、物資の管理を誰がしているかご存じですか？ そこには酒なども含まれているのですが」

「さあ！ すぐに二人を止めようではないか！ 軍を率いる者とその

娘が争ったまま友軍を迎えては、孫家の名折れよ！」

面倒くさそうな態度から一転、いつそ清々しいくらいに手のひらを返して、祭殿は二人へと歩みを進める。

やれやれ、と私は口にしなから、私もその横に並び歩き出す。

その私へ祭殿が私へ問いを放つ。

「そういえば、今回来る友軍はどここの軍じゃったか？」

「ご存じなかったのですか？ 我らと同じように賊討伐を繰り返す事で、王朝よりお誉めの言葉を一緒に賜ったではありませんか」

「おお、なるほど。では今回我らと共に戦うのは」

「ええ。おそらくご想像のとおりです」

それから、私は友軍を率いる人物の名前を祭殿に告げた。

「徐州牧、陶恭祖様の軍ですよ」

第十七話 Go West —開戦の予兆—

徐州の州府に仕官して三年目になった。

練兵して、賊討伐して、金勘定して、と忙しく毎日を過ごしていたせいか、あつという間に時間が過ぎていった。

公的な近況を挙げると出世した。

いきなりではあるが、事実なので仕方がない。

現在は州牧様の下で主簿というポストに就いている。主簿は単純にいうと、筆頭秘書官だ。二十一世紀日本でいうならば、官房の立場だろうか。庶務や各部局間の調整、書類や記録の取りまとめが主な業務となる。日本の戦国時代に例えるなら、織田信長に仕えた森蘭丸の役目だろう。初期であるならば、堀秀政か。

それに加えて、私の場合は私の持つている知識から適応できそうな物を州牧様へ提案する事も含まれる。というより、それを望まれてこのポストに就けられた。

今まで義父さんが主簿に就いていたのだが、少し前に別駕従事史に出世する事になったので空席となった。そこに義父さんが後任として私をねじ込んだのだ。

ちなみに前別駕従事史は陳漢瑜様。別名呂布キラ（父）だ。前回の茂才で東海郡太守に就任した。優秀な人間が重要なポストに就いたのだ。おめでたい事この上無い。

漢瑜様といえば、呂布キラ（子）こと陳元竜もこの度雒陽士官学校から戻ってきて、徐州に仕官した。そのまま曹操のところへ仕えたらどうしようと一人ドキドキしていたが、杞憂だったようだ。史実的には地味ながら、知勇兼備の名将になる陳登が居なくなると徐州にとって大きな痛手となるところだった。

役職は東海太守の主簿。要は漢瑜様の腹心だ。漢瑜様の目が届くところで実務経験を積ませるのだろう。

陳家には元竜の雒陽行きに同行していた彼の弟もいるのだが……能力、性格ともに残念としか言いようがない。実は子山と取り替え児が起きてるんじゃないか？と疑いたくなるようなアレな性格をして

いる。まあ、あまり言及するとイライラするからこの辺りにしておく。

義父さんも茂才で下 \square 国の相を打診されたらしいのだが、私達ももう少し大身になるのを見守ってからと断ったらしい。州牧様から、儂からの要請を断るとは流石親子、とからかわれて顔を引きつらせながら平伏していた。その日の夕飯には労いを込めて、おかずを一品作って足しておいた。そのうち良い事あるさ。

代わりに下 \square 国の相には、丞に就いていた別の人物を推挙したらしい。

空いた下 \square 国の丞には、とある人物を推挙するように私が州牧様を説得した。なんでここにいるのかは知らないが、絶対に逃がしちやいない人材だ。元々推挙予定だった人物には恨みを買うかもしれないが、多少のごり押しはしようがない。

さて、話を私の事に戻そう。おそらく州府を見渡せば、今の私の地位に就きたいという人間は多いだろう。

主簿という役職は位こそ低いのだが、秘書官だけに州牧様との距離が非常に近い。その分孝廉、茂才の候補になりやすくなる利点があるので、人気のあるポストなのだ。

まあ、私は徐州の地方官でキャリアを終える予定なので、その辺りのメリットはあまり意味は無いのだが。

ちなみに史実において刺史、州牧の主簿に就いた人物で一番有名なのは、かの呂布だ。丁原配下時代に就任している。おそらく身辺警護をさせるのに都合が良い役職として就任させたのだろう。その本人が裏切るのは丁原としても想定外だったのだろうか。

私も呂布と同様に武官兼務の主簿となるので、文官になったといっても戦場に出る必要がある。適正無いから辞退したいのだがなあ。

私的な事の近況としては、そろそろ糜家の分家当主として独立しようかな、と考えている。というか、先日義父さん達の前でそう口にした。

その場に居たみんな（義父さん、姉さん、天明）から物凄く反対されましたよ、ええ。

理を尽くして、姉さんが当主を継ぐ前に上下関係を定めておいた方が良いと言いつけたんだけど、受け入れてもらえなかった。しかし諦めずに、今後も説得は続けるつもりだ。下手すればお家騒動の元になりかねないから、早々にその辺りは固めておかないと。嫌だぞ、姉さんと骨肉相食む様な家督争いをするなんて。

ちなみに空さんは糜家の屋敷の隣に家を建てて、両親を呼んで一緒に暮らし始めた。空さんも出世して給料が上がったので、ようやく一緒に暮らせる算段が立ったらしい。その孝心は襟を正して見習うべきだろう。

……最大の親孝行は、余計な事をせず大人しくしている事かもしれないが、敢えて無視。

現在のあの村の長は、空さんの父親から子山が引き継いでいる。そろそろ子山へ仕官の誘いをかけてみようと思っているから、後任選びも始めた方が良くかもしれない。

さて、よそ事を考えている間にも書類の取りまとめが終わった。あとはこれを州牧様に持っていただくだけだ。

「天明^{てんみん}」

部屋の隅にある読書机で大人しく本を読んでいた天明の名前を呼ぶ。当然膝の上には王虎がいる。

本を閉じて机に置き、私の方へ歩いてくる。

私は天明に用事を言いつける。

「お仕事？」

「うん。お使いをお願い。この木簡は功曹書佐のところを持って行って。こっちは簿曹書佐のところ。私はこれから州牧様のところに行くから、戻ってきたらお昼にしようか」

「うん、待ってるね。どこで食べる？」

「そろそろ寒くなってきたから、ここで食べようか。一緒に食べられそうだったら姉さん達も誘ってきて」

「うん、分かった。それじゃ、行ってきます」

そう言つて天明は木簡を抱えて部屋を出ていった。その後ろを王虎は従者の様に付いていく。

天明こと羊叔子がなぜここにいるかというのと、私の仕事を手伝ってもらっているからだ。

将来的に徐州で仕官してもらおうつもりなので、今のうちに州府内で顔を知ってもらおう事を目的としている。流石に書類作成はさせられないので、お使いや計算、伝言、留守番などの雑用をやってもらっている。何もお願いする事が無いときには、先ほどのように本を読んで過ごしている。

こうして働いてもらっているのは、近所の子供達より精神年齢が高いため浮いてしまい、輪に加わる事ができなかった天明自身の希望も反映している。家に一人で待っているのは寂しいそう。

糜家の三人と空さんを合わせた四人で、誰が州府で天明の面倒を見るか争ったのは言うまでもない。もちろん嫌がったからではなく、全員が自分の職場に呼び込もうとしたからだ。結局、私が面倒を見る事で決着がついたわけだが。

また、一年ほど前から叔子の事を真名で呼び始めた。何となく機会を逸し続けていたのだが、ようやく真名を交換する事ができた。

天明も前々から気にはしていたようで、一人だけ字で呼ばれる事に疎外感を感じていたそう。もっと早く交換すれば良かったな、と後悔している。

ちなみに、天明と王虎のコンビは州府内でも人気があり、女官達にお菓子をもらって帰ってくる事がある。

さて、それじゃあ私も州牧様のところへ向かおう。両手に報告するための書類と資料を持ち、私は部屋を出た。

州牧様の所へ向かう途中、練兵場が目に入る。そこでは兵達が必死な顔をして鍛練している。

徐州の兵達もこの三年の間で練度と規律が大きく向上した。もとい、向上させた。

この三年で軍も大きく変わった。

戦場食の改善は、兵達が諸手を挙げて喝采をあげた。みんなまずい食事には辟易していたのだろう。簿曹の官吏達には頭を抱えさせてしまったが、必要な事なので押し通した。

また、賊討伐までの時間を短縮するために、から各郡に続く街道を作り上げた。それも、煉瓦を敷き詰めた本格的な道路だ。維持管理するための予算確保として、商人達へ増税を課したが今のところ文句の声は上がっていない。上がった税以上に、輸送が楽になった事で稼ぎが増えたからだろう。

ちなみに、この辺りはローマ街道をイメージして設計していたりする。

さらに、街道を敷設する事で賊の行軍経路を限定する事もできる。そりゃ賊だつて楽な道を通りたいだろう。なので、街道の近くには必ず砦を建設するようにした。常時数十人の兵達を詰めさせて、賊が発生した際には即時で駆けつける事ができるようにしている。兵達は半年くらいで交代させて、士気が落ちる事を防止するようにしている。

折角だからその周辺を開墾して、町になるくらいまで発展させれば良いと思う。州牧様達にはそう提案しておいた。数にもよるが、まさか駐屯地を賊が襲う可能性はないだろう。仮に有ったとしても、かなり低いと思う。なら、安全に耕作地を増やす事ができるのだからやる価値はあるだろう。

街道敷設に活躍してくれたのは、ここにいる兵達だ。

ローマ軍団兵を参考に、土木作業も兵達の鍛練に加えたのだ。おかげで、陣地構築や行軍する際の架橋などが素早くできるようになり、徐州内を縦横無尽に駆け回る事ができるようになった。退役後も、培った知識と技術力で食に困る事はないだろう。

スコップも土木作業用にわざわざ作った。そのまま武器としても使用できるし、一石二鳥である。

投石紐も徐州兵達の間ではすっかりお馴染みとなった。

今では鍛練の一環として、飛距離や正確さを争う競技会を行うようになった。

他にも、馬術、弓術など白兵戦に限らない競技も執り行い、自分の得意分野を伸ばせるようにしている。ちなみに馬術はオリンピックの公式種目になっている物を元にして、障害やコースを設けて課題を

完了するまでの減点方式で順位を決めている。弓術は遠的の命中率を競っている。

大体月一で何かしらの大会を開き、優秀な物には金一封を出している。流鏑馬やぶさめも競技に入れようかな、と最近考えている。馬の数も質も揃ってきたし、そろそろ鎧を作つて正式装備に加えても良い頃だ。パルティアンシヨットの凶悪さは歴史が証明しているし。

馬上で武器を振り回しやすくもなるし、鎧を作つたらポロをやらせてみようかな。馬上で長柄武器を扱う練習にもなるし、楽しみながら訓練に身が入るなら万々歳だ。

作戦行動中の命令違反には厳罰を下すようにして、規律を大きく高める事に成功している。ただし平時においては、よほど目に余る行動をしない限りは黙認するようにしている。ずっと締め付けていると暴発して反乱しかねない。

逆に功績のあつた者にはきちんと褒賞を与えている。信賞必罰を定かにする事で、規律はある程度保てるのだ。

あとは士官学校らしき物を始めた。正確には学校ではなく、希望者のみを募つて開講する形式をとっている。将来的には、ここから兵を率いる側にまわつてくれる人物が出る事を祈るのみだ。

これは腕つぶしはそれほどではないが、軍を率いる事を夢見る連中にはそれなりに魅力的に映るようで、当初の想定よりも賑わっている。

呉下の阿蒙や、吃音持ちの名将のようにチート級とまではいえないが、下級指揮官から中級指揮官にはそれなりに優秀なのが出始めてきたようだ。規律の高さも彼らから一般兵に伝搬している面もあるようだ。

孫子の女官叩き切つた話は効果絶大です。あまりに規律が低くなるなら導入しなくちゃなあ、と授業の合間にぼそつと呟いたら、必死に自分の部隊へ戻り規律を正すようになってくれた。

ちなみに、この集まりで最初に教えていた生徒は文嚮と宣高だったりする。

あいつらもこの数年で随分と成長した。私ではもう武術で勝つ事

はできない。兵を率いさせても、徐州でトップを争うようになっていく。陣形を理解できていなかった頃に比べると、雲泥の差と言えるだろう。

二人も出世して、今の役職はそれぞれ□の県尉となっている。私が主簿になる事が決まった時、孝廉で推挙してもらった。したがって二人はもう私の副官ではなく、それぞれ一軍の将となっている。

今後の徐州の軍事は間違いなくこの二人が中心となっていくだろう。徐州の二枚看板とでも噂を広めても良いかもしれないな。

どうでも良い事だが、県尉になった時に勢いで長い間想い続けてきた相手、姉さんと空さんにそれぞれ告白したらしい。結果は見事に玉砕だったようだが。浴びるようにやけ酒を飲む二人に付き合わされ、死ぬ思いをしたのがつい半月前の話だ。

結果的に失恋の傷を忘れるために、仕事に没頭し続けている二人は凄まじい速度で名将までの道を駆け上がっているのです、結果オーライと言える……のかなあ？

ただ気になるのが、二人の断る時の理由が「想い人が別にいる」だったらしいのだが、相手誰なんだろう？あまり仕事でも男と一緒にいるところを見ないし、逢い引きしている様子もない。断るのに適当な理由として言っただけなのかな？

教育といえば、新しい制度を導入試験中だ。私の前世の郷里である鹿児島で、幕末頃まで行われていた教育制度、郷中教育だ。

簡単に説明すると、学校に通って勉強をするのではなく、学区を作りその中で年長者が年少者へ勉強を教えるという教育だ。教育費をかけずに学問をさせる事ができる。手始めに、□で糜家の商人達に教師役を買って出してもらい、試験導入している。

厳密に適用すると切腹する人間が大量に発生しかねないので、儒教による道徳観念の実践、読み書き計算などの基礎教養、武術の鍛練等に留めている。

日新斎いろは歌みたいにな、道徳観念を子供が覚えやすいような工夫ができればなお良いのだが。節をつけて唄にすればなんとかなるかなあ？

ちなみに、これで優秀な人間が見つかるようだったら、そのまま抜擢する予定である。本格的に学びたい者はその後私塾に通おうとするだろうから、住み分けはできている。私塾を開校している方からの苦情は来ていない。むしろ、教え方について情報共有できるように会合を開くようにした。なかなか好評を博している。

士官学校もどきといい、郷中教育といい、教本となる書籍が数多く必要となるので、大量生産する方法も思い付いた。

アルファベットとは違い、漢字は大量にあるため活版印刷は絶対無理というのは分かっていった。なので、版画の要領で鏡文字を木の板に彫って印刷を試みたところ、結構上手くいった。

インクは松脂や油を墨に混ぜてでっち上げた。

これにより、本の大量生産が可能となったので、本の普及率が大きく上がった。本の価値が下がったため、本屋が潰れる心配があつたが、率先して印刷業に転向するようにお願いしたため、潰れても即座に生活が困窮する事はなかったと思う。

州牧様の執務室に到着したために、思考はそこまで打ち切る。頭の中身を整理する意味でも、やってきた事を洗いざらい出してしまいたかつたのだが、まだまだたくさんあるので、また時間が空いた時にチケット代わりの木札に書き込んでおくことにしよう。

「失礼致します」

来訪を告げるために声をあげて、私は部屋に入った。中には州牧様の他に、別駕従事である義父さんがいた。

「ふむ、来たか。揃ったようだし始めよう。どちらから話す？」

「では私から」

義父さんが手を挙げて話を始める。

「まず、お前が提案していた内容は概ね許可を出す。予算も出るのに必要な経費を算出して私宛に提出しろ。私の方から簿曹従事は説得する」

「了解。えーっと、提案していたのは州内への巢箱の本格導入、それに伴う千刃扱きの生産と普及。街道の砦周りへの入殖と開墾。」

街道の延長」

「あとは、商業制度の変更、特に塩の扱いだな。何点か気になる事もあるんで、その辺りは一緒に詰めさせろ」

「了解」

故郷の村で試験導入していた、俗に言う『ラングストロスの巣箱』だ。あらかじめハニカム構造を内部に作っておき、蜂を殺さずに巣板を取り出すだけでハチミツを採取できる。数年前に作成していた遠心分離機もこれでようやく本来の役割に使う事ができる。

さらに、村にいる未亡人達には巣箱の管理とハチミツの採取、蜜蝋の作成を担当してもらい、脱穀の仕事から外れてもらった。これにより、千刃扱きの本格導入も可能になる。

穀物の受粉も確率が上がるようになる事だろう。生産量も上がるはずだ。

蜜蝋は蠟燭を作り、高級な照明器具として使用する。

蜂蜜も蜜蝋も徐州の名産品になり始めた。甘味は貴重だしなあ。

商業制度の変更は、主に塩の専売制についてだ。『劉晏の塩法』を模して、政府は市場に介入せず免許を交付した塩商だけに塩を販売し、流通は塩商に任せきりという方法だ。ただし、利益率についてはこちらから一定額にするように通達する。暴利をむさぼられて、民にヘイトを貯められても困る。あまりに悪質な場合は免許取り消しもあり得ると伝えている。どこまで効力があるかは未知数だが、やらないよりは良いだろう。

後は、「行」という商業組合を作る事を打診した。これは江戸時代の座を模して作っている。これで商業の統制を行いやすくなり、税収も安定化が見込める。

「それじゃ、その話は昼食後に詰めるって事で大丈夫ですか？」

義父さんと二人で州牧様を見て、そう問いかける。大きく頷いたので、次の議題に移る。

「次に、お前から申請していた新しい副官についてだが、認可が降りた。彼女にはお前から伝えるか？」

「了解。午後からもう業務を始めてもらうつもりだけど、それで良

い？」

それを聞いてほっとした。

宣高と文嚮が副官でなくなったので、新しい副官について候補を添えて申請していたのだ。

流星にここで断られるとあの娘の境遇がますます厳しくなるころだったので、助かった。

「しかし、何故お前がそこまで固執するか、理由が分からないのだが。そんなに優秀なのか？」

「……まあ、一国の宰相くらいじゃ役不足だろうと思うくらいには」

私の言葉を冗談と思ったのだろう。州牧様は笑い声を上げたが、義父さんは私の言葉の真偽を見定めようと顔をじっと見てきた。

詳細を話す気はないよ、と義父さんに苦笑いを浮かべて見せる。意図が通じたのか、義父さんは諦めて次の議題へと戻った。

「次に、治中従事史についてだが、王功曹書佐にお願いする事に致しました。これに関しては私と漢瑜殿からお願ひしていた件となります」

「うむ。良いように計らってくれて問題は無い」

おお、景興さん出世するのか。確かに誠実で穏やかな人柄だし、清廉を旨としているから賄賂も受け取らないしな。人事権を持たせるにはふさわしいと言える。

王朗 字を景興。

史実では人物評価に優れて、儒学に通じ、徳を持って治める事を良しとする温厚な人柄だったらしい。

法運用の専門家で、罪に疑いがある場合には減刑をするようにしていた。

軍事的な功績が無いため地味に思われがちだが、魏に仕えた徐州の人間としては、相当な高位まで登りつめている。おそらく陳羣と双壁ではないかな。

この世界でも、温厚で人を厳しく批判したり、陰口を叩いたりしない事で多くの人に慕われている。年齢は私より三歳上だが、あの包容力は十代とは思えない。

同年代で同姓という事もあり、姉さんと空さんも姉同然に慕っているようだ。

ちなみに趣味が料理で、私もよく色々レシピを交換しあったりして良い付き合いをさせて頂いている。

「空いた功曹書佐はどうする？」

「ひとまず空席にするか、誰か適当な人物がいるようなら仮に就けておくか……」

なんでそこで私をちらつと見る。

「重要な席となりますので、軽々しく就けるべきではないでしょう。ふさわしい人物が現れるまでは空席のままが良いかと」

「私が自分の意見を述べると、二人は頷いてくれた。そんなに都合良くふさわしい人材を見つけてくる事はできないって。」

「私からは以上となります。麟。お前からは何かあるか」

「直接的に政務に関わる事ではないのですが、気になる事が一つ」

そう言つて、私は麩家の商会から仕入れた情報から作った表を机の上に並べる。

「表を見てもらえば分かりますが、涼州近辺で穀物の値段が数カ月前からじわじわと上がっています。」

「……別の表だと馬の取引量が大きく減っているな」

「塩や鉄の軍需品の値段も上がっていますね。まるで、誰かが買い占めているような値動きをしています。麟、心当たりはあるか？」

「確証は無いんだけど……まるで近々軍事行動を起こすような値動きなんだよね」

「西涼で乱とか、何の悪夢だ」

「西涼騎兵だからねえ。苦戦する事は目に見えてるよね」

西涼の民は遊牧民族である羌族等と密接な関係があるためか、生活が騎馬民族に近い。そのため幼い頃から馬を乗りこなす事が求められる。騎兵戦力としては、中華で一番と言つても過言では無いのだ。

騎兵戦力は歩兵よりもずっと強いため、精強な西涼騎兵を相手にするのは非常に分が悪い戦いを強いられる。

「先月の時点で報告しなかった理由は？」

「値上がりは一時的なもので、収穫が終われば価格が下がるんじゃないかと思つて報告致しませんでした。しかし、もう麦の収穫終わっているのです、通常なら下がるはずなのですが……」

「下がっていないからには明らかに人為的な理由があるという事か。子方、何か我々からできる事はあるか？」

「朝廷に西涼が不審だと伝えるくらいですかね。けど、それも実際に火の手が上がるまでは傍観の姿勢を取る可能性が高いです」

「さりとて、伝えない訳にはいくまい。子伯、至急使いの準備を」

「御意。麟」

「はい、上奏文は既に用意しております。あとは誰を使いに出すかですが……」

「ほう、準備が良い。急を要するな……。馬術が達者な者から選ぶぞ。お目通りを願うならば官位も必要となるか。官位を持つていて、馬術の腕が達者な者となると……」

「ならば、宣高でしょう。この間の討伐の報奨として名馬を与えています。品位は低いですが官位も持っているため適当かと存じます」

「同意します。おそらくそれが最適かと」

「ふむ。二人とも同意見ならば、それで採用しよう」

三人で矢継ぎ早に話を詰めていく。急を要する事だし、悠長に朝議で決める暇はない。

おそらく必要になるだろうと、上奏文を用意したのもここで生きてくる。

「では、すぐに宣高には出立の準備を整えさせます。無駄になるかもしれません、討伐が必要になった場合に備えて、遠征の準備も進めた方がよろしいでしょうか？」

「……万が一我らの手で討伐する事になった時に必要となるか。構わん、許可する」

「御意」

「議題は以上か？ ……ならばすぐに行動してくれ。麟からの提案内容の精査があるから、後でもう一度集まるぞ」

拝礼をして、義父さんと一緒に州牧様の執務室から出る。

「では、儂は出征の計画を作るが、宣高への伝達は任せるぞ」

「うん、分かった。それが終わったら、昼食で良いよね」

「ああ、大丈夫だ。……ちなみに出征する可能性はどれくらいと思っている？」

「限りなく低いだろうね。騎兵が相手だから、騎兵戦力が豊富な并州や幽州とか、それこそ反乱に加わらなかつた西涼騎兵を宛てるんじゃない？」

「まあ、そうなるだろうな。では、また後で」

義父さんとそんな会話を交わしたのが数カ月前。

「そんな風に思っていた時期が私にもありました……」

「どうしたんですか？ 義兄さん？」

先触れの役目を州牧さまから仰せつかったため、馬に乗って討伐軍の陣地を目指しながら思わずそう呟いてしまった私に、律儀に言葉を返してくる姿が隣にあった。

淮陰で麻疹が流行した時に知り合った女の子、藍里だ。今は私の副官として、遠征に付いてきてもらっている。

なぜ淮陰で過ごしていた藍里が私の副官となっているかという点、諸葛玄殿が史実どおりに梯子を外されたからだ。もともと、袁術と袁紹ではなく、袁逢と十常侍の争いであった事が違うみたいだが。その結果、諸葛玄殿達は荊州の劉表殿を頼ったらしい。

藍里は母親が足が悪い事もあり、面倒をみるために徐州に残る事になった。朱里と叔起さんはその前から荊州の水鏡先生の私塾に入っている。

で、その話を聞いた私が遅まきながら支援を申し出て、その一環として官吏への推挙をしたのだ。

「いやね、まさか徐州から討伐軍を出す事になるとは思わなかったな、と」

「それだけ義兄さん達がしてきた討伐の功績が抜きん出ているという事ですよ。実際に朝廷よりお褒め頂くという名誉に預かっている

わけですし。流石は義兄さんです」

「……朝廷から誉められたのは事実だけど、なんで流石って話に繋が
るの？ 私だけで討伐したわけじゃないよ」

「だって義兄さんが初陣で大成功を収めたから、練兵に力を入れるよ
うになったんですよ？ だったらこの規律の高さは義兄さんの功
績じゃありませんか」

「いや、私だけの功績では……」

「もう、義兄さんは謙虚すぎますよ。もつと自分の功には声を大き
く上げて行きませんか。この乱世では名を上げられませんかよ」

むう、と軽く不満そうに私を横目で睨んでくる。

私を過大に評価しすぎだと思う。私を諫めてくれる厳しい人間も
周りに置くべきかな。

「まあ私の事は置いておくとして。今回の出征には孫家も関わって
いるんだよね」

「……そうですね。『江東の虎』。徐州にもその勇名は届いていま
す。味方になるのであれば、頼もしいですね」

藍里は不満そうにしながらも、私の出した話題に乗ってくれた。

「そうだね。けど、西涼騎兵が相手となると勝手が変わるから、その
辺がどうなるかだなあ」

徐州も揚州も賊が騎馬隊を組めるほど、馬が普及していないから
なあ。

対騎馬なら弩を使うのが定石なんだけど、張司空はどれくらい用意
してくれてるんだろう。

そうやって考えていると、藍里が言葉を作った。

「大丈夫ですよ。義兄さんもそれ以上の名声を得る事はできますか
ら」

「……考えこんでいたのは、江東の虎に勝る名声を手に入れたいから
じゃないから」

しかも、何の根拠もないし。思わずがっくりと項垂れてしまう。

そんな会話をしていると、前方に天幕が見え始めた。ようやく目的
地に到着したようだ。

州牧様の率いる本隊はまだ到着しないが、先触れとして先行してきた以上、使者の役目はしっかりと果たさなくてはならない。

陣の入り口には、この時期の西涼にそぐわない露出の激しい格好をした長身の女性が四人立っていた。

端的に言うくと、凄く寒そうだ。全員がモデル体型なので似合っているのだが。

予備として防寒具を持ってきているから、必要か後で聞いてみよう。

藍里がその四人の姿を見て、自分の胸元を見下ろして手でぺたぺた触っているのは見ない振りをする。

私と藍里は馬から降りて、拝礼をして私たちの来訪を告げた。

「徐州牧陶恭祖の臣、糜子方と申します。徐州勢の到着を告げる先触れとして参りました。総大将へお取り継ぎをお願い致します」

はてさて、鬼が出るか蛇が出るか。

少なくとも朝廷という伏魔殿に司空として住む魔物と、虎が居る事は確定している。

徐州に益をもたらして欲しいとまでは言わないから、せめて討伐だけは失敗しないで終えたい物だ。溜め息をこらえながら、そう願わずにはいられなかった。

第十八話 Drunk — 開戦前夜② —

目の前には顔立ちの整っている酔っ払い一人、その隣で頭を抱えている眼鏡の美人が一人。私の隣には私の副官である小柄な女の子が一人。それに私を含めた合計四人が一つの天幕の中にいる。

「雪蓮。その辺りで止めておきなさい」

「お断りよ♪ 久しぶりのお酒なんだもの、すっかり堪能するわよ！ それにしても、これ美味しいわね。子方、揚州でも買う事できる？」

止める眼鏡の美人にそう言っつて、酔っ払いは上機嫌に自分の盃に酒を注ぐ。それに口をつけながら、酒を提供した私へ質問をしてきた。どうしても良い事だが、盃に接している酒に濡れた唇がやたらと艶かしく映る。凝視しないように注意しながら、言葉を返す。

「えっと…揚州北部、徐州と接している辺りだったら流通してるかな。確かその辺りの商会には卸していたはず」

「だったら、呉郡にもあるかもしれないわね。探してみる価値があるわね、この味は」

「ただ、普通の酒に比べて割高になるね。量を飲むには向いてないんじゃない？」

この時代の醸造酒は濁酒どぶろくが基本となるため、品質がまちまちだ。先に飲んでいた酒は美味しくなかったのは、はずれの酒に当たったのだらう。目の前の女性も軽く顔をしかめながら飲んでいて、醸造酒は誰でも作る事ができる反面、作り方と管理をしつかりしていないと美味しくならない。

それを飲み干したので追加を出そうとしてきた女性を止めて、私が持ってきたのは焼酎しょうちゆうだ。単式蒸留器を私が拵こしらえて、仕込んだ物だ。

私は前世で鹿児島に住んでいたもので、飲む酒は基本的に芋焼酎だった。そのせいか、濁酒の味に馴染む事ができない。酒宴等で飲まされる機会も多く、まずい濁酒と言えど飲まないわけにはいかなかったのだが、ある日あまりにも不味い濁酒を飲まされたので、私は単式蒸留器を作成する事を決めた。酒を飲んで自制心が緩くなっていた事も

あり、久々にキレちまっていた訳である。前世の父の知り合いに、芋焼酎を造っている蔵元が居たので、仕込みの工程や蒸留器の構造は知っていた事も後押しした。

さつまいもが無いため芋焼酎を作る事はできないが、麦と米を材料にした焼酎なら造る事ができる。球磨焼酎や、壱岐焼酎に近い物だ。蒸留する必要がある事から、同じ量の材料を使っても生産量は普通の酒に比べて少なくなるし、そもそも、私が勢いで作ったので、まだ家の商会以外では生産されていないため流通量が極めて少ない。さらに、液体である酒の流通は、瓶を割らないようにする必要があるため難しく、どうしても運送に手間がかかり、その費用も上乘せされる事になる。

それらの要因が重なり、揚州での販売価格は二倍以上の金額を付けているはずだ。

そのうち連続式蒸留器の作成も視野に入れるべきだろうか？ホワイトリカーが出来れば果実酒を漬ける事もできるようになる。

「んー。あまり値段が高いと、確かに困るわね。それじゃあ、私達にだけ一割の価格で売ってよ」

「無茶言うな」

あまりに無茶な事を言う目の前の酔っ払い、孫伯符殿に素で返す。堅苦しいから敬語を使わなくていいと、本人から許可を得ている。

ちなみに、この伯符殿。恐ろしく酒に強いらしく、先ほどから焼酎を生で飲んでいいる。そして、この場にいる誰よりも盃を空ける回数が多いくせに、まったく酔っている様子が無い。

私と隣に座っている藍里らんり、眼鏡の美人こと周公瑾殿はお湯割りにして飲んでいいる。その方が体が温まるしね。

公瑾殿もいけるクチのようだが、人前という事もあって、かなり自制しているようだ。濁酒以上のアルコール度数の酒を飲むのが初めてだろうし、普段の酒量よりもだいぶ少なくして酔わないように気を付けていいるのだろう。

藍里は濁酒の一杯目を飲み干した時点で既に顔を赤らめて、ぽーっとなつていいる。お酒を飲むのが初めてと言っていたので、自分の限界

が分からないだろうし気をつけてあげる必要があるかな。このまま寝ても私が連れて帰るから別に良いのだが。

ちなみにつまみは私謹製ドライソーセージ。酒飲んでると塩っ辛い物食べたくなるので、出してきた。伯符殿も公瑾殿も、頻繁に手を伸ばしているの味を気に入ったのだろう。

「えー、なんでよ。良いじゃない。私は美味しいお酒が安く飲めて嬉しい。貴女は美人が喜ぶ姿を見れて嬉しい。どちらも得をするじゃない」

「美人というのは否定しないけど、明らかに損得が釣り合っていないだろ」

「あら、そうかしら？ 一時的に損をしても、将来的には得になるかもしれないでしょ？」

そう言つて、伯符殿は自分の豊かな胸を強調するように胸の下で腕を組んだ。思わず視線がそちらに行つてしまひそうな意志を総動員してこらえて、私は言葉を作る。

「貴女の場合、何を言っても本気にはならないでしょうに。遊女と違つて矜持がやたらと高そうですし」

「あら、分からないじゃない。もしかしたら相手によつては尽くすかもしれないでしょー」

「だ、そうですが。公瑾殿、評価をどうぞ」

「酔っ払いの戯言だ。信じるに値しないな。酔いと同じで、翌朝くらいまでは残るかもしれないがずっと残る物では無いな」

「少しでも本気にして、翌朝以降まで残した方がしんどい思いをするか。上手い事言うなあ」

「ちよつ、二人とも酷すぎない!？」

伯符殿からの抗議を公瑾殿と一緒に聞き流す。藍里は寝落ちして私の肩に頭を預けている。

さて、前置きが長くなつてしまつたが、何故私達がこうして酒を飲んでるか。それは、徐州の本隊が到着したため、今回の討伐軍総大将である張温の陣幕で軍議が行われる事になったのだが、中央の官位を持つていない私達に参加許可が降りなかつたからだ。徐州側から

は陶謙様、漢瑜様、宣高が、孫家からは孫文台様と黄公覆様が出て
いる。

暇を持て余した私達は、伯符殿の提案で自己紹介と情報交換を兼ね
て私の陣幕に集まった。流石に出会ったばかりの女性の天幕に男が
入るのは躊躇われた。どうせ、私の陣幕は立てられたばかりで、見ら
れてはまずい物など有りはしない。

物資の確認などの庶務は、元龍が監督している。私も手伝おうとし
たのだが、漢瑜様が待ったをかけた。雑務の監督といえども、元龍に
経験を積ませたいらしい。どうも泥臭い事を嫌がる傾向がある元龍
に、そういった雑務が如何に重要であるかを教えこみたいらしい。私
も面倒な雑務から開放される事もあり、二つ返事で頷いた。

さて、集まって自己紹介も終わり、情報交換を始めようかとしたと
ころ、伯符殿が酒を取り出した。何でも、友好を深めるのに酒は不可
欠らしい。言いたい事は分かるが、情報交換が終わってからにしない
かと提案したのだが、聞こえないふりをして伯符殿が飲み始めた。公
瑾殿は渋い表情で諫めたがそれも聞こえないふりをした。強いな、孫
伯符。

私もそれなりに強いので飲み始め、公瑾殿も伯符殿に勧められて飲
み始め、みんな飲むのなら初めてですが私も、と藍里も飲み始めた。
そして、今に至る。ちなみに、情報交換はまだ何もできていない。

「それじゃあ、藍里が寝ちゃったけど情報交換を始めようか」

「えーっ！ このまま堅苦しい話無しにして楽しくお酒飲みましよう
よー」

「雪蓮、情報交換はお前から言い出した事だろう？」

「そんなのお酒を飲むための口実に決まっているじゃない！」

それを聞いて、公瑾殿は頭を抱えた。私としては、そこまで自信
満々に言い切られると苦笑いしか出てこない。

「まあ、それが元々口実にすぎなかったのだとしても、一応情報交換を
しておこう。何もしていないままだと、多分問題になるだろうし」

「……まあ、良いか。それじゃあ、私は飲んでいるから冥琳よろし
く」

「清々すがすがしいくらいに人任せだな！」

「子方殿、いつもの事だし気にしないでくれ。後で説教はしておくから」

色々と諦めたのか、公瑾殿はそう言って来た。後で胃薬になる薬草を渡しておこう。そのうち良い事あるさ。

「それじゃ絶対聞いておきたい事を一つ。騎兵を相手にした経験について聞かせて欲しいん。孫家で大規模な騎馬隊って相手にした事ある？」

「分かっている聞いているだろ？ 無いな。私たちも賊討伐ばかりをしてきたし、大規模な騎兵集団など揚州にはいなかった」

南船北馬。南方では馬を使った戦の機会は少ないだろう。私達にもその経験が無いだけに、精強な孫家であればもしかしてと思っていたのだが、残念ながら無いようだ。

「私達も同様なんだよ。そうになると、誰も騎馬隊相手にした経験を持たないって事？」

「一応董擢とうせきという者がいるのだが、韓遂に散々に打ち破られていたな」「董擢……隴西郡ろうせいの太守だったっけ？ 聞いた事があるような、無いような感じなんだけど」

「ああ、それで合っている。用兵は未熟の一言だったな」

確か董卓の兄だったはず。戦下手なのか。西涼騎兵を扱うとはいえ、韓遂には勝てなかったという事なのかな。

「それじゃあ先人に倣って、弩の運用によって制する事になるのかな？ 基本的に忠実すぎて面白みは無いけど」

「無理無理。ここにはそんなに大量の弩が無いのよ」

横から伯符殿が口を挟んできた。

「って、弩が無いって何さ？」

「漢の司空たる私が行けば、偉大なる漢帝国の威光により賊徒が直ちにひれ伏し、すぐに反乱が収まるでしょう』だそうだ。ろくに戦の準備をせずに来ているのさ、我等の総大将様は」

「……脳が膿うみんでるんじゃないか？」

「膿うみむだけの中身も無いんですよ」

「お前らな……。 あんなのでも漢の三公なんだ。 耳に入ると首を落とされるぞ」

思わず暴言を口にする私に、投げやりにさらに酷い事を口にする伯符殿。それを注意する公瑾殿。けど、公瑾殿も大概酷い事言っていると思うんだけど。

しかし困ったな。漢民族の対騎兵の切り札である弩が無いとは。

一応対策として、私が指揮する部隊分くらいには装備を持ってきたんだけど、討伐軍すべてに回せるだけの数は無い。さて、どうした物だろう。

軽く俯き、思考を走らせる。

「んーせめて数カ月後、春先だったら取れる手段もあるんだけど」

それだけの時間があるなら、弩を取ってくる方が早いしな。

困った様に頭を掻いて、俯いていた顔を上げると、伯符殿と公瑾殿が不思議そうに私の顔を見ていた。

思わず顔を触って、何も付いていない事を確認する。

「何？ どうかした？」

「いや、な」

「春先だったら何とかできるってどういう事よ？」

ああ、それを疑問に思ったのか。確かに、相当特殊な事をやるからちよつと思いつかないか。

「まあ、品が無い話でもあるんだけど。 春先の動物って盛りが付くじゃない」

「……女性の前で話す事ではないな」

「え、良いじゃない。 面白そうだし続けなさいよ」

顔を顰める公瑾殿と、面白そうに先を促す伯符殿。 対照的な態度だな。

公瑾殿の顔色を伺うと、何か諦めたように溜め息を吐いた。 いや、本当に色々と申し訳ない。

「それじゃあ、続けるけど。 軍馬って基本的に牡馬を用いるでしょ」

「そうね。 気性が荒くて、戦いを恐れなくなるからね」

「そうそう。 だから、その牡馬の群れの中に雌馬を一気に解き放つ

んだよ。春先なら盛りが付いているから、牡馬が雌馬目掛けて突進するし、乗っている騎手を振り落としてしまっただろうね。状況によつては馬同士で同士討ちも始めちゃう」

「そうやって混乱しているところに兵を入れて打ち破れば良い、か。」

あはははは！ 面白いわね、それ！」

そこまで聞いて、伯符殿は大笑いし始め、公瑾殿も口元を覆って笑いを堪えている。うむ、ウケて良かった。

しかし、確かに笑い出したくなるほど馬鹿馬鹿しいのだが、実はこれは史実で行われた事がある計略なので、実際にそうなる可能性は結構高い。

「ざりとて、今は春先ではなく発情期でも無いので、それをする事は無理だろうか？」

「そうだね。だから何とか騎馬を無力化する方法を思いつかなくちゃいけないんだけど」

「そう簡単に思いついたら苦労はしない、か」

その後も公瑾殿と騎兵を無力化する方法を話しあつたのだが、有効な方法を思いつく事は出来なかつた。

この問題を何とか解決しない限り、私達討伐軍の被害も大きくなつてしまう。アルコールを抜いた状態で、騎馬に打ち勝つた戦いで何があつたのかを少し考えてみる事にしよう。

結局、軍議が終わりもぬけの殻だつた孫家の陣幕を見て、二人を探しに来た文台様と公覆殿が来るまで話は続いた。

その後、文台様と公覆殿も一緒になつて酒を飲み始め、ちよつとした酒宴のようになってしまった事は割愛する。結局文台様達も焼酎を気に入つたため、瓶ごと焼酎を提供しようやくお帰り頂ける事になつた。

まあ、孫家の人間と交友を深める事ができたので、良かったのだろう。そう思わないとやってられない。

藍里を彼女の陣幕へ運んで行ってあげて、汚れに汚れた自分の陣幕を掃除しながら、私は盛大に溜め息を吐くのだつた。

「さて、それでは第一回実務者軍義を始めたいと思います。 進行は私、糜子方が務めさせていただきます」

子方達と飲んだ翌日、私達は再び一つの陣幕に集まり情報交換をしている。

私はこの場には参加しているが、やる気はまったくと言っていいほど無い。

孫家では側近が意見を言う事は許されているが、最終的に決定を下すのは、当然勢力の長たる母様だ。

どうも私の思い付く事は突飛すぎるくらいがあるようで、私が口にした事が取り上げられる事は少ない。しようがない、私の意見は立脚点が勤なのだから、他人が理解する事は難しい。完全に理解できるのは母様、半分くらい理解できるのは親友の冥琳くらいだろう。

「弩の数がそんなに無いのは、昨日伯符殿と公瑾殿から伺いました。騎兵を相手にするのに弩が足りないのは致命的になりかねません。今日はその対策が主な議題となります」

そう続ける子方の言葉の後に始まった会議を聞き流し、この会の参加者を気づかれぬように観察する。大きく分けて三つの組に分けられる。

まずは熱心に参加している組。

母様とその右腕である祭。徐州側では、私達と同年くらいの少年が爛々と目を輝かせ、子方の事を見ている。いや、あれはもう睨み付けていると言ってもいいくらいの視線の強さだ。何か因縁でもあるのかしら？

少し好奇心が疼くが、この場では自重する。下手に場を引つ掻き回すと母様に折檻を受ける事になる。

名前は確か陳元龍といったかしら。

続いて、議論の流れを見守る組。

徐州牧である陶恭祖殿と、下国^下の相である陳漢瑜殿。この二人は最初の挨拶以外は口を開かずに、議論に参加していない。けど、私み

たいにやる気が無いわけではなく、議論が横滑りしそうになると軌道修正をしている。

孫を見守るおじいちゃんみたいな立ち位置ね。

最後に、地図をじつと眺めて考えている組。

私の親友である冥琳と、昨日途中で酔いつぶれてしまった諸葛子瑜。

地図上から読み取れる情報をできるだけ取り込もうとしているよ
うだ。

それから、赤毛で目付きの悪い少年が頭から煙を出しそうな勢いで
考え込んでいる。

この少年、臧宣高は一生懸命議論に付いていこうと頭を使っている
ようだが、どうも様子を見るに芳しく無いようだ。

そんな感じで私以外積極的に参加しているし、別に私はやる気を出
さなくて良いだろう。

ああ、それにしてもお酒が飲みたい。

そんな事を考えてぼーつとしていると、気になる言葉が聞こえてき
た。

「韓遂の部隊は冀城を落とした後、近くにあるこの小城に留まり籠城
している事を張司空の兵が確認しているわ」

……ん？

そう言った母様の言葉に、私は引つ掛かる物を感じた。説明しろと
言われても上手く言葉を作る事はできない、頭の中に突然降ってくる

「それは間違いだ」という感覚。いつもの『勘』だ。

「だったらその城をー」

「騙されてない？ おかしいわよ、それ」

陳元龍が母様の発言を受けて、鼻息荒く何かを口にしようとしてい
たけど、私は思わずそれを遮って口を開いてしてしまった。

この場にいる全員の視線が私の方を向く。特に言葉を遮られた形
となる陳元龍は視線で射殺さんばかりの目を向けてくる。まあ知っ
た事では無いんだけど。

「策殿。 何がおかしいと感じたのだ？」

流石は祭。長い付き合いだけはある。私が論理的に考えた結果である「思考」ではなく、ただ感じた「勘」に従って物事を捉えている事がよく分かっている。

私はその言葉を受けて感じたままに返事をした。

「何となく、だけどね。城に籠こもっているのがおかしいと感じたのよ」「いつもの勘か」

その私の言葉を聞いて、母様が呟いた。

私は首を縦に振った。

それを受けて、子方が言葉を作る。

徐州勢は軒並み不審そうな顔をしている。突然勘で口を開いた私を訝しんでいるのだろう。

いや、子方と子瑜だけは視線を下に向けて、卓上の地図を見ている。「おかしいと言えば、確かにおかしいんですね。董擢殿の兵が捕虜になっているならば、私たちに弩がろくに揃っていない事もバレているでしょうし、野戦に持ち込もうとしてもおかしくないはずなんです」

子方がそう言った後、子瑜は「それに」と前置きして子方の言葉を継ぐ様に口を開いた。

「なんで冀城に入っていないのかも不明ですね。守備兵の数も足りているでしょうし、不利になるのは明らかでしょうに、わざわざ守りの薄い小城に入る事を選んだのかが分かりません」

うん。確かにそうだ。冀城に入らない理由が何かあるという事か？

私の勘はその辺りを感じている気がする。

「……州牧様」

全員が考え込んでしまい、短い沈黙が場を満たした後、子方が陶州牧に話しかけた。

「私が最初に西涼の反乱を予感した時、涼州近辺の物価の値上がりについて資料を纏めていたのを覚えていますか？」

「ああ。確か麦や鉄についてまとめていた資料だな」

……そんな事からこの反乱を予測したの!?!確かに西涼での反乱の

兆しについて、徐州から上奏が有ったと聞いたけど……。

後日冥琳からこの事について、彼女にも可能かどうかを訊ねたが、自分にもできるだろうと返された。ただし、「西涼の物価まで知る事ができるだけの広大な諜報網を持っていれば」とも合わせて言われたが。当然私達孫家はそんな諜報網を持っていないので、現状では不可能。

それを聞いて、子方をなんとか孫家に取り込めないかと考え始める事になるのだが、この時の事には関係無いので割愛する。

「それでですね、あの時に調べた限りでは秣まぐさの価格は上がっていませんかと記憶しているんです。麦や塩等は買い占めの結果、価格が上昇していたのに」

「……それがどうしたのだ」

まったく関係の無い話をし始めたからだろう。陳元龍がイライラしたような声を出し始めた。

ここまで感情を乱しはしないが、私も訝しむ思いを持つ。他の皆もそうだろう。

子方はそんな私たちを気にした様子もなく陶州牧に話続ける。

「西涼産の馬の取引量が減っているのは、おそらくこの反乱に備えて売る量を絞ったからでしょう。なら、何で秣の買い占めが行われなかったのか。反乱で馬を使う事を予測していたにも関わらず」

子方はそこで一度言葉を切り、軽く息継ぎをした後言葉を続けた。

「西涼にとって、馬は大金で売れる品物です。それを売る事ができなくなったので、金銭が足りなくなつて十分な秣を仕入れる事ができなくなつたんじゃないでしょうか」

その言葉に、冥琳が目を見開いて言葉を継いだ。

「そうか、なら小城に詰めたのも説明がつく。秣が無ければ騎馬を養う事ができない。おそらく馬は城外の牧草がある辺りで待機させているのだろう。その際には馬に乗る騎兵も一緒に外に出なくてはならないはず」

さらに子瑜が言葉を継ぐ。

「西涼の兵は大半が騎兵ですね。大部分の兵が場外に出た事を考え

ると、冀城の防衛に必要な兵の数が足りない……」

「それで、冀城に詰めるのを諦めて小城で籠城している。……なるほど、理屈に合うわね」

母様はそう言っつて、首肯する。

「と、なると騎兵はこの広い西涼のどこかで遊撃部隊をやっているという事か。かー、嫌じゃのう。見つけて撃破するのに相当骨が折れそうじゃ」

「んー。そんな事は無いんじゃない?」

私は祭の意見に否定を返す。

「どうせ小城を包囲して攻撃をし始めようとすれば、姿を表して側面なり後方からなりこつちを襲撃してくるわよ。そこを叩けばー」

「弩が無く、歩兵が中心の我らでどうやって西涼騎兵を討つつもりだ、馬鹿娘。その方法を考えるためにこうやって集まったのを忘れたの?」

「う、煩いわね! ちゃんと覚えていたわよ!」

母様に言われるまですっかり忘れていた……なんて言う事は当然できないので、私は嘘を吐いてごまかす。

ちよつ、こら親友! これみよがしに溜め息をつかないでよ!

「んー。伯符殿が言っつている事も間違いでは無いんですよ。その時に騎兵隊を撃破できれば、反乱者達の戦力を大きく削ぐ事ができるわけですし、その時点で降伏を促す事もできるかもしれません。とは言っつても、今の状況では騎兵を討つのは難しいでしょう。せめて来る方角だけでも分かれば、罫を張る事もできるのですが」

この子方の言葉が現状をすべて言い表しているだろう。

騎兵を討てば反乱が終わる。

だけど討つための有効な手段が無い。

非常に単純ではある。しかし、そこに至るまでの道がまったく見えない。

「ただ、下手に偵察を出したとしても、敵に先に発見されてしまえば逃げ切る事が難しいです。敵の馬の方が速度が出るでしょうし」

それも道理だ。偵察を任せるにしても、腕が相当良くないとすぐに

討ち取られてしまうだろう。

「ただ、好材料もあります。董孟高殿が隴西郡に軍の再編に戻った事により、馬州牧から援軍や補給を受け取り辛くなっています。ここまで物資を運ぶ間に、隴西郡から横腹を突く機会は多々ありますので。まあ、実際に突けるかどうかは分からないのですが、少なくとも警戒はするでしょう」

……それに関してはあまり期待しない方が良いでしょう。董擢の軍事的才能は正直高くない。可能であれば、西涼からの援軍が到着する前に決着を付けてしまうのが一番良いだろう。

その後も意見は百出^{ひゃくしゅつ}すれど、名案という物は出てこなかった。時間だけがどんどんと過ぎていき、とりあえず各個撃破される危険を承知で、敵の遊撃部隊を見つけるために偵察を四方に出そうかという方針に決まりかけた時、見張りを任せていた兵から敵方からの来訪者が有った事が伝えられた。

「報告致します。反乱軍より使者が訪れました。ただ、少し妙な事を言っています……」

その報告を聞いて、また私の勘が働いた。「この状況を打開するには、その人物と会わなくてはならない」と告げている。

来訪者と会う事でこの戦いの状況が大きく動く。私の勘はそう告げていた。そして、結果的にその勘は間違いではなかった……のだが。

後年、この時の事を思い出すと少し苦々しく思う。この時の来訪者を孫家で保護する事ができなかったのは痛恨の一事だったと、余りにも逃がした魚は大きかったのだと、そう思い知る事になるとは全然予想する事はできなかったのだ。

第二十話 Cut My Hair —開戦前夜④

私は偵騎に立候補する事で得た束の間の自由を使い、交渉のために朝廷から派遣された討伐軍を訪れていた。

この交渉の成果次第では、西涼で上がったこの反乱の狼煙が中華全土で燻っている朝廷への不平不満に飛び火し、遼原を焼き尽くす大火となりかねない。

自分の肩にかかる責任に思わず気後れしてしまう。

しかし、そもそも討伐軍の指揮官が会ってくれるのだろうか。

そんな心配が頭をもたげてくる。何せ私の今の立場は単なる一兵卒に過ぎない。首尾良く指揮官に会う事ができるかなど分からないのだ。

……考えれば考えるほど、不安になってきた。気を紛らわせようと無意識に髪の毛に手をやるが、そこには短く刈り込んでしまった髪の毛しかなく、密かに自慢に思っていた長い髪を切った事を思い出し、軽く落ち込む。

男装するのは仕方ないにしても、母さんの言うとおり、髪はもう少し考えてから切れば良かったかな。

思わず溜め息が口をついて出る。

事の始まりは数カ月前。麦の収穫が終わり少し経った頃だ。

私はその日、冀城の実家の庭で槍を振るって、自己研鑽に励んでいた。暇な時はいつもそうやって時間を潰している。曲がりなりにも、漢陽郡の名士の子として生まれたのだ。他人から見られて恥ずかしくない存在になりたいとは常々考えている。

槍の鍛練を終えて、汗を流そうと手拭いを取りに家の中に戻った。この後、久しぶりに遠乗りにも行こうかと考えていると、母さんから私を呼ぶ声が聞こえた。

居間に入ると、深刻そうな表情を浮かべた顔が三つ有った。一つは私の母さん。もう二つも知っている顔で、漢陽郡の丞である趙偉章様

と王夫人のご夫妻だった。

趙夫妻への挨拶もそこそこに席に着くと、母は話を切り出した。「すぐに漢陽を出なさい」と。

あまりに突然の話で納得する事ができず、理由を問うと沈痛な面持ちで答えてくれた。

「韓遂が涼州で乱を起こした。冀城にも直に兵がやってくるだろう」と。

さらに悪い事に、漢陽太守である韋元将様は既に韓遂への降伏を決めており、近々冀城も明け渡す事が決まっているらしい。隴西郡の董太守が既に韓遂に敗北したのも影響しているらしい。

韓遂自身はともかく、配下の兵達や一緒に行動している羌族には、おおよそ規律と呼べるような物はないらしい。さもあらん。奴等は人の皮を被った獣に過ぎない。そういった連中へ降伏するという事は、飢えた獣を自ら家に招き入れる事に等しいと、何度も翻意を促したらしいのだが、結局は降伏する事に決まってしまったらしい。趙夫妻がここにいるのは、それを私達へ伝えに来てくれたからなのだろう。

ありがたいお話だ。だが……。

「親や親しく交際してきた方々を見捨て、なぜ私だけが命を惜しむ事ができましようか」

私が自らを鍛えていたのは、まさにこのような危急な時が迫るのを想定してだ。ならば今は逃げ出す事ではなく、危地を乗り越える事を考えるべきだ。そうでなくては羌の討伐戦で散った父に顔向けする事ができない。まして父は羌族との戦で命を落としたのだから、羌族と組んで西涼を乱そうとする韓遂を許すわけにはいかない。

しかし、私だけで抵抗しても……いや、冀城全体で抵抗したとしても最終的には反乱者達に蹂躪されてしまう事になるだろう。

ならば他から力を借りるしかないのだが。最有力なのは、朝廷によって組織された討伐軍だろう。ただし、これは編成が完了するまで時間がかかるといふ難点がある。

ひとまずは確認するべきだろう。

「朝廷から討伐命令は下らないのでしょうか？」

「既に下されてはいるのだ。いるのだが、まだ全軍が集結するには至っておらぬ」

何でも、朝廷が深刻な財政状況であるため物資の準備を一部しかする事ができずに、招集した軍にも自分の領地から軍需品を持つてくるように命じたとの事だ。それが原因で予定より参集が遅れているらしい。

「なんですか、その馬鹿馬鹿しい話は」

「その馬鹿馬鹿しい話が、事実だから問題なのだよ」

「それだけではなく、さらに問題はあるようですね」

王夫人が、夫から言葉を継いで続けた。

「討伐軍に組み入れる対象を選定する基準として、ここ数年で賊討伐を成功させた数を重視したらしいのよ」

「？ 結構な事ではないですか。確実に討伐を成功させるならば、それは正しい判断だと思えますが」

「その対象が、徐州牧と揚州呉郡太守だったとしても？」

思わず息を飲んでしまう。

確かにそれはまずい。

「地理的要因をまったく考えずに選考したのですね」

「ええ、おそらくは。そうでなくては、東で海に面している地域など選定しないでしょう」

思わず後ろで一つに束ねるように結っている髪の毛に手をやり、手櫛てぐしで撫で付けながら溜め息を吐く。

「朝廷は事態を軽く見ているのでしょうか？ 中華の西端ともいえる涼州の討伐に、東端である場所から兵を呼ぶとは……」

それでは招集に時間がかかって当然だ。それに、あまりに長く領地を離れる事をどちらの軍も嫌がるだろう。

「一応、西涼からも董太守が出ていますわ。既に敗走しているけどね」

そういつて王夫人は軽く溜め息を吐く。

「太守様が開城を決めたのも、その辺りの事情が影響しているのですね。董太守が敗走している以上、早期の援軍を望む事はできない

と。仮に韓遂の軍を打ち破っても、討伐軍が領地に戻ればまた蠢動し始めると」

三人とも首肯する。韋太守様は決して愚鈍な方ではない。民を良く慈しみ、仁を大切にされるお方だ。しかし、今回はそれが悪い方へ作用してしまった。民達を巻き込んでほならないと、開城を決めたのだろう。だが、獣が人との約束を守るとは限らないのだ。

「……もう、どうしようもないのですか？」

私も頭では、冀城の開城に関してもうどうしようもないという事を理解していた。しかし、それでも信じたくないという思いから、その口にしてしまった。

三人とも沈痛な顔をしながら、もう一度私の言葉に頷いた。

それを見て私は、肌身離さず持つている父の形見の懐刀を抜き放った。何をするつもりかと問いかけてくる母さんの言葉を無視して、結っている髪を手に取り切り落とした。

驚きの声を上げる夫妻と、悲鳴のような声を上げる母さん。

ごめん母さん、そう心中だけで謝る。母は私が年頃の娘らしく、綺麗に着飾り女としての幸せを手に入れる事を望んでいた。だから父が死んだ後、家と母を守るために武に傾倒していく私を快く思っていない事には気づいていた。長く伸ばしていた髪は、そんな母への謝罪の意味を込めて、せめてものお洒落をと思い、手入れを欠かさないようにはしていたのだが、これからする事を考えると邪魔になってしまふ。雑に切り落としただけなので、後で整えるのを忘れないようにならないと。

それから私は三人へ、率先して韓遂の軍に参加を申し出るつもりだと伝えた。趙偉章様と母さんは私が何をするのか分からないのか、混乱しているようだった。王夫人は私が何をするのか理解できたのか、小さく息を飲んだ。私は改めて三人の前で言葉を作った。

「私は埋伏まいふくの毒となり、内から韓遂を打ち倒します」

幸い私は槍の腕前に自信が有り、馬も乗りこなす事ができる。韓遂としても私の参加を拒むことは無いだろう。しかし、規律の無い軍に女が入り込むのは非常に危険だ。私としてその程度の事は知る年齢に

なっている。だから私は髪の毛を切り落とし、男として軍に入ろうと
しているのだ。

母さんには泣いて止められた。娘が危険な目に遭うかもしれない
のだ、当然だろう。だが内部に協力者が居る方が、討伐軍が韓遂を討
ち果たすまでの期間が短くなる可能性がある。

しばらくの間私と母さんは口論を続けたが、結局私の意見が通って
韓遂の軍に入る事となった。私の考えを尊重し、味方になってくれた
趙夫妻の言葉も大きかったのだろう。

その後はとんとん拍子に話は進み、私は韓遂軍の騎兵隊である華雄
隊に組み入れられる事となった。反乱軍では秣が足りていないので、
騎馬隊は馬を養うために城外で牧草地に野営しながら遊撃を担う事
になるそうだ。

私はこの辺りに牧草地が無い事を知っていたので、冀県の支城の一
つである小城付近にある牧草地が野営するのに丁度良いのではない
かと韓遂に伝えた。それと併せて兵の人数が足りないのであれば冀
城ではなく、その小城に詰めればどうかという事も含めて。

果たして私の意見は受け入れられ、そのとおりに話が進んだ。私も
騎兵隊である以上、城外の野営に居る事となる。好都合だ。城内にい
るよりも討伐軍と接触する機会が多くなる。さらに幸運は続く。先
の進言から私がこの辺りの地理に詳しいと思ったのだろう。華雄に
より偵騎に選ばれて、この辺りを調べてくるように申しつけられた。
そして今、偵察として単独行動しているのを良い事に私は討伐軍の
陣を訪れて、当初の予定通り協力を申し出るつもりだ。

しばらくすると、私にここで待つように伝えた兵士が四人の男女を
伴って陣幕から出てきた。そしてそのまま私の方へ近づいてくる。
その四人は随分と若いので、おそらく指揮官本人ではなく周りに侍る
者達なのだろう。まずは彼らを説得しなくては、彼らの主人に会う事
は叶わないという事だ。

彼ら四人の姿をしつかりと観察する。

一人目は眼鏡をかけた女性だ。少し浅黒い肌をしているところを
見ると、呉の人間なのだろう。おそらく、呉郡太守孫文台殿の臣下と

あたりをつける。

二人目は赤い髪の癖毛の少年だ。三白眼で目つきが悪い。ただ、この四人の中では一番強い。おそらく私でも敵わないだろう。おそらく、他の三人の護衛だろうか？

三人目は私と同じ年くらいの少女だ。おそらく、十を少し過ぎたくらいだろうか？この年齢で従軍できるという事は、かなり能力のある人物なのだろう。金色に見える髪の色を背中まで伸ばしており、年齢よりもずっと落ち着いて見える。私も見習うべきだろう。

四人目は他の三人に比べれば些か地味な印象だ。というより、目だった外見上の特徴が無いと言った方が正確だろう。温和そうな表情をしており、軍で兵を率いているよりも農村で畑を耕していると言われた方が信じられるような少年だ。

四人が私の目の前に来たので、拝礼の形取り頭を下げる。向こうも私へ拝礼を返した気配を感じたので、私は自分の名前を名乗った。

「漢陽郡の姜伯約と申します。この度は急な来訪にも関わらず、快くご了承頂き感謝致します」

「・・・驚いた。漢陽の麒麟児殿か」

私の名乗りに反応したのは、地味と私が評した少年だった。これは好都合だ。私の事を知っているのであれば、交渉がし易くなる。しかし・・・麒麟児？

「いえ、私などにその呼び名は勿体無いかと。それこそ、徐州に居るといふ麒麟児殿は、麒麟の化身に等しく大地の実りを増やし続けていると言っているではありませんか。その呼び名は、そういう方にこそふさわしいのでは」

凄く微妙な表情をされましたが、何ゆえ？

隣の金髪の少女から、自覚を持ちましようと言われていますが、何なのででしょうか？

「ま、まあ、それは良いとして、反乱軍からの使者との事だけど如何なる用向きでこちらへ？」

「あ、はい。私は埋伏まいぶくの毒として反乱軍に身を投じております。

反乱軍を打ち倒すための一助になれば、そう考えてここへ赴いた次第

です」

「……なるほど。それは助かるな」

そう答えたのは、眼鏡の女性だ。その口調から、私の言葉に偽りが含まれているのではないか、そう疑っている事が分かる。

当然だろう。会った事も無い人間にいきなりこんな事を言われたとしても、易々と信用する事はできない。むしろ、簡単に信じる人間だったら、私が本当に手を組んで良いのかを考え直す必要が出てくる。

「あー。公瑾殿？ 多分この子の言ってる事本当だと思っから疑う必要は無いと思うよ」

この場に居る中で最も地位が上にあると感じた、眼鏡の女性の女性をどう説得しようかと考えていると、少年がそんな事を口にした。

「あのな、子方殿。 そんな事を言われても、いきなり信用する事などできるわけないだろう」

「義兄さん、私も公瑾殿の言う事に賛成です。 さっきまで対応策を話し合っつて、まだ決まっつていないところに敵方からの内通者が登場するというのは、流石に都合が良すぎるかと思えますよ？」

眼鏡の女性と金髪の少女が少年に対して言葉を返す。 どうでも良いですが、樂天的すぎると寝首搔かれますよ？

ところで、金髪の少女とこの少年は兄妹なのでしょう？ あまり似ていないのですが。

「まあ、こちらにとっつて都合が良いのは確かだけどさ。 ねえ、姜伯約っつて事は漢陽の姜家の人間でしょ？」

「ええ、まあ」

「私が徐州で聞いた漢陽の麒麟児の噂は、孝子であるというのが最初です。 父が異民族に殺されたという話と、その後の行動で名声を得ています」

もちろん、武勇に関しても伝わっていますがね、と笑いながら言われた。 正直、そう褒められると面映い。

「さて、ここで問題。 羌族に身内を殺された孝子が、本心から羌族の協力を得ている韓遂へ仕えるでしょうか？」

私は、目の前の少年の評価を上方修正する。きちんと論理的に物事を考えて答えを出そうとする人間なのか。おそらく、軍師を目指そうとしている人間なのだろう。年齢を考えると、まだ見習いなのだろうが。

「まあどちらであつたにせよ、全面的に信用する必要は無いのでは？ 策を立てるにしろ、取り返しのつくくらいの重みの部分を任せれば良いんだから」

そう言つて彼は陣幕に戻り、地図と毛布を手に持つて戻つてきた。そしてそのまま毛布を私の方へ手渡してきた。馬に乗つていた時は汗をかくくらい暑かつたのだが、この気温で汗が冷えて辛かつたところだ。ありがたく借りて羽織らせてもらう。

「とりあえず、情報が欲しい」

そう言つて彼は地図を広げて、指で渭水をなぞりながらこう言つた。私を含めて、この場に居る全員が地図を覗き込み始めた。

「服の裾が水で濡れているところを見ると、君は多分渭水を渡つてこちらに来たと思うんだけど、その認識は合つてる？」

「はい。野営は渭水を渡つたこの辺りでしていますから」

そう言つて私は地図で野営のある地点を指した。

「渭水を渡つた浅瀬はどの辺り？」

「それは・・・大体この辺りになるでしょうか。ここだけ浅瀬になつていて渡河をする事ができるんです」

「ふむふむ。ちなみに、野営している部隊の長つて誰？」

「華雄ですね。えーつと、大斧を持った猛将で武に誇りを持っていて、猪突傾向にあります」

そこまで聞くと彼は少し考え込んで、私に待つている様に言うと三人を伴い陣幕に戻つていった。それから三十分くらい待つと少年は一人で陣幕から出てきた。

「姜伯約殿。やつてもらいたい事があるんですけど」

「はい。なんなりとお申し付けください」

「やつてもらいたい事は、このまま華雄の陣に戻つて待機して欲しい。後は、もし私達との間で戦闘があつて、華雄が追撃に迷う様だつた

ら後押しするようにして欲しいんだ」

「は？ ……それだけで良いので？」

「うん。ただ、内通を怪しまれないように、君が戦場に出てきても手心を加える事はできないんだけど」

「はい、それは大丈夫なのですが……本当にそれだけで良いので？」

あまりにする事が簡単すぎて、思わず確認してしまった。それを見て彼は大きく頷いた。

「うん。単純だけど、かなり重要な役割だからよろしく。君みたいな女の子に規律が低い軍隊へ戻らせるのもあまり気が進まないんだけど」

……今、何と仰いましたか？

「え、えっと？ 私が女だと気づいていたのですか？」

「漢陽の麒麟児の噂を聞いた事があるって言ったでしょ。『女だてらに男に負けぬ槍捌きで母を守ろうとする孝子』って言うのが私の聞いた噂だよ」

はあ、と溜め息を吐いてしまう。

まさかその様な噂が流れているとは。もしかしたら、私が女子という事を知っている人間が華雄隊に居るのかもしれないね。気をつけなくては。

そう考えていると、彼は入り口まで送ると言い、歩き始めた。

私は彼の後を追い、隣に並んで話始めた。

「どうか、その話は討伐が終わるまではご内密にお願い致します。

万が一にでも討伐軍に話が漏れてしまったら大変ですので」

「心得ているよ。まあ、策が上手く行けば一回戦闘すれば終わるはずだから、すぐに性別を明かせるようになるさ」

「それはまた……。大した自信ですね」

彼の大言壮語に呆れてしまう。

「それくらい自信が無ければ、あんな短い時間で徐州牧と呉郡太守を説得できるわけないでしょ」

「もう策の裁可も下りているのですか!？」

「正確には、実務者の二人には、だね。一応二人には、私の考えた策

の有効性は認めてもらえたよ。　総大将にはこの後説明に行くはずだよ」

正直驚いた。軍師見習いと思っていたのだが、もしかしたらもつと高位にいる人間なのだろうか？

入り口まで着き、お互いに向かい合い拝礼をする。

「それでは姜伯約殿。　どうかお気をつけて」

「はい、ありがとうございます。　あなた……えつと？」

そういえば、彼の名前を聞いていなかった事に今さら気づいた。

彼もそれを察したのだろう。忘れていた事を誤魔化すように、また、照れくささを隠すように頭を掻くと私に名前を教えてくれた。

「遅くなってしまいました。　徐州東海の糜子方と言います。　こんなりですが、一応陶州牧の主簿を務めています」

その言葉に私は声を失った。まさか、噂に聞いていた徐州の麒麟児その人だったとは。なるほど、それならば陶州牧の説得が早かったのは理解できる。しかし、孫太守の説得もそんなに素早くできるとは、どんな方法を使ったのだろうか。

驚き、固まった私を前に、糜子方殿は不思議そうな表情をしていた。……私が言えた義理ではないのですが、この様子だけを見ると麒麟児にはまるで見えませんね。

それが私と麟殿との出会いだった。

この時点では、そんなに長い付き合いになるとは思っていなかったのだが。

麒麟児と噂される才気を持ちながら、それを故意に隠すでもなく表に出さない少年。それが私の麟殿への第一印象だった。

後年、私はそんな麟殿をもつと他の人にも認めてもらいたいと行動を起こし始めるのだが、それはまた別の話だ。

第二十一話 The Beginning — 西涼
会戦① —

「それではご武運を」

「うむ。そなたらもしつかりとな」

義兄さんが州牧様へお声かけをして、州牧様も私達へ言葉を返して頂いた。その後、州牧様は兵を率いて陣より出立していかれた。

州牧様はこれから小城の包囲を開始する事になる。もちろん州牧様だけではなく、張司空、文台様、公覆様、漢瑜様も一緒に包囲を行う事になる。

元龍さんや伯符さん達がこの場にいないのは、そちらの方々を私達同様に見送っているからでしょう。

「本当に上手くいくのでしょうか」

州牧様達が見えなくなるまで見送った後、私は不安から思わず呟いてしまった。

「不安？」

義兄さんが苦笑いしながら、私の言葉に答えを返してくださいました。

義兄さんの事を疑うつもりは微塵も無い。しかし、正直に言えば少し不安です。

無言のままだった私の態度を義兄さんは肯定と受け止めたのだろう。私の返事を待たずに言葉を続けられた。

「まあ、華雄が偵察をまぬに出してたら瓦解するような策だしねえ」

そう、まさにそこが問題となっている。義兄さんが立てた策は実際にやる事は単純なのだが、仕掛けが大掛かりで時間がかかる。そこを偵察に見つかればすぐに策を看破される事になってしまう。

「だからこそその間、伯符殿達に気を逸らしてもらうんだけどね。」

江東の虎こと孫文台様からも伯符殿なら上手くやれるとお墨付きが出ているし、大丈夫じゃないかな」

「いえ、あれはむしろ馬鹿にしていたのでは……」

『雪蓮、当然できるわよね。その程度もできないよううで、私の娘のつ

もりなのかしら?』っていうのは、お墨付きとは違うと思うんです。あと、喧嘩は外でやって欲しいです。

「まあ、伝え聞く華雄の性格からして、近くに敵陣が有ったらそつちに十割の力を使ってでも打ち破ろうとするだろうしなあ。他の事に気を回す事は無くなるだろうし、大丈夫じゃない?」

「あら? そのために苦勞するのは誰なのかしら?」

後ろから私達以外の声が響いて、少しビクツとする。

恐る恐る振り返ると、そこには伯符さんと公瑾さんがいた。

義兄さんは気にした様子もなく二人へ声をかけた。

「お疲れさま。二人もそろそろ出撃?」

「ええ。誰かが立てた作戦を達成するためにね。なかなか無茶を言うわよね、あなたも」

その言葉に思わずむっとしてしまふ。他の人から義兄さんの言葉を疑われると腹立たしい。

私自身不安に思っているくせに勝手な物だ。少し自分自身に呆れる。

「そうは言っても、文台様に向けて簡単にやってみせるって豪語してたよね?」

「思いつきり挑発に乗せられただけなんだけどね! 全力で後悔中よ!」

「……そしてそうやって乗せられた結果で巻き込まれた私に何か言葉は無いのか、親友?」

義兄さんの言葉に全力で噛みつく伯符さん。そしてその伯符さんをジト目で睨む公瑾さん。あ、伯符さんが明後日の方向を向きました。

なかなか複雑な人間関係が構築されつつありますね。まあ、私は義兄さんに被害が無ければそれで良いのですが。

「けど、君らの総大将が諸手を挙げて賛同したから、今回の策は実行する事に決まったんだよ?」

「諸手を挙げた理由が、策が素晴らしく誰にも否定できないとかだったら納得するのだがな」

「説得急がなきゃいけないかったからなあ。 そうしないと姜伯約殿が戻るの遅くなつて、疑われる可能性が合ったし」

「だからって、あの説得の仕方はどうなのよ。 賛同したうちの鬼婆と祭にも問題があるんだろうけど」

いえ、伯符さん。 あなたも諸手を挙げていた側です。

もつとも孫家のお二人が義兄さんにそう言うのも分からないでもない。 義兄さんがあの時に言った言葉を思い出す。

『策を思い付きました。 早々に説明しますので、意見を聞かせてください』

ここまでは良い。 極めてまともな切り出し方と言えるだろう。 問題は次の言葉。

『ちなみにこの策に賛同頂きますと、酒の入った瓶を空にする必要があります。 なので、私達の持ってきたお酒を浴びるほど飲む事ができます』

どういう説得の仕方ですか、義兄さん。

孫家の三人が目を輝かせ、熱意も露あらわに策に賛同したのは言うまでもない。

結局その流れのまま、義兄さんの策を実行に移す事になった。

あんまりな説得の仕方に怒りを露に義兄さんを睨み付ける元龍さんと、頭を抱える公瑾さんが印象的だった。

「もつとも、策自体の出来は悪くないと思ったから、二人も積極的に反対に回らなかつたんでしょ？」

「……まあ、な」

「あら？ 私は今回の作戦にも、あの会議の後のお酒の味にも文句をつけるつもりは無いわよ？ ただ、良いように鬼婆にあしらわれた事と、この後めんどくさい対陣を強いられるのが嫌なだけだし。 勘も悪い事が起こるって告げてはいないしね」

伯符殿は勘で行動を決める事が間々あるらしい。 それが良く当たると、指針とするには十分な精度らしい。

私は半信半疑なのだが、義兄さんはどう考えているのだろう。

「疑うわけじゃないけど、勘が働かないからって油断はしないように

ね。嫡子が死んだりしたら、私も孫家の兵達に八つ裂きにされかねないし」

「分かってるわよ。貰ったお酒の代金くらいは頑張らせてもらおうわよ」

「うん、そのくらいで良いよ。やる気出されて華雄を殺されても策を修正するの面倒くさいし」

「いや、どうなのだ？ その意見は」

冗談混じりに自分の保身を口にしながら、油断しないように釘を差す義兄さんと、それに冗談で返す伯符さん。

華雄が殺されて困るといふのは、猪突傾向にある武将の方が手玉に取りやすいからでしょう。

まあその辺りの気持ちは分からないでもないが、頑張りすぎないようにと言われたら、今の公瑾さんのように苦笑いを浮かべるしかないと思う。

「それじゃ、私達も伯符殿達の渡河と陣地構築を支援するための準備を始めるよ。準備ができたら声をかけるから」

「りよーかい。あ、対陣中やる気が続くように酒瓶貰って行って良い？。」

この言葉には思わず私も苦笑いをしてしまった。

公瑾さんが何か言いたそうに伯符さんを見ているのですが……。

「全部終わってから祝勝会とかで飲む方が良いんじゃない？ 長期対陣したくない動機付けにもなるでしょ」

「うーん。まあ、そうでしょうか。さあ、さっさと華雄を斬って戻ってくるわよー！」

「いや、斬つちや駄目だから！ あと、最低でも十日は陣地を維持してね！」

意気揚々と歩き出した伯符さんの背中に義兄さんが大声で呼びかける。公瑾さんが溜め息を吐きながらいざという時は止めると言っていたので、大丈夫だとは思うのですが。

「なんか、色々と不安になったけど……私たちも準備を始めようか。私が兵達を集めておくから、藍里は物資や道具の準備に漏れが無い

かの確認をお願い」

「はい。 それでは義兄さん、 また後で」

そう言つて私は義兄さんと別れて歩き始める。

陣地内で物資が集めてある場所に向けて足を進めながら、私は今回の戦の盤面を思い返す。

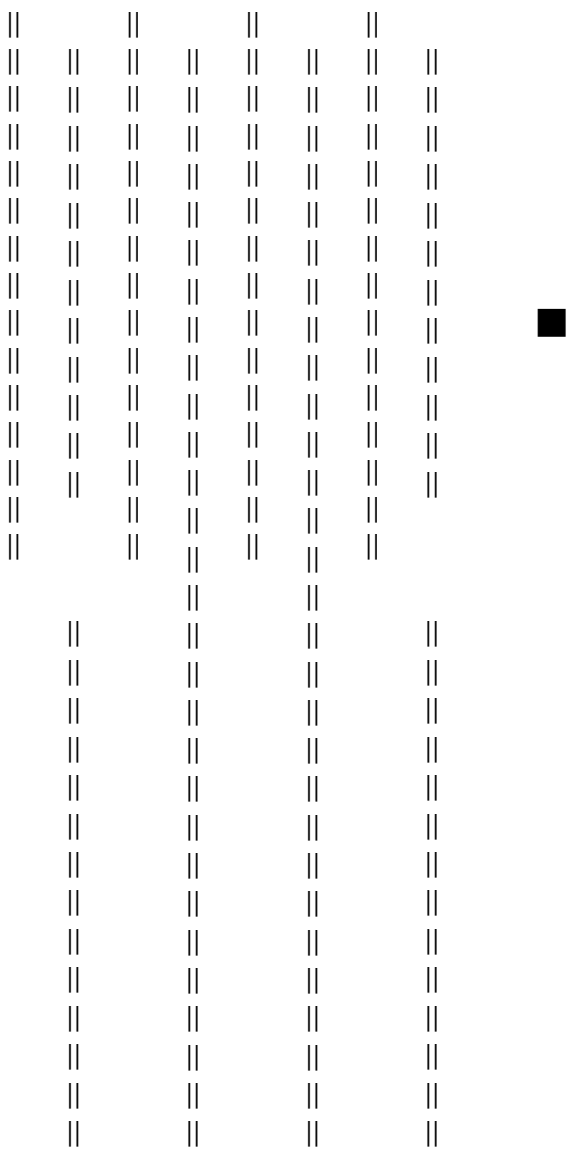
姜伯約さんからもたらされた情報により、華雄隊の陣地の場所は大體把握できている。華雄隊がまだ私達へと攻撃を仕掛けてきていない事を考えると、おそらく私達の陣地の場所は分かっているのだろう。姜伯約さんも私達の野営地について、見つけている事を誤魔化しているのだろう。

大雑把に現在の位置関係はこうなっている。

戦闘推移図①：渡河前

西

東



|| || : 渭水 (幅が狭い部分は浅瀬)

■：華雄隊野営

●：討伐軍野営

▲：小城（韓遂軍籠城中）

渭水の向こうに陣地を構えているのは、牧草地が川向こうにある事と、攻城を始めたら渡河を行い私達の背後を突くためだろう。そのためには、私達に発見されづらいように対岸に陣地を構えている方が都合が良い。もつとも私達は、姜伯約さんのおかげで既に敵影を捕捉できているのだが。

率いている兵数は、私達討伐軍が合計で二万五千。韓遂率いる反乱軍が二万となり兵数では私達の方が勝っている。しかし、反乱軍はそのうち半数以上が騎兵であり、私達の騎兵数を大きく上回る。そのため総合的な戦力はかなり拮抗している。下手をすれば、反乱軍の方が上回っているかもしれない。

その対応として義兄さんの出した作戦では、小城を攻撃する部隊と華雄隊に後ろを突かれぬ様に備えの部隊に分けようとしている。完全な平地である場合、部隊を分けるのは愚策となりえるのだが、今回の場合渭水を挟んで対陣していて、攻撃をしようにも渡河をしなくてはいけないのがこのような策を可能としている。一度に渡河を行える人数が限られる事から、防御陣を浅瀬付近に敷いて敵が河を渡ろうとするところを攻撃し続ければ守備をする事は容易い。騎兵と同程度の兵であつても防御する事は可能だ。

これも姜伯約さんに渡河できる地点をあらかじめ聞いていなければできない戦術だ。彼が私達にもたらした情報は、非常に大きかった。

もつとも、ただ華雄隊を近づけないようにして小城を囲んでいるだけでは長期戦となってしまう。私達の本拠地近辺で補給が容易に行えるような場所だつたらともかく、なかなかそれを行う事が儘ならぬ涼州の地に居る以上、長丁場となる事は可能な限り避けるべきだ。これには、徐州勢、孫家ともに共通の認識を持っている事は確認済みだ。そのため、義兄さんはただ守備に徹するだけではなく、華雄隊を撃破する事で戦力の均衡を崩そうとしている。そのための作戦も既

に私達は聞いている。

まず第一にやらなくてはならないのが、渡河をしやすいように土塁を築いて河の流れを塞ぎ止める事だ。幸い渡河地点では川幅が狭くなっているので、土塁を築く事はなんとか可能だ。……まあこの寒い中、河に入って作業をしなくてはならないのは辛い事なのだが。

そうして水量が少なくなった渭水を短時間で渡り、渡り終えた後に土塁を義兄さんの部隊が崩して、万が一にでも他の渡河地点が出来ないようにする。

そして、渡河をした部隊は川向こうの浅瀬の目の前に陣を築き、華雄隊が渡河をする事ができないように構える。この陣地防衛を伯符さん達にお願いするつもりなのだ。徐州兵達による土塁や陣地の作成は、義兄さんが散々兵達を使つて徐州内の土木作業（道路敷設や砦の建設）をしたおかげで本職の職人達に匹敵するほどの熟練度を誇っている。渡河を終えてすぐに陣地の作成を始めれば、華雄隊に捕捉される前に防衛陣を作る事が可能だろう。宣高さんと元龍さんが率いる部隊についてもこの防衛陣に詰めて、華雄隊に攻撃を受けた際の柵の補修等を担当する事になっている。そのための物資は、義兄さんと私が詰める後方陣地から適宜搬出するつもりだ。もし陣地を守りきれなくなつた場合には、陣地を放棄して渭水を渡り後方陣地で防衛を行う予定だ。

小城の攻城担当だけでは籠城している敵の三倍には達しておらず、力押しで攻城するには少し厳しい物がある。攻め落とすつもりはまるで無いので、これで問題は無いそうなのだが……。

上手く渡河ができた時の配置図を思い浮かべる。細部は違うかもしれないが、大体合っているはずだ。

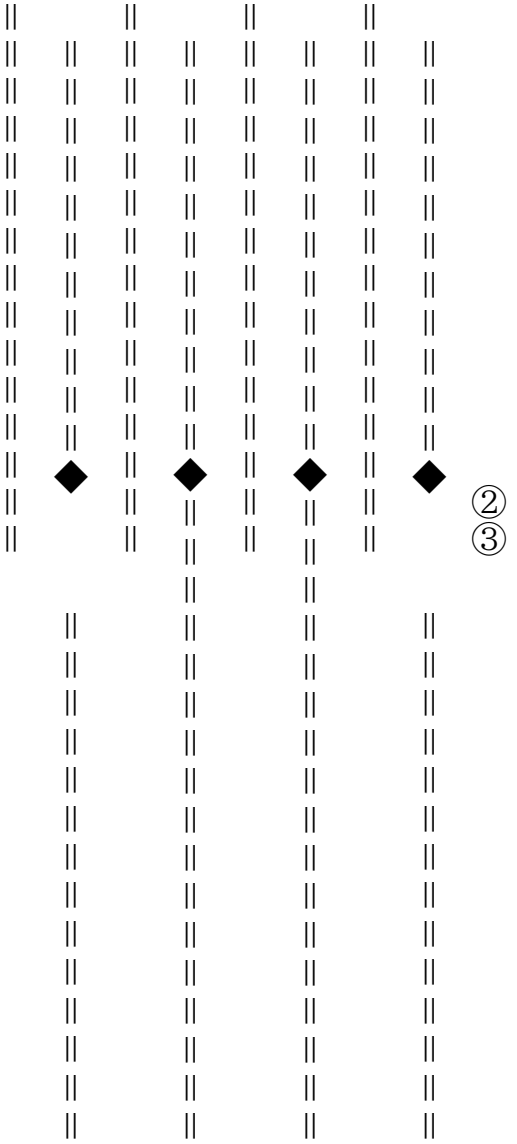
戦闘推移図②：渡河後防衛陣地を形成

西

東



●
④
⑤



- ④
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩

|| || : 渭水 (幅が狭い部分は浅瀬)

◆ : 土塁

■ : 華雄隊野営 (騎兵 一〇〇〇〇)

● : 討伐軍野営

▲ : 小城 (韓遂隊 歩兵一〇〇〇〇で籠城中)

- ① 糜芳隊 (騎兵・歩兵 二五〇〇)
- ② 陳登隊 (歩兵 一五〇〇)
- ③ 臧霸隊 (歩兵 二五〇〇)
- ④ 孫策隊 (歩兵 二五〇〇)
- ⑤ 周瑜隊 (弓兵 一五〇〇)
- ⑥ 陶謙隊 (歩兵 五〇〇〇)
- ⑦ 陳珪隊 (弓兵 一五〇〇)
- ⑧ 孫堅隊 (歩兵 二五〇〇)
- ⑨ 黄蓋隊 (弓兵 一五〇〇)
- ⑩ 張温隊 (歩兵 五〇〇〇)

「本当に大丈夫なのでしょうか……」

「ん？ まあ、あいつの考えた事だし大丈夫じゃねーか？」
「っ！」

また不安から口にした言葉に、背後から答えが返ってきた。周りに誰も居ないと思っていたので、思い切り体がビクツとする。先ほどの伯符さんの時といい、今日は背後から突然声をかけられる事が多い日だ。

後ろを振り向くと、そこには宣高さんと不機嫌そうな顔をしている元龍さんがいた。元龍さんはほぼいつも不機嫌そうな顔をしているため、いつもどおりの表情とも言える。

「よお、ちびっ子。俺らの出撃の準備も整ったんだが、子方の奴はどこに居る？」

「私はそのような名前ではありません。 義兄さんでしたら、渡河を行う部隊の援護の準備をと言って、兵達を集めているかと思いませんよ」

私の事を変な呼び方をする宣高さんへ呼び名の訂正を行い、質問にも答える。

「なんだよ、入れ違いかよ。 また向こうに戻るの面倒くせーぞ」
「私も物資確認が終われば義兄さんのところに戻りますので、よろしければ伝言を承りますが」

「ん？ おう、じゃあ伝言を頼むわ。 兵達の準備が完了したから、さっさと出撃させろ。 以上だ」

「出撃云々は要らないのでは……。 まあ、了解しました。 お伝え致します」

私は了承の言葉を宣高さんへ返す。討伐軍の中の貴重な騎兵戦力の指揮官である宣高さんなのだが、今回は陣地防衛が主任務のため、馬は連れて行かずに義兄さんが預かる事になる。歩兵指揮であったも、十分すぎるほどの戦功を持つ方なので、特に指揮する兵科にこだわりは無いらしい。

「ああ、ついでに元龍こいつの方も準備完了だ」

「ついでとは何ですか！ 失礼極まりない！」

「初陣を迎えたばかりで何の戦功も持っていないひよっ子にはそれで

十分だろうが。だから、そこにいるのもちびっ子と呼んでいるだろうが」

「私の名前はちびっ子ではありません。元龍さんも準備完了である事も合わせてお伝え致します」

私は拝礼をしてその場を離れようとする。私も早く物資の準備を済ませてしまわなくてはならない。

「ところで、さっきみたいなのをいっているって事は、あいつの事信用していいのーのか？」

「そんな事は有り得ません」

その宣高さんからの言葉に、思わず内心の不安を押し殺して強く否定してしまう。

いけない。こんな事では何か義兄さんの作戦に思うところが有るようではないか。

続けて言い訳を口にしようとする私を気にした様子も無く、宣高さんは言葉が続けた。

「まあ、別にどっちでも良いんだがよ。元龍にも言える事だが、仮にあいつの作戦について疑っているようなら、はつきり言って無駄だから止めたほうが良いぞ」

「……なんですか、それは。それではまるで麿子方殿が間違いが無いようではありませんか」

元龍さんが思い切り不機嫌そうに宣高さんの言葉に噛み付きに行った。どうやら元龍さんも義兄さんの立てた作戦に不安を感じているようだ。いや、どちらかといえば不満だろう。元龍さんは義兄さんや義兄さんのお姉さんである子仲さんの事を好敵手として見ているらしい。確かに二人とも、私達と同年代であり、既に功績を打ち立てて立身出世を重ねている。同じように徐州の名家として生まれた者としては、負けたくないと思ってしまうのだろう。子仲さんはそうやって敵視してくる元龍さんを嫌っているようだが、義兄さんは気にしていないようだ。むしろ、そうやって競う相手を見つけてるのは、成長が早くなつて望ましいとも言っていた。

それは良いとして、今は宣高さんからの話を聞くとしよう。

「成功失敗以前に、あいつの策は分かりづらいんだよ。前例の無い事ばかりをやろうとするから、その辺りの判断が難しい。ただ、少なくとも、俺が副官をやっていた二年間の出撃のうち、あいつが立てた作戦はどんなに突拍子の無い物であっても失敗した事はねーよ。どんなに理解できないような変わった事をやらされようとも、必ず自軍の被害は最小限に抑えられてた。俺も副官を辞めて自分の部隊を持つようになって、どれだけあいつが非凡な事をやってのけていたのかを理解した。あいつがやろうとしている事はあいつ以外には理解できないんだから、考えるだけ無駄なんだよ」

「それでも失敗しない人間など……」

「そんなにあいつの立てた作戦が不満なら、代替案をお前が出すべきだろうが。嫌だ嫌だって駄々こねるだけだったら、餓鬼にも出来るぞ。特にあいつの作戦に代わる物を思いついていないんだったら、大人しく従っておけ」

そこまで言うと、宣高さんは口を閉じた。元龍さんはまだ不満そうではあるが、返す言葉が思いつかないのか、不機嫌そうにそっぽを向き始めた。

私も今の宣高さんの話した内容に返す言葉を思いつかなかった。

私達が黙ったためか、宣高さんは肩を一つ竦めて元龍さんを伴って去っていった。

「代替案が無いなら作戦に従うべき。従うと決めたのなら、成功するように全力を尽くすべきですか」

義兄さんだったら、おそらく自分の立てた作戦が疑われたとしても気を悪くされる事は無いだろう。むしろ、反対意見であっても納得できる部分があるのであれば、自分の策を組み替える柔軟さを持つている。自分の持つ物とは違う視点から作戦を評されるのを義兄さんは好むので、むしろそういう反対意見が上がる事を義兄さんは喜ぶだろう。

しかし、私の場合はただ自分の考えが及ばない作戦を不安に感じるだけで、対案をまったく出せていない。これでは、ただいたずらに兵達に不安を伝染させるだけで、悪影響しか与えない。

「こんな事では駄目ですね」

義兄さんの副官をする以上、誰よりも義兄さんの行う事を理解して、義兄さんを支えられるようにならなくては。

私は決意も新たに、義兄さんの立てた作戦を成功させるために物資の準備を始めるのだった。

②—

「ええい！ 何故あの程度の陣が打ち破れないのだ!!」

出撃前の軍議と称して、私たちは華雄の陣幕に集められた。実際には、華雄が苛立ちのまま叫ぶだけなのだが。目の前の卓に拳を叩きつけ、華雄は怒声を上げる。陣幕にいる華雄の配下達は全員顔を下へ向ける。目を合わせると華雄の憤りをぶつけられる役目を負わされるからだろう。

私も同様に俯いているが、別段華雄を恐れての事ではない。今回の討伐軍の動きについて思考を走らせている。

「我々が攻撃を始めてから、既に八日だぞ！ あの程度の陣、一息に踏み潰す事ができないとは何事か!!」

(そんな認識だから打ち破る事ができないのですよ。)

私は口にはしないが、心中で華雄に向けて言葉を作る。あの陣地は見た目の小ささとは裏腹に、守備について色々と工夫のされたよく考えられた堅陣だ。

陣地の背後以外の三方向には幾重にも逆茂木を備えた柵が巡らさされている。背後にあたる渭水方向に柵を作っていないのは、いざという時に後ろに退くためだろう。

さらに、その柵の外側には溝が掘られて渭水を引き込む事で堀を備えている。馬が飛び越えるにも難しい幅で作られており、一層陣地の堅牢さが増している。

騎射により敵をひるませようとしても、相手は盾を構えているので大半が防がれてしまっている。それどころか、盾を構えながら投石で応戦されるので、こちらの被害が大きくなってしまいうり様だ。

運良く敵の射撃を避けながら堀を渡り終えて、柵に取りつこうとすると、身長よりも長い槍を使い馬を突き刺してくる。そのため、柵に取りついても落馬してしまい、そのまま突き殺される者が多い。守備に関しては、鉄壁と呼ぶにふさわしい構えをしている。

この浅瀬の前に敷かれている討伐軍の陣地だが、私が討伐軍の陣地へ赴いた時には、間違はなく無かった。しかし八日前の朝、目覚めると既に組み上げられていたのだ。本当に突然現れたとしか言いようがない。兵達の間では、妖術、戦術の類たぐいでは無いかと噂が流れていて、恐れる者も出てきている。それによる士気の低下も華雄が苛ついている原因なのだろう。

「しかも、勇将の誉れ高い江東の虎ならともかく、その娘が相手だぞ！簡単に打ち破れなくてどうするのだ！」

それもまた、華雄が荒れる原因なのだろう。武勇に誇りを持つ者にとって、自分が軽んじられるのは許せる事ではない。

（麒麟児殿はその辺りも見越して孫伯符殿を配置しているのだろうか？）

内心で思うその問いに、私は『是』と自答する。その意図がないのであれば、このような重要な役を若輩である孫伯符殿に任せるわけがない。まして討伐軍には戦歴が長い陶州牧もいるのだから、そちらに頼む方が確実だろう。

しかし、この陣地。考えれば考えるほど不可解だ。渭水を渡って陣地を敷いてきた以上、目的は華雄隊の撃破と考えられる。

しかし、先に述べたように、この陣地は守勢に重きを置いている。具体的には、渭水側以外の三方向を堀で巡らせているので、出入りするのが困難なのだ。これではこちらへ攻撃をしかけるのは難しいだろう。実際に今日に至るまでこちらから攻撃はしているが、向こうから襲撃は特に受けていない。

しかし、ここまで堅牢な陣地をあえて渡河をしてまで築いたのだ。何かしらの意図はあるのだろう。その意図が読み取れないのが不気味なのだが。

ちなみに偵察を走らせて相手の意図を探ろうという意見は出ていない。当然私も敢えて口にしようとも思っていない。おそらく、華雄の頭の中では、目に見えている敵陣を打ち破れば、そのまま攻城中の討伐軍の背後を襲う事ができると考えているのだろう。

目の前にいる相手だけが敵のすべてと考えてしまう。それが彼女

の悪癖だろう。もう少し視界が広くなれば、本人が称するように名将にもなれるだろうに。

さて、いい加減叫び疲れたのだろう。華雄が出撃を命じた。私もその言葉に従い陣幕を出る。さて、この調子では今日も陣地を抜く事はできないだろう。ならば、今日も怪我をしないように気を付けて出撃するでしょう。

案の定、今日も陣地を攻略する事はできなかった。毎日しているような単純な力押しであれを打ち破るのは無理だろう。私個人としてはこのままでも都合が良いのだが、憂国の士を自称する身としてはそろそろ何かしら動きが欲しい所だ。この反乱の討伐が長引けば長引くほど、朝廷が力を失っているかのように印象づけられてしまう。そうになると、本当に反乱が頻発してしまう事になる。それだけは避けなくてはならない。

果たして、私が待ちわびていた新しい動きは、そろそろ寝ようかという時刻にもたらされた。ただし、想像もしていなかった形でだ。

「……………上手く聞き取れなかったようです。申し訳ありません。

もう一度お聞きしてもよろしいでしょうか」

「だから！ 敵の姿が陣地から消えているのだ！」

思わぬ事を聞かされて、思わず問いを放ってしまった私に、華雄が怒鳴り声で返してくる。詳しく話を聞くと、どうやら捕虜となっていた者達が無人となった敵陣から脱出してきて、その状況を伝えてきたらしい。

さて、これはどういう事だろうか。今日攻めた手応えでは、まだまだ相手にも余裕はありそうだった。で、あるならば、ここで退く理由はあまり無いだろう。

「華將軍、これは好機ですぞ。 何が有ったのかは分かりませんが、あの厄介な陣を占領するか、破壊してしましましょう」

「然り然り。 あの陣地さえなければ、すぐにでも討伐軍を打ち破れましようぞ」

「うむうむ。 そうすれば、長安まで道を阻む物はなくなりましたよ

ぞ」

場にいる私以外のすべての者が今のうちに敵陣を攻撃すべきだと話している。十中八九罨だと思っただが、気づく者はいないのだろうか？

いや、気づいていたとしても口にする事が出来ないのだろう。華雄にとつて、今まで煮え湯を飲まされ続けた敵陣を破壊する好機なのだ。ここで消極的な意見を出したとしても受け入れられないだろうし、仮に受け入れられたとしても明日の朝に敵陣に兵が戻ってきたりしたら、華雄に斬り殺されかねない。ならばここは積極論しか選択肢が無い。

本来であれば、ここは罨の可能性を訴えて自重を促すべきなのだろう。しかし、今の私は埋伏の毒。麒麟児殿に頼まれたわけだし、積極的に追撃をしてもらい罨に嵌まってもらおう。

「華將軍。これはおそらく罨でしょう。どのような罨かまでは分かりませんが、私たちを陥れようとしていると考えられます」

そう口にした途端、周囲の目がすべて私の方を向いた。華雄は苛立ちも露に私に言葉を作ってきた。

「ふむ。ならばお前は出撃するのに反対なわけだな？」

「いえ、そうではありません。むしろ、積極的に出撃するべきだと考えます」

「ほう？」

消極的に待機を意見すると思っていたのだろう。私に正反対の事を言われて、華雄は虚を突かれたようだった。そして、視線だけで続けるように促してきたので、さらに言葉を発する。

「並みの相手ならば、簡単に罨で撃滅できるでしょうが、奴等は西涼騎兵の精強さを知りません。まして、勇将華雄に率いられる我らならば、簡単に食い破る事ができましょう」

うう。慣れない世辞を口にした事で背中が痒くなってきてしまった。今はまだ我慢だ、私。

華雄もそう持ち上げられて満更でも無い顔をしている。折角上手く口車に乗せる事ができそうなのだ。頑張れ、私。そう、無だ。心を

無にするのだ。

そう言い聞かせて、私は更に話を続ける。

「それに、敵が何処へ行ったかも気になります」

「馬鹿か、貴様。 対岸に撤退したに決まっているではないか」

そう言うてくる同僚を一瞥し、すぐに視線を華雄へ戻す。

「そういう事ではなく。 渭水を渡った後に何処へ行ったのかという話ですよ。 もしかしたら、小城へ総攻撃を仕掛けているのではないですか？」

そこまで言うと、弛緩していた場の空気が一気に緊張した。

「何せ私達は渭水を渡れなくてなつてから、小城の状況がまるで掴めていません。 ならば、既に陥落寸前までになつていて、最後の一押しの子備戦力として招聘されたとしたら、防衛陣を放棄したのも納得が行くのではないでしょうか」

あくまで予想にすぎませんが、と最後に付け加える。

さて、血気盛んな華雄の事だ。 こうやって口にしたら、おそらく渭水を渡つて追撃をしようと言ひ出すはずだ。

「その可能性がある以上、捨て置く事はできぬか。 ならば今夜中に渭水を渡り、敵の背後を襲う！ 兵達に出撃の準備をさせよ!! この一戦に打ち勝ち、一気に長安まで駆け上がるぞ!!」

はたして予想どおり、華雄は追撃をする事を宣言した。

(さて、麒麟児殿。 約束は果たしましたよ。 あなたがどのような華雄を打ち破るか、私に見せてください)

心中でこの場にはいない人物へ話しかけながら、出撃の準備をするために同輩と一緒に陣幕から出た。

第二十三話 Bridge Over Troub
led Water —西涼会戦③—

「ただいまー。無事に戻ってきたわよ」

「今戻った。今見てきたが、そちらの首尾も問題無いようだな」

前線陣地の防衛のために最後まで残っていた孫家の二人が戻ってきた。宣高と元龍は半日前に既に戻ってきており、小休止をしている。

「おかえり。わざわざ遠回りをさせて申し訳ない」

「いや、正直この寒空で濡れ鼠にならなくて済むのはありがたい」

「そう言ってもらえると助かるよ。とりあえず、すぐに出撃してもらう事になると思うけど、食事と焚き火を用意しておいたから休んでおいて。酒は流石に用意して無いけどね」

「ええ!? 頑張って守備をしてきた人間に対してなんて仕打ちを……!」

「まだ終わっていないのに飲ませる訳にはいかないでしょうが。むしろ、この後が本番なんだから」

ぶーぶー不満を言いながらも焚き火の方へ向かう伯符殿と、それを嗜めながら隣を歩く公瑾殿を見送る。この後もう一働きしてもらわなくてはならないので、ゆっくり休んでくれれば良いと思う。

さて、私の想定外の事が起きておらず、伯約殿が上手い事やってくれているならば、この後華雄隊は渭水を渡ってこちらに進出しようとしてくるはずだ。仮に警戒して私達の作った防衛陣地で留まろうとしたとしても、それはそれで構わない。元々こちらは敵の壊滅を望んでいるわけではない。戦えなくしてしまえばそれで事足りるのだから、敵が詰めていた野営陣を焼き払ってしまえば良いだけだ。

「子方」

私を呼ぶ声に振り向くと、そこには同村出身の悪友とこちらを睨みつけてくる少年の姿があった。

「宣高と元龍か。もう出る?」

「ああ。少し早めに持ち場に行く事にする。にしても、本当にこの短い期間で作っちまうとはな」

「できると思っていたから提案したんだよ。実際に、これで戦略の幅が広がっただろ？」

「ふん、いつそ土木工事をするなら、水禍の計を仕掛ければ良い物を」「いや、そうは言うけどさ、元龍？ そっちの方が派手で見栄えはするんだけど、流石に渭水を上流から塞ぎ止めるのは難しいって。

精々、前線陣地築く時にやったみたいに浅瀬部分を塞ぎ止めるので精一杯だよ」

そんな風にだらだらと会話しながら、三人で兵達の集合地点まで歩く。

「さて、それじゃあ最後に確認しておくよ。二人とも分かっていると
思うけど、ここから銅鑼を打ち鳴らしても聞こえないし、夜だから狼煙を上げてても視認が難しい。各々の判断で動いてもらう事になる」
「ああ、分かっている。お前の副官時代に散々判断力は鍛えられたからな。そこら辺は信用してくれ」

「ん。期待しているよ。元龍は良く宣高の言う事を聞くようにね」

「子供ではあるまいし、そんな事はいちいち言われずとも分かっている！」

そういう風にすぐにムキになるところが子供だと思っただけだなあ。

「体を焚き火で温めて、かんずりを肌に塗って、暖かい食事を口にして、防寒着で厚着してつと。あとなんか防寒の方法って有ったかな？」

かんずり。日本の新潟県で使われる伝統調味料の一種だ。唐辛子を主原料としているため、食べるのはもちろん、肌に直接塗っても血行を良くして体が暖まる。上杉謙信が関東進出の際に兵達に使わせたといい伝承が残っている。まあ、豆板醤でも同じ効果は見込めるのだろうか、ノリで作ってみたのである。

「十分すぎるだろ。ある意味兵を甘やかすすぎだと思うぞ」

「兵が十全な状態で戦場に赴けるようにするのが私の役目だからなあ。前に出て戦う事はできないんだから、これくらいは尽力しなくちゃね」

そう口にした時、丁度兵達の集合場所にたどり着いた。集まっている全員が馬に騎乗しており、いつでも出撃出来る事を示している。宣高と元龍も自分の馬に乗り、出撃準備が整った。

「それじゃ、宣高、元龍。よろしく。」

「おう。一暴れしてくる」

「ふん。期待して待っている」

二人とも一言ずつ残して宣高と元龍は騎馬を引き連れて出撃していった。馬が嘶いななきを上げないよう、口をしつかりと閉じるように轡くつわを着けている辺り芸が細かい。今回の行動が隠密性を重視するときちんと理解している証拠だろう。おそらく、宣高の指示だろう。こういう細かいところにも目を配れるようになるとは、本当に名将に育ちつつあるな。苦勞して兵法書を読み聞かせた甲斐があったという物だ。

そうやって二人を見送った後、私は自分の持ち場に戻って今回の作戦について最終確認をし続ける。何か抜けている部分はないか、流れに間違いはないか、不確定要素はないか。考えつくあらゆるパターンを洗い出し、一つ一つ対処法を精査していく。

そうやって時間を過ごしていると、慌てた様子で藍里が私の元へ駆け込んで来た。

「義兄さん。華雄隊が動いたようです。対岸から馬の嘶いななきが聞こえてくると報告がありました」

どうやら目の良い者と合わせて、耳の良い物も一緒に見張りさせていた甲斐があったようだ。宣高達の騎馬には轡くつわがしつかりと嵌められているのを確認したので、間違いなく華雄隊の物だろう。

「それじゃあ、始めるとしようか。藍里、孫家の兵達はどうしてる？」

「既に配置に付いているとの事です。私も自分の配置に向かいます
が……」

「うん。こっちは大丈夫。落ち着いて指揮すれば藍里なら大丈夫

だと思うから、しつかりね」

頭を撫でながらそう告げた私の言葉に大きく一つ頷きを返し、藍里は自分の指揮する部隊へと駆けていった。

「それじゃ、最終局面を始めるとしましうかね」

私はそう呟きながら自分の指揮する部隊へと向かう。そこには既に兵達が整列しており、いつでも私の命令で動けるようになっていた。野戦陣地を占領してから渡河を始めるまでに少し時間がかかるはずだ。戦訓を述べるくらいの時間はあるだろう。

兵達の前に置かれた台の上に登って、ゆつくりと兵達を見下ろす。

「さて、現状については今さら説明するまでも無いね。これから華雄が兵を率いて私達を攻撃しようとするところらに向かっている」

これから敵が来る、そう言っても慌てる者はいない。わざわざこうして集められて、戦える準備をさせられたのだから予想していて当然だろう。

「敵は精強無比な西涼騎兵が一万。兵の数こそ私達とほぼ同数だけど、騎兵である以上戦力は向こうの方が上回るだろうね」

正確には、相手は今日までの陣地への攻撃で兵数を減らしているのだろうが、どの程度被害を与えているのか分からないので、戦闘開始前の数字をそのまま口にする。自分達が敵よりも戦力に劣っているとか聞かされても、目の前にいる兵達に動揺する気配は無い。よく統率されるようになった物だ。錬度を向上させる事を企図した張本人だが、感心してしまう。

「さて、戦力差を口にされても慌てる者はいないみたいだね。その様子だとみんな分かっているみたいだけどあえて口にしておこう。」

この戦、簡単に勝つ事ができるよ」
私は気楽な調子で勝利できると断言する。

「如何に精強無比といえども、力に頼って打ちかかってくるだけならば、それは獣の群れと変わらない。それを防ぐための仕掛けを作ったのを知っているのは、この場にいる中にも多いと思う」

何せ、土木工事に参加した張本人達がたくさんいるのだ。仕掛けがある事を知らない人間の方が少ないはずだ。

「さて、ならば私達が負ける要素が何処にある？ 精々有り得るとしたら諸君らの慢心くらいだが、それすら私の目には見当たらない。もう一度言うよ。この戦、簡単に勝てる！」

私はそこで声を一段と張り上げた。一層熱意を込めて目の前にいる兵士達へ向けて声を放つ。

「獣が人の知恵に勝てる道理が何処にある！ 熟練の狩人が容易く獲物を捕らえるが如く、西涼の獣を罠にかけてこの戦で狩り尽くす！ 全員持ち場につけ！ 我等の強さ、二度と刃向かおうなどは思わぬくらいに敵兵へ刻み付けるぞ!!」

兵達は私の言葉に喚声をもって応える。慣れないと言えど、一応今の演説で兵達の士気を上げる事ができたようだ。ちよび髭伍長を見習って、演説の練習でもした方が良いだろうか？ 今後もこういう機会が多いようならば、本気で考えておこう。

今の喚声により、対岸の敵にも私達が待ち構えている事が伝わっただろうが、華雄のような猪突型の猛将にはこの方が良い。待ち構えているところへ敢えて飛び込んで打ち破ろうとするだろう。別に向かって来なくても負ける事は無いが、短期でこの反乱を終わらせるためには、さっさとこちらに向かって来てくれた方がありがたいのだ。

兵達が展開して、いつでも投石を開始できるようになったのを確認し、華雄達が動きを作るのをゆっくりと待つ。私達の今いる場所は、土を盛る事で浅瀬よりも高所になっている。藍里が指揮する部隊も同様にだ。どちらも浅瀬を渡河しようとする敵の動きを簡単に捉える事ができるだろう。

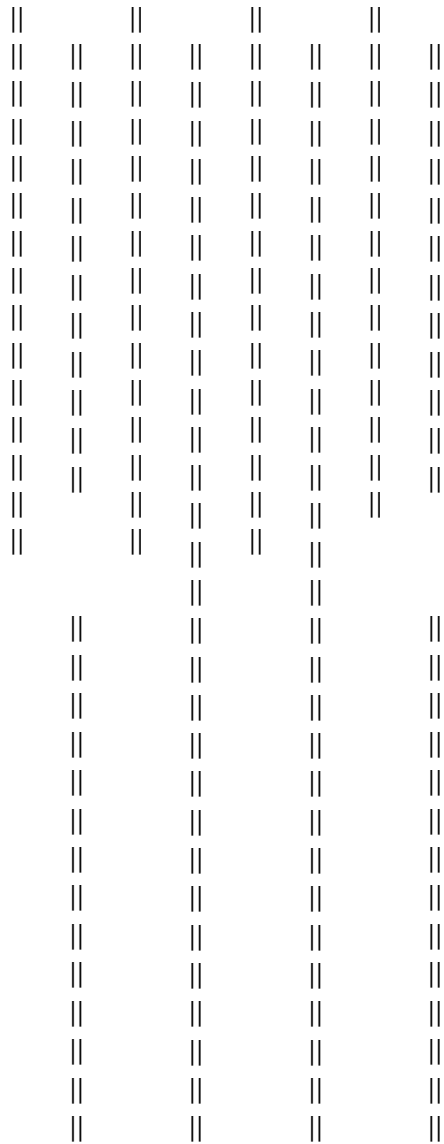
私達の戦術は、基本どおりに渡河をしようとする敵を水際で防御する戦術だ。渡河の最中は最も敵を討ちやすいタイミングなので、当然そこを狙わせてもらう。頭の中で、簡単に現在の状況を思い浮かべる。そろそろ華雄隊が渡河を開始するようだ。

戦闘推移図①：華雄夜襲時

西

東

堀堀堀堀堀
堀○堀
堀 A



●：渭水（幅が狭い部分は浅瀬）

■：華雄隊野営

○：討伐軍野営跡（柵は華雄隊により撤去済み）

●：討伐軍野営

- ① 麋芳隊（投石兵 一五〇〇）：築山上に兵を展開
- ② 藍里隊（投石兵 一五〇〇）：築山上に兵を展開
- ③ 臧覇・陳登隊（騎兵 二五〇〇）：出撃中
- ④ 孫策隊（歩兵 四〇〇〇）
- ⑤ 周瑜隊（弓兵 一〇〇〇）

A 華雄隊（騎兵 一〇〇〇〇弱）：討伐軍野営陣に向けて渡河を開始
敵騎兵から弓がこちらに向けて放たれ始めた。私達投石兵は常に
盾を構えながら射撃するので当然防ぐ事は難しく無いし、正面で防御
を担当する伯符殿と公瑾殿には盾をしつかりと構えてもらい、射撃を
受け止めるようお願いしている。渡河が開始されたら、公瑾殿には
撃ち返してもらおう予定だが、今はまだ我慢してもらおう。敵兵が来るの
を待たなくてはいけない伯符殿がイライラしているだろうと簡単に

思い浮かび、思わず苦笑してしまう。もう少し我慢をお願いします、想像上のその顔に胸中で頭を下げる。

こちらからの反撃が無い事を確認したのか、いよいよ華雄隊の騎馬が一気に渡河を開始した。定石としては正しい。そうやって一番狙われやすい渡河の時間を短くする事で、被害を最小限に抑える事ができる。

凄まじい勢いでこちらに向かってくる西涼騎兵。いよいよ渭水の中ほどもで進もうとした時、最前列を走っていた騎兵が深く沈んだ。まるで浅瀬ではなく、河の深みに嵌ったかの様に。その瞬間、先頭の騎馬は先ほどもまでの勢いが完全に殺された。同じ勢いで走っていた後続の騎兵達がその集団に追突し、一時その地点で敵騎兵すべてが停滞する。当然私たちとしては、この好機を利用して敵騎兵を削らせてもらう。

「今だ、放てー！」

その瞬間を逃さずに、私と藍里、公瑾殿の部隊から矢と石が殺到する。左右からの投石と正面からの矢が、次々と敵騎兵達に命中していく。わざわざ浅瀬に対して十字砲火を行える位置に陣取ったのはこのためだ。一地点に敵を誘い込み、射撃をその一点に集中する。有名な歴史漫画でいう所の『殺し間』だ。銃撃では無いため、瞬間的な殲滅力では敵わないが、速射性と連射性は火縄銃よりもずっと高い。ましてや敵は騎兵であるため盾を構えていない。その上、現在は完全に渭水の中ほどもで混乱してしまって立ち往生しているのだ。これだけでも十分すぎるほどに敵戦力を削る事ができる。実際に矢や投石を受けて馬から落ち、渭水に流され始める兵達が多数出始めている。それだけではなく、直撃して痛みから暴れ始める馬もあり、さらに混乱が拡大されていく。

私たちは続けて何度も何度も射撃を繰り返し、さらに敵兵の混乱を拡大していく。直撃を受けずとも、川で立ち止まっているとどんどん流れに押し流されていく。浅瀬よりも下流に流されてしまうと馬に流れに逆らって泳いで貰うしかないのだが、馬も大混乱を起こしている最中で冷静に騎手の指示に従うわけがない。

さて、当然の事ながらこの状況は私達が企図した物だ。敵兵の中では先頭を走っている者達でさえ何が起こったのか理解できなかっただろう。何をしたのかというと、人為的に渭水の浅瀬に深みを作り上げたのだ。具体的には、浅瀬に口を上に向けた瓶を埋設して、そこに馬が入ると足を取られるように細工をした。この仕掛けを作ったのは、最初に野営陣を対岸に作る際に土塁で渭水を塞ぎ止めた時だ。はつきり言って、野営陣を作ったのはこの仕掛けを隠す事と、敵軍の注意を引き付けるために過ぎない。この瓶の仕掛けが敵兵から見えないように、渭水を渡つてまでわざわざ野営陣を拵えたのだ。おそらく敵の多くがこの陣地を小城と遮断するための物と思つた事だろうが、その意図は極めて薄い。それだけが目的ならば、渭水をわざわざ渡らずに、こちら側の川岸で陣地を構えれば事足りるのだから。

瓶は私が徐州から持ってきた焼酎の入っていた酒瓶や、孫家の持つてきていた濁酒の入っていた瓶を流用した。わざわざこの策を採用してもらった時の説得で孫家の皆様に焼酎を提供したのも、空の酒瓶が欲しかったというのが一番の理由だ。孫家の持つてきていた濁酒も酒宴を開くのに使い、兵達の士気を高めるのに大いに役立った。そうやって集めた大量の酒瓶を使って、この策を実行したのだ。何も酒を無償で提供したのは、孫家の面々を喜ばせようと思つただけではないのだ。

……飲みきれなければ捨てる予定だったんだけどなあ。なんであるの酒量を数日で飲み干せるのさ。孫家の皆さんが心配です。肝硬変的な意味で。

相手が夜に渡河しようとせず、見通しが良くなる明日の朝まで待つてから渡河しようとすれば、簡単にこの仕掛けは露見した事だろう。だからこそ、伯約殿にわざわざ追撃をでき、それに迷う状況になつたら追撃するよう念押しするをお願いしたので。

そうやって一つ一つの策を細かく巡らせて行つた結果、目の前に広がる自軍に圧倒的有利な状況を作り出した。敵兵は未だに混乱したまま渭水の中ほどで立ち往生し、私たちからの投射を受ける事に甘んじている。これにより、段々と渭水中央にいる敵兵の数が減じている

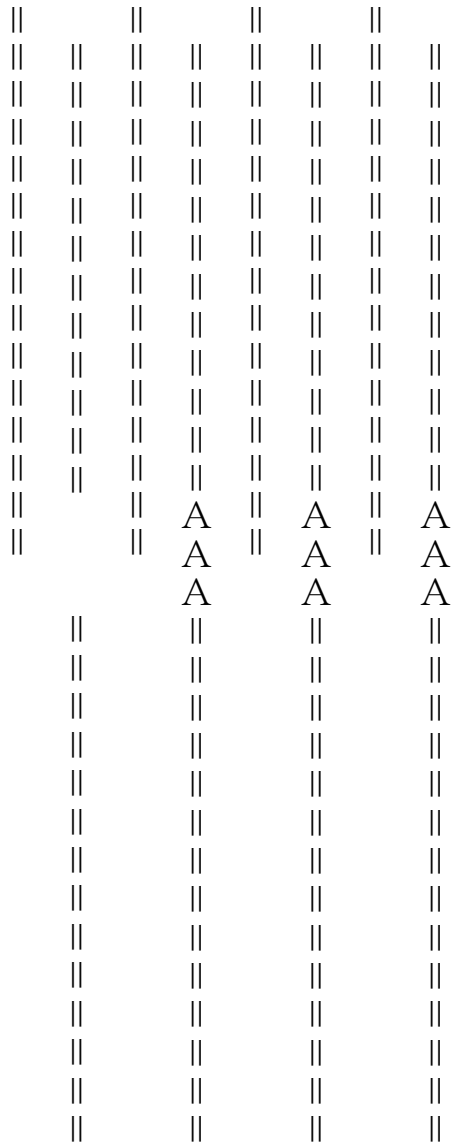
事が、この場所からでも黙視で確認する事ができる。

戦闘推移図②：川底の落とし穴発動

西

東

堀堀堀堀堀
堀○堀
堀



|| ||：渭水（幅が狭い部分は浅瀬）

■：華雄隊野営

○：討伐軍野営跡（柵は華雄隊により撤去済み）

●：討伐軍野営

① 糜芳隊（投石兵 一五〇〇）：投石を浅瀬に向かい実行

② 藍里隊（投石兵 一五〇〇）：投石を浅瀬に向かい実行

③ 臧霸・陳登隊（騎兵 二五〇〇）：出撃中

④ 孫策隊（歩兵 四〇〇〇）：待機中

⑤ 周瑜隊（弓兵 一〇〇〇〇）：弓射を浅瀬に向かい実行

A 華雄隊（騎兵 一〇〇〇〇弱）：川底の落とし穴に嵌り混乱中。行

動不能。

さて、遂に運よく私達の射撃を掻い潜り、伯符殿の待ち構える陣に辿り着く敵も出始めたようだ。しかし、大半は馬から振り落とされて自力で泳いでこちらへ辿り着いたよう^{かち}で徒となつてゐる。柵に取り付こうと、必死にこちらに向かつてゐるようだが、この寒空で河を泳いで体がかじかんでゐる状態で万全の体勢にて待ち構へてゐる守備兵に勝てる道理は無い。まして守備を担当してゐるのは、孫伯符が率ゐる孫家の精兵達なのだ。騎馬を失い、万全の準備ができてゐるとはとても言えない敵兵を、伯符殿の部隊が柵の隙間から長槍を繰り出し次々に屠つて行く。

ちなみに、この柵と長槍を駆使する戦法は古くから使われていた物だと思われるのだが、私が初めて知つたのは、とある洋画で敵騎兵を駆逐するのを見た時だ。起源はいつなのかまでは私も知らない。

柵の外を突き刺すのには長ければ長いほど良いと考へたので、マケドニアのフランクスよろしく二丈六尺（約6m）ほどの長さの物を用意した。接近戦では使えないが、柵の外の敵を倒すにはこれくらい有つた方が便利だ。本当は私達の部隊が弩兵の護衛をするために作つて持つて来たのだが、弩兵を組織する事が出来なかつたために、伯符殿に渡して防衛用に使つてもらつてゐるのだ。今のところ効果的に使用できてゐるようだ。

さて、そんな事を考へてゐる間にも、戦局は動き続けている。敵兵の約三割が今の段階で河に押し流されてゐる。死亡して流されてゐる者もいれば、馬から振り落とされてそのまま流された者もゐるのだらう。

私たちも射撃を継続してゐるが、現在健在の敵兵たちも少なくなひ数が渡河を諦めて対岸に戻つていくようだ。まだ渭水中ほどでの混乱は続いているようだが、少しずつ混乱が収まつて来ているように見える。

（……まだ来ないのか。早く来ないと機を逃すぞ）

胸中ではジリジリと焦燥感に苛まれながらも顔には出さないように注意して、投石を続けるよう命令を下し続ける。しかし、目は対岸へと向けて、最後の策が発動するのを今か今かと待ち続ける。

敵は組織的な攻撃をこちらへ仕掛ける事は難しくなった事をようやく自覚したのか、渭水を渡る事を諦めて対岸へ戻り始めたようだ。混乱も大分収まり、組織立った撤退が開始されようとし、私が機を逸したかと諦めかけたその時、ようやく私が待ち望んでいた事が起きた。

「来たか！」

思わず声を出して、拳を握りしめる。待ちに待っていた勝利を決定付ける策が発動した事をこの目で確認する事ができた。

「敵兵に向けて、味方騎兵が突撃を開始したぞ！ この戦、我らの勝利だ!!」

「うおおおおお!!」

思わず兵達に向けてそう大声で呼び掛ける。その声に呼応して、兵達が喚声を上げ始める。私自身が今口にしたように、渭水の対岸には敵兵に向けて突撃を開始する味方の騎兵隊の姿が見える。私達が防衛戦を始める前に出撃していた宣高達が、敵兵の後方から突撃を開始したのだ。わざわざこのために、全線陣地を囲っていた堀のうち、東側一箇所には穴を掘らずに柵だけしか配置しなかったのだ。ご丁寧に、その柵さえ華雄達は外してくれたようだが。この突撃により、落ち着き始めていた敵の後方は再び大混乱する事となる。宣高達の部隊の攻撃を避けようと先ほど上がってきた渭水に飛び込もうとする者が多数いて、渭水にまだ残っていた部隊ともみ合い大混乱が起きている。そこに私達は継続して投射を繰り返す。

しばらくすると、待ちくたびれたと言わんばかりに伯符殿の部隊が柵の外に出て華雄隊に打ちかかり始めた。結果的に宣高達と伯符殿の部隊で挟み撃ちの体勢となった。私は味方、特に伯符殿の部隊への誤射を避けるために、慌てて投石の停止を部隊に命じる。ほぼ同じタイミングで藍里と公瑾殿の部隊からも射撃の手が止まる。

(もう戦の流れは揺るがないだろうに、無茶をするなあ)

伯符殿のその行動に心から呆れてしまう。今頃、公瑾殿も頭を抱えている事だろう。そんな事を考えながらも、私は投降する敵兵を受け入れるために、陣地の前へ部隊を移動させる指示を下した。伯符殿達

が飛び出して乱戦になってしまった以上、もう投石を行う事はできない。部隊がこの場に留まる意味は無くなっていた。

さて、何故宣高達の部隊が敵の後方に回り込む事ができたかと言うと、下流にある渡河地点を使ったからだ。ただし浅瀬ではなく、私たちの手で橋を架けたのだ。元々私達徐州兵は土木作業に従事している事もあり、本職の大工並みの技術力を持っている。後は作り方を知っている者がいれば、そう難しい事ではないのだ。そして作り方に關して、私には参考にできるうってつけの人物に心当たりがあった。この時代よりずっと以前に渭水よりもずっと川幅が広い場所へ橋を掛けてみせた人物。その名はガイウス・ユリウス・カエサル。王政、共和制、帝政、どの時代のローマの統治者の中でも最も優秀だったと言われる人物だ。彼は十日間でライン河へ橋を掛けて、ゲルマニア領へ雪崩れ込んでいる。テレビの特集でこれの再現をやっているのを前世で見た事があり、作り方について記憶していたのだ。ローマと中華の違いはあれど、今から二百年以上前の技術力で作ることが出来た物なのだ。作り方さえ知っていれば、今の技術力で作る事ができない道理はない。まして、私達は徐州内において、何度も架橋をした経験も持つのだ。その経験を応用して、大規模にすれば良いだけなのだから。

……まあ三国時代の中華において、ローマ軍団の架橋の仕方など知っているのはおそらく未来知識を持つ私くらいだろう。まさか橋を自力で掛けて後方からの奇襲を実現されるとは夢にも思わないはずだ。

これが伯符殿達に前線陣地で敵兵の目を引き付けてもらってまでやりたかったもう一つの事だ。あまりにも大掛かりであるため、偵察をしつかりと出していれば対岸からでも橋を掛けようとしている事ははつきりと確認できてしまう。それでは困るので、偵察を出さずとも見える位置に前線陣地を用意して、戦えるようにしたのだ。予想通り、華雄は偵察を出す事を止めて、囮とは知らずに全力で前線陣地の攻撃を始めて、架橋が終わるまでの時間を稼ぐ事ができた。

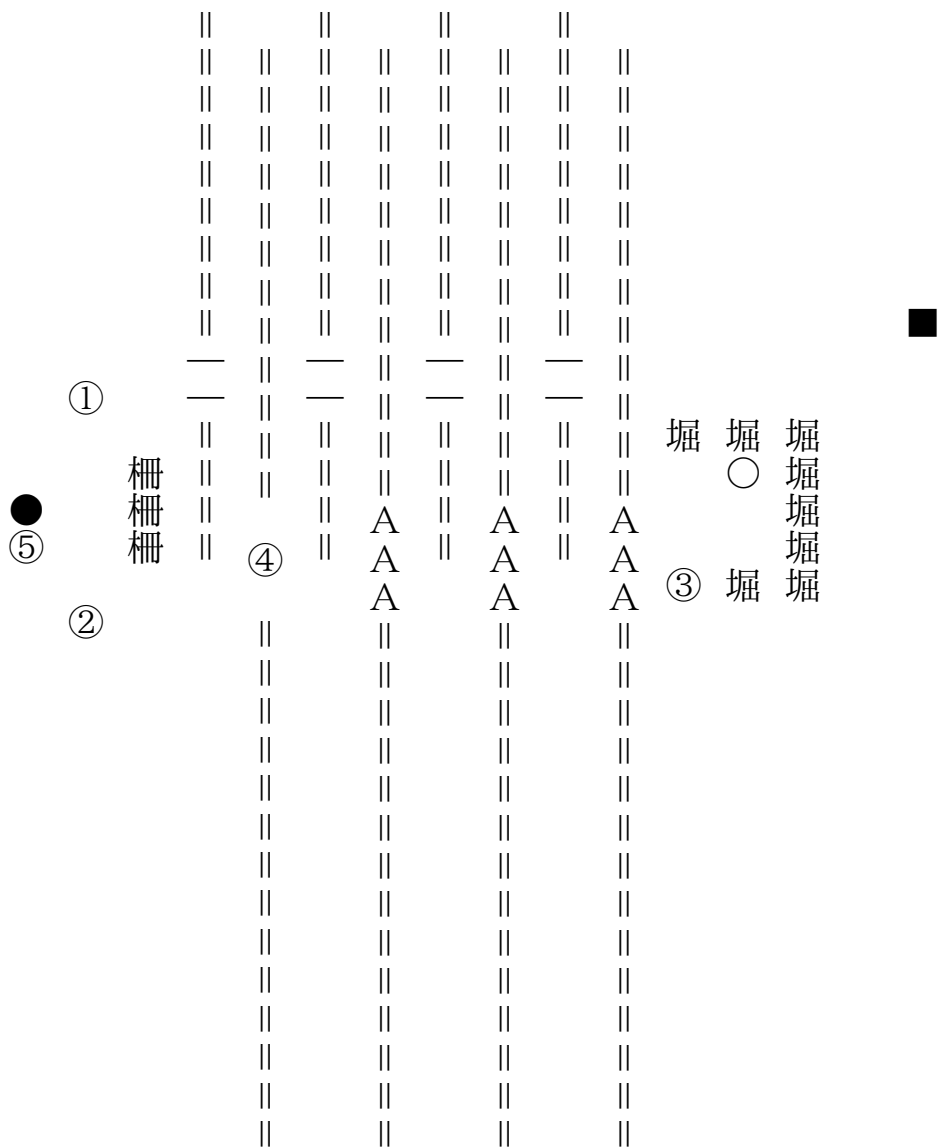
河の中ほどに仕掛けた瓶を使った落とし穴と橋を使つての奇襲攻

撃。この二つを使えば敵を大混乱に陥れる事ができる。そう予測してこの策を立てたのだが、想像以上に上手く行ったようだ。これで私達の勝ちの目は動かない。

戦闘推移図③：臧覇・陳登隊による奇襲攻撃時

西

東



|| || : 渭水 (幅が狭い部分は浅瀬)

--- : 橋

■ : 華雄隊野営

○ : 討伐軍野営跡 (柵は華雄隊により撤去済み)

● : 討伐軍野営

▲ : 小城 (韓遂隊 歩兵一〇〇〇〇で籠城中)

① 糜芳隊 (投石兵 一五〇〇) : 孫策隊が前に出たため投石を中止

② 藍里隊 (投石兵 一五〇〇) : 孫策隊が前に出たため投石を中止

③ 臧覇・陳登隊 (騎兵 二五〇〇) : 東側に掛けた橋を渡り後方から

突撃を開始

④孫策隊（歩兵 四〇〇〇）：我慢できずに突撃開始

⑤周瑜隊（弓兵 一〇〇〇）：孫策隊が前に出たため弓射を中止

A華雄隊（騎兵 五〇〇〇弱）：後方からの臧覇・陳登隊からの攻撃で大混乱

それからすぐ、こちらの目論み通りに敵兵達は降伏してきた。半数以上の味方が討ち取られた状態で、鬼神のように暴れまわる孫策隊を目の当たりにしたのだ。寒さとは別の理由で震えながらの投降だった。……下手すれば将来的に私達があれを相手する可能性については今は黙殺する。だって怖いし。

対岸の兵達も素直に臧覇・元龍隊へ投降し、仲良く装備を取り上げて両手を縛らせてもらった。結局捕虜となった敵兵の数は二千強。約七割以上の兵が河の藻屑に消えたか、そのまま逃亡した事になる。しかし、既に華雄隊の陣地も臧覇達の手によって焼き払っている。逃亡した兵達が再び終結し、組織的な反抗を行う事は不可能だろう。事實上、これでこの反乱は詰みだ。後は、小城から韓遂達を退去させて、講和を結んで終戦となるだろう。

やれやれ、何とかなかったかと心中で呟きながら、私は伝令兵を招き寄せる。小城を包囲している州牧様達へ、騎兵隊を全滅させた事を伝えるためだ。後の行動の判断は向こうで下すだろう。

伝令を走らせた後、公瑾殿と合流し、今だ暴れ足りなさそうな伯符殿を死ぬ気で止める事になった。それが今回の戦いで一番疲れる理由となったのは言うまでもない。

第二十四話 C a s s a n d r a — 戦後処理 —

さて、渭水での戦いを終えて数時間後、ようやく朝日が昇ってきた。現在私は戦後の処理の大半を終えて自分の陣幕に居る。目の前には、服を脱いで毛布だけを羽織って、震えている短髪の少女。その格好だけで犯罪臭が半端無い上、涙目で上目使いに睨みつけられている辺り、事件性がさらに増している。第三者としてこういう場面に出くわしたら、私とて迷う事無く男の方を捕らえようと動くはずだ。お巡りさん、私です。

「ええと、伯約殿。 特に私から何かするつもりは無いんだけど……」
「……」

その私からの呼び掛けに対して、彼女はじりじりとますます私から距離を取った。その様子を見て、私は深く溜め息を吐いて天を仰いだ。

私の呼びかけた字から分かるように、短髪の少女の正体は姜伯約殿だ。服を脱いでいるのは別段色艶めいた話ではなく渭水の水で服が濡れたので、脱いで乾かしているだけだ。わざわざそんなはしたない格好を晒してまで私の前に居る理由は、色々と不幸な行き違いがあったからだ。つまり、事故。裸毛布などという、一歩間違えれば襲つてしまいそうな扇情的な格好は、私が要求して伯約殿が応えた結果ではない。……まあ、伯約殿は凜としたという表現がふさわしい美少女なので、この状況を役得と思っている部分もないわけではないのだが。

それはさておき
閑話休題。

どうやら伯約殿はあの戦で、騎兵として先頭を駆けていたらしく、最初に落とし穴に嵌って馬から投げ出されたらしい。そのまま渭水に流され、少し離れた辺りの川岸に引つ掛かっていたらしい。これはある意味運が良いだろう。あの地点で立ち往生していたら、矢か石にぶつかる事はほぼ確定的だったのだから。まあ、本人はそれを幸運とはかけらも思っていないようだが。

話を戻そう。伯約殿は川の中ほどでの惨状を見て、そのまま離れた場所で戦況を見守る事に決めたらしい。そして、混乱から立ち直る事

ができなかった反乱軍が宣高達の騎兵隊に後方から襲いかかられるのを見て、戦況が決した事を悟ったそう。そして身を起こすと、そのまま迷う事無く真つ先に私達の陣地へ投降してきたらしい。既に私や公瑾殿に顔を繋いでいるという事もあり、無下には扱われまいという計算もあつたようだ。

しかし、そこで問題が発生した。自分が濡れ鼠になっているという事をあまり深く考えずに、服が体に張り付いて体の線が確認できる状態である事を失念していたらしい。そこは成長途上といえど女の子。すぐに性別が兵達にばれてしまったらしい。

そしてそのまま私や公瑾殿の元へ案内される前に、戦の熱で浮かされたままだった兵達の慰み者にされかけているところで、伯符殿の事をやつとの思いで止めた私と孫家の二人がたまたま通りがかったのだ。今回の戦いで貴重な情報をもたらしてくれた伯約殿を放つておくという選択はなく、私達が伯約殿の身柄を預かる事を宣言しここまで連れてきたというわけだ。

ちなみに伯約殿に乱暴をしようとしていたのは孫家の兵達だったようで、今は伯符殿と模擬戦を演じているはずだ。なんでも、伯符殿は血を見ると体が昂ぶる性質らしく、まだ火照つたままの体を発散するために鍛錬の相手を務めさせられている。『元気が有り余っているみたいだし、私が相手してあげるわ』と言っていたなあ。言い方は可愛らしいのに、冷や汗しか出なかった。あの状態の伯符殿と鍛錬か……良くて大怪我だよなあ。まあ、なんとか生きろ。

そんな一時の欲望で身を持ち崩す事になった兵達の事は置いておき、目の前に居る伯約殿の方へ意識を戻す。私と公瑾殿で、流石に人目に付く場所に置いておくのは不味いという事で、一旦私の陣幕に連れて来たのだ。同性だし、伯符殿か公瑾殿の陣幕の方が適していると思ひ提案したのだが、なぜか公瑾殿に拒否された。理由を聞くと気まぐすそうに目を逸らされた。なんか見られると都合が悪い物でも有るのかな？まあ、拒否されてしまった以上仕方がないので、伯約殿を私の陣幕に招いた。

藍里は私の代わりに兵達の被害や鹵獲した馬を確認してもらって

いるので、陣幕にはいない。私が伯約殿を止めるために持ち場を離れたから、代理としてお願いしたのだ。義妹といえど勝手に人の、それも女性の陣幕に入るのも良くないので、確認が終わり次第着替えを持って来るよう公瑾殿には藍里へ伝えに行ってもらい、私は陣幕に残り伯約殿の様子を見る事に決まった。男に襲われかけていた訳だし、女性の公瑾殿の方が側にいるのに適しているのだろうが、藍里に伝え終えた後、伯符殿がやりすぎないに見張らなくてはならないらしい。確かにあの狼の毛皮が似合いそうな狂戦士っぷりを見ると、兵達が殺される可能性も考えられる。公瑾殿、胃に穴が開かなければ良いけど。あの様子だと、三国志で周瑜が早死にした理由も孫策がかけた心労のせいじゃないかと疑いたくなってくる。

その後陣幕に入るとすぐ、私はまだ目の前に居るにも関わらず服を脱ごうとし始めた伯約殿にぎよつとして、慌てて私は席を外した。流石に恋人や夫婦の仲でもない相手が、服を脱ぐ様をまじまじと見つめ続けるのはよろしくない。というか、少しは異性の目の前である事に気にしようよ。

これは後日知った事なのだが、伯約殿は性知識は持っている物の、どうも自分の行動で相手の情念がどう動くのかについては無頓着な性質らしい。それを示す例として、川で水浴びをしている時に自分が物陰から覗かれている事に気づいていたのだが、川岸に置きっぱなしの荷物に手を付けるでもなし、近づいてくる様子も無かったので、放っておく事が多々あったらしい。……近場に住んでいる少年達にとっては桃源郷に等しい光景といったところか？それを知った母君は、玉にも等しい我が子が惜しげもなく裸体を人目に晒している事に頭を抱えて、人前で水浴びをしたりしないように叱ったらしい。そこまで聞いた時、『水浴びの時だけに限らず、夫や夫婦になる約束をしている男性以外の前で肌を晒さないよう、とすべきだったんじゃない？』と私はツツコミを入れてしまった。それを言った時に母君が、はっと息を飲むのを見た瞬間、伯約殿のうっかかりが母譲りだという事を確信した。

まあ話を戻すでしょう。すべて濡れた服を脱ぎ終えて、全裸になっ

た状態で私に陣幕に入るように声をかけた伯約殿に対して、極力その姿を見ないように気を付けながら私の寝台まで歩き、毛布を投げつけて自分の体を隠すように言った。不思議そうにしながらも、自分の体へ毛布を巻き付けた伯約殿に対して、説教を開始した。

いったいどういふつもりなのか、異性の前でみだりに肌を晒そうとするな、そのまま襲おうとする輩もいるのだから気を付けなさい、と。そう懇々こんこんと言いかせ続けると、ようやく理解してもらえた。……今度は私に襲われるんじゃないかと考えたのか、涙目になり私とじりじりと距離を離して今に至る。いや、何もしないって。

軽く溜め息を吐き、藍里が来る前にある程度話を進めてしまおうと決めた。

「とりあえず、このまま睨みあつていても埒があかないから、情報交換をさせてくれない？」

「……ふう。確かにこのままでは時間を無駄にするだけですな。」

「……変な事しませんよね？」

「しません！」

そこは強く否定しておく。ひとまず、話はさせてもらえるようなので、知りたい事を聞いてしまう事にする。

「それじゃ、まずは華雄について。何処に行ったのか知らない？」

討ち取る事はできなかつたし、降伏した中にも見当たらなかつたんだけど」

「ああ、それでしたら……」

私が言ったように、残念ながら敵将の華雄は討ち果たす事はできなかった。伯約殿の話では、宣高達が突撃するまでのほんのわずかな間に、混乱から抜け出して対岸へ到着していたたとの事だ。おそらく、突撃が始まったのを見て、敗北を悟り逃げていったのではないかとの事だ。流石にその後どこに行つたかまでは伯約殿も知らなかつた。まあおそらく冀城など、ここからほどほどに近くて、勢力圏内に組み込まれている場所まで落ち延びようとしているのだろう。追っ手は宣高達が出しただろうけど、上手く捕らえる事ができただろうか。「それじゃあ、次。今後この反乱がどう推移していくのかについて

かな」

「はい。私はこの渭水での敗戦を受けて、反乱軍が窮地に陥ると考えていますが……」

私はその言葉に頷く。反乱軍の戦力は西涼の騎兵による所が大きかった。それが今回の戦闘で騎兵を大きく削られたのだ。戦力均衡は崩れたと思ってもいい。

「伯約殿のいうとおり、両軍の戦力に差ができた以上今回の戦はほぼ終わりだろうね。戦っても勝てなくなっただけからは、多分小城の韓遂は停戦を申し込んでくるんじゃないかな」

「降伏、ではなく停戦なのですか？」

「まあ、事実上の降伏なだけだ。占領地に住んでいる住人達を人質にされれば、こちらもある程度譲歩しなくちゃいけないからなあ。小城や、冀県なんかの占領地を開放する事を条件に小城から退城させるのが関の山じゃないかな。馬州牧の軍が援軍に来ちゃうところらとしても不利になるし、有利な条件で講和を結べるうちに結ぶべきだと思う。そもそも、韓遂本人が本当に小城に入っているかも分からないしね」

「なるほど……。確かにここで講和をしないと反乱が長期化してしまうのですか。なので、反乱を鎮圧できたという功績のみで手打ちにする」と

「そういう事。領地近くでの反乱だったら私達も長期化させてでも殲滅させる必要があるんだろうけど、領地から遠い場所から出征しているから兵達の士気を保つのが難しいんだよ。当事者意識が薄いからね。私達の立場からすると早めに終わらせなきゃいけないから、無難な終わらせ方を選ぶよ。それに、討伐軍の総大将も講和を積極的にしようとするだろうしね」

「えっとう？ 講和に反対する総大将を遠隔地から出兵している全員で説得するというのを想像していたのですが……。総大将も講和に賛成するのですか？」

ふむ。伯約殿はあの姜維だけあって流石に頭が回るようだが、この辺の感覚は分からないのか。考えてみれば、三国志でも姜維は宮中政

治に泣かされていたな。伯約殿がこの辺りに頭が回らないのも当然かもしれない。

「確かに戦闘を続行すれば戦果を拡大する事は難しくないんだけどね。ただ、そうするよりも雒陽を留守にする方が司空にとってはずい」

「政務が滞るからですか？」

「いや、気がつかないうちに追い落とされるのが怖いからだね」

史実で張温は、この時期に朝廷で専横を極めていた宦官勢力と接近していたはずだ。この世界でも同様であるならば、大將軍何進と十常侍達の間で緊張が高まっている現在、大將軍が息のかかった人物を三公に就けるための工作を始める可能性は十分考えられる。その時にまず標的として狙われるのは、雒陽を留守にしている自分だという危機感を持つているだろう。その程度の政治バランスを考えることができないなら、魑魅魍魎く伏魔殿で三公まで成り上がる事などできない。仮に史実とは違って何進に接近している、もしくはどちらにも与していない場合であっても、追い落とそうと企む人物が変わるだけであり、その座が脅かされる事には違いはないだろう。

「と、まあそんなわけで張司空としてはほどほどの戦果を上げたから、さっさと雒陽に帰りたいと思うはずなんだよ」

「……はあ。反乱の鎮圧よりも保身の方が重要なわけですか。韓遂が乱を起こしたくなる気持ちも分からないではないですね」

そう苦々しい口調で言葉を作る伯約殿に苦笑いを返す。一応忠告しておく事にする。

「思うのは自由だけど、あまり口に出して言わないようにね。下手すればそれだけで不敬になりかねないし」

事なかれ主義と言われそうだが、口に出しても変えられない、むしろ面倒事を呼び込むような言葉は慎んだ方が良い。こんな陰口みたいな事で罰せられてもしようがないんだから。

「義兄さん、居ますか？」

そこまで話した時に、藍里が陣幕の外から声をかけてきた。どうやら伯約殿の着替えが到着したらしい。外に出て藍里を出迎える。簡

単に伯約殿の状況（全裸毛布）を説明し、私の代わりに陣幕に入ってもらい伯約殿に着替えを手渡してもらおう。

……伯約殿の今の格好が、全裸に毛布を纏っているだけと説明した時の藍里の目が恐ろしかった。人を殺せそうな視線という物を初めて体感した。できればしたくなかったが。

その後、懸命に伯約殿には指一本触れていない事を説明し続け、何とか半信半疑ながら信じてもらえた。伯約殿本人にも確認すると言っていたので、私はそのまま陣幕の外で待つ。それから十五分ほど待ち、藍里から入っても良いと声がかかったので陣幕の中に戻る。藍里には疑った事を謝られたが、同じ状況だったら私もそう判断するだろうし、気にする事は無いと伝えた。

毛布を取り去った伯約殿は現在藍里の服に着替えている。が、スカートを履き慣れていないようで、足元がスースーすると溢していた。藍里はスカート姿でいる事が多く、着替えとして持ってきた服もすべてスカートとの事だ。伯約殿に自分の服が乾くまで我慢してもらうしかないだろう。

ちなみに伯約殿は典型的な西涼の人らしく馬に乗る機会が多いため、ズボン姿で過ごす事が多いそうだ。まあ、馬に跨がるならその選択肢が正しいだろう。藍里や姉さん達などの私と親しい女性陣も馬に乗るときはスカートの下にレギンスやショートパンツなどを穿いて下着が見えないようにしている。まあ、そりゃそうだよな。ミニスカート姿で馬に跨がったりしたらパンチラどころかもろに見えてしまうのだから。

……この時の私は涼州馬氏のご息女が、普通に生活していても下着が見えてしまいそうなほど短いミニスカートのまま馬に乗る事をまだ知らなかった。痴女というわけでもないだろうに、何であんな格好のまま馬に乗るんだよ……。

その後は、私たちが今回の戦いで取った戦術について簡単に説明した。いや、伯約殿？偵察をまめに出されると瓦解する戦術っていうのは十分理解しているから。わざわざ顔で言わなくても良いよ？

そう口にするると伯約殿は頬を膨らませてしまった。とりあえず手

を伸ばして頬を押し潰すと、何をするのかと猛抗議された。いや、どっかのはわ子さんと同じ芸風だったものでつい。

機嫌を損ねてしまった伯約殿を宥めてようやく話ができる状態に戻ったので、私は本題に入る事にした。

「伯約殿はこれからどうするつもり？」

まずはそう口にして伯約殿の意思を確認する。

「……？ どうするとは？ 冀城に戻って平時の生活に戻るつもりですが」

「そっか……」

んー、どうしようかな。軽く罪悪感が湧いてくるが、説明しなくては伯約殿に身の危険が降りかかるかもしれない。

「伯約殿を策の一部に利用した私が言う事ではないかもしれないけど、それは危険を伴うからやめた方が良くもしいれない」

「危険、ですか？」

伯約殿は頭にハテナをたくさん浮かべているような顔をしている。

まあ、突然言われれば戸惑うような事であるので当然か。

「私の考慮が足りてなかったのが原因で申し訳ないんだけど、伯約殿は大勢の前で追撃する事を示唆したんでしょ？ 要らん逆恨みをさされてる可能性無い？」

基本的に軍隊において、作戦の責任は決定を下した指揮官が負う事になる。例え他の誰かが考えた作戦であったとしてもだ。しかし今回の場合は指揮官たる華雄が敗走して不在となっている。華雄の近くにあつた幕僚達、彼らに従った兵士達の怒りや恨みが、敗北の原因となつた追撃を提案した伯約殿へ向く事は想像に難くない。

「義兄さん、それを分かった上でお願いしていたんじゃないのですか？」

「まさか幕僚全員の前で言うとは思っていなかったっていうのが本音かな。陣地を占領した後にも華雄に囁いてくれれば良いやつて思ってたから」

まあ、これは完全に私の失策だ。伯約殿に詰なられるなら甘んじて受けよう。

しかし予想外にも伯約殿は私の事を責めようとはしなかった。

「埋伏の毒となる事を決めたとき、味方に恨みを買う可能性は考えておりましたし、命を捨てる覚悟もしておりましたので」

だから、私の策に従って恨みを買う事になっても気にはしないとの事だ。

「それに最悪の場合には、華雄の寝首を搔く事も覚悟していました。仮にそうなった場合、成功失敗に関わらず私は死んでいたでしょう。それがこうして五体満足に生きているのですから、文句を言うのは筋違いかと。まあ文句を言うとするならば、この寒空の下で川で泳ぐ羽目になった事ですね」

最後の一言を冗談めかして言った後、伯約殿は口を閉じた。

そう言ってもらえるのはありがたいけど、こっちの都合に巻き込んだ事も事実だしなあ。何かしらの支援をする必要があるだろう。とりあえず生活が安定するまで金銭の援助が最優先かな。一応、州牧様には雒陽に伝つたがあるはずだから、住む場所や仕事もある程度の希望を入れる事はできるだろう。いくらなんでも、いきなり春をひき鬻ぐような事態には陥らないはずだ。

その事を説明し、改めてどうするかを問いかける。

「あんまり考えたくは無い事なんですけど、矛先が家族に向く事も考えられるから、可能であれば冀州から離れた方が良いと思う。雒陽辺りなら問題なく生活する事ができるように取り計らえるよ。私としては徐州に仕えてくれたら嬉しいんだけど」

「……私だけならともかく、母を巻き込むのは避けたいですね」

家族の安全確保は大事だからねえ。私も同じ立場になったら姉さん達連れて逃げ出すだろう。さらに、孝心が無いと要らぬ謗りを受けかねない。

伯約殿はしばらく目を閉じて考えた後、目を開き言葉を作った。

「申し出はありがたいのですが……」

「ん。そっか」

どうやら伯約殿に振られてしまったようだ。斜陽の時を迎えていた蜀であるとはいえ、曲がりなりにも一国の大將軍を務める事になる

人物だ。その才は十分水際立っている。配下へ引き抜く事ができた
ら嬉しかったんだけど。

そこで今まで無言だった藍里が口を開いた。

「しかし、冀城に戻って大丈夫なのですか？ 先ほど義兄さんが言っ
ていたように変なちよつかい出されたりしませんか？」

「それに関しては問題無いかと。冀県の丞、趙昂様に母ともども懇
意にさせて頂いておりますので」

この時代、有力者に庇護される事は大きな意味を持つ。庇護者の
身分保証と安全保障が最大のメリットだろう。

犯罪歴のデータベースなど当然無いので、既に評価を得ている人間
が『この人の身分は私が保証します』という事は重要だった。茂才や
孝廉もそういう保証による推挙なのだから、信用されない人間は出世
をする事ができない。科挙が始まればその限りではないのだが……。

安全保障に関しては、報復を匂わせる事で庇護者が狙われる事を
抑止するという事だ。より上位の存在から引き渡しを命じられた場
合はその限りではないが、冀県の丞が後ろ楯となるならば、州牧辺り
から命じられない限りは引き渡しに応じる必要はないだろう。唯一
要求する可能性のある馬州牧は表立っては韓遂と繋がりが無いのだ
から、一人の若者^ぶごときにこだわって自分の身を危険に晒す可能性は
極めて低いと言えるだろう。

「それならよほどの事がなければ安全かな？ ただ、冀城に戻るの
もう少し待ってくれる？ 多分討伐軍の中から隴西郡へ使者を出す
だろうから、途中まで一緒に行けば安全だと思うよ」

私の提案に、願ってもない事です、と伯約殿は頷いた。

「あと、糜家^{うち}の商会の行商が長安辺りまでは出張っているはずだから、
なにか私に伝えたい事があるようだったら彼らに手紙を預けて。

そうすれば私まで届くから」

「ええ、必要が出来ましたらそのように致します」

「けど、遠くに住んでいる義兄さんの助けを借りなくてはいけない状
況って起きないに越した事はないですよね」

……なんか藍里さん不機嫌？まるで釘を刺すように今の言葉を口

にした気がする。あまり表情に感情の出る子じゃないから、合ってるか分からないけど。

まあそれは後で聞いてみれば良いか。ひとまず伯約殿と話してきた事は話し終えたので、冀県に戻るまでの間、藍里の陣幕で起居するようお願いする。藍里の護衛役もお願いできるし、一石二鳥だろう。その後二人は挨拶もそこそこに私の陣幕から出ていった。夜戦の直後だ。そろそろ眠気も限界なのだろう。私も眠くてしょうがないので、終わらせなければいけない仕事をさっさと終わらせて眠る事にしよう。

そう考えて、私は今回の被害報告をまとめた竹簡の作成を始めた。それから数日後。私が予想していたように韓遂軍と停戦する事が決まった。停戦の条件は、韓遂軍が今までに占領してきた領地の解放と小城からの退去。討伐軍は退去して韓遂軍が各々の領地に戻るまでは手を出さない事。ただし、戻る際に略奪を働いた兵は法に則り処断しても構わないとしている。

後に渭水の戦いと呼ばれる会戦は、こうして幕を閉じた。この戦いは、西涼で大規模な反乱は起きてしまったが、まだ漢王朝にはそれを鎮める事ができる力がある事を諸侯に示した戦いとして、後年歴史書に名を刻む事になる。

しかし同時に、朝廷だけの力では解決できず、諸侯の力を借りなくては反乱を終わらせる事ができなかった事も同時に示してしまった。朝廷の力が弱まっている事を察した下克上を夢見る者達により、この後数年間は反乱が中華の至るところで頻発する事となる。

余談だが、私は三国志に記された歴史からその事を予測し、徐州に戻りすぐに朝廷へ注意を促す上奏文を州牧様から出してもらった。しかし、信用する重臣はほぼ皆無だったそうだ。

冷静に考えてみれば、自分達の足元が崩れるような不吉な予言は無視されて当然か。得てして人は見たい物しか見ようとはしないのだから。

イーリアスの王女もこんな気分だったのだろうか。なんともやるせない気持ちになりながらも、その日は政務に励む事になるのだっ

た。

—おまけ—

被害報告書と捕虜の数と鹵獲した軍馬の数を記した報告書を作り終えて、ようやく私も眠りにつけた。

しかし、それからほとんど時間が経たないうちに起こされる事となった。

私の陣幕に訪れたのは先程別れたばかりの二人、藍里と伯約殿だ。眠りに落ちた矢先、二人が陣幕に飛び込んできたため敵襲かと思い飛び起きたのだ。声に險が混ざってしまうのも仕様がないだらう。

しかし、二人とも眠る直前のように薄着になっている。この季節に屋外でする格好としては適さないとと言えるだろう。二人の未成熟な体の線が確認できるのが目の毒だ。できるだけ二人の姿を直視しないように気を付けながら、二人へ質問を投げ掛ける。

「それで、わざわざ寝入り端を起こしてまでどうしたよ？」

「いえ、大した事ではないのですが、私たちには退引のっぴきならない事情があります」

「子瑜殿の陣幕に居られなくなってしまったのです」

「ご迷惑とは存じますが、義兄さんの陣幕で休ませて頂く事はできないでしょうか」

代わる代わる口にする二人。やたらと連携良いけど、そんなに仲良くなれたのか？

二人の様子を見ると頬を紅潮させて、瞳が潤み、居心地が悪そうに身じろぎをしている。

「……まあいいや。とりあえずその事情を話して。それを聞かないと判断がつかない」

そう私が口にするると二人とも口を閉ざし、互いに目配せをし始めた。察するに、お前が話せとお互いに牽制しあっている状態か？

しばらくその状態が続いて、私がいい加減痺れを切らして声をかけようとした時、藍里が気が重そうに言葉を作り始めた。

「えつとですね。私の陣幕って伯符さんや公瑾さんの隣に立てているじゃないですか」

「まあ、そうだね」

これは単純に藍里の身の安全を守るためだ。武に関して私より弱い藍里では、自分の身を守る事も覚束ないので、何かあった際にすぐ二人が駆けつけられるように守ってあげてくれないかとお願ひしたのだ。

「それで、私達も眠りにつこうと横になっている時に、公瑾さんの陣幕から声が聞こえ始めたんです」

「声？」

「はい。うなされているような、苦しんでいるような、そんな声です」

んー。事実だったら急いで看護とかしなきゃいけないんだろうけど……。この二人が放り出してここに駆け込んで来た以上、大した事はないのかな？

「ふーん。それで？」

話の続きを促すと二人で顔を見合わせ、意を決したように二人一緒に頷いてから私に向き直って口を開いた。

「何か病を得るなどして苦しんでいるのではないかと、公瑾殿の陣幕に入り様子を見ようとしたのですが……」

「えっと、そのですね……ふ、服を脱いだ伯符殿が、公瑾殿をく、組み敷いてまして……」

「えっと、その……。ま、ま、まぐわ交合まぐわってしまして……」

その言葉を聞いた瞬間固まってしまった。

「それで、私たちが入った事に気がついた伯符殿が私達の方を振り向いた後」

『『あなた達も一緒にどう？』とにやりと笑いながら……』

「ああ、うん。状況分かったしもう良いや。それでその格好のまま逃げてきたのね、っと」

そこまで言った後、二人へ向けて今まで私が使っていた毛布(二枚)を投げる。

よほど焦っていたのだろう。二人して自分達の格好に今さら気がついたようだった。そのまま毛布を使って自分の体を隠した。

さて、戦が終わったからといって気を抜いている、孫家の二人への
お説教は明日以降にする事にしよう。というか、断金の交わりつてそ
ういう関係の事を言うのか？まあ、この世界には既に男同士の恋愛小
説も存在しているみたいだし、同性愛には寛容なのかもしれないな。
とりあえずはこの二人を休ませる事を考えなくては。

「それじゃ、私の陣幕を使って良いや」

そう告げると、二人はあからさまにほっとした表情を浮かべた。

「はい、ありがとうございます。 私たちは地面で寝ますので、義兄さ
んが寝台を……つてどちらに行かれるのですか？」

「いや、普通に考えて男女が同じ陣幕に寝るのはまずいでしょ？ 血
の繋がった兄妹じゃないんだし。 宣高の陣幕で眠らせてもらおうよ」

「いえ！ 義兄さんを追い出すつもりは!?! つて、伯約さん！ 何事
も無いように寝台で横になつてはいけません！」

「zzzz……zzzz」

「すっかり寝入ってるね。 藍里も早く寝なよー」

「いえ、ですから義兄さんもここで！ ああ、もう！ 話を聞いてくだ
さいー！」

私も眠気が限界なんだよ。そう叫んでいる藍里を置いて、私は宣高
の陣幕へ足を進めるのだった。

第二十五話 Life in a Northern
Town — 隴西郡① —

さて、無事に韓遂軍との停戦が決まった。なので、義兄さんが率いていた別動隊も包囲陣を敷いていた本隊に合流する事になった。本当は宣高殿が率いていたというべきなのだろうが、実質率いていたのが義兄さんであるのは周知の事実なので、あえて声高く義兄さんが率いていたと口に出す事にする。他意はある。

今後の行動は、一部の部隊は除いて洛陽へ帰還し、朝廷へ顛末を伝える手はずとなっている。その一部の部隊は、小城を退去した韓遂軍が略奪を働こうとしないか、隴西郡まで監視する役目を請け負う事になる。隴西郡までなのは、あまり深く進み過ぎると兵糧の心配や、仮に韓遂が襲いかかってきた時に孤立無援の状態で戦う必要が出てくるからだ。それから、隴西郡で馬州牧の抑えをしてくれていた董擢殿へ、停戦が成った事を伝える役目も含む。

「それで、その送り狼の役を私が？」

「うむ。本来ならば官職を持つている者が負うべき役目のだが、儂らは朝廷への報告を優先させねばならない。臧県尉では韓遂に挑発されればそのまま再度戦端を開きかねぬしな」

「基本的に後先考えない突撃思考ですからね」

「子方うっさい。あー、細かい事考えるの苦手なんで」

その役目を義兄さんに任せると、陶州牧様は仰っている。この場にいるのは徐州から討伐軍に参加している方々となる。

この場にいる人間で正式に官職を持つているのは、州牧様、陳太守様、宣高さんとなる。陶州牧と陳太守のお二人は洛陽で帝に拝謁し、今回の件を報告する必要があるとの事だ。主な報告者は張司空なのであるが、質疑応答がある場合に備えて、州牧様と陳太守、孫文台様も側に待てる事になるようだ。

そうになると、残った面々でその役目ができそうな人間は限られる。まずは県尉である宣高さんが筆頭候補になるのだが、自他共に認める

武断派なので、挑発に乗ってはいけないこういう役割は向かない。

文台様の嫡子である伯符さんも名前が上がるのだが、先日戦が終わった直後に公瑾さんと睦み合っていたのが文台様の耳に入り、大目玉を食らったそう。性根を叩き直すと宣言し、しばらくは文台様の監視の元で行動が制限されるので役目を果たす事はできない。その事に不満を唱えて、文台様と大喧嘩していたのが昨日だ。公瑾さんは完全にとぼちちりを受けた形なので、少し可哀想だが。

残った人の中では、州牧の主簿を務めている義兄さんが一番高位となるため、役目を受けるように要請されたのだ。

ちなみに、送り狼は夜に女性を家まで送る途中や、家まで送った後に家の中まで入り込みその女性を手込めにするような輩の事だっただと思うのですが。あんまり品が無い言い方だと思います、義兄さん。「やれと言うならやりますが。官位が無くても問題ないのですか？」

「まあ、特例措置のような物だな。陛下をお待たせする方がまずいという判断だ。今回の件が終わるまでは県令相当の権限が与えられると司空から言質を取っている。だからと言って問題行動は控えるように」

「流石にそこは空気読みますよ」

元龍さんが目付きを険しくしているのは、義兄さんと宣高さんが州牧様へ軽い口調で話しているからだろうか。州牧様が気にされていないので、私達が気にする必要は無いと思うのですが。

「それでは、糜子方。兵二五〇〇を率いて隴西郡へ向かえ。くれぐれも反乱軍とは諍いを起こさぬよう」

「御意。謹んで拜命致します」

そうやって義兄さんは拝礼を州牧様へ返した。

その後も義兄さんは州牧様と話があるという事だったので、先に陣幕を出て出兵の準備を整え始める。私は当然義兄さんに付いていく。副官ですし。

冀県までは伯約さんも一緒に行く事になる。私の陣幕ですつと身を隠していると、いい加減気が滅入っているだろうから、準備を手

伝ってもらおうか。今まで男装をしていたので、目一杯女の子らしい格好をすれば、誰も伯約さん本人とは気がつかないだろう。

今後の予定に思いを馳せながら、私は自分の陣幕へ戻った。

それから丸一日立って、私たちは隴西郡へ旅立った。前方に見据えるのは韓遂軍。道を外れたり、道中の町や村で略奪を働かないように睨みを効かせる。

「とは言っても、向こうからも戦端を開くつもりは無いと思うんだよね」

そう口にしたのは、私の敬愛する義兄さん。一日目の行軍は問題無く終わり、義兄さんの陣幕でお茶を飲みながら雑談をしている時に、義兄さんが話の流れで発言したのだ。

私も同感だ。わざわざ私たちに襲いかかってくる可能性は低いと考えている。

「今回の戦いは、反乱軍の敗北で終わっていますからね。停戦を一方向的に破ってしまうと、今度こそ本腰入れた殲滅戦が行われる事になりますし」

「まあ、そうなるだろうねえ」

私が言った言葉に義兄さんは頷く。

「それでも、このまま終わるなら、と自棄になって襲ってくる可能性もあり得るのでは？」

「その可能性も捨てきれないけどね。けど、そうするなら小城で玉砕とかしてるんじゃない？」

伯約さんが放った質問に、義兄さんが即座に言葉を返す。

伯約さんは、まだ冀城には戻らずに私たちと行動を共にしている。韓遂の後を着いていく事を優先したために、冀県に向かう事ができないのだ。申し訳ないが、隴西郡に着いてから引き返す際に冀県に寄る事になっている。本人も快諾しているので、問題は特に無いのだが遠回りをさせているようで少し心苦しい。

ちなみに今の伯約さんは、私の服を着て一目で女の子と分かるような格好となっている。本人は動きづらい格好をしたくないと拒否しようとしていたが、変装のためとごり押しした。慣れない衣装を纏っ

ているためどこか落ち着かなさそうだが、折角器量が良いのだから精一杯着飾れば良いのにと本気で思う。

冀県に到着した際に、女の子らしい格好をしている伯約さんを見て彼女のお母様が泣いて喜び、額に私の手を押し戴きながら感謝される事になるのだが、当然そんな未来が待っている事を私は知らない。

「それに、流石に自分達から言い出した停戦を反故にするようだったら、自分達の掲げる大義を損ねる事となる。何せ朝廷との間に結ばれた約定を破るって事だからね」

「漢王朝のために、と言いなから朝廷を軽んじる事はできないわけですか」

「そうですね。それにそういう行動を取った場合、盟を結んでいる馬州牧との間に間隙ができてしまう可能性もあります」

「平気で約束事を破る相手と盟約を結び続ける危険は、州牧という立場にある以上選べないでしょうね」

選択を間違えれば、涼州全土が戦乱に巻き込まれかねない。流石にそこまで愚かな選択はしないだろう。

そう言つて説明した義兄さんと私の言葉に、伯約さんはなるほどと頷いていた。

一緒に話していると当意即妙に答えを返してくるし、伯約さんは頭の回りは早いのだと思う。しかし、こういう話になるとどうも頭の回転が鈍くなるようだ。義兄さんに言わせれば、興味が自分自身に向きすぎており、他人の目を気にしない事による弊害だろうと言っていた。良くも悪くも質実剛健で、自分自身を鍛え上げる事に興味が傾倒しすぎているんじゃないかな、と予想を口にしていた。私も少し伯約さんと接してみたのだが、その言は合っているのではないかと思う。伯約さんに、身を着飾つて相手の興味を引こうという考えが一切無いのも、その辺りが影響すると思われる。私とて上辺だけ取り繕い、自分を大きく見せようとするのは好まないが、初対面の相手や憎からず思っている相手に悪印象を与えないようにするくらいの身繕いはする。伯約さんにはそういう考えすら無く、自然体の自分を見せ、それを受け入れてくれる相手のみと親しく交流するのだろうか。

しかしそれでは、一軍を率いるだけならば大成するだろうが、勲功を積んで政治にも関わるようになるのと周りに足を引っ張られて力を発揮できないだろうと思う。軍事行動は文官との協力を無くして果たす事はできないのだから。嫌いな人間であっても、目的を達成するためには手を組まなくてはならない事も多々あるだろう。そういう相手との上手な付き合い方も伯約さんは覚えていく必要があるだろう。現在伯約さんに着飾ってもらっているのも、お節介ながらその辺りを矯正しようという考えがあるのだ。私の趣味では決してない。そんな理由で想い人の前に綺麗に着飾った少女を招くほど、私は愚かではない。何が嬉しくて、恋敵を増やすような真似をする必要があるのか。

「気を抜いて警戒を緩めるのは論外だけど、必要以上に意識して敵意を剥き出しにする必要もない。自然体で隴西郡まで軍を兵を動かす事に注力すれば、送り狼をするのは難しい事では無いよ」

そう言つて義兄さんが話を締め括った。

「義兄さん。お話はごもつともなのですが、女性の前で送り狼という例えは如何な物かと」

州牧様の前でも口にしていましたが、やはり品の無い言葉となるので避けた方が良いだろうと思う。

義兄さんは少しの間不思議そうな顔をしていたが、私の言葉に合点がいったのか、何度か頷いた。

「藍里。もしかして、夜道で女性に襲いかかる男を想像している？」

私は無言で頷くが、義兄さんは額に手を当てて考え込み始めた。

えつと？何かおかしな事を言つたでしょうか？

内心焦り始めるが、義兄さんは無言を貫いている。伯約さんはひたすら不思議そうな表情をしているので、意味を理解していないのかもしれない。

「義兄さん。どうかしましたか？」

沈黙に耐えきれなくなり、私から義兄さんへ声をかけた。

「ん。ああ、ごめんごめん。ちよつと言葉の意味と由来について考えてた」

「？ 送り狼のですか？」

義兄さんからも送り狼という言葉の意味が語られたので、今さら考
え込む必要は無いと思うのですが。

「んー……。 まあ良いや。 私も書物で読んだ事があるだけなんだ
けど、送り狼っていう言葉は狼が群れの縄張りに入った者を追尾する
習性が元々の意味なんだよ。 藍里が考えた意味は、この由来が元に
作られた言葉だね」

「あ……なるほど。 では義兄さんが使っていたのは」

「由来の方だね。 韓遂達が縄張りを抜けるまで追跡し続けているか
ら、そこからの連想」

「そうでしたか……」

さて、これは大変気まずい。 勢い込んで言葉の選び方を正して頂こ
うとしたにも関わらず、知らない意味で言葉を使っていたとは。

「まあ、確かにそっちの意味で捉えられる可能性を考えなかったのは
私の失策かな。 今後気を付けるよ」

そう言つて義兄さんはぺこりと頭を下げた。 私はそれを慌てて止
めながら、今後は言葉の意味だけではなく由来についても詳しく調べ
る事にしようと固く誓った。

それから十数日。 毎日韓遂軍の後を追つて軍を進めた。 道中彼ら
が道を脇に逸れようとしたら、牽制するために行軍速度を上げて接近
する。 これ以上進むなら略奪を働こうとしていると判断する、そうい
う意思表示だ。 もっとも三日もすればそういう動きは見せなくなつ
たが。 彼らに始終注視してなくてはいけないので、気疲れする。 兵達
もイライラしているのか陣中で騒ぎを起こす者が始めている。

だが、それも今日で終わりとなる。 隴西郡の董太守の居城に到着し
たのだ。 結局は義兄さんが予想していたように韓遂が進んでこちら
を攻撃してこようとする事は無かった。 ……こちらから攻撃させよ
うと数十騎を繰り出して挑発してくる事は数えきれないほど有った
が、無言で武器を構え陣形を整えたら何もせずに戻っていった。 遠戦
を始めない事でこちらに交戦の意思が無い事を伝えると同時に、即座
に武器を構える事で仕掛けられたら応戦する意思を示すためだと後

で義兄さんに聞いた。それを聞き、伯約さんと一緒になるほどと頷いた。ただ無視し続けるだけだと、こちらを侮って攻撃を始めるかもしれない。それを抑止するためには、良い方法だ。流石は義兄さんです。

そして現在、私と義兄さんは董太守と謁見して、韓遂軍との戦鬪が終了した事を伝えた。陶州牧様が事前に義兄さんの権限を引き上げてくれていた事で、幸い門前払いされる事無く謁見していただけた事となった。

董太守は、義兄さんや私よりも十歳ほど年長であり、紫がかった髪をした温和そうな青年だった。

この城に入るまでに見た限りでは、住民達の表情も生き生きとしており、治世に大きな問題が生じていない事が分かる。仮にその土地を治める者に不満がある場合、民達は生き生きと働く事無く、もつと憂鬱そうな表情を浮かべるだろう。道中伯約さんに聞いていたが、董太守が民を愛し、仁政を敷いているという話は本当なのだろう。

「糜子方殿。諸葛子瑜殿。よくぞ伝えに来てくれた。これで民達へかけている負担を除く事ができる」

董太守がそう口にした。民へかける負担とは、足りない兵を補うために募集した義勇兵と戦時の特別徴収の事だろう。董太守が仁政を行って来たため、短い期間だったら民達もそういった事への不満を飲み込んで従ってくれるのだろう。しかし、長期間続くとなると話は別だ。民達へかかる徴収の負担は、日常生活に大きく影を落とす事となるし、不満が限界に達したら反乱が起こる可能性もある。

私達は単なる伝達者に過ぎないのだが、伝えた事で目の前の人物が喜色満面となるのを見るとこちらも喜ばしい。

「ささやかながら戦勝の宴を設けよう。お二人にも参加頂きたいのだが」

「あー、お話はありがたいのですが」

「ふむ、不都合がある？」

「長い夜営続きと韓遂軍の監視で兵達が猛つています。統率を行う私と子瑜の二人が抜けると籠たかが緩んで、町の住人達にご迷惑をおかけ

するかもしれませんが」

「なるほど、そういう事ですか……」

そう言つて董太守は少し考え込み始めた。

確かに義兄さんが懸念しているように、少し陣中で喧嘩騒ぎが起き始めており、士気が低くなっている事が私としても気にかかつている。この状態のまま町に入れてしまうと、一部の兵達が騒ぎを起こしてしまうのは目に見えているため、町の外で夜営をしている。それも不満を膨れさせる原因となるのは承知しているが、やむを得ない処置だろう。

そう私が思索している間に太守は考えが纏まったのだろう。再び口を開き言葉を発した。

「それでは、食料と酒だけでも提供させては頂けないだろうか？ 流石に朝廷からの使者に何のもてなしもしないととなると問題になりかねない」

「……はい、わかりました。それでは陣中で慰労を兼ねた酒宴を開かせて頂きます」

「うむ。後で届けさせる事にしよう。ただ、それだけではあまりにも心苦しい。他に何かできる事はあるか？ あまりにも無茶では無い限り叶えるが」

「それではお言葉に甘えて二点お願いしたい事が。西涼は中華よりさらに西にある国々と交易があると聞きます。西方から伝来している書物があるようでしたら、お譲り頂けないでしょうか？ 対価はもちろんお支払致します」

「なるほど……。確か珍品として幾つか手に入れたのだが、読める者がいないためそのまま書庫へ納めた物が有ったな。糜子方殿は異国の言葉を読む事ができるのか？」

「言葉によりますが。ただ、大秦の文字を読む事はできません。西方にある国々の中では、最も使われている言葉なので、読む事ができるのではないかと」

「そうか。では後で書庫を案内させよう。ただ、糜子方殿の望む物があるかは分からぬぞ」

「それは承知しております」

……いえ、義兄さん。さらつと凄い事言つてませんか？この中華で大秦の文字を読む事のできる人間がどれだけ居ると？

「しかし、糜子方殿は博識だな。そのような事を誰に習い、どのようにして覚えたのだ？」

そう、私もそこを知りたい。義兄さんの持つ知識には、異質な物がある。先の戦いで見せた架橋などは最たる物だろう。技術は長い歴史で積み重ねられて改良されていく物だが、あの橋だけは明らかにそこから外れている。義兄さんは何処であのような知識を得たのだろうか？それは義兄さんと付き合いを深めていく中で日に日に大きくなっていく疑問でもある。とはいっても、それを不気味に思っているのかと問われると全力でかぶりを振る。慕っている人間についても、もつと知りたい、それだけが動機としては十分だろう。もつとも、義兄さんが詮索されたくない事だったら困るので、自分から問いかける事はできなかったのだが。

「うーん。それが私にも分からないのですよ。何せ、気がついたら頭に入っていた事ですので」

「素直に話す事はできない、そういう事か？」

そう言つて義兄さんは苦笑いを浮かべ、そんな義兄さんに董太守が胡乱気な表情を義兄さんに向けた。

「いえ、そうではなくですね。本当にいつ知ったか分からないような知識がいくつか頭に入っているのですよ」

「それはまた面妖な話だな……」

そう言つて眉をひそめた董太守に義兄さんは苦笑いを返した。

「……ふう、まあ良いだろう。あまり人の事を詮索するのも品格を疑われる」

ああ董太守、そこは突っ込んで訊いて頂きたかった。折角の好機だったのに、逸した感覚がひしひしとする。これはいよいよ覚悟を決めて自分から聞く必要があるだろうか。

「ありがとうございます。では二点目ですが、こちらにいる諸葛子瑜ともう一人を町で泊めて頂く事はできないでしょうか？」

「……はい？」

義兄さんの事を考えて頭が一杯だったところへ、私の名前が話題に上がったので思わず声を出してしまった。そんな私の方へ、この場に居る全員の視線が集まる。流石に十人以上の視線を同時に受けると居心地が悪い。顔を俯かせて誰とも視線を合わさないようにする。

「この娘ともう一人、韓遂達に冀県から連れ出された少女がいます。帰路の途中で寝込まれても困りますので、ここに居るうちにできるだけ休んでもらおうかと」

「確かに野営では疲れが取れぬか。よし、この城に部屋を用意しよう。洛陽の宮殿と比べられると貧相かもしれぬが、流石にこの町の宿よりはくつろげよう」

「いえ、そこまでご厚意に甘えるわけには」

とんとん拍子で進んでいく話に、私は思わず口を挟んでしまった。先ほどの士気の話にも関わるが、私達だけが特別扱いを受けると兵達が騒ぎだしかねない。

「良いから甘えさせてもらいなさい」

「ですが義兄さん」

「仮に帰途につく時に倒れて、行軍が止まったりした時の方が問題になるって。今日は顔色も良くないし、体力的にもそろそろ限界でしよ？」

折れてくれない義兄さんに困り、思わず董太守へ視線を向けてしまふ。そんな私に向かって、董太守は大きくひとつ頷いた。

「諸葛子瑜殿、気にする事はない。少女の一人や二人、泊めて傾くほど財政が危機的というわけでもない。祝宴代わりと言ってはなんだが、歓待をさせて頂けないだろうか？」

いえ、まったく隴西郡の財政は心配しているのではなく、義兄さんが野営で苦勞するかもしれないのが心苦しいだけなのですが。もちろん空気を讀んで口にはしない。

「藍里」

「……はい、分かりました。董太守、数日の間お世話になります」

「ああ。自分の家同様にくつろいでくれたまえ」

義兄さんからそう促され、私はようやくやく首肯するのだった。

②—

「まったく！　なんでボクがこんな事をしなくちゃいけないのよ！」

「主君からの命令だからじゃない？」

「そんな事分かってるわよ！」

「む。　なら何を聞きたいのか分からないんだけど」

「私は、何でそんな命令が出される事になったのか、って言いたいのよ！」

「それは私が西方から伝わった書物を欲したからでしょうなあ」

「そんな事分かってるわよ！　あんた嫌味や皮肉が通じないの!？」

「まあまあ。　そんな大声ばかり出していると将来禿げるよ？」

「禿げるか！　第一、大声出させている原因筆頭のあんたが言うな!!」

いや、必要以上のストレスがかかると禿げるよ？そんなどうでもいい事を私は頭の片隅で考える。

董太守との謁見を終えて、私は書庫へ歩みを進めている。無論、謁見の時にお願ひした、お譲り頂けるといふ西方から伝わった書物を見せてもらうためだ。隣を歩くのは緑色の髪を二本の三つ編みにして左右に垂らし、眼鏡をかけている私と同年代の女の子。容姿は整っているが、眉根を寄せている表情で魅力が損なわれている。実に惜しい感じだ。

「ちよつと、聞いているの!？」

「ん、聞いているよ。　私が本当に西方諸国の言語を読めるか、でしょ」

「……聞いているならいいのよ。　それで、どうなのよ？」

「大秦で公用語になっていいる言語と、二番目に使われている言語なら読み書きできるね。　話す事はできないんだけどねえ」

「本当にどこで習ったのよ？　大秦なんて数十年前に接触があつたくらいで、全然人の行き来なんてないじゃない」

「天より授かりました」

「ばっかじゃないの？」

「し、失礼な。他に言い様が無いんだからしようがないでしょう」

そんな蔑んだ目で見られて喜ぶ趣味は私にはありません。

さて、何度か話に出ている大秦帝国は、数十年前に漢朝廷へ使者が訪れたと言われる。それは地中海世界に君臨した古代ローマが正体だ。そこで使われていた言語というのは、要はラテン語とギリシア語だ。何で今居る漢時代の中華どころか、現代日本でもマイナー扱いはれるであろう言語を知っているのかというと、前世で歴史書を読むのに必要となったので覚えたのだ。ギリシア語はともかく、ラテン語はローマ滅亡後もヨーロッパ諸国で使われ続ける事になるので覚えていても損はないだろうと判断した。ギリシア語も似た理由で、ローマで頻繁に用いられていた言語なので覚えた。邦訳されていないローマ時代の資料をあたるには必須スキルだと言って良い。工学部なのに何やってるんだと、教授や友人連中には呆れられた趣味だが。そうは言っても、元々大学では歴史を学びたかったんだ。工学部に在籍したのも、家の都合という側面が強かったんだししょうがない。

そんな関係のない事を片隅で考えながら、隣に居る娘と話しながら歩く。

ちなみに、藍里はここにはいない。野営陣に戻って、自分の荷物を持ってくるついでに伯約殿を連れてくるようにお願いしている。

「それにしても、何でまた西方の国の書物なのよ？ 孫子なり呉子なり、中華でも注釈の付け甲斐のある書はたくさんあるでしょ？」

「それはまあそうなんだけど。向こうの言葉が読める人間って限られるでしょ？ だったら読める人間が訳本作っておけば、中華全土で広まるかもしれないじゃない。仮の話だけど、大々的に大秦と交流するようになるなら、文化を理解できているかどうかって重要な要素になるし」

「……あんだ、思ってたよりは色々考えているのね」

「えっと？ 私はいったい貴女の中でどんな人物として見られてるんです？」

そのあまりの言い様に、私は思わず口の端を引きつらせる。そろそろ泣くぞ、おい。

「正直言つて変人ね。　こう言つてはなんだけど、あんた達が主導して、隴西郡（りゆうせいぐん）の町や村から略奪を働くところまでこつちは想定していたのよ。　それなのに、全然そんな話が聞こえてこないどころか、凶作で食べる物がなかった村では兵糧の一部を供出したつていうじゃない。　まして、私達に迷惑がかかるかも知れないからつて歓待の宴を断る？　どう考えても変わつてるとしか言い様がないでしょ。　少なくとも、今までここへ来た中央の役人達は宴を断らなかつた上に公然と賄賂を要求してきたわよ」

「色々中央への不満が溜まつてるみたいだねえ。　ただ、私は一時的に権限を引き上げられただけに過ぎないからなあ。　朝廷にとつては吹けば飛ぶような州府勤めの陪臣だし。　あまり悪名を流しすぎると、平然と首をすげ替えられるだけだしね」

「逆に陪臣程度の位が低い人間が、今より大きな権限を持つと要らない事をしそうな物だけどね」

「私は私の身が一番可愛いんだよ。　一時的な兵達の享樂のために、命を投げ出す殊勝な性格はしてないよ」

「命つて……そこまで重い話にまでは発展しないでしよう？」

「兵達に対して略奪を処罰対象にするつて宣言しているのに、自分だけ特例扱いにするつていうのは格好悪いじゃない。　そう思わない、賈文和殿？」

「格好良い、悪いの話じゃないでしょう……。　まあ、おかげで私達は助かっているわけだし、感謝してあげないでもないわ」

私と彼女、賈文和殿はそんな事をぐだぐだと話しながら書庫まで歩く。　なぜかは知らないが、彼女の不興を買つてしまつているようで、口調がやたらと刺々しい。　それでも会話に応じてくれているのは、苛立ちは感じていても嫌悪とまではいかないからだろうか？

隣を歩く彼女は、口調こそ乱暴だが間違はなく有能な人物だ。　初戦で韓遂に負けた董擢殿に対して、隴西郡で馬州牧と韓遂の連携をさせないよう遮断する事を進言したのはこの娘との事だ。

確かに史実での賈文和は、優秀な人材の多かつた魏陣営においても飛び抜けて有能な軍師だつたと伝えられている。　三国志においても

仕えた者達へたびたび策を進言し、すべて良い結果を残している事からもそれが伺える。李トへの董卓没後の王允討伐の進言。張繡に対しては曹操への奇襲と降伏の進言。曹操陣営では、官渡において許攸の意見を支持するように後押しし、潼関の戦いにおける離間の計を仕掛けた。曹操の跡目を誰にするかという、後継者争いの時にも的確な助言をしている。非常に機知に富んだ見識を持っていた事が伺えるだろう。

「そういえば、お礼言うの忘れてたね。ありがとう。助かったよ」

「はあ!? いきなり何よ、気持ち悪いわね」

「……そろそろ泣いていいかな?」

「……流石に今のはボクが悪かったわ。ごめん」

感謝の言葉に気持ち悪いって言葉を返されると流石にへこむよ。

まあ、謝罪されたから良いんだけどさ。

「で、いきなりの感謝はいったい何よ?」

「いやさ、隴西郡で馬州牧を牽制する事を進言したのが文和殿って聞いてさ。韓遂に援軍送られると長期戦必至で厳しくなつてたと思うから。……なぜ睨む?」

あれ?地雷踏んだ?

「初戦で早々に負けて、次善の策として隴西郡で防衛に努める事を何とか太守様にご承認頂けて、ほ、ほ、この体で逃げ出した事を誉められて喜ぶるとでも?」

「それはあまりにも卑屈すぎない? 敗北しても慌てずに兵をまとめて、軍として再起不能になる致命傷を負う前に安全圏に離脱し、その後自分達でできる最大限の貢献を討伐軍のためにした。そういう事でしょう?」

勝ち方を理解する将帥は大勢いるけど、次に繋がる負け方をできる人材というのは少ない。わざと負ける事などできるわけが無い上、仮に機会に恵まれたとしてもそこで戦死する危険性は常に存在する。だから書物で知識を得ても、実践するのは非常に難しいのだ。さらに初戦で敗北して、即座に撤退を決断できる事も評価に値する。何の確証もなく『次は勝てる』と言い続けて、ずるずる戦力の浪費を繰り返

すよりもその方がずっと良い。今回の場合、董家軍の敗北が討伐軍の敗北に直結しないだけに、そういう貢献の仕方はありだと思う。実際に馬州牧が援軍を送れなかった大きな原因の一つになっているわけだし。

「……と思うんだけど？」

「……あんだ、人蕩らしとか女蕩らしとか言われない？ 好意を持つ相手以外にそんな風に手放しの称賛とかしてると、そのうち刺されるわよ」

「怖い予言された……。 まあ、それは良いとして一つ疑問があるんだけど」

「なんで初戦を負けたのかでしょ。 同輩の暴走よ」

「暴走？」

「ええ、『我らは栄えある朝廷に任命された討伐軍！ 漢の御旗の前に出し攻めかかれば、たちまち反逆者は崩れるに違いない！』そうよ」

「司空の芸風と丸被りじゃないか」

「芸で言っているなら救いようがあるんだけどね」

「本気だと性質が悪いか」

徐州にも曹豹一派がいるし、どこも同じだねえ。

「まったくよ！ 第一、そんな生半可な覚悟で反乱を起こしている訳じゃないんだから、簡単に退いてくれるわけじゃないじゃない！」

「ちなみにその同輩の将の名前は？」

「え？ 李レと郭レ汜レだけど、それがどうしたのよ？」

「いや、何か縁があつて関わりをもった時に覚えておいたら対処しやすいかな、って」

なるほどプリキュア、もといリカクシか。そりゃ粗忽者だね。非常に納得できてしまった。

そんな事をぐだぐだと話しながらも書庫までは歩みを進めていたわけで、十分もかからずに書庫までたどり着いた。文和殿が先に扉の鍵を外して戸を開いて中に入っていく。私もその後について書庫に入る。

「ここよ。 良い？ 分かっていると思うけど、く・れ・ぐ・れ・も！

他の書物を勝手に持ち出さないように！」

「了解了解。文和殿、とりあえずどの辺りにまとめられているか案内して。実際に物を見てみないと何とも言えないし」

「ええ、こつちよ」

そう言つて歩き出した文和殿の後ろを付いていく。彼女が歩く度にぴよこぴよここと三つ編みが揺れる。猫よろしく、それにじやれつきたくなるが全力で我慢する。文和殿に絶対に怒られる自信がある。

空さんも編み込んだ髪を一本背中に垂らしているんだけど、強く引つ張ったりしない限りは私にも触らせてくれる。姉さんのポニーテールや天明のサイドポニーよりもちよつかいかけたくなるのは何故なのだろうか。

微妙にうずうずした気持ちを抑えながら歩いていくと、一つの本棚の前で文和殿が足を止めて私の方を勢い良く振り返った。

「ここに纏めてあるわ。……って、何でボクの髪の毛を握ってるのよ！」

「いや、つい手が伸びて。猫がじゃれついたと思つて勘弁して」

「私の髪は猫じゃらしか！」

文和殿が勢い良く振り向いたので、綺麗に弧を描いた三つ編みを思わず両手で掴んでしまった。我慢が限界を超えた瞬間である。

叱られたのですぐに手を離すが。

ぷりぷり怒っている文和殿へ謝罪を繰り返して許しを乞う。

私を警戒するように三つ編みを手で押さえながら距離を取った文和殿を尻目に、本棚へと目を移す。

パツと見たところ、ラテン語とギリシア語でタイトルが書かれている物が結構ある。十数点あれば良いと思つていたのだが、思つていたよりも数が揃っている。ただ、同じ書籍のラテン語とギリシア語で両方揃っていたりするのは、同じ内容だと分からなかったからだろうか。

んー。やっぱり自省録は無いか。まあ、ローマで哲人皇帝が没したのが数年前のはずだから、当然東方には伝わっているはずないよな。ガリア戦記と内乱記はカエサルの著作で流通量も多かった事から

絶対あると思ってた。

あと目を引くタイトルは、……ダキア戦記だ?!ちよつ、本物か!? 偽書だったら人目を憚らず慟哭する自信があるぞ!

迷う事なく手を取り中身を確認する。熟読する事なく拾い読みをして内容を精査していく。十数ページを読んでおそらく本物と判断する。迷う事なく譲ってもらう候補として近くの机に置く。本棚を目を皿のようにして眺めるが、これ一冊だけのようだ。くつ、残念すぎる。その過程で反カト論も見つけたため、一緒に候補に入れる。ローマ建国史が一番多いようなのだが、巻抜けがあるためポエニ戦役も、マケドニア戦役も入っていないため、微妙に嬉しくない。まあ、もらっていくけどさ。

その後一時間ほどで書籍を確認し、譲って欲しい本の候補を洗い出す事ができた。

個人的にはダキア戦記と反カト論が大当たり。この二冊、二十一世紀では散逸してしまっているのだ。すべての巻数が揃ってはいないが、それでも貴重な資料だと言える。

トラヤヌス帝の行ったダキア戦役は、トラヤヌス円柱でしか内容が伝わっていないので、書籍で詳しい内容を読む事ができるのは正直嬉しくてしょうがない。

小躍りしたい気分のまま後ろを振り替えると、文和殿が呆れたような感心したような不思議な表情を浮かべていた。

無言のまま首を傾げると、ため息を吐かれた。

「どうかした?」

「いえ。嘘やはったりじゃなくて、本当に読めたのね」

「まだ疑ってたのか……」

「はあ、まあ良いわ。そっちの机に置いてある本が欲しいの? 本棚に残っているのと違いがわからないんだけど」

「本棚に残ってるのは、内容が重複して書いてある言語が違うだけの本だよ。流石に二冊同じ本は要らない」

「……もう何か言う気力も失せるわね。額面の査定をするからちよつと待つてなさい」

そう言つて文和殿は私がまとめた本と、それを買った時の金額が記された紙を確認して値段を設定していく。文和殿が後ろを向いているため、顔を左右に動かす度に三つ編みが揺れる。

また手を出してしまいそうなので視線を外し、さっきとは別の本棚を眺める。その中で一冊だけ目を引く物があつたため、手に取つてみる。他の本が軒並み時代を感じさせるような痛み方をしているのに対して、これだけはやけに真新しい。最近の書物なのだろうか？

中身をパラパラと拾い読みしてみると、呉子の注釈本のようだが。内容としては、感心するくらい良くまとめられていて読みやすい。兵科の運用方法なども細かく注釈をつけており、これを書いた人物はかなりしつかりと呉子を読み込んでいる事が分かる。

そのまま文和殿が声をかけてくるまでそれを読みふける。

「お待たせ。 金額出たわよ……つて、あんた何読んでのよ!」

思わぬ大声を出されて驚き、ビクツと体が震える。

「ええつと……ああ。 これ、文和殿が」

そう呟いて本を閉じて文和殿へ差し出す。文和殿はそれを奪い去る勢いで手に取り、背中に隠した。どうやらその本は文和殿にとつて見られなくなかつた代物らしい。ならばここは謝罪の一手だろう。

「何か読まれたくなかつたみたいで。 勝手に読んでしまい申し訳ない」

私の謝罪にもしばらく返事を返さず苦虫を潰したような顔が続けていたが、おもむろに大きく溜め息を吐いた。

「もう良いわよ。 滅多に人が入らないとはいえ、人目につくような場所に置いていたボクも悪かつたし」

「あー、本当にごめん。 けど、それ途中だよね? 何で自室で書かないでここで?」

素直に疑問に思つた事を口にする。答えてくれるか分からないまま口にしたのだが、すんなりと文和殿は答えてくれた。

「月……大事な親友への贈り物として書いているのよ。 少しでも読みやすいように。 だから、私の部屋によく来るあの子に見つからないようにここで書いているのよ」

「なるほどね。少し読ませてもらったけど、分かりやすい注釈で良かったと思うよ。ただ、贈り物で注釈本って珍しくない？」

「はいはい、どうもありがとう。……こんな何が起こるか分からない世の中だもの。いくら争い事を好まないって言ったって、少くらいはそういう事を知ってないと。これで少しでも理解の助けになつてくれればと思つて。……って、何でボクはあんたなんかそんな事語ってるのよ」

そう言つて文和殿は頭を抱え始めてしまった。親しくない人間相手だからこそ、気が抜けているんじゃないかと考えるんだが、どうだろうか？ 愚痴とか相談事はまったくの他人相手の方がしやすい物だし。前世でも占いに通う人間の大半は相談にのつて欲しいからという噂もあつたくらいだし。従妹も少ないお小遣いで占い師へ通い詰めていた事を思い出す。

その後少ししたら文和殿は立ち直り、ようやく譲つてもらふ予定の本の金額を見せてもらった。やっぱり少し高いが、これくらいなら全然許容範囲だ。

懐に入っている財布から、提示された代金より多目に渡す。仮に他の書物（特にダキア戦記の他の巻）が手に入った時に、買つておいてもらうようお願いする。文和殿には「まだ足りないのか」と呆れられたが、「本の巻数で間抜けが有るつて最悪じゃない」と呟いたら激しく同意された。初めて文和殿と心が一つになった気がする。

「というか、文和殿。中華の本を買うなら糜家の商会から買つてくれない？ 徐州からの輸送費を足したとしても、一般に流通している物より大分安くしてるんだけど」

そう営業活動をすると思いついてきたので、長安での流通価格を提示すると共に、野営地に置いてある版画で作った本の現物を後日見せる事を約束する。

本は壊れ物でも腐る物でも無いので、流通させるのが非常に簡単だ。そのため、大量輸送が可能となり輸送費が安くなる。

さらに、版画を利用した大量生産も可能なので、一冊当たりの単価も写本をした物よりずっと安い。

「随分安いけど、品質は大丈夫なのよね？ まあ、そこは現物見て決めれば良いか。けど商隊が来るのが長安までか……ちよつとここから行き来するのが大変ね。隴西郡まで販路伸ばす事ってできないの？」

「よほど色々買ってくれないと赤字になるから難しいかも。ただ、西涼産の馬の仕入れができれば絶対利益出るから、それと一緒にするなら伸ばせるかも。馬の繁殖農家に口利き頼む事ってできる？」

「できない事はないけど、流石に本が欲しいからってだけじゃ難しいわよ。交易はボクの一存で決められないし、馬は重要物資なのは分かっているでしょ。南方、東方からの輸出品でどうしても欲しいって思う物はあまりないのよね……」

「徐州名産で日持ちしない物を除外するとなると、ハチミツと酒、石鹼と髪油かなあ。ああ、ロウソクもか。有機肥料も出せるけど、あれは作った方が早いよね」

「ハチミツと酒、油は輸送費が高くつくでしょうし却下ね。ロウソクは欲しいけど、品質悪ければ使い物にならないわよ？ 石鹼って何よ？」

「ロウソクの品質は保証するよ。これも現物あるし、あとで本と一緒に見せるよ。石鹼は汚れを落とす物で……美容用品かなあ？」

「一番近い物はサイチクだと思う」
「なるほど……。ああ、もう！ 現物見なければ判断できない物ばかりじゃない！」

「了解、明日になったら、色々売れそうな商品目録を持ってもう一度登城するよ」

その後も交易の話が続け、ひとまず文和殿が所望している本以外の現物と目録を明日董太守へ見せてからという話になった。まあ、プレゼンしろって事だな。なら販路拡大のためにも全力でアピールさせてもらおう。

その後は、思った以上に私と話し込んでいたために親友との約束を忘れてしまい、焦っている文和殿に城の入り口まで送ってもらい、明日また来る事を告げて、私は野営陣へと戻る。

涼州馬の買付ができそうなのは嬉しい誤算だ。自分達で使っても良いし、売つても利益が出る。生き物だから輸送が難しいのが難点だが、そこは知恵を絞って考える事にしよう。馬泥棒にも注意しなくちやなあ。

さて、残る案件は一つ。そちらは藍里にお願いしたのだが、きちんとやってくれているかな？

藍里にお願いした事、それは既に傾いていた漢帝国にとどめを刺す事になる人物の近くへ寄り、その為人を見極めてもらう事だ。その人物の名前はー。

董卓 仲穎という。

第二十七話 Hello Goodbye & Hello — 出会いと別れ —

あつという間に隴西郡での日々は過ぎていき、私達は雒陽で陶州牧様達と合流し、徐州へ向けて旅立っていた。あと数日もすれば徐州へ到着する事だろう。隴西郡から出立した後に起こった事で特筆すべき物は多くないが、重要な物がいくつかある。私は時系列順にその事を順番に思い出していく。

一つは無事に隴西郡との交易がまとまった事だ。これで涼州馬の買い付けができるようになり、騎兵戦力を整える事ができる。将来的に領地が徐州と接する可能性が高いのは袁家の二人、曹操、孫家。うん。まともにやっても勝てる気がしない。戦力の充実は至上命題だろう。

二つ目は文和殿と書簡のやり取りを交わす事になった事だろう。前世のオタク気質だった大学の友人の言葉を使うなら、フラグが立った、だろうか。まあ、恋愛云々では無いので正確には違うのだろうが、私が文和殿へ、ローマの本の翻訳が終わったら送ると伝えた時に、彼女はこう言った。

『ふん。 それじゃあ代わりに、私が注釈を入れた兵法書を送ってあげるわ。 ただし、気が向いたらだけどね』

苛立ちを感じていた相手と連絡を取り合う事を宣言したのだから、何かしらのフラグが立っていると考えて良いのだろう。多分。

嬉しいかと言われれば、優秀な人物に認められた事は嬉しい。けど、より一層の努力をしないと失望されてしまいそうでプレッシャーや焦燥感を感じないでもない。まあ、そういう殺伐としていない焦燥感を楽しみながらこなすのが一番だろう。某漫画に出てきたギターストの「俺は今最高に焦^{楽しんでる}っている」という台詞が近いだろうか。

三つ目は、董卓の事。史実における董卓を軽く頭に思い浮かべる。董卓、字は仲穎。この人物は、三国志最大の悪役として有名だろう。雒陽から逃げ出していた天子とその弟を保護した事から、朝廷および

雒陽でのやりたい放題が始まる。

その中でも最たる物は（というよりこれが洒落にならなすぎで他の事が霞んでしまうのだが）帝の廃位だろう。

元々先帝の長子であった少帝弁を廃し、聡明だった弟、劉協を帝としている。さらに劉弁とその母である何皇后へ、配下李儒を通して毒を渡して自裁をさせている。

それ以前にも色々とやらかしているが、この二点において董卓の悪名は決定的な物となった。古来より悪事千里を走るといふ。悪い事をすれば、それは遠く離れた場所まで広がっていく物だ。結果、反董卓連合が組まれてしまい、窮地に立たされる事になる。雒陽を放棄して長安に遷都している事からも、相当な窮地であった事は間違いがないのだろう。

もともと、長安遷都後には連合軍はグダグダのまま解散してしまい、窮地を乗りきる事には成功した。まあ、その後に最後は配下の呂布に裏切られた事でその生を終える事になる。

それが、三国志に記される董卓なのだが……。

（容姿可憐にして心優しき性根を持った、類い稀なる善の者か）

義妹である藍里と伯約が隴西郡の城に泊めて貰った時に接する機会があったのだが、その時の印象が上の様な物だったと異口同音に私へそう言った。私自身は会う機会はなかったし、強いて会いたくとも思わなかったのも、その姿を見ていない。

私は藍里の事を、多少思い込みが激しい部分はあるが、賢くて人を見る目のある人物だと評価している。私に関する事だけ目が曇るのはどうにかならないかなあ、とも合わせて思ってもいるのだが、それは置いておこう。

伯約殿とはそこまで付き合いが長くは無いが、その根底は善の性質を持つていると感じているし、実直な性格だ。必要以上に他者を貶めるような事は言わない代わりに、手放して称賛する事も少ないだろう。

そんな二人が揃って董卓の事を評価している以上、この世界での董卓は清廉な性格をしているという事か？ならばこの世界では、史実と

異なる道を進む事になるのだろうか？そうになると、歴史の流れは大きく変わる事になるが、雒陽、長安近郊に住む人々にとつてはその方がよいのだらうと思う。略奪の憂き目に合わなくて済むだらうし。

四つ目は、伯約殿との間にできた縁えにしについて。今回の遠征中に新たに会った人々の中で、一番長い時間を過ごしていたので、自然と交友を深める事ができた。そのため、藍里も含めて定期的に書簡のやり取りをしようと提案された時も自然に首肯する事ができた。友人が増える事は喜ばしいだらう。異性ばかりが対象となつている点については思う所がないわけではないが、偶然に近いのだからしようがないだらう。

それを話すと、姉さん辺りがぶーぶー言いそうだが、そろそろ弟離れして恋人の一人でも作れば良いのにと思う。

ちなみに、伯約殿を冀城まで送つた際に彼女の御母堂に会う機会があったのだが、藍里の服を身に付けて、非常に女の子らしく身を着飾つた娘を目にしていたく感激していた。彼女にそういう格好をさせた私達はいたく気に入られて、大歓迎を受けた。……伯約殿は、どれだけ母親に女子力を心配されてるんだらう。

また、伯約殿は隴西郡に移り住み、董卓に仕える事を決めたようだった。それを聞いた時、そんなに気に入つたのかと驚いた。確かに西涼では今後大きくなつていく可能性の高い勢力の一つではあるが、将来的には巻き込まれて誅殺されかねんぞ？まあ、この世界の董卓なら大丈夫なのかな？

五つ目は飛ばして六つ目。

ヘッドハンティングの勧誘を受けた。ただし相手は伯符殿から。もちろん慎んでお断りをした。

いやね、どう考えても嫌な予感しかしない。虎の世話係、もしくは首輪役は私にはどう考えても役者不足だ。

孫太守には婿入りも打診されたが、目の前の親子を見ると、どう考えても孫家の女性陣は女傑ばかりとしか思えない。これも私には荷が勝ちすぎているだらうと丁重にお断りした。

雒陽にいる間、何度も一緒に来い、嫌だ断ると繰り返しているうち

に、滞在期間は終わってしまった。おかげで、雒陽では何も行動する事ができなかった。代わりに藍里に動いてもらい、雒陽の品物の相場を調べてもらっていたので、最低限欲しかった情報は手に入れる事ができたので良いと言えば良いのだが。鬼の北部尉とか見てみたかったんだが、見れなかった物はしょうがない。まあ、この時代に生きているなら会える機会は腐るほどあるだろ。戦場で敵方として会ったら逃げの一手を迷わず打つがな！

結局孫家からの勧誘は滞在期間が終了した事により、時間切れ逃げ切り勝ちとなった。何とか一段落といたところか。ただし伯符殿から、まだ諦めたわけではない、と宣言されている辺りが色々不安だ。

私はその時の事をさらに詳細に思い出す。孫家が先に出立する事になったので、見送りをする事にしたのだ。その場に居たのは私の他に伯符殿と公瑾殿。少し離れた場所には陶州牧様を代表とした徐州の面々と、文台様達が互いに挨拶を交わしている。ちなみに藍里もそつちにくつついている。まだ伯符殿達と顔を合わせるのは気まずいのだろう。一回会っちゃえば後は自然と話せるようになると思うんだけどねえ。

『今回は勘弁してあげるけど、諦めた訳じゃないからね。徐州に居場所が無くなったらいつでも歓迎するわ』

『縁起でも無い事を言わんでください』

『私にとっては、というより孫家にとっては間違いなく吉事だからね。』

叶う様に口に出しておく事は重要ですよ』

『私にとっては不吉だよ！ というか、言霊ことだまなんて欠片も信じていないでしょうに』

『確かに信じてはいないけど、言葉にすれば私達があなたを必要としている事は伝わるでしょ？ なら心変わりをいつするのか分からないんだから、口に出しておいて損は無くないじゃない』

『伯符殿って変なところで現実的だよな』

少し呆れながらそう口にする。伯符殿は面白そうに口の端を吊り上げて、追加でこう口にした。

『ついでにもう一つ布石を打っておきましょうか。私の真名は『雪蓮』よ。何か私の力が必要で呉郡に来た時にはその名を出しなさい。私へ直接取り次ぐはずよ』

『……真名の扱いが軽すぎない？ 一応、自分の本質を示すと言われるくらいには重要な物でしょうに』

伯符殿の言葉に更に呆れる。本人は悪びれもせずにごう宣った。

『私にとって真名は便利な道具に過ぎないわよ。何も用意する事無く、他人へ自分の信頼を示す事ができる道具』

もちろん、勝手に呼んだりされたら斬り捨てるけどねー。

あはは、と朗らかに笑いながらそんな事を口にする。表情の穏やかさと言っている言葉のギャップが強烈すぎる。

この場にはいないが、真名を物凄く大事にしている藍里が今の言葉を聞いたら激怒しそうだな。しかし、その言葉にも一理ある。何も手に持っていないなくても自分の信頼を相手に知らせる事ができるというのは便利である。けど、この中華でそこまで真名を割り切って使うのは珍しくないか？

それから、隣で頭を抱えている親友殿の事も少しは気遣ってあげてください。

『本当に変なところで現実的だね。まあ、良いや。私の真名は『麟』と言います。以後よろしくお願いします』

そう言って軽く雪蓮へ頭を下げる。顔を上げると満足そうに頷く雪蓮の顔と、色々と諦めた表情をした公瑾殿の顔がある。うん。徐州に戻ったら公瑾殿には胃痛に効く薬を贈る事にしよう。ここで公瑾殿が倒れて、雪蓮が野放しになる方がやばい。

さて、そろそろ出立の時間が差し迫っているようだ。私達以外の場所では人の動きで少し騒がしくなっている。私は二人へと背筋を伸ばし、姿勢を改めて拝礼をしながら口にする。

『それでは、二人ともお元気で。公瑾殿、雪蓮のお守りは大変かもしれないけど、頑張ってください。雪蓮はあまり公瑾殿に負担をかけないように』

『気遣い感謝する。もつとも、誰がどんなに言ってもこの性質は変

わらぬ気がするがな』

『あなた達、人の事を何だと……。まあ、いいわ。それじゃあ麟、また会いましょう。できれば主従として、ね』

そう言つて二人は踵きびすを返し、自分達の馬に跨がって去つていった。数年は忘れる事ができそうにない個性的な人達だったな。英傑つていうのは、ああも個性を持つていなくてはいけないのだろうか？今後会う可能性のある三英傑達との邂逅が待ち遠しいような、不安になるような……。

これは後年の話となるが、二人を含めた孫家の面々とは戦場で再会する事となる。彼女らとはその時に至るまでの間にも徐州と呉郡の距離を隔てて、書簡や書籍、薬や酒などを贈り合う穏やかな関係を続ける事ができる。色々と強烈な個性の持ち主ばかりではあったが、実りのある交際はできたと言えるだろう。

「ふ。ーしふー！ 師父つてば!!」

そこまで思考を続けたところで、隣から大声でいまだ聞きなれない呼称で呼び掛けられて中断する。私がかかった方向へ視線を向けると、こちらを不思議そうに見上げてくる短髪の少女の姿があった。

「師父、先程からブーツとしてどうしたんですか？ 長旅の疲れが出たんですか？ 確かに西涼からここまでの移動は大変だったでしょうけど、もうすぐ徐州に入るそうなので頑張りましょう!」

そう矢継ぎ早に言葉を作る少女。その姿を見ながら私は先ほど飛ばした五番目の出来事を頭の片隅で思い出す。しかし、その思索にふける前に訂正しなくてはならないだろう。

「あのなあ……。私をそう呼ぶなつて何度言えば分かるんだ？ まだ私は人を教え導く事ができるような人間じゃないんだつて」

「いえ。どう言われようと師父は師父ですので！ むしろ、師父こそ早く自分は凄い人なんだと自覚してください!!」

「そうです、義兄さんは凄い人なんですから、そろそろ自覚した振る舞いを心がけるように致しましょう。まずは真名をみだりに女性に渡すのをやめるところからなどうかでしょう?」

私達の会話に、反対方向で馬を進めていた藍里が口を挟む。左右からタイプの違う美少女に褒め殺しを受けるこの状況。人によつては喜び勇むシチュエーションなのだろうが、私にとっては頭を抱えたくない事態だ。

「というか藍里さん。やっぱり雪蓮と真名を交換したのを気にしてよよね？」

「とりあえず私としては、二人には相手の行動を褒め称えるだけの人物ではなく、きちんと慢心を諫める事ができる人物になってもらいたいんだけど、その辺りどう思う？」

「ええ、それはよく分かっています。ですが、現状義兄さんが大きく判断を誤るような行動をしていない以上、考えを諫止しなくてはならない事態に陥った事ありません。ならば称賛するしかないのですが」

「私は師父に師事するようになったばかりですので、師父の為^{ひととなり}人までは分かりませんが、農業についてのお話を聞くだけでも十分優れた知識をお持ちになっていると分かります。ですが、ご安心ください。

何か道を誤るようでしたら力づくで引き戻してみせますから！」

うん、二人とも人の話まったく聞いてないよね？慢心した後には制止するよりも、慢心しないように諫めてくれた方がずっとありがたいんだけど。イエスマンしか存在しない派閥は、破滅へ向けて一直線としか思えん。文和殿くらいに私と距離を取ってくれる人間が居てくれると、私の事を客観的に評価してくれそうで安心できるのだが。

「……はあ、とりあえず多くは言わないけど私も人間である以上失敗は山ほどするからね。そうなつてからじゃ手遅れになる事も多いんだから、きちんと客観的に見て私の事を諫止ように。分かったね、藍里、伯侯」

そう言う私に二人は素直に頷くが、いまいち信用できん。とりあえず、私と距離を取って客観評価ができそうな人物の候補は何人かいるので、早々に三顧の礼をしてでも迎え入れる事にしよう。そうしないと本気でまずい気がしてきた。朱里？あの子も諫める事ができる性格はしていないだろう。

先ほど飛ばした五つ目の出来事。おそらく今回の遠征で一番大きな収穫であり、出来事だろう。

簡単に言うと、弟子を取る事になった。というか、弟子として押し掛けられてなし崩し的に師匠役をやらされる事になったというのが正確か。

そのとんでもなくはっちゃけた行動を行った人物の名前はー
姓を杜、名を幾、字は伯侯という。

幕間四 My Home Town — 一時帰郷 —

西涼に遠征していた私達は、半月前に \square に帰ってきていた。何だかんだで数カ月城を空けていたわけだから、従事史の皆様から州牧様へ報告をしてもらった。その場でいくつか課題も出てきて、そのいくつかを私が巻き取る事になった。遠征に出る前に私が提案していた事に関わる部分なので、それもやむを得ないだろう。

ちなみに、今回の遠征に関する報告もその場で行っている。報告書を間に合うように死ぬ気で仕上げ、戦闘詳細を従事史達へ報告した。とりあえず作戦を立てたのが自分である事は伏せて、宣高の事を褒めちぎっておいた。立派に別動隊の指揮官をやり遂げているので、嘘は吐いていない。

それを聞いた州牧様は苦笑いを浮かべるだけで、特に訂正もしなかった。そのまま宣高の功績になる事が確定した。

私にとってはその方が都合が良い。別動隊の動きを私自身の実績とするよりも、宣高の功績とした方が良いと判断した結果だ。宣高は私よりずっと優秀な將軍になれる素質があるのだから、さっさと出世してもらわないと困るのだ。

さて、その報告がようやく終わり、私は久しぶりにゆっくりと時間を過ごしていた。

傍らには天明が居て、じゃれつく王虎の相手をしている。子麗も一緒に王虎と遊んでいる。実に荒んだ心を和ませる光景である。

一緒にこの村を訪れた藍里と伯侯は子山に案内されて、私がやってきた農法について、村を巡りながら説明を受けている。

子山の名前が出てきた事からも分かるように、現在私は？県にある、私達が育った村へ帰ってきている。連れてきているのは、天明、藍里、それから伯侯の三人だ。

私が今回里帰りをしているのは、何も里心がついたからではない。今回私が巻き取る事になった仕事は、蜂蜜についての懸案事項をまとめるように命じられたからだ。

巢板一枚辺りの予測できる生産量は、最初の提案時に算出していた

のだが、巣箱を設置していたとある村で実際に取れた蜂蜜の量が予想量よりも大分少なかったそうだ。

私が提案時に話した内容が疑われているのではなく、何処かで量を過小に報告し、横流しが行われているのではないかと疑いが上がったのだ。単純に採取方法に問題があるだけであってくれるなら、正しい方法を指導すれば事足りるので、是非そうあって欲しい。横流しが行われているとするならば、少々面倒くさい事態になっているといえる。

現在蜂蜜は徐州において重要な物資となっている。蜂蜜はそのまま食品としても高値で売れるし、蜜蝋から蠟燭を作ればさらに利益が上がる。それゆえ、蜂蜜は州府で買い取り、許可を出した商家、職人達へ規定額で売るといふ形を取っている。言ってしまうえば、徐州内に限っては塩と同じ商業形態を取るくらい貴重な物として扱っているのだ。それを中抜きしているとなると、州府の威信が揺るぎかねない。全力で犯人を見つけ出し、再発防止を徹底しなくてはならない。

調査を始めるに辺り、まずは私が算出した予想収穫量に大きな隔たりが無いかを確認するため、念のために実際に巣板を遠心分離機にかけて蜂蜜を採取してみようと思ひ、ある程度無理を聞いてもらえるこの村へ帰ってきたのだ。幸い西涼に遠征している間に冬も終わり、採蜜を行う事ができるわけだし。

私だけではなく天明達を連れてきたのは、藍里は副官として私の補佐をしてもらいたいのと、西涼遠征から働き詰めだったのでゆっくりと体を休めてもらいたいから、天明は私が州府にいないと仕事が無くて暇を持て余すから、伯侯はそもそも仕官しているわけでも無いので、仕事自体が無いから一緒に連れてきた。それに藍里と子山はしばらく会っていない友人同士でもあるので、旧交を暖めるにも良い機会にもなるだろう。

私が天明達とまったりとしているのには理由がある。現在巣箱を管理してもらっているご婦人方の予定が空くのが午後になってからだというので、それまで私達も待つ必要ができたのだ。村を見回って口出ししに行っても良いのだが、現在この村は子山に任せているので

あまり私がでしゃばらない方が良いだろう。

なので、西涼で仕入れてきたローマの本を翻訳する作業をしている。

……どうでも良いけど、ローマ人の名前に漢字を当ててるのハードモード過ぎやしませんかね？音の響きだけで適当に当てはめているけど、長くなりすぎる。マルクス・アウレリウス・アントニヌスを安敦で済ませた前漢の官吏の見識を絶賛せざるを得ない。仮に全音に漢字を当てても覚えられない事必至だ。注釈本にはラテン語表記と、長すぎたから省略した旨を記載しておくか。

辞書が無いので単語の意味を思い出すのに苦戦しながら、翻訳を続けていく。今翻訳をしているガリア戦記の凄いところは、作者のカエサルが『俺ってこんなに凄い事やっただぜ！』というのを元老院を含めたローマ中に広めるために書いたのに、鼻を突くような過剰な自己讃美を抑えているところだろう。むしろ自分を第三者の立場において、他人がやってのけた事のように突き放した書き方をしている部分も多く見受けられる。おかげで途中でげんなりとする事無く翻訳を続けられるのはありがたい。

しかしこれ、翻訳を終えた後に出版しても売れないだろうなあ。当時の共和制ローマの政治状況が分からないと何でカエサルがガリアへ出兵したのかも理解しづらい。さらに、そもそも中華思想に従って中華よりも大分離れているローマは蛮族の国とおもわれかねない。出版するよりも、文和殿や朱里などの一部の親しい人間のみへの配本に留めた方が良いかもしれないな。版画にする労力に見合う対価が得られる気がしない。

そんな不毛な未来を想像しながらも、私は目を書に走らせ、筆を持つ手を止めない。ここで翻訳を止めたりしたら、今度会う時に文和殿に何を言われるか分からない。叱られるだけならまだしも、失望されるのは勘弁いただきたい。

そうやって書を訳し、時々私にもじゃれついてくる王虎を適当にあしらいながら時間を過ごしていると、表から話し声が近づいてくるのに気がついた。どうやら村を回っていた三人が戻ってきたようだ。

藍里と伯侯にこの村を見てきてもらったのは、農政の知識を少しでも多く身に付けてもらいたいからだ。

この時代の経済の基盤は、貨幣経済が発達しているといってもやはり農作物が大きな役割を果たしている。農政に関する幅広い知識があれば、私達徐州勢を含めて、どこの勢力でも重用されるだろう。手元に来てくれた優秀な官吏の卵を他の勢力にくれてやる気は欠片も無いが。

「ただいま戻りましたー!」

扉が開き、元氣よくそう口にした伯侯が先頭で入ってきて、続いて藍里と子山もそれぞれ帰宅の言葉を口にしながら入ってきた。

「師父、師父! 何なんですか、この村! 中華では見慣れない物や想像もつかない色々な事を当たり前のように利用しながら農業をしているんですけど!!」

「落ち着け。それから顔が近い」

「落ち着いてなんてられませんよ!? さあさあ、ちやつちやとどういう事なのか吐いてください!」

「もう師に対する態度じゃないよね、それ。それから顔が近い」

村を巡って見慣れない物を数多く目にしてきて、知的好奇心が大いに刺激されたのだろう。軽い興奮状態にあるようだ。とりあえず必要以上に近づいてきていた顔を掴んで距離を離す。

農政に興味を持ってくれるのはありがたいが、入れ込みすぎだ。もともと、この子と同じ名前を持つ人物が三国志においてどのような役割を果たしたのか、それを考えると農政に多大な興味を持つのは当然だとも言える。

杜幾、字を伯侯。

おそらく三国志において、二十一世紀日本での知名度と功績が最も釣り合っていない一人ではないだろうか? 演義においては出てきたかも記憶に無い。

しかし、この人物の内政家としての実力は破格と言える。

馬超と韓遂の乱において、近隣地域が軒並み動揺した中、太守を勤めていた河東郡だけは動じる事なく朝廷への忠誠を示している。こ

れは杜幾の治世が徳に満ち、仁を示した事で領民が恭順を示したから
だと言われている。

周辺地域から孤立する事になっても示す忠義つてなんだよ。戦場
で突出点を作るって、集中的に攻撃をされる危険性があまりにも高く
なるので、凄く危険なのだが。しかも杜幾はまだこの時、曹操の股肱
と言えるほどの信任は得ていなかっただろうに……。

ともかく、この河東郡だけでも動揺しなかったというのは大きかつ
たようで、この乱の制圧の際に曹操は兵糧のすべてを河東だけで賄つ
ている。どれだけの蓄えをその治世下で作ったのだろうか。これだ
けでも彼が内政、とりわけ農政の手腕に優れていた事が伺える。結果
的に、この事を評価されて曹操より俸禄を増加されている。軍事作戦
において、武功のあつた者を評価するのは容易いが、後方支援を従事
した者が功有りとは評価されるという事は、よほどこの時の杜幾の存在
が、曹操から目立って映ったのだろうかと思える。

後年曹操が漢中を攻める際にも補給を担当したが、不足なくその役
目を全うし、一人も脱走兵を出さなかった事を称賛されている。規律
の低い軍隊では、物資の横流しや持ち逃げなどが多く発生するのだ
が、それが無いくらいに規律正しい軍隊であつたのだろう。目立った
武功は河東太守就任時の不満分子の一掃くらいしかなく逸話が少な
いが、十分統率力のあつた人物だつたのだろう。

それらの功績をもって、十六年に及ぶ治世は天下第一の治績と称さ
れるに至る。唯才令により集めた魏の有能な家臣達の中であつても、
第一等の治世と称されるほどの内政家。それが杜幾という人物の才
能を端的に表していると思う。

その後は中央に召還され、魏の初代皇帝曹丕の元でも重用された事
が伺える。また、冀州で蝗害こうがいが起きた時に官倉の備蓄を使って救済す
るなど、後年にも徳治主義を貫いている。政治信念として根付いた物
だつたのだろう。

簡単に杜幾の経歴を思い出したが、彼本人よりも彼の孫、それから
子孫からはもう一人。この二人の方がずっと歴史上では有名だ。

孫の名前は杜預。呉帝国を滅ぼし、三国時代に終止符を打った名

將。羊祜の後任であり、破竹の勢いという言葉の語源は彼の発言だったりする。

子孫の名前は杜甫。この時代より数百年後の未来で活躍し、『詩聖』の二つ名で燦々と史書に刻まれる事になる人物だ。

この二人に比べると、いまいち地味さが滲み出てしまうが、それもまたやむ無し。というか二人が派手すぎるだけで、杜幾だつて十分過ぎるほどに優秀な人物なのだ。

さて、そんな人物と同じ名前を持つこの娘が、私の弟子（自称）となる切っ掛けとなったのも農政が大きく関わっている。

どういう事かというところ、私がこの村でやっていた農業について、商人から噂を聞いたのが発端となっている。

とはいっても、最初に聞いたのは数年前、それもただの噂話で、徐州のある村で変わった道具を農業で使っているらしい、程度の情報しかなく、別段気にかけるほどでは無かったらしい。しかし、その村は度々商人の話題に上がる事になる。

曰く、仙術により土地を休ませる事無く、収穫を取り続ける事ができる。

曰く、虫を殺す仙水を農業で使っている。

曰く、糞尿から臭いを消し去るなどの妖術を心得て、さらにそれを使い毎年豊作となるようにしている。

どう聞いても怪しい邪教が蔓延^{はびこ}りだしたようにしか聞こえません。本当にありがとうございます。一応、その手の噂話は笑い話程度でしか広まっていないらしいが、何気に危険な状況になりつつあった事に肝を冷やした。

この辺りの農法は農政書としてまとめ終えて、今回の西涼の乱の討伐完了報告時の謁見のついでに朝廷へ上奏しているので、邪教扱いされる事は今後はない……はずだ。

そうやって幾度も話題に上がる不思議な村に伯侯は徐々に興味を抑える事ができなくなってきたらしい。

そして色々と商人達から話を聞くにつれ、それを主導したと思われる一人の人物の名前に行き当たる事になる。まあ、うちの義父さんな

わけだが。何気に噂話から義父さんの名前を導き出すあたり、情報収集と処理能力が高い事を示している。歴史に名を残す官吏はその辺りにも補正が入るのだろうか。

そして、フアンレターというわけではないが、義父さんへ農政の手法について質問状を送ってきた。それに実際に農法の指導を行った私が返信を書く事で縁ができたわけだ。最初は自分と同年代の人間が主導したとはなかなか信じてくれなかったが。

そして、折角西涼まで遠出するのなら会っておくかと思ひ、隴西郡への出立前に州牧様の許可を得た上で、雒陽へ向かう道の途中で杜陵県に寄り道したのだ。

そうして藍里と一緒に会いに行った伯侯が弟子入りして今に至る、と。その時に交わした会話をピックアップすると、以下の様になるだろうか。

『蝗すげえー！』

うむ、まったくもって余人には意味が分からないだろうが、表現としては間違えていないと思う。

そんな事を考えながら、私はその時の事を思い出しながら、昼食の準備のために厨房へ向かうのだった。

私、杜伯侯が師と仰ぐ目の前の少年と出会う事になったのは、私の抑えきれなかった好奇心が発端となっている。

父が数年前に死んだ後、私は継母ままははによつて育てられた。お世辞にも良い扱いを受けていたとは言えないが、それもしょうがないだろうと納得もしていた。継母からすると、愛する旦那が亡くなり、他の女との間に生まれた私の面倒を見なくてはいけなくなつたのだ。多少は当たり散らしたくもなるだろう。家から追い出されなかつただけまじな扱いだつたと言えるだろうか？そう理解したからこそ、私は継母に対しても実の両親へ接するように、孝心を持って尽くす事ができたのだろう。

さりとて、私も当時は幼く（現在も齡十四と十分若い）母に尽くす事に疑問は感じなかつたが、鬱屈とした感情は持ち合わせていた。

そういつた負の感情を吹き飛ばす、非常に興味深い噂を村に來た商人達に聞いたのは、丁度その頃だ。

『聞いた事の無いような不思議な農法を利用して、麦の収穫量を大きく増やしている村が徐州にあるらしい』

それも一度きりではなく、何度も噂を耳にする事になる。その村の噂を聞く事は当時の私にとって数少ない楽しみであり、村の他の子供達が仙術に憧れるようにその農法に夢中となつた。まあ、中には、明らかに嘘であると判断できるような物、それこそ仙術、妖術を用いているという噂もあつたが。

そうやって噂を聞くうちに、一人の人物の名前が頻繁に登場する事に気づいた。

糜子伯。噂の村の土地を所有している人物であり、その農政を奨励しているのも同じ人物であるという。徐州牧陶謙の側近の一人であり、代々続く富豪の家系の現当主だという事だ。

所在が分かり、連絡が取る事ができるようになると手紙をしたためるまでに大して時間はかからなかつた。

何通か手紙をしたためたのだが、何の返信も無かつた。内容がまる

で無く、ただただ見識の深さを称賛するだけの美辞麗句を書き連ねた手紙なので、当然と言えば当然だろう。私でもそんな物もらったら反応に困る。当時の自分はそんな事も分からなかったのか、と今更ながらに少し落ち込む。

返信をもらった時には、最初に文ふみをしたためてから数カ月が経っていたと思う。

内容はいつもどおりの美辞麗句に加えて、何か作物を増産する術は無いだろうか、とぼやきにも似た言葉を記した。

ええ、しばらくして返信が届き、引っくり返るくらい驚きましたよ。継母には変な物を見るような目で見られ、非常に居心地が悪かったです、はい。

部屋に戻って、期待に胸を高鳴らせながら手紙を一心不乱に読む。読み進めるうちに糜子伯殿本人が書いたわけではなく、息子が書いている事が分かり失望した。が、さらに先まで内容に目を通していくと、驚愕が顔に張り付いた。

私が愚痴った内容について、わざわざ回答を記してきてくれたのだ。

『——とまあ、つらつらと心そのままに書き殴りましたが、話をまとめる」と私たちが今試している新しい農法も、妖術のように何も入っていない壺から麦を出す事はできない、適当な方法で作物の作付けは必要になる、という事です。ならば伯侯殿の望みを叶える方法は、現在植えている作物（おそらく麦ですよね？）から収穫できる量を増やす。または、作付けをする土地を広げるかのどちらかになるかと思いません』

確かに。そう頷くしかないほど当然の事だ。あるいは噂どおりに妖術を使っているのでは、と危惧していたが、それなら私でも方法を真似る事ができる、という事だ。その方法の一部についても一緒に記してくれていた。

『前者の方法は、土地の力を上げて実りを良くする事。それから、鳥に食べられる量を減らす事でしようか。後者は鷹や鷲を飼い慣らさない」と難しいでしょう。飛ぶ鳥を射落とせる腕前のある弓士が

居れば話は別ですが……。なので、前者に話を絞らせて頂きます。私達は肥料を適度に土地に撒く事で地力を回復、増強しています。作り方は、後述しますので、是非試してみてください。また、私達の村で作った物も少量ではありますが一緒に送りましたので、比較用としてください。それから、二毛作はできるだけ避けた方が良いかと思えます。あれは土地を痩せさせる原因となりますので』

そこまで読んで、私は手紙と一緒に商人に渡された手のひらに載るくらいの小さな壺へ視線を移した。なるほど、これの中身はそれか。土と間違えて危うく捨ててしまうところだった。

『それから、土地を広げる際に麦に適した土地が無くなっているようでしたら、粟、稗、黍など雑穀を植えている痩せた土地で、蕎麦を植えてみてはいかがでしょうか？ あれは寒い気候に強く、荒地地でも実をつけます。さらに言葉を付け加えれば、粟と比べてもさらに生育が早く、二、三ヶ月で収穫できて粃のままでも数十年間保存できるので、飢饉の際の備えとなります。さらにさらに、先に挙げた雑穀の類いとは違い、蜂の巣箱もその傍らに置いておくと、はちみつを採取する事もできます。それ以外の作物ですと、胡麻を育てる事ができれば油を絞ってお金に換える事ができるし、絞るかすは肥料に再利用、もしくは家畜の餌とする事ができます。ただ、胡麻は三輔から西涼辺りの気候では寒すぎて、上手く収穫できないかもしれませんのでご注意ください。実際に貴方の住む村を目にすれば、もう少し色々とお言できるのでしようが、今思い付くのはこの辺りが限界です。また何か思い付いたらご連絡いたします』

その後、蕎麦の育てかたと肥料の作り方、使い方が書かれて、手紙は結ばれていた。

いくつか方法を書いてくれているが、鷹以外は比較的簡単に実施できるだろう。やってみる価値はある。そして、次の日から私は手紙に書かれているとおりに行動を始めた。

そして、その後肥料作りを行って、継母に気持ち悪がられたり（臭いが凄いし、何をしているかわからなかったからだろう）、荒れた土地に蕎麦を植えて、村の住人に育つわけがないと笑われたりしながら

も、教えてもらった事を実践し続けた。

結果的に、手紙に書かれている内容は正しかった。作った肥料を書かれていたとおりに使えば麦穂一本当たりの麦粒の数は多くなった。蕎麦も麦穂ほどではないが、きちんと実りをつけて、側に置いた蜂の巣箱からはちみつを採取する事ができた。

この事で一番喜んだのは継母であり、私が行ってきた事の中で、最も喜んでくれたかもしれない。これらの方法を徐州から届いた手紙で教えられたと伝えると、もつと色々聞き出すようにと言われる事になった。まあ、文をしたためる事に苦い顔をされる事が無くなっただけありがたい。

その後も、糜子伯殿の息子である糜子方殿との間に文のやり取りを続ける事となる。主に私から質問を投げ掛け、それに答えを返してもらうという形で。そのやりとりの中で、農法の指導をしたのが御父君ではなく、彼本人と知るのにあまり時間はかからなかった。

そうやって交流を深めれば深めるほど、農業への深い知識に深い尊敬を抱かずにはいられなかった。思わず初めて会った時に弟子入りを志願してしまうほどには。

数年の間そうして糜子方殿とは文での交流を続け、普段の生活では継母に尽くす、そういう日々が続いた。そのままずっとそんな日々が続く、そうやってその時は考えていたと思う。

それに変化が訪れたのは、つい一年前の事。継母が流行り病で身罷ったのだ。父が亡くなってからの数年間、継母にまつわる事が私にとっての最優先事項だった。その継母が亡くなり、私は家族を失った悲しみに涙を見せる事も、良い扱いは言えない状況から抜け出せる事に喜びを見出だす事もできず、ただ途方にくれていた。手紙の主がわざわざ私の元へ赴いてくれたのは、そんな心地が抜けきらない、継母の喪が開けたばかりの頃だった。

「お初にお目にかかります、糜芳、字は子方と申します。とはいっても、文で何度かやり取りをさせて頂いていますので、あまり初めましてという感じではありませんが。近くまで来る機会がありましたので、立ち寄らせて頂きました」

私の住む家を訪れた少年はそう言って、丁寧^{ていねい}に私へ頭を下げた。私もそれに応えるため、慌てて頭を下げて自分の名前を告げた。

「ご丁寧^{ていねい}にありがとうございます。私は杜幾^{とこ}、字を伯侯と申します。先年継母^{はは}を亡くし、喪に服していたため、歓待^{くわんたい}は何もできませんが……」

「先触れも無しに突然訪れて、宴を開けと口にできる度胸は持っていませんよ。それよりも弔問に訪れた形となるのに、何も用意してこなかった我が身の不明を詫びるべきでしょう」

その謝罪こそ不要だろう。継母が亡くなった後腑抜けていたため、一通も手紙を送っていない。彼が継母の事を知っているわけないのだから、弔問の準備などできるはずがないのだ。

そう伝え、私は彼と私の分のお茶を入れるため席を立った。

席につき、まずはわざわざ徐州から訪れる理由となった出来事について問いかけた。すると彼は不思議そうな表情を浮かべて、こう言った。

「西涼で韓遂が反乱を起こしたので、その鎮圧です。来る途中でも徐州勢が討伐へ一役を買ったと噂されていたので、既にござ存じだと思っていたのですが」

自意識過剰でしたか、と少し恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべた。ええ、そんな反乱が起きていた事すら、今初めて知りましたよ。さらに話を聞くと、反乱軍は三輔^{さんぽ}の地まで足を踏み入れていたらしい。何気に危険な状況に身を置いていた事に肝を冷やした。道理で村から住人が少なくなっているわけだ。

今回の戦について話を聞くと、よほど呆れ返っていたのだろう。彼は物資の調達に手間取った事を真っ先に挙げた。

「軍は補給線が整っていない場合には、おこさないべきなんですけどね。下手すれば、守るべき民から略奪をしなくてはならないわけですから」

そうぼやく様に彼は口にした。

兵と簡単に言っても人の子だ。食事も取れば、睡眠も必要となる。その辺りは少し考えれば分かるような気がするのだが。

そう口にした私に向けて、彼は苦笑いを向けてきた。

「本当は貴女の言うとおり、軍を発する前に全部整えるのが朝廷の役割のはずなんですけど、そういう事を考えられる人材が、朝廷内でも少なくなっているのかもしれないね。もしくは、やろうとしてもしがらみで動く事ができないか。どちらにせよ迷惑な話だ」

「結果、誰もやらずに飢えた軍隊が誕生するわけですか」

「武勇を誇る人間ほどその辺りの視点に欠けている印象が強いかな。

良くも悪くも腕つぶしだけで成り上がってきたから、そういう経験を積みなかつたというのもあるんだろうけど」

そう言つて彼は手元で弄んでいた茶碗に口をつけた。

武官で補給に従事する事を嫌がる者は多いと聞く。理由はいくつかあるのだが、必須とも言える迅速に物資量を算出する計算能力が欠如している者が多いため、というのが最大の理由となるだろうか。ならば、武官にやらせるのではなく、文官に専門部署を作るなどすれば良いのではないだろうか。

そう指摘すると、あつさりとは彼は頷いた。

「確かにね。前線と違って、武勇で勲功を得る事ができないし、補給任務は一見功績が見えづらくもあるから、武官達は嫌がるんだよね。もちろん指摘のとおり、計算ができない者が多いっていうのもあると思う。なら、文官に全部任せてしまえば良いと考えるのも当然の事なんだろうね」

そこまで彼は言った後一旦口を動かすのを止めて、茶碗の中身へ少し口を付けてからまた言葉を作り始めた。

「けど、従軍経験があつて戦場の空気を知っている者だったらともかく、ずっと後方にいた文官にその辺りをやらせるのも不安かな」

そこまで彼は言つてから言葉を切つた。そして私の方を見つめて、軽く首を傾げてきた。まるで「君は分かる？」とでも言いたげに。

私は腕を組み、軽く下を向きながら考え始めた。私も従軍経験がないため、思考を走らせて推測をするしかない。

そのまま数分考え続け、ようやく考えがまとまったので口を開いた。

「持参する物資量の多寡についてでしょうか？」

そう口にした私へ、彼はにっこりと笑い、手を叩いた。正解という事だろう。

「そう、そこが問題になると思う。従軍経験の無い文官は、食べ物が無くなった時の兵の統率がいかに困難かが分からない。だから物資を必要な分だけに切り詰めようとする傾向がある。その辺りの計画を作る時には、適正量として算出した数字よりも少し多目に用意をした方が無難なんだよ、本当はね。だから、可能であれば戦場で仕事する武官にも計画の段階で参画してもらった方が良い」

その言葉には頷ける部分も多いが、一つだけ問題があるように思える。

『しかし、多目に持っていった場合、余った物資を返さない者も出てくるのでは？』

『物資の横流しとか、着服だよ。その可能性は多いにあるよね。』

発覚した場合に厳罰を下して規律を高めるしかないんだろうけど……』

兵達の良識を問う事でもあるので、完全に撲滅する事が難しい問題なのだろう。しかし、倉の中を気にするあまり、敗戦するということも馬鹿馬鹿しい。結局は彼の言うとおり、物資は多目に持っていく方が利が大きいという結果になるだろう。

その後も話題は変わりはずれど、私達の話が途切れる事は無かった。そうやって話していて思うのが、糜子方殿の話題がいやに豊富だという事だ。商業や政治、法や歴史まで様々な事を、時に内容を噛み砕き、時に例を挙げながら分かりやすく、自分が話す意図を相手が理解をしやすいような話し方を心がけているようだ。

まるで私塾の師のような話し方だ、そう指摘すると彼は少しきよとんとした表情を浮かべた後、苦笑いを浮かべた。

何でも、昔からそういう話し方に慣れる環境にあったので癖になっており、さらに妹君に教えを授けているため同じような話し方がついてしまったのだろうという事だ。弟子や年少者等、目下の者へするような話し方をした事を謝罪されたが、別段不快な思いをしたわけ

もないので、特に気にしていないと伝えた。

そうやって話している中で、やはり私が最も興味を引かれたのは農業の話だ。

手紙でやり取りをした内容以外にも何か聞ける事は無いかと、積極的に聞き出そうと話を振った。それが分かってか、彼も積極的に話に乗ってくれた。

二毛作をすると土地が痩せていき、実りをつけづらくなっていくという弊害の説明から始まり、休耕地にする事で土地の力を回復させようとする三圃式農業と言われる方法、それから土地で植える物を変え続けて、地力を回復させながら作物を作るという四輪作と言われる方法。手紙で触れる事の無かった内容なので興味深く、興奮しながら話を聞いていた。ちなみに何故手紙でその内容に触れなかったかという点、少し難しい部分があるからだそう。

「どの作物が地力を回復させる事ができるか、なんて分からないでしょ？ 適当に何でもかんでも植えられて、地力が回復しなかったら大飢饉が発生しかねないって」

中途半端な知識で物事を行おうとすると、ろくな結果にならないという事か。

「まあ、農政書にその辺りをまとめて上奏したから、そのうち中華中に広まる事になるとは思うよ」

そう、少し得意気に彼は話していた。

他にも色々話していたのだが、もつとも衝撃的だったのは蝗の話だろうか。

蝗害。それはこの中華において、三大災害に数えられる物だ。非常に身近にある、生命を脅かす驚異といえる。蝗害が起こると、戦場で対陣していても即座に停戦が発生するほどに影響のある事象だった。

「言うまでもないかもしれないけど、蝗害は蝗が大量発生して、草木を食い尽くすという大規模な災害。起こると飢饉の原因となったりもするから、干魃、水害と並んで三大災害として数えられている。

ただし、このうち蝗害だけはちよつと毛色が変わる。干魃や水害は天災という事ができるけど、蝗害は人災に近いと思っっている。」

彼の言葉を理解するまでに、少し時間がかかった。蝗害は一般的に、政治が乱れている事への天罰だと言われている。それが人災、つまり人間が原因で起こりうるという事ですか？

そんな風に考えていると、彼は苦笑を浮かべながら言葉を続けた。どうやら当惑している事が表情に出ていたようです。

「信じられないかもしれないけど、ひとまず説明を聞いて、その後判断してくれると嬉しいかな。とりあえず、話を続けるね。伯侯殿は蝗がどういう所に住んでいるか分かる？」

「草地ですよ？ よく草の上に止まっているのを見かけますけど」

「正解です。蝗は背の低い草むらに住んでいます。それじゃあ、追加でもう一つ。どういう場所を蝗は産卵場所に選ぶのでしょうか？」

「土が柔らかくて草が生えてる場所では？ 何度かそういった土地を掘り返して見つけた事がありますが」

「そうそう。蝗は土が柔らかくないと卵を産み付けられない、近くに食べられる植物が無いと卵からかえった後に成虫になる事ができない。そんな立地条件を満たす場所に、蝗は卵を産み付けるわけだ。

さて、その中でも何も植えていない耕作地。これはある程度行政で作らないようにする事ができます。手が回らず、何も植えない耕作地を作らないようにする、または耕作した後にも草が生えないようにきちんとむしり続ける」

そうは言うが、手が回らないから何も植えないのだから、何も植えていない場所の草取りを行う労力を捻出するのは現実的ではないだろう。その余力があるならば、作物を植える面積を増やす。

「まあ、それはそうだね。私でもそういう判断を下すよ。まあ、本題に行こうか。『どうすれば蝗害を防げるか』」

「……できるのですか、そんな事？」

蝗害は一度発生すれば、人の力で止める事は難しい。雲霞の如く押し寄せる蝗の群れを止める方法。もしそんな物があるならば、それこそ妖術の類いにあたると思うのだが。だが、彼ならばあるいはと姿勢を正し、期待して次の言葉を待つ。

「うん。期待してくれているところ悪いけれど、はつきり言っ
てこってしまった蝗害を防ぐ事はできない」

「ですよええ。あれに打ち勝つのは、万の大軍に一人で打ち懸かりに
行くような物だ。」

期待していただけに、彼の台詞を聞いて思わず脱力。そのまま机に
突っ伏してしまう。

思わず恨めしげに彼に視線を送る。その視線を受けて、彼は何度め
かの苦笑いを浮かべた。

「まあ、発生した蝗害は止められないかもしれないけど、発生を防止す
る方法ならあるよ。完全に時間と手間の勝負になるんだけど、卵や
まだ飛べない幼虫を殺していく。そうすれば蝗の数が減って蝗害
の被害は出にくくなる。卵は土を掘り返せばすぐに見つかるくら
いの深さにしか産み付けないから、見つける事は容易いと思うよ」

「……それ、土地を一ヶ所ずつ見回っていくと、必要な労力が多くなり
すぎませんか？ とてもじゃないけど、全部見て回るのは無理だと思
うんですけど」

「まあ、確かにね。ただ、ある程度候補地を絞る事はできるよ。そ
こを中心に探して卵を焼き払えば良いんじゃない？ 仮に少しくら
い残っていたとしても、春先の飛べない幼虫は捕まえやすいから、捕
まえて踏みつければそれだけでさらに数を減じる事ができるし」

あれ？

ここで彼の言葉に少し違和感を感じる。彼の話では、耕作していな
い農地が産卵するのに適した土地だとの事に当たるのでは？なので、
そのまま疑問を言葉にした。

「候補地ですか？ 耕作を放棄した土地以外では、どこに卵を産んで
いるか分からないのでは？」

「いや、ある程度は候補地を絞れるよ。ここでさっき話した干魃と
水害との関係に話が繋がる。水害によりできた氾濫原。それか
ら、干魃によってできる渴れた川の跡。どちらも水が流れた後なの
で土が柔らかい上に草が生えやすい。産卵にはうってつけの土地
になるよね。密接に関わる部分というのはここ。水害や干魃が

起こった後、河川の周辺地域は必然的に蝗害が発生しやすい環境が整えられる事になる」

それを聞いて、思わず私は唖ってしまった。

確かに水で湿った土地なのだから、土は柔らかいし、草も生えやすい。産卵地の条件を兼ね備える事になる。

「まあ本当かどうかを確かめるには、冬の間にもそういう土地を掘り起こしてみれば良いと思うよ。大量の蝗の卵を見つける事ができるから。この周辺だと、渭水とその支流の近郊が候補地になるんじゃない？」

確かにこの辺りなら、渭水周辺が対象となるだろう。荒野に近い周辺は除外して、その辺りを確認するだけで大分絞り込む事ができる。

「で、付け加えると一度蝗害が起こると毎年のように発生が続くのも、ある程度は説明がつくよ。あれだけの数の蝗が一斉に卵を作るから、次の年にもう一度同じ事が繰り返される事になるわけだ」

ちなみに、政治が乱れている時に蝗害が起こりやすいのは、きちんとした農政が行えなくなっていて、休耕地が大量にある場合や、土地を耕していた者が離散して放置された場合などが考えられる、そう付け加えるように言葉にしていた。

蝗害を天の怒りなどではなく、人災と評したのはその辺りを念頭に置いての事なのだろう。

「まあ、住んでいる場所だけで予防しても駄目なんだけどね。近隣の州で蝗害が発生したら、飛蝗が飛び火する可能性があるからね」

彼の言うとおおり、蝗は虫だけあって飛んで移動ので、水回りにだけ気を付ければ良い水害と比べて、発生した際の被害を受ける範囲が桁違いに広くなる。

「もつとも、ここを起点に発生させないだけでも被害地域を限定的にする事はできるから、できるだけの事はやる方が良いだろうね。もちろん、中華中で予防の動きをしてくれるのが一番良いのには違いはないけどね」

例えば西涼で蝗害が起きたとしても、長安では被害が出るかもしれないがそれより東では被害に合わない、そういう事だろう。如何に蝗

と言えど生き物であるので、飛び去る事ができる距離は決まっているのだから。

「これは言うまでも無い事だけど、もし蝗害で被害が出た場合は即座に倉を開いて飢饉の起きている地域へ食料を出さなくちゃいけない。そうしなければ蝗害が起こった後に民心が朝廷から離れていつて反乱に繋がる事もあるからね。災害が起こった後の行動についても適切な判断を下す必要があるっていう好例だね、これは」

倉廩満ちて礼節を知り、衣食 足りて榮辱を知る。

管子の言葉であるが、食べ物が無くなれば法を破り他者から奪おうとする者は必ずいるだろう。それを防止するためにも、即座に官倉を開いて民を救うべく動く必要がある。

その後、どうすれば起こった蝗害を防げば良いかを聞いてみたが、なかなか難しいようだ。もしできるとしたら、と例を上げてもらったのだが、とても実現できそうにない。

「もし起こった蝗害を防ぐ方法があるとすれば？ そうだねえ……。例えば鉄で作った網目が蝗の全長よりも細かい網で畑を覆うくらいじゃない？ ただ、ずっと覆いつばなしだと、太陽を浴びられずに生育不良が起きそうだし、そもそも鉄を糸や紐のように細く加工する技術力は無いだろうし難しいだろうね」

鉄を扱う技術もそうだが、それだけの鉄をどうやって捻出するのかという問題もある。そんな風に使うのであれば、武器を作る事を選ぶだろうし、そもそもそんなに大量の鉄を手に入れる資金をどうするという問題もある。現実的に考えて無理だろう。

ちなみに、蝗は網なども平気で噛み破ってくる。それこそ鉄製など頑丈な素材で作らないと無駄になるのだ。

また彼の話によると、蝗の群れは五百億匹（戦功報告時によく行う、実際の数から水増しをせずこの数字らしい）にも達する事があり、大きさも最大で青州の山東半島くらいの大大きさに達する場合もあるとの事だ。よほど条件が揃わない限りはそこまでは行かないだろうと付け加えていたが、そんなのが発生したら間違いない漢は滅びるだろう。思わず背筋に冷たい物が走った。

さて、こうやって話続けていたが、そろそろ彼が帰る時間が近づいてきたようだ。窓から外をちらちらと気にしていた。

「そろそろお帰りですか？」

「……はい。名残惜しくはありますが、軍の統率を副官に任せて来ていますので、そろそろ戻らないといけませんね」

では私も彼に付いて行くために準備を始めるべきだろう。この村からも多くの人が逃げすぎて、遠からず村としての体を為す事ができなくなる。良い機会と言えば良い機会なのだ。

さて、彼と一緒に行くためには、どうすれば良いだろうか。やはり教えを乞う事をしやすいように、弟子入りを志願する方が良いだろう。下手に私塾に入り過去の偉人の書物を暗記するよりも、彼に弟子入りして政務を手伝いながら実践的に学を身につけていく方がもっと自らを高めていく事ができる。

それに、彼と話している間に、継母が亡くなって以来ずっと空虚だった心に熱が戻っている事に気づいていた。色々と興味深い話を聞く事ができたので、元来備えていた好奇心が刺激されたのが原因なのだろう。そうなると、私は彼と一緒にいる方が元氣を取り戻せるという事だ。うん、故郷の村を離れたくはないが、これはしようがない。ずっと空虚なまま生きていくわけには行かないだろう。いやー、困ったわー。

そんな風にも無い事を考えながら、私はどうやって彼を説得して弟子入りを認めてもらおうかと考えを巡らせ、いやに弾んでいる心のままに言葉を作り始めるのだった。

幕間六 Honey Honey — 蜜のように甘く—

昼食を食べた後、私達は予定通り蜂の巣箱に向かう。王虎を連れて来たがった幼女が二人いたが、万が一刺されたら大変なので家に置いてこさせている。

ちなみに子山は家で仕事をしてもらっている。この村で過去採れた蜂蜜の量の記録を探してもらっている。快く引き受けてくれた従弟殿に感謝。

輪作のために植えている白詰草クローバーを横目に見ながら、巣箱の置いてある場所まで歩く。白詰草の白い花が遠目からでも確認できるくらい咲き始めている。麦ももう少しすれば収穫の時期がくるだろう。

昨年の収穫の後に州牧様と義父さんに西涼で動乱が起こる事を示唆したのだから、そろそろ一年が経とうとしているのか。光陰矢の如し。少しは私も成長する事ができたのだろうか？ 自己の成長はともかく、人脈は着々と増えてきているのだが。

そんな事をぼーっと考えていると、そういえば白詰草の説明をしていなかったかと思ひ出し、藍里と伯侯の方へ向き直る。

「藍里、伯侯。輪作については二人へ話したよね？ 豆の類が重要な役割を果たすって」

「はい、伺いました。確か、大地の力を回復するのに一役買うのでしたよね」

なんかその言い方だと前世でプレイしたRPGを想像するなあ。

そんなどうでも良い事を考えつつ、私は肯定の意味を込めて頷いた。

「そうそう。一つの土地で大麦、豆、小麦、根菜の順に作物を変えながら植えていく事。ちなみにそこに咲いている花。豆の代わりになるから」

その私の言葉に二人一緒に白詰草の方へ向き直る。

「……豆じゃないんですが」

「多分豆の仲間なんですよ。ちなみに私が試験した時に使ったのはあの花と大豆だね」

「豆ではなく、あえて白詰草を植えている理由も併せて説明しておく。牧草、つまりは豚をはじめとした家畜の飼料とするためだ。一応白詰草の葉は人間用の食料にもできるのだが、美味しくないなのでこの村では飼料として利用している。」

タンパク源である魚や枝肉を腐らせずにここまで運ぶ労力を考えると、自分達で豚肉、鶏肉を用意した方がコストは安上がりとなる。なので、村の一部に家畜小屋を作って育てているのだ。

今年の冬も何匹か潰したのだろう。今日の昼食に出した腸詰めも材料も間違いなくそこだろう。犠牲になってくれた豚達の冥福を祈りつつ美味しく頂いた。

「師父、質問があるのですがっ！」

「はいっはいっ、と元気に手を挙げながら伯侯が私に質問をしてくる。」

最初に会った時には継母を失ったショックから立ち直れておらず、どこか精気が無い様子だったのだが、今はこうして積極的に私から農法を学ぼうとしている。

つい先程も子山の案内で村を巡って来ており、いたく興奮した様子を見せていた。主に私が作った唐箕や千歯扱きなどの農具に興味を引かれていたようで、家にあつた実物を見て目を輝かせていたのはつい先ほどだ。いい加減巣箱を見に行かなくてはならない時刻になったので、いつまでも張り付いているのを無理矢理引き剥がして連れてきた。

彼女が元気になる一助になれているようで何よりだ。

「今の説明だと、大豆等を植えて備蓄に回した方が良くないですか？」

「極端な話、大豆だって飼料に転用する事ができるのですから」

「かかる手間の問題」

「私はあっさりと伯侯の質問に答えた。」

「極端な話、白詰草は何も世話しなくても勝手に繁るから。雨が降って水が足りていれば、だけどね」

もちろん、秋から冬にかけて土地を掘り起こして蝗の卵を除去する必要があるが。

「その分の労力を他の作物にかけられる訳ですか。よく考えていますね」

藍里からはそう感心されるが、所詮は先人の知恵であるノーフォーク農業の模倣に過ぎない。私が凄いのではないので、微妙に背筋がむずむずするが、極力気にしないようにして、言葉を続ける。

「それからもう一つ。蕎麦と同じ理由で植えているというのもある」

「蜂蜜？」

私達の会話に、天明が加わってそう答えた。さつきまで子麗と楽しそうに話していたのに、いつの間にかこちらの会話に加われる機会を窺っていたらしい。子麗と二人、こちらの方を向いている。

「天明、正解。蕎麦や果樹と同様、白詰草は蜜源植物として利用できる。花が咲き始めている今の季節だと、あそこで遊ぶには蜂に刺される事を覚悟する必要があるかな」

それでも村の子供達の姿が見えるわけだが。

何せ耕作地で土が柔らかく、草がクツションになるので転んでも怪我をしづらい。大きな石も無いため、躓く心配も少ないだろうし。

蜂達に刺されないように注意するならば、子供達にとっては格好の遊び場なわけだ。

「ちなみに、今から見に行く巣箱と同じ物は、徐州の何カ所かで設置が始まっている。主に桃や蜜柑の植えられている果樹園の近くだね」

「花の近くに置く事で蜜が取りやすくなるからですか？」

「それもあるけど、果物の実りが良くなるからってという理由の方が大きいかな。村に植えられている桃も多く実がなっていたでしょ」

虫媒と言われる受粉方法だ。本格的に受粉の研究が始まるのは十九世紀に入ってからなので、虫媒はこの時代の中華では知られていなかったようだ。

二十一世紀の日本では、ハウス栽培のイチゴを受粉させるために使われるのが一番メジャーだろうか。

風媒より確実性が増すし、人工受粉は手間がかかりすぎて無理。だから、この時代なら養蜂が一番現実的な受粉方法となる。

そうやって講義と雑学を合わせたような話をしながら歩いていると、あつという間に村外れにある巣箱まで辿り着いた。

「到着ー」

「到着ですー」

天明が両手を上げて到着した事を宣言し、子麗がそれに追随するように同じ言葉を繰り返す。そしてそのまま競争するように巣箱へと駆け出していった。

……子供ってあれが普通だよなあ。

この村での過去の自分の様子を思い出し、その違いに軽く頭が痛くなる。まあ、過ぎ去った日々はやり直しができないので、どうしようもないか。

頭を少し振って意識を切り替える。

目の前には肌が露出しないように作られた作業着を着ている人が数人いる。胸の膨らみから分かるように、全員が女性だ。

この村、それから他の村でも、養蜂は若い女性の仕事としている。千歯扱きを導入するにあたって、未亡人達から脱穀の仕事を奪ってしまうので、代わりの役目としてやってもらう事になっている。未亡人だけでは人数が足りない事も考えられるので、未婚女性にも入ってもらっているのだが。

巣箱の管理から蜂蜜や蜜蝋などの採取まで、取蜂に刺される危険性は確かにあるが、力は農作業ほどは使わないので、女性でも全く問題なく行う事ができる。

あちらも私達に気づいたようで、片手を上げて近づいてきた。

「来たね、芳坊」

「坊はやめようよ、周姉さん。流石にこの歳で子供扱いは……」

「良いじゃないか、分かりやすいんだし。今さら呼び名を変えるのもめんどくさいよ」

このさばさばした性格の女性は周姐さん。この村の女性達を取りまとめている人だ。面倒見が良く、気っ風も良い人であるため村のみ

んなから姐さんと慕われている。

私も例に漏れずお世話になっているので、頭が上がりなかつたりする。

とりあえず、初対面である藍里と伯侯を紹介する。その後、二人も予備の作業着に着替えるために、作業小屋へ連れていかれた。私は長袖の服を着ているので、手袋と頭巾だけを借りるつもりなので此処に残っている。

子供用は流石にないので、天明と子麗の年少組は遠心分離機から見学開始かなー。二人は道具を準備している娘さん達の手伝いに行つたようだ。

なので、この場には私と周姐さんだけが残されたので、雑談をしながら藍里達を待つ。

「そーいや、お祝いの挨拶が遅れました。　ご再婚おめでとうございます」

「ああ、ありがとうよ。　おかげでまた毎日旦那を尻に敷く毎日さ」

その言葉に苦笑を浮かべてしまう。

今の言葉から分かるように、先日まで未亡人だった周姉さんは連れ合いを亡くしていた男性と再婚した。姐さんも相手の方も二回目の結婚という事で華燭の儀は執り行わなかったが、村で人気のある周姐さんの吉事という事もあり村を挙げての宴会をしたらしい。

私は出兵中、姉さん達は州府の仕事が忙しかったため出席が叶わなかった。代わりにお金を出してお酒と料理をお祝いの宴に添えさせてもらった。

「けど、良く考えたね。　脱穀しているだけじゃ、男を捕まえる事なんてできないから正直ありがたいよ」

「そこが主目的じゃなかったんだけどね」

あくまで主目的は千歯扱きの導入による農作業の効率化だ。

ただし副次的な効果として、この巣箱周辺は男女の出会いの場になりつつあるらしい。

どういう事かというと、脱穀は基本的に家の中での作業となるため、籠りきりになってしまう。しかし養蜂を行う事で、巣箱の管理の

ために外に引つ張り出されるので、異性との出会いが起きやすくなり、村の若い衆と良い関係になつている人達も数人いるらしい。さらに、周姐さんというご成婚第一号が生まれた事で、ますますその流れが加速していく事になるだろう。

ちなみに周姐さんのお相手は、隣村（椿を植えている、私達の村と色々交流している村だ）から蜂蜜について学びに来ていた人らしい。蜂が取り持った仲と言う事ができるだろう。実にめでたい限りだ。

まあ、問題も出始めているようだが。

「ただ、ここにいる娘さん達の気を惹こうと、若い衆が畑仕事そつちのけでこつちに来ようとしていて聞いたんだけど」

事実だとしたら大問題だ。収穫に影響が出る事が考えられる。

「ああ、事実だね。とりあえず、『畑仕事もろくにしない奴にこの娘達を渡せるか！』つて一喝して追い払っているから、今のところは大丈夫だけだね」

周姐さん頼りになるなー。

思わず尊敬の眼差しを向けてしまう。

「主にこつちに来ているのは家を継げない次男坊、三男坊、それも元々真面目に仕事をしない奴等ばかりだよ。まったく、何を考えているんだか」

「女房に食わせてもらいたいと考えているんじゃない？ まあ、そういった手合いへの対応は今の姉さんの態度で間違えていないから、どンドン追い返して。仕事をまともにしない男を旦那にしても娘さん達が苦勞するのが目に見えているしね」

この村の場合、その辺は女性の方がしっかりしているか。村の女性はダメンズには手厳しい。伴侶選びを間違えると、自分も不幸になるので当然とも言えるが。

その点、余裕がある町暮らしの娘さんの場合、愛で男を見る目が曇ってしまう場合が多い。

海姉さんや空さんの場合、自分達が高給取りなので余計にダメンズ共が食わせてもらおうと群がるそうだ。変な男に引つ掛からなければ良いんだけど。

「人の事は良いけど、そういうあんたはどうなんだい？ 海と空みたいに可愛い娘をいつも侍^{はべ}らせて、今日も別の可愛らしい女の子達を連れてきてるじゃないか」

「無い無い。 仕事が忙しすぎて、仮に良い人を見つけたとしても相手ができる時間が限られちゃうって。 しばらくの間は仕事が恋人になりそうだよ」

そもそも姉さん達は家族だし、藍里と伯侯は義兄として、師として慕ってくれているのだ。そういう関係にはなれないだろう。

そう伝えると、周姐さんに大きく溜め息を吐かれた。いや、なんでさ？

問い質そうとした時に、丁度藍里達が着替え終えて戻ってきてうやむやになってしまった。

「さあ、それじゃあ今から今年最初の蜂蜜採りを始めるよ！ 芳坊、良いんだよね？」

「うん。 あくまで試験だから問題無いよ。 年越し分はもう採り終えてるんだよね？」

「ああ、抜かりは無いよ。 七日前に採り終えてる」

念押しされたのは、今の時間に採った蜂蜜は薄くなってしまう事に對してだろう。

蜂達が集めた蜜は本来糖度が低い。それを五日ほどかけて巣内で熟成させる事で、糖度の高い、甘い蜂蜜になる。

だから、通常蜂蜜採取をするのは熟成が終わっている事を確認した翌日以降の早朝に行く。早朝の理由は、蜂達が活動を始めて新しい蜜を採って来た物と混ざらないようにするためだ。現在のように昼過ぎの時刻となってしまうと、もう混ざって薄くなってしまっているだろう。

だが、今回はあくまで一回の採取でどれくらいの量を採る事ができるのか、それを確認するのが目的となる。味はそこまで重要ではないので、この時間に採取してもらう。採った蜂蜜は自家用として使用するつもりだ。

それから年越し分というのは、冬前に蜂達が採ってきてきて巣内に残っ

ている古い蜂蜜の事だ。別段そのまま食べても問題の無い物だが、質が均一にならないため商品用には混ぜないようにしている。これも自家用としてこの村内で消費する事になる。

周姐さんに促されて、私と藍里と伯侯は巣箱へと近寄る。道具を持った娘さんが作業を進めていくのをみながら、私は横で解説を始める。

「まず、燻煙器を使って蜂達に煙を吹き掛ける。これをすると蜂達が大人しくなるから、その後の作業が簡単になるからね」

これを使わないと、蜂達が襲ってきて作業にならなくなる。

娘さん達も慣れた手付きで煙を吹き掛けて、蜂達を大人しくさせていつている。

「それから巣枠を取り外して、しがみついている蜂達を振るい落とす。

それでもしがみついているようなら、専用の刷毛で払い落とす」

巣枠を取りだし、そこから蜂を巣箱に落としていく。思っていたより蜜蓋ができている良い状態だ。蜜蓋は一般的に巣の三割程度を覆っていれば問題ないので、五割近く塞いでいるこれは大分状態が良い。もったいなかったかもしれない、そんな貧乏性な考えが頭に浮かぶ。

それから、蜜蓋を作業用の包丁で切り落とす。

「これが蜜蓋。これがあると蜂蜜が出てこないから切って除く必要があるわけだ。それから巣を遠心分離機にかける」

天明と子麗が待つ遠心分離器の近くまで巣を運んで、手早くセットする。

「それから遠心分離機の取っ手を握って、ぐるぐると回す。回すのが早すぎると巣が壊れるから、適切な速度で」

ぐるぐると二十秒ほど回すと、下に蜂蜜が溜まり始める。藍里達から感嘆の声が上がった。

「こうやって蜂蜜を採るわけだ。それから採り終えた巣枠は巣箱に戻す。これで作業の一連の流れはおしまい。力仕事な部分もあるけど、簡単でしょ」

本当は他にも駆蜂器や分蜂などの説明もすべきなのだろうが、あく

まで官吏として知っておけば良いであろう、蜂蜜の採り方だけを解説するつもりなので割愛する。あまり多く詰め込みすぎても大変だし、本格的に養蜂家になるわけじゃないならこれくらいで良いだろう。

「で、これを濾過して不純物を取り除いたら商品になる。これは熟成前のも混ぜられているだろうから、そのまま売り物にする事はできない。だから、ここにいるみんなで分けようか」

当初の目的であった採取量の測定を終えた私がそう言うのと、周りから歓声が上がった。子山には既にその旨を伝えているので、問題ないだろう。

周姐さん達にお礼を言って家に戻り、昼の準備のついでに作っておいたスコーンに蜂蜜を付けて味見する。その場で今回の採取方法について質問を受け付ける。

結局分蜂を防ぐために女王蜂を取り除く話や、スズメバチを駆除するための駆蜂器の説明もするはめになった。さつき現物がある状態で説明してしまえば早かったな。

「それで、今日取れた量はどうでしたか？」

一通り質問が終わり、女性陣が夕食の準備を始めたタイミングで子山からそう質問された。

現在この場には私と子山しかいない。姦しい喧騒が台所に移り、まったりとしていたので少し反応鈍く返答をする。

「あー、やっぱり今日取れた量も、探してもらった記録の量も予想と近い数字になっているから間違いではなさそうだねー。後は、少ない数字になった巣箱からの採取方法を確認して、問題ないかの確認かなー」

「それで問題無いようだったら、誰かが着服しているわけですね」

正直そこまではしたくはないのだが、流石に予想量の半分以下しか採れないっていうのは異常だ。誤差の範囲に収まらない。採取方法を根本的に間違えているのか、それとも横流ししているかだろう。

「蜂蜜は徐州以外だとまだ高級品だからね。他州の商人へ売れば良い小遣い稼ぎになるんだろうね」

あー、面倒くさい。

そんな心情を込めてため息を吐く。

可能性としては横流しの方が高いだろうと思っている。初めは予想量よりも少し少ないくらいだったのだが、ある時を境にずっと少なくなっているからだ。

「とりあえず、州牧様へは一時報告をして、その後採取方法の確認、担当した官吏の洗い出し。そこから先は上の人たちの仕事だから、州牧様達に丸投げだねー」

人事権、逮捕権のどちらも持っていない以上、それ以上は何もできん。

そこまで話し終えて、また会話が途切れる。

「そういえば、話は変わるけど子山」

「はい？」

「手紙で伝えた事。 どうする？」

まあ、簡単に言うとは仕官のお誘いだ。

三年経っているし、歩家への風当たりも大分弱くなっている。ブツチャーさんが与えた影響に付いても、ほとんど考えなくて良いくらいになっている。農政についても大分習熟しているわけだし、そろそろ仕官しても良い頃だと思ったので、先に手紙で連絡していたのだ。

「仕官するのは吝かやぶやではない、というより非常にありがたい話なのですが」

「ですが？」

「いきなり東海郡の功曹書佐って随分と難易度高くないですかね？」

「そう言われてもなあ」

東海郡の功曹書佐は元々は景興さんが付いていた役職だったのだが、州府付きの治中従事史に出世した事から空席となっていて役職だ。なので、東海太守である漢瑜様の主簿である元龍が臨時で代理を務めていたのだが、如何せん太守の息子が要職を二つ兼ねる事に郡府から不満の声が出始めたらしい。なので、急遽適当な人材が居ないかと州牧様を通して相談された。陳応？ははは、それは無い。演義ベースの性格をしているので、相当あれな感じな人間なのだ。具体的には父と兄である陳親子が揃って頭を抱えるくらい。

私の知っている在野の人材の中で真つ先に思いついたのが子山だったので、それなら子山を登用すると同時に歩家を再興させてはどうか、と提案したのだ。

元々歩家の再興に関しては予定に有ったわけだし、有能な人間である事は間違いないので、最初から要職に就けたとしても十全にやり遂げるだろうという判断だ。

さらに私が推挙、抜擢した人物は概ね才を發揮しているというのも説得の材料となる。若年で県尉となった宣高と文嚮はもとより、今回の西涼の乱で副官を勤め上げた藍里、それから下_田の丞になった人物まで軒並み優秀な人材を推挙できている。ここで私の意見を必要が求められたのも、その実績を見込まれての事だろう。

「子方か子瑜が付けば良いではありませんか」

「藍里には聞いたけどにべも無く断られた。私の扱いについてもどうやら州牧様に腹案が有るらしく、却下されたんだよね。そうやって断られた結果、っていうのも失礼な話だけど、子山に白羽の矢を立てたわけだ」

「私に勤まるんですかねえ……」

余裕だろ、とは歴史知識を持っている身だからこそ言える事であり、悩んでいる張本人としては至って真面目なのだろう。

「子山、悩んでいるという事は、受けるかどうか迷っているという事なのでしょう？　ならば失敗する事を恐れずに行動した方が後悔しないと思うのだけど」

と、横から藍里が口を挟んできた。料理の方はどうしたのかというと、あれだけの人数が居ると台所が狭いので、下拵えだけ終えてこちらに戻ってきたらしい。

うん、藍里良い事言った。言ったんだけど……。

「それ、私からの提案をにべも無く断った藍里が言うのは何か間違えていると思うんだけど」

私がジト目で見ながらそう言うと、スツと顔を横に背けられた。どうやら自覚はあるらしい。

その私達の様子を見て苦笑しながら、子山は口を開いた。

「確かに子瑜の言う事に一理ありますか。子方、お話受けさせて頂きたいと思えます」

「了解。陳太守には私から伝えておくから、招聘の連絡を待っていて。それまでの間に村長の引継ぎとか済ませておくようにね」

これで、子山も仕官させる事ができた。私の知り合いで仕官していない人間の中で、徐州で仕官させられそうなのは伯侯なんだけど、しばらくは私にくっついて勉強したそうだし、難しいかもなあ。

ただ、これだけでも史実の徐州よりも随分と人材に恵まれている状況なのだ。宣高、文嚮という軍の核になれる人物がいるだけで、大幅に戦力が増強されているし、文官も呉に移住する前の藍里や子山を仕官させられているのだから。それでも徐州を草刈場にしないためにはまだまだ足りない、と思えてしまう以上、霸王と名族を私は余程恐れているのだろう。

思わず自分の臆病さに溜め息を付くのであった。

ここからは後日談となる。

あの後も蜂蜜について追跡調査を行い、やはり横流しが行われていた事を確認した。

どうやら、州府で買い取る額よりも高い額で売る事ができたらしく、背景にあったのは巨大な陰謀などではなく、やはり賊吏の小遣い稼ぎにあつたらしい。迷う事なくそれに関わった官吏を処罰し、職務を剥奪した上で州から追放処分を言い渡した。

ただ、気になるのはその販売先。どうやら豫州汝南郡辺りを本拠地にして活動している商人相手に売り払ったらしい。……汝南で蜂蜜というと、一人の人物が頭に思い浮かぶのだが、彼（もしくは彼女）が関係しているのだろうか。確かに彼の人物であるならば、徐州にちよつかいを出してきてもおかしくはないし、小手調べとしての謀略を仕掛けてきたと考える事もできる。

しかし、それにしてもやる事があまりにも小さく、徐州への謀略という意図が薄いように感じる。確かに州牧様の威信を落とす様な行動である事は間違いないのだが、そこから開戦に繋げられるような物では無いのだから。

仮に私の考えているとおりの人物であるならば、一体何を考えて動いているのだろうか。彼の一族の持つ影響力と、その名声にふさわしくないような小さい行動の不釣合いを非常に不気味に思いながら、かの名家に連なる者へ警戒を新たにするのであった。

幕間七 Kindness — 氣遣い—

私達の家族が揚州で消息不明になったのは、私が学院で教えを受けるようになって二年ほど過ぎた頃だったろうか。今でも家族がいなくなつたかもしれないという恐怖は心に張り付いているのだらう。時々思い出したように当時の事を夢に見て飛び起きる。あの時、私も妹の黄里も生きた心地がしなかつた。

家族の消息が途絶えたというその噂が私の耳に入った時、私はすぐに学院を飛び出して家族を探しに行こうとした。それはすぐに水鏡先生に戒められる事となつてしまつたが。

確かに武の心得が無い私では、家族の消息を掴むまでに命を落とすなり、人買いに捕まるなりをしていただらう。その先生の判断は間違ひなく正しい。取り乱していた頭でもそのくらいは分かつていた。

それでもじつとしていられなくて、夜が更けるのを待つてからこつそり学院を脱け出した明くる日、私は自室の寝台で目を覚ました。頭に大きなたんこぶをつけた姿で。

脱け出そうとする事を予期していた先生の命を受けて、元直ちゃんが暗がりにも身を伏せており、背後からの一撃で意識を刈り取られたらしい。

これは、私が目を覚ました事に気づいた後、涙目で黄里が始めたお説教で知つた。うう、妹に説教されるなんて、姉の威厳がどんどん減つていくよう。

その後も無茶をしようとした事を雛里ちゃんに泣かれ、元直ちゃんに呆れられ、水鏡先生にお灸を据えられた。

はい、もう反省した！二度とやらないので、みんな許してくださいー！

義兄さんからの手紙と荷物が届いたのは、それから三日後。いつも義兄さんは麿家の商人づてに手紙を送るのだが、これは関係のない別の商家の人に頼んだらしい。急ぎだったため、こちらに来る麿家と縁のある商人に頼めなかつたのではないか、届けてくれた人はそう言つ

ていた。

その手紙が届いた時、私は謹慎中だったため授業に出ずに自室で書を読んでいた。とは言ってもこの時は気持ちが塞ぎ込んでしまっていたため、目で文字を追うだけでまったく頭に入ってはいなかったのだが。

黄里は授業のため居なかったと記憶している。なので、手紙は一人で読んでいった。

内容としては、噂には無かった預章で諸葛家に振りかかった災難の詳細と、義兄さんの情報網を使って私の家族を探してみるのだから今は大人しく学院で待っているようにとの言付けだった。

伯父さんが預章郡の太守に任じられた事から始まった騒乱、その顛末について詳細として書かれていた。日頃送られてくる手紙には、私へのからかいの言葉で満ちているのだが、この手紙はそういった無駄な内容を省いている事から、義兄さんの掴んでいる事実が記されているのだろう。

あ、あと数日早くこの手紙が届いてくれれば……！

色々とやるせない気持ちが芽生えるが、手紙の文字の乱れから察するに、義兄さんも噂を聞き次第すぐに私へ手紙を送る手配をしてくれたのだろう。これ以上早くと望むなら、それこそ空を駆けるなどの現実的でない手段を用いる必要があるだろう。

次に、届いた荷物を確認すると、書物が数冊と大きさに対して重量がある封のされた小箱だった。まずは書物を取りだし表題を確認し、何度か頷く。

義兄さんは時々こうして書を送ってくれる。新しい製本方法を試した結果だと、何度か前の手紙に書かれていた。試した、と言いながらも、義兄さんは必ず私の持つていない書を贈ってくれる。そううちよつとした心遣いが本当に嬉しい。

そういえば、いつもは手紙に書物に関する寸評も書いてくるんだけど、それも無かった事に思い至る。余程慌てていたのだろう。

書は学院でも貸し出してくれるが、自分の本ではないので書き込み等で汚すことは堅く禁じられているし、みんなが借りようとするた

め、望んだ書が借りる事ができるか分からない。なので、自習をする際には自分で写本を作るか、書店で買うなどしなければ自分の書を手に入れる事はできない。

もつとも、本を家から持ってこれている裕福な生まれの子達以外、つまり私達のような貧乏学生にとって本は高すぎるため、専ら写本となる。なるのだが、稀少本は先輩方が優先して借りる暗黙の了解があるらしく、私達のような若輩者にはなかなか回ってこない。

また、自分の写本を貸してくれる優しい先輩もいるのだが、自分の努力を後輩にも味あわせようと貸してくれない意地悪な先輩も多い。その結果、本が手に入らず、そのまま授業を受け上手く理解をする事ができなくて困る事が多々あったのだ。

しかし、義兄さんからのその贈り物はそんな悩みを一挙に解決してしまった。本当に、何でこういう細やかな気遣いができる人なのに、私には意地悪なのだろうか。黄里への手紙には、いつも優しい言葉しか書かないくせに。凄く納得がいかない。

思い返せば、雛里ちゃんと仲良くなつたのも、義兄さんから贈られた本を貸し借りするようになったからだつたなあ。私達より少し遅れて入校してきた雛里ちゃんは、本棚の前に群がる人だけに尻込みして、一冊も書を手に入れる事ができていなかった。それを見かねて、私が書を貸したのが友情の始まりだった。本を貸し合い、多くの事を時間を忘れて語り合い、今では無二の親友と呼べる存在となっている。

そうやって逸れていく思考をそのままに、私は一緒に送られてきた小箱の蓋を取って中身を確認した。

そして、その中身を見て目が点になった。

「はわわわわわー！」

思わずそう口にしてしまう。

しかし中身として、小石くらいの大きさの黄金が箱一杯に詰められているのを目にしたのだから、そうやって慌てるのも当然だと思うのだが如何でしょうか!?

誰ともなく心中で問いかけをしながら慌てて箱を閉じ、もう一度

そつと蓋を開けてみる。今のは私の持つ卑しい欲が見せた幻で、もう一度見直せば別の物が入っているに違いないと言い聞かせながら。だけど再度開いても箱の結果は変わらず、眩いばかりの黄金色が見えるだけだった。

先程の手紙を見直してもこの箱については書かれていなかった。では義兄さんは、これはどのような意図を持って贈ってきたのだろうか。

数分考えたが結局分からず、このまま文字通りの大金を部屋に置いておく訳にもいかないので、少し迷った末に謹慎処分を破り、黄金の入った箱を抱えて部屋を出た。目的地は水鏡先生の元。私の部屋に置いておくよりもずっと安全だろうし、水鏡先生に何かしら助言を頂けるかもしれない。

そう考えながら、私は水鏡先生の部屋へ歩みを進めた。

「それで私の部屋へ来たという事ですか」

「はい、水鏡先生。お言いつけを破り、部屋を出てしまった事は伏してお詫び致します。お怒りはもつともですが、今はこの黄金をお預かり頂けないでしょうか」

幸い先生は部屋にいらつしやり、私は面会が叶った。日中は講義を受け持つ事が多い先生の時間が空いていたのは行幸と言う他無い。

それから、無事に部屋に入れて頂いた私は、まず謹慎中にも関わらず部屋を出た事をお詫びしてから事情を説明した。

姿勢は先の言葉通り、床に額ずきながら。しばらくその姿勢を保っていたが、先生に普通に座つていいと言われたため身を起こして姿勢を正した。

先生はその後しばらく目を閉じて考えていたが、好々と眩よしましいてから目を開いた。

「先生、何か思い付かれたのでしょうか？」

「いえ、何も？　ただ他に何か入っていないか、確認をしてみましようと思っただけですよ」

……言われてみれば、入っていた黄金を見ただけで焦ってしまい、

中身が他に確認していませんでした。

先生の手をこれ以上煩わせるのも申し訳ないと思い、小箱をもう一度開けてじやらじやらと底の方までまさぐると、果たして一通の手紙が出てきた。

思わず羞恥で顔を両手で覆い、その場に突っ伏してしまおう。

水鏡先生が頭をぼんぼんと叩いて慰めてくれているので、怒っていないのが救いでしょうか。

というか、義兄さん。わざわざ手紙を分けなくても一つにまとめれば良いじゃないですか！

心中で多少理不尽な抗議を義兄さん相手にしてから、私はやや乱暴に手紙を開いて目を通し始めた。

『最悪の場合に備えて、朱里と黄里の当面の生活費と二人が卒業するまでの学費を合わせて送ります。信頼できる人(司馬先生が最有力だろうが)に全額預けてしまいなさい。足りないなら工面するから連絡するように！ 変に遠慮するようだったら、今度会う時締め上げる。もし余るようだったら、学院への寄付金として使ってくださいと伝えて。些事(今回の件は結構な大事だが)に囚われず、勉学に励むように』

「……義兄さん」

先程の不満も忘れて手紙を額に押し戴き、深く義兄さんに感謝を捧げる。

その後、先生へ手紙に書かれていた内容を伝えた。それを聞いた先生は再度目を閉じて考え始め、やはり好々と呟いた後に目を開けた。「どうやら麿子方殿は随分と人の心の機微を察する事ができる人の様ですね」

「はい、先生。本を贈って頂いたり、その他にも色々と気にかけて……」

「ああ、それだけではなくですね」

先生は私の言葉を遮り、苦笑いを浮かべた。

「このお金の意図は、『多分大丈夫だとは思うけど、万が一朱里達のご家族に不幸があつた場合に備えて、生活費と授業料を援助しよう』と

いう物。 朱里達が困窮しないようにね」

「はい。 手紙にもそう書いてありますし」

「じゃあ、何故わざわざ余った場合に寄付する旨も書いたのか、それは分かる？」

「それは当然じゃないのでしょうか？ 生活費はともかく、授業料について義兄は詳しくは知らないと思います。 ならば、多めに包んで送ってもおかしくは……」

私は自分で話した内容に違和感を覚えて、途中で言葉を止めた。

多めに包んで？

多めに包む、つまり明らかに額が足りるように送ったという事だ。 だったら、何でわざわざ足りなかった場合についても記載したのか。

「……学院に到着するまでに中身が抜かれる事を考えたから、でしょうか？」

少し考えて、私はそう答えた。

今回、義兄さんは廢家と縁のある人物、つまり信用できる人物に荷運びを頼めていないのだから、そういう用心をする事は十分に考えられる。

先生は好々と呟いてから頷いた。

「おそろくはそうなのでしょうね。 流石にこの額面は『多め』で済むような物ではありませんし。 徐州からここまで人の手を介して運ぶ以上、多少は盗まれる事を想定して送ったのでしょう。 人の心は弱く、悪事に手を染めやすい。 そう知るがゆえの処置なのでしょうね。 それが心の機微が分かったと言った一つ目の理由」

そこまで話して先生は指を一本立てた。

そして、すぐに二本目の指を立てて言葉を作り始めた。

「次に中身が抜き取られず、貴女へ問題なく届いた場合、学院への寄付とするという記載について。 この学院に集まる寄付が、どういった身分の方から寄せられる？」

「……卒業生やその親族、それから在校生の関係者からですね」

先生からの質問に少し考えてから答える。

そう口にして私はようやく意図に気づく事ができた。 つまりは

……。

「そう。在校生にとっては『後ろ楯』と言い換えても良いかもしれな
いわね。在校生に限定して話すなら、実家であったり、推薦してく
れた官吏であったり。けど、万が一あなた達の……」

言いづらい事を口にしようとしているかの様に、そこで言い淀んだ
先生の言葉を引き取り、私は口を開く。

「私達の家族達がいなくなったとしたら、そういう後ろ楯が無くなる。
けど、その代わりに糜家が後ろ楯になる。義兄さんはそう行動で
示したかったという事ですか」

水鏡先生は寄付金の多寡により生徒の扱いを変えたりはせずに、全
員を平等に扱う。

しかし愚かな事に、生徒達の間では必ずしもそうは思われていな
い。寄付金の額面は家の隆盛を示し、学院でも我が物顔に振る舞って
良いと思っっている人物は少なからず居り、そういう人間に侍る者もあ
とをたたない。

そういう人間が、実家という後ろ楯を失った私達にどういう態度を
取るか。

「今は衰退しつつありますが、諸葛家は元帝の時代から続く家柄です。
自分で言うのもなんですが、名家といって差し支えありません。

その家の娘が後ろ楯を失った時、家柄を誇る方々がどういう行動に出
るのか」

おそらく害する事で、自身の家の隆盛を周りに示そうとするだろ
う。

先生だつてこの学院で行われる事すべてを見通せるわけではない
のだから、物陰で行われた場合止める事は難しいだろう。処分を検討
しようにも、その現場を抑えなくてはならないので、八方塞がりとな
ると思う。

「そう。だからこの寄付金はそういう娘達へ楔を打ち込むため。
流石に糜家を敵に回してまで貴女達に手を出すつもりはないでしょ
うね」

この学院に通う多くの子女は中央官吏の娘ではなく、地方官吏や士

大夫の娘だ。

いかに隆盛を誇ろうとも、徐州牧の信頼厚く、徐州において絶大な力を誇る糜家を相手にできるほどではない。

「それが二つ目の理由ね。学院の人間が、貴女に危害を加える可能性を見越して、先手を打ってきた。それから、最後にもう一つ」

そう言つて、先生は三本目の指を立てた。

「貴女が最初に言つたように、貴女達への気遣いも含んでいるわ。それが何か分かる？」

「……」

目を閉じて、熟考する。

考えるのは、今回の義兄さんから送られてきた物で、回りくどかつた部分について。

私達への気遣いという先生の言葉を信じるならば、おそらくこういう事ではないのだろうか、そう思い付く事があつたので口を開く。

「手紙を一つにまとめずに、小箱に別の手紙を入れた事ですわね」

そう口にすると先生はにっこりと笑つた後、口を開いた。

「考えられる状況を整理しましょうか。一つ目は手紙と荷物、どちらも届く場合。二つ目は手紙だけが届く場合。三つ目は荷物だけが届く場合。四つ目はどちらも届かない場合。ああ、中身が抜かれる場合も荷物が届く場合に含むわね」

「はい」

「両方届いた場合には何も問題がないのだから、割愛するわ。それじゃあ、残つた三通りのうち、手紙が届かないという二つに対しては、実はあまり問題ないというのは分かる？」

「荷物だけが届いている場合に関しては、中身に別の手紙があるから、という事ですわね」

「そうね。じゃあ、両方届かなかつた場合については？」

「私からの返信が来るかどうかで判断すると思います。来なければもう一度送る、もしくはは信用できる方を派遣します」

先生の問いに私は間髪入れずに言葉を返していく。

私からの返信が来たならば、その事に触れているかどうかで荷物も

受け取っているかが判断できる。

「そう。もしかしたら代理ではなく、多忙な中何とか時間を作って自身でここまでいらつしやるかもしれないけどね。それじゃあ最後ね。手紙だけが届いていた場合」

「はい。この場合、少し問題が出る可能性があります。私達が本以外の荷物が一緒にある事を知っている場合です」

その場合、荷物が誰かに盗られてしまった事を私達が知る事になる。

義兄さんはあえて手紙にその事を書かず、荷物が届いている場合のみ小箱を送った事が分かるようにしたかったのではないだろうか。いつも手紙に書いている書物の寸評がなかったのも、本も一緒に盗まれる可能性があったので触れなかったのだと思えば筋が通る。

では、義兄さんがなぜそんな事をしたのか。おそらく先生の言った私達への気遣いとは、そこを指しているのだと思う。

平時ならば、義兄さんは何も気にしなかつただろう。しかし私達諸葛家の姉妹にとって、今は家族の安否が分からないという非常時だ。自分の事ながら、精神が安定しているとは言いがたい。何か悲しい事があれば泣き崩れ、怒りを感じれば誰かれ構わずに当たり散らしてしまいそうなくらいに。

「だから私達が、この荷物に関わった見知らぬ誰かの悪意に傷つかないように、細心の注意を払ってくれたと思うのは考えすぎでしょうか」

そう考えるならば、あえて黄金の量を書かなかつた事も中身が抜き取られても気がつかないようになのだろう。

「あくまで、状況から察する予測にすぎません。ですが、私はこれを真実と信じます」

随分と久しぶりに塞ぎ込んでいた心が晴れて、口元に笑みができたのを感じた。

口にしたように、あくまで状況からそう読み取れるだけに過ぎないが、私は義兄さんがそう考えてくれたと信じる事にしたのだ。

病に倒れた見知らぬ子供の看病を率先して買って出たり、因縁ある

家の子供を援助したりするお人好しなのだから、そう行動したところで何も不思議はないだろう。

「好々。ようやく調子が出てきたようですね。朱里。貴女の謹慎は現在を持って解きます。今さら無謀な行動は取らないでしょう。その代わりに、急ぎ糜子方殿に返事を書きなさい。私からも寄付に対する謝意を伝える手紙を書きますので、一緒に送ります」

「はい、分かりました！」

私は立ち上がり、大きく先生に向けて一礼をした後部屋を出た。

急がなくては、義兄さんに無駄な手間をかけさせる事になる。

心が浮き立つのを感じながら、どんな内容を書こうかと手紙について考える。

どうやら久しぶりに有意義な時間が過ぎそうだという予感を感じながら、私は自分の部屋へと急ぎ足で向かうのだった。

幕間八 Brothers and Sister
S — 義兄と姉 —

その日、私は授業が終わった後に黄里や雛里ちゃん、元直ちゃんと一緒にお菓子作りをしようと厨房に立っていた。

そこに先生から呼び出しがかかったのだ。他の家族と一緒に消息を絶っていた藍里お姉ちゃんから連絡が来たからすぐに来なさいと。

それを聞くや否や、黄里は厨房を飛び出していった。私もそれに続いて飛び出そうとしてすと思ひ直し、雛里ちゃん達へ向き直つてから中座する事を謝り厨房を飛び出した。そのまま駆け足で先生の部屋へ向かう。黄里が先行しているため、私は背中を追うように駆けた。

黄里には先生の部屋の前で追い付く事ができた。というより、私を待ってくれていたのだろう。

一旦先生の部屋の扉の前で立ち止まり、大きく息を吐いた後に隣の黄里と目を合わせて頷き合う。

そして扉を叩き訪わたしないを告げる。

中にいる先生から誰何の声がかかったため、名を告げて入室の許しを得る。

「諸葛孔明、及び諸葛叔起。お招きに従い参りました」

「入りなさい」

先生から許しが出たので扉を開けて部屋に入る。部屋に入るとすぐ、先生の向かいに誰かが座っている事に気づいた。その顔を見た瞬間、私と黄里は驚きで体が硬直してしまった。

毎日鏡で見ている物と良く似た顔立ち。隣にいる黄里にも面影はある。

私よりも早く硬直から立ち直つた黄里が、無言でその人物へ向けて駆け出し、その勢いのまま抱きついた。

うん。わざわざ正体をぼかして考える必要はないだろう。行方不明となっていた私達の姉、諸葛子瑜だ。

家族など親しい人間にしか判別つかないほどの困った顔をしながら

ら、先生への礼儀を欠いて飛び付いてきた黄里に小言を言っている。うん。安心するくらいにいつもの藍里お姉ちゃんだ。

思わずその場にへたり込みそうになる体を叱咤し、お姉ちゃんの方へと歩みを進める。

そして私はゆつくりと口を開いた。

「おおお、お姉ちゃん！　こんな所で何していりゆんでしゆか!!」

「朱里、まずは落ち着きなさい。そんな状態では話をしてても理解できないでしょう。それから表面だけ落ち着いているように見せるのではなく、発言も気を付けなくては意味がないでしょう?」

憎たらしいくらいに非常に落ち着いた声でお姉ちゃんにそう諭される。

横で先生が、学舎をまなびやこんな所扱いた弟子への制裁を、なんて呟いています。聞こえません。聞こえません。聞こえません!!

それから三十分ほど経って、部屋はようやく落ち着きを取り戻した。厨房へ戻って、入れてきたお茶をゆつくりと啜る。

少し場がまったりと弛緩し始めた頃、お姉ちゃんは話を始めた。

「さて、話し始める前に、どの辺りまで貴女達は知ってるの?」

姉さんがそう前置きとして聞いたのは、既知の内容を繰り返すのは時間の無駄だという事だろう。まして、目上の先生もこの場にいるのだから、あまり時間を取るのもまずい。

「ええと、伯父さんの太守就任から起こった事は一通り。義兄さんが行方不明になったみんなを探してみるから待つてると手紙を送つて来てからは何も」

それを聞いて、お姉ちゃんはなるほどと呟いた。それから数秒考え込んだ後に話し始めた。

「では、大体の事情はもう知っているのね。それじゃあ、まずは私がここに居る理由から話しましょう」

「子瑜殿。こんな所と言って頂いて大丈夫ですよ?」

「いえ、妹の師の学舎まなびやを悪し様に語る事はできませんので」

先程の失言は忘れられていなかったようだ。思わず口元が引き攣

る。

「というかお姉ちゃんの取り澄ました顔で揶揄されるのが非常に腹立たしいのですが！」

「さて、冗談はここまでにしておきましょうか。まずは、私や家族の現状についてですが、誰も死んではいませんし、すぐに死んでしまうような怪我もしていません」

それを聞いて、私と黄里からほう、と安堵のため息が漏れた。お姉ちゃんがこの場で落ち着いて話している事から、凶事が起きているとは思っていなかったが、巻き込まれた本人の口から説明すると安心する。

「ただ、今まで住んでいた淮陰の家は引き払ってしまったので、☒に引っ越しをしています。住む所も見つかったし、それぞれみんな仕事を見つける事ができて、今はそれなりに安定した生活ができています」

移住前提で預章まで動いていたわけだから、それも当然だろう。

その後住む場所に☒を選ぶのも不思議な話ではない。☒は、ここ十年ほどで大きく発展を遂げた徐州の政治と経済の中心地。防衛の観点から下☒に州都を移そうという声も出ているが、まだ当分先の話となるだろう。

最近安住の地を求めて、近隣の州からも人が多く流れている。そんな発展著しい☒なので、仕事も住む場所も事欠かないだろう。もつとも、あの辺りは物価が高いため何気に生活を維持するのが大変なのだ、おそらく州府の官吏である義兄さんが助力しているのだろうと考える。

「どんどん、諸葛家は糜家に頭が上がりなくなっていくなあ。」

「それで、私は義兄さんの副官として仕えています。ここに来たのも、義兄さんの仕事でこの近辺まで来る事になったので、立ち寄ったんです」

「思っていた以上にどっぴりだよ!？」

思わず大声を出してしまう。

「けど考えて欲しい。糜家に支援を受けている事は予想していたが、

仕官して義兄さんの配下に組み込まれているのは予想外だ。

義兄さんは現在州牧様の主簿であり、将来を嘱望されている人物だ。当然その配下に就けば、出世の助けになる事が考えられる。我こそ配下に、と望む者は多いだろう。そんな選り取りみどりの中からわざわざ初仕官であるお姉ちゃんを選ぶ理由が分からない。

確かに義理とはいえ兄妹であるし、お姉ちゃんが優秀なのは妹である私が一番わかっていていのだが、それでも腑に落ちない物を感じる。何か特別な理由があるのだろうか。

「朱里？」

大声を放った後考え込んでしまった私にお姉ちゃんが声をかけたが、それに返事もせず考え続けた。

まさか義兄さんに限って、お姉ちゃんを手籠めにするために近くに招いたわけでは無いだろうし。

いや、けど義兄さんだつて男の人だ。ましてお姉ちゃんは非常に可愛らしい顔立ちをしている。邪よこしまな気持ちを抱いても不思議ではないのでは？

けどお姉ちゃんはそんな事を迫られたら自害をしても抵抗しようとするだろう。ならば、今落ち着いて私達と話をしているはずがない。恥そそを雪とごうと義兄さんの命を奪おうと付け狙う方がしつくりとくる。

けどけど本人に自覚は無いが、お姉ちゃんは義兄さんに恋心を持っているのだから強気に迫られたら断りきれずに体を開いてしまうのでは無いだろうか。

（藍里。 私の副官になりたいなら、どうすれば良いか分かっているよね？）

（はい、義兄さん。 私の事は好きにしてください結構です。 だけど、副官にして頂けるといふ約束は……）

（分かってる。 けど、今日だけで終わりじゃなく、私の配下の間はその体を好きにさせてもらうよ？）

（はい、けれどあまり酷い事は……）

（ふふ、おいで藍里。 いっぱい可愛がってあげるから）

(に、義兄さん、恥ずかしいです)

(ほら、大人しくこっちに)

(ああ、義兄さんっ。義兄さん!!)

こ、こんな風にこの間読んだ小説みたいな展開が二人の間に有ったのかもしれないっ……!!

「はわわわわ！ 大人でしゅ！ 二人で大人の階段を全力で駆け登ってましゅ!!」

「しゅ、朱里!？」

お姉ちゃんが珍しく驚いたような表情を浮かべてる事にも、黄里が冷めきった視線を向けてくるのも気にせず、私の妄想は膨らむばかりだ。

に、義兄さん。その手に持った首輪をどうなしやるおつもりでしゅか!？

お、お姉ちゃんも髪を掻き上げて義兄さんが着けやすい様にしゅ駄目でしゅ!!

「黄里。朱里は一体?」

「言葉から察するに、藍里お姉ちゃんと子方お兄ちゃんの事で不埒な事を考えているんだと思います。発作のような物ですので、放っておいて良いと思いますよ? というより、正直気持ち悪いので関わりたくありません」

……数秒後、黄里の言葉の意味が分かり顔を真っ赤にした藍里お姉ちゃんから、特大の雷を落とされたのは言うまでも無い。

「良いですか、朱里。何もそういう事に興味を持ってはならないとまでは言いません。しかし、返しきれないほどの厚遇を受けている方を相手にそのような穢わらしい事を考え付くのはいけません。大変失礼にあたる事が分からない貴女ではないでしょう」

「うう……」

かれこれ三十分ほど正座でお説教を受けている。いい加減足が痺れて感覚が無くなってきた。

思わず助けを求める視線を楽しそうに談笑している先生と黄里に

向ける。

その視線に気づいた先生は、頬に手を当てて困ったわね、と言いたげな表情を浮かべ、黄里はたまには痛い目を見れば良いと思いますよ、という表情をしていた。二人とも止めてくれるつもりは無いらしい。

「聞いているの！ 朱里!!」

「はい、聞いています！ 本当にすみませんでした!!」

お姉ちゃんからの大喝に反射的に頭を下げる。

「……はあ。あまり時間も無い事ですし、ここまでにしませう。」

水鏡先生。愚妹がこのような不埒な事をしでかしたら、容赦なく折檻して頂いて構いませんので、どうぞ今後も厳しく接してあげてください」

「いつもは非の打ち所も無いほど優秀ですから、あまり叱る事はありませんので心配ありませんよ」

「愚妹には過ぎた言葉です」

そんな先生とお姉ちゃんの会話を聞きながらこつこつ正座を崩そうとすると、いつ足を崩して良いと言いましたか、と言葉が飛んできたのですぐに姿勢を正す。

横で呑気にお茶を啜っている黄里へ思わず恨めしい視線を向けたくなるが我慢する。黄里は助け船を出してはくれなかったが、日頃雛里ちゃんとそういう本を隠れて読んでいる事をばらしてくれなかっただけでもありがたいと思うべきだろう。

仮にそういう視線を黄里に向けて、ついでとばかりにばらされるとさらにお説教の時間が長くなる。

姉の威厳が。姉の威厳があ……。

「とりあえず、話を戻しましょう。義兄さんが受けた仕事の補佐としてこの地に来たのですが、義兄さんが手紙だけじゃなく、顔を見せた方が貴女達が安心するだろうとここに来られるようにしてくれました」

「子方お兄ちゃんは学院に来なかったの？」

「女子校だから遠慮する、との事でした。生徒の皆さんが、男が居る

と落ち着いて勉強できなくなるだろうし、怖がらせても悪い、と言っていますね」

それを聞いて残念そうな顔をする黄里。 多分私も同じ顔をしているだろう。

「また会える機会もきつとあるでしょう。 私も貴女達の元気な顔を見て安心しました」

そう言つて、姉さんは少し安堵のため息を吐いた。 お姉ちゃんは表情があまり変わらないので誤解されやすいが、非常に情の強い人だ。 遠く離れた私達の事をずっと心配してくれていたのだろう。

感謝の言葉を口にするお姉ちゃんは照れ隠しのように目を逸らし、手元の湯飲みに口を付けた。

「そういえば話は変わりますが、義兄さんが気になる事を言っています」

「気になる事……ですか？」

先生が不思議そうに首を傾げる。

その問いにお姉ちゃんはゆっくりと頷く。

そしてお姉ちゃんは口を開いた。

「西涼で反乱が起こる可能性がある」と、義兄さんからの伝言をお預かりしました。 真偽の程は半々と言っていました」

「……ちゃん、……里ちゃん。 朱里ちゃんってば！」

「はわわ！」

「あわわ！」

数年前にお姉ちゃんが私塾を訪ねてきた当時の事を思い返していたのだが、突然耳元で大声を出されて、思わず大声を出してしまう。

その拍子に、今まで思い返していたお姉ちゃんの姿が脳裏から消える。

私の出した声に驚いたのか、最初に大きな声を出した本人である雛里ちゃんまで驚いていた。

「ど、どうしたの、雛里ちゃん!? 敵襲? 敵襲なの!? はわわ、すぐに出陣の準備をしなくちゃ!!」

「あわわわわ、違うよ朱里ちゃん！ そろそろ軍議時間が迫ってきたのに朱里ちゃんの姿が見えなかったから呼びに来たんだよ！」

「はわっ!? もうそんな時間なの!？」

慌てたまま外を見ると、既に太陽は中天に差し掛かろうとしていた。確かに軍議の時間まで後少しだ。

急いで手元の手紙の束をまとめて文箱にしまい、雛里ちゃんと一緒に天幕を出る。どうせ袁本初さんが遅れてくるのでまだ大丈夫だとは思うのだが、万が一に備えて早歩きで向かう事にする。

「それで朱里ちゃん。何を考えていたの?」

「お姉ちゃんが私塾を訪ねてきた時の事を思い出していたんだよ。」

あの後お姉ちゃんは西涼に出陣する事になったから、少しでも西涼について有用な事が分からないかって」

数年前に西涼で起こった韓遂の乱。その戦いには、徐州勢としてお姉ちゃんも義兄さんも出撃していた。戦前にはお姉ちゃんが私塾を訪ねて来てその話題を出し、戦後に無事に鎮圧できた事を手紙で送ってくれていた事を思い出し、何か少しでも分かる事が無いかと読み漁っていたのだ。

その過程で、その西涼の乱が起こる事をお姉ちゃんが伝えに来た当時の事を思い返していたのだ。無事なお姉ちゃんの顔を見れて凄く嬉しかったので、記憶が鮮明に残っている。

ただ、あまりにも時間がかかりすぎたせいで皆さんを待たせてしまう事になりそうだが。

「それで、何か気づいた事はあった?」

「うーん。華雄將軍が武に絶対の自信を持っていて、実際に強かったって義兄さんは手紙で書いていたよ。だから罫を作って嵌めたんだって」

そこまで話すと雛里ちゃんは不思議そうな表情を浮かべて私を見た。何だろうか?

「? ……朱里ちゃんってお兄さんいるんだっけ?」

「あれ? 話した事無かったっけ?」

「うん。徐州に仕えているお姉さんの話は何度か聞いた事あったけ

ど」

「そつか。 ええつと、私塾時代に私の後ろ楯をしてくれていた麁家は知っているよね？ そのご子息で、今は徐州で県長をやっているんだけど」

ちなみに、お姉ちゃんはその下で県丞をしているんだよ、と付け加える。

隣を歩く雛里ちゃんがびたりと立ち止まったので、私は不思議に思い、彼女の方を向き直る。

そこには驚愕と興奮が入り混じった親友の顔があった。

「あわわわわ!! 朱里ちゃんのお兄さんって、あの麁子方様なの!」

「はわわ! 雛里ちゃん、声大きいよ!」

大声を出した私達を、周りに居た兵の皆さんが視線が射抜く。

恥ずかしさに顔を伏せて、雛里ちゃんと一緒にすすごとその場を離れる。

「ええつと、朱里ちゃん目立つちゃったみたいでごめんね」

「気にしないで良いよ。 えつと、義兄さんの話だっけ。 義兄さんと言つても、義兄弟の契りを結んだのであつて血を分けてるんじゃないんだけどね」

「あわわ、それでも凄いよ。 麁子方様、有名人だよ」

うん。 確かに雛里ちゃんの言葉は正しい。

元々義兄さんは出生時から、麒麟の化身という眉唾物の噂が徐州を中心に流布されていた。最近では、その噂はより広く人の口に上がり始めているようだ。

しかし最近ではその噂は義兄さんの功績と相まって独り歩きしている感もある。

曰く、軍を率いては不敗の名将。

曰く、政をさせれば、徳に満ち、民を愛し、礼節を守り、不義を

見逃さず、治める地の繁栄を約束する稀代の名臣。

曰く、千里先まで見通し、その言葉でもって人を意のままに操る知謀の徒。

どれも義兄さんが実際に聞くと渋面を作った上で、「片腹痛いし胃

が痛い。正直付き合いきれん」とぼやきそうです。

さらにお姉ちゃんが隣にいたら、その言葉に全力で頭を振り、「まだまだ義兄さんを称賛するには足りないくらいです」と反論しそうだ。想像であつても、あの二人の事を考えると心の距離が近くなつたように感じられて嬉しくなる。

けど、先の言葉は言い過ぎな部分はあるが、真実も多く含んでいる。実際に戦績は不敗を誇っているし、的確な民政を施すので民達から人気の高い為政者でもある。麩家の商人達から情報を集めて、遠くの事を知る事もできる。

……こうやって改めて挙げてみるとなかなか規格外な存在な気がしてきました。

まあ、義兄さんの最も凄い部分はその噂に上がって来てはいないのだが。

「ねえ、朱里ちゃん」

「何で義兄さんをお願いして徐州に仕官しなかったのか、でしょ？」

雛里ちゃんが聞くであろう事を先回りして口にする。隣の雛里ちゃんの頭が縦に揺れるのが視界の端に見える。

黄里にも同じ事を聞かれたし、おそらく学院に戻れば先生にも聞かれるであろう。

「うーん……。色々あるんだけど、一番の理由は矜持、かなあ」

うん。自分でそう口にする事で、胸の奥にすんと落ちた。

雛里ちゃんは無言で先を促した。

「まだ義兄さんが徐州に仕えていない頃、私が徐州に仕官するなら歓迎するけど、いつか絶対義兄さんとは道を違える事になると言われているからね」

私自身、そうなるだろうと簡単に想像できる。

徐州を榮えさせる事が目的である義兄さんと、この国をあるべき姿へと戻そうとする私。共に歩く事はできなくはないが、いつか私は必ず義兄さんの目指す物とは別の物を求めてしまう。

「それに、ただでさえ義兄さんには色々と援助してもらっているからね。仕官の世話までしてもらうのは、矜持に関わるかなって」

結局のところ、私の行動はこれに尽きるのだろう。

義兄さんの世話にならずとも、自分だけで活躍する事を証明し、義兄さんに良いところを見てもらいたい。そして、私の才を信じてくれた義兄さんの目が確かだと証明したいのだ。

うん？自分の矜持と言いながら、義兄さんばかりが理由に挙がるのは何ででしょうか？

ふと頭の片隅で疑問を覚えるが、そういう考えると心が暖かくなるので、悪い事ではないのだろう。だから、今は気にせずに雛里ちゃんとの会話を続ける。

「それに、徐州にはもう優秀な人がいっぱい居るからね。無理に私達が行かなくても、十分勢力を拡大、維持できるよ」

「うん。噂に聞くだけでもたくさん居るよね」

上の世代から数えると、まずは陶州牧様。優秀な軍事指揮官で民政家だ。

それから義兄さんのお父上、糜子伯様に陳東海太守様。どちらも州牧様の片腕として徐州の安定に一役買っている。陳太守の息子も英邁の誉れ高い。

王景興さんも民政家として高名だ。

私達と同じ世代を数えると、それこそ綺羅星のように人が居る。義兄さんを筆頭に、義兄さんのお姉さんである糜子仲さん。その親友である孫公祐さん。

義兄さんの幼馴染みという臧宣高さんと徐文嚮さん。

私のお姉ちゃん、諸葛子瑜。私の友人でもある歩子山と歩子麗の兄妹。

義兄さんの弟子らしい、杜伯侯さんも農政の分野で最近よく名前を聞く。

最近義兄さんに仕え始めた人物も四人ほどいるらしいが、名前等は伝わってきていない。

だが義兄さんの眼鏡にかなって仕えているのであれば、間違いなく優秀な人物なのだろう。

簡単に考えただけでこれだけの人がいるのだ。しかも、大半は義兄

さんと何かしらかの關係を持つているという恐ろしき。

「あわわ。そう考えると、やっぱり麿子方様は凄いな」

「うん。昔から、鮑叔みたくになりたいって言つてたから、人材拔擢は望むところなんだろうね」

おそらく、義兄さんの一番凄い所はこの人物評価だろう。今まで義兄さんが評価した人物は軒並み結果を出して出世している。

今では幾人も人が目をかけてもらおうを義兄さんの元を詰めかけているという。

『因果關係が逆なのに気づいて欲しいんだが。私が評価したから出世したのではなく、出世しそうなくらい才気があるのだから目をかけるんだよ。ついでに言えば、そういう才能ある人達は私の評価に関わらず、勝手に世に出てくるだろうよ』

義兄さんが私への手紙でそう漏らしていたのを思い出す。

なるほど、言われてみれば確かに一理ある。しかし、人物評価で有名な方に評価してもらうのは、名前を挙げるには絶好の機会となる。そう考えると詰めかける人達の気持ちも分からないではない。

義兄さんの仏頂面が脳裏に浮かび、思わず苦笑してしまう。

「だけど今は義兄さんの事よりも、目の前の事を考えないとね」

「うん。この目の前に聳^{そび}える汜水関を攻略する事を考えないとね」

そう言つて二人してここからでも見える汜水関を眺める。

守将は猛將の誉れ高き華雄。立て籠もるは難攻不落の汜水関。どちらにせよ簡単な戦いにはならないはずだ。

それでも、退く気も無ければ諦める気も無い。

「義兄さんは今の私と同じ年の頃に西涼の乱で功を上げられた。なら、今の私達でできない理由にはならないよね」

「うん。みんなも頼りになるんだから、きつと大丈夫だよ」

そう言つて、雛里ちゃんと顔を合わせて頷きあう。私達は決意も新たに軍議の場に歩みを進めるのであった。

青年期② — 原作序盤 —

第二十八話 Tie A Yellow Ribbon

on…… — 会議は踊る —

私、羊叔子は県城の廊下を歩きながら小さく溜め息を吐きました。元々人見知りをする私は、人前に出るのが得意ではありません。それなのに、これから多くの人の前で自己紹介をする事になると考えると、非常に緊張します。溜め息の一つも吐きたくなるという物でしょう。

「あんまり溜め息吐いてると幸せが逃げちゃうよ。まあ、同じ癖がある私が言っても説得力無いけどね」

どうすれば緊張を解せるでしょう。そんな事を考えながら歩いていた私へ、隣からのんびりとした、と表現したくなる口調で声がかかりました。

隣へ首だけを傾けてみると、見慣れた男の人と目が合います。全体的に見るとそれなりに整っているけど、どこか地味な印象を与える顔立ち。それに柔らかい笑みを浮かべながら私を見ていました。

仲が良い家族達の中でも、特に私が親しく感じている人。隣お兄ちゃんです。

お兄ちゃんは、私にとって兄であると同時に学問の師でもありません。私が持つ知識の大半はお兄ちゃんの講義から授かりました。今こうして、この場に官吏として歩いているのもお兄ちゃんの教えが強く影響している事は明白です。

私自身はまだまだ自分の事を未熟だと思っっていますので、仕官をするにはまだ早いと思っっているんですけど。

「そうは言っても人前に出るのは苦手だし緊張するよ」

「まあ数分の我慢なんだし、頑張ってよ」

そう口にしなから、私の頭を手のひらで私の頭を撫でてきた。

思わず猫の様に目を細めて、お兄ちゃんの手のひらの感触を歩みを止めないまま享受してしまいます。

まるきり子供扱いなのですが、お兄ちゃんにされるのは嫌ではありません。きつと昔からされ慣れていたので、感覚が麻痺してしまっているのでしょうか。他の人に同じ扱いをされると反発をするのですが、子供ではなく、自分は大人だと考えている複雑な年頃なのです。

しばらくするとお兄ちゃんは手を戻してしまいました。少し残念です。

「それじゃ、行こうか。まあ、仮に挨拶に失敗しても誰も気にしないよ」

「私が気にするよ……」

がつくりと項垂れながら思わずそうこぼします。

お兄ちゃんは苦笑しながら言葉を継ぎました。

「そうじゃなくて、例え失敗しても誰も覚えていない、といった感じかなあ」

「えつと……う？」

いまいち言っている意味が分からないんだけど。

それじゃあ、自己紹介をする必要は無いんじゃないかな。

そこから先は説明をする気が無いようで、お兄ちゃんはどこか楽しそうにしながら答えをはぐらかし続けました。

もつともその意味は、この後嫌でも分かる事になるのですが。

ようやく目的地である部屋に到着しました。扉の脇には兵が二人立っており、お兄ちゃんと一緒に会釈をしました。

お兄ちゃんは扉の前で立ち止まり、私の方を見ました。

「心の準備は良い？」

来るまでの間にお兄ちゃんと話していたので、大分緊張は解れています。ですので、私はお兄ちゃんへ無言で頷きを返しました。

「それじゃ、行こうか」

お兄ちゃんは満足そうに頷いた後そう言いました。

その言葉に反応し、兵達が扉を開けました。

開いた扉から先にお兄ちゃんが入り、私はそれに従い付いて行きます。ここから先は主従として接する必要があるのです、お兄ちゃんの前や横を歩くわけにはいきません。

……お兄ちゃんはまだたく気にしなさそうではありますが、私が気にしますしお兄ちゃんの配下の方々が気にします。子瑜さんとかその辺りかなり厳しい人ですから、後で大変な目に遭う事は簡単に想像できます。

というより、お兄ちゃんにもその辺りの礼法をもう少し大事にして欲しいと常々思っています。お兄ちゃんの場合、知らないわけでもできなわけでもなく、面倒くさがってやらないだけなのですから。

思考が脇に逸れている事に気付き、慌てて打ち消します。

入った部屋の中の真ん中には、十人ほどの人間がかかる事ができる机と椅子が置かれており、上座に当たる二席を除いて既に埋まっています。お兄ちゃんが部屋に入ると同時に全員が席を立ち、拝礼をしました。

お兄ちゃんはその机の前で歩みを止め、座っている人達の方へ向き直り拝礼を返します。当然私も一緒に止まり、拝礼を行います。

「おはようございます。席に付いてくれて良いよ。それじゃ定例会議を始めるけど、その前に今日から新しくここに仕える事になった者に挨拶してもらおうと思う」

その言葉と共に、お兄ちゃんは私を見ました。その視線を受けて、私は改めて席に付いている面々の顔を見渡しながら言葉を作ります。あ、空さんがこつちを見て小さく手を振ってくれてる。

「本日より琅邪国莒県の県尉に就く事になりました羊叔子と申します。まだ若輩の身ではありますが、どうぞよろしくお願い致します」

そう言つて頭を下げると、パチパチと拍手の音が鳴り響きます。無事に噛まずに挨拶が出来た事に安心しながら、私は顔を上げました。

今日一番の憂鬱な事はこれで解決したはずです。

「今聞いたとおり、先日莒から陽都へ異動になった子義殿の後任として着任する。軍事と治安の統括をお願いする事になるので、各々心得ておくように。それじゃ、天明。空いている席に座って。お勧めはそこのお誕生日席」

「折角だけど遠慮させて頂きますね」

しれっと一番の上座を勧めるお兄ちゃんへ澄ました顔で固辞の言葉返してから、私はもう一つの空いている席に座ります。お兄ちゃんもその様子を見て苦笑しながら、上座に座りました。

位置としては、角を挟んで右隣にお兄ちゃん、真正面には空さんが座っている。席次は地位によつて場所が決まっているのでしよう。莒ミの県長であるお兄ちゃんが一番の上座。次席には県丞である空さん。その次に県尉である私が続く事になります。

予想はしていましたが、昔からお兄ちゃんに仕えている方を差し置いての県尉の就任。どうしてこうなったのかなあ、と思わず漏れてしまいそうな溜め息を押し殺します。

それ以外に座っている方を確認すると、お兄ちゃんの義兄妹である子瑜さん、お弟子さんである恵さん、数年前にお兄ちゃんが迎え入れた子布さんと子綱さんのご兄妹となります。今は私が着いている席には、以前は子義さんが座っており、この六人がお兄ちゃんの腹心となっていました。

今はここに私を含めて七人しか居ませんが、一月に何回かは有秩ゆうちつの方や徴税を司る役人等と呼ばらしのですが、今日は腹心のみでの会議となります。

「それじゃ、いつもどおり実りのある議論をしましょうか」

どこか楽しそうなお兄ちゃんがそう口にする、今まで静かだった場は途端に喧騒に溢れる事になりました。

……会議が始まって十数分。たったそれだけの時間だったにも関わらず、思わず圧倒されて呆然としてしまいました。朝廷で行われている朝議にしろ、で行われていた会議にしろ、ここまで大声を張り上げながらする事はないでしょう。

良く言えば活発、悪く言えば騒がしいと言ったところでしようか。少なくとも儒教で教わる礼法では、主君に当たる人物へ指差しながら非難するという物は無かったと思うのです。無礼討ちにされてもおかしくないその行動をしている子布さんも、それを笑いながら聞いているお兄ちゃんも色々とおかしいと思うのです。

先ほど、仮に私が挨拶に失敗しても誰も気にしなくなると言ってい

たのはこの事ですか。確かにこの勢いでは、私が多少の非礼をしたところで誰も気にしなくなるでしょう。

「ですから！　これ以上難民の受け入る事はできません！　税収よりも支出の方が多くなりますぞ!!」

「それは認識はしているけど、受け入れなかったとしても存在が消えるわけじゃないよ？　近隣に残る事になるし、一部は賊徒と合流するだろうから治安が悪化するだろ」

「そのような輩は、領内に入れても騒乱の種となって治安が悪化するでしょう！」

両者ともに口調こそ激しいですが、話している内容は極めて真つ当です。

『徐州は豊かであり、食べる物に困らない』

このような噂は十年前ほどから絶えず流れていて、多くの賊に襲われた近隣の民達は徐州に庇護を求めに来ました。陶州牧様も積極的に流民達の受け入れを行った事で州の力が蓄えられて、ますます豊かになっていくという好循環を実現してきました。

余談となりますが、父母を賊に殺された私や、賊の勢い著しい青州から逃れてきた空さんも元々流民として徐州に入ってきた経緯があります。

ところが最近、黄巾党と言われる大規模な賊徒が発生した事で難民の数は激しく増えました。そのため、今までは受け入れる事ができていた難民以上の数が徐州に押し寄せてきており、受け入れが難しくなってきました。難民達が生産力を発揮するまでの間、食べ物や住むところの世話をする必要があるためお金がかかるのです。莒県では、その収支状況が難民受け入れにより悪化しており、既にギリギリになってしまっているという事なのでしょう。

さらに、難民達と元々の住民との間に諍いや衝突も起きています。その結果、住民達に不安が広がっており治安の悪化が予想されます。人が増えたからこそ起きる問題とも言えます。

さて目の前の議論ですが、どちらの言う事にも一理あります。

仮に受け入れを行わなかった場合には県の収支は維持できるかも

しませんが、隣の県や近隣の州である青州、兗州に迷惑がかかるかもしれません。さらに、そういった難民達が賊徒と合流してしまった場合、大規模な反乱となって討伐が困難となる事が考えられます。

しかし、このまま無制限に受け入れ続ける事ができない事も確か。さらに、対応次第では州内で反乱を起こす事も考えられます。

あちらを立てればこちらが立たず。実に難しい問題です。

「まあ、現実問題として受け入れは必須だよ。特にこれからしばらくは大規模な軍事行動は控えなくちゃならない」

「……県尉の交代が原因ですか」

うん。それは私も考えていました。子義さんから私に責任者が代わった事で、一時的に軍事が麻痺してしまうだろうと。

兵を率いる者にはそれぞれ指揮する時の癖があります。大雑把に分けてしまえば、自分自身が前線で戦いながら指揮をする猛将型と後方で指揮に徹する知将型です。

徐州では、前者は宣高さん、文嚮さんの二枚看板や子義さんが代表格でしょう。後者はお父さんや陶州牧さま、義兄さんや子瑜さんが当てはまるでしょうか。

私も後者の知将型になります。猛将型だった子義さんから知将型の私に指揮官が代わる事で、兵達の陣形や戦術を大きく見直す必要が出てきますし、私も兵達に信用を得なくては指揮がままなりません。そのためにはどうしても調練に時間が必要になるため、その間は行軍を行う事ができないのです。

県長であるお兄ちゃんが兵を率いればそういう問題は起きないのですが、その間お兄ちゃんが決裁を下さなくてはいけない案件が完全に止まってしまいます。その状態が数ヶ月間続くとすると、もしかしたら難民を受け入れる以上の損失を出すかもしれないので、本当に最後の手段となります。

「そう。だから短期制圧を見込めない可能性が高い以上、反乱を誘発する事は可能な限り避ける必要がある。長期化したり、他県で略奪なんか始められたらそれこそ責任問題に発展するよ。最悪、隣に住む姉さんに怒鳴りこまれるぞ」

「それはそうかもしれませんが……」

海お姉ちゃんは現在陽都の県長となっています。私達が今居る莒県とは目と鼻の先と言っても良いくらい近い場所です。お兄ちゃんの県長就任とお姉ちゃんの県長就任には、色々と面倒くさい事情が絡んでいたりもするのですが割愛します。いつか語る事もあるでしょう。

「天明。 調練にどれくらい時間が欲しい？」

「最低一月。 確実に期するのであれば二月欲しいところですよ」

お兄ちゃんからの質問に即答します。来るだろうと思っていた質問だったので、事前にどのくらいかかるかを考えておいた甲斐がありました。

現在の兵の錬度次第でもありますが、大体そのくらいでできるだろうと予測しています。もつとも、子義さんが県尉をやって鍛えていた兵達ですので柔弱という事は有り得ないでしょう。ですので、一月あれば必要な錬度に達する事ができるでしょう。

また、ある程度まで錬度が達すれば、逆に積極的に軍事行動を起こして経験を積む必要が出てきます。ですので、その間に行軍に耐えるだけの状態まで持つていくのが当面の職務となるでしょう。

「それじゃあ、一月の間は難民の受け入れを止めない事にするよ。」

それ以降に関しては、また議論しよう。 結論の先延ばしかもしれないけど、現状だとやむを得ない。 幸い、県には先年からの蓄えがあるからそれを放出すれば即座に破産はないでしょ。 いざとなれば州牧様なり国相様に頭を下げるさ」

「……御意に。 ですが、受け入れを続けるとなると、治安がますます悪化していく事が考えられますぞ。 そちらはどう対応致すおつもりですか？」

子布さんがそう質問します。

多くの難民を受け入れるので、県の外に大規模な賊徒は生み出さなくなりますが、県の内側に不満分子を呼び込む事になります。確かに治安への対策は必要となるでしょう。

お姉ちゃんに子義さんと兵を貸して欲しいと言えば二つ返事で貸

してくれそうですが、陽都の守備が緩むのでそれはできません。

「それなんだけど、解決の糸口になるかもしれない事がある。ちよつとみんなの意見を聞かせて欲しい。 恵、この間見せてくれた資料出してくれ」

「承知しました、師父」

そう言うと思さんは、机に丸めていた紙を広げました。それは琅邪国の地図で、色々と恵さんが書いたとおぼしき走り書きが至るところに入っています。

「私は農政を担当しているので、琅邪国内の他県も巡る事が多いんです。そこでも何度か争いや揉め事が起こっているのを目にしました。それを纏めるように師父に命じられて、そういった事が増え始めたここ一年での住民同士の衝突や小規模な反乱について纏めたのがこの地図です」

「丸で囲っているのがそういった事が起きた集落、日付はそれが発生した日ですよ？ ……こうやって見ると北部で多く起こっています？」

子瑜さんの言葉を聞いて改めて地図を見ると、確かに北の方で多く丸が付いているのが分かります。北部を中心に発生していると言われれば、なるほど確かに、と思います。

では何が起きて、そうなっているのでしょうか？

これを解決すれば、問題の一つである治安の改善に繋がる。そう言われた以上、全員が集中して地図を眺めるのも当然と言えましょう。「扇動ですか？」

「その可能性はあるけど……途中でいくつか集落が飛ばされているのが説明つかないんじゃないかな？」

子綱さんがそう疑問を口にして、それに空さんが指摘をします。

「そこなんだよね。 扇動者が入ってきてやっていると仮定すればあの程度は納得できるんだ。 けど、空さんが言ったように、いくつか村が飛ばされたり、人口が多い町を無視したり、理屈に合わない動きをしている部分も見られる」

「治安が良かったため扇動に失敗したと考えれば……いや、駄目か」

「はい、兄様。開陽でも諍いが起きているので、治安はそこまで問題ではなさそうです」

「さらに付け加えれば、扇動を疑って街道から外れた場所の巡回回数を増やしたんだけど、不審人物は特に見つからない。堂々と街道を使って動いていけば関所で捕まえられるだろうから、あえて街道を外れて移動していると思っただけ」

開陽は琅邪国の行政府があり、人口が多い分治安維持にも注意を払っているので、治安はかなり良いです。なので、張兄妹が口にしたように、治安状態もあまり関係がなさそうです。

みんなして地図を見ながら思うところを口にしていきますが、いまいちこれ！と言う意見が上がりません。

私も地図を眺めて色々考えては、打ち消していきます。そんな風に時間が過ぎる中、ふと気づく事が有りました。

一見何の脈絡も無しに集落で問題が発生しているように見えますが、ある視点から見れば説明がつくような気がします。

私の左隣に座り、会議の記録を取っている子瑜さんの方へ顔を向けます。

「子瑜さん、筆をお借りしてよろしいですか？」

「？ 構いませんが、どうするのですか？」

「ありがとうございます。恵さん。これに書き込みをしても大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫ですけど……。何か思い付いたの？」

二人に許可を取った上で筆を持ち地図に書き込みをしていく。

拠点と拠点の間を線で結んでいく。最初の起点は徐州の北部、もともと日付が古い場所を取る。その際無視する箇所には付けないように気を付けて、日付順に点を結んでいき、終点を開陽にして一本目の線を描き終える。そうやって一本の線を描いた後、同じように二本目の線を描いていく。

「……ああ、なるほど」

そうやって線を書いていく途中でお兄ちゃんが声を漏らしました。

二本目の線を引き終えて、私は筆を置いて口を開きます。

線を辿っていくと、青州に近い町から開陽に向かい、また開陽から北に戻る。そういう風に動いているように見えます。

「おに……県長様は気づいたみたいですけど、これは徐州を巡る行商人の経路じゃないかと思えます」

この件に関する想像を箇条書きで挙げると以下になります。

一・扇動者は行商人に扮しており、まずは青州以北から琅邪国に入ってきて、南下しながら開陽まで行商を続ける。

二・開陽から折り返すように反乱地域が北上していったのは、別の巡回路で行商をするため再び北へ移動していくから。

徐州独自の政策もこの動きは関係しているでしょう。

徐州で産業の保護政策として行こうと言われる組織を作っています。簡単に言うと、職人や商人など、同じ職種の者同士が集まって作る物で、商家同士が集まってできた行も存在します。

その商家の行では州公認の組織として認める代わりに、『行商は徐州中を巡る事』を州府より要請されています。この巡回路は行内で誰がどの地区を回るか決めており、一ヶ所に複数の商人が集中しないようになっていきます。

そう考えれば、一部飛ばされている場所がある理由もある程度説明がつきます。

『自分の行商の経路に含まれないから』でしょう。

「そう考えれば、街道の外れを警備させても尻尾を掴めなかった事を説明できます。行商人として、堂々と街道を移動しているのででしょう」

おそらくこの予想は大きく外れていないだろうと思います。ただ、一点気になる事があるのも事実です。

「ただ、私の記憶が確かだったらですけど、行商経路に含まれているのに飛ばされている場所もあります。ここ、それからこの辺り一帯です」

「羊県尉は徐州の行商路をすべて把握しているのです？」

指でその場所を指し示しながら、私はそう言葉を作ります。

それに対して、驚きと呆れが混ざったような声でそう子綱さんに問

いかけられました。

「すべて、ではないです。移民の受け入れで絶えず集落が増えているのが現在の徐州の状況ですので、巡回経路も頻繁に変わっていますし」

お兄ちゃんの手伝いをするに当たって、行商の経路を押さえておく事は重要だったので常に最新の状態を確認する癖は付けています。今回はそれが役に立ちました。

続いて子瑜さんから質問が来ました。

「けど叔子。そうすると、飛ばされた集落が存在する理由は何なのですか？」

「そこまでは分かりません。商品が無くなったため開陽まで向かったのかもしれないし」

「それだと、飛ばされた地点から開陽までに寄っている理由が検討つかないよ」

「売る物がなくても、特産品の買い付けのために寄ったとか……」

続けて向けられた空さんからの質問へそう答えを返しますが、自分でもあまり自信がありません。

そこにお兄ちゃんから声がかかりました。

「いや、多分違うと思う。そこにも寄ったんだけど、何も起きなかつたんだらうね」

「隣君、どういう事？」

空さんが不思議そうにそう言いますが、お兄ちゃんは顔を上げずに地図に注目して考え込み続けています。

そのまま三分ほど無言で考えた後、多分こうかなと呟いて顔を上げました。そして、私達全員を見渡して言葉を作りました。

「多分、天明の言ったとおり行商人か、それに扮した者が扇動者になっているのは間違い無いと思う。天明が補足として言った、巡回経路なのに特に何も起きていない地点。そういう場所はここ数年で受け入れた移民達で作った集落だよ」

そう言われて地図を見直すと、確かにお兄ちゃんの言う通り比較的最近できた集落がそれに当てはまりそうです。しかし、それはそれで

疑問が出てきます。

「けど師父。扇動をやりやすいのは、最近移住してきた方々に対してではないでしょうか？昔から住んでいる民ならば、少なからず為政者へ忠誠心を持つ物でしょうか？」

「それに対して、最近来た者達はその忠心が薄い。確かに伯侯殿の言う事に一理ありそうなのですが」

私と同じ事を思ったのだろう。恵さんと子布さんから質問が飛びます。

それに答えたのはお兄ちゃんではなく、空さんでした。

「ううん、そうじゃない。多分私の家族達と同じ。そういう事なんだよね、麟君」

空さんはお兄ちゃんに確かめるようにそう問いかけます。

お兄ちゃんは顔に苦笑いを浮かべながらも頷き、空さんに続けるように促しました。

それを受けて、空さんは言葉を続けます。

「私も元々は青州から逃れて徐州に住み着いたんだけど、やっぱり色々と気を使うんだよ。追い出されてしまったら、また放浪しなくちゃいけないし、徐州みたいに良い条件で受け入れをしてくれるところって無いから。私の父も受け入れ先の地主だった子伯様に頭が上がらなかつたし」

「いや、姉が色々と無茶をしたようで……」

お兄ちゃんが冗談めかしてそう口にしながら、頭を下げる。空さんはそれに対して苦笑を浮かべるに留めた。

その話は私も何度か聞いた事がある。

空さんとお姉ちゃんが出会った時、空さんがお姉ちゃんに無礼を働いたと誤解した空さんのお父さんが空さんを叱ったらしいです。

その背景には、あの村の土地が糜家の私有地であり、申し出を白紙にされて追い出されては敵わないという事がありました。

なるほど。今回の件もそれと同じ風に考えれば、移住してきた人達はおとなしくすると考えられます。不遇な扱いを受けければ話は別でしょうが、徐州では収穫があるまでの免税や、道具や食料、種籾たねもみなど

の貸与など、移民達に対して至せり尽くせりといった対応を行って
います。

その上、優秀な人物は官吏に登用するとも宣言しているわけだか
ら、わざわざ反抗する必要はないでしょう。実際に移民してきた空さ
ん、文嚮さん、私など、中央から官職を与えられている例が有るわけ
ですから説得力があるはずです。積極的に従う事を選ぶのではない
でしょうか。

他の方も合点がいったのか、納得の表情を浮かべています。

「なるほど。 移住してきた者達が問題では無いのですな。 では、
騒乱を起こしているのは昔から徐州で暮らす中で、不満を持った者共
という事ですか？」

「おそらくは。 ただ、その不満も何事もなければ燻^{くすぶ}るだけだったん
だろうね」

「それを煽って大火にしようとしている者が問題という事ですな」

子布さんとお兄ちゃんが言葉を交わします。 お兄ちゃんが少し苦
い表情をしているのが気になります……。

ですが子布さんの言う通り、扇動者を捕らえなくてはいずれ大規模
な反乱が起こりかねません。

「それじゃあ、行商に化けていると思われる扇動者を速やかに捕らえ
る。 そのために関所での通行に一層の注意を払うという方針で進
めようと思いますが、良いですよね？」

一応私は治安維持を担当する県尉なので、そう口にする。 実際には
指示を出すだけで、私は兵達の調練に集中するつもりですが。

ですが、それにはお兄ちゃんから待ったがかかりました。

「そんなに単純に済む事じゃ無いと思うよ。 行商人の振りをしてい
るだけなら、何処かで存在が露呈していたはずだし。 割符^{わりふ}を手に入
れば関所を越えるのは難しくないけど、巡る集落からすれば、今ま
でと違う人が突然来れば疑問に思う。 そこから行なり商会に問い
合わせが発生すればすぐにバレるよ。 それが無いという事は、よほ
ど顔が似ている人物にやらせていない限り無理じゃない？」

そこで言葉を区切り、お兄ちゃんは難しい顔をしながら腕を組みま

した。

「というか、そもそもさ。仮に私がここにいる誰かに、行商人に化けて諜報活動しろと命じたとしてさ、馬鹿正直に巡回経路どおりに動く？」

お兄ちゃんは、そう言っただけの顔を順に見ました。

……言われてみれば、そういう行動はしないでしょうね。

どうせ諜報が終わればそこから離れますし、目的地への最短経路のみを進むと思います。

諜報にかかる時間が少なければ少ないほど、出会う人が少なければ少ないほど、バレる危険性は低くなるのですから。

「となると、この相手は扇動をするために行商人のふりをしているのではなく、行商を主目的として動き、結果的にその場所で不満を煽っているの？」

「多分。もしかしたら、自分がしている事が扇動になっているのに気づいてすらいないのかも。身を隠すでもなく、あまりにも堂々としているし」

空さんからの質問にお兄ちゃんが答えました。

確かに、あまり自分の存在が露見しないように気を付けているように見えません。

「けど、そんな事ありえるのですか？　いくら不満が燻っている相手とはいえ、明確な悪意を持って扇動しないと行動を起こさせるのは難しそうですねですけど」

「……話しているうちに、一つ思い当たった事がある。軽く話せてしまうような何でもない噂話でも、聞いた人が大きな反応を返す可能性のある物が」

子瑜さんからの疑問に、お兄ちゃんは心底苦々しい表情を浮かべながらそう答えました。

「それを話す前に、ちよつとここで情報を整理しようか。藍里、筆と紙を貸して」

そう言っただけで藍里さんから筆を借りて、箇条書きで今までに出てきた話をまとめ始めました。

一・ 発生している順番は行商の巡回経路の二つに合致する。
二・ 扇動者（以下甲とする）は行商経路である徐州内の街道を利用して拠点間移動をしていると思われる。
三・ 甲に煽られていない拠点は、比較的最近できた集落。これは、移民達が徐州から放逐されないように自ら自重したため？
四・ 三から消去法で考えると、甲が扇動に成功した拠点は古くから徐州にある集落と想定される。実際に地図上からもそれが読み取れる。

五・ 甲は行商人に化けた偽物ではなく、本物の徐州の商人である可能性が高い。行商のふりをして扇動しているのではなく、行商のついでに扇動していると思われる。

こんなところかな、と呟いてお兄ちゃんは筆を動かすのを止めました。

うん。今まで話した内容が良くまとまっていると思います。

「で、ここに追加で情報を加えると」

六・ 開始地点が徐州の内地に近い南側ではなく、青州と接する北側である。

「これは良いよね？ 天明の引いた線でも分かるように、日付が一番古いのは北側だし」

お兄ちゃんからの確認の言葉に、席に着いている全員が頷きました。

七・ 甲は青州より北を巡っていた可能性がある。

「これは、戻って来たのが琅邪国の北部からだから？」

「うん。青州以外から戻ってきたら、別の場所から戻ってくるだろうね。まあ、最低でも？ 州から青州に入ってから戻って来た事は確かだね」

お兄ちゃんは一旦言葉を止めましたが、すぐに口を動かし始めました。

「追加で書いた部分から察するに、甲が扇動を始めたのは徐州の外から戻ってきた後。これは、それ以前に騒ぎが頻発していない事からの推測。では、外に出ている間に甲に何があったのか」

お兄ちゃんはそこまで話して、大きく一つ溜め息を吐いた後、情報をまとめた紙へ再度筆を向けました。

喋りながら何かを書いていきます。

「徐州より北で発生していて、人を熱狂させ、暴力的行動を起こさせる物。多分これなんだろうね」

そう言ってお兄ちゃんは、紙の一番したに筆で八つの文字を書きました。

みんな息を飲んでその文字を見つめます。その文字は、最近ではよく耳にするようになった物。しかし、私達のように官吏として仕える者には受け入れられない物です。

その様子を気にならず、苦い顔をしたままお兄ちゃんは私達に指示を出し始めました。

「空さん、すぐに開陽に出立して。商家の行で、この日付の前後に各地を回っていた行商人の身元を確認をお願い。時間をかけたくないから藍里も補佐として一緒に向かって」

「承知しました」

「分かったけど、その場に居たらすぐに拘束してしまつて良いんだよね?」

「問題無いよ。むしろ積極的にそうして。私は州牧様に手紙を書いて注意を喚起する。それから、開陽以外の近隣の県には直接説明に向かう事にする。悪いけど、恵達は残つて政務を進めて」

「承知しました」

そこまで言つて、お兄ちゃんは私の方へ向き直りました。

「天明は空さん達の護衛を選定。子義の引き継ぎ資料に使えそうな人材をまとめさせたから、そこから選んで」

「了解しました。けど、お兄ちゃんは?」

「……ああ、そうか。いつも護衛を頼んでいた子義は居ないのか。じゃあ、私の護衛も一緒に選定して」

「了解です」

子義さんがまだ配下に居るとボケていたお兄ちゃんへそう返事をする。

お兄ちゃんから矢継ぎ早に出された指示により、慌ただしくみんな部屋から出ていきます。

私は最後まで部屋に残っていましたが、お兄ちゃんが最後に記した文字を部屋を出る前にもう一度見直しました。

『蒼天已死 黄天当立』

(このお兄ちゃんの危惧が当たっていたとしたら、どう考えても厄介事に繋がるよね)

そんな感想を抱き、心中で溜め息を吐きながら部屋を出て扉を閉めました。

どうか、これがお兄ちゃんの勘違いでありますように。

そんな風に祈らずにはいられませんでした。

第二十九話 There Must Be Ang
el —落ちてきたモノ—

厨房に立ち、火にかけた中華鍋に手をかざす。そして、鍋が十分に熱されて調理に最適な温度になるまでその姿勢を維持する。

調理用温度計など存在しないこの時代、当然それは五感任せとなる。自らの体をセンサー代わりとする行動に、文明社会の利器に頼って錆び付かせた野生が研ぎ澄まされていく。

集中し続け、手のひらにより「その時」が訪れた事を感知する。

手のひらを外すと同時に油を入れ、鍋を回して鍋肌を満遍なく滑らせていく。

すべての面に油が通った事を確認した後、その油は使用済み油を納める容器へ入れてしまう。そして新しい油を入れ直し、また同じように油が鍋に塗布させていく。

連鍋^{レンコウ}。中華料理の数ある技術の中で基本中の基本とされる技術。これをする事で、洗った後でも鍋に残る目に見えない汚れや埃を取り除き、材料が焦げ付いた後に鍋に付着するのを防ぐために行う物だ。

そして鍋にあらかじめ下ごしらえしておいた材料を入れる。黄金の色をして、とろりとした液体。そう、溶き卵だ。入れたと同時に、ジューツ、という水分が蒸発していく良い音が耳に響く。

そのまましばらく待つと、卵液のまわりが盛り上がるように火が通るので、持っているお玉を火が通っている部分と通っていない中に混ぜるように、大きく、静かに動かしていく。

半熟程度の焼き上がりになったら、鍋の中でいくつかに切り分けて、ひっくり返す。そして、慎重に焼き加減を確認し、出来上がった瞬間に鍋から皿に移す。

あらかじめ作っておいた甘酢餡をかけて完成。

料理の乗った皿を手に持ち、料理を心待ちにしている人がいる食卓へ運ぶ。

「ほい、芙蓉蟹^{フーヨーハイ}の完成。それじゃ、熱いうちに食べようか」。

芙蓉蟹^{フヨウカイ}。二十一世紀の日本では、かに玉の名前で親しまれている料理だ。今日は珍しく、沿岸部から生きた蟹を売りに来ているのに出くわしたので、余っていた卵を使って拵^{こしら}えたのだ

他に材料は、長ネギと椎茸。非常にシンプルでありながら、厚めに焼かれた卵により豪華さも演出する事ができる私の得意料理の一つだ。

全員が箸を伸ばし頬張ったのを確認した後、私も箸を伸ばす。

うん。我ながら良くできてる。海と接する地域ならともかく、この辺りは内陸に位置するので、蟹を手に入れるのは難しい。おそらく、次に食べるのは一年後とかだろう。

上海蟹？下手すると赤痢になるので、できるだけ食べないようにしていますか何か？

「隣君、本当に卵料理得意だよね」

「ありがとう。だけど、卵料理が得意になったのは、誰かさん達が卵焼きばかり作らせていたからだと思うんだけど」

空さんが言った感心したような声にそう返すと、私の姉と妹が私の方から視線を外した。おい、目合わせろや。

「あはは……。まあ、料理上手になるのは悪い事じゃ無いし……」

困った顔をしながらそうフオローする空さん。気を遣わせて申し訳ないです。

「店主、おかわりです」

「店主じゃないから……っておかわり!? いつの間にか皿空っぽじゃないか! おいこら、私まだ一口しか食べてないんだが!」

「常在戦場。いつ如何なる時も油断するべきではないと存じます
が」

「うん、武人としては正しい心構えだと思うけど、食卓にまでその規範を持ち込むのはおかしくないか!」

不敵な笑顔がドヤ顔に見えて凄く腹立たしい。

ちなみに、私以外の面々はそれぞれ自分の分を皿に確保済みだったりする。

「まあ、良いではありませんか。というわけで、おかわりを所望しま

す」

「無いわ！ 卵はともかく、蟹身が残ってないわ！」

「な……！！ 食料などの兵糧は余剰分も含めて用意するのが常識でしょう！」

「ここは戦場じゃないんだから、糧秣りょうまっを余るように用意するわけないだろうが！ 第一海と接するわけでもない地域に、余るほど大量に蟹が流通するわけないだろう！」

正面にいる腹ペコ県尉と罵りあう。

程度が低い？

大いに結構！

こいつには食い物の恨みは恐ろしいと分らせる必要があるっ！

目の前で私と低次元の争いをしているこの見目麗しい少女。

姓を太子、名を慈、字を子義という。

正史において、青州は東萊郡の官吏としてキャリアをスタートさせるが、政争に巻き込まれる形で青州から逐われ、遼東郡で暮らす事になる。

しかし、出奔中に母の面倒を見てくれていた孔融が黄巾の残党に居城を囲まれた際には救援に駆けつけ、このままでは落城必至という状況で単騎で包囲を突破。そのまま平原の丞に就いていた劉備に救援を申し出るといふ離れ業をやつてのけている。

結局その援軍要請も成功した事で、賊達は北海の包囲を解いて撤退する事になる。

特筆すべきは、政争に巻き込まれた時、そして単騎突破を試みた際にも機転を効かせて行動している事だろう。単なる武勇を誇るだけの將軍ではなく、知勇兼備であった事が伺える。

その後は揚州に行き、劉繇の元で孫策の侵攻に抵抗勢力の一翼となつて争う事となる。

その際に、孫策と一騎討ちをして引き分けている。

劉繇の敗走後も孫策に抵抗し続けたが、最終的には降伏する事になる。

その後は呉に仕える事になるのだが、劉繇が病死した後の残兵を集

めて来ると言って一度孫策の元から離れる。

そのまま逃げるのでは無いかという疑いを向けられたが、約束通り兵を集めて戻ってきている。この功績により都尉に位を上げている。

その後は孫策、孫権に重用されて第一線で活躍を続けている。

演義でもほぼ同様の活躍をしているが、孫策との争いが大きくピツクアップされている。

史実では赤壁前に死没しているが、演義では合肥の戦いで張遼に敗れて死亡している。

張遼の当て馬にする必要があったのか、非常に疑問なのだが。

話が少し逸れたが、言ってしまうえばこの人物は孫堅が当主の頃から孫家に仕えていた人物ではなく、孫策が自ら登用する事を決めた新生孫家家臣団の代表格に当たるのだ。実際にこの人物は劉表、黄祖との戦役において活躍している。

さて、そんな大層な経歴を持つ人物と同じ名前の目の前の娘さん。

出会ったのは一年半ほど前の事だろうか。

経歴は史実の人物と重なる部分がある。東萊郡の官吏として仕えており、出奔する羽目になるところまでは同じなのだが、それ以降が少し異なる。

正史とは違って遼東に向かわずに、逆方向の南へ歩みを進めて徐州に辿り着く事になる。

本人曰く徐州が急激に栄え始めた事から、見聞を広めるために訪れようと思ったらしい。そして下邳が気に入ったため、そのまま仕官したらしいのだ。

さて、この名前を主簿時代に見つけた私の心境を想像してほしい。正直に吐露すると、物凄くビビった。太子慈の活躍した地域は主に青州と揚州、荊州になるので、徐州に来ているとは完全に予想外だった。ビビった理由は、青州から密偵として送り込まれた可能性に思い至ったから。太子慈が相手だと武で圧倒する事が難しいため、無理矢理追い出そうとした際の被害が甚大になる事を覚悟する必要があった。まあ、結局私の勇み足だと判明したのだが。

勘違いに気づいた後は、逃がさないために囲い込む工作を始めた。

具体的には孝廉にかかるように、州牧様への工作を。こういう時、トップに近い役職って良いね！ええ、賄賂を渡そうとする官吏の多さに辟易ともしましたが。

結果、下 \square 国の丞に任命する事に成功し、徐州内に留める事ができるようになった。彼(彼女)の軍事的才能が史実と同様であるならば、数年後には下 \square 国の相にまで位を上げる事が容易に予想できた。

これで、向こう十年間は下 \square の防衛戦略に頭を使わなくて済む様になると大いに喜んだ。

ちなみに、この時下 \square 国の丞に推薦すると挙がっていた人物は \square 融。ええ、一石二鳥のフラインプレーでしたよ。あれは絶対に権力与えちゃいけない類の人間ですの。

ところが私の考えは思わぬ所から破綻する事になる。……誰が自分から丞の位を捨てて、私の配下になろうと予測するよ？

まして、当時の私の位は莒県の丞。丁度西涼の乱を終えた直後に、州牧様から就任の要請が来たので任官する事になったのだ。

国(郡)の丞と県の丞では、当然後者のほうが官位として格下になる。高位に居た者が辞任し、そのまま低い位の人物に従うなど常識外れもいいところで、開いた口が塞がらなかった。すぐに翻意を促し、もう一度正規の官位に就く事を要請したが、頑として受け入れなかった。

本人曰く、身に余る官位に推挙頂いた方に報いる事ができないのは恥。願わくば、その御恩に報いるために仕える事をお許し願いたい、だそう。

その時はつきりと分かった。麁家の人間に官位の就任要請を蹴られ続けた州牧様の気持ち。今度謝罪のために、何か手土産持って \square に行こう。

結局そのまま翻意させる事ができなかった。だが、県丞の配下に置いておくにはもったいなさ過ぎる軍才だったので、州牧様に図った上で県尉に就ける事が決まったのだ。

そういう背景がある事から、基本的に丁寧な言葉を使う事を心掛けている私ではあるが、この律儀な頑固者(ついでに腹ペコ属性)に対

しては容赦無く荒げた声で話すようになっていた。というかこの腹ペコ、丁寧に話しかけたところでこっちの意見なんて聞きやしないのだ。

ただ、姉さんが陽都の県長に就任するにあたり、軍事能力に長ける人材を補佐に就ける必要があったため、どうしても頭を下げて陽都の丞になつてもらふ事を承諾してもらつた。

流石に主君と仰ぐ者に頭を下げて頼まれた事をにべも無く断る事は出来なかつたようだ。今後はこの方針で説得していくとしよう。

「はいはい、喧嘩しないの」

顔を突き合わせて睨み合う私達に、空さんからストップがかかる。

それを機にいったん顔を離し、私は無言で台所に立ち自分の分（蟹抜き）を作つて食べた。

コノウラミハラサデオクカ。

さて、食事後にお茶を入れて一服。その場で席に着いている面々に話を振る。

「さて、それじゃ明日以降の流れを確認しておこうか。空さんは悪いけどここに残つて政務をお願い。急を要する案件は軒並み終わらせておいたから、いつも通りやつてもらえれば問題無いから」

「うん、任せて」

「姉さんもここに残つて、兵站の管理をお願い。ここにある物資は空さんの許可取れば、姉さんの裁量で輸送してくれて良いから。前線に出るよりは気楽でしょ？」

「……本当は出なきやまずいんだよね？ ごめんね、負担かけて」

気にしないで良いと思う。というより、兵站の維持管理も立派な軍事。後方で構えてくれる人間の有無は十分作戦に影響する。

あがり症な姉さんではあるけど、交渉する相手が空さんなら十全に力を発揮できるだろう。

「子義、伏兵の指揮はよろしく。お前らの待つ南側に逃げるように上手く追い込むから、相手の戦意を崩壊させて」

「承知しました」

「とはいっても、私はもう子義に命令できる立場ではないんだけど

ねー」

何せ所属する県が変わっており、指揮系統が完全に別になってしまっているのです。

当然、陽都県の指揮系統最上位は県長である姉さんになる。

「自由に動けるといふのなら、あえて反抗するつもりはありません。

子仲様もそれでよろしいでしょうか？」

「うん。前線についてはあまり分からないから、全面的に委任するね」

無責任なようにも聞こえるが、これはこれで正しい判断である。

自分の専門でない分野に知ったかぶりで口を出すよりもずっと良い。

文と武を司る者が、どちらも相手の職分を侵さないのならば、十全に実力を発揮できる物だ。

好例は中華だと藺相如と廉破。中華の外だと、ローマのオクタヴィアヌスとアグリッパ、更に後世になるとプロイセンのビスマルクとモルトゲが有名だろうか。

自らの職分を正しく区切り、その職権を持って全力で国家に尽くす。国家の両輪と呼ばれるのはそういった人材だろう。

何でも一人でやろうとすると、結構領地運営は傾く物なのだ。

そういった意味で、軍才に乏しい姉さんが子義に軍権を全面的に委ねるのは正しいと評する事ができる。

もっともこれは、兵を預ける相手が信用できなければ取れない手でもあるのだが。良くて地位を奪われる。悪ければそのまま殺されかねない。

子義が律儀者な事は私も姉さんも十分に分かっているため、迷わずそういう指揮体系にしている。

「天明は私と一緒に包囲を担当。基本的に遠戦を中心に防衛重視。

南以外からは逃げ出さないように注意して」

「いしひつけつ 囲師必闕だね。それじゃ、きゆうこうぶつはく 窮寇勿迫も守った方が良いよね？」

「攻撃はしちや駄目だけど、追撃だけはして。望んでいない方向へ向かおうとするなら追い立てなくちゃいけないから」

「あ、そうか。それじゃ、追撃用に騎兵も準備しておくね」

さて、私達が何の話をしているのかというと、二月前ほどに発覚した扇動への対応について。

早い話が、さつさと琅邪国中の不穏分子をかき集めて、一つにまとめた後に叩いちやおうぜ、という作戦行動を取ろうとしている。

もちろん、殲滅する事を目的としているのではなく、一度大いに破って翻心を促すため。

不満を持った人間を集めるための方法は、こちらも扇動を利用させてもらった。

幸いと言って良いのだろう。扇動をしていた張本人はすぐに捕らえる事ができた。本人を尋問したところ、やはり扇動をしていた自覚はなく、行商途中で聞いた事などを面白おかしく脚色して話していただけらしい。はた迷惑な……。

この商人へのペナルティとして財産の一部没収、それから無償で噂を流してもらう事にした。

『この間話した黄天の世を目指す者達は琅邪国の莒県の一地点に集まろうとしている。　どうやら一番近い莒県の県府でもそれに感づいているようで鎮圧の兵を起こそうとしているらしいんだけど、揉め事が至るところで起こっているから集まりが悪いらしい。　反乱軍の集まる数次第では勝てないかもしれない』

反乱を起こそうという人々は、この噂通りの予定地点へ集まってきたており、数日後には動き出すだろうと考えられる。

これに先立ち、集まる予定地のある？県では反乱討伐の出兵数を増やして四方へ兵を動かした。そうやって噂通り出兵にてんやわんやになつていいる事を演出し、決起の好機であると錯覚させて反乱を起こさせる。そしてそれを討つ。

大元の原因は商家にあるだけに、その負担は開陽の行で賄う事になっている。まあ、一番物資を提供しているのは糜家の商家だ。文句は言わせん。文句を言ったら、うちの商品だけで徐州の官製商品を独占するべく行動する。品質だけなら、どこの商家にも負けない自信はあるのだから。独占禁止法？無いよ、そんな物。

ひとまずこれが成功すれば、徐州では不平不満から反乱を起こす事

はなくなるだろう。

集まる想定数も割り出しており、最小で五〇〇を割り込むくらい、最大でも一〇〇〇を超える事は無い。

対する我々はどうと、莒県の兵達は各地へ飛ばしているため五〇〇程度。しかし、陽都から姉さん達が連れてきた兵が二〇〇〇を数える。兵数でも、練度、装備でも圧倒している。包囲を行う兵は当然陽都の兵を借りる。

はつきり言って、よほどの事がなければ戦にはならない。考えられる失敗の可能性は相手に兵数が予想よりも多く集まった場合。それから、個人の武勇で包囲をぶち破れる人材がいる場合。そのどちらの可能性も非常に低い事は確認済みだ。

「しかし、大変ですね。噂話からこういう問題が発生するとは」

「治世が不安定になると、人は他愛ない噂でも真実と思っちゃうからね。世が乱れた時に邪教がはびこるのは、そういった物に救いを求めなくちゃやってられないという背景もあるから」

「色々やるせないよね。開陽に行った時に行で聞いたんだけど、幽州でもそういう噂が流れ始めているみたいだね」

「あ、私も聞いた。天の御遣いだけ？ 眉唾も良いところだと思っただけだね」

明日の打ち合わせが終わったので、そのまま雑談に興じる。

油断していると取るか、余分な力が抜けていると取るか。人によって変わるだろうが、私は後者として取っている。

しかし、まあ。

「麒麟の化身なんていう眉唾の極みが居るわけだし、天の御遣いくらい居ても良いんじゃない？」

冗談めかして私がそう言うと、みんなから笑いが漏れた。うむ。私達のような存在を相手にする時には、そうやって笑い飛ばすくらいで十分なのだろう。

「ただ、私と違ってその御遣い、本物の可能性が高いかな」

まあ、私も一般人とは言い切れないわけだが、そんな事はおくびに

も出さないで、私がそう口にすると四人とも鳩が豆鉄砲を食らったよ
うな顔をした。うむ。なかなか味の ある光景だ。

そして私は、服の袂から一本の細い筒状の道具を取り出して、四人
に見せた。

おそらく彼女達が見た事の無い材質で出来ている、不思議な物。し
かし私は見た事があり、それどころか毎日使っていた事がある物だ。
「その不思議な材質でできている道具。 それを売りに来た商人によ
ると、天の御遣いの暮らしていた世界の書くための道具らしいよ」

それは、この時代にあって再現が不可能な部品で構成されている。
石油製品であるプラスチックと合成ゴム、そして細い金属で作られた
コイルばね。それらを組み合わせる事で意味を成す道具。

その道具の名前は『ボールペン』という。

第三十話 Ceramic Heart — 技術と犠牲 —

マイセン。

その言葉を聞いて何を連想するだろうか。

二十一世紀ならば、ドイツにある地方、都市の名前、そしてそこで作られる西洋磁器を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

西洋磁器は当時ヨーロッパでは作成できなかった東洋の白磁器を再現した事で、ヨーロッパ中で広まる事になった。そして、その名前を持つブランドは、西洋磁器の分野においてトップシェアを三百年もの長期に渡って確保する事になる。もちろん、二十一世紀でも西洋磁器の頂点に君臨している。

さて、ではその白磁の再現方法を考案した人物はどうなったのだろうか？

「この道具。加工するのに必要な技術力はおそらく今の中華には無い。伝え聞く大秦ローマでもおそらく無理だと思う」

まあ、当然だろう。流通に耐え得るボールペンの発明は二十世紀に入ってから。

何故なら、ペン先のボール自体精密加工が必須。ついでに高粘度インクの存在が不可欠。もちろんそれ以外にも多くの技術が組み合わされて、作成の際に求められる技術力が格段に高い物なのだ。

まして、これは一般的に流通していた安い物。材質はプラスチックが大部分を占めている。石油製品なんて作れるわけ無いのだから、ますます再現は難しいだろう。

そんなオーバートクノロジーな逸品を平気で市場に流すなよ……。しかも簡単に出所が分かるとか論外。下手な権力者の目に留まると、幽閉して作るように命じられかねんぞ。

見たことの無い天の御遣い殿に悪態を付いていると、興味深々といった様子の天明が弄りたそうにしていた。

好奇心強いな。猫っぽい。

「触って良いよ。ただ、力任せに折り曲げると壊れそうだから、丁寧に扱うようにね」

そう言っつて、私は紙の切れ端も机の上に置き、ペンを手に取っつて使い方を説明する。

「この部分を押し込むと、書く部分が出てくる。試し書きはこれにして」

そして、天明にボールペンと紙を手渡す。

天明はそれを持ってさらさらと書いていく。何やら感動しながら自分の名前を書き続けている。しばらくそうしていたが、満足したのか隣に座る姉さんへボールペンを渡した。

そのまま横に座る人へ渡していき、空さんまで試し書きを終えて私の手元に戻つてきた。

そのままボールペンを手元で弄びながら口を動かす。

「使ってもらつたら分かると思うけど、これは非常に便利な道具だよ。数を揃えれば、多くの筆と墨の職人が首をくくる事になるだろうと簡単に予想できるくらいにね」

そう口にするると、みんな神妙に頷いてくれた。筆と違つて墨が垂れず、かすれる事も無い便利さを体感したからだろう。

「で、本題なんだけど、その御遣い殿は何でこれを手放したと思う?」

「えーっと、物珍しく、お金になると思つたから?」

「ごめん、聞き方が悪かつた」

答えてくれた姉さんに、苦笑いをしながらそう謝る。

「物珍しいからお金になりそうだ、だから売つた。多分大元の理由は今姉さんが言つてくれたような感じなんだろうね。けどそれが事実だとすると、その御遣い殿にとつて、これって売り払つてしまつて良いくらいの価値しか無いんだよね。例えば天明がお金に困つたとして、大事にしている飾り布を手放せるかと言つと……」

「無理。絶対に嫌」

「……例えとしても出すべきじゃ無かつたね、ごめん」

例え話だつたとしても、あまりにも無神経で不適切な発言となつて

しまった。きつぱりと拒絶する天明に向けて頭を下げる。

「……まあ話を戻すけど、その御遣い殿にとってこれは、代替ができる物って事でしょ」

「まあ、そうなるのかなあ」

「いよいよ金に困って、虎の子のこれを出したという可能性もあるのでは？」

「だったらその前に色々他の道具が流通しているはずでしょ。幽州方面から流れてきた変わった道具は、これ以外に無いよ。他の人に買い上げられていたとしても、噂くらいは聞こえてくるはずだし」

第一、珍品をあえて欲しがるような人がそういう物を手に入れていたとしたら、絶対に他人に自慢する。そういう人間は、蔵の奥にしまいつぱなしにはしないだろう。

「だから、これはきつと彼、もしくは彼女にとつては無くなってしまっても困らないくらいの価値しか無いんだと思う。そういう国、世界から来たんだろうね」

まあ、おそらく天の国Ⅱ二十世紀〜二十一世紀の日本だろう。

ボールペンに日本の某有名文房具メーカーの名前がアルファベツト名が入っているし。

「それを称して天の国と呼ぶのなら、多分そういう世界に住んでいた本物の御遣いになる。そう考えたんだけど、どう思う？」

四人とも難しい顔をしている。

まあ、いきなりこんな事を言われても困るか。ただ、わざわざ私に近い人間かつ官位持ちだけを集めたのだから、警戒だけは促しておこう。どんな人間かも分からないのだから、下手に受け入れて問題を起こされても困る。警戒しすぎたとしても無駄にはならないだろう。

「まあ、今は分からなくても問題は無いんだけどね。ただ、動向からいはきちんとして追った方が無難だろうね」

「まあ、怪しい事この上無いもんね。あ、麟君は麒麟の化身だろうが、神仙の生まれ変わりであろうが、お姉ちゃんは受け入れるから何も心配する事は無いからね!!」

「うん。その辺は子供の頃から思い知っているから大丈夫」

姉さんとは十年以上の付き合いがあるのだから、今さら無条件の好意を疑う理由は無い。……まあ、いい加減弟離れしろよと思いつけて早数年なのだが。

もう私が適当に政略結婚して、強制的に弟離れさせるしかないのだろうか。ただそれをした場合、私は家庭を顧みずに働き続けそうなので、奥さんになってくれた人を不幸にする未来しか浮かばない。そんな理由で結婚にも女性との交際にも二の足を踏んでいる。

脇に逸れ始めた思考をかき消し、再度私は口を開いた。

「まあそれは良いとして、この筆もどき。なかなか興味深いんだよね」

そう言つて私はボールペンを分解し始める。そして部品ごとに分けて、机の上に並べていく。壊したのかと思つたのだろう、みんなぎよつと目を剥いてその様子を眺めている。

「こうやって幾つかの部品を組み合わせて一つの道具にしているわけだ。流石にこれだけの小ささに加工する事はできないけど、今の技術力でも真似できそうな物はいくつかある」

まあ、当然前世の記憶でそういう技術も知っているわけだが、折角良い見本としてボールペンがあるのだから、今初めて知つた事にさせてもらおう。その方が言い訳する必要がなくて楽だし。

流石に部品一つ一つ作つていくのは骨が折れるので、職人に再現は任せるつもりだ。その際に、現物を見せながら説明した方が、職人達としても再現をしやすいだろう。

「例えば、この筒を開ける時にくるくると回したでしょ？　そうしないと、これは開かないんだ。開けた後の内側を見ると、溝が彫られてるのが分かる？　その部分同士がかつちりと嵌まりあう事で固定されるみたい」

そう言つて、彼女達にもう一度中身を抜いたボールペンの筒を手渡す。

これは、俗にいうネジ構造だ。地中海世界では紀元前にギリシアで発明されたとしている。ただ、アルキメデスが発明したスクリユールが世界初のネジ構造を使用した機械である事は間違いないので、ポエニ

戦役前後のシラクサのアルキメデスが発明したのではないかという説もあるが。

二十一世紀では至るところで目にする事ができたネジ構造。久しぶりに弄ってみると、釘や楔で止めるのに比べてやっぱり便利だわ、これ。内部構造を確認しようと外蓋を開閉するたびに、木槌使って釘を打ち直す必要無いのは大きいね。

……しかし、これを普及させる際には問題も多いわけだが。

「けど、こんなに細かく溝を彫るの難しくない？」

うん。まさに問題はそこだろう。

ネジ構造、作るのが結構難しいのだ。精密に作るとすると、十年以上かけて型を作る必要が出てくる。将来的には型を使って大量生産、そして中華中に普及させたいけど、今は一つ一つ手作りしていく必要がある。

まあ、これを見本にして鍛冶職人に試作を繰り返してもらおう。遠心分離機や唐箕なんかの機械を作るのにネジが有るか無いかの差は大きい。

「まあ、鍛冶職人達に頑張ってもらおうよ。 もう一つ面白い構造の部品があるから、それも一緒にね」

私は中身のうち一つを摘まみ、そう言葉を発した。摘まみ上げているのは螺旋状に巻かれた金属部品。コイルばねだ。

「これは特異な形状をしているけど、おそらくばねの一種だね。 弩なんかでも板ばねが使われているけど、これはあれより壊れづらいと思う。 横に折り曲げた際の反発力ではなくて、縦に押し潰した際の反発力がかかる物だから。 得られる弾力も桁違いに高いよ」

そういつて、両手の人差し指でばねを押し潰す。そして力を抜いて元の形に戻る事をみんなに見せる。このバネは気をつけないと、手を離した際に弾力で吹っ飛んでいってしまう。前世で何本のボールペンを犠牲にした事か……。

コイルばねも工業製品の部品としては非常にメジャーであるが、本格的に使われ始めたのは今から千年後くらいのはずだ。板ばねしかないこの時代においては、非常に画期的な代物と言う事ができる。こ

れも普及すれば、技術が大きく発展する事が考えられる。私も色々道具を作るのが捗るだろう。ピアノ線などの炭素鋼が原材料となるため、そちらの開発が先になるだろうが、試してみる価値はある。

元々私が大学で学んでいた材料工学の分野にも関わる事になるので、基礎知識はある。まだ頭に残っている……はずだ。……ちよつと不安になったので、本気で思い出す事にしよう。

さて、ボールペン一本でもこれだけの技術の塊になっている事を、おそらく御遣い殿は認識していない。そうでなければ、こんなに簡単に市場に流通させたりはしない。本気で、西洋白磁器の考案者と同じ轍を踏む事になりかねないのだが、それも理解できていないのだろう。顔も知らない相手だが、軽く怒りを覚えると共に同情する。

「まあ、接触すらしていない今から思い悩んでもしょうがないよね。当面はさつき麟君が言ったように、動向だけは追うようにしましょう。陽都で何か掴んだら、麟君と密に連携するように心掛けるね?」
「うん。こつちで何か分かったら姉さんに連絡するよ」

「何も無くても連絡してくれて良いんだよ? むしろ、毎日送るくらいで良いんだから」

「……まあ、気が向いたら」

とりあえず姉さんからの謎のアピールは適当に流すに限る。

盛大に膨れる姉さんを適当に宥めながら、出兵前日の夜は更けていくのだった。

第三十一話 North Winds — はじめてのおつかい —

天明に自身の出生について伝えたのは、数年前。西涼の乱が終わ
り、私が県長に就任した直後くらいだったと記憶している。話してお
かないでいる事もできたのだが、今のうちに話しておいた方が受け入
れやすかろうという判断をしたからだ。

何故なら思春期が訪れた後だと、思春期特有の潔癖さでその辺りの
事情に拒否反応や嫌悪感を抱く可能性が考えられた。ならその前に
話してしまおうと、今は離れて暮らしている義父さんと姉さんに相談
しないで私の独断で話した。後で義父さんと姉さんに大層叱られた
が、良い方向に転がったので結果オーライだろう。

それを伝えたとき、本人は驚いていたようだが、それと同時に自分
の飾り布に刺繍された文字の意味について納得もしていたようだっ
た。

そしてこう口にした。

『お義父さんにしろ、お姉ちゃんにしろ、これだけ良くしてもらって
いるんだから本当の家族だったと知って、喜びこそすれ、怒るつもりも
嫌いになる事も無いよ』

しかし目を伏せて、少し間を空けてから言葉を続けた。

『ただ、お父さんもこの飾りの文字を目にしていたんだろうし、多分そ
の事を知っていたんだろうね……。私、お父さんにどう思われてた
んだろう……。？』

それには答えずに、泣き笑いの様な表情を浮かべた天明を私は膝の
上に抱き上げて、飾り布で止めているサイドポニーを弄りながら口を
開いた。

『天明のお父さんは、天明やお母さんの事を嫌っているように見えた
？』

その私の問いに、天明は首を横に振った。まあ、そうだろうな。幼
い時の虐待は、少なからず心に傷を残す。ここまで真つ直ぐに育つて

いる以上、それは無いだろうと考えていた。

『だったら大丈夫。きちんと愛されていたよ。この飾り布を天明が着け始めた後も態度は変わらなかつたし、捨てたり、破いたりしなかつたわけだろ?』

そこからも、父親が天明へ抱いていた感情を十分に推測する事はできる。複雑な感情は抱いていたかもしれないが、きちんと消化した上で母子に接する事ができていたのだらうと思う。

『第一、本当に嫌っていたんだつたら、鬱憤を晴らすために殴るなり、居ない者として扱って徹底的に無視するくらいの事はするだろ。』

私の実父なんて、散々私を殴つて、金に困つたら売り飛ばした屑だぞ? それと比べる事が失礼になるくらい良い父親じゃないか。疑う方が失礼だよ』

久しぶりにあれの事を思い出すと、少しムカムカしてきたが今は押し殺す。

私の言葉に納得したのか、大人しく私に体重を預けてきた天明を撫でて、微妙にささくれ立った感情を宥める。

しばらくそうしていると、突然わたたと天明が慌て始めた。そして、私の方を振り向き、こう口にした。

『私! お兄ちゃんの事も大好きだからね!』

『……ああ』

しばらく考えて、天明が何で突然こんな事を言い出したのか思い至る。さっきの言葉に義父さんと姉さんの事は入っていたが、私の事には触れていなかったからか。別段気にしていなかったし、今さら天明に嫌われていると疑う気は欠片も無い。家族の中では王虎の次くらいに好かれている自信はある。

……猫杵は別なので、悔しくなんか……ないっ。

『ええと、ありがとう?』

『……何か気の無い返事』

私の微妙なニュアンスを感じ取ったのか、少し不服そうにそう言つてむくれてしまった天明を宥めるのに費やした言葉は割愛させて頂く。

時間軸を現在に戻そう。今私は天明と向かい合って囲碁を打ちながら、雑談に興じている。

この時代の囲碁は盤の目が少ない上に、ルールも二十一世紀で行われている物と少し異なるため、割と私にとっては難しい。前世では某漫画の影響で少し打ってた事があるのだが、それで覚えた定石がいくつかついで、打つ直前に慌てて手を止める事が多い。

その辺りで打ち間違いが多くなってしまうので、私の囲碁の戦績はよろしくない。今も天明を相手に劣勢となっている。

雑談に興じているのは、天明へのトラッシュトークの意味合いもあるのだが、まったく気にした様子もなく打ち続けている。……この二重の敗北感はどうしてくれよう？

「天明。 明日の準備は大丈夫？」

「うん、 兵達も含めて終わってる。 ……気が重いけどね」

天明が心底憂鬱そうに口にする。おっとりした部分があるこの子にしては珍しく、少し眉間に皺を寄せ、口を尖らせて不満を表情に出している。

私はその様子を見て苦笑いを浮かべるしかなかった。

「子義の評価だと、孔国相様は少し尊大なところはあるけど、孔子の子孫だけあって人格は優れているって言っていたじゃない」

「如何に人格に優れていようと、血縁という理由だけで推挙するよう工作をする人物をどう評すれば良いのかな？」

そうフォローを入れた私に不満をぶつけ、その直後に自分の口から出てきたとげのある言葉に驚いた表情を浮かべる天明の頭を、机越しにぽんぽんと軽く叩く。

まあ、どういう事か説明すると、天明と子義に出征してもらう事になったのだ。遠征先は青州北海国。ちよつと青州の治安状態が不安定となっているので、徐州から援軍を出してくれと依頼が来たのだ。

それを天明と子義が兵を率いて対応する事となったのだ。子義は今日は兵卒と一緒に休むとの事だ。前回うちに泊まったのは、姉さん

の護衛の意味合いも有ったのだろう。

「だからといって、敢えて私を指名する事はないと思う」

「まあ、そうなんだけどさ。身内なんだし、会ってみたいんじゃない？」

「そういう私事をこういう事に絡めるのは……」

天明が手厳しい……。まあ、ぐうの音が出ないほどの正論なわけだし、反論のしようもないのだが。

不満そうにしている天明の頭を落ち着くまで撫で続ける。ようやく表情が柔らかくなった頃に私は手を下ろした。

その後囲碁を再開したが、劣勢を覆せず私に敗北となった。参りましたと頭を下げて、天明が石と碁盤を片付けている間に白湯を入れてくる。せめて前世ではまったくルールを知らなかった六博だったらもう少し粘れるんだが、と湯飲みの準備をしながら自分の事を慰める。

そして天明が待つ机に戻り、そのまま本格的に雑談に興じ始める。

やはり話題は、明日から出発する青州についてだ。

「けど、青州の流民って、今積極的に受け入れてるよね？ そんなに大規模な集団にはならない気がするんだけど？」

「んー。まあ、順番に話していこうか」

そう言つて一旦言葉を止めて立ち上がり、地図を机の上に広げてから話を再開した。

「じゃあ、天明。そもそも、青州から流民が流れってくる状況って何が起こってると思う？」

「十数年前、空さん達が移住してきた時は重税が原因だったんだよね？ 今は変わってるの？」

「うん、今はその状況から脱しているよ。少なくとも北海は。数年前に孔国相様が躍起になって、軒並み私腹を肥やしていた賊吏を処分したって話題になったから」

この辺りの事情は、私も空さんと子義に聞いて初めて知った。空さんは北海出身だけあって、今でもあの辺りに住む人々と繋がりをもち続けているし、子義も孔国相と仲が良かったため北海の状況に詳しいの

だ。おそらく、定期的にどういう状況にあるのか確認しているのだろう。北海の名を挙げたのは、彼女達の情報から青州の中で最も詳しく知っているという事もあるが、これから出征する天明達の最初の目的地である事と、琅邪国と接する領地だからだ。

「つまり、現状重税に苦しんで琅邪国に駆け込んでくる事は無いはずなんだよ。徐州に来る前にほぼ確実に北海を通ってくるんだから」
北海国は青州でも人口がかなり多い。というより、琅邪国よりも人口が多い。それだけ豊かな土地なのだから、流民を収容しきるのも難しくはないはずなのだ。

ただし、それは平時であればこそだ。

「じゃあ何で出来ていないのかと言うと、答えは黄巾党。冀州から雪崩れ込んで来たらしいんだよね」

史実においても、冀州は黄巾勢力の強い地域だった。盧植や皇甫嵩の活躍によってようやく治まったと言っても良い。

この世界でも同様なようで、冀州黄巾賊は非常に大きい集団となっている。むしろ、日に日にその勢力を増していると言っても良いかもしれない。……まあ冷静に考えれば、史実で冀州は張角達三兄弟が直接荒らし回っていた場所なのだから、この世界でも本人達が布教活動をしているのかもしれない。だったら、続々と賊が増え続けているのも納得できなくはない。

そんなわけで、冀州で増え続ける黄巾賊は飽和状態にまで膨れ上がり、食べる物を求めて周辺の小州に移動を始めた。それはさながら蝗害の如し。町や村を次々に襲って回り、被害を拡大させ続けているのだ。

冀州と接している青州でもそれは同様で、平原、済南、楽安、斉と西から順番に次々被害に合っている。そして北海にも遂に魔の手が伸び、流民の受け入れをしている場合ではなくなってしまっているらしい。

そして、代わりにその流民を次々に受け入れているのが徐州になる。青州としても、そのまま流民を放っておくと賊に合流して荒らし回り始める可能性があるのです、どうにかしなくてはならなかった。そ

ここで、救いの手を伸ばすという形で州牧同士のトップ会談が開かれ、徐州で青州からの流民受け入れをしても良い事になったのだ。そうでなければ、人口流出により生産力がた落ちする事を勝手にやっている事になり、後々大問題となる。

「黄巾党……。今回の遠征では、その入り込んだ黄巾賊を討伐する事を目的にするんじゃないよね？ 流石に率いる数が少ないし」

「うん、入り込んだ黄巾全部は流石に無理。天明達に求められているのは、青州東部の治安維持活動と物資を送る際の護衛になるね」

「……世直しをお題目に掲げているのに、迷惑な人達だよ」

「まあ、色々な考えの人がいるからね。上の方は本気で世直ししたいと考えてるかもしれないけど、末端まで伝わりきっていない可能性もあるし」

「やっぱりまだ少し不機嫌そうな天明の言葉に肯定を返す。黄巾を追い出すのはあくまでも青州の兵力。徐州勢は補助を行うに過ぎない。」

この黄巾乱入について、青州の州府でも流石にまずいと判断したようで、ようやく本腰を入れて黄巾を追い出しにかかる事になった。その際に北海と東萊からも兵を出すから、一時的に兵力が空きになって治安が下がる事が予想される。その対策として天明達が青州に向かう事になった。それが今回の事情となる。

……まあ、天明にとってはそれだけではないのだが。

基本的に良い子である天明が非常に珍しく機嫌が悪かったのは、孔国相に対して複雑な感情を抱いているからだろう。何故なら、孔国相は天明にとって親族になるのだ。

史実において、羊祜は孔融の血族に当たる。直接の血縁ではないのだが、羊祜の異母兄が孔融の娘から生まれているのだ。羊祜の母とどちらが正室かまでは私も知らないが。

この世界でもそういう縁戚関係はあったようで、孔融の妹が泰山羊家に嫁ぎ、天明の母親を産んだ。その子供である天明にとって、孔融は大伯父に当たる事になる。

……孔融って史実だと曹操より年上とさえいって、ほぼ同年代だよな？

何でそんなに早く生まれてるんだ？そんな疑問が膨れ上がるが押し殺す。

さてそういう天明の事情から、少し問題が発生したのが子義が仕官してきてすぐ。

『失礼ですが、貴女は泰山羊家の縁者でしょうか？』

天明と初対面の時に子義が上の問いを発した。

先ほども少し触れたが、孔国相に母の面倒を見てもらっている事もあり、子義は孔国相と仲が良い。孔国相から、泰山に有った天明の実家が賊に襲撃されたという話を聞いていたらしい。その時に彼が嘆いているのを目にしていたため、もし血縁と会うようだったら孔国相に知らせてあげたいという風に考えていたらしい。

そして、天明は正直にその問いに頷いた。天明としても、血の繋がる親族が増える事は喜ばしかったのだろう。現在、義父さんと異母姉である姉さん、従兄に当たる私しかいないわけだし。

そして、子義が孔融にその旨を文で伝えたわけだ。

その結果、孔国相がはっちゃけた。それはもう見事にはっちゃけた。いや、むしろやらかしたと言っても良いかも分からね。

まずは、天明を自分の養女にしようと行動を開始。それは、気付いた時点で私がシャットアウト。本人、家族にも知らせないで工作を始めるなんて論外です。

次に、青州内の豪族で有望な若手と天明の縁談をまとめようとしたが、それも話が伝わってきた時点でお断りの連絡をした。だから、本人、家族に（ry

そして最後にやったのが、天明を茂才として推挙するための工作。流石に北海で茂才に引掛けるのは無理があると自覚していたのか、瑯邪国の趙国相へ茂才として推挙するよう書簡を出し続けたのだ。

趙国相様としても天明を推挙すれば、糜家、孔家どちらにも恩を売れる事ができる上、天明が英邁であるという噂を耳にした事が有ったので、気にする事無く推挙したらしい。

これには義父さんと私が、天明に受けさせるか否かを慎重に協議を重ねた。いかに天明が優秀と言えど、官吏としての経歴が無いのにい

きなり中央官吏からスタートさせるのは無謀だ。他人からの嫉妬も受ける上、経験が絶望的に足りていない。

しかし、家族以外（天明の出自は一般的に知られていないので、世間では孔国相は他人）から推挙される運びとなれば、地元以外でも噂されるほどの人物であると証明されるので、他の官吏からも一目置かれる事となる。

どちらにしても一長一短あるので、結論を出すのは容易ではなかった。

そして結局、天明は推挙される運びとなった。しかし、何とか趙国相様を説得して、莒の県尉として推挙する事に同意頂いた。しばらくは私の下で経験を積んでもらう事にする。

天明に推挙される運びを伝える事になったのは、全部調整が終わった後。完全に事後承諾となる。

天明にとっても寝耳に水ではあったが、ここで仕官を断ってしまうと国相様の顔を潰す事になるので、私と姉さんが動きづらくなってしまふ。それならそれでやむを得ないから、断つても良いと伝えておいたのだが、悩んだ末に出仕する事となったのだ。

孔国相本人にとっては孫に喜ぶ物を買って与える祖父の気分なのだろうが、本人がそれを欲しがっていないというのが何とも……。

そして今回、趙国相様に天明を青州に派遣して欲しいと要望を出したようで、出征するのが天明と決まったのだ。

こういった事情もあり、天明としては非常に複雑な気分で大機嫌となっていたという訳だ。親族に会えるのは嬉しいが、あまりこういう干渉をされても困る、と言ったところだろうか。

しかし私個人としては、ここで孔国相と何かしらの縁を持っておくのは非常に大きな意味を持つ。史実では黄巾の乱の後、青州は一時的に空白地帯となっている。そして、公孫賛と袁紹による陣取り合戦の舞台となるのだ。その際に徐州が巻き込まれないように立ち回るのは、青州の官吏や豪族の協力が不可欠となるので、現在北海国の相をやっている孔融とは可能な限り友好的な関係を結んでおきたいと考えている。

……まあ、可愛い妹の将来に干渉しすぎるようなら、こちらにも考えがあるが……。

そんな物騒な考えが顔に出ていたのだろう。我に返ると、天明が少し引いていた。咳払いをして場を改める。

「ま、まあ、何にせよ気をつけて行つて来るようにね。　輸送だけとはいえ戦場に足を踏み入れる事もあるんだから」

「もう、分かってるよ。　偵騎はちゃんと出して、数に勝る賊徒とは遭遇しないようにするから大丈夫」

私の心配に口では不満そうに返しながらも、少し嬉しそうに口元をほころばせる天明。

まあ基本は子義と一緒に行動する事になるから大丈夫だろう。三国志屈指の知と武の名将が共演するのだから、よほどの事が無い限りは大丈夫だろう。

そうやって妹が初めてのお使いへ出かける前夜は穏やかに過ぎて行った。

第三十二話 Don't You Worry,
Bout A Thing — 妹達の不在 —

天明と子義が青州へ向かって一月あまり経ったわけだが、莒県の県城ではいつも通りに決裁を下す仕事が発生している。そして、それをいつも通りに裁いていく必要があるのも変わらない。

しかし、県城ではしばらく前から少し問題が発生している。

「藍里。……、計算間違えてる」

「申し訳ありません！」

私が指摘と共に木簡を差し出すと、慌てて席を立て木簡を受け取りに駆け寄ってくる。

その問題とは、今の様な藍里の不調。普段ならば十日に一回有るか無いか位だったケアレスマスが、今日だけで五回目。明らかに集中力を欠いている。

それもそのはず。藍里の顔色は明らかに悪く、体調が良くない事が一目で分かる。

先ほど挙げた県城での問題とはこの事。藍里の調子が良くないのだ。

今までほぼ完璧といって良いほどに仕事をこなしてきてくれたのだから、これくらいで叱責するつもりはない。しかし、そろそろ何かしら対応が必要となるだろう。

「藍里。ちよつと待った」

そう呼び掛けて、自席に戻ろうとする藍里を呼び止める。そして、私は口を開いた。

「大丈夫？ まあ、大丈夫じゃなさそうに見えるから声をかけているわけだけど」

「……はい。ご心配かけて申し訳ありません」

「心配するのは当然だから、別にかしこまる必要はないけど。それよりも夜眠れてる？」

「……」

まあ、案の定か。目が充血しているし、化粧をしてごまかしているので分かりづらいが、目の下に隈くまもできている。

「今日はもう大丈夫だから帰って休みなさい。このまま続けても同じような失敗を繰り返すだけでしょ?」

「それは分かりませんが……お願いです。続けさせてください」

「駄目。何かに没頭している間は不安を忘れられるけど、疲労は溜まり続けるんだから」

疲労は休息、取り分け睡眠により回復する。それをまともに取り取れない以上、仕事を続けて疲労を溜め込み続けるのは危険だ。命に関わるほどの過労になるとまでは思わないが、倒れる可能性は十分あり得る。

「自分の事を情けなく思う気持ちも、それを挽回したい気持ちも分かるけど、空回りしちやってるよ。頭を切り替えるためにも、一回ゆっくりと休息を取りなさい」

「……」

私の言葉を聞き、藍里は目を伏せて口唇を噛み締める。その心底悔しそうな表情を見て、思わず優しい言葉をかけたくなるが我慢。ここで藍里の満足するまでやらせると、本気で倒れるまで続けかねない。

藍里はいつも責任感を持って自分の仕事をこなしてくれているのだけど、今はベクトルを悪い方へ向けている。ここで一旦休ませないとならないのは明白だろう。

「しかし、夢見が悪くて……」

「今の状況を考えて悪い夢を見るのは当然だと思うし、それが嫌だっていうのは理解できるけど、少しでも眠れば大分違うはずだよ。何だったら隣の部屋にある私の仮眠用の寝台使う? うなされている様だったらすぐに起こせるし」

「そ、それは別の理由で眠れなくなりそうなので結構です! ……はあ、それでは義兄さんの仰るとおり、今日は休みます。何か火急の案件ができましたらすぐ駆けつけますから」

「ん。悠長に寝ていられない事態って滅多に無いと思うけど、その時はよろしく」

……別の理由って何さ？

そう疑問に思うが、藍里は説明する気が無いようで、その事には触れずに私に残っていた仕事を引き継ぎ、部屋を出ていった。

まあ何にせよ、悩みが片付いてゆつくりと眠れるようになれば良いのに。そう願わずにいられない。

さて、私も気合いを入れ直してさっさと仕事を終わらせるとしよう。

天明が不在なので、残った兵達の訓練もしなくてはいけないのだから。

……それから仕事に没頭し続け、ふと我に返ったのは自分の腹の虫が鳴ったのに気がついたからだ。外を見るとすでに日が沈もうとしている。

昼も取らずにこの時刻まで仕事を続けていたため、流石にお腹が空いてきた。訓練を終えてから座りっぱなしだった体が硬くなっている。

終わらせるにはもう少し時間があるだろうし、何か腹に入れるか。

そう考え、厨房へ向かおうと伸びをしながら席を立った時、部屋の扉が開いた。開いた扉から空さんが食べ物をお盆を持って入って来る。

「あ、隣君。お仕事おしまい？」

「いや、もうちよつと。空さんはどうしたの？」

「隣君、昼御飯食べてないでしょ？ お腹空いたんじゃないかと思つて、ご飯を持ってきたんだけど」

おや、厨房に行く手間が省けた。

「ありがたく頂くよ。空さんの夕食もあるみたいだし、一緒に食べようか」

そう言つて、私はお盆を置けるように机の上を片付ける。そこにお盆を置き、席に着いた空さんと他愛ない話をしながら食事を取る。

「そういえば、子瑜は？ 隣君だけ残して帰るとは思えないんだけど」
「体調悪そうだし、帰した。無理にでも休ませないと潰れるまで頑

張つちやいそうだし」

「そつか。まあ、それが賢明だよ。心労が積もっているだろうし、そこから病気になつたりしたら大変なもの」

「まあね」

空さんのその言葉に同意を示す。心労の原因が取り除かれるまで藍里はしばらくあのままだろう。

「それで、まだ見つからないの？」

「うん。似た容姿の女の子が売りに出されていたっていう情報も入ってきてないのが救いだね。もつとも、無事だつていう保証にはまったくないんだけど」

藍里の心労の原因。それは水鏡先生から送られてきた手紙で発覚した。

藍里の妹である朱里と叔起さんが学院から出奔したらしいのだ。正確に言うと、朱里と親友の鳳土元殿が出奔し、叔起さんはそれについて行ったのだらうとの事だ。書き置きはあったが、そこに叔起さんの名前は入っていなかったらしい。

その書き置きによると、『世の苦しんでいる多くの人々を、学院で学んだ事を実践して助きたい』と理由が書かれていたそう。まあ、出会った頃から朱里が公言していた内容なので、今さらそれに真新しさはない。しかしこの治安が悪化しまくっている時勢において、武の心得が無い年頃の娘が旅に出るのは自殺行為とも言える。だからこそ藍里は、妹達の行方不明に激しく動揺して今に至るわけだ。

すぐに探しに探しに行こうとした藍里を説得して思い留めさせ、代わりに私が商家の伝でて情報を集めて探しているのだが、上手くいっていない。荊州から北に向かったという情報は入ってきたのだが、それ以降の足取りが不明となっている。

「無事だつたら良いね」

「まあ、ね。ただ、向かったと思われる場所は思いついてはいるんだよ。確証は無いから伝えていないけど」

藍里にそれを伝えるにしても、もう少し情報を集めないと気休めの憶測になつちやうからなあ。

「そっか。それじゃ、そろそろ情報が集まってもおかしくないの?」
「多分、としか言えないのが何ともあやふやだけどね。学院から出奔して結構経っているし、無事だとしたらそろそろ到着しているもおかしくはないと思う」

「ふーん。ちなみに麟君が想定しているのってどこ?」

「現在ちまた巷を騒がせている幽州の義勇軍。荊州から幽州までの距離を考えると現実味は薄く感じるんだけど、伝え聞こえてくる彼らの目的と行動が、朱里の理想に合致しすぎてるんだよ」

「ああ、なるほど。『力が無く虐げられる人達を救うために立ち上がった義の軍団』だっけ?」

その噂だけを聞くと、この世界の劉備や周りにいる人物は演義に近い性格をしている気がする。もつとも、実際の人柄について把握できるほどの情報が集まっていない。掲げる旗は綺麗でも、実際に持つ人間がどういう者かまでは見えないのだから、現時点で判断するのは危険だろう。

天の御遣い殿も義勇軍に合流しているらしいし、要調査対象として継続して情報を集める事にしよう。活動拠点が幽州近辺に限定されているので、まだまだ出会う機会は遠いだろうし、正直言ってそれくらいしかできない、というのが実情だ。

そこまで思考を走らせてから、空さんへ返事をするために口を開く。

「だね。今の民達には受け入れられやすい物を掲げていると思うよ。実際に彼らが賊を討伐して助かっている民衆も多いだろうし。

もつとも、本当にあの子達が義勇軍の元に向かっているとは限らないけどね。幽州まで結構距離があるし、劉玄德殿の元に辿り着く前に他の勢力に仕官している可能性もある。もしかしたら途中で引き返しているのかもしれない。女の子三人での旅なんて滅多に無いかから割りとすぐに噂が流れそうな気がするから、頑張って情報を集めてみるよ」

「んー。けどしばらく前に豫州近辺で、村を襲っていた盗賊団を壊滅させた三人の女の子の旅人達がいるって噂で聞いたよ? あ、多分

子瑜の妹さん達とは別人ね。一人が槍の達人だったらしいから」「へえ、それは初耳。単なる旅人でそういう義侠心を持った人間がいるとはね」

今日においては珍しいくらいに痛快な話だ。まあ感心したのは良いが、本来賊討伐は私達官吏がしなくてはいけない事なのだが。しかし、そこまでの期待は抱けないほど中華全体での官吏のモラルが下がっている。官吏達には袖の下を気にする前に、自分の権力の土台たる漢が揺らいでいる事を足元で感じて欲しいのだが。

そこで、思い出したように空さんが疑問を口にした。

「盗賊団の壊滅と言えば、青州の天明達は大丈夫なのかな？ 何も連絡が来ないんだけど」

「大丈夫なんじゃない？ 一応何か有った時のために、現場判断で動けるように権限付けてもらったし、本当に危なければ東武の謙（徐盛の真名）に援軍依頼を出すでしょ」

謙は青州の目と鼻の先にある東武に県長として赴任している。私達が今いる莒よりも北に位置して、ずっと青州に近い。なので、援軍等を出すにしてもここから出すより早く青州へ到着する。

そこで今回の遠征に先立って、東武への援軍要請も含めて現場担当者との判断だけで自由に行動できる様に権限を付与するよう趙国相様をお願いして許可を得ている。

もちろん天明達が裏切ったり、略奪をしたりしない為人である事を知っており、能力に全幅の信頼をおけるからこそできるのだが。

これで、仮に青州で有事が起こった際、即時に動ける顔ぶれは徐盛、太史慈、羊祜の三人。

……名が残る英傑でも連れてこないとまず勝てんだろ、これ。もし青州で何か問題が起こったとしても、こっちに伝わってくる前に解決してしまう可能性の方が高い。

むしろ、ここまで自由に動ける有能な人間をお膳立てした上で解決できない事象が発生した場合、琅邪国全体、下手すれば州をあげて動員令を発する必要性が高くなるだろう。

まあ、その可能性については考えないで良いだろう。今まで積極的

に流民を受け入れたのだから、乱入してきた黄巾に合流する人間は少ないはず。伝え聞く賊の人数が確かであるならば、青州の兵達だけで十分に対応できるのだから。

そう説明をして話題が変わった後も、空さんと雑談を続けながら食事をつけ、小一時間後によく解散となった。

「さて、御馳走様。美味しかったよ」

「お粗末様でした。麟君、これからまだお仕事だよね？ お手伝いしようか？」

「あー、大丈夫。代わりと言ってはなんだけど、食器を厨房に持って行ってもらうって良い？」

空さんの厚意に首を振る。流石にそれは申し訳ない。代わりに使った食器を片付けるようお願いする。

「うん、わかった。麟君もあまり無理はしないでね。倒れると泣いちゃうからね」

「了解。そこまで時間かかるような物では無さそうだし、さっさと終わらせてゆつくりと休む事にするよ」

苦笑いしながら空さんへ返事をして、部屋を出ていくのを見送る。そして私は机で残りの仕事をやっつけ始めるのだった。

この時の私は一つ失念している事があった。それは数年前に発生した西涼の乱。

黄巾の乱後に発生したこの事象が前倒しで起こったのなら、他の歴史的な事件も前倒しで起こっても不思議は無かった事に気がついていなかった。

北海国で黄巾賊が起こした事件で一番有名な物。それがこの時点で前倒しで発生しており、天明や子義達、それから援軍として出撃した謙と共に対応に追われているとは、私は夢にも思っていなかったのだ。

第三十三話 Breaking Through

―北海籠城戦①―

「困りましたね。 どうしましょうか」

「確かに困りますね。 とりあえず打って出ますか？ このまま城に籠っていてもジリ貧でしょうし」

「それをしたとしても、何の方策も無く打って出る事になるので危険度が高いでしょう。 ひとまず、ある程度勝算を望めるように考えをまとめませんか？」

「確かにそれが最善でしょうか。 では、何処か場所を借りて考えをまとめるとしましょう」

私と子義さんは城壁に立ち、北海城の包囲を始めている黄巾の群れを眺めながらそう話しています。

私達は元々、青州の治安維持を目的に出征してきたはずなのですが、北海の軍と一緒に城に籠る事態となっております。

なぜこんな事になったのかというと、冀州より襲来して青州を荒らし回る黄巾の集団の討伐に青州軍が失敗したのが原因です。

その事態を把握できたのは、私達が東萊郡で巡回を終えて北海城に戻ってきたその日。黄巾討伐へ向かった兵の生き残りを追って、黄巾賊達が姿を現したからです。その追っ手は、丁度北海に帰投中だった私達により発見され、即座に子義さんが率いる兵により蹴散らし、敗れて逃れてきた青州兵達を救出する事に成功しました。そして、彼らに黄巾賊に討伐軍が破れた事を聞き、初めてその事態を知りました。この敗北により、討伐軍を率いていた青州牧である焦和様は行方不明。状況から推察するに、既に死亡していると思われます。

軍の長を失った後に指揮を引き継げる器量を持つ人物がいなかった事も災いしたようです。

統率が効かず、烏合の衆となった兵達は四方へ散り散りとなり、大半が賊達に各個撃破されていったとの話です。

そして、捕虜にした賊達の口から直に黄巾の本隊（青州に侵入して

きた賊達の本隊）がここに来るだろうという情報がもたらされました。

賊達の狙いは徐州。豊かであると噂される徐州へ侵攻するための通り道として、北海国から琅邪国へ入る事を企てているそうです。

私達はすぐに北海城でその旨を国相様へ報告しました。まさか賊達に敗北するとは思っていなかったのでしょうか。北海の官吏達の顔に驚愕が張り付いていました。

そして、それを聞いた彼らが取れる選択肢は二つ。

すなわち、逃げるか、戦うか。

『賊達が徐州へ侵攻をするのであれば、東萊郡へ逃げ込んでしまえば自分達は助かる。ならば逃げよう！』

そう考えた人々達の意見が大半を占めました。

とは言っても、誰でも自分の身は可愛い物ですし、そういう意見が出るのは予想できた事なので、私も子義さんも大して驚きはしませんでした。

その逃亡という意見へ待ったをかけたのが、私の大叔父に当たる孔国相様でした。

『逃げた先が安全だという保証は本当にあるのか』

この国相様の言葉にはある程度の説得力があります。

なぜなら、逃げた先である東萊郡まで賊達が追ってくる可能性は十分残されています。東萊と北海を押さえれば、徐州に悠々と入る事ができるようになります。後顧の憂いを断つ意味でも、追撃される可能性は残されているのです。

しかし、北海で戦う事を選ぶにも難しい事情があります。兵の少なさです。

元々私達が徐州から青州に来たのも、賊達の被害が少なかった青州東部の北海と東萊から討伐のための兵をかき集めた事が影響しています。その軍が蹴散らされてしまったので、北海で戦おうにも圧倒的に兵達が足りないのです。ですので、逃走を選ばなかった場合には私達が徐州から連れてきた兵達が主戦力となります。実際に主戦派の方々から、私達にも一緒に戦うように打診が有りました。

私と子義さんにとっても、それは望むところですが。何せここを抜かれれば、徐州は目と鼻の先です。少なからず土地を荒らされる事を覚悟しなくてはなりません。徐州の官吏としては、ここで賊達を食い止める事は重要になるのです。

話し合いは延々と続きました。

その最中に徐州から連れてきた兵の一部を使い、東武の文嚮さんへ援軍を依頼しに行く事を打診したのですが、それはすぐに却下されてしまいました。

『お前らだけ徐州に逃げ帰るつもりか！』

この言葉が北海の官吏達の恐怖心をよく表していると思います。戦う事を主張する者、逃げる事を主張する者、どちらも異口同音にその口になりました。

戦うには私達の戦力が必須ですし、逃げたい方達は賊の侵攻を私達が足止めする事を期待しているのが表情から透けて見えました。

使者に出るのはすべての兵で行くのではなく一部だけである事、逃げ出す気が毛頭無く、必ず戻ってくる事を言葉を尽くして説明しても、恐怖心に支配された彼らの心へ届く事はなく、説得は実を結びませんでした。

その後も籠城をする事を呼び掛ける国相様と一部の官吏、それに賛同する私達徐州勢と、逃走を主張する大半の官吏達の間で激論が交わされましたが、結局意見を纏めきる事はできませんでした。

そして、昨日。遂に黄巾賊達が姿を現しました。それは誰にでも分かる形で、時間切れが訪れた事を示していました。

事ここに至り、城内の混乱は頂点に達しました。主戦派は『黄巾何する者ぞ！』と意気を上げ、城内に留まる事を選びました。やけくそ気味ではありましたが、そういう空気を作るのは士気の維持が重要となる籠城戦では非常に有用です。良い方向の変化と言っていいたいでしょう。

問題は逃走派。彼らは国相様の引き留めも無視して、包囲が完成する前に、我先にと逃げ出してしまいました。それも一部の人は、行き掛けの駄賃とばかりに、城内の宝物庫から金目の物を奪おうとさえし

たのです。

それに関してはそう動くかもな、と先に予測していたので、子義さんにお願ひして兵を配置しておき、即座に捕縛、投獄して事なきを得ました。

かくして少し物騒な事も起こりましたが城内で意見を異にする者達も居なくなり、遅時きながら城内の意思を籠城に統一する事ができました。

遅きに失した感はありませんが、ようやく戦う姿勢が取れたと言えます。

それが、籠城に到るまでの大まかな流れとなります。

さて、私は国相様に許可を得て、子義さんと二人で会議室に入り善後策を話し合い始めました。

「とりあえず兵達は全員戻って来てましたよね？ ゆっくりと休んでもらいましょうか」

「そうですね。何とか包囲が始まる前に戻ってきてくれて良かったです」

兵達が何処に行っていたのかと言うと、北海周辺の集落を巡り、北海の城内、もしくは東萊郡か琅邪国へ逃げるように布告を出したのです。もちろん、国相様に許可を得た上で。

ですので現在、城下は避難民も含めて人で溢れています。

さらに、農村から逃れてきた人達が自身の持つ家畜と一緒に逃げてきたらしく、牛や驢馬、馬や鶏などをちらほらと見る事ができます。

本当に長期戦となり食べる物が無くなった際には、これらの家畜も潰し、料理するに出来る事になるでしょう。家畜は農民にとって家や土地と同様に財産ですので、それらを没収すると要らない恨みを買う可能性があります。できれば、その前に事態を解決したいところなのですが。

「何度考えても、今居る兵だけでは厳しいと思わずにはいられません。

何とか東武まで行き、援軍を連れてくる必要があると思います」

「それは私も同感です。ですが、もう包囲が始まっていますし、今か

ら援軍を要請するのにも一計を案じる必要がありそうですね」

「やはり包囲が始まる前に援軍要請を出す事ができなかつたのは痛かつたですね。今となつては益体やくたいもない戯れ言に過ぎませんが」

「けど、そうしていた場合、私達への不信感が城内に蔓延していた可能性が高いです。そうなると籠城どころではなくなつていた可能性がありますよね？」

援軍の必要性を説く子義さんに私は同意しました。

しかし包囲を突破しなくては、援軍要請の使者を出す事はできません。

文嚮さんが危急の際に備えて、既に出兵の準備を終えている事を北海に入る前に確認しているので、使者さえ到着すれば、すぐに援軍が出立できるといふのが救いでしょうか。

包囲陣を突破し、援軍を青州へ招き入れる事ができれば戦況を一変させる事が可能です。城内の私達と援軍で挟み撃ちにする事が可能になるからです。

しかし、その使者を事前に出しておけなかつたのは失策でした。いつそ説得など試みずに独断で使者を進発させれば良かった、そう今更ながらに少し後悔しています。

しかし、ただでさえ城内の結束が重要となる籠城戦。不和の種を植え付ける可能性がある行動は、できるだけ自粛する必要があつたのも事実です。

下手を打てば、援軍到着前に城内の不和により内通者が出たり、降伏論を唱えて士気を下げる人達が出ることすら考えられます。

そうなると、援軍到着前に落城する可能性もあつたので、無理に意見押し通す事ができませんでした。

まあ悔やんでいても、繰り返し言を言つていても仕方ありません。判断を誤つたのは事実なので、それをどう挽回するかを考えるのが建設的でしょう。

「私一人ならば突破する事は十中八九できそうですが、絶対とは言えないでしょうね」

「子義さんか私が使者になるなら、官職を持っていますし円滑に文嚮

さんへ話が伝わりそうですね……。やはり子義さんの腕前でもそうですねか？」

子義さんは一騎当千と呼べるだけの武の腕前と、騎乗技術を持っています。雑兵を蹴散らしながら単騎突破ができればあるいは、そう思っていました。この援軍要請は絶対に失敗できないので、現実性を増すよう何か方策を練る必要性がありそうですね。

相手は統率が取れているとは言い難い賊徒達なので、何かしらつけ込む隙はありそうですね。

ああだ、こうだ、と二人で話し合いましたが、結局作戦は、援軍を呼んでくる、到着したら数の優位が消えた黄巾を打ち破る、ということごくありきたりな物に落ち着きました。

言葉にすると非常に簡潔ですが、策は単純明快な方が万人に理解されやすく、受け入れられやすいのです。と、自分を慰めておく事になります。

そこに到るまでの手段に工夫が必要となるので、子義さんと意見を交換しあい、ようやく納得できる物が完成したので、すぐに竹簡にまとめて子義さんと一緒に部屋を出ました。

廊下を歩いていると城内にまで家畜の鳴き声が聞こえてきます。

家畜達の声を聞いて今更ながらに気づく事がありました。元々の住人と避難民との対立の可能性です。

包囲が解かれるまでの間に受けるであろう心の重圧を考えると、両者の間で軋轢が生じるかもしれません。

治安の悪化等も考えられるので、兵を巡回に回したいけど……絶対人手が足りなくなるだろうし。いつそ、籠城中限定で住民による自治をお願いした方が良くもありません。

よそ者の身の上であり多くの献策をすると国相様に近い重臣達に疎まれそうで嫌なんだけど。やむを得ないかなあ。

そんな事をつらつらと考えながら、私と子義さんは国相様の元へ足を運ぶのでした。

それが先日まで私と子義さんが戦った北海での籠城戦、最初の一步

でした。

結論から言ってしまうと、私達があの際に立案した作戦は、実行を孔国相に許可されて狙い通りに包囲を解く事に成功しました。

だからこそ、現在私は莒県の県城、県長の執務室に居るわけで。

「叔子？ 聞いていますか？」

目の前の非常に良い表情をしている藍里さんから詰問されているわけです。

さて、どうやら現実逃避として、こうなった経緯を思い出していた思考も、いい加減に現実へ立ち返らなくはいけないようです。

目の前の光景に意識を戻すと、机で戦闘詳報を読んでいるお兄ちゃん、椅子に座った私の目の前に陣取り、目の笑っていない柔らかな笑みを浮かべている藍里さんが居ます。

(本当にどうしてこうなったのかなあ)

包囲戦の時の黄巾の指揮官よりもずっと恐ろしい雰囲気をつた藍里さんを見ながら、私は心中で溜め息をつく事しかできないのでした。

第三十四話 S i r i u s — 北海籠城戦② —

青州への出征を終えて戻ってきた私は、現在お兄ちゃんの執務室で椅子に座っています。

目の前には、私達が北海で戦った時の戦闘詳報に目を通しているお兄ちゃんと、非常に珍しく笑み崩れている子瑜さんが座っています。お兄ちゃんは机の前で竹簡を広げて読んでるので当然視線を下げていますが、子瑜さんは笑っていない目で私を見つめています。思わず目を逸らすために視線を下げて、自分の手を見てしまいました。

「叔子。今、仰った事、もう一度、お話、頂けますか？」

笑顔に反した平坦な声で、一語一語丁寧に区切りながら子瑜さんに話しかけられました。

正直威圧感が凄く、恐怖を感じています。

「え、ええとですね」

「はい」

「その、ですね」

「はい」

上手く言葉を作る事ができずに言い淀む私へ苛立つ様子もなく、ただ一本調子の声のままに促しの言葉を投げ掛け続ける子瑜さん。

必死に助けを求めようとお兄ちゃんの方へ視線を送り続けますが、目を竹簡に向けているため気づいてくれません。

「え、遠征をしている時に、し、子瑜さんの妹さんの真名を耳にした気がするなあ、と思ったり、思わなかったり……」

威圧感に気圧されながら私が語尾を曖昧に濁しながらそう口にした瞬間、子瑜さんの背後からどす黒い炎の柱が立ち上ったのを幻視しました。

浮かべていた笑みを消して無表情になった子瑜さんは、さつきよりずっと威圧感を増しています。

冷や汗を流しながら、私はどうなだめようかと全力で考え始めました。

「……藍里、腹を立てるのはしょうがないにしても、天明を怯えさせ

ちや駄目だよ。情報を伝えただけであって、朱里の出奔には関係ないんだから」

竹簡を読み終えたのか、視線をあげた兄さんが子瑜さんに話しかけました。

子瑜さんは私から視線を外し、お兄ちゃんの方を振り返りました。

……正直、助かったと思わずにはいられません。

「ひとまず外へ行って頭を冷やしておいで。この後、天明から今回の出征の顛末をみんなの前で報告してもらおうけど、そのままじゃ頭に入って来ないでしょ」

「……ふう。そうですね、ええ、分かりました。叔子、その報告の

場で今の話はしっかりと聞かせてもらいます。それではまた後で」大きく一つ深呼吸をした後、そう言つて藍里さんは部屋から出ていきました。それにより、今まで感じていた威圧感が無くなり、椅子に座ったままへなへたと脱力してしまいます。

戦場で敵と相對している時よりも怖かった……。

安心したせいか、目がじわりと涙で潤んでいきます。

お兄ちゃんは席を立って部屋を出ていき、お盆に茶器を載せて戻ってきました。

しばらく二人無言でお兄ちゃんが入れたお茶を飲み、ようやく早鐘を打っていた鼓動も落ち着き始めました。ようやく一息を吐く事ができたといったところです。

そんな私へお兄ちゃんが話しかけてきます。

「さて、天明。出征お疲れさまでした。……今報告を読んだけど、本当に大変だったみたいだね」

お兄ちゃんにそうしみじみと言われ、思わず深々と頷いてしまいました。

治安維持だけで終わる予定だったのに想像以上に危ない橋を渡る事になったので、思い返しても大変だったという感想以外出てきません。

「まあ、その分武功は大きいよ。やったね、天明！ 出世ができるよ!!」

「出世はしばらくはしたくない。もうしばらくは今の地位で経験を積みたいよ」

お兄ちゃんへの返事として、そうげんなりと口にするとお兄ちゃんは声を出して笑い始めました。

笑い事じゃ無いってば。

抗議の意味も込めて、お兄ちゃんを半目で睨みます。

「ごめんごめん。ただ、武功が大きかったのは事実だし、素直に受け取っておきなさい。私から、というよりも莒県県長として報奨を出そうと思うけど、何か欲しい物はある？ あ、兵達へは別に功労金を出すから、それは気にしないで良いよ」

欲しい物……。突然言われても思い付かないです。

私も糜家の一員として子供時代を過ごしてきましたので、他の子達と比べるとある程度裕福に暮らしてきました。今の中華に住む者としては珍しく、食べる物や着る物に不自由した事はありません。欲しい物も言えば買い与えてくれたでしょう。

しかしうちの家族達は、全員が物に執着しない性質たちをしていますので、私もその性向を受け継いでいます。趣味と言えるのは読書と琴を弾く事くらいですが、書はお兄ちゃんが買ったのを借りれば事足りてしまいますし、琴はお母さんが使っていて糜家に残していった物を譲り受けたので、壊れない限り新しい物は必要ありません。よほど酷い壊れかたをしない限りは修理に出すでしょうし、なおの事新しい物は要りません。

強いて言うなら、お兄ちゃんの卵焼きくらい？

「じゃあ、卵焼き……」

「却下！ 天明がそれだと、謙と子義が功績を主張しづらいでしょうが」

確かに今回の一件について、卵焼き一つ分の勲功でしかなかったとするのはまずいですね。私に出世欲がなかったとしても、二人の立身出世の妨げになるのは本意ではありません。

「けど、それ以外だと何にも思い付かないんだけど」

「年頃のお嬢さんとしてそれはどうなんだ？ 服とか宝飾品とか、

色々有るでしょうに。姉さんだつて今の天明くらいの歳には身を着飾ったりしてたんだし」

それはお兄ちゃんに着飾った姿を見てもらいたかったからじゃないかな……。

そう思うけど、勝手にお姉ちゃんの想いをばらすわけにはいかないから曖昧に笑って誤魔化しますが。

ただ私には思い人がいるわけでもないの、あまり一生懸命に身を着飾るつもりもありません。最低限身だしなみが整っていればそれで良いと思っています。

お兄ちゃんは、そうやって頑張つて着飾った姿を誉めてくれるでしょうが、誉めてもらえた後に、むくれるお姉ちゃんと一緒になだめるのに時間がかかる事が多かったの、着飾るのを面倒に思うようになってしまったというのが実情だったりします。まあ色恋沙汰に興味が無く、見せたい相手を作らないのは自分の問題なのですが。

「身に付ける玉とか、璧へきでも渡そうか？ 要らなければ換金も容易だし」

「うーん……」

思わずその場で考え込んでしまいます。確かにそういった宝物を貰えると換金した後に兵達へ配る事もできますし、何かと便利ではあります。

けど折角ならそういった飾り物ではなく、日常的に使う品の方がありがたいと思うのは、私が貧乏性だからでしょう。

しばらく考えた後、一つ思い浮かぶ物があつたので駄目で元々と口にしてみます。

「馬は駄目？」

「ん？ 西涼馬？」

「うん。 今回の出征で思うところがあつて」

私自身は前に出て戦鬪を行いませんが、追撃や遁走をする際に名馬に乗っていると非常に便利です。あまり馬にこだわりはないので、今回の出征でも一般的に出回っている普通の馬に乗っていたのですが、思うところがあつたので手に入るならありがたいです。

徐州では西涼との交易を行っているので、西涼産の馬は他の州より手に入れるのは難しくないので、高価である上に数も制限されるため、どうしても前線で戦う騎兵達に優先的に配られる事になります。後方指揮が主な私やお兄ちゃんは強いて手に入れようと思わなければ名馬は回ってこないのです。

「問題無いと思うよ？　自分で選びたいなら買えるだけのお金を渡すけど」

「それじゃ、それでお願いしたいな。　折りを見て子義さんに意見を聞きながら選ぶよ」

今はもう陽都に戻っている子義さんは、馬に乗って前線で戦うので馬選びには一家言あります。実際に子義さんが今乗っているのは、馬体が大きく随分と貫禄のある名馬と呼ぶにふさわしい黒馬です。

お兄ちゃんがそれを目にした途端に『黒王だ、黒王が居る』と言ったので、黒王に名前が決まったという逸話があります。確かに王と呼ばれるにふさわしい威風のある馬です。

流石にあそこまでの馬である必要はありませんが、子義さんなら良い馬を見繕ってくれる事でしょう。

「それじゃ、報奨はそれで決定という事で。　あらかじめ良い馬を何頭か確保しておくように、商人達に口利きしておこうか？」

「あ、そうしてもらえると嬉しいかな」

流石に徐州中を探して回る訳にもいきませんが、良質な馬を集めておいてもらえると助かります。

「それじゃ、落ち着いたところで今回の出征について質問をさせて。　詳細を読みはしたけど確認したい点がいくつかあるから」

そうお兄ちゃんに言われ、姿勢を正して向かい合います。

そして、私は北海での戦について思い返しながら、お兄ちゃんの質問に答えていきました。

・・・

「というわけで、援軍が無くても包囲を解く事はできないでもないで

すが、确实を期するためには援軍が必要となります。 ですので一計を案じて東門から使者を出し、徐州へ援軍を要請しに行く事を再度ご提案致します」

子義さんの声が、黄巾賊に包囲された北海城の執務室に響きます。 部屋に居るのは私達と国相様だけ。 私が国相様の身内という点で面会を求めたからです。

そして、国相様へ援軍が来なくては包囲を解かせる事が難しい事を説き、要請の使者を出す事を説明を終えました。

軍議の場ではなく国相様に直接話しに来たのは、本当にもう一刻の猶予も無いため。 既に包囲をされてしまった以上、すぐにでも援軍要請をする必要があります。

国相様の立場を慮り、対応を後手に回し続けたのが響いています。「ふむ、それは分かっておる。 じゃが、どの様な手だてを講じればあの大軍を突破し、徐州へ使者を走らせる事ができるのだ？」

国相様がそう訝しげに問いかけてきます。

確かに何の企ても無く包囲を突破する事は難しいでしょう。 だから、私達はどうかする方法に一番頭を悩ませました。 そして考えた末に方法を思い付いて、どうすれば一番効果的に実行できるかを話し合ってここに来ました。

だから子義さんは言い淀む事なく説明を続けます。

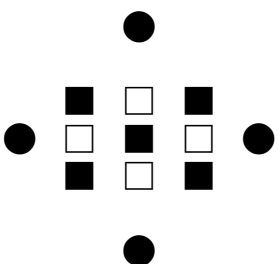
「国相様。 ここは見事包囲を打ち破った過去の賢人の故事に倣いましょう」

「過去の賢人？」

「齊の救国の名将です」

戦闘推移図①：戦闘開始前

西



東

■：北海城城壁

□：北海城城壁（門有り）

●：黄巾包圍陣

作戦を説明し、国相様に承認を得たその日の夜、私は東側の包圍軍が望める城壁に、机と床几（携帯用の椅子）を持ち込んで座りました。机の上には北海の女官に借りた琴があり、これからこれで一曲奏でようと考えてこの場に居ます。

今日は生憎の新月。しかも曇っているため、側にある篝火で照らさなければ手元が見えないくらい暗いです。

これから行う策を考えれば絶好の環境と言えますが、どうせ琴を弾くなら月明かりの下の方が趣があるので少し残念に思います。

「羊県尉。子義様より準備が整ったとご報告が」

「はい。それでは始めましょう。貴方も準備をお願いします」

私の副官を務めている男性へそう伝え、私は目を閉じてゆっくりと深呼吸をしました。

……そういえば、副官さんの下の名前は何だったろうか？姓はお兄ちゃんの友達と同じなので覚えていますが、いつもそちらでしか呼ばないので名前や字を覚えていない事に気づきました。

そこまで思考を走らせて、策とまったく関係ない事を考えている自分に自然と笑みが浮かんできました。

うん、緊張しいの自分の割りには大分余裕があるようです。折角多くの人に演奏を聞いてもらうのだから、この余裕を保ったまま、出来るだけ楽しんでもらう事にしましょう。

私は目を開き、琴に手をやってゆっくりと奏で始めました。

月の無い夜にゆっくりと琴の音が満ちて行きます。

意識を手元に集中し、遠くまで音が響くように琴を奏で続けます。

城の外の様子を気にしながらなので、いまいち集中しきれていないのですが、何とか音を間違えないように弾けています。

元々私がこうやって琴を弾くようになったのは、羊家でお母さんから習ったからです。

こういった歌舞音曲は、ある程度の家柄以上に生まれた女の子なら

一度は習う事になります。

その後、続けるかどうかは本人のやる気と資質次第となるため、武官や文官を目指す場合にはやめてしまう場合も十分にあるのですが、私は琴を弾いているとお母さんに教わった頃を思い出せるため、麿家に引き取られた後も合間を見て練習を続けていました。

お母さんも同じ琴を使っていたと聞いただけで嬉しくなるのは、まだ私がお母さんに依存しているからなのでしょうか？

しばらくそう取り止めなく思考していると、城外に布陣している東側の敵に動きが見られました。どうやらほぼ全員でこちらに向かつて来るようです。

何故このような動きを彼らがしたのか。もちろん琴の奏者が誰かを確かめるためではありません。

しかし、この音色が密接に関わっている事は否定しません。

城内に琴の音が響くのならば、当然城外にも聞こえます。そして、戦場で聞き慣れない音を耳にしたのならば、当然どこから聞こえてきたのか注意を払うでしょう。そうすれば聞こえてくる方向、つまり北海城へ目を向けるのが自然です。

そうやってこちらに目を向ければ分かるはずですが。篝火に煌々と照らされて、眼前の北海城の東門が開け放たれているのが。

相手が思慮深い慎重な将で、ある程度統率の取れている兵を率いている場合には罍の可能性を疑って様子を見るでしょう。

逆に、血気に逸った豪胆な将なら罍だと気づいても喰い破る勢いで突撃するでしょう。

では、今回の場合はどうなるか？

相手は賊ですので、おそらく他の包囲軍に先じて略奪ができる好機と見て、部隊を動かします。丁度目の前で行われているように。しかし、そこには整然とした指揮による突撃とは比べることも出来ないくらい、バラバラの動きとなっています。

仮に指揮官が罍の可能性を疑っても、配下の者が略奪を望むので押さえる事が難しいでしょう。

仮に力づくで要望を抑え込んで部隊を動かさなくても、門を閉じて

明日もう一度同じ事をすれば問題ありません。

何の罫も無かったのに部隊を動かさなかったら、指揮官への反発が配下から出てきます。それを何日も繰り返せば、いずれ暴発する事は目に見えているので、こちらの思い通りになる可能性が高いです。

さて眼下の光景に目を向けると、やはり途中で立ち止まる事なく、陣地の総力で東門へ殺到するようです。

どうやら相手の指揮官は自重するような性格ではなかったようで、偵察も出す事なく一心不乱にこちらに向かってきている敵兵達の影が見えます。

機が熟したようですし、私はきりが良いところで演奏を止めました。

私が演奏を止める事を条件として、城門前に焚いていた篝火を消して、今回の作戦の要が動き出す準備が整います。

そして、賊達が喚声を上げながら東門へ取りつこうとした時、いくつもの赤い炎が門から飛び出し、縦に城門へと近づいていた敵兵達を切り裂いて、蹂躪していきました。

・・・

「で、火牛計が成功したから敵は大混乱。さらに、飛び出した牛の後に子義達が率いる騎兵が乱入、追加で敵の混乱に拍車をかけた。これ、田単の火牛計だよな？ そんな珍しい奇策よく知ってたね」

「莒こゝろつて樂毅と連合軍にまつわる話があるでしょ。その時の事について調べていたら、樂毅が失脚する即墨での戦いにも触れていて」

「なるほどね。確かに莒県に住んでいるんだから、樂毅については調べやすいか。私も赴任してすぐに当時の布陣の仕方とか現地見て回って調べたしなあ」

今話に出た莒と即墨は、樂毅率いる軍に次々と領地を落とされていった斉に最後まで従い、抵抗を続けた場所です。

莒では包囲する樂毅を相手にして、数年間籠城を続けるという防衛の妙を見せました。

対して、即墨では斉が大勝利して戦の流れを変えるきっかけとなりました。

その時に斉の救国の名将、田単の行ったのが火牛計であり、私達が今回模倣した計略となります。

火牛計は名前のお通り、牛の角に刃を括りつけて、尾にたいまつを括り、火を点けて猛進させ、敵を大混乱に陥れる計略です。

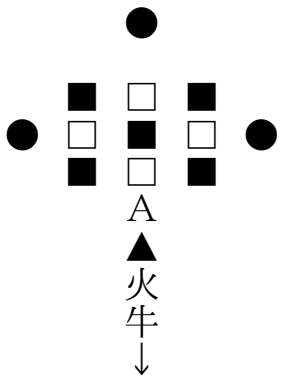
あの時敵の部隊を切り裂いていった炎は、尾に火をつけたたいまつを括りつけられた牛です。

これにより、即墨に伝わる伝記と同じように北海を包囲する敵に大打撃を与える事ができました。

戦闘推移図②：火牛計成功後

西

東



■：北海城城壁

□：北海城城壁（門有り）

●：黄巾包囲陣

▲：黄巾包囲陣（火牛計により大混乱中）

A：太史慈（騎兵）

お兄ちゃんが珍しい奇策と言ったのは、田単より後、この計略が使われたという逸話が無いからでしょう。

それにもきちん理由があります。

「しかし、牛殺しとは思いつたね。後々問題になりそう」

呟くようにお兄ちゃんが口にしましたが、まさにそれが火牛が使われない理由の一端となります。

火牛計は、牛を犠牲にするのを前提とする計略です。これは、この国では問題となります。

牛殺しが問題となるのは、牛の繁殖、家畜化が難しい事、牛は土と共に耕す家族同然の存在であると考えられている事などが挙げられます。そのため、牛泥棒、身勝手に牛を殺す行為はこの国では重罪に当たります。

この計略が忘れられた存在となった一因はこのような背景があると考えています。

……お兄ちゃんに言わせれば、そもそも漢の功臣にばかり注目しているのが最大の原因で、孫武等の一部を除いて、戦国策などの史書に出てくる人物が正しく評価されていないとぼやいていました。

確かに、田単の計略が正しく評価されているならば、彼の計略の有効性は倫理などでは消え去らないでしょう。

それに、漢の功臣達の逸話ばかりを重宝し、それ以前の偉人の足跡そくせきを軽んじるという風潮を否む事はできないなあ、と思います。孫武や張良を尊ぶ人間は多いのですが、楽毅や管仲はいまいち事跡が理解されづらいようです。

調べてみると、どちらもとんでもない偉才だと分かるのですが……。

話が逸れました。今は火牛計の後の動きについて、お兄ちゃんに説明する必要があります。

私はあの後の出来事を脳裏へ思い浮かべました。

第三十五話 Blue — 北海籠城戦③ —

翌朝に開かれた軍議は、蜂の巣を突いたような騒ぎとなりました。援軍を呼ぶための使者を出す事は孔国相様から全員に説明されていた物の、その日の内に仕掛け、更に戦果を上げるのは予想外だったようです。

とは言っても、ほとんどは良くやったという喝采であり、やつかみなどを口にするのは数人程度です。

また、敵が総攻撃を行う前に出鼻を挫いた事で、今日も攻撃は無いようです。おそらく、東門を包囲する部隊へ兵を提供するための再編成に時間がかかっているのだと思います。

おそらくその編成が完了するまでには、まだ二、三日かかりそうな雰囲気です。

四方の兵力数に偏りがあり、均等な数に割り振りが終わっていないのが見てとれます。

ただ、負ければ問題が出るのは当然ですが、勝ちすぎても問題が出るようで……。

「所詮は雑兵！ これを機に援軍を待たずに賊共を打ち倒すべし！」
「然り！ 黄巾の徒などと言っても、たかが雑兵！ 何を怖れる事があるか！」

この様に血気盛ん、というよりも黄巾賊達を甘く見て多くの官吏が浮き足立っている状態です。功績を欲して、出陣を望む声で部屋が騒がしくなっているのです。

だから、それに反対するために子義さんが説得に回っているわけですが。

「あくまで、昨夜の戦いで優勢に立てたのは奇策に頼ったからです。何の手だてもなく打って出れば、数に勝る敵に飲み込まれ、屍を野に晒す事になるでしょう」

子義さんが今言ったように、考え無しに城外で戦ったとしても最終的には数で磨り潰されます。

その差を埋めるために援軍を呼んだのですから、今は防衛に徹し

て、援軍が到着次第出陣した方が勝ち目が見えてくるはずです。

しかし、そう言った子義さんに不満の声が上がりました。

何やら焦っている？ ようで、多くの北海の官吏は積極的に打って出る事を主張しています。

無言を貫いているのは、国相様の近くに侍る少ない人数だけです。

……そういえば、この人達は私達が提案した援軍要請に消極的ではある物の最初に賛成した人達だと今さら思い至ります。

話を戻します。

この血気に逸つたままの状態では、彼らは暴発して勝手に出撃しちゃうかもしれません。

それはただでさえ少ない戦力がさらに減る事になるので、可能な限り避けたい事態です。

しかし逆に言えば、きちんと勝算がある状態を作り出せば問題は無いと言えます。予定よりも早くなってしまうですが、火牛計で混乱している間に仕掛けた作戦を実行した方が良いでしょうか。

子義さんに目配せをすると同じ事を考えていたのか、目を合わせて頷いてくれました。

私は咳払いを一つした後、ゆっくりと話し始めました。

緊張でどもつたり、不安そうな表情はしないように細心の注意を払います。

「国相様。一つご提案したい事がございます」

「ふむ、何かな叔子」

しかつめらしい顔をして会議の推移を見守っていた孔国相様が相好を崩して私の方へ顔を向けました。

そうして、好意を向けて頂けるのはありがたいのですが、今は北海国相と莒県の県尉として話しがしたいので、先程までの真面目な顔の方が嬉しいのですが。

官吏の皆様も、私と国相様に血縁関係がある事を知っている（というより、最初にあった時に国相様の口から皆の前で嬉々として語られた）ため、鼻厘されているのではないかと陰口を叩かれていたりするそうです。

実際にされているのだろうと私も思っていますので、反論する余地がありません。そうでなくては県尉という中央官吏であるとはいえ、一段飛ばしに直接国相様へ意見する私の話を積極的に聞く姿勢を見せないでしよう。

まあ、話を聞いてくれる分にはありがたいので、これ幸いとばかりに人前で国相様へ提案をする際には私が話すようにしています。

最後まで国相様が話を聞いていただく事ができ、話している途中で他の人に話の腰を折られる事が無いからです。

北海に来てからは、官吏達と話をするのが腕が立ち威圧しながら話せる子義さん、国相様と交渉を行うのが私と役割分担をしています。

「折角皆様の士気が旺盛なのですから、もう一当て致しましょう」

その私の言葉に、騒いでいた官吏達が意外そうな目を向けてきます。

おそらく、子義さんと同じように出撃を止めにかかると思ったのでしよう。

言って止まるならそう口にしますが、止まらないなら自分で制御できる状況に持ち込めるように頭を使う方がよほど建設的です。

私が国相様に提案するのもそのための手段です。

「ただし、その為には昨日と同程度の策略が必要となります。その仕掛けは昨晩の内におきましたので、動くならば二、三日待つてからの方が確実になるでしょう。……時間を置きすぎても失敗するかもしれないので、士気が高まっているうちに仕掛けましょう」「ふむ？ 具体的にはどうするのだ？」

その国相様からの促しの声に、私はゆっくりと説明を始めました。まず、火牛計と突入した子義さん達の活躍により、東門の包囲部隊は大混乱に陥って大きな被害が出ました。

この事から既存の兵力だけで東門を包囲する事が難しくなり、夜が明けてから東以外に布陣している他の門の包囲軍から兵を補充するために、兵力の再編が行われたようでした。

これは先ほど述べたとおりです。

これがどういう事かと言うと、陣地に見知らぬ人間が居ても気づか

れにくい環境が出来上がった事を示しています。他の包囲軍から編入されました、つて平然としていれば案外誰も気にしない物です。

「なるほど。そのまま一部の兵を敵に紛れこませたわけか」

「はい。昨夜の戦いで東の包囲軍は士気を落としましたが、折角だから東だけではなく、包囲軍全体の士気をできるだけ落としてしまおうと考まして。そうすれば、組織的に連携して攻城が行われなくなり、援軍到着まで落城しないようにするのが易しくなります」

子義さんが昨夜率いた兵は、襲撃後に三手に分かれました。

一・ ほどほどに被害を与えた後、子義さんと共に城内に撤退

二・ 正規の使者である証明として私と子義さんの連名での書状を預けた上、徐州へ向けて離脱

三・ あらかじめ粗服を着た上で、賊達の中に紛れ込む

一、二に関しては説明は不要でしょう。

三は、援軍が到着するまでの間を耐えしのぐための布石として打ちました。

「その者達を使つて混乱した敵陣を叩く、か。なるほど、それならば確かに……」

国相様を始め、多くの官吏が納得の表情を浮かべています。

一部不満そうな方もいるようですが、表だつて異議を唱えるつもりは無いようです。

……あれ？何で不満そうにしているんだろ？

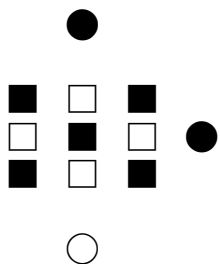
脳裏に浮かんだ疑問は一旦置いておく事にします。

現状では答えは易々と出ないかもしれないので、今は夜襲について話を詰めるべきです。

まあ、その夜襲も本当にやりたい事への布石に過ぎないのですが。

戦闘推移図①：火牛計翌日

西



東

■：北海城城壁

□：北海城城壁（門有り）

●：黄巾包囲陣

○：黄巾包囲陣（兵力再編中）

・
・
・

結局、私達が再度夜襲を仕掛けるまでに、敵は散発的な攻撃しかしてきませんでした。

再編成が完了するまでの間、積極的な攻勢に出るのを控えたのでしよう。

そして、総攻撃が始まる前に私達は行動を開始しました。

「報告書でも読んだけど、何と言うか、まあ……。どちらかと言えば計略というか謀略の類いだね、これ」

私の説明を聞いたお兄ちゃんはそう苦笑いを浮かべました。

確かにお兄ちゃんの言うとおり、これは謀略に近い物になるのでしよう。

あの話し合いの二日後、日が落ちた後に私達は合図を出しました。

あらかじめ門を照らす篝火を消しておく（最初から点けない）事で合図を出すと決めていたので、見張り以外が寝静まった頃合いを見計らって、紛れ込んだ兵達が陣地に火を放ちました。

すべての陣ではなく、南北の陣地だけを、ですが。

火を放った南北の陣は、城壁の上から確認しても大混乱に陥っていたようです。到るところで同士討ちが発生しているようでした。

同士討ちにまで発展しているのは、紛れ込ませた兵達を使って、あらかじめ『東門の包囲軍が抜け駆けしようとした』『独り占めしよう』他の陣地も考えているに違いない』『東はもちろん、西の連中も怪しいぞ』『俺達が邪魔だから攻撃しようとしている』などの噂を流布させる仕込みをしたのが影響したのでしょうか。

その噂、一番最初は真実であるため、他の噂についても一定の説得力を持ってしまいます。

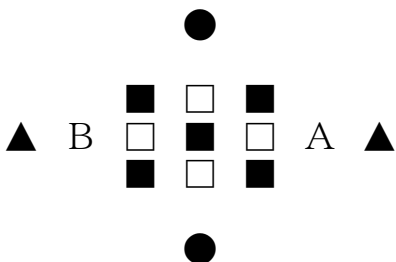
ついでに、放火と同時に『東、西の連中が火を放った』とも叫んで貰いました。

……ついで、の方が悪辣という意見は聞き流します。

戦闘推移図②：夜襲成功時

西

東



■：北海城城壁

□：北海城城壁（門有り）

●：黄巾包囲陣

▲：黄巾包囲陣（放火により同士討ち発生。大混乱中）

A：太史慈（騎兵）

B：羊祜（騎兵）

軍事行動中は、どうしても行動が制限されてしまうので娯楽に飢える者が多くいます。

そんな中で噂話は数少ない娯楽となりますので、つまらない流言でも広まりやすくなります。

その辺りを軍規で規制する事も軍を率いる上で重要です。

特に上官への批判と友軍への疑い等は、真つ先に消して回る必要がある噂になります。

それを止めるのに失敗すると、現在南北で行われている同士討ちや謀反などの騒動に繋がりがかねません。

今回は、あらかじめ東西の包囲軍への疑念を植え付けておく事で、異変が起きた際にすぐに連想するように仕向けるために利用しました。

「そうやって混乱しているなら、打ち取るのは容易くなる。そこで

出撃するのは理に叶ってるね」

お兄ちゃんの言った通り、私達は敵が混乱しているのを確認した後
に南北の門から打って出て、敵陣に突撃しました。

あらかじめ敵陣に潜ませた人達とは合言葉を決めており、間違っても私達が同士討ちをしないように細心の注意を払っていたのも良かったのか、襲撃が終わった後も死亡者は無く、軽傷が数人という被害で済みました。

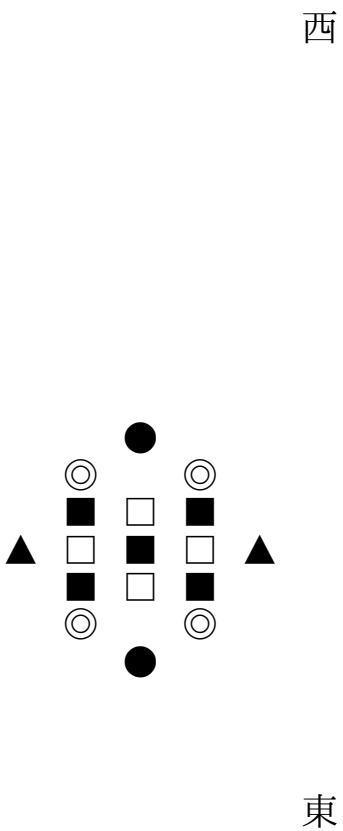
もつともこれは、比較的短時間で襲撃を終えた事も影響しています。

それに対して賊達はどう動いたかというと、南北の陣を救援するために東西の陣地が動きを見せました。

それを確認するとすぐに銅鑼を打ち鳴らしてもらおうようお願いしていたので、私達はすぐに城へ退きました。

流石にこの人数で四軍すべてを相手取るのは無謀ですし、このままでは私達が包囲されてしまいます。ある程度の戦果を上げた以上、一緒に出撃した北海の官吏の方々も満足したでしょう。目的は果たしたのでぐずぐずせずに速やかに城内へ戻り、門を閉めました。

戦闘推移図③：東西陣地移動開始時



■：北海城城壁

□：北海城城壁（門有り）

●：黄巾包囲陣（南北へ移動を開始しているため、兵は少ない）

▲：黄巾包囲陣（放火により同士討ち発生。大混乱中）

◎：東西陣地からの救援（移動中）

「敵の混乱につけこんだ夜襲を終えて、被害が出ない内に城内へ撤退。
うん、絵に描いたように見事な夜襲だね」

「援軍が到着するまでは、できるだけ被害を出さないようにしたかったからね。これで味方の士気はさらに上がったし、敵は士気と兵力が落ちた。最小の労力で、最大の効果を上げられたと言っても良いよね？」

「問題無いと思うよ。実際に良い動きだったと思うし。けど、その後起こった事が、天明が本当にやりたかった事なんだよね」

「……ええと、お見通し？」

「一応、兄と師を兼ねてるし。ただ火付けして、同士討ちをさせただけじゃ謀略なんて言わないよ」

今お兄ちゃんが口にしたように、この夜襲も私が本当にやりたかった事の布石に過ぎません。

私がやりたかった事。それは、敵指揮官同士をいがみ合わせる事です。

「離間計。多分、数ある計略の中でも暗殺の次くらいに嫌がられる計略じゃないかな。天明が企図していたのは、それだよね？」

ああ、本当にお見通しだったんだ。

看破されて悔しいような、理解してもらえて嬉しいような、そんな奇妙な感慨が胸中を巡ります。

私が真に狙っていたのは、敵の指揮官同士がいがみ合う展開にする事でした。

「話を整理しようか。南北の陣地の賊達は、火付けをしたのが東西の包囲している軍だと思ってるわけだよな？ だから最初の火付けの後、同士討ちが始まったわけだし。そんな中、東西から兵が乱入してきたらどうなるか。実際には救援するためであっても、あらかじめ疑うように仕向けているんだから、自分達を攻撃するために来たに違いない、そう思う人間が居てもおかしくないよね」

「うん。実際、あの夜襲は私達の攻撃よりも、同士討ちで失った兵数の方が多かったんじゃないかな。随分と長い時間戦っていたみたいだよ」

そうやって、兵力を削りあってもらうのも目的の一つです。では、同士討ちが終わり、指揮官同士が顔を合わせた時、冷静に話し合いが

進められるでしょうか？

「結果的に各軍に決定的な不和の種を植え付ける事になるよね。攻撃ほどされた方が不快に感じる事って無いし、多分聞く耳持たずに罵り合いとかになるんじゃないかな」

「南北にとつては東西の連中に嵌められた、東西にとつては救援に行つたのに攻撃された。そういう意識の溝がある状態での話し合いだしね。考えただけでまとまりそうもない。いや、本当にえぐい謀はかりごとだね。効果的だけどやられると相当きついよ、これ」

私達が意図したのは、まさに四方の包囲軍を不和に陥れる事でした。

果たして仲違いした者同士が、きちんと連携を取って一斉攻撃をする事ができるでしょうか。

おそらく、というよりもほぼ間違いなく不可能だと思います。

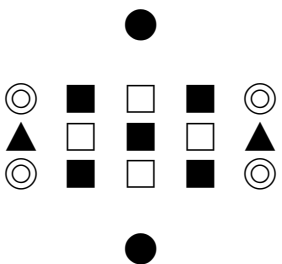
四方から同時に攻撃をされた場合、戦力を四分割しなくてはなりません、一方向だけから攻撃をしてくるなら、対処は非常に易しくなります。

ここで、不和とするのを東西、南北の二組に分けたのも、対面となつていて連携を取りづらくするためです。

戦闘推移図④：時

西

東



■：北海城城壁

□：北海城城壁（門有り）

●：黄巾包囲陣（南北へ移動を開始しているため、兵は少ない）

▲：黄巾包囲陣（東西からの援兵と同士討ち発生。大混乱中）

◎：東西陣地からの救援（南北の兵達と同士討ち発生。大混乱中）

「籠城戦で怖いのは、内に関して兵糧切れと内応。兵糧は十分

有ったし、内応しそうな逃走を主張していた人間は居なくなつてたから、内部に関しては何の憂いも無かつた」

「お兄ちゃんは内容を確認するように、ぶつぶつと呟いています。」

「外からの事象として警戒すべきは対処能力を飽和させる攻撃。攻城兵器が無い事を確認しているなら、攻め手は数に任せ強攻か、包囲による飢え殺し。兵糧はあるのだから、包囲だけしてくる敵には援軍を待っただけで良い。警戒すべきは強攻のみ。連携を取った強攻ではなく散発的な攻撃だけに限定させるために、布石を打ちまくって先手を取り続けて、連携が取れないようにする」

「お兄ちゃんはそこまで言つてから、しばらく天井を仰ぎ、大きく息を吐いて私へ視線を向けました。」

「お見事。孔国相様が『古今東西、稀に見る出色の戦振り』と言つたのに全面的に同意せざるを得ない。出藍の誉れと言つて良いだろうね」

「誉めてもらえて嬉しいとか、それ以前の問題として……。」

「……何、その激賞ぶり？」

「あー、最近流れている噂だね。出所は多分北海。天明が活躍して嬉しかったから、孔国相が興奮したままに口にしたのと、北海の官吏による情報操作なんじゃない？『北海国相孔文挙が縁者、羊叔子。古今東西、稀に見る出色の戦振り。今子房と称そうか、今子牙と称そうか』と。注目すべき点は『莒県の県尉』ではなくて『孔国相の血縁』として流している点かな」

「思わず机に突っ伏して頭を抱えてもしようがないような過大評価な噂でした。」

「お兄ちゃんが色々高い評価を得る度に頭を抱えていたのを見ていましたが、まさか自分も同じ体験をする事になるとは思いませんでした。」

「なるほど、これは頭を抱えたくなくてもしようがありません。」

「手放しの激賞がこれほどまでに心に刺さってくる物だとは思つてもいけませんでした。」

「ちなみに、徐州からも積極的にその噂を流してる。『莒県が県尉』」

に直してるけど」

「や、やめようよお」

顔が紅潮して、熱を持っているのが分かります。

「まあまあ。……ただ、県尉に就くに当たって再興した羊家の当主として、今回の活躍は願ってもない事だと受け取っておいた方が良いでしょう。若輩と侮る者はほぼ居なくなる」

「それは嬉しいけど……本当に何とかならないの？」

私は中央官吏になるにあたり、お父さんを当主とする糜家から出ている扱いにしました。

お兄ちゃんが言ったとおり、再興した羊家の当主というのが今の私の立場となります。

しかし、後ろに糜家がついているので、どうしても七光りと思われさせていただきます。

それを払拭するには良い機会だ、そうお兄ちゃんは言っているわけです。

「落ち着いていないようだけど、話を戻そう。結局包囲軍同士の連携を封じて、散発的な攻撃に終始させた後は、謙が到着するまではつつがな恙無く？」

「……ふう。まあ、そうだね。何度か士気を上げるために一騎打ちを申し込まれたけど、全部断ったし。子義さんは受けたがついてたけど」

まだ顔が熱いですが、話しているうちに落ち着くだろうとお兄ちゃんへ報告を続ける事にします。

「子義は武人だからね。自分の武勇を示す機会に恵まれたらできるだけ応じようとするから。もっとも、賊である以上同じ条件で戦おうとするとは限らないからなあ」

「弓矢を打ち込まれたり、衆で圧する事も考えられるしね」

一騎打ちが成立するのは、相手も同じくらいに高潔な志を持つ武人同士の場合です。汚い手で勝つ事を厭わない相手でなければ、思わぬ不覚を取る事もあります。賊相手にそれを望むのは間違いでしょう。

「で、そのまま時間切れか。さっさと包囲を解いて徐州へ向かわな

かったのはやられっぱなしじゃまずいからかね？」

「多分そうじゃないかな。被害だけ出して、何も得る物が無ければ下から見限られかねないし。あとは……」

そこまで言って、少し迷いましたが言葉が続ける事にしました。どうせお兄ちゃんも気づいている事でしようし。

「離間も影響したんだらうね。自分達だけで動く、背後から襲われるかもしれないって」

「実際にそうなってた可能性もあるしなあ。全員で一緒に行動するのも難しくなっていただらうし。もう少し待てば、勝手に潰し合いまで始めたんじゃない？」

「それも確実にそうなるって約束されたわけじゃないから。確実性を取るなら、援軍を呼んだ方が無難でしょ？」

「まあ、そうだね」

そんな風にとりよめのない会話をお兄ちゃんとしながらも、私はずらにその後の事を思い返すのでした。

……結局、顔の紅潮が取れるまでは今しばらく時間がかかった事も付記しておく事にします。

第三十六話 Going Back West |
北海追撃戦①—

籠城を始めてしばらく。離間計の影響か、散発的な攻撃しか行われず、守備をする事にも慣れ始めた頃。北海の皆が待ち望んでやまなかつた物が、城壁東側の指揮所に立つ私の目に入りました。

「援軍が来たぞーっ!!」

私と同じ物を目にした兵が大きな声で叫びました。

それは『徐』の字が書かれた軍旗です。北海南東に陣地が作られて、旗が立てられているのが確認できます。

『徐』の旗は、おそらく東武県長の徐文嚮さんの旗でしょう。

徐州から援軍が到着した証拠です。

先程の兵の声を聞き付けたのでしよう。歓喜に沸く兵や民衆の姿を至るところで目にする事ができます。

私はそれを横目に、西側の城壁にいる子義さんの元へ駆け出しました。

既に城中で騒ぎになっている事から、子義さんも状況は把握していると思われませんが、ここから先は時間との勝負となります。

できるだけ早く行動に移らなくては、そう気持ちが急いでしまいます。

「子義さんー!」

「ああ、来られましたか。援軍が到着したようですね」

走ること数分。西門の上に設けた指揮所に詰めていた子義さんの姿を確認し、声をかけるとそう言葉が返ってきました。

「はい。どうやら予定通りに南東に陣を構えてくれたようです。

私達も動く準備を始めた方が良いかと思えます」

「ええ。では急ぎ国相様の元へ向かいましょう。出撃する許可を

得なくてはなりませんからね」

そう言うやすぐに指揮所を出て国相様の元へ歩きだしました。

息を整えていた事で遅れる形となった私は、慌ててその背中を追い

かけました。

「……包囲を解いて逃走した賊をわざわざ追撃すると言うのか？」

「はい。徐州から援軍が現れた事で、自分達が危地に居る事は理解しているでしょう。ならば、すぐに包囲を解いて逃走に移るはずで
す。可能であれば、それを追撃して兵力を削っておいた方が今後の
憂いを無くせるかと」

「それはそうかもしれぬが……危険では無いか？ このまま退却する
に任せても良い気はするのだが」

軍議の場で追撃を進言する私へ、気遣わしげにそう口にするのは孔
国相様です。

「危険はあるかと思えます。しかし、ここで賊を逃げるままにして
しまうと、青州に居残る事が考えられます」

言葉の裏に『それって困りますよね？』という意味を込めて、私は
そう返事しました。

正確にそれを察したのか、国相様は渋面を作りました。

あえて危険に身を晒す必要性と、今後の災いの種を残す危険性を秤
にかけているといったところでしょうか。

もつとも、これには最終的に頷く事になるだろうと確信していま
す。

「付け加えれば、私達はいずれ徐州へ戻ります。その後には青州の軍
だけでそれを討伐できるようになるまで、しばらく時間がかかるはず
です。それまで、民に我慢を強いるおつもりですか？」

それを聞き、国相様の顔はさらにしかめました。私の言葉に一定の
理があると認めただけでしよう。

もし、私達徐州勢が帰還してしまえば、残った黄巾達の退治は青州
官吏の役目となります。

しかし先の青州軍の敗北から、青州全体で慢性的な兵員不足が起こ
る可能性が高いため、おいそれと出兵する事が難しくなるだろうと予
想されます。

徐州勢が賊退治をしないと、今後の政務運営に影を差す事になりか

ねません。

ですので北海側としても、私達が居る間に解決してしまいたい事案と言えます。

私達としても、徐州と隣り合う青州に騒乱の種となりうる物を残していくのは少々考え物です。下手をすれば、また誰かが徐州から出征する必要が出てきかねません。

「……うむ、やむを得ぬか。しかし、勝算はあるのか？ 守っていれば済む籠城とは違い、相手を打ち倒す必要があると思うのだが」

「はい。あらかじめ援軍を要請する書状に記載しておいたのですが、一手仕掛けています。何もせずに逃走に任せるだけでは嫌がらせ程度にしかありませんが、追撃をかけるとなれば大きな意味を持ちます」

そう前置きして、私は手短にこれから行う作戦内容を国相様へと説明しました。

「そ、それならば確かに賊の多くを屠^{ほぶ}る事ができようが……。貴殿らが出た後に、賊が戻ってきたらどうするのだ!？」

「その可能性はほぼありません。しかし念のため、籠城に参加していた兵の一部を残そうと思います。本当に賊が戻ってきたのなら、すぐに私達へ伝令を飛ばしてください。追撃を打ち切り、急ぎ戻ります」

私達が意図している策の内容を聞いた官吏の一人が悲鳴のような声を上げますが、意に返さずに即座に応じます。

返答を終えた後、一度口を閉じましたが、すぐにまた言葉を紡ぎます。

「それに、殲滅する事ができないにしても、賊達が青州を出ていったのか確認する必要が、出ていかない場合には追い出さなくてははいけません。ネズミを追いかける猫を想像していただければ分かりやすいかと」

お兄ちゃんが西涼での戦が終わった際、韓遂軍の後を追ったのと同じ事です。

……流石にお兄ちゃんが口にした送り狼という表現は変えますが。

幼いといっても私も女の子。品の無い言葉は可能な限り避けたいです。

「それから、あらかじめ明言しておきますが……今回に関しては、どんなに反対されても出撃します。ここには相談ではなく、出撃するという決定事項を報告しに来ました」

その私の言葉に、一部の官吏から非難の声が上がりますが無視します。

先ほど言ったように、ここからは時間は万金に値します。

援軍要請をする時に周りを気にしすぎて、与えられた時間を無駄にしたという愚を再び犯すつもりはありません。

じつと国相様を意思を込めた瞳で見つめて、翻意するつもりが無い事を伝えます。

それが伝わったのでしよう。苦渋の表情を浮かべた国相様は数分考え込んで、しぶしぶといった感じに首を縦に振るのです。

軍議の間に黄巾達は撤退を開始しました。追撃を警戒しての事でしょう。四方で包囲を敷いていた軍を合流させ、一路西へ向かうようです。賊達は合流こそ果たした物の整然とした撤退ではなく、我先にと駆け出すように逃げ始めたとその様子を見ていた兵達から報告がありました。

私の意を汲み、軍議で不在だった私達の代わりに出撃準備を整えてくれた副官さんに感謝しつつ、馬上の人となり北海を出撃した私達は、東武からの援軍と合流を果たし、包囲を解いて撤退を始めた黄巾達を追跡を開始しました。

現在の私たちの隊列前方は、騎兵を指揮している子義さんと文嚮さんです。一撃離脱を繰り返す事で黄巾を追い立て、途中で離脱しようとする小集団ができる度に牽制して、逃げる方向を一定に整えています。

それに対して私はというと、後方から後詰めとして馬上から歩兵の指揮を執っています。

私が後詰めの指揮に徹しているのは、武芸の腕前がイマイチという

のも有りますが、乗る馬の質が並みなもので、大半が西涼産の馬を使っている徐州騎兵達の指揮が覚束おぼつかないという原因があります。

騎乗技術は子義さんにも認めてもらえるくらいにはあるのですが、私が愛馬と共に前線に出ればその速度に合わせてしまい、騎兵全体が十分な力を発揮できなくなってしまう。

私を残して騎兵達だけに先行してもらおう事も考えましたが、伏兵が居た場合や遭遇戦が有った場合、危険になります。ですので、子義さんに即座に却下されました。

馬の乗り換えも提案しようとしたのですが、他にもっと巧みに騎兵指揮ができる二人がいるので、私が前線指揮をする必要性が無く、口には出さずに素直に後方から着いていく事にしました。

今回は子義さんと文嚮さんという戦巧者が居たので問題になりませんが、今後私以外が騎兵指揮ができない場合など、前線で指揮をする場合があるかもしれないので、良い馬を手に入れておいた方が良いかもしれません。

機会があればお兄ちゃんに相談しておく事を心に留めておきます。

さて、私のいる場所は最前線ではないので、油断はできませんがそこまで切羽詰まってはいません。さりとして、後詰めの役割も重要ではありません。

黄巾が引き返して私達の方へ向かって来ようとするならば防御の指揮を執り、場合によっては殿しんがりを務める必要があるからです。

現在、子義さん達の一撃離脱にいいように翻弄されて、整然と退却できていない様子を見ると、その可能性は限りなく低そうではあります。

「良かったのですかね……」

「何がですか？」

「いや、見送りに来た官吏の方々の顔を見るに、結構無理を通して出撃しているのではないかと」

「仕方がないと割り切るしかありません。あのまま時間を費やすわけにはいきませんでしたので」

私の隣を馬で並走しながら、良いのかなあと首を捻る副官さんへ私

はそう答えます。

「それは勿論そうなんでしようがね」

「何か気になる事でも？」

「いや、羊県尉？ 貴女は北海国相の血族でしょう？ 少しは外聞を気にしましょうや」

「気にしすぎた結果、援軍要請が遅れて危機に陥り、援軍の出し方に頭を捻る必要が出たわけです。それに前回も今回も判断を間違えると、青州、ひいては徐州の不利益に直結しかねません。そうなった場合、お兄ちゃんに締め上げられます」

その事を想像して少し身震いします。

「不利益？ そこまでの物になりますか？」

「仮に、前に居る黄巾達が小集団となつて青州中に散らばつたとして、鎮圧を終えるまでにどれほどの時間がかかると思えますか？」

不思議そうに口にする副官さんへ、問いを返します。

その言葉を聞き、彼は合点がいったのでしよう。口元を引きつらせました。

「それは、また。青州の現状も踏まえると、根絶やしにするには年単位での話になるでしょうな」

「はい。徐州としても、そこまで治安の悪化する州と隣り合うのは非常によくありません。南下する事を警戒し続けなくてはならないため、軍備を常に整えておく必要が出てきてしまいます」

「その辺りはあまり危惧する理由が分からないのですが……。いつそ徐州に乱入してきてくれた方が、県尉達武官は兵を率いて活躍できる機会が増えるので喜ばしい限りなのでは？」

その言葉に、私は胸中で小さく溜め息を吐きました。

・・・

「武官でその辺りを細かく考える人はあまりいないよね。だからこそ、そういう考えができる人材の稀少さを知る人間にとっては、喉から手が出るほど欲しがられるんだけど」

「算盤を弾きながら兵を率いるのを嫌う武官は多いよね。　けど私の適正は文官だから、その辺りは気にしないと」

お兄ちゃん曰く、軍は使わないにこした事は無いけど無くては困る物です。私もその考えに同意します。

軍隊は基本的に、何も生産を行わずに消費だけを行う組織です。多すぎる軍備は、維持するための資源の浪費と働き盛りの男手の喪失による税収の低下、二重の意味で財政を圧迫していきます。

財政の逼迫により領地の政務機能を維持できなくなった場合、増税や臨時徴収などでしのぐ事になりますが、民心が荒んでいる今の時点でそれを行うのは自殺行為です。反乱が起きる可能性が非常に高いのですから。

しかし、軍が無くては反乱の鎮圧などの対応がまったく出来なくなります。それどころか、今回北海で経験したように、行政府が襲われる危険性も出てきます。領地の防衛ができるだけの最低限の軍備は常に整えておく必要性があります。

今回の場合、青州に黄巾の残党を残すとまた南下して徐州に侵入してくる可能性があるのです、琅邪国北方の青州と接する県には兵を張り付けておく必要があります。

副官さんの言ったとおり、戦功を立てる機会には恵まれますし、武官にとつては望むところなのでしょうが、その分公庫の中身が消耗していく事を忘れてはいけません。

基本的に武官はその辺りを気にする人種では無いのですが、文官はそういった部分を細かく見ていく事を生業なりわいとしています。

私は自身が文官寄りの適性を持っており、武官をやっているのが何かの間違いだと固く信じているので、できるだけ文官的な思考を心がけています。

「……客観的に見て、天明は兵をほぼ損なわず、兵数で大きく劣るにも関わらず、賊を計略で撃退した武官だよね。　人の事は全然言えないけど、多分しばらくは文官に転向できないで武官をやる事になるんじゃない?」

「……やっぱりそう思う?」

お兄ちゃんのその言葉に大きく溜め息を溢してしまいます。

「しばらくは諦めるしかないんじゃない？ 文官になりたいって訴えても、多分茂才を提出する趙国相様が認めないと思う」

「だよねえ。……まさか、今回の件で朝廷に栄転とか無いよね？」

ふと気がついて怖々とそう聞くと、お兄ちゃんはきつぱりと否定してくれました。

「多分無い。仮に誰かが中央へ推挙したとしても年齢で敬遠される可能性が高いし、県尉の就任からまだ時間が経っていないから、出世が早すぎると判断されると思う。よほど大量の袖の下を使わなければ、却下される可能性が高いんじゃない」

それを聞いて少し安心しました。

……誰も私のために袖の下なんて使わないよね？

「付け加えれば、朝廷で北海の戦いをどこまで評価するかが不透明。

そういう戦いまで評価して、報奨を配る対象を増やしていくと国庫が完全に空になりかねないし。多少はもらえるかもしれないけど、黄巾の本拠である冀州で活躍した面々が多くを占めるんじゃない？」
「官位を授けても俸給による支出は増えるしね。それにしても、青州全土が黄色に染まりそうだったのに評価されないっていうのも凄い話だよね……」

「確かに難しいところなんだよなあ。人によっては、冀州で本拠地の黄巾達と合流させなかった事を考慮して、冀州での戦いと同等、もしくはそれに次ぐ戦功とするかもしれない。私だったらそう判断するしね。ただ、この北海の戦いは青州軍の敗退に端を発しているから。劇的な勝利を演出するためにわざと負けたんじゃないか、って言われたら証明は難しいですよ」

少し考えれば、そんな事は無いってすぐに分かるんだけどねー。

お兄ちゃんは少し嫌そうにそう口にしました。

「まあ天明達は中央の評価はされなくても、徐州の評価は凄いなと思うよ。州牧様にしろ、趙国相にしろ、本人達が軍事で成り上がっているから青州での戦いの重要性にはしっかりと評価するだろうし。

今回は見合わせるだろうけど、折を見て中央へ昇格を申し出るんじゃない

ないかな」

「……遠慮はできないんだよね？」

「天明までそれをする、いい加減義父さんが心労で倒れかねないんだけど」

「むう」

お兄ちゃんの苦笑混じりの返事に思わず口唇を尖らせてしまいます。自分はお姉ちゃんと一緒に出世の打診を断っておいて、そんな事を言うのは何かずるい。

私にそういう事を言うならば、まず自分の行動を改めるべきだと思います。

「……さて、いい加減話が横滑りする事が多くなってきてるし、集中力が落ちてるのが分かるね。　追撃開始までの話を終えたら、一旦休憩を入れようか」

「うん。　いい加減疲れてきたし、一息つきたいかな」

「ついでに、何かお茶菓子も一緒に持ってこよう。　頭が疲れてるし、甘い物が欲しい」

「そうだね。　果物でも良いし、何か甘い物欲しい」

その言葉に私は賛成の声をあげました。

お兄ちゃん曰く、疲れた時には甘い物。私もその金言には諸手をあげて賛同します。

「それじゃ、もう一頑張り。　じゃあ、まず天明。　仕掛けを西側にしかしていないのは、賊が逃げる方向を西だと断定したからだよね。　どう判断した？」

「ええと、黄巾が逃げる方向だけど、東に向かう可能性が低いっていうのは良いよね？」

「当然。　わざわざ援軍に向かっていくほどの士気が保てていないだろうし、そこは問題ないよ。　同じ理由で南も外せるかな。　逃げている最中に、後ろから食いつかれたら多少なりとも被害が出るだろうし、援軍にすぐ追い付かれそうな方向には逃げないだろうね。　付け加えれば、東も南もまだ自分達の勢力圏に組み込めていないから、積極的にそつちに逃げたいとは思わないんじゃない」

「そうだよ。だから、逃走するならば北か西。西は自分達が青州に侵入してくる時に多少なりとも蹂躪して来ているから敵対する勢力はいない可能性が高いでしょ。それに対して、北は東南と同様に勢力圏になっていたりと言いがたいし、逃げ出したいと考えているなら多少なりとも土地勘のある場所へと望むよね」

「だから、青州へ侵入してきた経路をなぞるように西に向けて逃げ出すと。うん、筋は通ってるかな」

お兄ちゃんの肯定の言葉をよくして、私は言葉を続けます。

「そうだよ。だから私達は西に逃げると決め打ちして、仕掛けを西側に施した。外れたとしても仕掛けが無駄になって、相手の戦力を効率的に削る事が難しくなるくらいだから。どの方向へ逃げようとも、追い出すつもりで出撃はしただろうし、結局は可能性の高い西側に逃げてくれれば楽になるってだけで、どこに向かわれても対応は変わらなかつたと思うよ」

「問題があるとすれば、各包囲軍ごとに違う方向に逃げられた時かな？」

「うん。そう動かれた場合には、半数以上の敵が青州に残る事になつただろうね」

私達が一番恐れていたのは、お兄ちゃんが口にしたように全部の軍がバラバラの方向へ逃げ出される事でした。

そうなつた時には、私達も兵を割って追いかけてはいけません。可能性は低いとはいえ、黄巾がやけになつて追撃する部隊へ逆襲する事も考えられるため、兵を割るのは敗北する危険性を上げる事にもなりかねず、得策とは言えません。

さらに言えば、ここで相手を勝たせるようであれば相手が勢いづき、また北海へ戻ってきてしまうかもしれません。ですので、敗北は厳禁となります。

「だから、本当にそうなつていた場合、あえて軍を分けずに一方向だけを追いかけていたと思う。北海に留守番する兵を増やして、他の方向に逃げていった敵が戻ってきた場合に備えるし、偵察でどういう行動をするか（北海に戻ってくるのか、そのまま青州を出ていくのか、留

まるのか)を確認はしたと思う。　だけど、それくらいしか出来なかつたんじゃないかな」

「追撃をしなくちゃ、途中で逃げるのをやめる場合も多々ありえるし、青州の外まで追い出しにかかるのは困難だろうね」

そうなった場合、逃げるに任せた賊達は青州に数多く残る事となります。

そうなった場合、徐州へも影響が出るのは先ほど語ったとおりです。

そういった意味では、黄巾が包围を解いた後に一団となって逃げてくれたのは都合が良い方向へ事態が動いたと言えます。

「仕掛けた離間のせいで疑心暗鬼になってたから、合流を選ばない可能性の方が高かつただろうに。　……ああ、そうか。　援軍の布陣場所ので北か西の二者択一に思考を縛ってるんだったね。　抜け目が無いというか、何と言うか」

「四方に散られちゃうと、本当に対処能力を超えちゃうからね。　二方向だけだったら何とかなつてただろうから」

四方向に逃げられると難しいけど、二方向であるなら一方を撃破した後に戻す刀で追撃をかける事も可能でした。

徐州騎兵の馬の質の良さがここで生きてきます。

いくら馬達が疲れていても、騎馬の速度に人が敵う道理はありません。

得意気にそう披露する私へ呆れるように笑みを返したお兄ちゃんに対して、私も笑顔で応じました。

ひとしきり笑った後、お兄ちゃん茶器を持って席を立ちました。さつき言ったとおり、休憩を入れる予定なのでしよう。

私もいい加減喋り疲れてきたので、ここで一呼吸つけるのはありがたいです。

「次のくだりからは、藍里も一緒に聞いた方が良いでしょう？　朱里達の話も含めて話すのであれば、その方が良いでしょう？」

「うん。　子瑜さんの妹さん達も少し関わってくるから、居てくれた方が良いでしょう。　さつきの様子だと大分気にかけているみたいだし。

……少しは雰囲気くらいでいるかな？」

「あー、うん。 たぶんだいじよぶじゃないかなー」

私が思わず漏らしてしまった言葉に、微妙に目線を逸らしながら棒読みで返答したお兄ちゃん言葉に頭を抱えてしまいました。

あの威圧感も心臓によろしくありません。どうか子瑜さんが少しは落ち着いていてくれますように。そう心から願わずにはいられませんでした。

第三十七話 I n t e r m i s s i o n — 茶飲み話 —

先ほどまで続けていた北海の戦いの報告を中断し、お兄ちゃんの入れてくれたお茶を飲み、お兄ちゃんが作りおきしていた日持ちするお菓子（小麦粉と鶏卵を使った焼き菓子らしいです。脆ツオイで美味しい）を食べてまったりします。

一応部下にあたる私が座っていて、お兄ちゃんを働かせている事に微妙な居心地の悪さを感じないでもないですが、お兄ちゃん自身が進んでお茶を入れているので、私が気にする必要は無いのでしょうか。多分、きつと。

……良いのかなあ？

そんな風に心中では首を傾げながら、お茶を口に飲んで一つ「ほう」と息を吐きます。会話がなくては間が持たないような付き合いの浅さではないので、二人して無言で頭を休めます。

そうしていると、ふと気になる事を思い出しました。良い機会ですし、答え合わせに付き合ってもらおう事にします。議題的に、休むどころでは無くなりそうですが……。

「お兄ちゃん。聞いて欲しい事があるんだけど。今回の出征で不可解だった件について」

「……援軍要請の事？　どうして包囲前には主戦派含めて反対していたのに、包囲された後は主戦派が急に手のひらを返すように賛成したのか」

お兄ちゃんは少し考えた後、的確に私が感じた事を察してくれました。なので、私はそれにこくこくと頷きを返します。

時々、自分の思考が相手に漏れているのではないかと不安になりますが、家族（と空さん）以外にはあまり無い事なので、みんなの察し
が良すぎるだけなのでしょう、きつと。

「うん。籠城戦が終わって徐州へ戻ってくる間、ずっと考えていたんだよ。何で青州の官吏達がこぞって反対したのか。それから、

包囲後にはすぐに意見を翻して、援軍要請に賛成したのか」

「で、答えは出たの？」

お兄ちゃんはどうかやら聞き役を引き受けてくれるらしいです。

ある程度答えらしき考えはまとまっています。それが正解である確信はありません。

なら、他の人に自分の考えを聞いてもらう事で新しい気づきがあるかもしれませんし、その相手がお兄ちゃんなら何か間違いがあればすぐに訂正してくれるでしょう。聞き役に最適と言って良いかもしれません。

だから、私は口を開いて自分の考えを話し始めました。

「まずは、青州の官吏達の考えをまとめるね。今回の件について北海で話し合ったのは大雑把に分けて二つ。迫ってきた黄巾から『逃げる』か『籠城する』か、それから援軍を『呼ぶ』か『呼ばない』か」
本当に大雑把ではあるけど、あの時に話し合いをしたのはこの二点についてです。

そこまで話して、私はお兄ちゃんが座る机まで歩き、書き損じとして机の上に置かれていた紙に二つの円を描きました。円の一部分だけが重なるように。

お兄ちゃんに教えてもらった、複数の事柄について考えをまとめるための方法です。円の中に含まれるのが、その事柄に当てはまる事。どちらの円にも該当するならば円が重なった部分となります。

そして、左側の円に『籠城に賛成』、右側の円に『援軍要請に賛成』と書きます。

私はまず、どちらの円にも含まれない外側を指差しました。

「合っているかどうかは分からないけど、順番にいくね。まず、分かりやすいところから。『逃げたくて』『援軍を呼びたくない』官吏について。これは、私達に足止めを意図しているからだと思う。援軍呼びに行くだけで兵の数が減っちゃおうし」

「うん。多分合ってると思うよ。逃げるのであれば少しでも長く足止めしてもらいたいだろうし、援軍を呼びに行く事で戦える兵が減る事は嫌だろうから」

お兄ちゃんが私の口にした言葉を肯定します。

兵数が少なくカツカツだったから少しでも温存すべきだという意見も分かるけど、それが自分達だけの身の安全を守るためだという事を考えると、あまり評価はしたくありません。まして、今回は私達が足止めをさせられる当事者なのですから。

「次は実際には居なかつたんだろうけど、『逃げたくて』援軍を呼びたい』官吏について」

指差したのは、右の円。ただし左の円と重ならない部分です。

お兄ちゃんはそれを聞いて少し首を傾げました。

「逃げた後に援軍が来ても意味が無いんじゃない？」

「んと、そうとも言えないんじゃないかと思うんだよ。東葉まで敵を誘引しながら逃げて、徐州から呼んだ援軍と上手く連携すれば、半島に敵を閉じ込める事ができるでしょ」

「ああ、なるほど。戦略としての偽装撤退か」

東葉は東に延びた半島（山東半島）にある郡です。半島の広さは結構あるのですが、入り口から半島を南北を分けるように山が続いています。その中でも北側に関しては、出入りできる場所が狭まっています。

上手く北側に賊を引き込み、入り口を押さええる事ができれば丘陵地の多い半島から逃げ出す事が非常に困難となります。

徐州から呼び込める兵数が十分なら、入り口を塞いで賊を半島に閉じ込める事が十分可能です。袋のネズミにする事ができたら、殲滅する事が容易くなるでしょう。

仮に殲滅とまでは行かなくても、半島から逃げ出す際に出血を強いる事ができるので、戦力を削る事ができます。

「ただ、相手に気づかれないように誘引するのは難しいし、徐州を狙うと公言しているんだから逃げた相手を追わずに南下するんじゃない？」

「逃げる側の立場からすれば、仮に誘引に失敗しても問題無いと思うんだ。東葉に逃げる事はできるし、賊達が南下するなら自分達の安全は盤石となるよね。……ただ、賊達が追いかけて来た場合には、場

所を東萊に変えただけで結局籠城戦をする必要に迫られそうだけど」
しかしそうする事で得られる最大の恩恵は、自身の敵前逃亡の誹謗
中傷を幾分か和らげられる事ではないでしょうか。

賊達が追いかけてきた場合には予定通りに殲滅を狙うのは当然と
して、仮に徐州へ向かってしまった場合であつても、『逃げ出したのは
策として行った偽装撤退だった』と主張するできるため、賊を前に戦
わずに逃げ出したという汚名を幾分和らげる事ができます。戦わず
に逃げた、と言われるよりも偽装撤退を利用した戦略に失敗した、と
言われた方がまだ聞こえは良いでしょう。

しかし……。

「逃げる事を主張していた面々は、黄巾が姿を見せたら一目散に逃げ
出し始めたからね。そこまで考えてはいなかった可能性が高いか
な。さつきも言ったけど、そう考えた人は誰もいなかったんだらう
ね」

「まあ、そこまで考えて逃走を主張していたなら、その場で説明しただ
らうしね。ただ逃げましようと言うよりはよほど説得力があるし」
長々と説明していながら、結局結論がそれというものもどうかと思
いますが仕方がありません。いまいち釈然としませんが。

それに後述する事になるであろう『ある理由』で、お兄ちゃんが言っ
たようにおそらく黄巾達は東萊まで追ってこないで、徐州を襲う事を
選ぶでしょうし。

自分で話した意見を自分で否定する事で、微妙な気持ちになりなが
らも、私は話を続けます。

「三つ目行くね。『籠城して』『援軍を呼びたくない』人達。そう
いった人達が反対していた理由を幾つかあると思ってるんだよ。
考えられる一つ目は、必要以上に徐州に借りを作りたくなかったから
じゃないかな、つて思うんだけど……」

お兄ちゃんは無言のまま頷いて、私に話を続けるように促しまし
た。

それを見て私は言葉を続けました。

「えっと、『徐州勢と共に北海城の包囲が解けるまで戦い、勝利した』

『徐州勢の援軍により北海城の包囲が解かれ、勝利した』 どちらも包囲が解かれているのも、戦いに勝利しているのも同じだけど、その後感じる印象は違うから。北海の官吏達からすれば、出来る事ならば前者になるように援軍を呼びたくなかったんじゃないかな、と思うんだけど。私達が青州から賊を全部追い出そう、と主張した時に不満そうな表情をしていた人達がいたし、多分そういう事なんじゃないかと……」

つまり青州と徐州、どちらが主導して戦いに勝ち、功績が大きいのかを気にしたという事です。

お兄ちゃんは無言のままですが、私はさらに言葉を作ろうと一度口を閉ざし、言葉を選ぶために少し逡巡します。

それから、言いたい事がまとまったので、口を再度開きました。

「こういう言い方はなんだけど、青州牧が行方不明でしょ。それも限りなく戦死している可能性が高いし。本当にそうだったら、早急に次の州牧を決める必要があるよね？」

「まあ、そうだね。 ついでに言うと、多くの北海の官吏は次の青州牧に孔国相をと考えているだろうね」

お兄ちゃんが補足するように口にしたその言葉に私は頷きました。自分が仕えている人物が出世するならば、よほど当人に問題が無い限りは一緒に出世をする事ができます。お兄ちゃんが県長になった時に、数年間自分の右腕として補佐し続けた藍里さんを主簿に任命して、出世してもらった事を思い浮かべれば分かりやすいでしょうか。

そして国相様に従う北海の一部の官吏が、常々おこぼれに与る事を望んでいたとしても不思議はないでしょう。まして、青州牧の行方不明と戦功を上げる機会が同時に訪れたのです。自分達の上役、そして自身の出世のために利用しようと考えてもおかしくはない、私はそう考えています。

奇貨は居く物。そしてこれは、彼らにとって奇貨に映ったのでしよう。

「そういう事じゃないかな。 徐州勢に必要以上に活躍されるのは

ちよつとまずいと考えて、援軍要請を差し止めようとした……」

北海が抜かれたら青州一州、丸ごと黄巾の勢力圏に塗り替えられ、徐州にまで乱が飛び火する可能性もあったわけですし、それに歯止めをかけた功績は朝廷も無視しきれません。

先ほど、お兄ちゃんには北海の戦いで功績は不透明と言っていました。が、青州牧の人事に関しては別です。

そもそも、青州牧焦和様が生きて出て来ない限り、黄巾は北海の官吏達にとって仇討ちの相手となります。

仇討ちは儒教の『忠』にかなう行動となるので、好意的に受け止められるでしょう。

さらに、青州牧が不在のままでは施政に影響が出るためにすぐに後任を決める必要があります。

その時の候補の筆頭は、敵討ちを主導する事ができた人物になる事は想像に難くはありません。実効支配を固めてしまえば、乱が終わった直後の朝廷としてもわざわざ手を出したくは無いですよ。

だから徐州勢を撃肘し、青州牧の人事に口出しをする事ができないくらいの功績で抑えるために援軍要請を差し止めた。

理屈はそれで通ります。通りますが。

「まだ成功していない狩りで、獲物の分け前を話し合うような感じなんだよね……」

「そうだね。北海城で敗北したら何も手元に残らないわけだし」「何ていうか……」

色々思うところがありますが、口汚く罵らない様に言葉を探しましたが、思い付きませんでした。強いて挙げるならば『非常識』でしょうか。

そんな事情に凶らずも巻き込まれた立場としては、無心で語る事はできません。

「……まあ、続けるね。で、二つ目の考えられる理由は、北海での籠城で勝算があったから。仮に徐州からの援軍が来なかったとしても」

私と子義さんが立てた作戦の前提条件。それが『援軍無しでの包囲

陣の撃退は不可能』でした。

私達は現場に居たのでそう判断したわけですし、青州の官吏も同様の判断を下していると思っていました。しかしこの認識に差異があり、彼らは彼らの理屈で判断をしていたのかもしれないと、徐州への帰り道で気づきました。

「城を守りきる事。それが籠城戦での守備側の勝利条件だよね」

「だね。 極端な話、相手を一人も殺さなくても、上手く偽報で『黄巾の首魁、張角が冀州で危機に陥っている！』とでも広めて追いつ返しても、それはそれで勝ちだね」

お兄ちゃんの言った事は乱暴ではありませんが事実です。

勝利条件は『包囲を敷く敵の殲滅』ではなく、『敵が包囲を解く事』。そう限定するならば、お兄ちゃんの口にした方法でも良いのです。

私達が目的としたのも同じように包囲の解除でした。

一旦包囲を解除してしまえば、再び兵を用いるのにしばらく時間を作る事ができます。

その時間を利用すれば、陶州牧に事情を説明して、徐州中から兵を集めて頂く事ができるようになります。

戦争の基本は相手よりも多くの兵を集める事です。無理に今居る戦力だけで撃滅する必要はありません。

……今回は結局援軍と一緒に賊達を殲滅しているじゃないかという意見は黙殺します。

包囲を解くだけでも北海は一時的に助かるかもしれませんが、その後の混乱の芽を間引くためには賊の戦力を削る事は必須だったんです。

「そのための確実な方法として私と子義さんが考えたのが徐州から援軍を要請する事。 仮に火牛計や夜襲が失敗しても、北海城と援軍に挟み撃ちされる危険を認識すると包囲を解いて逃走に移ると思っただよ」

「元々は野盗や難民の集団だからねえ。 挟撃の可能性ができるると士気の維持は難しいかもね」

集めたばかりの兵は略奪を行い、弱者を虐げる野盗の群れと何ら違

いはありません。いえ、なまじ武器や防具を支給され、戦う力を増している事を考えるとそれよりも性質たが悪いかもしれません。

その兵達にそういう事をしないよう規律を守らせ、命令に従うようにするために行うのが訓練です。

その訓練をされていない黄巾の目の前に、自分達より数が多い兵が現れたらどうなるのか。

答えは簡単。逃げ出します。

仮に指揮官が逃げ出さず、と声を張り上げたとしても、統率の取れない集団ではその命令を無視します。死地に兵達を踏み止まらせる命令に従わせる事はとても難しい事です。

正規軍に勝って士気が高まっているとはいえ、賊達ではそれができないだろうと考えていた私達の思惑通り、援軍の来訪により包囲を解く事ができました。

西に逃げるだろうと予測したのは、先ほどお兄ちゃんと確認したとおりです。

じゃあ、それ以外に包囲を解く方法は何か有ったのでしょうか。その答えは是です。

そして、それこそが三つ目の主張をしていた北海の官吏達が狙っていた事なのでしよう。

「賊達の兵糧が足りないと北海の官吏達は考えて、兵糧が切れるまで耐えれば何とかかなると考えたんじゃないかな」

『兵糧などの物資は軍を維持する上で最も重要で、必要不可欠な物』

お兄ちゃんが講義で戦略、戦術を扱う度に、何度もそう言い聞かされました。

兵糧切れが発生すると、それまでどんなに優勢に戦っていたとしても、即座に撤退をする必要が出てくるくらいに追い込まれます。

漢の歴史を紐解いても、高祖が項羽を打倒する切っ掛けとなったのは楚軍の兵糧切れからでした。

賊達の兵糧切れまで耐え、包囲を解かせる。それが彼らの思惑だったのではないのでしょうか。

「賊達が冀州から移動してきたのも、足りなくなった食料を求めたか

らだしね。兵糧が足りていないっていう推測は的を射ていたと思うよ」

お兄ちゃんが言ったとおり、元々冀州の黄巾達が他の場所へ移動したのも食べ物が無くなったからです。

そういう集団が兵糧を潤沢に持つていて、長期における包囲を行う事ができるでしょうか？ほぼ間違いなく、答えは否でしょう。

短期で城を抜くために必要となる攻城兵器を賊達は持つていませんでしたし、包囲は短期で解かれていた可能性は十分考えられます。

それを念頭に作戦を策定すれば、確かに援軍要請を不要と判断する可能性は十分にあり得ます。

ただし……。

『ただし』から始まる注釈が付くよね、その作戦」

「うん。『ただし、青州軍が負けていなければ』だよ」

当然私と子義さんも敵の持つ兵糧の問題を認識していました。しかし、その問題は北海に到着した時点で解決済みとなっていただろうと判断しました。

その理由が、青州の討伐軍の敗北です。

それも、州牧が行方不明となるくらいの大敗です。兵糧を持ち出すどころか、利用されないように火を放つ事ができたとも思えません。残された物資、特に兵糧は賊達に接收されている可能性が高いだろう、そう結論づけていました。

この結論については、北海の官吏達も共通の認識を持つているだろうと勝手に解釈していましたが、どうも誤解だったよう。

「その辺りから説得すれば、簡単に意思の統一ができていたのかな？」
「微妙じゃない？ 結局、逃走したい官吏達の説得は必要になっただろうし。包囲前の話し合いにかかった時間は変わらなかったと思うよ。」

一番時間かかったのそこでしょう？」

お兄ちゃんの言う事が正しいと理屈では納得できるのですが、それでもあの時もっと上手い話し合いの仕方があったんじゃないかなあ、と反省しきりです。

ちなみに、東萊への誘引が無理だろうと判断したのも、この黄巾達

の食料不足が関係しています。

少ない食料を費やして官軍と戦うよりも、さっさと南下して徐州から略奪をしなくては、食料が足りなくなってしまう可能性が高いのです。

それが、先ほど語った『ある理由』です。

まあ、話を続けるとしましょう。

私は二つの円が重なる部分に指を置いて口を開きます。

「最後は『籠城をして』『援軍を呼びたい』人達。私達と同じ考えを持つ人達だね」

そして、私が最初に疑問に思った、包囲前と包囲後の意見の転換の答えとなるであろう人達です。

兵の不足という問題を解決し、一番確実に包囲を解く事ができる方法。一番現実的な問題解決の手段です。

「多分、孔国相様と側近の方々がそういう意見を持っていたんだと思う。だけど、その数名の方々以外はその考えを持っていなかったんじゃないかな」

本当にごく少数の方達しか、その意見を持っていなかった。そう考えれば、意見を翻した事にもある程度の理由はつけられる気がします。

「あの時、国相様は強権を發揮して籠城を命じても良かったはず。

国相様が命じればその場で意見が決定するんだから。じゃあ、何で命令をしなかったのか。命令する事で意見をまとめた時の弊害を嫌ったからじゃないかな」

常識に従えば、意見を異にする方々も国相様の命令という形を取れば従うと思われませんが、現実ではありません。

逃げようとする官吏が多かった事や逃げ出す際の醜態を考えると、国相様の命令であっても聞いたかどうかは怪しいところです。

籠城を主張していた官吏達もそれは同じ。

国相様のためと言えば聞こえは良いですが、自分達の立身出世が目的が主であった事が考えられます。命令で援軍を呼ぶ事を決めたとして、素直に要請を出させてくれるでしょうか？

「そう考えると、北海って結構まとまりがない？」

「それは莒県こしほだつてあまり変わりないと思うよ。空さんや天明みたいに私に近い面々ならともかく、他の官吏は自分の生活や立身を最優先するだろうし」

「せ、世知辛いね……」

「まあ、流石に逃げ出すどさくさに、宝物庫襲う人間が居るとは思わなけれど。それでも徐州は大分ましだよ。州牧様自身が蓄財に興味がなく、賄賂が横行しない流れを作ったからね。太守級の人材も州牧様の息がかかっているから、賄賂を嫌うし。それに引き換え、空さんの親父さんに言わせれば青州は一時洒落にならないくらい官吏が腐敗したらしいからね。北海ではある程度ましになったのも、国相様が為人ひととなりが信用できる人間を側近に招いたのが大きいわけだし」

「牛首馬肉？　まずは上から正しますっていう意思表示？」

「……逸話の方を知らないと微妙に分かりづらい言葉を選ぶね。しかも誤用に近いし。上を倣ならう下の方が分かりやすいでしょうに」

お兄ちゃんが呆れながらそう口にします。

土地柄、齊の逸話や故事は多く耳にするとと思うんだけどなあ。誤用はわざとですが。

今はお兄ちゃんに通じたので、それで問題ないよなあ、とも思いません。

「まあ、内容としては合っているよ。まずは頂点に就く国相とその側近達が、礼節を弁わきまえて不義を憎み、清廉な政まつりごとを行う事で、下に就く官吏達が不正を行いつらい空気を城内に蔓延させる。その中でもまだ賄賂を受け取ったりしている官吏を更迭こうてつして新しい人材と入れ換える。そうやって府内の浄化に努めていく。方法としては至って真つ当だね」

「それがまだ不十分だったから、ああいう惨状だったって事なんだね。数年後だったら、状況は違っていたのかな？」

「可能性はあるよ。さしずめ、逃げようとした官吏が規律が低い、首をすげ替える直前の官吏。援軍呼ばずに戦おうとしたのがより高

みへ上る事を目指す、入れ換えたばかりの官吏」

「で、意見を口にしなかったと思われる官吏が孔国相様に近い官吏と、入れ換えられた後にその考えに共感した官吏つてところなのかな」

その区分けで考えると、もう少し時間が経てば逃げようとした官吏達は入れ換えられていくため数を減らし、援軍無しで籠城しようとした人達も孔国相に気に入られるために思想に染まっていく事が考えられます。

そうなっていれば、私達の意見も通りやすくなっていたはずです。

もう少し後だったらもつと楽できたんだなあ、と思わず溜め息を吐いてしまいます。

「……まあ、話を戻すね。命令をしなかったのは、全員を納得の上で籠城をさせたかったから。つまり、逃げ出したい官吏を追い出す事ができなかったから。これは、もし推薦で登用した官吏を追い出してしまった場合、後々の災いに繋がるかもしれないから」

これがおそらく最大の弊害でしょう。

これは州牧、太守（国相）、県令（県長）などの各地方長官が朝廷から任命され、各地方に派遣される事が関連しています。

一般的にこういった長官の役に就く人が、赴任した後に最初にする事はその地方の有力者（士大夫、豪族）に挨拶に行く事です。

そして、士大夫に土地の風習などの情報を教えてもらい、民心の慰撫や人材の斡旋等の助力を願います。代わりに長官は士大夫達の後ろ楯となり、互いに利がある共存関係が築かれます。

というよりも、彼らの協力が得られない場合、政務運営に支障が生じる可能性が高いです。

そういった人物から推薦されて官吏となった人物を追い出したらどうなるのか。彼らとの関係に亀裂が入るのが簡単に想像できます。

対立が決定的になった場合、士大夫達の扇動により農民反乱が起こされる可能性も……。

士大夫達との付き合い方一つで、統治の難易度が変わりますので、追放処分を謀るにも一苦勞あるはずです。

「彼らを追い出す事ができない以上、無理に籠城に巻き込んでも士気

を下げる要因になる事が考えられるよね。だから、自主的に籠城派に鞍替えするように説得したかったんじゃないかな」

そして、それが終わる前に賊が襲来した。おそらくそういう事なのだと思ふのです。

「付け加えれば、おそらく国相様達は籠城を主張して援軍を呼びたくなかった方々を、会議以外の場所で優先的に説得して回っていたんじゃないかな。逃走を主張する官吏達よりも先に」

それは包囲が始まったらすぐに援軍要請が承認された事からも窺えます。

包囲の前後で変わった事は、逃走を主張する官吏が投獄なり逃走なりで城内から一掃された事です。

その上で、主戦派を援軍要請賛成として一枚岩に纏めあげたのでしよう。

そうする事で、全員が籠城と援軍を呼ぶ意思を統一する事ができました。

「主戦派はそうやって纏めたけど、逃走派の意見を翻させるだけの時間まで使い果たした……」

「それだけ抵抗が大きかったんだらうね。内心はどうあれ、表向きは国相様のためだから強権的に接するわけにはいかないだろうし」

主戦派の方々の説得を先に行ったのは、数が多い逃走派との間にあ

る数の差を少しでも減らしたいからだと考えています。意見への賛同者の数が説得力を増す要素となるのは言うまでもありません。だからそれを目的として、主戦派を最優先で口説きにかか

るのは理解はできます。できますが、結果として時間を使いすぎ、本来の目的である逃走派の説得まで手が回らなかったのは本末転倒ではないでしょうか？

ほどほどに出世して、平穩無事に毎日を過ごせれば良いと考えている私にはいまひとつピンと来ませんが、自分に自信のある人達にとつては立身出世は何よりも大切になるらしいです。

そういった人達に『出世する好機を棒に振るえ』と説得して回るのですから一苦労だったのでしょう。

もつとも、私にはそれは好機などではなく、自分の命を賭金にした博打に見えるのですが……。

「そうやって援軍に反対する人間がそれぞれ逃走、捕縛、説得されて城内の意思が一枚岩になった。それが援軍が反対されなくなつた要素って事か。……うん。目立つた矛盾も見当たらないし、致命的な間違いは無いんじゃない？」

何とかお兄ちゃんから合格点をもらう事ができたようでほっとしました。

ほっとしたついでに、お兄ちゃんに質問を投げ掛ける事にします。「ちなみにお兄ちゃんが北海で同じ状況に陥つたとしたら、どう行動する？」

「無断であろうとも、援軍要請を出す事を最優先で動く」

きつぱりとそう断言されてしまいました。

お兄ちゃんならそう動くだろうと予想はしていたので、大きな驚きは特にありません。

「判断は二人とほぼ同じで、援軍無しで包囲を解くのは難しいと思うからね。それを最優先にせざるを得ないよ。ついでに言えば、無断で援軍要請を出した後でも、あくまで北海の官吏が不満を表明するなら、北海から徐州の全兵を引き上げる事を示唆してでも籠城における主導権を握る」

「思いつきり脅迫だよ!？」

思っていた以上に強硬論を唱えるお兄ちゃんにびっくりして大声を出してしまいました。

「まとまつた兵が徐州勢しかない以上、軍議において主導権を握れる事は明白でしょ。もつともその話を出すにしても、最後の手段になるだろうけどね。そうなる前に、何だかんだで国相様が既に出してしまったのは仕方がないって援軍に反対する人間を宥めにかかるだろうね」

確かに、守備できる兵が居なくなるという事態になるまで、国相様やその周りに侍る側近達はくが発言を自粛する事はありえないでしょう。実際には援軍要請を出す事に賛成なのですから。

「ついでに援軍が来るまでの短い期間を耐えるだけなら、城内の和はそこまで気にする必要は無いと国相様を説得して、全員へ籠城の命令を出してもらうかな。数年にも及ぶような長期の籠城にならないければ、人心はそこまで倦まないとだろうし、内応や明らかな怠慢なんかの落城に繋がる事態が起きなければそれで良いと割り切る。もし命令に従わないようだったら、命令不服従として投獄する大義ができるしね。それで推挙した士大夫が騒ぐなら、連座させる。明らか
な有事の際には、多少恨まれてでも強権を發揮しないと今後の統治にも影響しそうだし」

配下や士大夫を甘やかしすぎるな、という事でしょう。

「ただ、その方法は私だから取れる方法。天明や子義は孔国相様に對しては頭を垂れる必要があるから無理だろうね」

「そうなっっちゃうよね……」

孔国相様は対外的には私の大叔父となっていてしますので、尊族の意図に反する行動を取る事は不義となります。それは今後後ろ指を指される事を覚悟しなくてははいけません。

子義さんは血族ではありませんが、お母様が国相様の保護下にあるというご恩情を賜っているため、それに報いる必要があります。

お兄ちゃんの言った手段は、まったく孔国相様と関係の無い人だからこそ取れると言えます。

「まあ、どちらにせよ実際にその場になかった私がとやかく言っても、結果を知った上での後出しの意見に過ぎないから。私がどう動くかなんて関係なく、二人を取り巻いていた状況からきちんと解決策を見い出せた事は誇って良いと思うよ。ついでに言えば、私が言った方法だと北海の官吏との間に溝ができるからね。交渉の窓口として心証を悪化させない対応だった事を考えれば、最善の結果とも言えると思うけど」

「それでも、次に同じような状況に陥った時にもっと上手く立ち回りたいから」

お兄ちゃんは誉めてくれましたし、他の方も認めてくれるでしょうが、今回の出征は反省点の多い物となってしまうと自己評価しま

す。

そんな風に思い悩む私へ、お兄ちゃんは苦笑いを浮かべながら言葉をかけました。

「それじゃ向上心の尽きない妹へ、意地悪な兄がもう一つ追加で悩むネタをあげよう。その凶を書いた紙を貸して」

お兄ちゃんの言い様に不安を覚えながらも、私は興味を抑える事ができずに二つの円が書かれた紙を渡しました。

そして、お兄ちゃんは私が書いた二つの円に重なるように三つ目の円を描き、そこに『黄巾に敵対』と追加で記載しました。

それを見た瞬間、まだ考慮に漏れた部分が有ったのかと机に突っ伏して頭を抱えてしまいました。

その様子を見て、カラカラと笑いながら私の頭を撫でるお兄ちゃんを恨めしく思ったのは言うまでもありません。

「ど、どうしたのですか？」

頭を抱えている私と、笑いながらその頭を撫でるお兄ちゃんを見たのでしよう。

丁度部屋に戻ってきた子瑜さんが戸惑った声をあげたようですが、私は気にせずに頭を抱え続けるのでした。

第三十八話 Oh My Goodness — 北
海追撃戦② —

「……お恥ずかしいところをお見せしました」

部屋を出る前までの自身の醜態を思い出し、赤面しながら頭を下げた私に対して、義兄さんと叔子は気にする事は無いと言ってくれた。

心の広い兄妹に敬服する思いが自然と沸き上がってくる。

「というより、私も同じくらいお恥ずかしいところをお見せしましたので……」

私が部屋に入った時に叔子が頭を抱えていたのは、自身の浅慮さと思考の至らなさに絶望したからの事。

義兄さんはそこまで深刻に考える必要が無いと慰めていたし、日頃の言動から考えるに叔子は自己評価が低い傾向にある。……まあこれは叔子だけでは無く、糜家の姉弟達全員に言える事なのだが。

というより私の妹達にしろ、私自身にしろ、天明と同じ年齢の時にはまだ仕官などできずに、叔父の脛を噛じっていた。それなのに既に県尉としてしっかりと役目を務めている彼女にそんな謙遜をされては立場がない。

「……それで、妹達の話は尋ねても大丈夫なのでしょうか？」

妹達の安否を知りたいという逸る気持ちを抑え、私は平静を装ってそう尋ねた。

「はい。丁度その辺りまで話が進みました。次にその辺りのくだりについて触れるつもりです。……とはいっても、私自身が妹さん達と顔を合わせたわけではありませんので、万事無事かどうかまでは分かりませんが」

「いえ、それで十分です。生きていれば、また会う事ができましよう」

少し私の顔を伺うように私の質問に答えた叔子へ、労うようにそう返す。

わざわざ顔を伺ったのは、おそらく私の事を心配してくれているの

だろう。本当によくできた性格をしていると感心する。

「……多分両者の認識に致命的な齟齬がある気がするけど……、まあ、良いや。とりあえず、話を続けよう」

義兄さんがそうまとめて、天明の出征報告は続きが始まった。齟齬ってなんだろう？

「ええと、それじゃ続けます」

叔子のその言葉から再開された報告を義兄さんと一緒に聞いていく。

話は援軍が到着した後、西へ遁走する賊達を追跡するところから始まった。

徐州と隣接する地域に大きな残党が残っていないように、戦力を大きく削り取ろうと考えての出撃したとの事。それは妥当な判断だろう。

そのために、西側に罠を張っていたらしいのだが、気になる点がいくつかある。

そのうち、西へ逃げるだろうと予測をした論理に関しては質問済みで、彼女の回答に納得できたので問題はない。

なので、それ以外について聞いていく事にしよう。

「西側に罠を仕掛けたのは誰のですか？ 話に聞く限りでは、貴女達は籠城中で仕掛けを作る余裕は無さそうですし、二回目の夜襲で火付けをした兵を離脱させて西に移動させたのですか？」

「いえ、彼らではありません。彼らは夜襲後に私達と合流し、一緒に籠城していました。西の仕掛けは、援軍に來た方達に頑張ってもらいました」

「……北海南東に布陣する前に、迂回して仕掛けをしてもらったと？」

「はい。援軍にも良馬に跨がった騎兵が多いので、迂回しながら西に回っても致命的なまでの時間はかかりません。それに、徐州兵は工兵としての腕前が他の領地の兵よりも抜きん出ているので、仕掛けを作るのにかかる時間は大きく省く事ができます。これらを考えると、仕掛けを施してから北海が陥落する前に戻ってきて布陣する事も可能だと判断しました」

「まして、その仕掛けをするのが謙だからね。あいつ工兵指揮がやたらと上手いし、さらに早く仕掛けできる事ができるだろうね」

なるほど、言われてみれば一度西側に行つて仕掛けを作る事は難しくないさそうに聞こえる。

だが、そのためには城内の守備をしている者にまだ陥落せずに保たせる事ができるのかどうか、それを確認する必要があるだろう。その方法についてが少し気になる。

しかし、長々と考え込むような話でも無いので、さつさと叔子に聞いてしまう事にする。

「^{かがりび}篝火を使ったんです」

「……なるほど、篝火の数ですか。確かに、夜でも遠目で確認できま
すし、符丁を決めておけば意思を伝えるには都合が良いですね」

「ただ、包囲側にも見えるつて事だから、城内から何か伝えようとして
いる事とそれを伝えたい相手がいる事がバレル可能性は考えておか
ないと駄目だよ。聡い人間は、軍旗が風で折れただけで夜襲を察す
るし。……どういいう理屈なのかは聞くな。私にも理解できない
話だから」

確かに篝火を用いた伝達方法は、対象を絞らずに城外に広く伝える
手段である以上、相手に察知される危険もあるだろう。

あらかじめ決めていた符丁がバレない限りは、内容までは察されま
せんが、何かあると気づかれるだけでも相手の警戒を誘つてしまうか
もしれない。

……義兄さん、軍旗が風で折れただけで気づくつて、仙道を極めた
者ですか？多分に人間を辞めている感じがするのですが。

「話を戻しますが、援軍に仕掛けてもらつていた物は、柵や塹壕などの
足止めのための仕掛けでした。それを、隘路^{あいろ}から入つていった場所
の出口に仕掛けて、北海から撤退する賊達を追い込んで袋のネズミに
する予定でした」

叔子曰く、北海西部地域の泰山と接する辺りでは、山が入り組んだ
地形になつていてそういう隘路が多くあるらしい。

泰山出身である彼女は、今回の件でその辺りへ治安維持に赴く度に

つぶさに地形を観察していたらしい。

私や家族達も、琅邪国に赴任してかは故郷である陽都に度々赴いているので、叔子もそれと同じように出生地を思う気持ちが多量なりとも出た結果ではないかと思うのだけど……。考えすぎだろうか？

「何重にも張り巡らされた柵などで撤退を妨げながら、後方から一撃離脱を繰り返して乱戦にならないように連続して突撃を繰り返す。

そうすれば、被害を最小限にしながら賊を殲滅できるので、籠城当初からそれを狙っていました。ですので、仕掛けをした地点へ逃げ込むように騎兵で上手く追いたてて、そこまでは上手くできたんです」

そこまで話して、叔子は小さく溜め息を吐いた。

それを見て、少し不思議に思う。

そこまで上手くいったのであれば、後は殲滅をするだけ。どこにも溜め息を吐いて憂う要素は無いだろう。

そんな私の疑問に答えたのは義兄さんだった。

「そうやって考えていた作戦が成功すると思つた矢先、二つ予想外の事が起きたらしいんだ」

「予想外の事、ですか？」

「そうそう。一つ目は、その仕掛けの何割かが解除されていたんだってさ」

「……は？」

叔子に変わって口を開いた義兄さんの言葉に、思わず私は間の抜けた声を上げてしまった。

しかし、それもやむを得ないことだろう。賊達はその時には敗走と言つても良いほどに乱れきつた状態となつていたはずだ。

逃走する経路も徐州の騎兵達に制御されているのだから、隘路の仕掛けを見抜いて解除する余裕などなかったはずだ。

ならば、誰が仕掛けの解除をしたのか、そこが本当によく分からない。

「それによって、折角目標の場所へ追い込んだのに結構な数の賊に逃げられたらしい……で、合ってるよね？」

「うん。そこで終わる予定だったから、速度重視で兵糧も最低限しか持ってこなかったんだけどね。そのまま追跡をして、何とか多くの賊達が冀州まで逃げて行く事は確認できました。……北海城に戻るまで、子義さんの機嫌が悪くて怖かったです」

「あいつの食い意地は何かならんのか？ その事をからかうと怒るし」

「それはからかう義兄さんも悪いのでは……。まあ話を戻しますが、殲滅をする事はできなかつたのは残念……」

そこで、ふと自分の言葉に違和感を感じた。

少し考えて、その違和感が何かに気づく。大きな驚きと共に、だが。「待ってください。多くののですか？ 殲滅できなかつた賊はすべて青州から追い出せたのではないのですか？」

そう私が質問すると、叔子は先程よりもさらに大きい溜め息を吐いた。

その後に、気が重いと言いたげな口調で言葉を発した。

「いえ、小集団がいくつか残ってしまいました。当初の目標からすると、失敗したと言われても否定できないです」

「まあ、北海の危機は救っているわけだし、失敗とも言えないと思うんだけど。あんまり気にしないようにね」

「気にするよう……」

しよんぼりという表現が似合いそうな声を上げて、叔子は項垂れまうなだした。

義兄さんはその様子を見て苦笑いをしながら、ぽんぽんと頭を撫でました。

「しかし、そうやって逃れたとしても、追い込んだ時と同じように分裂して集団から離脱しようとするのを阻止する事はできなかつたのですか？」

「それが、二つ目の予想外の事のせいで、上手くできなかつたんだって」

「その罠を抜けた先の出口で、横槍を入れて攻撃しようとする集団が居たんです。狙いは賊だったらしいんですけど、慌てて追いかけた

子義さん達が飛び出したところで賊と間違われて攻撃を受けたんです。賊以外が出てくるというのが、そちらにとつても予想外だったみたいです」

「で、騎兵隊も結構な被害を受けて、賊の集団が分散して四方に散るには十分な時間を拘束されてしまったらしい。動ける状態になった後は、西側にそのまま逃げ出す集団が一番大きかったから、それ的に絞って追いかけたらしいよ。だから、多くは冀州まで追い出したけど、逃げ切った連中はまだ青州に残ってる事になるね」

「……」

叔子と義兄さんが代わる代わる説明してくれたその内容に、空いた口が塞がらない。

「まあ、態勢を立て直した子義と謙の二人に逆撃を喰らって、そちらにも大きな被害を与えたらしいんだけどね」

「その後怒り狂う二人を宥めて、賊の後を追ってもらったんです。

私は率いていた歩兵部隊と共に、その攻撃を加えた集団との間で話し合うために残ったんですけど」

「……官軍に攻撃を加えるって、どこの粗忽者ですか？」

「そこで藍里の最初の質問に繋がるわけだ」

「？ 最初の質問ですか？」

「『それで、妹達の消息は尋ねても大丈夫なのでしょうか？』って聞いたでしょ。　どうやら、この子達とやりあった相手というのが、現在朱里達が所属している義勇軍らしくてね」

そう告げた義兄さんの言葉に、思わず私は天を仰がずにはいられなかった。

第三十九話 Waitting for a Long Time — 北海追撃戦③ —

『子義さん、文嚮さん。 攻撃されてお怒りなのはごもつともなのですが、今は賊を追ってください。 山に入っていった賊達は私と歩兵部隊で追いかけてみます。 ……もつとも、見つけれない可能性が高いですが。 まあそれは良いとして、とにかく大分賊達には先に進まれてしまいました。 騎馬で急いで追いかければ相手は徒歩です。 で追い付きます。 ここは私に任せて、追撃してください』

歩兵を指揮していた事から、二人に遅れてようやく到着した頃には小競り合いは終わっていました。

二人に会うなりすぐにそう言つて、半ば強引に二人を追撃へ送り出しました。

その場に残った私は兵達に方陣を組む事を指示して待機を命じ、攻撃を仕掛けてきた集団へ使者を出しました。

現在互いに攻撃をする事はやめて、休戦状態となっています。

彼らは頭に黄色い布を巻いているわけではなく、攻撃が止んでいる現状を踏まえると、相手も賊などではなく、故意に戦端を開きたかつたわけでもなくも事故だったので無いかと感じます。

それを踏まえて、使者として行つてもらった人は比較的冷静に見える人を選び、私達に攻撃の意思が無い事、先ほどは攻撃を受けたのでやむをえず反撃をした事、私達が官職を持っており、これ以上の争いは朝廷に弓引くのと同義となりかねない事を説明してくるようお願いしてきました。

必要以上に威圧的な態度を取る事は厳禁。 あくまで事実を伝える事を第一に考え、冷静な判断を望むとも合わせて伝えていきます。

その上で、話を聞きたいのでこちらの陣地へ来るように伝えました。

私は兵達にこちらからの攻撃は厳禁。 もし争乱の種となる行動をした場合には斬首に処すという事を通達しています。

「とは言っても、おそろくすぐには来ないでしょうね」

「そうなんですかい？」

私の呟きに、律儀に副官さんが反応します。

独り言のつもりでしたが、聞かれたからには説明をする事にします。

「こちらこそ被害を出しましたが、それはあちらも同様です。態度は硬化しているでしょう」

「硬化していても、こっちは朝廷の旗の下で戦ってるんでしょう？
黄巾だったらともかく、良識を持っているなら来るんじゃない？」

その副官さんの声に私は頷きを返します。

「最終的にはそうなるでしょう。けど争いが終わったばかりの現状では、すぐに来るのは難しいと思います。子義さんと文嚮さんが戦っている間、兵達は官軍である事を大声で叫んでいましたし、相手の兵達もそれを聞いているでしょう。……臧さん。あなたがもし誤って官軍に攻撃を仕掛けたとして、まったく動揺せずにいられますか？」

「あー、確かに無理ですな」

「ですよ。それが出来てしまうのは、自身が朝廷に反抗する人間だと自覚している者だけです。わざわざ休戦状態に兵を押し留めていることを考えると、彼らはそういう人間ではないのでしょうか」

「確かに道理ですな」

「そうやって兵が動揺しているのに、指導者がすぐに呼び出しにに応じてしまうと、兵達には自分達に非が有ったと認めているように映りかねません。あえて泰然自若と構えるところを見せ、沈静化を図るでしょうね」

下手をすれば兵達に指導者への不信感を根付かせかねない以上、行動は慎重になるはずですよ。

逆に、ここですぐに動くようならば、何も考えずに行動しているのか、それを上回るくらいの理由を持っていると推測する事ができません。

「ふむ。では、こちらから出向いた方が早く話が済むのでは？」

「それもまずいですね」

副官さんの言葉を即座に否定します。

「こちらにも犠牲者が出ている以上、兵達は多少なりとも動揺しているはずですよ。そんな中こちらが譲るような態度を取れば、兵達に鬱屈とした不満が残ります」

「上に立つ姿勢を崩さずにいなくては、足場から崩れますか」

「そうですね。対応を間違えれば、私が兵達に殺されちゃいます」

冗談めかしてそう言いましたが、その可能性は十分にありえます。

そして私は、まだ死ぬ気はありません。

「なので、まだまだ時間がかかるでしょうし、今のうちに山側に逃げた集団を……」

「もう山に慣れた連中に追わせてますよ。見つけられるかどうかは分かりやせんが」

「早いですね。まだ指示を出していないのに」

「ここに留まる事を決めたとはいえ、羊県尉は手をこまねいて賊に逃げるに任せるままにはしないでしょうよ。長い付き合いではありませんが、それくらいは俺にも分かりますよ」

その言葉に少し感心する。

私が指示を出す前に自身の判断で動いてくれるのは正直ありがたいです。まして、それが正しい判断に基づいての事ならなおさらだ。夜襲をする時や、追撃の準備を整えてくれた時にも思ったが、この人は仕事に手抜きがありません。

子義さんが引き継ぎの時に推挙してくれた人物なのだが、この人は私達が思う以上に優秀なのかもしれない。

お兄ちゃんは優秀な人材はどんどん上に推挙するようにしているのに、こういう人が目に止まっていなかった事を不思議に思います。

気になったので、本人にその事を聞いてみました。

彼は誉められた事に面映ゆそうな笑みを浮かべながら、答えを口にしてくれました。

「なるほど。莒県に来たのが、丁度私が県尉に就任したのと同じ頃なんです」

「ええ。子義様が莒に行く前に重用してもらっていたんですが、それが要らない妬みを買っていたみたいで。肩身が狭い思いをしていたところに『莒県に来ないか』と誘われたんです」

「けど、子義さんも異動になってしまったと。私へ貴方を推挙していったのも、掛けた梯子を外す形となってしまった事へのお詫びなのかもしれないですね」

「律儀者なあの方らしい事です。おかげで三十路を過ぎながら妻と二人路頭に迷う心配が無くなりました。羊県尉、今後ともよろしくお願い致します」

「こちらこそお願い致します。……そういえば、下の名前と字をお聞きしても？ 兵の皆さんから『臧の兄貴』と呼ばれていたのです、姓は知っていますか……」

「あれ？ ……言われてみれば普通に呼びかけられていたんで、ご存じかと思って自己紹介してませんでしたか」

そこで初めて彼の名前を知る事ができました。

...

「しばらくは天明の副官で良いんじゃない？ 居なくなったら困るでしょ？ 代わりの人材が見つければ、その限りじゃないけど」

「そうしてもらえると助かるよ」

お兄ちゃんからしばらくは彼を副官として用いて良いと言質を頂きました。

上官として接してきましたが、人格面に信用を置く事ができ、事務仕事も堅実。子義さんには及ばない物の、武の腕が立つというなら手放す理由がまったく見当たりません。

「まあ、あまりに長い期間出世できないと出世の機会を見つけるため出奔するかも知れないから、折を見て推挙はする事になると思う。

それまでに新しい副官候補を見つけるなり、育てるようね」

「うん。分かった。子源さんには定期的に確認するね」

姓が臧、名が洪、字が子源。それがあの時に聞いた私の副官さんの

名前となります。

呑気に子源さんの話をしていますが、いい加減隣から漂う鬼氣を無視する事が難しくなってきました。

うん。正直言つて子瑜さんが怖いです。

天を仰ぎながら鬼氣を発する子瑜さんを見て、心中で小さく溜め息を吐きました。

やっぱり嘆きますよね。私が同じ事をして、お兄ちゃんやお姉ちゃんが全力で嘆きそうな気がします。

現実逃避はこんな物にしておいて、話を続ける事にします。

「話を義勇軍について戻すね。　どうやら義勇軍は、隘路から飛び出してきた黄巾を一方的に攻撃するというのを繰り返していたみたい。

確かに理には叶っているよね。　隘路からは限られた数の敵しか出てこないわけだし、その先で待ち構えれば数の不利は消えるから」

私はお兄ちゃんの筆を再び借りて、簡単な戦況図を書き損じに描きました。

「これ、本陣の置き方上手いな。　隘路から抜けてくる相手には全然見えないじゃないか」

「うん。　高台に上ってしまえば丸見えになるんだけど、狭いとはいえ道があるんだから、苦労して高台に上る事も滅多に無いよね」

「で、隘路の入り口横に兵を伏せておいて、抜けてすぐのところまで横槍を入れ続けると。　効率は確かに良いな」

「うん。　効率重視なら、多分これが最適解。　ただ、隘路を抜けてくる相手が誰かをすぐに認識しづらいつてのが問題だよな」

「実際に、次も賊が飛び出してくると思っただけで待ち構えていれば、予想外にも精強な騎兵が飛び出して来たよ」

「うん。　最初こそ混乱した事もあって被害が出たけど、すぐに立て直して反撃を始める辺り、子義さんと文嚮さんの統率力の表れだよな」

実際に、最初に騎馬隊から十騎ほど被害に遭いましたが、その後の反撃で義勇軍にそれよりも大きな被害を出しました。

死者が一割強、重傷者が全体の二割程度とはその後の話し合いで判

明した数字です。

単純計算で、三割の兵数が削られるのだから戦力も同じだけ削られます。人数の少ない義勇軍にとっては、割りと死活問題だったのでないでしょうかと思います。

「とういか、良く横撃を喰らっていなながらこの程度の被害で済んだな」「文嚮さんの洞察と統率力に救われたよ。最初に攻撃を受けた際に、相手が歩兵しか居ない事を見て取るや、即座に自ら先頭に立って全力前進。義勇軍を振り切った後に反転して反撃を開始。結果的に、一番被害が少なくなる行動を選択してるよね。子義さんもそれに呼応して即座に同じように離脱していますし」

「あいつは野生動物みたいな勘も含めて、判断能力がずば抜けているから。突発的な事態への対応は恐ろしく的確だよ。陣地構築も上手いんだから、そういう防衛戦の適正を伸ばしていけば変に真と張り合って野戦にこだわる必要もないと思うんだがな」

「そ、その辺りは本人の意地とかもあるだろうから何とも……」

お兄ちゃんの嘆息に、私は苦笑いを浮かべながらそう応じました。

「辛いのは、本陣と前線までの距離かな。ちよつと警戒しすぎたのか、後ろに置きすぎな気がする」

「うん。人数が少ない事を自覚していたから、万が一に備えての事だったんじゃないかな。ただ、参謀達も本陣に詰める事になったせいで、隘路から抜けてくるのが賊達だけだったのか確認しづらくなつたし、前線で戦っていた二人の指揮官に指示を飛ばすまでの時間が必要以上にかかる原因になったのは確かだね」

「少なくとも朱里は、最前線で指揮を取れるような武は持ち合わせていなさそうだし、後ろに留め置くしかなかったんだね」

仙術の中には、遠く離れた相手へ言葉を伝えたり、目に映る光景以外を見通す事ができる物があると聞きます。

今回の場合、義勇軍にそういう術を使える人が居れば、隘路を抜けてくるのが黄巾達だけではなく、私達官軍も居るという事が本陣にいながらでも分かったでしょうし、本陣で私達が賊ではないと気が付けば即座に前線指揮官を止める事ができたでしょう。

しかし、そんな物はおとぎ話の中でした登場しない物ですので、実際には斥候を出し、伝令を使う事で戦場を動かさなくてはなりません。

この位置に本陣を置いてしまった以上、情報の取得と他者への伝達に時間がかかるのも仕方ありません。

さりとて、先ほどお兄ちゃんが言った様に、この位置に本陣を置く事は伏兵を用いる際にはとても優れています。やはり最大の問題は、賊を追う官軍の存在が、彼らにとって予想外だった事ではないでしょうか。

「仕掛けを解除した事にも、多少は納得できる理由があるのでしようか？」

幽鬼のような雰囲気を漂わせている子瑜さんがそう口にしました。

ええ、背筋に冷たい物を感じるのはきつと気のせいでしょう。

そんな心中の怯えや焦りはおくびにも出さずに、私は答えました。

「はい。隘路を抜けてくるのに邪魔になったからでしょう」

「いえ、それはそうなのでしようが」

「仕掛けを施したのが黄巾だと思っただんじやない？ 官軍が仕掛けたとしても、青州軍が黄巾と決戦する時に作った物だろうし、負けてしまった以上もう使わないので取り壊して問題無いっていう判断だったんじやないかなー」

「言われてみれば、敗北して劣勢のはずの官軍が町や村から遠い隘路に、わざわざ新たに仕掛けをするのか、と言われると……」

「普通は無いと思いますよね」

私と子義さんも籠城前は周辺の民を北海城内に集めたり、城壁の修復をしたりと籠城の準備をしてそれどころではありませんでした。だからこそ、文嚮さん達にお願いしたわけですし。

援軍に呼んでおきながら、救援よりも包囲された城から離れた場所へ仕掛けをさせる事が優先とは普通は考えないですよね……。

「ちなみに隘路を選んだ理由は、見通しの良い街道周辺を通って、早期に捕捉される事を嫌ったからと義勇軍は明言していました。確かに山間やまあいを通った方が見つけづらいですよね」

「街道を通って姿を晒したくはない、ならば仕掛けを解除するしかない、という事ですか」

「ですね。妥当と言えば妥当な判断です」

「なるほど……」

私の書いた図を食い入るように見つめる子義さんを横目に、私は冷めてしまったお茶に口をつけます。

「そういうえば、そもそも朱里達は何故青州に来たのですか？」

「ああ。それは私達の救援のためです」

「は？」

「どうやら、冀州に入ってすぐに青州へ黄巾が乱入した事と、青州軍が敗北した事を聞いたようで」

「わざわざ救援に来てくれようとしたんだって。人が良いというベキかね？」

子瑜さんはどういう顔をして良いのか分からず、困ったような表情をしています。

叱るつもりだった妹が、予想とは異なり善行をしようとしていたからでしょう。

その様子を見て、お兄ちゃんは苦笑いをしながら私へ話しかけました。

「話を戻そうか、天明。その後結局どれくらい待ったの？」

「数時間程度かなあ。数日待たされる可能性も考えていたから、それを考えると大分早い方だと思うよ」

「腹芸に自信があるならば、周囲に憤懣ふんまんやる方なしと見せて、すぐに面会にこぎ着ける方法もあるんだけどね」

「実際に会った感じだと、そういう演技ができそうな人はいなかったかな」

あの後、実際に彼らと会った使者達の報告から、いつかお兄ちゃんが言っていた義勇軍だと知りました。

伝え聞く噂を信じるのであれば、漢室復興をお題目に掲げているので、ますます私達が攻撃されたのは誤認が原因ではないかという思いを強くしました。

流石に漢室復興を掲げながら官軍を狙って攻撃するっていうのは無いでしょう。

実際に私達の元へ訪れた義勇軍一行の訪れた時の様子を見ると、沈痛そうな顔を浮かべている人が多く、予想は外れていませんでした。

「伝え聞く義勇軍の指導者層の性格から判断すると、劉玄徳殿と義妹の関雲長殿が即座に謝りに行く事を主張して、もう一人の義妹である張翼徳殿が激怒して怒鳴り込もうとしたたと勝手に予想してみる。

それを朱里達が悪命になだめて、数時間経過したってところじゃないか？」

「お兄ちゃん、大体正解。違うのは、張翼徳殿をなだめる事ができずに、諦めて陣地に残したってところくらいだね」

「……妹達と直接顔を合わせなかったというのは、その場に妹達が来なかったという事ですよね。その見張り役、もしくは説得役を引き受けて一緒に残ったからでしょうか？」

「気を取り直すように大きく深呼吸を一つして、子瑜さんがそう口にした。」

「うん。落ち着いてくれたようで、発していた鬼気が和らいでいます。」

「すべて話し合いが終わった後、『本陣にいるシユリちゃんに伝えてください』と交渉に赴いた鳳土元さんが、連れてきた兵士へ口にしたのを聞いただけです。その辺りは何とも。確か妹さんの真名の音はそれです。」

「はい。土元さんは妹の学友で親友ですので、そう口にしたのならほぼ妹の事で間違いないでしょう。もう一人の妹については何かも？」

「はい。話題にも上がりませんでしたし、場に居ない人について長々と話すだけの時間ありませんでしたので。……ごめんなさい」

「あ、いえ。責めるつもりはまったく無いので」

「考えてみれば名前を聞いて、子瑜さんの妹さんと確認した方が良かったかもしれません。家族が心配していると伝え、一度徐州へ来

るように伝言をお願いする事もできたのですから。

その事を告げて再度謝罪をすると、子瑜さんは大きな溜め息を吐きました。さらに表情が柔らかくなりました。しょうがない妹だ、といったところでしょうか。

……まあ、子瑜さんは表情に感情が出づらい人なので、推測も含むのですが。

「多分、藍里に怒られると思って近づかなくなったんじゃない？」

「どちらにせよ大目玉は喰らわせるつもりなので、早いか遅いかの違いにすぎないのですがね」

にこやかな笑顔（ただし目が笑っていない）でそうお兄ちゃんへ答えた子瑜さんを見て、軽く戦慄します。

……まだ見ぬ子瑜さんの妹さん達。どうやらまだまだ子瑜さんの怒りは解けていないようです。どうか再会の時はお気をつけて。

先ほどまで子瑜さんが発していた鬼気を思い出すと、そう彼女達のために祈らずにはいられませんでした。

第四十話 Time after time — 終
わりの始まり—

正体不明だった相手へ使者を出してから数時間後、軍議に使うための大きめの机に座りながら報告書を書いていた私に彼らが到着したと報告がありました。ここまで来るように伝えて、机の上を片付けます。

そうこうしている内に子源さんが現れて、一緒に椅子や白湯の準備をしたりしました。

そのまま待つ事数分。徐州兵達に連れられて四人の人物が陣幕へ入ってきました。

彼らも兵を率いてきたのですが、方陣の外で待たせています。

私はそこで初めて彼らの容姿を目にしました。

一人目は、桃色の髪を後ろに流し、羽の意匠の髪飾りを着けた女性。顔を少し青ざめさせています。

二人目は黒髪で、私と同じように横で長い髪を結っている女性。

意思の強さを感じさせる目は憂いの色を見せ、口唇を少し噛み締めています。

三人目は、とんがり帽子をかぶり、すみれ色の髪の毛を頭の横で二つに結った女の子。顔色が良くないのは桃色さんと同じですが、彼女はさらに悪いです。具体的には、今すぐにも倒れてしまいそうなくらい。

彼女の体調のためにも、さつさと話し合いを終わらせてしまった方が良いでしょう。

四人目は、茶色にも見えるような黒の短い髪で、日の光を反射しているキラキラした服を着た男性。

一緒に来た女性陣よりも落ち着いているように見えますが、目線だけで周囲の様子を伺っているところを見ると抜け目がないと見るべきでしょうか。

彼らの観察を終えた私は、四人に私の向かいの席へ着くように言い

ました。

さて、それでは交渉の始まりです。

まずは、私が口を開きました。初対面の相手と話す時に最初にする事。

もちろん挨拶です。

「こちらの招きに応じて頂き感謝致します。私は徐州琅邪国が莒の県尉、羊叔子と申します。隣にいるのは私の副官の臧子源です。

差し支えなければ、あなた方のお名前を教えて頂いてよろしいでしょうか？」

思わぬ物を見た、と言いたげに目の前にいる四人は目を見開きました。

おそらく私が思いの外、丁寧な挨拶をした事に驚いたと言ったところでしょうか。

彼らの様子を見るに、私達が問答無用で叱責して罰すると予測していたのでしよう。

それはそれで間違いではありません。いかなる理由が有ったとしても、攻撃を受けた私達はそうする権利を有しています。まして、官軍と義勇軍という立場の違いすら有るのですから。

「えっと、劉備玄德です。あの、間違えたとはいえ攻撃しちゃってごめんなさい！」

「桃香様が悪いのではありません！ あれは私と鈴々が……！」

「愛紗。それは後にしよう。俺は北郷一刀。北郷が姓、一刀が名前です。字は無いよ。桃香……劉備と一緒に義勇軍の長をやっている。それにしても君みたいな小さな女の子が軍を率いているとは驚いたよ」

最後に私へかけられたその言葉に、私は彼の顔を無表情にじっと見つめました。

数秒その姿勢を維持し、彼が居心地悪そうにたじろいた瞬間、彼の隣に座る女の子へ視線を向けて呟きました。

「……小さい女の子」

「あわわ……、違いました。私は今でこそ小さいですがまだ成長す

るんでしゅ。 タケノコも驚くくらいによきによきと急成長するんでしゅ。 だから参謀をやつていても良いんでしゅ」

あわあわし始めた彼女の様子に、彼はしまったと言いたげに顔をひきつらせました。

そのまま彼女を宥め始めそうな彼らから視線を外し、先ほど劉玄德殿を止めようとした黒髪の女性へ視線を移して、『お名前を頂戴しても?』と伺いました。

「あ、ああ。 私は関羽雲長。 劉玄德の義妹であり、義勇軍の将だ。

……先ほどは失礼した。 罰するならば、桃香様ではなく私を」

「愛紗ちゃん! 罰を受けるのは指導者の仕事だよ!」

「いえ、桃香様。 貴女はこんな所でいなくなつてはならない方です。

実際に戦闘に及んだ私こそ罰されるべきでしょう」

「それでも!」

「とりあえず、どうするかは話を聞いてから決めますので、死罪を与える事を確定済みかのように話を進めるのはやめてください」

お互いに罪を被ろうとする主従を呆れ混じりに押し止め、最後の一人へ目を向けます。

彼女は北郷殿に宥められているのにも気づかず、ぶつぶつと『そう、これは仮の姿なんでしゅ。 いつか蛹から蝶に変わるように誰もが羨む体型になつて……』などと口にしていきます。

体つきについて、結構気にしていたのかな。

私の発言が発端となつているので、少し反省をしながら改めて彼女へ声をかけました。

「お名前をお伺いしても?」

「……あわわ、失礼致しました。 私は鳳統士元でしゅ。 義勇軍で

参謀をやつていましゅ」

彼女は我に返り、私へそう返して来ました。 噛んでいる事は流した方が良いでしょう。 彼女も恥ずかしそうにしていますし。

さて、ようやく全員の名前を確認する事ができました。

「それでは、色々とお聞かせ頂けますか? まず、何故あなた方がここに居るのかについて。 劉家軍といえば、幽州を拠点に活動してい

ると行商人達の噂によく上がっていると記憶しています。それが何故青州まで？」

「えっと、私達は白蓮ちゃん……幽州牧の公孫贊殿の下で客将として戦っていたんです」

「ところが、どうやら名声を得すぎてしまったようで。伯桂殿の立場を脅かしかねなくなったので、幽州から出る事にしたのだ」

「それで、冀州で黄巾達の勢力が膨れ上がっていると聞いたから、冀州に入ったんだけど」

「青州に黄巾の一団が乱入して、青州軍が敗北したと聞いて、急いで青州に入ったんでしゅ」

口々に言う彼らの言葉を聞き、青州に来た理由は把握できました。なるほど。言い方は悪いが、幽州から追い出された状態なわけですか。

お姉ちゃんよりも、お兄ちゃんを糜家の次期当主に据えようとするのと似たような考えをする人達が幽州にも居たという事でしょう。

「それで青州に入つてすぐに、黄巾達に敗北して追撃されている兵達を見かけたのだ。彼らを助けて事情を聞いたところ、うちの参謀二人が北海や東萊が危機に陥っているかもしれないと言い出してな。急遽救援に来たのだ」

「黄巾達が青州に入ったのは、食料が足りなくなったからです。だから、まだ襲っていない地方に向けて進むだろうと思つたんです。

なら、最初に狙われるのは北海になるんでしょうけど、青州は先の敗北からまとまった数の兵を集める事ができません。だから、私達の力が必要になるんじゃないかと」

関羽殿と鳳統殿の言葉を聞き、彼らが東進してきた理由もこれで理解する事ができました。つまり、私達を助けに来ようとしていたわけですか。

「どうやって北海がもう安全だと告げようか迷っていると、関羽殿から逆に私へ質問がされました。

「失礼だが、あなたは先ほど徐州の官吏と名乗ったわけですが、何故徐州の官吏が青州で軍を率いているのかをお尋ねしても？」」

「別に構いませんよ。黄巾の討伐軍を起こすにあたり、治安維持まで手が回らなくなりそうだと青州側から徐州に打診があったのです」
「そのための増援として徐州からわざわざ来たわけか」
「そうなります。ちなみに、先ほど関雲長殿と一騎討ちをしていた方も同様です。彼女は、陽都の丞になります」
「……あれほどの剛の者で県丞に過ぎぬのか。なかなか徐州は人が多い」

関羽殿は、感心したようにそう呟きました。隣に立つ子源さんが少し誇らしげなのは、子義さんが褒められたからでしょう。

「しかし、それでは何故貴女方はここに居るのですか？今は青州にとって火急の時のはず。青州の治安維持のをするのであれば、こんなところに居るべきではないのでは？」

少し咎める様に口にする関羽殿に対して、どうした物かなあと心中で嘆息する。とは言っても伝えないわけにもいかないので、私が口を開こうとした瞬間、鳳統殿が口を開きました。

「あ、あの県尉様。お伺いしたい事が有るのですが」

「はい、何でしょうか」

出鼻を挫かれてしまった事はおくびにも出さず、鳳統殿にそう促しの言葉をかける。

「先ほどの愛紗さんの言葉にも繋がるのですが、貴女は一体何処からここにやってきたのですか？」

「雛里、それは先ほど……」

「おそらく、貴女の考えているとおりでだと思いますよ」

鳳統殿の意図を読み損ねて、止めようとした関羽殿。それを無視して、私は鳳統殿へそう言葉を返しました。そして心中で鳳統殿の評価を上方修正。思っている以上に、この人は聡い。私の治安維持という役目を聞くとすぐに、私が北海からここに来た事を理解したのでしよう。

「やはり……」

そうつぶやき、目を閉じて思考を走らせる鳳統殿に、他の三人は訝しげな目を向けます。

鳳統殿は数秒そうして考えていましたが、目を開けて私の目をしかと捉えて言葉を紡ぎだしました。

「県尉様。確認をさせていただきます。もう北海の危機は去っているのですね」

「仰るとおりです。あなた達のやろうとした目的は既に果たされました」

「は？」

間の抜けた声を上げた北郷殿へ視線を向け、改めて私は口を開いた。

「先ほど、あなた方が攻撃を仕掛けようとしていた黄巾が、北海を包囲していた者共です。北海の包囲は自力で解き、私達は北海城からこれらの賊を追撃してここへ来たんです」

「……」

一拍置いた後、異口同音に三人の口から驚愕の叫び声が発せられました。

「ちよ、ちよつと待て！ 雛里！ お主と朱里の話では、私達の助力が無くては北海が危機に陥るのではなかったのか!？」

「はい。だから、先ほど県尉様は『北海の包囲は自力で解き』と仰りました。北海が包囲されるまでは、私達の予想通り行われたようです。その後自力でどうにかするというのは、予想外でしたが」

「け、けど一体どうやって!？」 話を聞く限り、結構な兵力の差があったよね!？」

「方法については私も分かりませんが、県尉様達が来た方向と黄巾を追いかけていた事を考えれば、偽りが無いかと」

「私としては天に誓って、嘘ではないと申し上げるしかありませんね。北海に赴けばおそらく一目で分かるかと思えます」

「な、なあ、みんな。俺、すつごく嫌な予感がするんだけど、今回の俺達って」

「おそらくご主人様が考えているとおりです。私達は官軍に攻撃をただけではなく、逃げる黄巾達への官軍の追撃を妨げて、賊に利する行為を行っています。隘路に仕掛けられていた罠を仕掛けてい

たのも県尉様達だとすれば、二重の意味で利敵行為を行っています」
「つゝゝゝゝ!!」

劉備殿と関羽殿は声にならない叫び声を上げて、北郷殿は深々と溜め息を吐いた。

気になるのは鳳統殿の血色が先ほどよりも良くなっている事。血の気の引いた土気色をしていた状況と比べれば、その差は大きいです。

さて、彼女の顔色が何故良くなったのかを少し考え、一つ納得ができる理由を思いつきました。この私の考えが正しいとするならば、あまり重過ぎる罰を与えるのもなあ、と思つてしまいます。甘いとは自分でも自覚していますが。

「さて、状況をご理解頂けたようですが、如何様な刑罰をお望みになりますか?」

私はゆつくりと四人の顔を見渡し、そう口を開いた。

・・・

「で、結局死罪などで購あがなわせる事はしなかったと」

「彼らを殺したところで、時間が巻き戻るわけでもないしね。だったら、有効にその力を利用するべきでしょ」

「正しいと言えば正しいのですが。文嚮殿と子義殿はそれで納得したのですか?」

「して貰いました。というより、そうしなくてはより面倒くさい事をしなくてはならないという方向で説得したのですが」

彼らに科した罰は、『私達の代わりに泰山方面へ逃げた賊達を追討する事』としました。自分自身、かなり甘い裁定をしているだろうという自覚はありますし、それを命じた時に鳳統殿以外の三人から安堵の溜め息が漏れました。

そんな中、鳳統殿だけは口元を引き攣らせていました。

「官軍に楯突いたっていうのは確かに重いけど、中央から派遣されてきたわけじゃないし、誤魔化そうと思えば誤魔化せちゃうんだよね」

「そうやって誤魔化す事を条件に、非常に面倒くさい案件を押し付けたわけだね」

「明言はしてないよ。それとなく示唆はしたけど」

「しかし、やはりかなり甘い裁きだと思います。また同じ事をしなにか、少し不安なのですが」

子瑜さんからの質問に、お兄ちゃんと二人顔を合わせます。どちらが説明をするかを軽く目配せします。結果、私が引き受ける事にしました。

「この裁定に落ち着けたのには、二つ理由があります。一つ目は、私達が長期に渡って追討を行う事ができないという事です」

「兵糧の量ですね」

今子瑜さんが言った様に、私達は追撃を最優先で行軍してきたので、十分な量の糧食を持ってきてはいません。このまま山狩りを始めてしまうと、途中で狩りをするなどで飢えをしのぐ必要が出てきます。兵達の士気を大きく落としかねませんし、この後も続く青州内の治安維持活動にも影響が出てきますので、可能な限り避けたかった厄介事と言えます。だからこそ、賊の戦力を削りきってしまったかたのです。

「一旦北海に戻って再度山狩りを開始するよりも、すぐに追いかけた方が見つけれられる確率が高いです。幸い、義勇軍はある程度の兵糧の量を確保した上で進軍してきていたので、問題なく山狩りを開始できますし」

「それが一つ目だとして、二つ目は何なのですか？」

「義勇軍への懲罰です」

鳳統殿が顔を引き攣らせたのも、この裁きが見た目よりも大きく義勇軍に押し掛かってくる事が分かったからでしょう。

「子瑜さん。義勇軍って、どうやって物資を得ているかをご存知ですよね？」

「はい。商家などの富裕層からの援助ですよ」

「そのとおりです」

官軍と違って、義勇軍は軍を維持するための物資などを自分達で調

達する必要がありません。一番多いのが、豪商などの有力者に寄付をし
てもらおう事です。

そういった支援者に、活躍している姿勢を見せる事も義勇軍では重
要になります。

あまりにも活躍しないようなら、支援を打ち切られてしまうからで
す。

ちなみに糜家の商家では劉玄德殿達の義勇軍のような組織への支
援は行っていません。

むしろ、難民達への食料の供給や、雇用を拡大する事による救援活
動を行っています。

徐州ではそこまで賊が横行していませんし、治安が低くもなってい
ません。なので、義勇軍を使って治安維持組織を拡大するよりも、逃
げてきた人達が野垂れ死にしないようにする事を優先しているから
です。

義勇軍と比べて華々しい名声は得られませんが、これもまた重要な
事ではあります。

話がそれました。お兄ちゃん達との会話に意識を戻します。

「この山狩りを行わせる事で、勲功を稼ぐ機会が少なくなる。それ
がこの裁定の真の狙いです」

「藍里。冀州が大激戦区になっているっていうのは知ってるよね
？」

「ああ、なるほど。それへの参加が遅くなるように制限をかけたわ
けですか」

お兄ちゃんと子瑜さんが言った様に、冀州にすぐに向かう事ができ
ないようにする事。それが今回の懲罰です。

『冀州に出向き、黄巾党の本隊と戦っていた』

『青州で、黄巾党の残党を見つげるために山狩りをしていた』

どちらがより聞いた人が評価するかは言うまでも無いでしょう。

それが分かっていたからこそ、鳳統殿は顔を引き攣らせていたので
しょうから。

「ただ、私達との戦いで戦力を損耗していたから、無理に黄巾の本隊と

戦ったとしても結構危険だったんじゃないかという考えもありました。せめて重傷者が回復するまでは、青州から出ずに傷を癒す事に集中した方が良いのではないかと」

少なくとも参謀の鳳統さんは、官軍を攻撃した罪で罰される事よりも、自分達の到着が遅れる事で北海が危機になる事を気にしていました。だからこそ、私達が自力で北海の包囲を解いたと聞いた後、顔色が良くなったのでしょうか。そういう、『善き人』には無茶をせず、可能な限り長生きをしてもらいたいと思っただけでした。

「確かにそれは甘い事かもしれないけど、良い人にこそ長生きしてもらいたいですね。同意かな」

「そうですね。人心が乱れている昨今の状況を踏まえると、自分の処罰よりも見知らぬ他人の生活が脅かされる事を恐れるというのは非常に貴重な心根でしょう。朱里も良き友を得られた物です」

甘い裁定である事は否定されませんが、そこまで否定的な見解出なかった事に少し安心します。

とは言っても、二人にとって義勇軍には妹である孔明さんがいるので、甘い裁定は望むところなのかもしれないかもしれませんが。

次に、張翼徳殿についても話しておきます。

「ただ、流石に張翼徳殿には義勇軍内で罰するようには伝えましたよ。」

流石に『出てくる奴はみんな敵なんだから、片っ端から倒しちゃえ！』と言って、よく確認しないで攻撃を始めた人には何も無しとは行かないから。頭の布で判別可能なはずなだけだなあ」

「んー。何回か同じ成功を繰り返して、次もそうだろうと思っただけでいたんだろうね。まあ、やっぱり粗忽としか言い様がないんだけど」

「噂では相当戦上手という話ですが、実際にはどうだったのですか？」

藍里さんからの質問に、私は答えました。

「やっぱりかなり精強だったみたいです。文嚮さんも、子義さんも同じ感想を口にしていました。二人が取った戦術を簡単に言うと、関雲長殿が率いる軍を子義さんが一騎討ちで止めて、張翼徳殿が率いる軍を文嚮さんが指揮で絡めるといった感じですよ。文嚮さ

んは相手の本陣に攻め込む気配を見せて翼徳殿を釣り上げた後に、指揮官がいなくなつて動揺する兵を削るというのを繰り返したらしいです。ちなみに彼らの被害の大半は、この戦法で出したらしいです」

「……引つ掛ける方が酷いのか、引つ掛かる方が悪いのか。まあ、それで止められたなら良いのかな」

「歩兵に勝る騎兵の機動力を最大限生かした戦略ですよ。お見事かと。しかし、本陣を襲うにせよ、少数しか割けなかったのですから、本陣に任せてしまえば良かったのでは？」

「討伐する事を最優先に考えたせいで、本陣の守りが極めて薄かつたらしくて……。一応守将を置いていたらしいんですが、複数の騎兵相手では方が一があるかもしれないという判断だったみたいです」

「馬に撥ね飛ばされるだけで、重傷を負いかねないしね。騎兵が近づかれるだけで怖いのは、速度と大きさが人間の比じゃない。私も、最高速度で近寄つて来られたら身が竦むよ」

鳳統殿の話聞くに、関羽殿と張飛殿が抜かれる可能性をほぼ考慮していなかった事も影響していたようです。ただ、鳳統殿が『シユリちゃんに伝えてください。それから、セイさんとリンリンちゃんにも』と兵達へ言っていました。そこから推察するに、あと三人は幹部とも言えるような人物が義勇軍にはいるはずです。

シユリさんは孔明さんの事、リンリンさんは、関羽殿の話にも出てきましたし、張飛殿の事でしょう。ならばおそらく、セイという人物が本陣を守っていた守将なのでしょう。兵を割かずとも本陣の守りを任されるくらいですので、かなりの武の腕なのではないかと推測できます。

お兄ちゃん達にその事を伝えたと、難しい顔をされてしまいました。

「……義勇軍に二人以外の猛将が居るって事？ 誰？」

「名前が出なかったからなあ」

「この時期に猛将三人抱えた義勇軍か。どこも傭兵代わりに抱え込もうとするかもね。……まあ、顔を合わせる機会もそのうち有る

か。最後に一つだけ聞かせて。劉玄德殿と共同で代表になつてるといふ北郷一刀殿について」

「多分、あの人が『天の御遣い』なんだと思うよ。見た事無い生地で作られた服を着ていたし。……あんまり印象には残らなかつたかな。話していたのは関雲長殿と鳳土元殿が多くて、指導者の二人はあまり率先して意見も口にしなかつたし。自己紹介以外だと、私が賊の追討の要請をした時に、最後に了解の返事をした事くらいしか口を開かなかつたよ」

「あくまで意思の決定者という立場を取っているのでしょうか？」
「聴政のようなですか？ 見た感じですと、それが一番近いと思いましたが」

「多分二人の考えで合ってるんじゃない？ 優秀な人材が多いなら、臣下を対立させないように調整する能力を磨くだけで、勢力が飛躍的に充実するし。人に任せるって、多分思っているよりも難しいよ。少なくとも、指導者二人はそういう器を持っている可能性があるわけだ。多分、朱里と鳳土元殿に義勇軍の運営に関する実務を全部投げてるんじゃないか？」

まあ、投げられた方は死ぬほど苦労はするだろうけどねー、と無責任に言い放つたお兄ちゃんへ、子瑜さんと一緒に苦笑を返します。

「ところで天明。もしかしたら次に会う時に義勇軍の皆さんに逆恨みされているかもしれないから気をつけてね」

「……まあ、面倒な事を押し付けたから、それくらいはしょうがないかな」

「それもなんだけど、最大の問題は、劉備殿達が山狩りをしている間に、黄巾党の首魁が殺されたって事でね」

「は!?!」

さらっとお兄ちゃんは口にしましたが、結構な大事件な気がするのですか!?

「私も、天明に報告を受ける直前で耳に挟んだ情報だからね。まだ裏は取れていないんだけど、冀州で官軍が黄巾党の本拠を攻撃して、それを陥落。黄巾の指導者達は戦死したらしい。今、子綱と子布

の二人に詳報を確認するように指示を出したから、そろそろ報告が入ると思うけど」

「ええつと……。劉備殿達はそれへの参加は……」

「まったく話題に上がって来ないね。多分、山狩りに時間がかかって間に合っていないんじゃない?」

「うわあ」

思わず、自分の顔を手で覆ってしまいます。軽い懲罰のつもりでやったのですが、結構大きな影響になりかねません。具体的には、冀州で戦わずにいた事を理由に援助が大きく減らされたり。

「まあ、気にするな。本当だったら首を落とされても文句は言えないくらいに失態だったんだから、文句言われても突っぱねて問題ないよ。ただ、同じ戦場に居る時には気をつけるようにね」

「ああ、うん。肝に銘じておくよ」

「まあ、自業自得な朱里達の事は置いておくとして、虚報でないのであれば、これは間違いなく朗報ですね。黄巾党の指導者が死亡した以上、勢力は大きく減じるはずですよ。この乱も終焉に向かうのではないでしょうか?」

そう嬉しそうに言葉にした藍里さんに対して、お兄ちゃんは少し複雑そうな表情を浮かべていました。

「どうしたの? お兄ちゃん」

「……いやね、黄巾党達の乱は確かにこれで終わったんだけどさ。疲弊したこの国で、すぐに平穏な時が訪れると思う?」

私はそのお兄ちゃんの言葉への答えを窮しました。

「多分この乱は、今後も続いていく乱世への呼び水になる物。緩んでいた漢王朝の箍たがが決定的に外れてしまう事になると思う。次に何処で何が起きるかは分からないけれど、油断して力を抜く事は無いようにね。多分、二人だけじゃなく、全員に死ぬほど働いてもらう事になると思うから」

お兄ちゃんが言ったその言葉に、私と子瑜さんは神妙な顔をして頷きました。

結局、お兄ちゃんの話した内容は誤報ではなく、黄巾の乱は終結し

ました。


その後私たちは短い準備期間を持って、次の乱に巻き込まれる事になりました。

その乱の幕開けとなったのは、黄巾の乱が終結してから数カ月後。

漢王朝第十二代（前漢を含むと二十六代）皇帝、劉宏様の崩御。

国中が揺れたこの出来事後、さらに漢王朝は乱れていく事になるのでした。

第四十一話 Catch a cold — 動乱の足音—

現在、私は赴任地である莒を離れて、の州府に居る。趙国相様に進言して推し進めていた琅邪国東部の海浜地域での製塩事業について、結果を報告する事が主な目的だ。

本来なら、実際に製塩を行っている県の官吏か、取りまとめている琅邪国の官吏が報告に来るのが筋なのだろうが、国相様より『言い出しつぺの法則』と言われて私が顔を出す事になった。

まあ、体調を崩したらしい元龍の見舞いにも行かなくてはと思っていたので、都合が良いといえれば都合が良い。少し早めに出発したので、見舞いは既に済んでいるが。どうでも良いが、わざわざ見舞いに来た人間にしかめっ面でさっさと帰れと言ってくるのはどうかと思う。まあ、別に良いんだが。

さて、そんな事を思い返すのを止めて我に帰り、筆を持つ手を止めて目の前を見ると、あるのは決裁を待つ書類と竹簡の山、山、山。

とある理由で州の政まつりごとが滞っている現在の州府の状況を考えると、この光景も当然ではある。だが、既に州牧様付きの主簿ではない私がこうして決裁を行っているという現状に、少し疑問を感じないでもない。

「本当にごめんなさい、子方君。今日は美味しい物を御馳走するか
ら」

「いえいえ。別に気を使つて頂かなくても。昔取つた杵柄と言いまし
ましょうか、苦勞と言うほどの物でもないのです」

手を止めた気配を感じたのか、この部屋の主である景興さん（王朗の字）が顔を上げて、申し訳なさそうに話しかけてきた。

私が主簿時代に扱っていた書類だし、鼻唄混じりに決裁していく事は簡単だ。しかし、本来これを処理する現在主簿に就いている者はどこ行つた？

「別駕従事史や主簿はどうしたんですか？ これを見るに、彼らの書

類も混ざっているようですけど」

「二人には、下の官吏達の動揺を抑えに、各部署を走り回ってもらっているの」

「で、二人の分の書類は景興さんが引き受けたわけですか」

「うん。ただ、完全に抑えきれいていないんだろね。どうにも書類が上がってくるのが遅くて、二人の分まで手が回らなくなっちゃって」

そう言つて、溜め息を吐く景興さん。

彼女は仕事をこなすのは早いのだが、他の人の分まで平気で代理として抱え込もうとする悪癖がある。だから、仕事と結婚するつもりだ、とか陰口叩かれるんだろうに……。

「やつぱり、籠たがが緩んでいますか」

「そうだね。やつぱり州牧様のご不在の影響は大きいみたい。州府内でも、色々と流言が飛び交っているみたいだし」

考えていた事はおくびにも出さずにそう聞くと、景興さんはまた大きく溜め息を吐いてうなだれてしまった。

気分を変えるために、私は一言断つてから厨房へ行き、お茶を入れる。

執務室に戻つて二人でゆっくりとお茶を啜り、気分を入れ換えるように努める。

本来の役割である報告をする事ができず、こうして景興さんの仕事を手伝っているには無論訳がある。

陶州牧様が体調を崩して寝込んでいるらしいのだ。らしい、というのは私も面会できずにいるため、話を伝え聞いたに過ぎないから。これが数日程度だったら問題無いのだが、それが一ヶ月も続くのなら重い病に罹患しているのではないかと噂も流れ出す。

病を得ているとするならば、どの程度悪いのかを知りたいのだが、どうにもその辺りの情報が流れてこない。おそらく、州牧様に近い従事史達は知っているのだろうが嚴重に箝口令が敷かれているのだろう。景興さんもその辺りの話を振った時に言葉を濁していたし。

ただ、それにもそろそろ限界が近づいているのだろう。集中しきれ

ていないのか、書類の流れが滞り始めている事からも下級官吏達が不安に思っている事が窺える。

「とは言っても、そろそろ動くかなー」

「ん？ 子方君何か言った？」

小さくぼそつと呟いた私の発言を聞き漏らさなかつようで、景興さんがそう聞き返してきた。

「いえ。私は本当だったらもう琅邪国に戻っているはずなんですよ」

「あー。確かに報告だけだったら数日間かけて、っていうのは普通は無いよね。もう十日くらい？」

「ですね。新規の提案も含んでいれば、それくらいかかる事もあります。今回はそうではなかったのです。まあ、そんな感じなわけですし、大体戻ると思われる日付をあらかじめ伝えていたわけですよ」

「それはそうだよ。子方君、今は県長さんだし」

「ええ。なので到着の連絡を入れた後、音沙汰が無くなっている現状はあまり好ましくありません」

現在の□の状況について、私は特に手紙等で琅邪国へ伝えてはいない。

下級官吏達が騒ぎ出しているため、彼らの郷里には噂が広まりだしているかもしれないが、それと同じように県長が騒ぎだすのは流石にまずい。発言権の違いから噂の信憑性が上がってしまうし、何より万が一にも徐州外に情報が漏洩した時がやばすぎる。意図せずとも、流言を撒き散らすだけで罪に問われる可能性も無いわけではないし。

それに、わざわざ伝えなくても嗅ぎ付けて来そうな人がいるし、あえて伝えなくて良いだろうという計算も有った。

「うーん。もうしばらく待って、面会が叶わなさそうだったら一回戻る？」

「いえ、おそらくその前に動くはずなので」

「？ 動くって誰が？」

「二人いるでしょう？ 徐州で結構高い地位に就いているにも関わらず、自分の目を見て、事態を把握しないと気が済まない人が」

「ええ、と」

景興さんの口元が微妙に引きつっている。誰の事を指し示しているか理解したのだろうか。

「しかも今回の場合、私に報告させるために送り出しているから、その結果と追加指示を心待ちにしている可能性が強いです。そろそろ乗り込んできて、嵐のように引つ掻き回す可能性が高いですよ」

それを聞いた景興さんは、しばらく頭を抱え込んで、あー、だの、うー、だのと唸っていたが、悩んでいても解決しないと思ったのか顔を上げて私へこう言ってきた。

「子方君。相談にのって」

私はその言葉に頷きで答えた。放っておくと、ろくでもない事態を巻き起こしかねないし。

「さーて、別駕従事史を引つ捕らえようか！ 事情を色々と問いたださなくてはいけないしね！」

州府に乗り込んできて開口一番、あり得ないほどに物騒な事を叫ぶ女性に州府の官吏は一斉にドン引きしていた。

そりゃそうだろうよ。普通にクーデター起こそうとしているようにしか聞こえない。

「趙国相。お待ちください」

私は官吏達の中から一歩進み出て、乗り込んできた女性へ声をかけた。

女性の名前は、趙昱、字が元達。

こんな物騒極まりない台詞を口にはしているが、陶州牧の股肱の臣と言って良い人物だ。

史実においても陶謙に見出だされ、別駕従事史を務めている。王朗と共に、徐州牧となった陶謙の勢力拡大に努めた人物だ。

言わば糜竺や孫乾達、劉備の徐州継承を進言した者達の先輩に当たるのだ。

陶謙が煙たがって遠ざけるために広陵太守に封じたという逸話も残るが、本当に遠ざけたいのならば、重職に就けずに閑職に追いやる

だろう。

会稽太守についた王朗と共に、南の抑えとして片腕二人を派遣したと考えられる。

そして、その後に陶謙の凋落ちようらくは始まるのだ。二人の補佐が大きかったのでは無いかと想像できる。というより、陳珪はともかく糜竺と孫乾じや戦略を語る事できなかつたのが原因じゃないかと思わないでもない。泰山に侵攻して曹操に喧嘩売りに行くとか、後年の曹操の実績を知る人間からすれば、全力で止めたくなる行動だ。

「おお、子方か。とりあえず、お前も後で締め上げるけど先に別駕だ。大人しく待っていてくれ」

「その台詞を聞いて、大人しく待っていたと思う気が欠片でも思い浮かぶと思います?」

「思わないね! けど釘を刺しておけば、逃げた後に捕まえてそれに関しても責める事ができるじゃないか」

「さ、最悪だ……」

さて、この世界の趙昱がどのような人物かという点、一言で言えば女傑だ。良く言えば豪快。悪く言えば大雑把。にも関わらず、不思議と大きな失敗をする事が無い。

さらに、陶州牧の臣下の中では結構な古株であり、州牧となる前から仕えている人物となる。

戦では活躍するが宮中政治が不得手だった州牧様の代わりに、最大限功を主張して恩賞を少しでも多く分捕って来るのが主な役割だったりする。

彼女の存在が無くては、陶謙様は州牧にはなれなかつただろうと多くの人間が噂している。

さて、彼女は少し異色の経歴を持っている。陶州牧の情婦から官吏として取立てられている。

情事の後、閨ねやにおいて州牧様が愚痴の様に話した政治の内容へ、的確な助言をし続けた事で州牧様の信頼を得た。

元々は洛陽で名が売れた高級娼婦だったらしい。

相手をしていた朝廷の高官達が、情事の後になんか口で語った

情報を覚え、独自に政治について学んでいったらしい。

もちろん、彼女が重用されるようになった事で、陶謙様を見限って去っていった者達も多い。しかし、彼女の活躍により、陶謙様の勢力はそれ以上に大きくなっていった。そこまで来ると、彼女の出自を表だつてとやかく言う者はほとんど居なくなつた。まさに、自身の才覚のみで居場所を作り上げたと言える。

こんな経歴だけあつて、徐州内でも野心のある表裏定か成らぬ者と言われている。しかし、本人は勢力を強くし、陶謙様の発言力を高める事にしか興味を持っていない。自分を重用してくれた陶謙様のためにと見えない事はないが、本心はどうなのだろうか。陶謙様の出世に伴つて、自分の発言力が上がっていくのを楽しんでいるようにも見えるんだけど。

まあひとまずは関係ないし、脳裏から追い出す事にする。

「まあ、とりあえずお待ちを。　とりあえず、現状について説明しますのでこちらへ。　別駕従事史もそちらに」

「……ふむ。　それじゃあさうしようか」

私の言葉に何かを感じたのか、大人しく従う意思を見せてくれた。私はそのまま、国相様を伴い目的地へ歩き始める。

目的地である州牧様の居室に近づくにつれ、人影がまばらになつていく。とうとう誰の姿も見えなくなつた時に、先ほどとは打つて変わつて落ち着き払つた国相様が口を開いた。

「悪いのか？」

「血を吐いたさうです」

呟くようにそう口にした国相様へ、端的にそう伝える。

やはり知っていたか、と心中でつぶやく。

おそらく物騒な事を口にしたのも、半分は最も早く州牧様の元へ案内されるようにという計算で動いたのだろう。あんな発言をされたからには、嫌でも州牧様や近い位置に侍る重臣達のの耳に入る事になるので、呼び出される事になるだろうし。

釈明は呼び出された後に州牧様の居る前で行えば良い。下級官吏達にどう思われようとも、州牧様の信頼が揺るぐ事が無ければ問題な

いという判断だろう。計算高いというべきか、抜け目がないと言うべきか。

そこまで考えた後に、補足するように私は言葉を付け足した。

「幸い腕の良い五斗米道の医師が徐州に滞在していましたので、先日診てもらいました。そのおかげか、今は小康状態を保っています。

急激に悪化する事は無いだろうとの事です」

「そうか。それは何よりだ。褒美は？」

「渡そうとしましたが、固辞されました。代わりに私が知る病の対策について、意見を交換する場を設けました」

「ふん。お前の言う青物や雑穀を多く食えつて奴か。確かに実践するようになって体の調子は良いが、美味しい物を死ぬまで食い続ける方がよほど幸福だと思いがな」

「まあ、それも生き方の一つではありますが、人を生かす事を生業にする医者にとつては、否定するべき考え方なのでは？ 積極的に耳を傾けてくれましたよ」

教えたのは、生活習慣病への対策としての食生活の見直し、老年になっても体を定期的に動かすようにラジオ体操と太極拳をこちやまざにしたような運動方法。それから、南部で時々見られる脚気かっけへの食療法などだ。色々と有意義な時間を過ごす事ができた。

ちなみに、五斗米道は「ゴツトヴェイドオー!!」と叫ぶように口にするのが正式ルールらしい。なんぞそれ。

「ただ根本の原因は、老衰による体力の低下にあるそうなので、これからもたびたびこういう事は起きるのではないかとの事です」

こればかりはどうしようもない。体の老化、それに伴う免疫力の低下は誰にでも起こる事だ。運動や食生活などである程度抑制する事はできるが、この時代にそんな考えがあるとは思えない。

とりあえず血を吐いたとの事だが、咯血か吐血かまでは聞き出せなかった。とりあえず、咯血だった場合には労咳の可能性を疑えるので、対処療法として滋養のある鶏肉や卵を多目に摂ってもらうつもりだが。

……蔓延したらやばいなあ。この時代だと、普通に不治の病だぞ。

その後は互いに無言で州牧様の居室へと向かった。

第四十二話 Empty letter — 新たな動乱—

趙国相と共に州牧様の部屋へ入ると、中には三人の人物が居た。

寝台に横になつている人物は、徐州牧、陶謙恭祖様。五斗米道の導師に診てもらつてから、大分顔色が良くなつている。少しやつれているのは、寝込んでいたからであろう。

その横に侍はべっている長身の女性が別駕従事史、陳羣長文殿。

史実では魏に仕えて九品官人法を制定し、隋の時代に科挙が行われるまでの間の人材登用の基礎を作り上げた。超優秀な人事のプロフェッショナルと言える人物だ。曹操に推挙した人物も悉くこまごま当たりだつたらしいなあ。

この世界では、西涼の乱の頃に豫州から避難して徐州に来ていた事を知り、迷わず州牧様へ登用を勧めた。彼女は元々が清流派の名家の生まれであり、孔融殿から評価をされていたため名は広く知られていたのも、あまり徐州内で反対が起きなかつたのには正直助かつた。

その隣に立つ背の低い小柄な少女は、徐州牧付の主簿、魯肅子敬殿。演義においては劉備陣営と孫権陣営の間で板挟みとなる、人が善くてどこか頼りない人物として描かれているが、正史においてはまったく異なる。

劉備と協調して曹操に当たろうとしていたのは事実であるが、あわよくば荊州全土を併合しようとする劉備を掣肘し続けた。

さらに荊州で劉備軍と軍事的緊張が起きると、関羽と直接会談して荊州の三郡のうち二郡を返還させる事に成功している。

軍事手腕においても不足はなく、赤壁では孫権へ降伏を戒めるように説いており、先見の明が有る人物であつた事も伺える。

三国志屈指のオールラウンダーとも言つて良い、周瑜無き後の呉の第一人者なのだ。

演義でああいう役回りだったのは、孫呉の家臣においては珍しく劉備に温かい態度で接している事と、諸葛亮を引き立てるためだったと

思うのは邪推だろうか。

この世界の彼女は史実どおり、郷里において狂児と呼ばれるほどに色々とやらかしていたのだが、話を聞いた長文さんが『面白い』と主簿に抜擢したのだ。

一本釣りで魯肅とか、見る目が凄いわ人事部長。

そして子敬殿、すまん。話に聞く限り、貴女が郷里でやってきた事は明らかに私が行った農法とかの模倣だよな。今度しつかりと教える。

しかし、錚々たるメンバーだ。書類の処理を終えて、自宅で思う存分眠っている景興さんも含めれば、内政において隙がまったくない面子といえる。正直、少し戦く。徐州は本当に文官は豊富だよなあ。

「ご無沙汰しております、恭祖様。お加減が悪いとお伺いしましたが？」

声がかかる前に平伏して、趙国相がそう尋ねる。借りてきた猫のように大人しく、丁寧に州牧様へ接する彼女の姿と先ほどの姿とのギャップに少し呆れる。

「うむ。少し体の調子を崩していたが、今は落ち着いておる。子方の連れてきた医師の治療が効いたようだ」

州牧様は頷きながら、短く言葉をそう返す。

あのテンションにはついてはいけなかったが、彼は名に恥じぬ名医だったのだろう。色々とツツコミどころの多い掛け声や、暑苦しい性格に目を瞑る必要があるが。

景興さんに相談されて、迷わず彼に治療を任せるべきだと進言したのは間違いではなかったのだろう。

暑苦しい性格だったが。

「して、元達。お主がここに来たのは、いつまでも帰ってこない子方を連れ帰るためか？」

「あー、州牧様。それでは私が遊んでいただけのよう……」

「御意に。第一の目的はそれとなります」

私の抗議はしれつと無視して、趙国相がそう答える。

(……ぞんざいな扱いだなあ。)

そう心中で苦笑している間にも、お二人の間で会話は続く。

「ふむ、第一がそれとなると、他にも理由がある？」

「御意にございます」

私が☒へ移動してから、今までの間に何か発生したという事だろうか？私が出発するまでの間に、特に国相様から言付かった事は無かったわけだし。

「古い知り合いの伝手で、洛陽についての続報が手に入りました」

その言葉を聞くと、私を含め室内の人間すべての気配が鋭くなった。

それもそうだろう。現在洛陽は軍事的緊張状態にある。戒厳令に近いと言って良いだろう。

事の始まりは先帝の崩御から。先帝が後継者を決めないままお隠れになられた事により、後継者争いが勃発したのだ。

何皇后の実子である弁皇女と、既に身罷られている王美人の娘である協皇女の二人が次代の帝となるために争っているわけだ。うん、もう性別については何も言うまい。

話に聞くに、彼女達は非常に仲の良い姉妹だったそうなのだが、宦官と外戚の権力争いに巻き込まれてしまったらしい。

何氏の血族である弁皇女の擁立を何進大將軍の派閥が狙い、それに對抗するように宦官達は協皇女を帝位に付けようとした。ここまでは、今までに洛陽から流れてきた噂となる。

これは三国志であっても同様の動きであり、あまり大きな驚きは無い。

「報告せよ」

「はっ。先帝陛下が死に臨む前に一度だけ目覚められ、上軍校尉である蹇碩へ協皇女殿下を後継とするように遺詔を与えられたとの事です。ですが、おそらくこれは捏造でしょう」

「ああ。そんなに都合よく、蹇碩とその派閥の者しか居ない時に陛下が目を覚ます事はあるまいよ。まして、自分が後ろ楯となっている皇女殿下を立てるなど、あまりにも出来すぎているだろう」

ぐうの音も出ないほどの正論だ。三文芝居というべきだろう。

私は、何進の動きについて確認するために質問をした。

「当然、大將軍閣下は従うわけないですよね？」

「当然だ。一触即発といったところらしい。しかも、大將軍閣下の元に袁家の者が付き、毎日閣下に兵を起こすべしと勧めていたらしい」

「火に油を注いでいますね……」

国相様の答えに、長文さんは乾いた笑いを浮かべながらそう言った。うん。確かに火事場に油を注いでいるというのが一番的確な表現だろう。

火薬庫で火遊びをしている、でも表現としては良さそうか。……三国志演義のように、火薬つてこの世界にあるのかな？

そんなどうでも良い事を考えていた私を置いてきぼりに、さらに質問が長文殿から飛ぶ。

「いたらしい、と過去形で語るという事は実際に何かあったという事でしょうか？」

「四方八方まで火の粉が飛び散る勢いでな。どうやら、閣下達が兵を起こそうとする動きを掴んだ宦官達が、先手を打って閣下を宮廷に呼び寄せたらしい」

「……まさか、それに応じたのですか？」

その返答を聞いて呆れながらも戦く長文殿。

それを見て、嫌そうに国相様は頷いた。

「そのまさかだ。応じた結果、あっさり十常侍に殺されたとの事だ」

「何という軽率さ……」

呆れきった、という表情を浮かべる長文殿に対して、私も同意する。ただし、これは正しい歴史の流れである。

史実ではこの後、袁紹が仇討ちを宣言して十常侍達宦官の殲滅戦を展開。どきくきに紛れて逃げ出そうとした十常侍の張讓と段珪が二人の皇子を連れ出して洛陽を脱出。しかし逃げ切れないと判断して、皇子達を残して自害するに至ったはずだ。

その残された皇子達を董卓が保護した後、董卓の暴虐な振る舞いか

ら反董卓連合へ繋がる。

国相様の話を聞く限り、大体の流れは同じようだ。皇女と皇子の性別の違いが一番大きく、連れ出そうとした十常侍の名前が多少異なるくらいである。

「……というのが伝わってきた話です。ひとまずは董某なにかし殿が殿下達を保護し、弁皇女を即位させた事により、洛陽の混乱に歯止めがかかったと言ったところででしょうか」

「ふむ。……子方。お主、董家配下の者と繋がりを持っていたな？ 今話を聞いて補足などはあるか？」

「何点か。まずは董某殿の名ですが、『卓』かと思われませぬ。『先年兄の董擢殿を亡くし、太守の座をそのまま継いだ』と彼女の腹心から文で伝わってきております」

当時は県長に就任してからようやくやく仕事に慣れ始めた頃だったので、董擢殿の弔問に行く事ができなかった。

代わりに、あの辺りが故郷である伯侯を代理として派遣して弔意の使者とした。

董卓殿と会話こそできなかったが、目にした雰囲気からは暴虐を働かきそうな精神の歪みは見受けられなかったそうだ。

藍里や伯約殿の評価と一致するため、おそらくこの世界の董卓は善性の人物なのだろうと予想できる。

「太守としての評判はどうなのでしょう？」

続いて、子敬殿からそう質問をされた。

「概ね上々かと。もしかしたら、民政の手腕は兄である董擢殿より上かもしれない。軍事の取りまとめに関しては先ほど申し上げました腹心である、賈文和殿が担当しているようです。黄巾達を相手に被害を出さずに功績を上げている事から、そちらの不安も無いようです」

「ふむ、参謀は問題無いと。ならば将の質はどうだ？」

「少なくとも一人、姜伯約という良将がいる事を知っています。前線で戦える武芸の腕を持ちますし、判断能力にも信用をおけるかと。

仮に手綱を放して自由にさせたとしても、ある程度は自身の才覚で

戦場を駆け回る事ができるでしょう」

子敬殿の質問から、矢継ぎ早に続けられた州牧様の質問にそう答える。

しかし、賈馱が後方に控えて作戦を練り、姜維が前線指揮官としてそれを実行する、か。

……随分強いな、それ。

「ふむ。飛躍の条件は十分に整っていると見るか？」

州牧様からの質問に、私は首を傾げながら疑問符付きの答えを返した。

「地方長官としてならば、でしょうか。中央の高官達との交渉が満足にできるかは分かりません。宮廷で政治工作をするには経験が足りないのでは？ 民政や軍政と宮廷政治はまったく質が異なりますので」

「ああ、確かにな。とりあえず高官に媚びて手のひらで転がしておけば済むのと違って、領地経営はひたすら面倒だ」

「国相様の戯れ言は無視して話を続けますが、彼女達に宮廷内の人脈について伝てがあるかも分かりません。ある程度は甘い汁を吸おうと近寄ってくる輩はいるでしょうが、宦官達により不遇をかこわざるを得なかった清流派官吏達が認めようとしないうでしよう」

「ようやく日の目を見る事ができ、我が世の春が訪れると思っていたところで、横から主導権を奪われたわけですからね。妬心により素直に従う事はないでしょう」

長文殿の言うとおり、清流派官吏達は自分達が辣腕を振るう事を夢見ていたはずだ。その機会を横から奪われて黙っているとは思えない。

家族が清流派に属していた長文殿のその意見は、かなり重い意味を持つ。

「それに、袁紹殿も加えた方が良いでしょうか？」

「ですね。彼女には、大將軍閣下の仇討ちをやったのけたのは自分だという自負があるでしょう。利害関係が一致する以上、清流派官吏と結び付く可能性が高いです」

子敬殿の言葉に、私は頷きを返す。

ただし史実において、清流派官吏達と反董卓連合の首魁達が連携した描写は非常に少ない。

せいぜい清流派の密談の時に、曹操が董卓暗殺を名乗り出た事くらいか？洛陽内にいた官吏達が、内から連合軍へ情報を漏らすなどは特にしていなかった記憶がある。

司馬朗が官位を返して田舎に帰ったり、荀攸が投獄されたりした事を踏まえると、骨のある人間は軒並み宮廷から去り、董卓に阿諛追従するか、面従腹背の姿勢を取る者が多かったのではないだろうか。董卓が決定的な隙を見せるまでは、危ない橋を渡らなかつたのかもしれない。

そういえば、面従腹背といえは王允と貂蟬はこの世界にいるのだろうか？

絶世の美貌を持つ傾国の美女として名高い貂蟬は、少し見てみたい気がする。何となく、派手な出で立ちをした女性を思い浮かべるのだが。

まあ、それは今は置いておくでしょう。

「洛陽で机を並べていた元龍が袁紹殿をこう評していました。『羨望の目で見られる事や、他者からの喝采を好む虚栄心の強い性格』と」その後には『しかし、目にする者を惹き付ける英雄性を持ち合わせる』と言ってもいた。袁紹殿に人の意見を謙虚に受け入れる器量が備わり、的確な助言を行える者を側におけば、斉の桓公となりうるかもしれない。

袁紹は三国志におけるキーパーソンの一人だ。官渡で曹操に破れるまでは、河北に一大勢力を築き上げていた。劉備が台頭する前は、曹操最大の好敵手だったと言っても良い。家柄の良さと豊富な財力を背景に、多くの優秀な人材が彼の下に集った。

そういった人物であるならば、この世界でも英雄性を持ち合わせていてもおかしくは無いか。

『虚栄心が強い』か

「御意に。帝を宦官達より救いだし、政を正道に返す。それを行

えれば、大いに人々から喝采を浴びる事ができたでしょうね」

「それを妨げられた、と本気で考えているとすると董卓殿を逆恨みする可能性は大いにあるな」

そう言つて、州牧様は溜め息を一つ吐いた。

まだまだ洛陽の情勢が落ち着きそうもないと理解したからだろう。

「それと、おそらくその話に繋がるであろう情報が一つ」

「ふむ。申せ」

「繋がるであろうつて、確定じゃないのか？」

横から飛んできた国相様からの言葉に、私は困った顔を作りながら言葉を返した。

「それが、少し特殊でして。本当に関係があるかは私にも分からな
いんです。今回、国相様から洛陽の情勢を事細かにお話し頂けたた
め、『もしかしてこれも繋がるのか?』という感じなんです」

ちよつと州牧様のお耳に入れておこう、というレベルの話だったの
だが、折角なのでここで披露しておく事にする。

「私が莒を出る直前に文和殿から文が届きました。それがこれ
です」

私は懐から、私宛の私信を取り出し、それを州牧様へお渡しした。

「……おい、子方。何も書かれていないのだが」

文を手に取り、中を確認した州牧様から声がかかる。確かに私が渡
したのは白紙だ。しかし、別に中身を入れ換えたわけではない。

「最初から、白紙のまま送られてきたのです」

「賈文和が中身を入れ違えただけではないのか？」

訝しげに口にした国相様の言葉に私はかぶりを振った。

「その可能性も考えましたが、後で否定しました。これが届いてか
ら数日後に、伯約殿からも手紙が届いたのですが、そちらも白紙だっ
たんです」

「……一度だけなら偶然かもしれないが、二度続けば故意という事
ですか」

「しかも同じ勢力に属する、別々の人物がそれぞれ送ってきたと。
それは間違いなく故意でしょうね」

子敬殿と長文殿がそれぞれ口にする。

私がわざとだと判断したのも同様の理由だ。

ついでに言えば、別の日に二通手紙が届くというのも少しおかしい。何故同じ城で寝泊まりしている人間が宛先が同じ手紙をまとめないで、わざわざ別々に出したのか。口も利かないほどに嫌いあつているのならともかく、顔を合わせる機会も多いのだからその時に出す手紙が無いか等を尋ねるだろう。二十一世紀の日本の様に郵便制度が充実しているならともかく、この時代では手紙を送るにも一苦労なのだから。

あえて、異常性を演出するためにこういう届け方をしたと思うのは邪推だろうか？

「しかし、これでは伝えたかった内容が何かまるで分からんな」

「確かにそうですね。ですが『私に何かを伝えようとした』というのは伝わります。あと、仮に私の手元に届かずに他人に見られたとしても、用件がまるで伝わりません。見られてはまずい事を書かざるを得なかったような立場にあるのか、そう推測せずにはいられます。まあ私に対しては、『自分で察しろ！』という事ではないかと」

「ふむ。なかなか愉快な交遊関係を築いているようだな」

どこか感心したようにそう口にする州牧様に私は苦笑する。

その後、不意に真面目な表情を作り、言葉を続ける。

「しかし、今の国相様の話で俄然重要度が上がりました。洛陽の動乱の中心人物になりそうな董卓殿に仕える二人からの手紙なわけですし、意味も無くこんな物を送らないでしょう」

「ふむ…。ならば、真偽を確かめるために洛陽に向かうか？」

州牧様の質問に首肯する。

「御意に。しかし、今すぐには動くつもりはございません。袁紹

殿が動くには、董卓殿と力の差が有りすぎます。ならば……」

「その差を埋めるために、徒党を組もうとするか。ふん、道理ではあるな。それに合流するつもりか？」

「お許しを頂けるならば。しかし、下手をすれば国を割つての大乱となりかねませんので、その連合に参加するためには一県長での参加

は難しいでしょう。なので、州牧様、国相様のどちらかがお止めになるのであれば、私も留まろうと思います。あ、ちなみに董卓殿に与するというのは下策です。まず徐州を叩いて後顧の憂いを無くした上で、洛陽へ進撃するでしょうし。出征させて頂くにしても、徐州を危機に巻き込む可能性が低い方を選ぶつもりです」

流星に、私の我儘で州の軍事行動を決める訳にはいかない。お二人が止めるようならば、残念であるが反董卓連合の参加を見送るつもりだ。

長文殿と子敬殿も議論の流れを見守るのに徹するつもりのようなのだ。州牧様と国相様はしばらく考えていたようだが、顔を上げて私に尋ねてきた。

「子方。その連合に参加した場合と参加しなかった場合の利点と問題を述べて」

「参加した利点としては、仮に連合が失敗に終わったとしても、一緒に参加した勢力とある程度協調的に接する事ができるようになるかと。今後の外交において、有利になると考えられます。……ただし、致命的なまでに仲違いをしてしまった場合はその限りではございませんが」

「では参加した場合の問題は？」

「食料や兵を消耗する事です。徐州の防衛のために集めた物を使用して、それに見合う成果を上げられるとは限りません。ついでに、しばらく領地を留守にする可能性もありますので、決裁が滞るでしょう」

つらつらと思い付く事を口にしていく。

それ以外にも、兵が戦死した場合の補償金（遺族年金）の支払いも発生するし、州の財務状況が悪化する可能性が考えられる。

戦争は酷く金がかかる物なのだ。

「逆に参加しなかった場合の利点は、これらの資源を蓄えられる事でしょう。それだけの物資があれば、新しい開拓村の一つや二つ、簡単に作る事ができるでしょうね」

そう話したら、長文殿と子敬殿の目が無言のまま煌めいた。文官と

しては、そちらの方に資源を使いたいだろうし当然だろう。私として、文和殿と伯約殿の事が無ければそちらに賛成したい。

「問題は、顔を合わせる機会を逸する事で、外交で遅れを取る可能性でしようか。万が一、徐州に接する領地すべてが、その連合で徐州を攻める密約をした場合に止める手立てが無くなります。まあ、これは大分極端な例ですが」

史実における徐州がまさにこの状態だった。

反董卓連合と一緒に戦った事で、曹操と袁紹は結び付きを強めて、それぞれの敵と戦い、飲み込んでいったのだ。徐州は外交的に孤立し、周辺はほぼすべてが敵となった。外交戦で敗北すると、四正面作戦とか平気でやる事になるよね……。

外交戦で大敗北を喫しながら勝ち残る例もあるにはあるが、歴史的に見て稀だ。

やってのけたのは、フリードリヒ大帝とか、始皇帝とか、偉人しかいやしねえ。

大雑把ではあるが、考えられる事はこのくらいだろうか。

次の瞬間、あっさりと言と国相様から出征に賛成する声が響いた。

「ならば、出征するべきでしょう。兵と金で他の勢力の歓心を買えるのならば安い物でしょう。子方が言ったような、外交で孤立する方がまずいですし。あ、恭祖様は動かずにここに留まってください。政務もご無理をなさらない程度に。病から快復したばかりなのですから。その分、そこに居る二人と景興が死ぬ気で頑張るでしょう」

「！」

二人は思いもしない事を聞いたとばかりに顔に驚愕を張り付けた。

それに気がつかず、州牧様は渋々と言った感じに頷いた。

「……倒れて心配をかけた以上は何も言えぬか。総大将は元達、お主が務める事になるだろうが構わぬか」

「御意に。ならば、直接采配を振るうのは子方ですな。琅邪国の官吏と限定すれば、かなり戦上手ですし、何より行く理由も一つ多く抱えています。粉骨碎身戦うでしょう。なーに、死んでも骨は

拾ってやるよ」

その国相様の言葉を聞いて、長文殿と子敬殿から、『お前何とかしろ』という必死な視線が飛んでくるが無視。

残念ながら、趙元達という人物と付き合いの長い私には分かる。

ここまで具体的に話を出してきた以上、この人はもう意見を翻すつもりは欠片もないはず。言うだけ無駄、という奴だ。

「国相様が出られるという事は、面子は琅邪国からかき集めるおつもりですか？」

「そこも含めてお前が決めて良い。お前の方が、人の持つ軍事の才能への嗅覚が良いだろうしな」

「御意に」

今度は、『私を連れていけ』という必死な視線を二人から感じるが、再び無視。大丈夫大丈夫、死にはしないって。というより、州牧様付きの官吏をこの状態で動かせるわけないでしょ。

（では適当に知り合いに声をかけて行く事にしましょうかね。 戦闘

要員以外にも外交役を務められる人物を連れていった方が良いかな）

頭の中で知り合いの顔を思い浮かべながら、恨めしそうな顔をしつつも必死にアピールしてくる二人を華麗に無視するのだった。

第四十三話 In my defence — 金城
鉄壁 —

私達の予想したとおり、袁紹殿は曹操殿と共同で反董卓連合を立ち上げた。その檄文に応えた諸侯たちは、一様に洛陽へ向けて進軍を開始した。

兗案が曹操でも、橋瑁の公文書偽造でも事に少し驚いたのは完全に余談だろう。

何はともあれ、私達徐州勢も洛陽へ向かう事になったのだが、少し出発が遅れる事となった。

州牧様が倒れた事で動揺した徐州の官吏達を落ち着けるため、州牧様が健在であると各郡に通達を出して動揺が抑えられた事を確認できるまでは身動きが取れなかったからだ。

まあ兵が少なくなった途端、州府に向けて全力前進してくる粗忽者がいないとも限らないので、可能な限り徐州の情勢を安定させるのは必須だろう。

あまり疑いすぎるとも良くないのだろうが、董卓殿達が後方攪乱を行う可能性が捨てきれないというのものもある。足元に火を点けて身動きを取れなくするのは、敵に援軍を許さないための常套戦術である。三国志において、最も曹操に苦渋を味あわせたと言っても過言ではない賈文和が相手となるのだ。友人を疑う事になるわけだが、謀略を仕掛けられることを最大限警戒するべきだ。

彼女は白紙の手紙を送る事で私に何かを伝えようとはしているようだが、一時的にせよ敵対する事には変わりはないのだから、徐州は荒らされないように打てる手は打っておく。あの手紙自体が罠の可能性は流石に無いとは思いたいところではあるけど……。

それと並行して、私は徐州から洛陽へ向かうメンバーを選定した。

何だかんだで、選んだ顔ぶれは私の知り合いばかりになった。顔見知りの方が頼みやすいのだから仕方がないと思っっている。

趙昱 国相様を筆頭に、補佐として県長である私糜芳と謙徐盛の二人。その下には太史慈羊祜、諸葛瑾步騭、子義步練師、天明に藍里、悠と遥の兄妹。うむ、見事に知り合いばかりだ。

何が起こるか分からない以上、ある程度の対応能力を持つ人物以外は選定できなかつたという裴景がある。

あとは、人格が保証できる事。連合軍に合流するまでの間に、立ち寄った場所で略奪なんかの問題を起こさないような性格も選考基準に入れた。兵が独断で行うなら首を落とすだけだが、率いる将が一緒になってやるとなると問題が大きくなる。個人的危険人物筆頭は窄融。偏見であるのは自覚しているが。

本当は真臧霸も連れて行きたいのだが、あいつには治安維持のために琅邪国内を走り回ってもらう必要があつたため、琅邪国に残ってもらう事にした。

あいつの今の地位は琅邪国の騎都尉。郡丞を経験した事のある子義を除けば、私達の周りで一番の出世頭だったりする。いやー、戦場に出る度、戦功を稼ぐ稼ぐ。西涼の戦いで朝廷でも覚えがめでたくなつたため、割ととん拍子で出世をしている。まあ、それを見て謙が少し焦つてもいるようだが。

莒県は丞である空孫乾さんが私の代理を務め、伯侯杜畿と子布張昭、子綱張紘の三人が補佐に回る。いずれもよほどの事が無い限りは問題を解決できる事だろう。

折衝が重要になる他勢力との連合であるから、空さんを連れて行くか最後まで迷つた。涉外に力を発揮してくれる人だから、交渉が多く発生する事が見込まれる今回の様なケースで手伝ってもらえれば、色々と助かる部分も多かつただろう。しかし、莒県の県長と県尉が居なくなる上に、丞まで不在となるのはまずいと判断した。軍事が主な目的となるので、戦闘指揮ができない空さんを連れて行くのをためらつたというのも勿論ある。

悠と遥の兄妹は、漢瑜陳珪様の差し金で同行する事になつた。元龍陳登が病み上がりで動く事ができないので、その代理という事なのだろう。

軍事にも他勢力との間の調整にも力を発揮してくれるであろう。

正直ありがたい。空さんを残していくという判断の決め手となったのも、二人が同行する事が確定したからだ。二人に加えて私と藍里も交渉役に回れば、渉外担当が足りなくなる事は無いだろうと思う。

いざとなれば天明にもお願いする。人見知りの気があるので、嫌がるかもしれないが。

元龍の病に関しては、生魚を食する事を止めさせれば寄生虫に再度感染する事もないだろうし、必ず食材を熱した料理を食わせるように漢瑜様に入れ知恵はしておいた。これで再発しなければ万々歳だ。

くつくつく、覚悟しておけ元龍。こんなところでみすみすと死なせはしない。史実において曹操にも死を惜しまれたその才、徐州のために使い尽くしてもらおう。

姉摩笄さんは自分も連れていけとごねはしなかった。ええ。いつもと違う反応に、何か悪い物を食べたかと問い質してしまい、激怒されましたよ。

どうも空さんと天明が何か吹き込んだ結果、不承不承残る事に同意してくれたようだ。二人に何を言ったのかと問い質しても、二人とも曖昧に笑うばかりで内容は教えてくれなかった。気になる。

そんな愉快な事やらを慌ただしくこなしているうちにあつという間に出発日を迎え、私たちは馬上の人となった。道中においては大きな問題は起きずに、順調に反董卓連合の合流地点へ辿り着く事ができた。

小さい問題ならば、飼い猫を連れてこれずにペットロス気味な遙を天明と二人でなだめたり、調理を失敗した兵士を相手に子義が殺気に向けてビビらせたのを説教したり、兵達の慰安のために持ってきた酒を盗み飲みしていた国相様をしばいたりと色々と発生していたのだが、特筆するような内容でも無いので割愛する。

さらにどうでも良い事ではあるが、遙が飼っている猫は二匹いる。猫を飼いたいと望んだ彼女に、王虎が産んだ子を譲ったのだ。そこまでは良い。大事にしてくれるだろう里親が見つかった事は喜ばしい事だ。

しかし、名前が『大虎』『小虎』であるのは問題があると思うんだ。何とか止めようとしたが押しきられてしまった。大虎が小虎を苛めたりしないよう、二匹の面倒を公平に見るようによく言い含めておいた。よく分からない、という顔をしながらも頷いた遙を信じる事にしよう。

到着してすぐに袁紹殿（徐州宛ての檄文は袁紹殿から届いたので）へ使者を出したところ、これから軍議を開始するので出席するようにとのお達しが来た。

まだ日は暮れていないのだが悠長に軍議を開いていて良いのか、という疑問が頭をよぎるが、まあ突っ込む必要は無いのだろう。遅れてきた私達が到着する時になっても、合流地点に変更が無かった事を考えると、おそらく当初の目論みだったであろう汜水関の早期突破は潰えているだろうし。攻撃部隊も適当なところで切り上げて戻ってきたのだろう。

「それじゃ、挨拶がてら軍議に顔を出してくる事にする。 県長の二人のどちらかは一緒に来い」

「麟。 任せて良いか？」

謙がこちらに役目を振ってこようとしたが、断らせてもらった。

「あー、悪い。 ちよつと戦場を視察しておきたい。 何度か行き来した事があるから地形なんかは頭に入ってはいるけど、何か変わった部分が無いかを確かめておきたい」

「それは仕方ないか。 じゃあ俺が出ます」

特に揉める事なく、すんなりと決まった。 申し訳ないが任せた。

「それじゃ文嚮、ついてきな。 あと一人くらいなら連れてけると思うけど誰か行きたいか？」

「藍里出れば？ 朱里も多分顔を出すだろうし」

「……そうですね。 国相様、同行させて頂きます」

「よし、決まった。 子方は陣地の設営を怠けて、さっさと視察に出ろ。 他は設営で良いな？」

「武芸に自信の無い私が護衛無しとか、扱いが悪すぎる件」

怠ける言うな。 情報収集も十分大事な仕事だ。

さらつと聞き流しそうになったが、護衛無しで偵察して来いって余裕で遭遇戦で討死する未来が予想できるんだが。

「それならいつもどおり、私が護衛に付きます。多少は安心でしよう」

「今回徐州から出征した面子の中では、子義は武勇で最上位に位置するんだが……。お前さんが護衛について駄目なんだったら、他の人間が付いても駄目だろうよ」

太史慈が護衛で付いていれば、呂布クラスが来なければ死ぬ事はないだろう。

ちなみに順番としては、子義>謙>>越えられない壁>>私≡悠>国相様>天明>遥となる。

「じゃあ、設営は悠が指揮を取って。並行して天明は物資の確認。食料だけじゃなくて木材なんかの資材系も忘れないように」

こういう実務部分に関しては国相様よりも私の方が分かっているので、代わりに指示を出していく。

「それから、状況次第ではありますが、もしかしたら面倒な事を提案してもらいかもかもしれません」

「度が過ぎなければ構わないが……。何をするつもりだ？」
「んー。一言で言うのは難しいのですが」

そう前置きした後、私はやろうと考えている事を口にした。絶句する顔が並ぶ中、一人腹を抱えて爆笑している国相様が印象的だった。

・・・

宣言通り私と子義は再び馬上の人となり、主戦場である汜水関前に来た。流石に相手の弓が届く位置までは繰り出さず、射程ギリギリを保ちながらだが。

二人で軽口を叩きながら、ゆっくりと見て回る。

「無事に許可を取る事もできたし、万々歳つてところかな。国相様は面白そうだと判断すると多少の無茶は許してくれるのは楽で良いな」

「ふむ。確かに説明を受ければ有効だというのは分かるのですが、受け入れられないのでは？ 却下を受ける可能性が高そうなのです

が」

「んー。 まあ、そうなる可能性は十分あるね」

確かに嫌がる人間は多そうだよなあ。ただ、現在優勢に戦いを進めている董卓軍が汜水関から打って出てくる可能性はないんだし、色々と揺さぶりとして仕掛けてもぼちは当たるまい。

「まあ、視察の結果次第だね。もしかしたらまったく気にしないでも大丈夫なのかもしれないし」

「それが一番ではありませんね。ただ、先ほどから感じるこの臭いを鑑みるに、どうやら必要となりそうですが」

「そうだよなあ。……だんだんきつくなってくると思うけど、子義は平気？」

「不快には思いますが、問題ありません。何、万の大群に一人で突っ込む事に比べれば何と言う事はありません」

「例えが物騒過ぎる上に、いまいち分かり辛いんだが。というか、万ではなく千なら何とかなるのか？」

「相手次第ではありますが、雑兵相手ならば造作ありませんね」

「……疑うわけじゃないけど、凄まじいな。しかし、声を大にして自らの武芸を誇るの、武将にとっては当然の事なのか？」

「当然でしょう。武をもって身を立てようという者が、妄りに己をみだ貶めるわけにはいかないでしょう」

『何を当たり前の事を言っているんだ』という目で見られる。しかし、武で身を立てられない私としては、それは当たり前前的事では無い。一騎討ちよりも伏兵を使って奇襲する事を好むので、領く事はできない。

しょうがないんだよ。前世で鬼島津の活躍を寝物語に聞いて育ったら、一騎討ちよりも奇襲と伏兵の凄みに魅せられる。

「まあ、それは良いとしてだ。話は変わるけど、陣中の様子をどう見た？」

「……士気が大いに下がっていますね。至るところで兵士同士の諍いが起こっていたように見えました」

武勇自慢をさらっと流された事が不服なのか、こちらを軽く睨み付

けながらも私からの問いかけにそう答えた。真面目だねえ。

「まあ、それが問題だよね。パツと見ただけでも、暗い顔とかイラついた顔とかが大半を占めていたし」

「それもやむを得ないのでは？ 思うような戦いはできておらずに火を見るより明らかな劣勢ですし、攻略の目処も立っていないみたいですよですので」

子義の言葉を受けて、汨水関の方向へ目を向ける。

わざわざ目を凝らさずとも、その威容は目に入ってくる。改めて言う事でもないが、やはり巨大だ。

そして、連合軍の物とおぼしき大量の屍も異様な存在感を放っている。近づかずとも目にできるほどの屍の山、山、山。決して目にしていて気分の良い物では無い。

先ほどから漂ってくるこの腐臭の原因でもある。私達の到着が遅れている事を考慮すると、最初の戦いで出来た死体は軽く半月以上そのまま捨て置かれている事になる。以津真天が群れになつて訪れそうな光景だ。

戦闘狂である子義でも流石に感じる事があつたのか、少し痛ましそうにその光景を見つめていた。

「……これだけ犠牲を払っても、まだ城門どころか最初の堀を越えられていない。軍全体の士気が落ちてもおかしくはないでしょうね」
「詳細を見なくちゃ分からないけど、無策で突っ込んでいるわけではないと思うんだよ。それでもこれだけの被害が出ているんだから、どれだけ堅固な防御をしているんだか。けど、これで提案をする事が確定したね」

城門前には遊撃を目的としていると思われる敵陣があり、さらにその前には空堀が何重にも作られている。

堀を越えようとする敵には城壁から射撃を行つて消耗を強いて、越えてきた相手は遊撃部隊で蹴散らす。単純ではあるけど非常に効果的な防御方法と言えるだろう。堅実、と言い換えても良いかもしれない。

堀で衝車や井蘭車も城門、城壁前に取り付くのが困難だろうし、少

数の兵だけが堀を越えても汜水関内に侵入する事が困難だ。汜水関を越えられるだけの大ききをした梯子はしこを持って堀を越えるのもきついだろうしなあ。

私はそこまで考えた後、汜水関にはためく軍旗を確認する。

『董』の字が一番大きいのは当然だろう。総大将であり、言葉通りの旗印なのだから。それ以外では『華』『張』『賈』『牛』『徐』の旗が見える。

城外に布陣している集団は『姜』の旗を掲げている。

『呂』の旗が無い事を幸運と思うべきか？ それにしたって……金城鉄壁にも程があるだろ。

「軍旗を見るに、董卓軍揃い踏みといったところでしょうか。音に聞く武の極みたる呂奉先殿の旗が見当たらないのが残念ですが、なかなかの顔ぶれと言えますよね。敵方としても、この一戦はそれだけの戦力を揃えるに値すると考えたのでしょうか。堅固な拠点で防衛する強者達。それを如何に打ち破り洛陽まで迫るのか！ ふふ、考えるだけでも心躍り、激しく闘争心が猛ってくるではありませんか！！」

戦鬪狂が吼える声を聞きながら、この陣容が守る汜水関をどうした物かなあ、と心中で溜め息を吐くのがだった。

第四十四話 Invitation To You
r Party — 説教とお誘い —

私と黄里諸葛亮 諸葛均の二人は軍議（という名の公開吊るし上げの場）が終わった後、私達高唐勢の天幕を訪れたお姉ちゃん諸葛瑾に連れられて、徐州勢の陣地を訪れた。というより、有無を言わずに連行された。桃香劉備様は『姉妹水入らずで仲良く過ごしてくれば良いよ』と仰っていたがとんでもない。行われるのは、間違いなく長時間に渡るお説教だ。

お姉ちゃんは徐州、それも琅邪国の勢力に属するため、桃香様をはじめとした高唐勢のみんなから警戒されていたようだった。北海で私達の力を削ぐ事になった原因であるし、冀州での黄巾本隊との戦いに参加できなくなった遠因でもあるからだろう。

その事を丁寧鳳統に説明した雛里ちゃん張飛の意図としては、『それでも、即座に首を落とされなかっただけマシだから、感謝しなくちゃね』という事を伝えて、鈴々ちゃん張飛をはじめとした同輩達の不満や憤懣を削ぐうとする事だったのだろうと思う。完全に逆効果で、羊祜さん及び徐州勢への警戒心を高める事になってしまったようだが。その誤解も事あるごとに解こうとしているのだけど、いまいち上手くいっていない。

しかし、お姉ちゃんは落ち着いた表情で非常に慇懃にみんなへ挨拶をしたので、みんな気を許したようだった。けれども、私と黄里の二人は良く分かっていて、落ち着いた表情の下で、お姉ちゃんが怒りを抱え込んでいる事に……。

思い当たる節は……有りすぎて困る。

諸葛家の誰にも相談せずに、先生の私塾から出奔して心配をかけた事。

義兄薬 芳さんから金銭の援助を受けていながら、徐州に仕えずに桃香様へ仕えた事。

出奔した気まずさから、徐州の実家へ一通も無事を知らせる手紙を送らなかつた事。

礼節を非常に大事にするお姉ちゃんに激怒するには、一つでも十分過ぎる。しかし、しようがないのだ。黄巾の乱という中華の歴史においても未曾有の大反乱が発生し、力の無い人達が蹂躪されている現状に我慢をする事ができなかつたのだから。家族に心配をかけたのは申し訳なかつたが、出奔自体に後悔はしていない。……義兄さんには少しずつでもお金を返していこう。

しかし自分で決めた出奔とはいえ、怒っているお姉ちゃんの姿を見ると気が萎える。徐州勢の陣地に到着するまでの間、屠殺される家畜の気持ちってこういう感じなのかなあ、とぼんやりと思つてしまつた。

そして、お姉ちゃんが使っているという天幕に入るなり正座をする事を命じられて、お説教が始まつた。

ただ、流石に黄里を付き合わせるのには忍びないと思い、お説教が始まる前に妹が同行するに至つた経緯を説明した。

黄里は、私と雛里ちゃんがこつそりと私塾を抜け出したのに気づくなり、先生へ事情を説明して私達を追いかけ、そのまま一緒に出奔をした。もつとも、黄里は先生の許可を受けての事だから、私達とは違うわけだが……。

黄里が私と雛里ちゃんの出奔に付き合う事になつたのは、私達に武の心得がない事と、警戒心が薄かつた事が影響している。姉としては甚だ遺憾ではあるけれども、要は心配して付いて来てくれたのだ。確かに世間知らずな面が多い私達と比べて、元直徐庶ちゃんに撃剣を習い、一緒に町に繰り出す事が多かつた黄里は旅の間非常に頼りになつた。正直、この妹がいなければ旅の途中で野垂れ死ぬか、人攫いの商品となつていただろう。

姉の威厳？そんな物、桃香様達に出会うまでの旅の間に粉々に砕け散りましたよ。雛里ちゃんと二人で、どれだけこの妹に迷惑をかけたと思つているんですか。

そんな理由なので、流石に一緒にお説教を受けさせるのは忍びない。威厳は粉々に砕け散つてはいるが、私が姉である事には変わりがないのだから、何とか庇おうと試みる。

その説明が功を奏したのか、黄里の正座は免除された。しかし無事を知らせなかったのは同罪だから、お説教は一緒に受ける事になった。

ちなみに黄里が知らせなかった理由は、私がもう知らせているかと思っていたとの事だ。……ごめん、情報連携って大事だね。

そのまましばらくお説教が続き、足の感覚が感じられなくなってから大分時間が経過した頃、天幕の外からお姉ちゃんを真名で呼びかける声が聞こえた事で中断する事になった。知らない男性の声だが、お姉ちゃんがそんなに何人もの男の人に真名を教えるとも思えない。

「藍里、入るよ」

そう断りを入れてから入ってきた人は、大人の男性だった。しかし、幼い頃に出会った顔の面影があり、それが誰かはすぐに分かった。「義兄さん。どうかしましたか？」

お姉ちゃんがそう呼びかけた事からも分かるように、私の義理の兄にあたる、麿子方さんなのだろう。最後に会ったのが私達が私塾に入る前なので、随分久しぶりに会う事になる。その時にはまだ随分と幼さが残っていたが、今ではすっかりと大人の男性の姿となっていた。懐かしさや親しみ、その他諸々の感情が溢れ出て来て、思わず彼の顔をまじまじと見つめてしまった。

「ちよつとお仕事かな。もう少し後で手伝って貰えると助かる……って、そつちの二人は朱……はわ子さんと叔起さんか。久しぶりだね」

「はわわ！ 待つてください！ ちよつと待つてください!!」

「お兄ちゃん、お久しぶりです」

「黄里もさらつと流して返事をしないで！ 真名が、私の真名が違いますしゅ！ 何で途中まで正しい真名を言いかけて、言い直しましたか!?! はわわ！ 心底不思議そうにきよとんとした顔をしないでくださいー!」

姿こそ大人になっているが、このすぐに私の事をからかいだす性格は紛れも無く義兄さんだという事を確信してしまった。物語とかで

あるような、感動の再会の場面への期待を返して欲しい。

わざわざ呼びかけた真名を訂正して、不名誉なあだ名で呼びかけてくるのはからかうためだと理解しているが、反応せずにはいられない。このまま放置すると、この不名誉極まりないあだ名が定着しかねない。今後も全力で否定していく所存です。

義兄さんはからからと楽しそうに笑った後、ごめんごめんと謝ってきた。

「まあ冗談はさておき。久しぶり、朱里」

「ええ、お久しぶりです。……何で最初からそう呼んでくれないんですか」

「久しぶりに会った妹とのふれあいの時間を持ちたくて、というのが建前で本音は弄ると楽しいから」

「それ、本音は言う必要ないよね!」

「可愛い義妹に隠し事は良くないって考えたんだ」

「何でも開けっ広げに伝えれば良いって物でも……はわわわ! い、今可愛いって言うてくれましたか?」

「ん? 朱里は可愛いだろ。子豚と同じくらいには」

「比較対照が微妙すぎます! 女の子に対して失礼千万です! せめて子猫とかと比べてください!」

「お前が猫と比べてもらえるところにいるのか!」

「はわわ! 怒られる意味が分からないよ!」

喧々囂々と義兄さんと言い争いを繰り返す。

別に私も義兄さんも本気で罵り合っているわけではない。言わば挨拶がわりにじやれているような物だ。それが分かっているから、お姉ちゃんも黄里も止めないのだろう。やれやれ、と言いたげな様子で私達を眺めているのだろう。

久しぶりではあるが、私をからかおうとする義兄さんとの会話が弾む。何だかんだで、義兄さんとうとうして馬鹿馬鹿しい話をするのが私も好きなのだろう。

ひとしきり言葉の応酬を続けて、二人とも口を動かすのを止めた時、義兄さんは小さく溜め息を一つ吐いて私と、隣に座る黄里の頬に

手を当てて、軽く摘まんだ。痛みを感じないくらいに緩く、力がほとんど込められていない。

「それだけ反応できるようだったら、特に心に傷を負うような目には遭わなかったようだね。二人とも、無事で何より」

「えっと、心配しました?」

「そりゃ、ね。このご時世に武に自信があるわけでもない女の子だけで旅をするとか自殺行為だし」

改めて言われると、相当危険な橋を渡っていたと再認識できる。

心配かけちゃったなあ、と少し凹む。隣では黄里も神妙そうな顔をしている。

「まあ、私はともかく藍里にはきちんと謝っておくようにね。仕事に手がつかないほどに動揺してたんだから」

義兄さんが私達の頬から手を放しながら発したその言葉に、思わずお姉ちゃんの顔をまじまじと見つめてしまう。

少し顔を赤くしてそっぽを向くお姉ちゃんを見ると、改めて申し訳なさが頭をもたげてくる。

「あの、お姉ちゃん。心配かけてごめんなさい」

「ごめんなさい。藍里お姉ちゃん」

黄里と二人でお姉ちゃんへ向けて頭を下げる。

「別に、私が勝手に心配しただけですし、謝罪は無用です。そ、それよりも義兄さん。何かご用があったのでは?」

少し焦ったように話題を変えるお姉ちゃんを見て、可愛いなあ、と少し胸がほっこりする。

こんな事を考えているとバレると、追加でお説教が入りそうですが。

「……ああ、そうだ。別に朱里で遊ぶつもりで来たわけじゃなかった。この後客が来て、宴……というほど派手ではないけど、顔合わせの会を開くつもりなんだ。同席してもらって良い?」

そのお兄ちゃんの言葉には色々と言いたい事はあるけど、今はぐつと我慢する。先程までのように、私(と黄里)へ明確に話しかけてきていたのではなく、お姉ちゃんに向けた言葉へ、私が先に反応するわ

けにはいかない。お説教の時間が延びる。いい加減お腹が鳴りそうだし、高唐勢の陣地へ戻りたい。

……感覚の無くなった足が治らないとそれも叶わないのですが。いい加減足を崩しては駄目なんでしょうか。

「そうだ。朱里達も一緒に来る？」

「はい？」

予想もしていなかったお誘いの言葉に、思わずそう聞き返してしま
う。

「だから、客が来るし同席しない？ 私達は情報が欲しいし、そっちも他勢力との連携に苦労しているなら糸口を作れるでしょ」

「良いの、お兄ちゃん？ 邪魔にならない？」

「構わないよ。ただ、間違いなく酒が出る場になるだろうから、少しは飲まされるかもしれない事は覚悟しておいて」

黄里と義兄さんの会話を聞きながら、私は頭の中で素早くこの宴に出る利害を考える。

色々な可能性を考えはしたが、最終的にそれは願ってもない事だと判断を下す。私達高唐勢は、参加している諸侯の中では領地が最も小さい。それに加えて、税率を抑えている上に民政への投資割合が多い影響で軍備が随分と見劣りする。

勢力が小さいとどうしても侮られてしまうため、私達が単独で他の諸侯と繋ぎを持つ事が難しい。ただでさえ戦況が微妙で、他勢力との協力が不可欠となりそうなのに、伯珪さん以外に信頼できる勢力が無いというのは流石にまずい。

そういう孤立寸前とも言える状態なので、事態を打開できる可能性を秘めた義兄さんの提案は渡りに舟と言える。

義兄さんが主導して客を迎えるというのも大きい。罨や甘言である可能性は極めて低くなるし、現状それなりに名声を得ている義兄さんからの紹介なら、来るというお客さんも私達を無下には扱えないはずだ。

「是非、是非お願いしましゅ！」

「了解。それじゃ藍里、酒とつまみの準備を手伝って。二人もこ

ちらへどうぞ」

「あ、私は桃香様達にご飯要らないって伝えてくるよ。　すぐに戻ってくるね」

「はいよー。　あ、誰か連れてきてもいいけど、洒落の分かる人の方が良いかも。　多分、生真面目な人だとお客さんの性格に耐えられないと思うし」

「……来る相手が物凄く不安になったのですが」

「藍里も会った事あるから大丈夫だって」

「それを聞いて、不安が不穏な感情に変わりそうです」

そんな言葉を口々に話ながらお姉ちゃんと黄里は立ち上がり天幕を出ていきました。

座ったままの私の姿を見て、義兄さんは不思議そうな表情をした。

「どうしたの？　行かないの？」

「あ、足が痺れて動けないんです。　治ったら追いかけますから、先に行っても……あの義兄さん。　何でそんな『良い事を聞いた！』と言いたげな驚き顔の後に、ネズミを見つけた猫のような笑顔を浮かべられると不安になるのですが。　はわわ！　後ろに回り込まないでください！　駄目です、触っては駄目です！　お触り禁止です！　乙女には気軽に手を触れてはいけないという鋼の掟を適用……！　ちよつ、待つ……！　聞いてくださいー!!」

私の大声での制止も空しく、義兄さんは私の痺れた足をこれでもかと弄くり回してくれた。

意味を為さない音の羅列が口から漏れ出て、天幕の外まで響き渡った。

第四十五話 Get This Party St
arted — 悪巧み① —

義兄魔さんに痺れた足を弄り回された後も、私は引き続き徐州勢の天幕にお邪魔している。私を悶絶させてくれた義兄さんの事は一つ知恵を借りる事で許す事にした。

裾スカート姿で暴れた事で乙女の下着を見られる事になったのですから、この条件は大変寛大であると感謝してもらいたい物です、ええ。

そうして知恵を借りた結果、私は頭を悩ませる事になっているのだが今は割愛する。

さて私が足を弄られている頃に一度高唐勢の陣地へ戻っていた諸葛均黄里は、星趙雲さんを連れて戻ってきた。義兄さんが言っていた冗談を笑い飛ばせる人、という条件では一番の適任だろう。雛鳳統里ちゃんでは人見知りしてしまうだろうし。

義兄さんと星さんが顔を合わせた時に一悶着あったわけだが、それも今は割愛しよう。

さて、徐州勢の陣地には義兄さん達が招いた『お客様』、つまり二つの勢力の中心人物達が集っている。呉郡太守である孫堅様。それからそのご息女と配下。涼州牧馬騰様の名代を務めるご息女とその配下の方々だ。

とは言っても、どちらの勢力も当主その人は今私達が居る天幕の中にはいない。涼州からはそもそも馬騰様が出陣されていないし、孫堅様はここではなく別の天幕にいる。

なぜ別の天幕にいるのかというと、孫策さんに向けて『話がまとまらないので酒でも飲んで遊んでおけ』（孫堅様談）と仰られたので、義兄さんが主人（ホスト）役を務める別の天幕が急遽設けられる事になったのだ。孫策さんとしても、面倒な話を聞かずにお酒を飲めるという事で喜んでいた。……孫家はそれで良いのでしょうか？

趙昱様が主人役を務める天幕には、それぞれの勢力の代表者と護衛、参謀が入った。

残りの全員は、義兄さんが主人役を務める天幕にいる。

可能であれば私達も趙昱様の天幕に行きたかったのだが、義兄さんに止められた。勢力が小さく見劣りするというのもあるが、高唐勢の代表者として見なされて、何かしらの盟約を結んだ場合に独断専行を劉備桃香様達に咎められるかもしれないと義兄さんに指摘されたからだ。桃香様や一刀様はともかく、愛紗関羽さん達に誤解された場合にそれを解くのは非常に骨が折れる事が予想できたので、大人しく従う事にした。今日はあくまで顔見せだけにしておき、後日正式に代表者同士で顔を合わせる。その方針に黄里と星さんも賛同したので、私達はこちらの天幕へお邪魔する事になった。

こちらの天幕にいる顔を見渡すと、見事に女性ばかりとなっていた。

孫家からは、この天幕が設けられる事になった原因である孫策さんと、お目付け役を仰せつかった妹である孫権さん。それから護衛役として甘寧さんがこの場にいる。

南部の人間らしい露出度の高い服装で少し小麦色の肌を惜しげもなく晒し、女性の私から見ても健康的な魅力を放っている。

……孫家の姉妹と自分の体を比べた時に、黒い感情が芽生えかけたが黙殺する。これから私も葦あしの様によきによきと成長していくはずだ。羨ましがする必要などない。多分、きつと。

逆に趙昱様の天幕へ入っていったのは、当主である孫堅様。それから、参謀である周瑜さんと護衛として黄蓋様が付いていつている。あのお三方の体つきも……いや、何も言うまい。

西涼勢からは、馬岱さんがこちらの天幕に来ている。当主代理である马超さんと参謀の韓遂さん、護衛の鳳徳さんが趙昱さんの天幕の方だ。

馬岱さんは最初こそ勢力で一人だけしか天幕の中に居ないので少し気まずそうだったが、すぐに慣れたようで既に場に馴染んで義兄さんや孫策さんと話している。物怖じしない性格をしているのだろう。

徐州勢は、義兄さんと羊祜歩練師さんと遥諸葛ちゃん。藍里諸葛お姉瑾ちゃんと太史慈さんは趙昱さんの天幕にいる。

悠さんは他の同僚達と陣地内の見回りの指揮だそうだ。久しぶりに顔を見たかったので少し残念に思う。

「さて、それじゃこっちでも飲み始めるとしようか。分かっていると思うけど、情報や意見の交換以上の話は出来ないからね」

「面倒だし、こっちはこっちで協力して動く事を決めちゃえば良いんじゃないのー?」

早くも机の上に置かれた一番近い瓶から自分の杯にお酒を注いで、口を付け始めている孫策さんは、義兄さんへ向けてそう口にした。

「お前、乾杯する前に……まあ良いか。協力しあう事を前提として動き方を決めても良いけど、仮にあっちの話が物別れになった場合、こっちでどんなに話を進めたとしても覆るだろ。あくまで認識を合わせる事に注力した方が徒労感は少なくて済むし、話を進める必要はないだろ」

「まるで決裂する事が決まっているような言い様だな」

孫策さんへ返答をした義兄さんの言葉に孫権さんが絡んだ。

「決まっている、とまでは思っていないよ。精々五分五分と言ったところじゃないかな? 特に韓遂殿、涼州勢に対しては喧嘩売ってるのか? っていう招き方をしてるわけだし」

「正直あれは無いなー、と思いましたがよ……。叔母様は笑ってるだ

けだったけど」

「大丈夫だよ、子泰殿。一番ありえんと思ってたのは私だから。

いやー孟起殿に殺されるかと思った」

「国相様の無茶振りが凄まじかったよね……。お兄ちゃんも国相様を止めるなり、誘い方変えるなりすれば良いのに」

「止めて辞める人じゃないし、結局その後顔を合わせるんだから誘い方変えても仕方がないでしょ? どうせその辺りの話題は出すんだから」

「あの、どういう呼び方をしたんですか?」

義兄さん達が口々にそう言うのを聞いて、興味が沸いてそう質問をしてみました。

『涼州の乱での話をしながら酒を飲まないか?』と」

「はわわ！ どう考えても韓遂さんに喧嘩を売ってますよ!？」

韓遂さんは負けた側なんだから、勝った徐州勢からそういう誘われ方をされたら確かに怒ると思う。というか、その招き方でよくここに来ましたね？

「文約殿韓遂はともかく、孟起殿が怒り心頭だったね。むしろ、文約殿が来てくれる事を決めたわけだし、あまり怒っていないようだったけど」

「叔母様、あの戦いは負けるべくして負けたと言ってたからなー。

『血気に逸る事なく、隙無くば牽制に努めよ』っていう言いつけを華雄さんが破ったから負けたっていう認識持ってたし」

「んぐっんぐっ。　ぶはあ。　そもそもあそこで華雄に隊を率いさせたのが間違いだったんじゃない？　明らかに役者が役に見合っていないでしょ。　麟、おかわり」

「自分で注げ。　華雄が涼州勢に加わらずに正面の汜水関に陣取っているのも、韓遂殿が華雄に責任を追求して仲違いしたからなんじゃない?」

言われたとおりに孫策さんは自分で二杯目を自分で注ぐ。　隣の星さんもそれを見て、自分も酒瓶に手を伸ばそうかどうかを迷っているように見える。

　主の勧め無く、お酒を注いで良いのかが分からないのだろう。

　そういった意味では孫策さんの行動は酷く無礼に映るが、義兄さんに気にする素振りがなく、親しい間柄であるからこそ許されるのだろう。

　私がそんな事を考えている間にも、義兄さん達は会話を続けている。

「乱が終わった後に、叔母様と丁々発止やりあってたから。　別動隊を敗走させたわけなんですけど、『軍勢をぶつけ合い、武を競い合う事さえできれば負ける事はなかった!』の一点張りで責任を認めようとしなくて結局出奔しちゃいました」

「そもそも、負ける可能性のある正攻法で競ってもらえると考えている時点でおかしいだろ。　まあ、その結果涼州から出奔、董卓勢と合

流されて現在苦勞している」と

「あはは、返す言葉ありません。けど、おかしいですよ。華雄さんの性格を考えれば、挑発すれば簡単に乗って出撃してきそうな物なんだけど。何度か悪戯を仕掛けた事があるんですけど、簡単に引っ掛かってたんですよ」

「思慮深くなったって事？ そんなに短い時間で人の性さがが変わるかしら？」

「そういう推測や知っている情報の共有をするのが、情報と意見交換の主旨なわけだ。全員の知識を共有しておくのは軍議にも繋がる話だから、協力する事が決定したらまず話す事になる。軍議じゃないからって無駄話をするってわけじゃないぞ」

義兄さんのその言葉に肩を竦めた孫策さんに苦笑しながら、義兄さんは自分の杯にお酒を注いだ。

華雄が挑発に引っ掛からなかった理由は確かに気になる。何せ最初に挑発に失敗したのは私達高唐勢だ。

私や雛里ちゃんは挑発で華雄を野戦に引きずり込む事ができると判断した。それを足掛かりに汜水関を落とす算段だったのだが、それが上手く行かなかったために正攻法で攻城をする事になってしまった。

その結果、大きい被害を出している。

「まあ話を戻すけど、身内である文約殿を馬鹿にされたと感じて、怒り心頭になってる馬家当主代理の孟起殿次第で同盟締結も破談も有りえる。文約殿自身は気にした素振りが無かったから、もしかしたら荒ぶる孟起殿を上手い事諫めて順当に決まるかもしれないけどね」

つまりは马超さんと韓遂さんの力関係次第という事か。当主代理と当主の腹心、どちらの方が主導権を握っているかという。お二人の仲の良さは一体どの程度の物のだろうか？

それも涼州勢と今後付き合いをしていく上では重要な情報になるだろう。

「あ、もう一名飲み始めちゃってるけど、乾杯しようか。その瓶に酒が入ってるから自分達で好きに注いで。右から順番に酒が強い

から、自分の限界は弁えた上で飲むように」

「ほう、酒の種類がそれぞれ異なるのですか」

「甘いのがや、強いのがや、色々な色々あるから自分で飲み比べるのが早いですよ」

「ほほう、それは楽しみですな」

では私も、と良いながら星さんも杯に酒を注いだ。それを皮切りに私を含めた全員がそれぞれ空の杯を満たしていく。

「では、遅ればせながら始めようか。酒量は自分で調整するようにね。倒れても介抱するつもりはないから。それじゃ、乾杯」

……いや、介抱はしましよよ。

心中でそうツツコミを入れながらも、私も義兄さんの乾杯の声に唱和を重ねた。

第四十六話 P o r k e r F a c e — 悪巧み②

霧囲気が重い。

折角の飲み会ではあるのだが、そう言わざるを得ない。

ぽつぽつと話はするのだが、話題が盛り上がりわけでもなくぶつ切りになっていく。うん、こんな霧囲気で情報交換ができるわけがないな。何か対応をしなくてはならないだろう。もつとも、そんな霧囲気の中にあっても、ぶれない人間というのは何処にでもいる。

目の前にいる大虎とか。

つまみとして出したメンマの壺を抱えた将来の五虎将とか。

「んー。全部美味しいけど、とりあえず気に入った順番はこういう順番ね」

「私としては、風味の強いその酒を筆頭に挙げたいところですね。

素材の味を生かしながらも酒に負けない強い味付けがされているメンマと良く合います」

「とりあえず、子龍殿は抱えた壺を戻してください。他の人が食べられないでしょうが」

「如何様にすればこれほどの逸品を手放す選択ができませんようか!? いや、できません!」

「反語で強調しながら否定されても困るのですが」

孫策雪蓮は霧囲気に流されず、片っ端から酒瓶から自分の杯に酒を注いで、味見をしていた。そして、全部を試し終えた後、酒瓶を順に指差していった。雪蓮の酒の好みは、酒飲みらしく度数の強い物のようだ。雪蓮が一番気に入った物には、試行錯誤して作った試作品が入っている。

対して子龍殿^{趙雲}は一番の物という事で焼酎を指差している。メンマと合う云々に関しては完全に主観の問題なので気にしない事にする。メンマをもう一壺出しても抱え込みそうだな、これは。

「姉様、飲みすぎでは?」

「あら、別に良いじゃない。折角ただで美味しいお酒を飲むんだから、目一杯飲まなきゃ損でしょ?」

仲謀殿孫権からの言葉を軽く流しながら、雪蓮は更に杯を傾ける。

この虎、実に容赦がない。……次からはもうちよい酒のグレード落とそうかなあ。

半目になりながらそう考える私へ、雪蓮は杯を持ち上げながら話しかけてきた。

「つていうか麟糜芳? それ……焼酎? は以前も飲んだ事があるけど、これは初めて飲むんだけど。何処に隠してたのよ?」

「試作品だからね。市場には流通させてない。余程の好事家じゃない限り買えないような値段になるだろうし、買い手がつかんよ」

「そんなに高いんですか?」

「高い」

興味を持ったのか、朱里が値段を尋ねてくるが一言で返す。

徐州で取れない作物を原材料に仕込みをしているのだから、それだけで価格が跳ね上がる。

「雪蓮、その酒は呉郡から仕入れた材料を使って作った酒だよ。もう少し価格下げて売ってくれるなら、ある程度流通させる事ができるんだが」

「それは私に言われても困るわよ。母様が冥琳にでも言ってお頂戴。

で、その材料って何?」

「……仲謀殿、孫家はそれで良いんで?」

「良い訳ないでしょう。果てしなく大問題よ」

そう言っつて溜息を吐いた仲謀殿に少し同情する。

もつとも史実の孫策は孫権を内を治める才は自分より上と認めていた。雪蓮としても内政に関しては仲謀殿に任せる心積もりなのかもしれないな。

公瑾殿も居る事だし、二人に任せておけば磐石といえれば磐石ではあるだろう。

しかし、内政を全面的に妹に任せるにしても、少しはそういう事も興味持てよ……。最終的な裁可の権限まで仲謀殿に渡してしまう

のは危険だぞ。特に晩年。

「甘蔗サトウキビだよ。流石に製法までは教えられんが」

「へえ。石蜜(含蜜糖)の材料よね? ……徐州に卸してるんだっけ?」

「卸してるんですよ。姉様はもう少し政治にも興味を持ってください」

じろりと睨み付ける仲謀殿から目を逸らしながら、誤魔化すように杯に口を付けた。どうでも良いが紅い唇が艶かしい。若干気まずい感情を覚えながら、不自然とならないように視線を雪蓮から外した。

サトウキビを原料に作る酒、というのでわかる人間も多そうだが、徐州でラム酒を作ったのだ。

この時代の中華では、白砂糖を代表とする分蜜糖は製法が確立していない。それどころか石蜜(要は黒砂糖)も製法が一部でしか広まっておらず、一般市場に流通していない。前漢の高祖の代においては、南越の王が献上品とするくらいに石蜜は高級品だった、と言えばその価値の想像がつかだろうか。それこそ地方豪族でも手に入れる事は難しく、中央官吏でも相当な高位にある者しか口にできないだろう。そんな高級品なんだから、製法を確立すれば凄まじい富をもたらすはずだ!と始めたのが全ての始まりだった。

石蜜の作成までは、宋の時代に書かれた『糖霜譜』の内容に従う事で難なく作れた。鹿児島でもサトウキビの栽培は行うので、興味を持って調べた事があったのが役に立った。

そうしてできた石蜜を洛陽で売り捌いた事で、富を築く事はできた。

問題は、調子にのってその稼ぎのほとんどを分蜜糖の設備投資に回してしまった事だ。

ええ、それが全然上手く行っていませんが何か?

白砂糖は独特の風味が抜け落ちるので、菓子などに使いやすい。使い分けをすれば料理の幅が広がるだろうと思って始めたのだが、まさか精製ができないとは思わなかった。果実酒も作れるはずだったんだがなあ。幸い、利益を吐き出しただけで済んでおり、借金ができた

わけではない。最初から白砂糖を作ろうとしてたら、麩家の商家がなくなつてたかもしれないなあ、というくらいには費用を使った。公金でやつてたら物理的に首を飛ばされていたかもしれない。

まあそんな失敗を繰り返し、白砂糖の生産こそできなかったが、モラセス（廃糖蜜）は取れたのでこうしてラム酒を作る事ができた。しかし、当初の目的からすると惨敗と言っても良い結果だ。

ラム酒はモラセスを原料に仕込みをする蒸留酒であり、サトウキビのプランテーションが有った国で作られ始めた酒だ。二十一世紀でも生産が盛んであり、砂糖が作られていた地域では似た種類の酒が多くある。ブラジルのピカーリヤ、奄美大島の黒糖焼酎などが有名だろうか。

折角モラセスが取れたので仕込んでみたが、予想よりも上手くいって味が良い。

酒飲みの多い孫家へ手土産として持ってきたのだが、折角なので文台様の了承の上、この場で振る舞う事にしたのだ。その際、雪蓮と一悶着あつた事は省かせてもらおう。

他に持ってきたのは、焼酎（米、麦、黒糖）と蜂蜜酒、濁酒どぶろくになる。

蜂蜜酒は徐州産の蜂蜜を利用して仕込んだ。北欧では神話の時代から飲まれてきた伝統ある一品である。世界最古の醸造酒とも呼ばれ、その歴史はワインよりも古い。蜂蜜を水で割って暖かい場所に置いておくだけで作れるため、私も晩酌用に自室で作っている。

原料が蜂蜜であるため甘く、姉姉さんや空空さん、天明羊達に受けが良い。確かに甘い物は美味しいけどね。

飲んだ事のある天明と遥歩は勿論、諸葛姉妹も気に入った様だ。味見に他の瓶の物を少し舐めた後はずっと蜂蜜酒を飲んでいいる。

子泰馬殿は西涼出身らしく馬乳酒が欲しいと言っていたが、あれは作れる期間が相当限られるので流石に手元に無い。馬の授乳時期である夏の間しか原材料を取れないし、当然と言えば当然なのだが。醸造酒なため、保存も難しい。蜂蜜酒も醸造酒であるが、馬乳と比べて蜂蜜はかなり保存できる期間が長いいため、一年中仕込ができるという利点がある。蜂蜜は常温で数年持つしね。

ただ、徐州でも馬乳酒は作っている。馬乳酒から着想を得たと言われている、日本の食卓を席卷した事もある某国民的乳酸菌飲料が懐かしくなって、何とか再現できないかと試行錯誤を繰り返している。まあ、これは完全に個人的な趣味なので、まったりとやるつもりだ。独特な酸味があるため、好き嫌いは分かれるのだが栄養価が高いため可能な限り飲む様に周りには勧めている。いまいち受けが悪いのはご愛敬だろうか。

さて、いい加減この重苦しい空気を何とかする事を考えるとしよう。酒が入っているにも関わらず、話をする人間が限られているこの状況はよろしくない。主人役の面子の問題もあるし、まずは口を開いて隣に座る人間へ口を開かなくてはならない状況を作るとしよう。で、一緒にゲームで遊んでいればある程度は心を開くだろうという浅はかな考えをもって、徐州から持ってきたゲームを始める事にした。その甲斐あってか、多少は雰囲気は軽くなっている。

「幾重にも作られた堀と、その前に作られた柵。それから堅固な城壁に城外に布陣した精強な遊撃部隊。それを被害を出さないように抜くというのは、こちらにとつて都合が良すぎるだろ」

徐州から持ってきたカードゲーム『クク』の札を机の上で混ぜながら、私はそう口にした。

スートの認識がしやすいよう、赤色の染料が必要になるランプよりも、文字と絵を彫れば完成するククの方が生産コストは安い。むしろ絵も書かないで、文字だけでも作ってしまうても良いだろう。味気なくなってしまうだろうが。

ランプの四つのスートをすべて黒一色にすれば生産コストを抑える事はできるのだが、それだとプレイアビリティが大きく下がる。私自身、そんなランプで遊びたくはない。遊び方はククよりもランプの方がずっと多くてもだ。

ククは二十一世紀では世界的に非常にマイナーなゲームという扱いを受けていたが、ルールが単純で同時に遊べる人数が多いので、日本の一部のアナログゲームファンには根強い人気を誇っていた。私も前世で飲み会の時に遊んでから気に入り、自分用に購入した記憶が

ある。この世界に生まれ落ちた後もルールも覚えていたので、木札で作って宴会向きの遊びとして徐州で広めようとしている。面白さが伝わったのか、じわじわと流行の兆しを見せているのは嬉しい限りだ。

まあ、兵の間で流行すると弱卒になってしまうという嬉しくない逸話もあるわけだが。

そんなどうでもいい事を頭の片隅で考えながらも、私は言葉を続けた。

「けど堀は無限にあるわけじゃないし、地道に埋め立てればいつか城壁に肉薄できる。なら、何でここまで戦況が動いていないのか？」

はい、雪蓮、答えをどうぞ」

「みんなやる気ないからでしょ。孫家も本気は出してないし、他も

同じ感じなんじゃない？」

「姉様！」

雪蓮が若干投げやりな口調でそう答えると、仲謀殿は諫める様に大声を出した。

まあ、普通に考えればそうだよなあ。

「ふむ。確かに我ら高唐勢が初日に攻勢を掛けた後、他の皆々様は矢を射掛けるばかりで積極的に堀に近づこうとする動きもあまり見られませんでしたからな。いやはや、この連合軍はなかなか勇猛なお方ばかりで」

「せ、星^{趙雲}さん。もう少し言い方を……」

「と、我が軍の軍師達が陣中でいつもぼやいておられましたな」

「はわっ?! 私はその事言っていないでしゅ!」

子龍殿の言葉に焦る朱里^{諸葛亮}目掛けて、仲謀殿、興^{甘寧}霸殿が鋭い視線を飛ばす。それに対して朱里は懸命に首を横に振って無実を証明しようとしている。

「というか朱里? その言い方だともう一人の軍師殿が言っていないと否定できていないんだけど?」

「まあ、朱里達がそんな事を本当に言ったかはどうでも良いんだけど」「だから、言っていないでしゅ!」

「……どうでも良いんだけど。初日以降に攻撃した面々は、被害を出す事を恐れて消極的な行動に終始したのは事実なんですよ？」

「まあ初日の高唐勢の戦いを見て、被害の大きさに一部の連中が尻込みしているのは否めないわ。まだ最初の関門に過ぎないのに、大被害を出すわけにはいかないし」

「えーっと。敵将を挑発して誘き出して、それを討つ事を足掛かりに汜水関を落とすつもりだったんでしたっけ？」

朱里の言葉をしれっと無視して、私はそう言葉を紡いだ。それに雪蓮と天明が言葉を続ける。釈然としない表情をしている朱里と飄々とした表情をした子龍殿が天明のその質問に答えた。

私はそれを聞きながら全員へ札を配っていく。

「ええ、そのとおりです。守将の華雄は挑発で誘き出せると思ってたんですけど……」

「上手くいかなかったから正攻法に切り替えざるを得なかった。あれと正面から当たるつもりはなかったのだがな」

「……確かにあの堅陣を見るに、敵将を誘引する以外の方法は難しそうですね。それに乗ってくれなかったら正攻法しか無いか」

朱里と子龍殿の説明に天明は納得したように、そう呟いた。

攻城戦は取れる手段も限定されるからな。あれを力技で落とそうとするのは骨が折れる。他に何か手段を取るとするならば。

「そうじゃなければ、もうちよい黒い手段かねえ」

「それは流石にまずいよ……」

「黒い？ 具体的にはどのような？」

私が口にした言葉を理解できた天明は苦笑を浮かべた。

対して、仲謀殿はどういう意味かを理解する事ができなかったように、問いかけをしてきた。

「兇手きょうしゅ（暗殺者）を代表に、割と本気で声望を落としそうな方法」

「ふ、ふぎけるな！ そのような手段を取る事ができるか！」

「まあ、却下ね」

「却下ですな」

「当然却下だね。私としても本気でそんな手段を取るつもりはない

よ。第一、そんな有能な影働きをできる人材をこんなところで使い潰すのも勿体ないしね。さて、配り終えたし子泰殿、はじめて良いよ」

私の言葉を本気に取って激昂する仲謀殿に対して、雪蓮と子龍殿はあつさり拒否の言葉を口にした。私が本気でそんな事をするとは思っていないからだろう。性格の違いが出ていて面白い。

私としても、本気でそれを狙うならこんな場所で口にしたりしない。誰にもばれないように黙ってやる。

ついでに、徐州にはそんな事ができるような人材がない、という実情は伏せておく事にする。今後他勢力との関係がどうなっていくか確定していない以上、多少のブラフはかけておいても損はないだろう。

……うーん。どこかに忍者は落ちていないだろうか。忍者キャプターでも可。……いや、不可。あれ、全然忍んでないし。

しかし、雪蓮と比べて仲謀殿は随分とまじめだ。見習えよ、姉。まあ真面目になった雪蓮とか、目にした瞬間私は指差して爆笑する自信がある。

「んー、交換で。……ちよつと話を戻しますけど、何でも本気を出そうとしないんですか？ 叔母様も突撃しそうなお姉様を諫めていましたけど」

「いくつか理由はあるわねー。さつきも言ったけど、被害が大きくなりすぎると今後に差し支えが出てくる訳だし。思春甘寧、私も交換よ」

「御意に。蓮華孫権様、私は交換無しです」

プレイしているのがカンビオだから札の交換と会話を並行に行い、言葉が途切れないうまに話題が続いていく。無理矢理にでも口を開けば、気まずい空気を払拭できるだろうという目論見は、ある程度成功していると言えるかもしれない。少なくとも、情報の交換はぽつぽつとできる様になってきた。

あー、雪蓮が顔をしかめてる。興覇殿が交換を申し出なかった事からも、雪蓮が交換した札は交換前より弱くなったのだろう。

それを横目に、私も口を開く。

「参加するだけで目的を達した勢力もあるだろうしなあ。名声を得るだけなら、『義に従い、漢を救うために連合軍に馳せ参じた!』ってだけでも十分だしね」

とは言った物の、本当にこの連合軍に大義があるかどうかなんて分かりはしない。しかし上手く風聞を操作すれば、本当に正義に従った行動に見せかける事は簡単にできる。参加するだけで名声を得る事ができるのなら、とりあえず参加しておこうという群雄も間違いない居るのだろう。まかり間違えば、もとい運が良ければ大功を上げる可能性もあるわけだし。そういった面々は既に目的を達しているので、無茶を通してまでガツガツと功績を求めたりはしないだろう。

仲謀殿も同様に考えを口にした。

「誰も好んで兵力を減らそうとは考えないわ。目的を達しているならば無理をする必要も特には無いという判断なのでしょう。諸葛均 叔起、私も交換よ」

「けど、汜水関も越える事ができずに撤退となったら、天下の笑い者になりますよね? それは良いんでしょうか? お姉ちゃん、交換」

「ううん、良くは無いよ。ただ、この連合は最初からそんな感じでしたから。矢面に立たされないように、盟主が誰かを決めるのにも時間を使っていました。趙雲 星さん、交換をお願いします」

この事からも群雄の考えが少し透けて見える。

功績を本気で欲しているならば、迷わず手を挙げて一番槍となる事を望むと思う。万全の状態の敵と最初に槍を合わせるとするのは危険ではあるが、それだけで十分に武功となりうる。

実際一番槍を名乗り出た事で、朱里達の高唐勢はこの連合軍で一定の立ち位置を作る事に成功している。そうでなくては、官職を持つ劉備殿が居ないにも関わらず、文台様と孟起殿がこの場に高唐勢の同席を許すはずがない。例え彼女達を招いた徐州勢の不興を買ったとしても、だ。二人とも武に傾倒しているだけに、敵に一番槍を付けた高唐勢に好意的な感情を持ち合わせているのだろう。攻略に失敗し大きい被害は出てしまったが、何も得る物がなかったわけではない。少

なくとも、意図なく消極的な遠戦を繰り返している他の群雄と比べれば、十分功績を上げているといえる。

群雄達がわざわざその誉れを他の勢力に譲ろうとするかの行動は、一見奥ゆかしく謙っているかのように見えるかもしれない。しかしおそらくは、後に控える洛陽での攻防戦の方が功が大きいと考えているからだろう。それは大分甘い考えだと思うのだが。

『他の誰かが陥落させてくれる』といったところでしようか。そういう他力本願な考え方をしているのかと。 歩練師 子麗殿、交換を」

子龍殿が口にしたように、多分理由としてはそれが一番大きいのだろう。それは先程の一番槍を嫌う話とも矛盾はない。

ただ、それだけが理由と言うわけでもないと思う。少なくとも、雪蓮がそんな理由だけで大人しくしているとは思えない。こいつなら文台様や公瑾殿がその辺りの意図を画策したとしても、無視して突撃するのが簡単に想像できる。そう断言できる程度にはこいつの為人は理解している。にも関わらず、先ほど本人が言ったように本気を出していないのだから、何か意図があると見るべきだろうか。もつとも、『勘』の一言で片付けられてしまう気もするが。

「天明、私も交換「にやあ」!」

『猫』か。じゃあ遥の持っている札を最初持っていた仲謀殿は失格ね。 罰金をどうぞ」

交換を申し出た遥の言葉を途中で遮り、天明が手札を晒しながら猫の鳴き真似をした。

それを聞いた仲謀殿は苦虫を潰したような顔をしながら、自分の財布から小銭を取り出して、中央にある罰金用の井に入れた。

それを気にせず粛々と場を進める事にする。

「じゃ、天明。 続き……っていつても『猫』をわざわざ交換はしないよね?」

「うん、しない。 お兄ちゃんどうぞ」

「私も山札との交換は無し。 それじゃ、 全員手札の開示をどうぞ」

そういつて私は自分の手札を晒した。 それに続き、全員が手札を表にしてい

その結果、失格した仲謀殿を除いた中で最弱の札を持っていた遙が小銭を井に入れる。

使い終えた札は枚数が足りなくなるまで場から取り除くため、重ねて脇に除けておく。

親は順番に行うため、次の親である子泰殿に山札を渡して配ってもらう。

カードが配られる間、仕切り直す様に杯に口を付けて湿らせていた雪蓮がぽつりと呟いた。

「ま、それだけでもないんだけどね」

そう口にした後、雪蓮はぐびぐびと勢い良く杯の中身を飲み干し、もう何杯目か分からないお代わりを自分の杯へ注いだ。

酒瓶の中身を考えると相当酔いが回っていてもおかしくないはずなんだが、多少頬が紅潮しているだけでまどろむ様子すらない。どういう肝臓してるんだよ……。

それは子龍殿も同様で、飄々としながらも雪蓮と同じくらいの量を口にしている。こちらも少し赤くなっているくらいでまったく意識が混濁している様子がない。それどころか、手元のメンマを口にして、ますますペースが速くなっているように見える。

二人とも底無しか。一緒に飲む時には飲まされないように注意しないと駄目だな。

手札を配り終えてククを再開したが、情報交換の声も止まらない。「要は、主導権を握っている袁家の事を信用できないのよ。努力の結果を横取りされちゃたまらないでしょ」

「……ああ。いよいよ落とせる、つてところまで戦局が進んだところで配置を変えて、本初殿袁紹や公路殿袁術達が先陣に立とうとするのでは、と疑っているのか」

それはきついな。

どんなに頑張っても、誰かの露払いをさせられていると疑っているのでは士気が上がらなくて当然だ。

先の盟主決定の際にも諸侯は積極性を発揮していないし、最初に雪蓮が言った様にやる気がないというのも領かざるを得ない。

本初殿はそういう陣中で燻っている感情に気付いているのか？

このままだと、本気で汜水関を越えられずに撤退している未来も簡単に想像できるぞ。

「本初様達は先陣を務められていないのですか？」

「ああ。『劉備軍に貸し与えた兵の傷が癒えていない』そうだ。それを差し引いても十分な兵数を揃えているのだがな」

「我らが言うのもなんですが、あれから時も経っているのだから十分傷も癒えているでしょうに。 出汗にされているのが何とも腹立たしい」

遥の質問に、仲謀殿と子龍殿が答える。

うん、絶対に気づいていないだろう。分かっているなら自ら矢面に立つなど、下がり続けている土気を改善しようとするだろうし。

そこまで考えを露骨に出していると信望を失いそうな気もするんだが。

もつとも、傍若無人に動く事ができるからこそ、大勢力をまとめる事ができる側面もあるんだろうが。

織田家のうつけ殿とか、伊達家のDQNとか、他人と協調するよりも我が道を行く事で世に名前を馳せた偉人と同じと思えば、王者の風格があると思えないでもない……かなあ？

「それじゃあ、一日で堀の埋め立てから落城までしなくちゃ、どんなに頑張っても汜水関一番乗りによる第一功は本初さん達、袁家へ行っちゃうんですか!？」

「そうだろうね。本初殿が先陣を務める事を表だって反対する諸侯もいないだろうし、おそらくそのまま配置替えが通るだろうから。

消極的な動きしかしていない諸侯の皆様としても、自分達の被害さえ少なければ誰が功を得ようと気にしないと思う」

子泰殿の言葉に、私はそう頷いてみせた。

むしろ多くの諸侯達は、袁紹に同調する姿勢を見せる事で媚を売ろうとするだろう。盟主を決める時とは違い、先陣を務める事がないならば積極的に賛成に回ると考えられる。

汜水関の戦いで功績を得る為のハードルがどんどん上がってる。

もう埋め立てだけやって、後は他に任せてしまるのが一番楽かもしれない。

ただ、徐州勢を率いている国相様や、そこに居る大虎とその母親は納得しないだろうなあ。

「お姉様は檄文が届いてからずっと『あたしが天子様を救ってみせる！』と鼻息が荒かったから、私も参加している全員が漢王朝のために喜び勇んで洛陽を目指すと思ってたんですけど……」

「認めたくはないですが、朝廷の求心力が落ちてきている証左なのでしようね」

「だからこそ今の状況を建て直す事ができるならば、その功績は比類無き物となるはずなんだけどね。そうやって餌を見せられても一枚岩になれていないんだから、朝廷の中で立身する事にそこまで興味を惹かれていないんだろうね。『地方で力を蓄えた方が良い』と考えているくらいには、天明の言ったとおりに朝廷の力が衰えてるんだよ」

とは言った物の、おそらく多くの諸侯は自身が漢の宰相となる事までは考えていない。というより、自分が帝の側に侍り、天下を裁く役になるまでを想像する事ができないだろう。ここに集った諸侯全員が、村の祭で肉を裁いた後に『俺に天下を裁かせろ！』と言つてのけた無名時代の陳平と同じ器量を持つとも思えん。

現状で野心だけではなく、明確なビジョンを持って動いている諸侯は反董卓連合内には居ないだろう。

むしろ行き先が不透明過ぎて、ビジョンを持って動く事が不可能と言った方が正しいか。君側の奸を討つと言つても、漢王朝に逆らっている事に違いはない。そんな状況すら予測している物が居るとすれば、ある日異世界に転生したらどうしよう、とか本気で考える様な荒唐無稽な妄想を常に考えている様な夢見がちな人だろう。私としては、実際にはそんなに良い物ではなく気苦勞ばかりだ、と声を大にして訴えて行きたいわけだが。

史実における曹操と孫堅にしても、玉璽を手に入れたり、流浪の帝を保護するまでは天下を意識してはいなかったはずだし、この世界で

も同様ではないだろうか。……いや、歴史上の人物とまったく同一の思考を取ると決めつけるのは危険か。

まあそんな状況であっても、おそらく朱里と公瑾殿はビジョン無しでそういう立場に放り込まれても何とかすると思う。二人ともそれだけの器量は優に持っている。

後は曹操も持ち合わせているだろうか。伝え聞く噂や行商人達からの情報を元に判断するならば、いきなり国の政治を差配する権利を与えられたとしても、重圧に屈する事なく治めきる事だろう。史実どおりのスペック持っていていそうな雰囲気、聞いた噂だけでもピンピン伝わってくる。

「……ああ、もう面倒くさい！ 後の事をとやかく考えてないで、さつさとガツツリ戦わせなさいよ!!」

「こら、馬鹿娘。何を他の勢力の皆さんの前で馬鹿な発言をしている」

色々絡み合う思惑に面倒くさくなったのか、大声でそう叫んだ雪蓮。それに対して天幕の入り口から呆れ果てた、と言いたげな口調で声がかかった。

「ちよつと！ 誰が馬鹿よ、誰が！」

「子方、馬鹿娘の相手で面倒をかけた」

「いえいえ。こういう人間と知っていれば、味があると言えない事もないので」

「無視するな！ それから隣もしれっと酷評を付け加えないで否定しなさい！」

雪蓮の抗議を聞き流し、天幕に入ってきた面々の顔を確認する。

文台様を先頭とする孫家だけか。どこか疲れた表情をしている公瑾殿が印象的だ。

事実上孫家の実務部分を取り仕切っているだろうし、疲れが溜まっているのかもなあ。後で薬湯を差し入れるか。

徐州のお偉いさんと馬家の面々が居ないのは、何でだ？

「趙国相と韓文約殿なら、天幕に残って話しているぞ」

「なるほど。まあ、積もる話があるんでしょ」

私の疑問に先回りして文台様がそう声を発した。

二人が残っているので、護衛として他の面々も残らざるを得なかった、といったところだろうか。

しかし、趙国相と文約殿。やはり面識があつたか。そうでなくては、わざわざ残つて話をしようとは思ふまい。

西涼の乱の後に、この世界での韓遂の経歴を洗い直したところ、趙国相と同じ遊郭に務めていた事がある事が確認できた。おそらく、その時から国相様とは親交があるのだろう。そうでなくては、あんな喧嘩を売るような呼び立て方はするまい。

それを知っていたからこそ、私は気にせず国相様の発した言葉どおりに文約殿を誘った。それに文約殿が笑顔を見せながら応じるところまでは予想通りだったが、まさか孟起殿の方がキレるとは予想外だった。文約殿の経歴、及び趙国相との関係を知らないのかもしれない。

話を聞くに、孟起殿は相当潔癖なきらいがある人物だと思われる。そういう人物からしたら確かに、この経歴について聞いたと思うところが出てしまうだろう。おそらく、馬寿成殿だけが知っているのではないだろうか。

そんな事をツラツラと考えていると、完全に雪蓮を無視したまま文台様が口を開いた。

「一応、私から宣言しておこう。最低でも汜水関を抜くまでは我ら三勢力は協力して動く事が決まった。それ以降は状況次第だ」

「良かった、上手くまとまりましたか。固めの盃は取り交わしておいでで？」

「いや、全員がいる前で行った方が良かったので、まだ交わしていない。準備してもらえると助かる」

「御意に」

文台様から盟約が成った事を聞いた私は天幕を出て、天明と二人で共用して使っている天幕から酒器を三組取り出し、盆に載せた。先ほどまで用いていた物は耐久性重視の頑丈な作りをしている物だったが、今取り出した物は瑞獣の精緻な彫り物がされている見映えがする

物となる。県長に就任して酒宴を主催する機会が増えたので、来客用の酒器を職人へ注文していくつか作ったのだ。

ちなみに取り出したのは、鳥、亀、虎が彫られた物。漢王朝に反乱しているとも取れるこの状況で、狐や龍の意匠の酒器を使う度胸は無い。どんな風に取りられるか分からないし。麒麟の酒器は当然無い。客に使わせる食器に自分の名前の由来を彫るとか、どんなナルシストだよ。結婚式の引き出物に自分達の写真を使うのと同程度の痛さを感じる趣向は私は持ち合わせていない。

話が逸れた。まあ何にせよ、期限付きとはいえ一応同盟締結で盃を交わす事になるわけだし、礼儀に適った物を使わなくては駄目だろう。貴人と接する可能性も考えて、念のため持ってきたのが無駄にならずに良かった。

しかし、まあ。

「面倒くさい」

一人きりというのもあり、思わず溜め息混じりにそう溢してしまっただ。

何が、つて何から何までだ。まさかここまで汜水関の攻略が遅々として進んでいないとは予想外だった。もちろん悪い意味で。

遅れて来た私達も誉められた物ではないのは理解しているが、よもや城壁に取り付く事すらできていないとは思っていなかった。

しかも、旗を見る限り董卓旗下の有名どころは大半が汜水関に詰めているようだ。これを抜いて洛陽へ向かうとなると、大分骨が折れるだろう。

当面考えなくてはならない事も非常に多い。

まずは、強行軍でここまで来た徐州兵達の休息が最優先だろう。流石に疲労が溜まっているのが見て取れる。無理に戦闘をさせるわけにはいかない。

次に、連合軍全体の士気を上げる事。このままでは連合軍が内部崩壊を起こしかねない。私としても、文和殿に事情を確認する事を目的としている以上、今ここで解散されても困るのだ。

それから、他勢力と諍いを起こさないために軍規を引き締める必要

もあるか。こちらからは手を出さなくても、鬱憤晴らしのためにちよつかいをかけてくる可能性が考えられる。ただでさえ低い士気を更に下げないためにも、挑発には乗らないように言い含んでおこう。

ついでに、近隣の集落から略奪を行っている輩がいないのかもチェックした方が良いか。憲兵隊とかの概念も無いだろうし、軍内の取り締まりを行う部署が無いのが痛いな。

攻略までの時間がかかるとも考える、補給計画も練り直しておく必要があるそうさ。近場の太守である曹操殿に領地の通行や、資材が急に必要になった場合に備えて、販売をお願いできるか確認しておいた方が良いか。

あと、兵器の作成にも取りかかる方が良いか。材料の切り出しとか、時間がかかるだろうし。製図は終わっているのがもっつけの幸いか。

「お兄ちゃん？　いる？」

天幕の外から天明に声をかけられて、我に返った。

時間が経っても戻ってこない私を呼びに来たのだろう。いつの間にか、随分と長く思索に耽っていたようだ。

「ごめん、今から戻る」

「じゃあ運ぶの手伝うよ」

「助かる」

手伝いを申し出てくれた天明に感謝し、酒器を持ってもらう。そのまま天明を伴ったまま、酒をもう一瓶出す事にする。飲み止しよりも新しく出した瓶で盃を交わす方が良いだろう。

「無事に同盟締結だね。大事なのはここから？」

食料を集めてある天幕に向かう途中、天明がそう話しかけてきた。

「そうだね。これで汜水関を抜けなければ、ちよつと本気でまづい事になるし」

孫家、馬家という三国志でも屈指の武闘派と一緒に事に当たるのだ。野戦に持ち込めれば大きく勝利に近づく。

逆に敗北すれば、士気崩壊にまた一步近づく事になるわけだが。

あー、めんどくさ。

「孔明さん達も一緒に引き込む事はできないのかな？」

「……難しいだろうねえ」

天明からの問いに、思わず溜め息を伴って答えてしまった。

「ええと、何かあった？」

今の言い方で何か察するところがあつたのだろう。こちらを伺いながらそう尋ねる天明に答えず、私は無言で隣を歩く妹の頭を撫でた。

私にもどうする事もできない類いの事だ。話してもこの子を困らせるだけだろう。

私に話すつもりが無い事を察したのだろう。天明は問いを重ねる事はせず、黙って頭を撫でさせてくれた。

「そういうえば、羊叔子殿。貴殿も高唐勢と因縁をお持ちではありませんでしたかな？」

撫でる手を止めて、普段はしないような畏まった言い方で天明に呼び掛けた。場の空気を変えるため、そして自分の中の考えをまとめるために、あえて軽口とも言えるような雑談をするように仕向けた。

それに苦笑しながら天明は答えてくれた。

「孔明さん達と話した感じだと、気にしているのは一部の人だけみたい。案外、きちんと話し合えば解決できそうな気がするよ」

「それは重畳。諍いの種は無いに越した事はないですからな」

「ええと？ 何でそんな話し方なの？ 普通に話そうよ」

「いつ叔子殿が私よりも高位の役回りを得ても良いようにあらかじめ練習しておこうとですな」

「無いから。しばらくは出世するつもりは無いから」

からかい混じりに天明とそんな話はするが、史実の羊祐この娘と糜芳私の業績を比べれば、どちらが上かはすぐに理解できる。この娘がその気になればすぐに出世して、私を顎で扱き使う立場になる事だろう。

どこの勢力に行ったとしても、必ずようこそと諸手を挙げて歓迎される存在になるに違いない。

ただ、まあ。

「それも比較する事ができるだけ、その人物を知っていれば、なんだよな」

「お兄ちゃん?」

例えば、名前とか。

呟いた私へ、天明が不思議そうに問い返してくる。しかし私は黙って頭を撫でる。最近は答える気が無い時や、何か誤魔化す時にばかり頭を撫でている気がする。

良くないな。愛でる対象を構ってあげる時には、余計な意図は何一つ差し挟まず全力で愛でるべきだ。まあ、猫にそれをやったら逃げられるが。

そういう愛で方をできるのはむしろ、全力でひゃっはー!!と言わんばかりに飛び付いてくるような人間大好きな犬の方なのだろうが、今回の遠征ではそういう人間は居ない。姉さん元気に過ごしてるかなあ。

「ま、気にするな。今まで不都合が無かった事に対して、今さら問題らしき物が顕在化してきただけだから」

「いや、それ問題があったって事なんじゃ……。抱えきれなくなったらすぐに言ってくれなきゃ嫌だよ? 私だってもう守られているだけの小さい子供じゃないんだし、一緒に悩んであげる事くらいはできるんだから」

その言葉に自然と笑顔が浮かんだ。

義父さんに抱き抱えられて家に連れて来られた頃とは見間違えるほどによく育った。男子三日会わざれば刮目して見よとはよく言った物だ。

まあ、天明は女子だが。

「天明すっかり立派になって……。よし、じゃあ天に居る天明の御母堂に届くくらいの大きな声で、天明が性根の良い子に育った事を報告するために叫ぶとするか。結果的に天明の良い子っぷりがこの本陣中に轟く可能性もあるけど」

「無用です。許してください」

間髪入れずに天明がそう返してくる。その言葉に、私はあまり深く

考えずに受け答える。

「無用の用」

「それだと無用の意味が異なるよね？」

「心配ご無用！」

「お兄ちゃんがいっつ叫び出さないと限らないんだから、心配しか無いよ」

「天地無用？」

「もう何を言いたいのかわからなくなってきてるけど、勢いだけで喋っている事は伝わってきたよ……」

天明に疲れた声を出されてしまった。確かに頭でまったく考えずに、天明の言葉に脊髄反射で答えている自覚はある。

「まあ、天明がそう言うならやめておく事にしよう」

「うん、ありがとう。……少し釈然としないけど」

その言葉の通り、少し首をかしげながらそういう天明を見て、苦笑いを浮かべる。

周りにいる人間で、どうでもいい掛け合いを一番振りやすいのは天明だからなあ。何せ最後まで冷静にツツコミを入れ続けてくれる貴重な人材だ。つついついからかい混じりに弄ってしまう。

「ま、ちよつと私自身にもどうしようもできない事が原因だからね。

もうちよつと考えがまとまって、手伝わってもらうような事ができたらお願いするよ」

表情を改めて、嘆息混じりに私は口にした。

何せ私が生まれてからずっと持ち続けている物が原因なのだから、本当にどうしようもない。

脳裏に、つい数時間前に聞いた言葉が甦る。こちらを見極めんとする、澄んだ目に力を込めた視線をした子龍殿と共に。

思い出す度に引きつった笑いを口元に浮かべ、絶句するしかない。徐州より一人の人物に仕え、長きに渡る主の流浪に付き従い、妹が主君に娶られた事で縁戚にもなった。そして、ついには至尊の座に就いた主に、兄共々重臣として引き立てられる。

その経歴を持つ人物は姓は麿、名が芳、字が子方。私と同様の名前

を持つ歴史上の人物である。

そして……。

『この催しに誘われた時、主が貴殿の名を聞いた後に顔を曇らせたのですが、何か因縁などお有りか？ 場合によってはこの趙子龍、返り血を被る事も辞さぬ覚悟ですが』

そして、最後には主君の義弟を裏切る事で歴史に汚名を残す者であり、歴史書において最大限の侮蔑をもって語られる事となる名前である。

ろくでなしのあの男ではなく、顔も覚えていない母に付けてもらった私の諱と真名は、数少ない祝福と言っても過言ではない。それなりに愛着を持っている。

それが招かざれる事態を運んできた事を思うと、天を仰いで溜め息を付く事しか出来ないのだった。

頭が重い。昨日の宴会で飲んだ酒がまだ残っているようだ。胃の中身をぶちまけるような残り方をしていないのが救いだろうか。

しかし、体調自体はここに来てから一番良い。昨晩口にした薬湯が効いたのだろうか。薬湯を差し入れてくれた子方糜芳に感謝しなくてはならないだろうな。酒が残っている状態で、体調が良いと感じるのは色々とまずい気がしないでもないが。

残っている酒のせいか、油断すれば意識が余所に向いてしまいそうになるのを押し殺し、私は連合軍の軍議に参加している。現在、眼前では趙国相趙昱が声を発している。

「……というわけだ。本気でそろそろ何かしらの戦果を見せないと兵達の不満や憤懣が極限に達しかねない。昨日のこの場で、次の戦いは我ら徐州勢と決まっていたと思う。が、確実に成果を上げるために、我らに加えて孫家と馬家にも協力をしてもらおうと思う。盟主殿、異論はございませんか？」

「……まあ、やむを得ませんわね。いい加減この地の景色を眺めるのにも飽きた事ですし、さっさと汜水関を落として洛陽へ向かうと致しましょう！」

言う程簡単では無いのだがな。

盟主である袁紹の言葉に、思わず心中で苦笑する。顔を見ずとも隣に居る雪蓮孫策が白けた表情をしているのが分かる。調子の良い事を言っていると思うのは分かるが、表情には出さないうで欲しいと思う。

「では実際の作戦行動にあたって、立案者より説明させて頂く」

「実際に動く三勢力と高唐勢の協力者で練った策ですから、私だけが立案者というわけじゃないですけどね。……立案者の一人、徐州莒県の長、糜子方です。どうぞお見知りおきを」

趙国相の方を向き、自分についての発言をやりわりと訂正をした後、改めて子方が挨拶をした。律義と言うべきか、細かいと言うべき

か。大勢に注目されているにも関わらず、常と変わらぬ飄々とした態度に呆れてしまうが、思わず笑みを浮かべてしまう。

昨日各勢力の代表者達が固めの盃を交わした後、実際にどう汜水関を抜くのかを話し合った。大筋は私と子方、高唐勢の孔明でまとめ、細部を皆で決めた。

まず最初に、誰が汜水関に一番乗りしようが、将を討ち果たそうが『功は等しく分けあう』事を確認した。これは功を競い合うのは構わないが、協力すべき勢力間で足の引っ張り合いが行われたり、功を欲するあまり暴走してしまうのを防ごうという狙いがある。懸命に働かなくても功となるため、場合によっては消極的な行動を取る事も考えられるが今回は気にしなくて良いだろう。何せ、孫家と馬家には血の氣の多い将がいる。わざわざ釘を刺さずとも勇んで戦う事だろう。徐州勢はどう動くのか気になるが、子方曰く『足を引っ張らない程度には動く』そうなので信じる事にする。

その次に決められたのが……。

「ひとまず十日。可能であればそれ以上の話を引き出して来ようと思えます」

「……何を言っているんですの?」

「もちろん休戦についてです」

今、子方が満面の笑顔と共に言った事だ。

当然のように、袁紹はそれに食って掛かる。

「ふざけないでくださる!?! この袁本初に負けを受け入れろ!?!」

「話が飛躍しすぎですなあ。……まあ許されるならこのまま兵を退いてしまうのが一番なのは間違いないのですが」

「何か仰いました!?!」

「いえ、何も。さつきも『ひとまず十日』と言いましたけど、欲しいのは一時的な休戦です。先ほど趙国相も口にしたように、現状では士氣がいつ崩壊してもおかしくありません。酒宴でも何でも良いのですが、兵達の士氣を回復する事に努める必要があります。そのため時間を得るために休戦したいんです」

「でしたらあなた方だけで戦ってくればよろしいですわ! その間、

最初から戦っていた兵達には休んでもらえば解決……」

「仮に我らも戦果を上げられなかった場合、更に士気が下がる恐れがあります。もちろん我らも全力で勝ちに行く所存ですが、勝敗は兵家の常でしょう。少しでも負ける可能性が有る以上賛成できません」

口調の荒い袁紹の詰問を遮るように、そして諭すように子方は笑みを浮かべながら答えていく。

連合の兵達に慰労が必要なのは、昨日の宴の席でも話題に上がった。疲労もさることながら、それ以上に目立った戦果がなく徒労感ばかり感じる対峙となっているのが一番の原因だ。攻略が遅々として進まぬ事で、兵達に厭戦気分が高まってしまっているからだ。それを払拭するだけの勝利も、汜水関から敵が出撃してこない以上望むことはできない。現在城外に布陣している部隊を打ち倒そうにも、指揮官の統率力が高いのか、挑発に応じもしなければ、動揺する気配すら見せない。はつきり言って、汜水関から華雄が痺れを切らして飛び出してくる可能性の方が高い。確か城外の部隊を指揮しているのは西涼での戦いの時に出会った姜維といったか。子方が気にしていただけあって、なかなか有能な人物らしい。

思索を打ち切って周りの様子を伺うと、袁紹以外は特に反対意見を述べる気配がない。他の士大夫達にしても陣内に漂う空気を感じ取っているのだろう。

「それに、袁紹殿達が戦線復帰するためにもある程度の長さの休養は必要でしょう？」

「は？ 私達わたくしが？」

「……高唐勢に貸した兵達の傷を癒すために本陣から動いていないのでは？」

訝しげな表情を作りながら子方はそう問いかけた。それを聞いた袁紹がしまった、と言うような顔をする。それは誰の目にも明らかかな嘘であるが、それを理由に袁紹は出陣を拒否していたのだから否定する事はできない。嘘と認めてしまったら、今度はなぜ出撃しなかったのかを説明しなくてはならなくなる。それは袁紹としてもそれは避けたいだろう。

子方も非を打ち鳴らすような言い方をせずに、さも信じているような態度を取っているのが地味に嫌らしい。袁紹としても嘘を責めるような口調であれば反発するのだろうか、相手が信じているような素振りならば嘘を吐き通す事を選ぶだろう。

「え、ええ、そうですね。確かに私達にも休息は必要ですわね」

果たして明らかに動揺した様子ではあるが、袁紹はそう肯定した。

「では、休戦の交渉を勧めますが、よろしいですね？」

「・・・仕方ありませんわね。た・だ・し！　あまり長々と休戦するのは禁じますわよ!」

「承知いたしました、ご了承ありがとうございます。ついでに、休戦が成立した後にしておきたい事、それから盟主殿にやって頂きたい事もこの場で説明させて頂きます」

「準備？　私に何をさせるつもりですか？」

今度は袁紹が訝しげな表情を作る。

それに対して子方は一呼吸置いた後、言葉を発した。

「弔辞の準備をお願い致します」

・・・

子方による休戦の提案が承認された後、軍議はすぐに終わった。いつもやっている軍議にしても、せいぜい次に出陣するのが誰かを決めるだけの場に成り果てていたもので、それが既に決まっているのだから終わるのが早いのも当然だろう。

兵達をまとめるに辺り、今後の事について少し相談をしておく必要ができたので、軍議が終わるとすぐに誠蓮様と雪蓮に声をかけた。

天幕に戻った後、三人分の湯飲みを準備して席に着く。雪蓮は、昨日の宴会の終わり際に子方にねだり、貰ってきた酒瓶（子方が高いと言っていた甘蔗さとうきびの酒だ）を物欲しそうに見ながら、水杯に口に付けている。まだ日が高いのだから、当然飲酒の許可は出ない。誠蓮様と私も当然酒を口にはせず、それぞれ水や茶を飲んでいる。

「ま、昨日の話し合いで決まった通りに話を持っていく事はできたわね。これではしばらくは待ちね」

「孫呉我々はそうなるでしょうね。徐州勢はこの間も働くわけで、少し

申し訳なく思うけど」

水杯で口唇を湿らせながらそう口にする雪蓮孫堅に誠蓮様も首肯で応じ、そのまま言葉を続けた。

「しかし『戦場に散った勇士をこのまま地に伏せさせておくのは忍びない』とはよく言った物ね」

「ええ、まったく。初日の高唐勢の戦いで落命した者が大半ですの
で、兵を貸していた袁紹としても無関心ではられません。領かざるを得ないでしょう」

「拒否をすれば兵を弔う気の無い無情な人と見られる、か。虚栄心の強そうな袁紹には耐えられそうにない評価よね」

誰かがやらなくてはいけない事なのに、誰もやらなかったために散乱したままとなっている屍。それを徐州勢で片付けたいと子方は申し出たのだ。さらに礼に則り葬儀を行い、きちんと魂魄を還すべきだ、と。その葬儀の主には、この連合の盟主である袁紹にお願いしたいと口にした。確かに妥当な人選だろう。むしろそれ以外の人物を指名した場合、要らぬ面倒を抱え込む事になりかねない。

おそらくは、これも士気を上げるための一計なのだろう。兵達にとって、死んだ後の家族がどうなるのかは心配事の一つ。『死んだ者にも丁寧な扱いをしてくれる』将帥ならば、『残された家族も手厚く守ってくれる』に違いない、兵達にそう思わせるつもりなのだろう。それだけの事で兵達は励む事ができる物だ。単純ではあるが、重要な事でもある。

「あの言い方なら、袁紹から要らぬ恨みを買う必要もないでしょうね」
「おそらくは。 事実はどうあれ、表向きは『連合軍全体の士気を回復する』事と『袁家が戦いに出られるように兵達の傷を癒す』ために休戦を提案したわけですから。 しかも袁紹の嘘も理由の一つとして
います。 恨みようもないでしょう」

子方は軍議の場では連合軍と袁家の兵のためである事を理由に休戦を主張していたが、当然別の思惑を持っている。昨日子方自身が語っていたが、徐州勢に行軍の疲れを残したまま董卓軍と相対するのを嫌ったというのが一番の理由だ。連合軍や袁家だけの事を考え、休

戦を提案したわけではないという事だ。

とは言っても、連合軍全体に益がある事も事実なので、わざわざその事で目くじらを立てる者はいないだろう。

後は、騎兵が万が一にも屍に足を取られる事を防ぎたいというのも有るだろうか。馬家も加わっているため、騎兵戦力を有効に扱う事は戦力の充実に直結する。音に聞こえし西涼騎兵が今さらその程度の事でどうにかなると思えないが、少しでも可能性が残るならば潰しておきたいというところだろう。

まあ本当に騎兵を有効に使うためには、相手を汜水関から引きずり出す必要があるのだが。

「けど、休戦交渉が不首尾に終わったらどうするのかしら？」

「それはそれで構わないのだろう」

雪蓮の呟きに、私はあつさりと答えた。

確かに休戦は相手の同意があって初めて成り立つ。仮に拒否をされれば前提が崩れるわけだが、子方はそこまで相手の同意にこだわってはいないと思う。

「屍の収容は盾を構えて矢を防ぎながら行えば良い。あまりに汜水関に近い屍は無理だろうが、ある程度までは回収できる。それで良しとするつもりなのだろうな」

「ん？ けどそれなら……」

「ああ、はつきり言って無理に休戦を押し通す必要は特にない。休戦にならなかつたとしても予定通りに屍の収容は行うだろうしな。

その間はどちらにせよ戦闘は行えないだろうからな」

「何よそれ!？」

素頓狂な声を上げる雪蓮に思わず笑ってしまうが、説明が足りないままだと機嫌を損ねかねないので、言葉が続ける。

「あくまでも、休戦云々を言い出したのは味方に向けて休め、という意思表示をしたかったのだろうな。そうする事で悪目立ちする事なく徐州勢も休む事ができる」

味方に何も話さずに遺体の収容をして戦闘をしなかつたとすれば、怠けていると思われかねない。しかし事前に行う予定を宣言してい

るならば、そういう非難を避ける事ができるだろう。

その間も徐州勢は完全に休めるわけではなく、屍の回収のために動く事になるが、直接敵兵と切り結ぶのに比べれば消耗は比べられないほど軽い物になるだろう。いざとなれば複数の隊に分け交代制にして、休む時間を作る事もできる。

「けど、骸の収容は休戦になっていた方が確実に楽だし、交渉に手を抜く事はないでしょうね」

「まず間違いないかと。しかし、我らからすれば休戦に成った時と成らなかつた時、どちらの場合でも動き方を変える必要はないでしょう。袁紹が見栄を張り続ける限り遺体の回収は続くでしょうから、どちらにせよ時間は作れます」

むしろ我らにとつて重要なのは、そうして出来た時間で何をするかだろう。時間の空いた今の内にやっておきたい事を片付けなくてはならない。

「得られる時間は、我らにとつても重要な物となるはずですが。これを機に物資の調達や士気の底上げをしておきたいと思うのですが」

「冥琳、お願い」

私に仕事を丸投げしてきた幼馴染みを、思わずじろりと流し目を送る。しかし、まったく堪えた様子もないので、すぐに止めて溜め息を吐く。まあ最初からそのつもりだがな。

「雪蓮。冥琳の手伝いをしなさい。あまり根を詰めさせ過ぎて倒れられても困るでしょう」

「むう、確かにそれは困るわね。しょうがないから兵達の訓練は全部任せてくれて良いわよ。休戦中に規律を緩めて士気を上げるのは良いけど、緩みすぎないように適度に締めしておく必要も有るでしょう？」

「ああ、そうしてもらえると助かる」

元より本気でもなかつたのだろう。誠蓮様からの言葉に、雪蓮は素直に頷いた。

折角仕事を手伝ってくれるというのなら断る必要もない。特に雪蓮は内政に関してはともかく、軍事に関しては全面的に信用できる。

良い塩梅にやってくれるだろうし、遠慮なく頼む事にする。

「蓮華孫権にも手伝わせましようか？」

「いえ、蓮華様はずっと気を張り詰めておいででしょうし、今は休んで頂いた方がよろしいかと」

蓮華様は今回の出征で功績をあげようと思うあまり、どうもやる気が空回りしてしまっているように感じる。例えば、必要以上に巡回を行おうとしたり、戦場へ偵騎を頻繁に出しすぎていたり。肩に力が入りすぎているのは明らかだ。ちなみに、今も思春甘寧を連れて陣の見回りに出ている。

あまりにも将が姿を見せる回数が多いと兵達の気が休まらないので、適度に目こぼしする事も重要なのだが。あまりに兵達に疲れを溜めすぎると実戦で実力を発揮できなくなるし、不満が溜まっていくので加減を見極める必要がある。万事において真面目にこなす蓮華様だけに、やりすぎないか少し心配だ。

「あの子は戦場に慣れていないから仕方ないと言えば仕方ないでしょ。その辺りの加減の仕方は経験積まなきゃ難しいし」

「まったくもってそのとおりなんだがな。もつとも、蓮華様は内を治める才に長けているわけだから、軍事を配下に任せてしまえば必要以上に戦場に慣れなくてはならない理由も乏しくなるんだが」

「蓮華自身が望んでいる以上何度でも連れ出すわよ。 実際安定した

治世のためには太守自身も戦場を駆ける場合もあり得るわけだから」

「ま、当然と言えば当然よね。 領地が豊かになれば略奪のために賊が押し寄せる事も考えられるし、その時に人手が足りなければ太守自身が兵を率いる場合も十分にありえるんだから。 いざその時に兵を率いる事ができません、なんて許されないわよ」

とはいえ、今の呉の陣容を考えれば蓮華様が直接兵を率いる必要性は薄い。そう断言できるくらいには呉の人材は充実している。

個人的な意見としては、蓮華様に領地経営の責任者になってもらい、軍事の最高責任者として雪蓮を就けるのが最適では無いかと考えている。雪蓮にもそう相談した上で誠蓮様へ意見の一つとして進言している。内政の一点についてだけ語るならば、雪蓮より蓮華様の才

が優る。時間が経たなければ結果が見えてこない内政は、腰を据えてじっくりととりかかる必要がある。それは雪蓮が苦手とする分野だけに、蓮華様に期待がかかるのも当然だろう。雪蓮は民達と交わり話を聞く事は好きなので、民心を慰撫する事は真面目にこなせる。しかし、堤を作ったり開墾地を広げたりする時間が必要な物に関しては、結果が出る前に他の事に興味が移ってしまう。

蓮華様が文官と共に内を栄えさせ、雪蓮が兵を率いて外に領地を広げていく。孫家の領地を栄えさせるにはその体制が一番だろう。目の前にいる二人が、現在治めている呉郡よりも支配地域を増やしたいと考えている事は、今さら確認をする必要もない。

もつとも、その新しい体制を実現するためにはまだまだ時間が必要だろう。現当主の誠蓮様はまだまだ働き盛りで引退などしないだろうし、蓮華様はまだ経験不足。順調に行けば少なくともあと十年は今の体制が続くだろう。それまでの間に蓮華様が経験を積み、領地経営を任せられるのにふさわしい器を備えてくれれば良いのだが。母と姉が戦で無類の強さを誇るためか、蓮華様自身も同じようであろうとする気持ちが強すぎるくらいがある。自分が二人に優る部分もたくさんあると自覚してくれば多少は違うのだろうが、今のままでは少し物足りなく思う。

私がそう口にするのと、二人とも首肯した。

「将来的には分からないけど、今は焦らずに経験を積んで欲しいというのは同感ね。　どんなに望んだところで私や雪蓮になれる訳ではないのだから」

「私や母様が健在の内は、色々な戦場に連れ回して慣れさせるくらいで丁度良いんじゃない？　無理させてもしょうがないし」

「しかし、本人が無理をしていると自覚しないまま焦って気負っているように見えるのですが……」

私がそう懸念を口にするのと、再び二人は頷いた。ただし今度は少し苦い表情を浮かべながらだが。

「結局のところは、最初の問題に突き当たるわけよね」

「経験不足、ね。　こればかりは時間をかけないとしようがない事よ

ね」

「師事に値する、良い先達が呉に居れば良いのですが」

私達が蓮華様になつて欲しいと望んでいる役割は、おそらく『宰相』が一番近いのだろう。しかし、現在の呉の陣容は、将と軍師には恵まれているのだが政務の専門家である宰相になれるような人材はいない。私や弟子の穩（陸遜）が兼任という形で動いているが、思考の比率は内政よりも軍事に偏りがある。後方に控え、前線を支える役割に徹する事ができるほど、穩やかな気性をした孫家の臣下はいない。だからこそ、蓮華様にその役をと期待しているわけだが。

「いつそ麟に預けてみる？」

「それも一つの手かもしれないわね。 ついでに婿として連れて帰ってくれば一石二鳥だし」

それも一つの方法だろう。

子方は必要が無ければ兵を用いる事を嫌い、使う時にも自身より軍事に秀でた者に指揮を委ね、自分は後方で前線を支える役をする事が多い。まさに、私達が蓮華様に望んでいる姿に極めて近い。そういう事を学んで来てもらえるなら、蓮華様を子方に預ける甲斐は十分にあるだろう。

さらに、徐州で独自に行っている内政の方法なども併せて学んでももらえるなら、孫家が受ける恩恵はさらに大きくなる。

しかし、婿云々に関しては難しいかもしれない。子方本人はともかく、徐州の陶州牧とその腹心達が許さないだろう。それくらい、徐州における子方の影響力は大きくなっている。

まあ、内政を学ばせるために子方に蓮華様を預けるのは良いのだが。

「逆に、蓮華様が徐州に行ったきり戻つてこれなかったらどうするのですか？」

この時勢だ。子方本人はともかく、徐州官吏すべてが清廉潔白な為人をしているとも限らない。そのまま拘束される事も有り得る。

「どうするって……どうしようかしら？」

「考えてから同意しなさいよ。 鬼婆」

「……喧嘩を売っているのかしら。馬鹿娘」

「お二人共です。もう少し考えてから物を言ってください」

思わず額を押さえながら、今にも喧嘩を始めそうな二人に対してぼやきを口にしてしまう。二人とも性質たぢが似ているせいか、ふとした拍子に一触即発という空気になるのは切実になんとかして欲しい。

しかしこの争乱が終わった後の事を考えれば、近隣に位置する州であり、黄巾の乱から逃げた民達を吸収して飛躍的に人口が増えている徐州の重要性はますます増していく。現在は商業のみの交流に留めているが、今後はより様々な連携を取れるように、関係を深めておく必要がある事は前々から考えていた。雪蓮の言葉は思い付き（おそらくはいつも通りの勘）だろうが、私も誰か派遣する事で繋がりを強めておく事は考えていた。それが主君の娘であり、いずれ孫家の中心となる経験を併せて積む事ができるならば願ったり叶ったりだろう。

いざという時の逃走経路を準備し、徐州から呉までの道のりを突破する際に力を発揮できる将を護衛として一緒に派遣すれば、ある程度は安全を確保する事ができるだろうか。

しかしそうやって人を派遣している間は、残った人間で仕事をやりくりするしかなくなり、全員が今より忙しく仕事に終われる事になるだろう。さらにこの戦いが終わった後、呉近隣の領地を攻め取りにかかる事になる。あまり兵を率いる事ができる人間を郡の外に派遣したくはない。それらの問題を何とかできる方策を思い付けば、蓮華様の徐州入りのための根回しをすぐにでも始めるのだが、なかなかままならない物だ。

目の前で額を突き合わせて互いに挑発を始めた二人を止めるため、一時的に思考を止める。私以外にこの二人を止める事ができる人材も見つけておく必要があるか。

心中で小さくため息を吐きながら、どうやって止めた物かと私は痛み始めた頭を眉間を揉む事で和らげようとするのだった。

第四十八話 Drink The Elixir
—からたちの花—

—秋蘭—

段々と日が長くなり、過ごしやすい季節が近づいているとはいえ、流石に日が暮れると寒さに厳しさが増す。天幕内に居る私でもそう感じるのだ。外の兵達は凍え、身を竦ませている事だろう。兵達には暖を取る事を忘れぬよう、典章琉流を通じて命じておいた。料理の腕が達人な琉流ならば、体を温める料理を振る舞っているかもしれない。唐辛子や生姜などの在庫も後で確認する事にしよう。現実の光景から意識を逸らし、私はそんな事を考えた。

董卓軍との間に停戦する事を決めた軍議の後、我らは客を天幕に迎え入れる事になった。いや我らが招いたのではなく、客の方から訪れてきたので急遽迎える事になった、というのが正確だ。何にせよ、今の様な状況になっている理由は、その客達が訪れた事から始まっている。その客達を天幕へ招き入れ、客が手土産曹操(小さい壺に入った酒)を華琳様へ献じて、私の同輩である桂花荀彧以外の人間が名乗った後に、それは起こった。

自分以外の全員が名乗った後も桂花は口を開かず、客の一人である男を睨みつけていた。男がいつまでも名乗らない桂花へどうしたのかと疑問を持ち、視線を彼女へ移して小さく首を傾げた後『じろじろと見ないで！妊娠しちゃう!!』と言いだめたのだ。それを聞いて呆気に取られた客達の前で、男嫌いを公言している桂花は長舌を振るい、『如何に男が不潔であり、女よりも劣った生き物であるか』という自説を熱弁し始めた。

華琳様はそれを聞いている客の様子を面白げに観察している。桂花を止める様子が見られない以上、この無礼とも言える行為は華琳様の期待に沿う事なのだろう。おそらく他人ひとを試し、器量を見定めんとする主の困った悪癖が頭をもたげたのだと思う。

私の隣に立つ姉者は何度もその主張を耳にしている事も関係して

か、退屈そうに話を聞き流している。とはいえ、油断する事なくいつでも動けるように自然体を保っているのだが。その様子から、客達が我らへ不埒な真似を働こうとするならば、即座に前に出てその凶刃を受け止め、逆に切り捨ててみせる事は想像に難くない。そしてそれは私とて同様である。華琳様の側に侍る武人はべが我らだけである以上、身を挺して華琳様の盾となり、兇手を討つ剣となる必要がある。

しかし目の前の客の様子から伺うに、今のところは凶行に及ばないだろうと思う。腕が立ちそうな人物が一人居るが、特に不審な動きをしていない事もその推測を補強している。

さて、改めて客の方へ目を向けて見ると、三人の人物の姿が有る。その客達は私達の対面に位置する場所に立っている。

一人は幼さを残す愛らしい顔立ちをしているが、不機嫌そうに眉根を寄せている少女。桂花が話し始めるまでは落ち着いた様子を保っていたのだから、おそらく桂花の物言いに不服が有るのだろう。聞き慣れている私からしても無礼な物言いをしていると思うのだから、客達からしたらなおの事不愉快に感じるだろう。申し訳ないとも思うが、華琳様が満足するまでは付き合ってもらおうしかない。

二人目は私や姉者と比べて小柄な体軀をしているが、見ただけで武の心得があると分かるような立ち方をしている少女。その不要な力が抜かれ、いつでも動く事が出来るであろう姿勢を保っている様子は、私や隣の姉者に通ずる物がある。なかなか腕が立ちそうだ。この娘も目鼻立ちが整っているが、先ほどの娘と同様に顔をしかめさせてその美しさが少し損なわれている。

三人目は桂花が長舌を振るいだす原因となった、先の二人の前に置かれた椅子に腰掛け、桂花へ視線を送りながら口にする言葉へ律儀にもいちいち頷いたり相槌を打つ男。この男も特に醜悪な顔立ちというわけではなく、ここにたどり着くまでの旅塵が全く無いわけでは無いが不快に感じないように清潔感を保っており、標準的と言えるくらいの容姿はしている。しかし、戦場であっても映える後ろの二人の容貌と並べると、どうしても霞んでしまう。しかし一人だけ椅子に着き、少女達がその後ろに立って控えているという位置関係から、男が

二人よりも位が上である事が窺える。

端から見れば、同性を好む嗜好を持った我が主の関心を買うために、男が一族の美しい娘を妃妾として捧げに来たと思うかもしれない。しかし、この男の噂から鑑みるに、華琳様に見え透いた媚びを売る事はないだろう。

「……というわけで、男は下劣でどうしようもなく不潔な存在なのよ！ だからあんたも巷で麒麟の化身とか言われて調子に乗ってるんだらうけど、一皮剥けば最低の……！」

「それをそのまま教育方針にすると、とんでもない怪物を生み出す事になるでしょうし、自分の子だろうと他所様の子供だろうと、そのまま話して聞かせるのはおやめくださいね」

自説の要諦を話そうとした桂花を遮り、男は薄ら寒そうにそう口を開いた。

男の名前は糜芳。徐州の官吏であり、華琳様の治める□州にも、将能吏、そして人物鑑定の名人としてその名声は響いている。

少女達も糜芳同様に徐州の官吏である。太史慈と諸葛瑾と名乗っていた。

太史慈という名については、徐州の将の中でもなかなか優れていると聞いた事が有るが、寡聞ながら私は諸葛瑾の名を聞いた事はなかった。しかし、劉備達の軍師に姓が諸葛の者が居たと記憶している。容姿も良く似ているから、おそらくは血縁者なのだろう。もしそうであるならば、武に秀でたところのなかったあの姉妹と同様、おそらくは武ではなく文を修める事で身を立てる者なのだろう。本人の様子を窺っても、武芸が得意なようには到底見えない事もその推測を裏付ける。

さて、そんな客達がわざわざ私達の陣幕を訪れたのは、交渉したい事があるからと聞いている。

華琳様と桂花、そして私の三人はその交渉は、徐州からここまでの兵站輸送のためではないかと予想が一致している。

□州は洛陽の東方、目と鼻の先と表現できるほど近くに位置している。その□州からさらに東の土地である徐州から汜水関まで補給線

を繋ぐなら、○州は通り道となる。しかし実際にそういう経路を使うためには、○州牧である華琳様に通行の許可を取る必要がある。物資の輸送を担うのが徐州兵である以上、許可無く領地に兵を入れるのは侵略となる。そういう余計な軋轢を生まないためにも、事前の交渉は必須となる。

我らとしても、そう交渉を持ちかけられる事は望むところである。自分達で兵站を賄うという事は、裏返せば○州などの近隣から現地調達を行わないという意味表示と見る事もできるからだ。現地調達といえども聞こえはいいが、それは略奪に他ならない。そうせず尋常な手段で補給を賄ってくれるのなら、十分に我らの利益となりうる。交渉を断り、いたずらに波風立てる必要はない。

とはいえ、こちらからすればこの交渉は丸く収める必要がない事も事実である。交渉が不首尾に終わり、略奪を始めるならば即座に討つてしまえばいい。望むのがあちらである以上、こちらから下手に出る必要はない。桂花の暴言とも言える言動も、それを前提にしているのだろう。……多分、きつとそうに違いない。

さて思索を切り上げて目の前の光景に意識を戻すと、麿芳に話を遮られた事で桂花はギャーギャーと騒いでいる。少女二人はそれを五月蠅そうに見ているが、麿芳はそれを無視して口元に手を当て、目を伏せて沈思を始めた。ふむ、桂花の罵声にも容易く声を荒げようとはしないか。そういう態度を取らずに落ち着きを保った姿に私は少し感心した。

例えば私の姉者ならば、そういう言葉を華琳様や自分へ向けられたなら即座に反発し、喧嘩を始めるだろう。まあ姉者ならそんな姿も可愛いので問題はないと断言できるが。

さて麿芳はというと、しばらく桂花の怒声を浴びながら黙然としていたが、小さく溜息を吐いた後、桂花に向き直った。

「そう大声を出していると喉が渴きませんか？」

麿芳は桂花の罵声などなかったように、そう問いかけた。

その泰然自若とした態度が頭にきたと思われる桂花が更に声を放たんと息を吸い込んだところで、麿芳は視線を華琳様へ移し、問いを

発した。

「折角なので、手土産に持ってきた酒を開けませんか？ 臣下殿の聲が枯れても、明日以降の軍勢の指揮に不都合がありませんか？」

「ふむ、噂に名高い徐州の酒ね。ただ、喉を潤すには酒精が強すぎて人を選ぶとは思うけど」

華琳様が独り言の様にそう呟いた。華琳様が口を開いたのを見て、桂花は慌てて口を噤んだ。流石に華琳様の言葉を遮ってはならないと思うくらいの理性は残っていたようだ。

「お湯や水で割って飲んでも良いですよ。仰るとおりに酒精が強いんですから。ちなみに持ってきたのは蜂蜜と薬効の有る果実を一緒に漬けた酒です。おそろく喉にも良いでしょう」

「薬効のある果実、ね。何を使っているのかしら？」

「枳殻からたちですよ。領内で垣根に使う家が多いので、手に入りやすいですし」

「枳殻……」

華琳様はそう呟くと、先ほどの麩芳の様に顎に手をやり考え始めた。私には理解できなかったが、華琳様の脳裏に引つかかる物が有ったのだろう。隣の姉者はそんな華琳様の様子に少し動揺し、横目で私に目配せをしてきた。何か麩芳の言葉に無礼がなかったかを聞いたのだろうか。しかし、私にも華琳様が何に引つかかったのかは分からない。だから姉者へ向けて小さく首を横に振った。私にも分からない事は答える事は出来ない。

この場にいる他の人間の様子を見ると、麩芳は考えている華琳様を面白そうに見ており、客の二人と桂花はそれぞれの主へ困惑した視線を向けている。まるで先ほどまでの構図とは逆になっている。

そうこうしているうちに、華琳様は顔を上げられて麩芳へと向き直り、問いかけをされた。

「麩子方。貴方の領地はどこだったかしら？」

「琅邪国の莒県ですね。楽毅の落とす事が出来なかった地として有名でしょうか」

麩芳は華琳様からの質問に注釈を付けながら答えた。確かに莒県

について説明を加えるならば、樂毅の連合軍と絡めるのが分かりやすい。

これは余談だが、莒県は琅邪国でも規模の大きい県の一つだった。しかし、梁冀の治世の頃に賊が跋扈し領民の多くが離散したという歴史がある。徐州牧に陶謙が就いた頃から少しずつ復興が始まっていたのだが、糜芳が県長に就いた事でその名を慕い、多くの民達が糜芳の県長就任を歓迎した。さらに黄巾の跋扈で離散した近隣州からの難民も受け入れ、ようやく戸数が一万にまでなっている。したがって、糜芳は今は『県長』だが、もうじき『県令』へと役名を改める事になるかもしれない。

それだけ急に民が増えれば食料が足りなくなりそうな物だが、糜家の蔵を開く事で賄いきつたと聞く。華琳様が陳留太守になった際にも曹家の蔵を開いて民達へ施しを行ったが、ほぼ同時期に同様の事をしているのは興味深い。

そう私が考えていると華琳様はくつくつと喉で笑い始め、ついには声を上げて笑った。糜芳以外の人間から困惑、そして怪訝な視線が華琳様に向けられるが、特に気にされた様子はない。

ふむ？何処かに華琳様の琴線に触れる様な物が糜芳との会話の中に有ったのだろうか……。

そうしている内に華琳様は笑いを収め、糜芳へと向き直った。

「驚いたわ。まさかこういう場になると予想していたの？」

「神仙じゃあるまいし、そんな事出来ませんよ。完全に偶然です」

「偶然にしては出来過ぎね。私達の間にはなかなか縁が有りそうだと解釈する事にするわ。……さて、糜子方殿。臣下が……いえ、

そうではないわね。我らの無礼な振る舞い、謹んでお詫びするわ」

「ご賢察畏れ入ります。大した事ではございませんのでお気になさらず」

笑いを収め、糜芳へと姿勢を正した華琳様の謝罪に、糜芳は謙讓の言葉を返した。

華琳様が桂花の事だけではなく自分も含めた言葉へ言い直した事から、糜芳の言葉の何処かに華琳様への諷諫が有り、華琳様がそれに

気づいたという事なのだろう。

私はそれに目を見開き、姉者はその華琳様の様子に驚いてあわあわとし始め、桂花はこんな男に謝罪など必要有りません、と喚いている。そんな臣下達の様子など斟酌せず、華琳様は更に言葉を紡いだ。

「それから、琅邪国で日々を過ごす父への有形無形の糜家からの支援、娘として心から感謝します」

「そちらはもつと頭を下げる必要は無いかと。 我らとしても助言や口添えを頂いたりしておりますので」

そこまで言うと、糜芳はしまったと言うように表情を歪めた。

「すっかり失念しておりましたが、孟徳殿へ御父君よりお言葉をお預かりしております。 申し訳ありません」

「気にする事はないわ。 ……子供扱いされて腹が立ちそうだけど、一応聞かせて頂戴」

糜芳はそう言ったが、本当に忘れていたのだろうか？こちらへ頭を下げる口実を作るために忘れていたふりをしたというのは考えすぎだろうか。

『油断せず事に臨み、漢室のために良く励みなさい』だそうです」

「言われずとも分かっている事をわざわざ言うなんて、確実に子供扱いしているわね……」

巨高様曹嵩からの言付けを聞き、華琳様は小さくそうこぼした後、渋い顔をなされた。しかし、それでもどこか嬉しそうに見える。一時は親子の間で会話すらなくなったのを知っている身としては、人伝てとはいえ親らしい言葉を華琳様へかけてくださった巨高様の心遣いを嬉しく感じる。巨高様が徐州に疎開なさり、華琳様と距離を取った事は結果的に良い方に働いたようだ。

華琳様はそんな気分を変えようとするかのように、小さく溜息を吐いた後に穏やかな表情を作り、私に顔を向けた。

「秋蘭、酒器の用意を。 折角だから客人の持ってきた酒を頂きながら話す事にしましょう。 斉の枳殻を味わいながら、ね」

斉の枳殻……。 ああ、なるほど。 華琳様の言葉で、ようやく糜芳の諷諫が何処にあったのかを理解できた。

桂花や太史慈と諸葛瑾も理解出来たのだろう。酒器を取りに天幕を出る際に三人の顔を見たが、桂花は顔を怒気で真っ赤にしながら麩芳を睨みつけており、客人の少女達は眉間に寄っていた皺が綺麗に消えている。おそらく麩芳が桂花をやり込めた事で溜飲が下がったのだろう。

ちなみに私の横に立っていた姉者はというと……どうして他の者が華琳様の言葉に反応したのかが分からずにおろおろと様子だ。ああ、困った顔をしている姉者は実に可愛いなあ。

心中で何度も深く頷きながら、私は天幕を出た。

第四十九話 A n i m a l s — 犬と鳥 —

— 華琳 —

「さて、貴女達は麝芳をどう見た？」

先ほどまで上気していた肌を湯で清め、桂花荷臈の艶姿の残滓に茹だつていた頭も平静に戻った事を確認した後、私は春蘭夏侯惇と秋蘭夏侯淵の天幕に入って開口一番にそう問いかけた。

突然の私の来訪に、春蘭は慌てながら、秋蘭は落ち着いた動作で居住まいを正した。

酒を飲んでいたのでだろう。二人とも頬がほのかに色付いている。春蘭が私に呼ばれなかった事を愚痴り、それを秋蘭が慰めていたといった所かしら。そうだとしたらその健気な態度へのご褒美を考えたおかなくてはね。

「か、華琳様。 わざわざお出でにならずともお呼び頂ければ……」

「今は桂花が寝ているから無理よ」

そう答えた後、私は空いている席に腰を掛けた。

私が天幕を出るまでは褥しとねで幸せそうな顔をしながら気を失っていた。服は着ていないが毛皮を掛けてきたから風邪をひく事は無いだろう。……少し激しくやりすぎたかしら。

それにしても、相変わらずあの子はいじめ甲斐のある良い表情を浮かべる。思い出すだけで頬が緩みそうになるのを意志の力でねじ伏せる。

しかしこの場にいる春蘭も、私の言葉を聞いて非常に良い表情を浮かべていた。悔しがるような、切ないような、折角落ち着いた身体の奥から、再びふつつつと色々滾ってくる堪らない顔だ。思わず手を出したくなるが、ぐつと我慢する。獣肉と同じように、数日待つて熟成をさせた方が美味しく味わえるだろう。きつとその方が大いに乱れしてくれるだろう。我慢よ、私。

「それで、貴女達は私の質問には答えないつもりかしら？」

喜色を顔に出さないように気をつけて、あえて厳しい表情を浮かべてそう言葉を作る。

「は、はい。 麿芳についてですね。 えーつと……」

「同じ内容を華琳様のお耳に入れる訳にもいきませんので確認したいのですが、桂花は荒れていましたか？」

とにかく言葉を作って一刻も早く私に答えようとする春蘭に対してまずは探りを入れてくる秋蘭。 こんなところにも性格が現れるのが少し面白い。

秋蘭の質問の意図は、桂花の麿芳への評価が否定的な内容だったかを気にしての事だろう。 確かにあの子の話すような内容を二度も三度も聞く気にはなれない。

「ええ。 良い様にやり込められてしまったし、少し不機嫌そうだったわ。 『今度会ったらただじゃおかないわ！』と息巻いていたし」

おかげで少しばかり力を入れて慰める事になったわけだけど、それで良かったと思う。 麿芳の諷諫がなくとも、前々から男性を高官に就ける事について考えてはいた。 ㊦州牧の地位にいるとはいえ、私はまだこの程度の地位では満足していない。 より高みを目指していくのであれば官吏の数は必ず必要となるし、一郡を任せられるような有能な者ならばさらに希少性は増す。 その席を私の好みの女性だけで埋めて行くのが理想ではあるが、流石に無理がある。 当然目指しはするが。

男を抜擢するにあたって差し障りがあるとすれば、私の右腕として政務を執る桂花との軋轢だろう。 桂花が個人の感情で政務を滞らせるとは思わないが、相手側が桂花の言動に萎縮してしまう事は十分に考えられる。

それ以外にも、あの子が男への物言いを改めない限り、このような問題の噴出はいくらでも起こりうるだろう。 そういう事情が有ったので、他の勢力の人間が先じてそれを伝えてくれたのは渡りに舟だった。 あとは私が麿芳の言に無言の肯定を示しつつ宥めすかせば、少しは男への当たりの強さを緩めることはできるのではないだろうか。 駄目なようなら身体に教え込むだけなので、それはそれで楽しみが増える事になる。

いつまでも麿芳に言われっぱなしで我慢できるような子ではない

し、最終的には納得をしてくれる事だろう。

「なるほど。……少々考えをまとめる時間を頂いてよろしいでしょうか」

そう問いかけてきた秋蘭に頷きを返し、二人が答えを返して来るのをしばし待つ。その間、使っていない器を手にとって酒を注いで喉を潤す。……これも上等な酒のはずだが、麿芳の持ってきた酒の味が記憶に有るせいか少し味気なく感じる。酒造の方法について書かれた本が書庫に有ったはずだし、領地でより上質な酒を作る事を試してみてもいいかもしれない。

「……犬、でしょうか。主の命令無しで動こうとしないですじつとしているような。ただ、何と言うか……」

しばらく黙って考え込んでいた春蘭は首を傾げながらそうぽつりと呟いた。その様子を見るに、なぜそう感じたのか、自分でも理解できていないのだろう。

ふむ、春蘭は動物に例えたか。この子は書に親しむ事がないため、故事を使つて物事を語る事はないが、独特な感性を持ち、人に真似出来ないような思考を辿る事があるから侮れない。

「続けなさい」

「はっ。……しかし、こう、覇気が無いというのか、落ち着き過ぎているというのか」

「なるほど。番犬か」

自分で感じている事を上手く言葉に出来ない春蘭が何とか説明しようとしているのを聞き、私は先回りしてそう声を出した。

「貴女達と比べて麿芳は武の腕前は心許ないのでしょね。それで貴女達からすれば覇気が無いように見えてしまう」

「ああ、そうですね！ 確かにそれで覇気が無いように見えたのかもしません」

なかなかに興味深い例えだ。やはりこの子の考え方は面白い。口元が笑みの形になるのを感じながら、私は更に口を開いた。

「春蘭。貴女が戸惑っている理由にも察しがついたわ。貴女は麿芳を自分自身や秋蘭に近い存在だと感じている。だけど自分達と

比較するには武力が無いせいも存在感が薄い。そこに違和感を感じているのだと思うわ」

この子達も性質的には犬に近い物がある。飼い主である私に忠実であり、献身的であろうとする。もちろん私にとっても可愛い臣下達だ。

この子達を同じ様に犬に例えたとするならば、さしずめ春蘭は私が命じるか、相手を噛み殺すまで止まる事のない闘犬。秋蘭は私のために獲物を追い込み、狩りの手助けをする猟犬だろう。

「しかし華琳様。先ほど麿芳の事を『番犬』と例えましたが、それはどういう意味でしょうか？」

「春蘭。番犬の仕事は何か分かる？」

「は？ それはもちろん、客でもないのに家に侵入しようとする盗人などから家を守るためです」

「では、そういった賊以外が家を訪れた時に吠えかかるのは良い番犬と言えるのかしら？」

春蘭の言った事は正しい。人に懐き、必要以上に親しくする犬に番犬の役目は務まらない。しかし、誰かれ構わず吠えてくる犬もまた良い番犬と言う事はできない。

「猛々しいだけでは主人が招いた客もその家に入る事は出来ない。

その相手を入れても良いのか、追い払うべきなのか、その見極めが出来て初めて良い番犬と言う事が出来るのよ」

「宋の猛狗ですか」

「そう。威を持って接するだけでは、誰もその家へ客として訪れる事はなくなるわ」

途中で挟んできた秋蘭の言葉に頷く。

酒屋であるならば酒が酸っぱくなるだけで済むかもしれないが、官吏、君主の場合は助言や諫めの言葉が耳に入らなくなる。そうなった時の不利益は計り知れない物となるだろう。

そう言った意味では、秋蘭はともかく春蘭には番犬は務まらない。ただし、麿芳にも闘犬の役割は向かないだろう。もつとも、麿芳のあの態度が木鶏の境地に至っているが故であるのならば、闘犬も容易に

務まるのだろうか……その可能性は低いだろう。

「あれ？ そうなると今日の会談での桂花の態度は……」

「客に吠えかかる番犬の見本ね。ただ、あれは私の指示だったから気にする必要は無いわ」

「そうだったのですか!?!」

「そうだったのよ」

噂の麒麟の化身を怒らせて、どういう反応をするかを確認し、為人を見極めたかったのだが。しかし、まさか怒りもせずに落ち着いて諷諫をされるとは思っていなかった。あれは私の意図を察した上でかわしたのでしょね。ままならない物だ。

「秋蘭、貴女は?」

私も麿芳について考察を続けているが、秋蘭の意見を言うように促した。

秋蘭はそれを受けて一つ頷いた後に話し始めた。

「姉者の意見と少し似通ってしまいましたが、やはり静か、落ち着いているという印象を受けました。ただ、姉者は覇気の無さと感じたようですが、私は根がしっかりと張った樹木のような揺るぎなさを感じました」

「桂花の面罵を意に介さなかったのはそのためだと?」

「御意。私や姉者の武への自信に近いのではないかと」

この二人の武の腕前は一騎当千。それを揶揄されたとしても、武を振るう機会を与えれば簡単に払拭してしまうだろう。なるほど、麿芳が桂花の言葉に揺らがなかった根底にあるのは胸の内に根ざす自信と取ったか。

二人とも麿芳の本質は自分に近いと感じたという事だろう。実に興味深い。

秋蘭はそのまま言葉を続けた。

「麿芳にとっては、おそらく官吏としてあげてきた治績がその自信の根源でしょう。治安の安定と収穫の増加、噂に聞くだけでも能吏と評価できます。それに加えて領内の賊討伐でも戦功を上げています。相手がろくに鍛錬をしていない賊とはいえ、被害をほとんど出

さずに鎮圧をしている事は見逃せません」

こんな時代だ。賊の跋扈を許さない戦の強さも官吏の資質の一つに数えられる。

兵を率いる将として、民を安んじる事が出来る能吏として、そのどちらかを振舞う者はそれなりにいるだろう。しかしそのどちらも兼ね備えるとなると非常に数は限られる。その上、それで驕り高ぶる事なく自然体で居続けられるとなると更に減る。

それらすべてを持ちあわせた、史書に記された人物の名を私は口にした。この名前を連想したのは、先の秋蘭の言葉を聞いたせいだろう。

「大樹將軍の風格か」

「流石に麿芳がそこまでの大器を持ち合わせているとは、私には思えません。しかし麿芳の能力はともかく、為人を馮異と同じくするならば降る相手は限られるはずですよ」

「なるほど。麿芳を臣下に組み入れるならば、彼を相手取って争う事を避けるべきだと言うのね」

「御意」

流石秋蘭、というべきか。すっかり私が麿芳に興味を持っているのを察して的確な進言をしてきた。

麿芳が大樹將軍ほどではないにしても、私は麿芳を臣下に手に入れたいと考えている。麿芳自身の民政の手腕に加え、麿芳の近い人間もまとめて臣下に組み入れる機会が出来るのは非常に大きい。

「しかし先ほども言いましたが、麿芳が本当に大樹將軍と同じ考え方をするかは分かりません。打ち倒した後に縄目を解き、その手を取る事もできるかもしれません」

「いえ、それは無いでしょうね。麿芳は戦乱を楽しむ事を良しとはしない。それは今回の申し出からも分かるわ」

今回麿芳が私達に申し出た事。それは『 州における物価の安定』だった。私達がしていた補給に関しての相談というのは一部のみ当たっていたわけだ。

孫子でも語られているように、戦乱のある地域では物価が高騰す

る。それは今回の連合でも例外ではない。そしてそれは、近隣の州である徐州にも波及している。

「物価の安定は民の生活に直結するわ。それが乱されるのを嫌った以上、自身の行動の中心を領民の平穏な暮らしに置いているのは間違いない。それを乱す者が相手ならば、それこそ盗人を追ひ払う番犬のように振舞うでしょうね」

犬ですら棒で打たれた事を忘れない。ましてそれが人なら語るまでも無いだろう。

本当にままならない物だ。心中で溜め息を吐いてしまう。

さて、聞きたい事は聞けた。そろそろ天幕に戻るとしよう。私は酒器を机に置き、小さく伸びをした。

「それじゃ、私は天幕に戻る事にするわ。貴女達も早く休むようにね」

「あ、華琳様！ もう一つだけお聞かせください！」

私の秋蘭との話の間、ぽかーんとした表情を浮かべて黙っていた春蘭が私を呼び止めた。珍しいと思ひ、立ち上がろうとしていた体をもう一度椅子に下ろし、春蘭に顔を向けた。

「正直言つて華琳様と秋蘭の話には着いていけなかったのですが、一つ疑問があります！」

「本当は理解して欲しいのだけど……言つてごらんなさい」

真面目な顔をしながら話を理解出来なかったと宣言する春蘭に脱力しつつ話を促す。

「はっ。 糜芳も『民の平穏な暮らし』を望んでいるのですよね？ それならば劉備達の目的と合致するのではないのでしょうか。 劉備達と徐州が手を組めば、それなりに厄介になりそうな気がするのですが……」

「そうなる可能性は多いに有るわよ。 けど割りとすぐに喧嘩別れるんじゃないかしら」

結構な確信を持って私は春蘭の質問に答えた。

「劉備の目的は『力無き民を救つてみせる事』。 糜芳の目的は『領民に安寧をもたらす事』。 この二つの違いは分かるかしら？」

「違いですか？ ええと……」

頭を抱えてうんうんと唸り始めた春蘭を見て、秋蘭は苦笑を浮かべながら私へ目配せをしてきた。

私は小さく頷いて助け舟を出す事を許可した。

「姉者。 見ている範囲が違うんだ」

「範囲？」

「そう。 糜芳はあくまで『領民』を平穏に導く事を主眼に置いている。 それに対して劉備は『弱き民』を救う事を目的としている」

秋蘭はそう言ったが、春蘭は理解できないようできよとんとした目をしてしている。

「糜芳が考えているのは、領内で生きる民達の安寧。 だから、今の状況ならば徐州を中心にして、精々近隣に位置する他州の郡くらいまでしか兵を動かさない可能性が高い。 仮に遠い益州や涼州で異変が有ったとしても、情報を集めるくらいで進んで兵を出すような事はないだろうな。 もちろん、勅が下れば話は別だが」

「逆に劉備は『この中華に住むすべて』の弱き民を助けようとしているわ。 自身と関係の無い遠くの土地でも、凶事が起こったら迷わず駆けつけるでしょうね」

私と秋蘭の言葉に春蘭はなるほど、と言わんばかりに何度も頷いた。

更に私は言葉が続けた。

「そういった意味では、劉備に比べて糜芳の志が低いと言ってしまうかもしれないわね。 まるで天高く飛ぶ鴻わわとりの大志と燕つばきが持つような小志を比べた時のように、ね」

「ふむふむ。 それならば劉備の方が優れているわけですか」

「いえ、そういうわけではないわ」

勘違いをさせるような言い方をしたのは、当然わざとだ。 間髪入れずに否定した事で、私が予想した通り春蘭は驚いた顔を作った。 それを見て、私も小さく笑って言葉が続けた。

「確かに劉備の方が志が大きいと言えるのかも知れない。 だけど、本当にそれは実現できる志なのかしら？」

これは劉備達から話を聞いた時からずつと持ち続けている疑問でもある。

例えば×州で何か変事が起きたとして、劉備はそれを解決できるのだろうか。いや、おそらく駆けつけて解決する努力は最大限行うだろう。しかし……。

「まだ義勇兵として放浪していた時は、志を同じくする者達しかいなかったのだから良かったのかもしれないわね。しかし、劉備も今は領地を持つ官吏よ？ 延々と出兵を続けるならば、その分の賦役を民に強いる事になるわ」

そして、そうなった時に真つ先に反対の意思を表明するのは麩芳だろう。民に長々と要らぬ負担を強いる事を良しとはしないはずだ。もし麩芳が声を上げずとも、反対する者が必ず出てくる。そう、必ずだ。

領土を奪うために行う戦役ならば、まだそういった声の主は納得を示すだろう。治める土地が増えれば、よほど痩せた土地でない限り税収が増え、税率を下げ、民達を安んじる事を検討できるのだから。

それに加えて、官吏でいる間には他の土地で自由に兵を動かす事が出来ないという問題もある。黄巾の乱の際に、春蘭が孫策に借りを作つた時の事を考えれば話は早いだろう。土地に縛られずに自由に大地を行き来できるのは、官吏では不可能だ。

「しかし、逆に劉備はそれを良しとは出来ないでしょうね。自らの大義に背を向けるような行動は慎まなくてはならないから、自身の利に繋がる事は極力排除しようとするはず」

王道を歩む難しさと言うべきか。民達からの支持を失えば、劉備は翼の一つを失うに等しい。優れた臣下というもう一つの翼が残るとはいえ、それだけでは羽ばたく事が出来ずに墜落するだろう。

「そういった理由から、麩芳は劉備に自重を強いるはず。劉備が大

人しくそれを聞けば共存できるのでしようけど……」
「おそらく無理、でしょうね。苦しむ民がいるのならば、目を閉じて知らぬ振りを決め込む事は出来ないでしょう」

「それで結局は麩芳とは決裂してしまう、と。なるほど、そういう事

ですか。しかし華琳様。仮に糜芳が妥協して、劉備に全面的に協力すれば話は違うのではないでしょうか」

「いえ、それは無理よ。もっと現実的な問題があるから」

現実的な問題、それは兵を養うための領内の民力だ。

「如何に優れた政を行おうとしても、働き盛りの男手を軍に取られると人手が足りなくなる。そうなってしまおうと、思うような成果は上がらないわ。いずれは軍を支えることは出来なくなってしまう」

高祖や武帝を思い浮かべると早いだろう。高祖が軍を維持する事が出来たのは、後方から蕭何が絶えず支援を続けたおかげ。武帝が匈奴を討った際の基礎も、文帝、景帝による治世で作られている。

外戚と宦官達による苛性。そこから連鎖する様に発生した黄巾の乱、そして今回の動乱。いい加減に中華全体で民政に力を入れてくなくてはならない時期に差し掛かっているのだ。劉備が度重なる出兵を続けるのであれば、いつか必ず綻びが生じる。

「糜芳や諸葛亮、鳳統がどれだけ優れていようとも、この問題からは逃れられない。いつかは兵を支えられなくなり自滅するわ。その時に劉備を見限ってしまうのか、最後まで付き従うのかは分からないけど、どちらにせよ私達の敵にはなりえないわ」

「なるほど、よく分かりました！」

ようやく納得したのか、春蘭はうんうんと頷いた。

それを見て、私は今度こそ立ち上がり天幕を出た。

身が竦む様な冷たい空気の中、私はあえて言葉にしなかった『私自身、糜芳の印象』を思い返す。

概ねあの二人と同じではあるが、一つ気になる部分がある。

頭に血が上っていた桂花は聞き逃したようだけど、今回の会合の中で糜芳は聞き捨てならない事を口にしていった。

『流石は乱世の奸雄。清濁を併せ呑み、天地人を揃えて覇道を歩む事を望みますか』

私がこの連合に集まった諸侯を見定めていると気づいた上での事だろう。

乱世の奸雄、というのは私があえて世間に広めた噂だから特に思う

所はない。

しかし、その後に行く言葉は無視する事は出来ない。

『天地人を揃える』。一見何でもない言葉のようだが、私の元にいる人材の中でこれに関する真名を帯びている姉妹がいる。

そしてその姉妹は、朝廷に弓を引いた過去を持っている。

(おそらく、今回の訪問に麿芳が来たのも、あの子達の事がばれているからよね)

徐州において物価の高騰が発生しているのも、州でその対策をして欲しいというのも嘘ではないだろう。

しかし今回麿芳自身が来た一番の理由は、張家の三姉妹を配下に収めた私に釘を刺す事だったのではないだろうか。

いつそ分かりやすく財物でも脅し取ろうとしてくれれば対処が楽なのだけど、麿芳はそうしなかった。単なる俗物では終わらないという事だ。

客観的な事実、そして今日対面した際に感じた圭角を宿さない為人から察するに、私も秋蘭の評価は正しいと思う。流石に大樹將軍ほどではないと思うが。

より正確な推測をするためには、感情を表に発露した時の麿芳の姿を目にしたい。それまでは、麿芳の評価を保留にしておくのが正しいだろう。

何とか麿芳をより詳しく観察する方法は無いだろうか、そんな事を考えながら、私は自分の天幕まで足を進めるのだった。

第五十話 Tiger — 虎穴と虎児 —

— 天明 —

停戦交渉の使者の務めを終えて連合軍の陣へ戻ってきた私は、愛馬の背から降りて手綱を引きながら陣中を歩き始めました。

私くらいの年齢の者が引く軍馬としては立派すぎるのが原因でしょう、違う他勢力の兵達から視線を向けられるのが原因でから注目されるのが苦手な私としてはさっさと徐州勢の陣幕に戻りたいところです。

(残雪、見ただけで名馬って分かる風格してるからなあ)

残雪は青州の戦いの褒賞としてもらった涼州馬です。子義さんの黒王ほどではありませんが、黒っぽい大きな馬体に白い毛を生やした芦毛の馬で、黒い部分と灰色の部分が入り混じった姿をしています。お兄ちゃんが付けた名前ですが、残雪というのはよく似合っていると思います。

そんな馬を私のような女兒が引いているのだから、なおの事目立つのでしょう。

中には隙あらば奪い取ってやろう、という不埒な考えが顔に透けている人もいますが、今は無視します。流石に後ろに屈強な兵を率いている人間相手に無茶はしないでしょう。

(けど、何で残雪で『仁』と『義』、『智』を備えた名馬になりそう』な名前なんだろう？ お兄ちゃんの言う事は時々難解だよね)

そんな故事有ったかな、と心中で首を傾げていると、どうしたのー、と言いたげな様子で残雪が顔を私の方へ寄せて来ました。何でもないよー、と声に出しながら、なだめるように鬣や顔を撫でてあげます。それだけで残雪は嬉しそうにもっと甘えてきました。

お兄ちゃんに言わせれば、私とこの子は相性が良いらしいです。その言葉どおり、普段は人だけではなく、他の馬相手でも気難しい様子を見せるのに、私や猫王虎の前だと大人しく、時に子馬の様な振る舞いを見せます。軍馬としてはまずくないかと諫めてくる人もいるのですが、仲が良いのは良い事だ、と私は考えているので、積極的に構って

あげる事にはしていません。馬と信頼関係を持つ事も将に求められる資質でしょうし。

そうしてしばらく歩き、ようやく徐州勢に割り当てられている陣地に辿り着きました。陣を守っていた衛兵の一人に残雪を預けて繋いでくるようお願いします。名残惜しそうな様子の残雪に、また後でね、と声をかけてから離れ、私は天幕の入り口へと近づいて行きました。私は入り口の前に立ち、国相様の天幕に入る前に呼びかけました。

「国相様。羊叔子、ただいま戻りました。無事に使者の任を果たした事をご報告致します」

「ああ、入ってくれ」

そう声がかかったので、遠慮をせずに入り口の幕を捲り、中に入りました。

天幕の中には国相様とお兄ちゃんが居ました。二人の間に地図を広がっているところを見ると、今後行うべき事について話していたでしょう。

「お疲れ様、天明^羊。首尾良く終わった？」

私の方へと向き直ったお兄ちゃんは、私へ問いを放ちました。私はこくりと頷き、言葉を返しました。

「うん。とりあえず十日間は停戦っていう事で纏めて来ました。足りるよね？」

交渉の成果を伝えると、お兄ちゃんはにやりと笑いました。

「上出来上出来。それじゃ、発案者として総大将に報告を……」

「いや、それは私が行ってこよう。子方^摩、お前は孫家と馬家の面々を集めて作戦を詰める。私よりもお前の方が適任だろう？ 時間はできたとはいえ、無駄に使えるほどはないはずだ」

腰を浮かしかけたお兄ちゃんを国相様が制止しました。お兄ちゃんは少し虚空へ視線をやって考え込んでいましたが、国相様へと向き直って拱手を組み、お願いします、と国相様へ頭を下げました。それを見て、国相様はおどけるように軽く肩を竦めました。

☆☆☆

国相様が天幕を出て行くのに合わせて、私達も天幕を出ました。この後、今回汜水関攻めを担当する三勢力を集めて軍議を行う必要があるので、歩きながら簡単に停戦交渉の場がどんなだったのかを説明します。もちろん、名前等の固有名詞は極力排除した上でですが。

私が話した交渉の様子を聞き、お兄ちゃんは眩くように声を出しました。

「顔色一つ変えずに対応してみせた、か」

「普通は戸惑うよね、こんな物を突然出されても」

そう応えて、私は自分の胸を軽く叩きました。そこには、お兄ちゃんから持つて行くように頼まれた白紙が入っています。汜水関側の交渉担当者として出てきた文和賈さんはそれを一瞥して、私が意図を説明する前に、白紙委任状か、と問いかけてくるだけでした。

「私宛ての白紙が、ちゃんと届いてるって理解したからこそなんだろうけどね」

「他の将の様子を見ても、文……あの人の態度だけが浮いていたし。ほとんどの人が怪訝そうな表情をしていたのに、無表情を貫いていたよ」

「内通を疑われかねないから、はっきりと顔色を変えるわけにはいかないし、周りと同じ表情を浮かべていたら白紙の送り手が自分ではないと私達に疑念を持たれるかもしれないからね。器用な真似をするね」

お兄ちゃんが全面的に交渉を委任している事を示す小道具として白紙を私に持たせたのは、文和さんがどんな反応をするのかを見たいからでした。本当に自分に白紙を送って来たのが文和さんと伯約姜維さんなのか、それを確かめたかったのでしょうか。そういった意味では、お兄ちゃんの満足する結果を得られたのでしよう。

「私自身が見たわけじゃないけど、伯約さんは一瞬目を見開いて、すぐに怪訝そうな表情を作っていたみたいだよ」

私は文和さんの表情だけに注目していたので、その様子を目にする事はできませんでした。その場に護衛としてついてきてもらった子源臧洪さんに後から聞いた話です。

「送り主は二人で確定。それ以外に白紙の件を知る者は周りに無し、か。二人に何か起きているのは確かだけど、これだけじゃ何とも言えないか。やっぱり、偽名を使って私が行った方が色々面白い反応をしてくれたかもしれないなあ」

「国相様に止められたから仕方ないでしょ。というか、偽名を使う必要性は特にないよね?」

「良くも悪くも、私の名前は世間に広まりだしちゃってるからね。」

本名のまま行くと、天明と違って停戦でまとめられなかったかもしれないじゃない

お兄ちゃんが良くも悪くも名前を知られているのに対して、私はまだまだ無名です。徐州内でも、糜家の兄弟の義理の妹、としか知られていないでしょう。確かに、お兄ちゃんが行くと不必要に警戒されていたかもしれません。もともと、文和さん達の顔色を観察するだけなので、そもそもお兄ちゃんが行く必要性が極めて薄いのですが。せいぜい文和さん達を驚かせるくらいでしょうか。この兄はそういう無駄な事に全力を尽くす事があるので、今回停戦を言い出したのも文和さん達をからかうためだと言われれば納得してしまいそうなのが恐ろしいです。

「けど、『士仁』っていうのはどこから来たの?」

「ん? ああ、単に私の真名からの連想だよ。『仁を持つ士』ってだけ。深い意味は無い」

停戦交渉の様子を話し終えて情報連携をする必要の無くなった私とお兄ちゃんは、軍議が行われる天幕に着くまでそんな雑談とも言えるお喋りを続けました。

☆☆☆☆

挨拶をしながら天幕の中に入ると、呉の軍議用に使える天幕に三勢力の代表が集まっていました。趙国相様、文台様孫堅、文約様韓遂は本初様袁紹の元に行っています。なので、今この場にいるのは、見回りなどの雑務がない若手が中心となっています。若手だけではありますが、先にある程度方策を決める必要があります。どうも国相様達は、今回の戦いではあまり口を出さずに、次世代の人材を育てようとしている気がし

ます。もちろん、問題が有るようだったら助言をしてくれるんでしようが。

私達が席に着くとすぐに始まった軍議では、侃侃諤諤と意見が飛び交っています。主に発言をしているのは孟起馬超さんと伯符孫策さんです。

「虎穴に入らずんば虎児を得ず。 一気呵成に汜水関を攻め立てるべきだ！」

「巢穴に立て籠っている虎を相手にどうやって攻めるのよ。まして騎馬を中心に編成している貴女達だとすり潰されるだけでしようが」「そこは気合で何とかする！」

意気盛んな孟起さんを相手に伯符さんが呆れたように応じました。

「それで何とかならないからこの膠着状態なんでしょう。ただ闇雲に突っ込んで何も得られない物はないわ」

「……公瑾孫策殿、雪蓮孫策が極めてまともな事を言ってるんだけど、昨日から今日にかけて何か悪い物でも食べた？」

「いや、我らと同じ物を食べているはずだが……。 いや、昨日の深酒が残っている可能性は捨てきれないか」

「どういう意味よ！」

「日頃の行いだな」

伯符さんに食ってかかろうとした孟起さんを制するように、お兄ちゃん孫策と公瑾孫策さんが伯符さんをからかい、場の笑いを誘いました。茶化す事で場の雰囲気が必要以上に悪くしないためでしょう。伯符さんの妹である仲謀孫権さんは真面目な軍議を茶化すような態度を取ったお兄ちゃんの方を見て眦を釣り上げていますが。私もその真面目な姿勢は見習った方が良くかもしれません。

「まあ冗談はさておき。 闇雲にぶつかりに行くつてのには、私も雪蓮と同様に反対です。 孟起殿としても、母君より預かった兵を可能な限り無事に返す必要があるでしょう。 無理はなさらない方がよろしいでしょう？」

気を取り直すように、お兄ちゃん孫策がそう言いました。その言葉に言葉が詰まらせた後、孟起さんはしぶしぶと頷きました。

確かに堅牢な要塞を相手に力攻めを行うと被害が大きくなるので、

勘弁願いたいところです。さりとて、相手が出てこない以上攻城戦を行うのはやむを得ないと思うのですが。

私がそう口にする、お兄ちゃんは領きました。

「そうだね。挑発にも乗らないし、今のままだと力攻めによる攻城を行うしかない」

「それじゃ、どうするのよ?」

伯符さんの問いに、お兄ちゃんは直接応ないで肩を竦め、一見関係なさそうな別の事を話し始めました。

「危地に身を置かずして大功を得る事はできない。孟起殿の言葉は間違いではないんだけど、この言葉を班超が口にしたのって、もう虎穴に入った後で、虎を殺して虎児を得る以外に虎口を逃れる方法が無いって時だよ。私達はまだそこまでの危地にいるわけではないし、他に方法があるなら無理矢理忍び込むのではなく、安全に虎児を得る方法を選びたいかな」

「ふん。言いたい事は分からないでもないが、実際様々な勢力が虎を巣穴からお誘き寄せようとして失敗しているではないか」

お兄ちゃんの言葉に仲謀さんが不機嫌そうに応じました。その言葉に怒るでもなく、お兄ちゃんは首を縦に振りました。

「そうですね。挑発を繰り返しても汜水関に籠もる相手はまるで反応しなかった。それどころか挑発をやり返されて、無駄に突撃をして大きい被害を受けたところもある。同じ事をいくらしても無駄でしょうね」

例えるなら、挑発は巣穴の前で盛んに銅鑼を打ち鳴らし、喧しきから虎が飛び出して来るのを待つ、といったところでしょうか。

私がそれ以外の方法として思いつくのは、好餌を巣穴の前に置いて外に出てくるように誘い出すとかでしょうか。こちらは、韓信の用兵に近いかもしれません。どちらにせよ、警戒心の強い虎はその程度の事では顔を出してこないでしょうが。

「西涼でやりあった時の華雄だったら間違いなく出てきそうな物なのだけだね」

「上手い事暴れ馬の手綱を取れるのが居るんだろうね。　　というか、

雪蓮がそれを言うか。巢穴の前に酒の詰まった瓶を置いておけばこのこと顔を出して来そうなくせに」

「その上、しばらく待つと大虎に化けて、酔い潰れるところまで目浮かぶようだ。まったく困った物だ」

「……何か、随分貴方達仲良くなつてない?」

「気のせいだ、気のせい」

再び二人がかりでからかわれた伯符さんは、公瑾さんとお兄ちゃんを睨み、場には再び笑いが溢れました。

お兄ちゃんはくつくつとしばらく笑っていましたが、表情を改めて再度言葉を紡ぎだしました。すっかり話の主導権を握っています。

「そもそもの話なんだけど、この虎の巢穴には虎兇はいるんですかね? 苦労して入り込んでも骨折り損になるんじゃない?」

仲謀さんは思ってもみない事を言われた、というように目を瞬かせました。

正面に座る孟起さんと子泰^{馬岱}さんも仲謀さんと同じように発言の意図を理解できていないのでしょう。怪訝そうな顔をしています。私はその様子を見て、心中で小さく溜め息を吐きます。

(そもそも、ここに馬氏の方々を呼んでる時点で、呼ぶ事を決めた人達は兵法書を曲解している気がしてならないんだよね)

目を周囲にやると、伯符さんの隣に座る公瑾さんが気づかれない程度に少し眉をひそめています。その様子から察するに、私と同じような事を考えているのでしょうか。

そんな風に考えている私へ、笑いを含んだ声でお兄ちゃんが話しかけてきました。

「天明、説明できる?」

「うん。お兄ちゃんが言ったように、おそらく汜水関には私達が欲しがっている虎の子は住んでいません」

この故事を班超が口にした時の状況を考えると、班超の目的は、善国(楼蘭)から北匈奴の影響力を排除し誼^{よしみ}を通じる事でした。結果的に、善国に滞在している時に偶然居合わせた北匈奴からの使者を斬る事で、服従というそれ以上の成果を得る事に成功します。つま

り、班超にとって目的を達成するために『虎穴』に入り込む必要があったわけです。

孟起さんの言ったように『虎兇』を一戦における成功、勝利、勲功と考えるならば、汜水関を落とす事で得られる『虎兇』は有ります。しかし、班超のように目的の達成を『虎兇』と置くならば、この連合軍の『虎兇』は帝を董卓軍から救い出す事です。後者の場合を考えると、お兄ちゃんの言ったように汜水関を落とすだけでは『虎兇』を得られない事になります。汜水関、その先にある虎牢関、二つの関を落とす事でようやく『虎穴』である洛陽に足を踏み入れる機会ができるのですから。

しかし、本当に二つの関を越えるしか洛陽へ到る道はないのでしょうか？

「ここに西涼の皆さんがいる必要は薄い、もつと言えば、ここに来るなら涼州に残って西方から長安や函谷関を窺う動きを本当はして欲しいんです。その方が東側から洛陽へ向かう道中は苦勞しなくなりますから」

戦いの基本の一つ、自軍の集中と敵軍の分散。孫子でも触れている話です。

通常、攻撃を行う側は攻撃地点の選択ができるため、守備を行う側より有利に戦うことが出来ます。本当に攻略したい目標地点を隠し、他の場所を狙っていると見せかける事で、守備側に兵を分散させなくてはならないからです。そうやって相手を小兵力に分散させた上で、こちらは兵力を集中させて攻撃して戦場の優位を作るべきだ、と孫子では説いています。

今回の場合で言えば、あえて涼州のある西側から洛陽に向けて兵を動かす事で、董卓軍の兵力を分散させる事が出来たはずですよ。

「更に付け加えれば、西涼軍の行軍距離もおかしいんです。どう考えても、一番苦勞してここに辿り着いているのは西涼軍ですよ」

「あー。確かに漢水を下ってここに来るの大変だったねー」

「まあ、確かに。けど、西涼は遠いんだからしょうがないだろ？

それを承知で呼びつけたんだろうし」

私の言葉子泰馬岱さんは深々と頷き、孟起さんも意見を口にしながらも肯定しました。それも当然でしょう。中華の西端である西涼から移動してくるには結構な距離を踏破してくる必要があるのですから。

ただ、孟起さんの言った言葉には間違いがあります。先ほども言ったように、西涼が遠いというなら近くの長安を陥れる事を狙う事もできたのですから。更に更に、単独で長安を落とすのが現実的ではなかったとしても、道中でもっと現実に沿った別の手段を採る事も出来たはずなのです。

「漢水を下ってくる際に南陽を通ってきたと思うんですけど、そこから北上して頂いても良かったんです。南陽は現在袁公路袁術様が押さええています。そこで合流する事は容易かったですよ」

しかし、私のこの意見はお兄ちゃんから異議が唱えられました。

「本初殿がここに居る以上、公路殿もここに来ないで別経路から洛陽を目指すのは無理じゃない？ あの二人、お互いに対抗意識が強すぎるから、近くについて抜け駆けしないように見張り合わなくちゃ自分達が安心できないだろうし。本当に南陽からの北上をやろうとしても本初殿が理由を付けて呼び出すだろうし、公路殿もこっちの動向を気にして集中できないでしょ」

「本当に、袁家の人間は難儀な性格してるわね……」

お兄ちゃんの推測に、しみじみと伯符さんは眩きました。手を取り合って、共通の目標を達成するために動けないというのは、確かに難儀な性格かもしれせん。

私の意見に頷き、今日に至るまでの袁家の二人を見てお兄ちゃんの意見にも納得した様子を見せた孟起さんは、お兄ちゃんへ問いを投げかけました。

「けどそれなら、あたし達だけで南陽から洛陽へ向かっても良かったんじゃないか？」

「ちよつと話したただけだけど、公路殿の性格からしてそれも難しいんじゃないかな。仮に洛陽近くまで迫っても、功績欲しさに要らんちよつかいをかけてくるだろうし、そもそも単独で自分の領地に組み込んだ場所を他勢力を闊歩させるとは考えづらいし」

そう考えると、孟起さん達をこちらに呼び寄せたのも、わざとという事も考えられます。仮に孟起さん達が先に洛陽に入った時に、咸陽を得た高祖のような振る舞いをする事を恐れているのかもしれない。それはおそらく私達が迂回して別の場所から洛陽を目指す案を出しても同様に却下されるでしょう。せめて汜水関を落とせば洛陽までの距離が縮まるため、時間がどうしてもかかる迂回案も承諾してくれるかもしれません。汜水関を落とす手立てが見えない以上、今はどんなに言葉を尽くしても本初さんが領くことは無いでしょう。

私は逸れていた話題を本筋、つまりどうやって汜水関を落とすのかという方向へ戻す事にします。

「話が逸れました。結局また同じ話の繰り返しになってしまいますが、洛陽に入城して帝をお救いするまで戦いが続く以上、戦力を温存する必要があります。そのため、必要以上に兵を損なう力攻めは極力行うべきでは無いと思います」

「しかし実際汜水関は我等の前に立っているのだぞ。迂回出来ぬのなら、力押しでも突破を図るしかないではないか」

仲謀さんが言ったように、結局のところ話はそこに行き着いてしまいます。どうやって汜水関を落とすのか、それも消耗を最大限減らした上で。

私は、何か思いついているんだろうなあ、とお兄ちゃんへ視線を送りました。それを受けて、お兄ちゃんは小さく肩を竦めて話を始めました。

「私は先人の知恵に習う以外に策を出せないよ」

「良いから、思いついているなら言ってみなさいよ。冥琳が思いつかなければ呉郡勢は八方塞がり、馬家の方も特に名案があるわけじゃないんだし」

「ほほう、良いんだな。聞いても後悔するなよ?」

そこで一度話を切って、物凄く良い笑顔で口を開き直して。

「それじゃ、汜水関を正攻法で陥落させましょう!」

そう宣いました。

この場に居るお兄ちゃん以外の全員が一瞬沈黙した後、言葉の意味

に気づいたのでしょう。つまり、正攻法は力攻めに似たり、と。
天幕の中で、私を含めた全員の制止と発言の意図を問う声が、霹靂
のように轟々と次々に発されたの言うまでもありません。

第五十一話 Lights in the night
ht — 汜水関攻防戦① —

曹操
— 華琳 —

『兵は詭道なり』。

この中華において、あまりにも広く知れ渡っている有名な言葉だ。幼子ですらこの言葉を知る者はいるだろう。しかしそんな陳腐な言葉であるが、実践する事はいたく難しい。相手を出し抜こうと策に拘りすぎると、かえって悪い結果を招く事が多い物だ。

ならば、現在目の前で行われているこれはどうであろうか。わざわざ夜中に篝火を煌々と灯し、昼間と変わらぬように作業をしているこの光景は。果たして知恵深い賢者の行いか、浅慮なる小策士の振る舞いか。

元々停戦期間は今日の日没までと定められていたので、既にその時間は過ぎていく。夜襲の可能性も考えられるし、どの道夜が明ければ再び董卓軍と干戈を交える事になる。不測の事態への警戒と合わせて、今後私達がどう動くべきかについて春蘭達を招いて軍議を行っていたのが幸いした。明日に備えて早く休んでいては、この徐州勢の動きを見逃していただろう。徐州勢はこの連合の中でも強く注視しなくてはならない勢力の一つ。この動きを翌朝知る事になっていたら、おそろしく酷く悔やんでいた事だろう。

荷賊
「桂花」

私は徐州勢に関する意見を求めるために、隣に立つ桂花の名を口にした。

「色々と思惑はあるのですが、薪と油を無駄に使ってまで急がなくてはいけない理由は乏しいと思います。わざわざこんな事をせずとも、あと数刻もすれば太陽が昇りますし、それから作業に取り掛かったとしても大した違いはありません」

私が名前を呼んだ意図を察し、桂花は即座に自身の見解を口にした。その言葉、そして話しぶりから考えるに、どうやら桂花は今こう

して篝火の明かりの下で動いている徐州の動きに否定的な感情を持ってしているようだ。

しかし、その言葉にはある程度理解を示せる。わざわざ夜を徹して戦の準備をする必要性は極めて薄い。それならば、今夜は休養にあてて明朝作業をするのも大した違いはない。

しかし、徐州勢はわざわざ夜に動く事を選んだ。あえて理に背いたその行動、それは私にとって非常に興味深い。

「しかし桂花。わざわざこうして動いているのだ。何かしら理由はあるのではないか？」

「それは有るのでしようね。 だけと思いつく限りの利点をすべて足し合わせたとしても、貴重な燃料を消費する損の方が大きいと思うわ」

「なんだ、単にお前の思慮が足りていないだけではないか」

夏侯淵

秋蘭の質問には落ち着いて答えた桂花だったが、春蘭《夏侯惇》のその言葉に眦を吊り上げた。

「ただ単にぼけつと突っ立っているだけのあんたには言われたくないわよ！ その空っぽの頭が飾りじゃないのなら、少しはまともな意見を出してみなさい！」

「当たり前ではないか！ 思いついているからこんな事を言うのだ！」

まるで子供が自慢をするかのように胸を張ってそういう春蘭を、桂花は胡乱げな眼差しで見つめた。そして、ため息を一つついて春蘭に言葉をかけた。

「あんまり聞きたくないけど聞いてあげるわ。 思いつきり馬鹿にしてあげるから考えを言ってみなさい」

「ふん、そんな減らず口を聞いていられるのも今のうちだ。 私の話を聞いて恐れ慄くがいい！」

そこで一度言葉を切り、春蘭は息を吸い直してこう口にした。

「良いか。 今から準備を始めれば、朝日が昇ったらすぐに戦いを始められるだろう！」

「……あんたのその発言の意図は、明日になったら戦いを即刻始めた

いからよね?」

「当たり前だ!　ようやく退屈だった停戦が終わり、明日から戦が再開するのだぞ。　徐州勢に限らず、待ちきれないと考えている輩は多いはずだ!　なら、朝になったらすぐに戦いを始めたいと思うのは当然だろう!」

いつもだつたら一蹴するであろう春蘭の意見について、桂花がわざわざ意図を確認してみせたのは、その言葉にある程度の理が有る事を理解しているからだろう。

もつとも、顔を天に向けてため息を吐いている事から、春蘭の意図が桂花の思惑と全然異なっていたのも窺えるのだが。

その態度に反応して、何かを言おうとする春蘭を手のひらを向ける事で制止しながら、桂花は顔を下げて春蘭に向き直った。

「意図を除けば、あんたにしては悪くない意見だったわ。　ただし、その意図が致命的にずれているけど」

珍しく頭から馬鹿にするのではなく、意見一部に理がある事を認めたと上でそう言つてのけた桂花に、春蘭は若干面食らっているようだった。そんな相手の様子を気にすることなく、桂花は言葉を続けた。

「朝日が昇ったらすぐに戦う、それは確かに利点の一つよ。　特に今は東側に陣取っているわけだから」

「ん?　方角が何か関係あるのか?」

春蘭のその言葉に桂花の顔が盛大に引き攣り、大声を出そうと息を吸い込んだところで秋蘭が口を挟んだ。

「姉者、太陽はどちらから昇る?」

「それは東からだろう。　だが、それがどうかしたのか?」

「ああ。　つまり相手より東に居れば、朝日を背負って戦う事ができるという事だな」

地の利を得るといふのは、何も自分の居る地形を利用する事だけではない。相手との位置取りによって、自分達にとって有利な状況を作る事も出来る。

「相手が太陽の眩さでこちらを直視出来ないようにすれば、それだけこちらは楽に戦う事ができるようになる。　だけど……」

「それでもまだ得られる物が足りない。朝日を利用するだけなら、明日である必要はない。明日準備を終えて明後日から攻撃を始めても良いのだから」

桂花の言葉を途中で引き取り、私はそう春蘭に説明をした。

春蘭が日の位置などの戦場の様子を意識せずに戦っていた事に心中で少し戦慄しつつ、私はさらに言葉を続けた。

「ついでに言えば、やろうと思えば今日の日没までに準備を終えておく事もできたはずよ。停戦って言っても、交戦をしなければ自陣内で何をしてようと問題はないのだから。だから、夜が明けてすぐに戦いたいというだけでは、今作業をしている理由にはならないわ」

そう。普通に考えれば桂花の言うとおり。長いとは言えない停戦期間ではあったが、それでも準備を終えておくには十分だったはずなのだ。

だから、今こうして彼らが動いているのはまったく別の理由。貴重な燃料を消費してでも翌朝攻撃を開始したい理由は……おそらく逆なのだろう。

これは、自分達を有利にする手段ではなく、相手を陥れるためへの妨害措置。自分達に直接の利が無かったとしても、対峙する側に害を与えられるならば、それは転じて自らの益となる。ならば、これにより董卓軍にどのような害を与える事が出来る？

私は少しの間考え、理由を一つ思いついた。人によってはほとんど意味がないかもしれない。しかし……。一定以上の能力を持つ敵を相手にしているならば、大きい意味を持つ。

「どうやら随分と汜水関の将を高く評価しているようね」

前方に聳え立つ要塞に視線を向け、脳裏に一人の徐州の将の姿を思い浮かべながら、私はそう呟いた。

—碧^{姜維}—

「おそらく『時間』よ」
「なるほど」

『何で日が暮れてから、相手はわざわざ作業を始めたのか』

そう問いかけた私へ、隣に立つ詠^{賈馥}殿は私にそう答えた。私もその答

えに納得できたので、あつさりと頷いた。

詠殿は目の前の光景から生じる胸中の苦い感情を押し殺そうとせず、眉間に皺が寄っている。それに加えて、先ほどまで行っていた華雄殿との言い争いも尾を引いているのだろう。

この汜水関の事実上の主将が不機嫌なのを察しての事だろう。城壁に立つ歩哨を務める兵達はこちらへ近寄ろうとせず、遠巻きに視線をちらちらと送ってくるのみだ。猛獣を相手にするようなその態度も、彼女は腹立たしさを感じるのだろうか、私とて用件が無ければ強いて近寄ろうとはしないのは明白なので、極力兵達の態度も詠殿の不機嫌も気にしないようにする。

「つまり、こちらが対応策を考える事が出来ないようにする謀^{はかりごと}だ」と詠殿は私の確認の言葉を聞いて、気を取り直すように小さく息を吐いた後、皺が寄っている眉間を指で揉み解しながら説明を始めた。

「そうね。ボク達が考えるための時間を削りに来ているんだと思う。昼間に作業をしたとしても、攻撃を始めるのは翌朝になるわけだから」

つまりは朝までの時間がどれだけ残されているかの違いだ。目の前の様子から見て取れるとおりに、明日の朝に敵方が私達の籠もる汜水関へ攻撃を開始するのだとすれば、今日の昼間に作業を始めた場合に比べて、夜に作業を始められた方がこちらは数刻ほど動きを知る事が遅くなる。たった数刻ほどではあるが、それだけの時間があれば対抗措置の一つくらいは思い付けていたかもしれない。時間はその時々によつて黄金よりもずっと貴重な場合がある。戦場という特殊な場所においては特にその傾向は強い。

「昼に準備を終えて、そのまま夜襲をする……というわけにも行きませんしね」

「ええ。無理ではないだろうけど、難しいと思うわ。ボクならまずやらない」

私も詠殿同様に、視界の効かない闇の中、柵と堀が幾重にも立ち塞がる陣地に攻め込む気になれない。良くて堀に落ち、運が悪ければ城壁からの矢の雨を受ける事になる。よほどしつかりと成功する算段

が立っていない限り、そういう博打は避けるだろう。まして停戦前に私達は彼らの夜襲を幾度も退けているのだから、実行しようとしても連合の盟主である袁本初袁本初殿に止められるだろう。やはり攻撃を始めるのは朝だと思われる。

太陽の照っている時間に戦いを行いたい、私達の時間を可能な限り削りたい、という二点を満たすためには、この方法は確かに効率が良い。

「つまり目の前のこれの対応を思いつくために、ボク達に与えられた時間は一晩のみ。まして、向こうが何を作ろうとしているの全貌が分かるのはさらに数刻を要するでしょうね。見た目には闇の中燦々と輝くほどに派手なのに、実態は最高に地味な嫌がらせよ」

詠殿は地味な嫌がらせと言ったが、これが効果的なのも事実だ。そうでなくては、こんなに詠殿も苛立つてはいないだろう。

何とか情報を得られないか、作業を妨害できないかと、この戦いの始まる前から敵陣に潜ませている間者に合図を送っているのだが、上手くいつてはいない。どうやら組み立ての作業場所へ入れる者を限定する事で、情報が漏れるのを避けているらしい。作業のためにその一角に出入りする人間を、顔を知る一部の徐州の兵に制限されれば、衛兵達の見覚えがない間者は近づく事もできないだろう。下手に近づきすぎると怪しまれるだけだろうし、八方塞がりに近い。何か徐州の一部の兵が怪しい動きをしているという報せが間者から入ってきたのが遅かったのも、それが影響しているのだろう。

「随分と周到な事ですね。もつとも、おかげでこちらは完全に出し抜かれたわけですが」

「まだ実際に干戈を交えたわけでもないし、挽回の機会は十分あるけどね」

そこで詠殿は言葉を切り、大きく息を吸って吐き出した。眉間の皺が消えているところを見ると、気持ちの入れ替えのためだったのだろう。

「……で、どう思う？」

「おそらく彼で間違いないかと。停戦の使者も彼の縁者でしたし、

夜間に迅速な土木作業を行うところなどがよく似ています」

涼州での戦いの時も、いつ建てたか分からないような陣地構築から策を組み立てていた。目の前の光景は、その時とあまりにも類似しているように見える。ならばやはり、目の前の光景には子方殿魔芳が絡んでいるのだろう。

「なら、やっぱり夜襲は厳禁ね」

呟くようにそういう詠殿に、重々しくならないように相槌を打つ。

「そうですね。西涼での戦いの時、私と華雄殿は陣地を放棄したように見せかけた策に嵌りました。これも誘いの手という可能性は捨てきれません」

あの時の私は華雄殿に敗北を与えるための子方殿の策に組み込まれていたわけだが、策の全貌を知る立場になかった。だから、子方殿の仕掛けた策に嵌り、冬場の冷たい河で泳ぐはめになった。仮にあの時、埋伏の毒として子方殿に協力する立場にいなければ、捕まった後に兵達の慰み物にされた上で殺されていただろう。実際には勝った側に数えられるのだろうが、私にとってあれは手痛い敗北として脳裏に刻まれている。

あの時の陣地放棄といい、今回の土木作業といい、まるで虫を誘うための灯火のようだ。明るさに惹かれて近づけば身を焼かれる事になるのではないだろうか。

「少し考えれば分かる事でしょうに……馬鹿華雄！ 分かりやすく誘いの一手を打っている相手の思惑に、わざわざ乗ってやる必要なんてまるでないでしょうが！」

話している間に先程の諍いを思い出したのだろう。段々と気が昂ってきて声が大きくなってきている。その華雄殿はこの場にいらない。万が一にも勝手に兵を動かす事がないように、霞殿張遼が見張ってくれているはずだ。

常に戦には攻勢をもって当たらんとする華雄殿の資質。状況次第では得難い資質に数えられるのだろうか。

「城壁の利を捨てて打って出てどうするのよ！ しかも大した考えに立脚しての事でもないのよ!？」

「機を待つ事も戦のうちですからね」

華雄殿は気が短く、待つ事が致命的に上手くない。今回のように守りを目的とした戦いにおいてはその資質は致命的になりかねない。

「おそらく、連日の挑発に痺れを切らしているのもあるのでしょう。私達が何とか無理矢理抑え込ませているだけで、鬱積した怒りは燻ってますし。いつ破裂するか分かりませんよ、今のままでは」

おそらく、その日は遠からず訪れるはずだ。華雄殿の気質を考えると、出撃を止めようとする私達と同士討ちを始めかねない。

「だから、遠からず一度打って出る必要はあります。幸い、相手がその口実を用意してくれているわけです」

彼らが今作っている物が衝車などの兵器だとすれば、確実に破壊するために兵を繰り出す必要がある。とはいえ、今のまま華雄殿を出撃させると、兵器を破壊した勢いのままに敵陣まで切り込んでいきそうだ。流星にそこまでされるのはまずい。

「……ふう。その辺りを考えるのは軍師であるボクの仕事ね。分かってる、何とかしてみるわよ。だから将である貴女は、もう休んで明日に備えて。明日は早くから動いてもらうわよ」

「御意に。詠殿は？」

「ボクは今夜はここであいつらの様子を見張るわ。何をやろうとしているのか、糸口を掴めるかもしれないし」

「そうですね。では先に休ませて頂きます。ご無理はなさらぬよう」

無言で手を振る事で私への返答とした詠殿は、そのまま前傾姿勢で城壁に体を預けて視線を敵陣へと向けた。私も一踵《きびす》を返し、宛がわれている私室へと向かう。

(さて、私達は一体どう動くべきなのだろうか)

部屋に着くまでの間、胸中で自らに問いかける。

出来る事ならばこのままここで膠着状態を保ち、情勢の変化を待ちたいのだがそれも難しいだろう。私個人としても受け身で事態を解決するのを待つというのは性には合わない。さりとて、こうして籠城をしている身では打てる手が少なすぎる。

私達は月様のためにも、城を枕に討死するわけにはいかない。しかし打開する術も思いつかない。

(せめて敵陣の内に味方を作る事が出来ればいいのだが……今の状況では厳しいか)

西涼の時もそうだったが、子方殿なら接触を図っても問答無用で切るような軽拳はしないだろう。しかし私達が勝ちすぎているためか、敵と通じている者がいるのではないかと袁本初殿は疑いの目を味方に向けているらしい。おそらく今接触すると子方殿に迷惑がかかる事になるだろう。今この縁が切られると、本当に協力者を作る事が出来なくなる。

(なかなか難しい状況ではあるが、何とかするしかないか)

薄暗い城内の廊下と自分の道行きを重ねそうになるのを堪え、何とか背筋を真っ直ぐに伸ばし私が使っている部屋へと足を進めた。

第五十二話 Does Your Mother
Know — 汜水関攻防戦② —

— 冥琳^{周瑜} —

まだ辺りが薄暗い時刻ではあるが、私は雪蓮^{孫策}と共に使っている天幕の入り口をめくった。途端に外の空気が中に流れ込み、思わず身を竦めてしまう。

私達が江東でいつもしている格好では、流石に中原の気候は寒いので上着を何枚か羽織っている。寒さで体力を奪われて病にかかるのはまずい。遠征中の現在、まともに医者にかかる事はできないのだから。

雪蓮も同様に上着を着込んでいる。動きづらくなる、と嫌がったが、断固とした態度で説得した結果受け入れさせる事が出来た。

そうやって寒さに備えた格好をしているのに、まだ寒いとは。数年前に冬の西涼を訪れた時の方がもっと寒かったはずなのだが、同じくらいに寒く感じる。呉より北の琅邪国に居留している子方^{糜芳}や子瑜^{諸葛瑾}がどう感じているのかが気になるところだ。

そんな事を考えている私から、じりじりと距離を取りながら寢床に引き返そうとする隣に立つ雪蓮の腕を溜め息混じりに捕まえ、私達は外に出た。と、同時にそれは視界に入ってきた。寒そうに手に息を吐きかけている雪蓮と共に、思わず足を止めて視線を上へ向けてしまう。

「本当に一晩で出来上がってるわね」

呆れた様な、感心したような、そんな声を雪蓮は上げた。

「自分の口から吐いた言葉を嘘にしない、というのは美德ではあるな」
もし間に合っていないようなら、我々全員が困る事になっていただろう。そういう意味では安堵の息をつくべきか。

「確かにあの総大将様なら、こちらの準備が出来てなくても突撃を命じて来そうよね」

「流石にそれはない……と言い切れない辺りが恐ろしいところだな」

皮肉気に唇を歪めながらそういう雪蓮に、私は苦笑で応じた。

「で、あれを使つてどうするのよ?」

そう問いかけてきた雪蓮の表情を見て、私は胸中でため息を吐く。まだ機嫌を直していないのか。

子方靡芳が一部の者以外に策の全容を秘匿しているのが、まだ不満らしい。

「というか、あんな目立つデカブツを作っておきながら、本当に正攻法になるの? 賊退治とは比べ物のならない大軍おおいくさなのに、出番が無いとか嫌よ?」

ああ、やはり自分が前に出るつもりか。心中で密かに納得する。

一応、雪蓮か蓮華孫権様のどちらかは、誠蓮孫堅様の名代として、本陣待機のはずだが……雪蓮が大人しくするはずがないか。

さりとて、蓮華様も初陣のため、本陣で待つよりも『前線で当主と共に戦った』という功を欲するだろう。なかなか荒れそうな予感がある。

「それは大丈夫だろう。徐州だけで戦えるなら、わざわざ我らに声をかけたりはしないさ」

それに関しては楽観的に考えても良いだろう。

『正攻法で戦う』と子方が明言したあの晩。子方はその場ですぐに策を語らず、それぞれの勢力の責任者が戻ってくるのを待ち、一部の者以外を伴わずに別の天幕に移って策を語り始めた。誠蓮様、趙国相趙昱、韓文役殿、それから私と叔子羊祜がその策を聞いている。本当に、伝えるの相手を最小限にした結果なのだろう。子方の右腕と言つてもいい、子瑜も聞いていない事からもそれが窺える。確かに軽率な人間だと周りの人間に策を吹聴しかねないし、その判断は正しい。正しいのだが、その選出から漏れた人間が疎外感を感じるのもしょうがないだろう。おかげでここ数日、この親友の機嫌は非常に悪い。

「しかし分かんないわね。ああいう投石機を使つて石を飛ばしても届かないから、他の連中はずっと挑発やら堀を埋めるのを繰り返してたわけでしょ? 確かに普通攻城に用いる物よりも大きいけど、結局届かないんじゃないの?」

「なんとかかしてみる、とは言っていたな。確実に届くかどうかはやってみなくては分からんとも言っていたが」

そこはかたなく不安を煽るような言い方ではあるが、あまり心配するような事はないだろうと思っている。有言実行くらいは守るだろう。

それにしても投石機か。攻城、それから野戦の際の援護をする兵器としては良く知られている物だろう。しかし、実際に石を狙った場所へ飛ばすためには高い技術力が必要となるため、用意出来る軍は限られる。今回参加している連合の中でも所持しているのはごく一部だろう。それに、通常は数を多く用意して一斉に打ち出す物なのだが、子方達は一台のみを作る事になっている。なかなか興味深い物だ。

「ま、私は剣を振るう事が出来るなら何でもいいわ。今日は悪い予感もしないしね」

「いつもの勘、か」

「ええ。何となく、楽しい事が起こりそうな感じがするわ」

先ほどまでの不機嫌そうな表情は消え、雪蓮は楽しそうな笑顔を浮かべた。相も変わらず気まぐれな事だ。もつとも、不機嫌そうにされているよりはずっと良いが。

「さて、それじゃ蓮華のところへ向かいましょう。大人しく留守番をしておくように言っておかないとね」

「二応、誠蓮様は二人でよく話し合って決めるように言っていたのだが……まあ、お前なら前が出る事を望むか」

「当然！ 私が前線に居たほうが適材適所つて物でしょ！」

それは間違いない。初陣の蓮華様と、曲がりなりにも兵を率いた事がある雪蓮、そして二人の過去の鍛錬の勝敗の数から考えても雪蓮が前線に出る方が適任だろう。

「冥琳は本当に残るの？ 折角の機会でしょうに」

「ああ。貴女と蓮華様、どちらが残るにせよ、私が補佐に入った方が本陣をまとめやすいだろうからな。それに機会というなら、陸遜穩に経験を積ませる良い好機と言う事もできる。私は次を待つき」

「そう？、ここまでの規模の会戦に参加できる好機が一生の内に何度

も訪れるとは思わないけど」

不思議そうにそう言う雪蓮へ、私は笑みを向けた。

「大志を持つ親友の隣に立っていれば、自ずとこういう戦いに身を置く事が出来る。ならば焦る必要はまるで感じない。そうだろうか？」

「……ふふん、そこまで言われたんじゃしようがないわね。せいぜい扱き使ってあげるわ!」

胸を張って上機嫌に歩き出した雪蓮に歩調を合わせ、今度こそ蓮華様の使っている天幕へ向かう。

その様子を見て、完全に機嫌を直した事を確信し、心中で安堵する。雪蓮は誠蓮様に似て、その時の感情で戦い方が大きく変わる。要らぬ不覚をしないためには、こういう上機嫌でいてもらう方がずっといい。

しかし、これからの蓮華様との話し合いで調子に乗りすぎないように、一言釘をさしておく事にする。

「分かつてはいると思うが、力づくというのは駄目だからな。当主の一族が率先して規律を乱すのは許されぬぞ」

「当たり前でしょ。大丈夫、我に策有り、よ」

自信満々にそう言う雪蓮に多少不安を感じないでもないが、流石に刃傷沙汰は自制するだろうと楽観的に考える。……自制するよな？

☆☆☆☆

「というわけで、蓮華。貴女が本陣に残って。私は前に行くから」

「お断りします」

蓮華様は、取りつく島もない、というのを体現したような硬い表情でそう返答した。

はい分かりました、と唯々諾々と従う可能性はほとんど無かったのは分かっていたので驚きはない。驚くべきは、バカ正直に自分が前線に出る事を認めさせようとするこの親友の方だろう。

策が有るとは何だったのか……。

「雪蓮様。蓮華様は初陣です。ここで功を立てて頂く事は、今後の孫家のためにもなるし、誠蓮様の意に添うと思うのですが」

「だから譲れって？ 思春^{甘寧}、それは関係ないのは分かってるでしょ。あの鬼婆は自分の戦をするのに足を引つ張られなければ良いんだから、私達がどこにいて、何を担当しようとも文句は言わないわ。意に添うも何も無いわよ」

誠蓮様はまだまだ働き盛りのご年齢。まだ娘へ家督を譲るつもりはないだろう。ならば、まだ娘達への功績を積ませるよりも目先の勝利にこだわるはずだ、というのが雪蓮の意見だ。

確かに、娘達に勲功を積ませたいと考えているならば、ご自身が本陣に身を置き、娘二人を前線に出すべきである。そうしていないのだから、誠蓮様の意向は雪蓮の推測どおりなのだろう。

「それでも私は孫家の嫡流として、初陣を飾る必要が……！」

「ないわよ、そんなの。孫家は孫武などと関係なく、母様が一代で築いた家よ。今はまだ寒門の一つに過ぎないのだから、守らなくてはいけない家格なんてあるわけない」

孫家当主、孫文台の奇才。それに支えられた孫家はまだまだ大きくなっていくのが簡単に予想できる。しかし、それに箔がつくようになるのは当分先の事だろう。そういった意味では雪蓮の言う事は正しい。

しかし蓮華様にとって、それは異なる認識なのだろう。雪蓮とは違い、蓮華様が物心つく頃には既に誠蓮様は官職を持ち、孫家は大きくなり始めていた。蓮華様にとって、生まれた頃から呉郡で影響力を持っていた孫家は名家だという意識が強いのだろう。

逆に雪蓮は、誠蓮様が苦勞しながら家を大きくしていった事を幼いながらも覚えていて。そのあたり、蓮華様の持つ認識とは大きな隔りがあるのだろう。

「極端に言えば、たとえ呉にいる事が出来なくなったとしても、母様がいるならば私達は必ず別の土地でも身を立てる事ができる。何故か分かる？」

「孫家が『戦に強い』から……」

「そう。そのためには孫文台は『名将』であり、『英雄』でなくてはならない。だから、多くの勢力が集まっているこういう戦では侮り

を受けぬために、万が一にでも躓く事が出来ないの。ここまで聞いて、あなたは私よりも戦場で活躍できる自信があるのかしら？」

「……」

雪蓮の言葉には答えずに、蓮華様は下を向いてしまった。それは雪蓮を怖がっている様子にも見えるが、実際には反論できる言葉を考えているのだろう。例え姉からの言葉であろうと、厳しい事を言われてそのまましておくほど孫家の血族の気性はおとなしくない。

「とは言っても、私に言われただけではあなたも納得できないでしょ。だから、孫家ではない第三者に決めてもらいましょう」

「お待ちください！ 孫家の大事を他人に決めさせるなど、そんな無責任な事！」

特に気負う物を感じさせないまま、軽く肩を竦めた後にそう言った雪蓮を、蓮華様は慌てて止めようとした。

ああ、なるほど。これがさつき言っていた『策』か。

「そうは言っても、どんなに私が言葉を尽くしたところであなたは納得しないでしょ？ 残念だけど時間が無限にあるわけではない以上、何らかの方法で決めなきゃ。それとも真剣勝負で決める？」

「……分かりました。決めるのは誰ですか？ 黄蓋程普 祭や粹程普 怜ならば急がねば」

流石に武の競い合いになると蓮華様にとって分が悪い。ならば、その人物が自分を選ぶ可能性に賭ける、といったところだろう。

それはそれで正しい判断なのだろうが、今までの会話から雪蓮が何をしようとしているのかが想像出来ている私には、自分から落とし穴に嵌まりに行くようにしか見えない。

雪蓮はふふん、と言いたげに口元に笑みを浮かべながら、声を発した。

「言ったでしょ。『孫家ではない第三者』って。その二人じゃどちらも条件を満たさないわ。冥琳、誰が相応しいと思う？」

やはり私に振ってきた。あえて話に加わらず、会話の流れを予想していた私は、溜め息を吐きそうになるのを堪えながら、準備していた言葉を発するために重たい口を開いた。

「で、仲謀殿は本陣でもなく、ここで待機する事になったと」「いや、もう本当に申し訳ない」

良いんだけどね、別に。雪蓮が私を振り回すのは、良くあることだし。今回は雪蓮以外にも犯人がいるし。私は手を合わせて頭を下げる公瑾殿へ、右手を上下にひらひらと振り、気にしないように伝える。

横目でちらりと目を向けると、体育座りで私達に背を向けている仲謀殿と、それを何とか慰めようとしている興霸殿の姿が見える。

(しかし、どうやって慰めようかね、これ)

この後、頑張って仲謀殿を励まさなくてはならない事を考えると、なかなか気が重い。

思わず朝焼けに染まる汜水関へ向けて、遠い目をしてしまった。